その先には。

ゆか空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その先には。

【Ｎコード】
Ｎ８０４０Ｒ

【作者名】
ゆか空

【あらすじ】
新たな敵、Ｄｉｓｐｅｒａｒｅ（ディスペラーレ）を倒し、ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）を目覚めさせるべく、ツナたちはｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）を一刻も早く探しだし、封印を解かなければならないと改めて意識する。…多くのものを得て、失った。過去はもう戻れない。やり直すことはできない。ただ、ただ人は前に進むしかないのだ。……第一章、閉幕。そして、新たな出会いが待つ、第ニ章へ。　無限の可能性を持つ大空と守護者、仲間たちの行く末を、とくとご覧あれ。

（この小説は未来編の後

のもので、継承式編からは関係ありません。）

標的０　序章（前書き）

はじめて書かせていただきました。

読みにくいかもしれませんが、どうぞ。

序章なのでキャラ名は不明。

いつかプロフィールを紹介しようと思います。

標的０　序章

ボンゴレリング。

それはボンゴレⅠ世とその守護者が、ファミリーの証として作成した７つの指輪であり、精製度はＡ以上。

とてつもない強大な力を秘めており、トゥリニセッテの１つとなっている。

その力を我が物にしようと、多くの抗争が起こり、多くの犠牲を出した。

そして、再び
ボンゴレリングを巡る争いが
はじまろうとしていた。

イタリアのある一角。

「おい、まだなのかよ。」

身長の高い男がイライラした口調で聞いた。

「もう少しだよ、待てないの？」

それを宥めるようにもう一人の男が苦笑いをして答える。

「まったく、いつもあなたは短気ですね。」

長髪の男が馬鹿にするようにふんっ、と鼻で笑った。

「なんだと！！？」

怒った男が長髪の男に殴りかかろうと拳を振り上げた。

それを見ていた唯一の女が呆れたように仲裁にはいる。

「やめてよ～、身内の喧嘩なんて。めんどくさいじゃんっ。」

長身ではあるがやや幼さの残る女だ。

「ボスはすぐ来るよ。」

「あと少しだからさ。」

「少しくらい」

「我慢しろよ。」

双子であろう二人の男が交互に喋りながら言う。

「…ちっ」

男は仕方なく椅子に腰を下ろす。

それと同時にドアが開き、全員の視線がある男に注目される。

「おっそいよ〜、ボス！」

女が頬を膨らませてボスと呼ぶ男に言った。

部屋にはいってきた男は全員を見渡すと、クールな顔に似合わない口調で謝った。

「ごっめんごめん。少し寝坊しちゃった」

「まったく、あなたという人は…」

長髪の男は口元を緩めながら言った。

ボスと呼ばれる男はえへへ、と笑ってごまかした。

「で、話って」

「なんですか？」

「とうとう」

「わかったのですか？」

「ボンゴレリングの」

「所持者情報。」

双子がボスと呼ばれる男を見て聞いた。

「さっすが双子。わかってるじゃないですか」

そう言うとボスと呼ばれる男は部屋にあるスクリーンに情報を載せた。

パチッ、とスクリーンが起動する男が聞こえ、映像が映し出される。

その映像を見た全員は目を丸くした。

「じゃーん、これがボンゴレリングを持つ子供たちだよ」

スクリーンを見ていた全員はしばしの無言のあと、馬鹿にするように長身の男が笑いはじめた。

「あっはははははは!!なんだこいつら、ガキじゃねえか!!」

「あたしより小さくない？これまじ？」

「ほんとだよ、僕が集めた情報なんだから」

ボスはある一人の少年について話をはじめた。

「これが、大空のボンゴレリングを持つ、ボンゴレの次期後継者の沢田綱吉くんだよ」

「え一、身長ちっさ！中学生ってほんとだったんだあ！かわいい顔してんじゃん」

「たしかにかわいい顔だね。お前よりかわいいかもねー」

「なにそれ喧嘩売ってんの!?」

隣に座っていた男に言われ、女は目を吊り上げながらものすごい剣幕で男に怒鳴る。

「「目おっきいね」」

女のことなんか気にしないように、双子がスクリーンを見つめてつぶやいた。

「よく調べたんですけど、どうも彼が、僕らの計画に最も必要となるらしいんだよね」

「と、言いますと?」

長髪の男が話を促す。

「えっと、彼の持つ力がないとボンゴレリングの本来の力を出せないって言うか、他にも理由があるみたいなんだけど、とにかく彼がいないとリングを集めても無駄ってことなんだよね~」

ボスは苦笑いをして肩をすくめた。

「では、わたしたちのターゲットはボンゴレリングだけではなく、彼も、ということですか？」

「あったり～、流石天才ですね」

「それほどでも」

長髪の男は深々とお辞儀をして答えた。

ボスは立ち上がって全員を見た。

「さあ、みんな、そろそろはじめようか」

そういうと全員が立ち、ボスを見据えた。

「ぼくら、アッジョルナーレファミリーの未来のための計画を、ね」

ボスは不敵に笑った。

標的０　序章（後書き）

よ、読めましたか？

読みにくかったですよね、すいません

これからも気まぐれ更新するので
お願いします！

標的１　日常の一変

天気は良く、穏やかな日だった。

三人はいつものようにたわいない話をしながら歩いていた。

「平和でいいよなあ、最近」

山本は笑いながら言った。

「あったりめえだ、野球馬鹿！もうあんなことがあってられっかよ！ね、十代目！」

「う、うん」

獄寺は山本とはまったく違う態度でツナに話しかけた。

これが三人の日常である。

「でも平和なのはいいことだよね。争いもない普通の生活を送ることができるってこんなに幸せだったんだね」

ツナは今までにあったことを思い出しながら言った。

骸と戦ったこと、ボンゴレリングを巡ってヴァリアーと戦ったこと、そして未来で白蘭と戦ったこと…。

さまざまな戦いを経て今自分が生きていることが不思議に感じられた。

そんな非日常的な生活がはじまったのも、目の前にスーツを来た赤ん坊が現れてから。

それからツナの日常は一変したのだ。

「こんな平和な生活ができるのは十代目が１０年後の世界でがんば

ったからですよ！」
「えっ、オレなにもしてないよ！」
「いいえ！間違いなく十代目が世界を救ったんですよ」
「そうだぜ、ツナ。」
獄寺と山本は肯定した。

「そんな…、オレだけの力じゃないよ。獄寺くんや山本、みんなが頑張ってくれたからだよ！」
ツナは二人に笑いかけた。

「じ、十代目…っ、ありがとうございます！」
「あははっ、サンキューな、ツナ」
獄寺は感激して泣き、山本はツナに笑いかけた。

（ほんとだよ。オレが頑張れたのはみんながいてくれたからだし…）
ツナは空を見上げながら思った。
（ずっと、こんな生活が続けばいいのにな…）
心からツナはそう願った。
しかし、ツナの願いははかなく散ることとなる。

「へえ～、ほんとに子供だ」
屋根の上で三人を見ていた男…ニコールは少し驚いて言った。

「ほんとにあんな子供がボンゴレリングを持ってるの～？？」長身の女…マリネは疑った。

「ほんとみたいだよ。ほれ見てみなよ、三人の指。ちゃんとボンゴレリングがあるだろ？」
「あ、ほんとだ～！でも全然強そうに見えないよ？かわいい子、がらの悪い子、天然そうな子にしか見えないし」
「能ある鷹は爪を隠す、って言うだろう？実力があるかどうか、試してみたほうがいい」
ニコールはにやりと笑った。
「そうだね～、試しちゃおっか！」
マリネも楽しそうに笑った。

――ゾクッ

（な、なんだ今の感じ…）
ツナは嫌な気を感じてあたりを見渡した。
妙に人の気配がない、あまりにも静かな並盛に疑問を持った。
なにかがおかしい、そう気付いた時には遅かった。

バシュッ

ツナの目の前をなにかがかすった。
恐る恐る見てみると、塀には銃で撃った跡が残っていた。

「う、うわあああああああ！！」
「だ、大丈夫ですか十代目！！」
「なんなんだ？一体」
叫ぶツナに駆け寄った二人も、町の異変に気付いた。

「…やけに静かッスね。」
「なにか違うな」
獄寺はダイナマイトをかまえ、山本は時雨金時をかまえた。

「ふう～ん、一般人よりは優れてる、ってことかな」
三人は屋根の上を見た。
するとそこには、長身の女と男がいた。

「誰だてめえら！」
獄寺は二人に聞いた。

「はじめまして、ボンゴレのみなさん。僕はニコール、彼女はマリネと言います。」
ニコールは丁寧に挨拶をした。

「な、何か用ですか？」
ツナは恐る恐るニコールに聞いた。
「はい、あなたに用があるんですよ、沢田綱吉くん」
ニコールは笑いかけた。

「え、オレ！？なんでオレなんかに…」
「あなたが僕らにとって鍵となる人物だから」
ニコールとマリネは屋根から飛び降りて三人の前に立った。

「僕たちと一緒に来てくれないか？」
ニコールはツナに手を差し延べた。
「お、お断りします！」
ツナはすぐに断った。
とても嫌な感じがして仕方がなかった。

一刻もはやくこの場から離れたかった。

「嫌ですか…。では」

ニコールは銃をかまえて言った。

「無理矢理にでも、一緒に来ていただかなくては」

標的2　光の元

「無理矢理にでも、来ていただかなくては」

ニコールは銃をかまえて三人に言った。

「うわわわわ！」

「十代目！さがっててください！」

獄寺はツナを庇うように前に出た。

「君はたしか…嵐の守護者」

「なんでてめえが知ってんだよ」「綱吉くんを僕らに引き渡してくれるなら教えてあげるよ」

ニコールは不敵に笑った。

「なら知る必要はねえ。十代目はオレらが守る！」

「そうだぜ、ニコールさん。ツナは渡さねえよ」

山本もツナを守ろうと前に出た。

「じゃあ力づくで渡してもらおうか」

そう言うとニコールは獄寺と山本に向けて発砲した。

「そうはさせないぜ」

山本は時雨金時で弾を二つに切ってしまった。

「ふうん、なかなかやるんだ」

「それほどでもなっ」

山本は笑いニコールに向かって走る。

「でも僕を簡単に倒せると思ってるの？」

ニコールは地面を蹴って宙に浮かび山本の真上から銃を撃った。

「思ってねーよ。そんな弱いわけないってわかってるぜ」

山本は余裕で刀をかまえた。

守式四の型　五風十雨

ニコールは驚いた。

自分の銃をこんなにも避けることができる人間がいるとは思ってなかったから。

「なめすぎてたってことかな」

ニコールはにやりと笑った。

「十代目、大丈夫です。オレがちゃんと守りますから」

獄寺はダイナマイトをかまえマリネに向かって行った。

「あたしとはりあう気？無謀すぎるよっ」

マリネは手裏剣を獄寺にはなった。

「へっ、手裏剣か。趣味悪いぜ」

「ダイナマイトのほうが趣味悪いよ～」

獄寺は手裏剣を避けてダイナマイトをマリネに投げた。

「当たってないよっ馬鹿！」

マリネはダイナマイトを避けて手裏剣をかまえた。

しかし目の前にはダイナマイトが近づいてきていた。

「えっ、まじ？」

慌ててマリネは後ろにとび爆発から逃れた。
しかし所々傷ができてしまった。

「なかなか手ごわいね」
マリネは手裏剣をかまえ獄寺に向け走った。

ツナはひとり佇んでいた。
目の前では仲間が戦っている。
今だに状況がわからなかった。
この人たちは誰なのか、
なぜ自分を欲したのか、
なにが目的なのか。

なにもわからずに一生懸命思考回路を働かせていた。

(ど、どうすればいいんだろう。この人たちは敵なんだよね?はやく二人を助けなきゃ…!)

ツナがその場を動こうとしたとき、頭上から聞き慣れた声が聞こえた。

「なにやってんだ?お前ら」
そこにはスーツを着た赤ん坊がいた。
「リ、リボーン!」
「なんで山本と獄寺が戦ってんだよ」
ツナは今までにあったことを話した。

「ツナを欲した？なんでだ」
「それはこっちが聞きたいよ！」
ツナはリボーンに言った。
「ど、どうすればいいんだろう」
「決まってんだろ。止めろ。お前はボンゴレのボスになるんだ。部下のピンチに黙って見てるつもりか？」
リボーンの言うとおりだ。
目の前で仲間が困っているのに自分はただ立っているだけなんておかしい。

（…よし！）
ツナが覚悟して死ぬ気丸を口に含もうとすると突然目の前が明るくなった。

「な、なんだ！？」
ツナは驚いて二人が戦っているところを見た。

山本も獄寺も驚いていた。
ニコールとマリネも同様に驚いていた。
「な、なんだこの光！」
「前が見えねーぞ！」
山本と獄寺は攻撃を止め光の方向を見ていた。

「ニコールっ何も見えないよ！」
「あわてるなマリネ！」
ニコールは慌てるマリネをなだめていた。

全員が光の方向を見た。

光がおさまると、そこには一人の少女がいた。

「手をひきなさい、アッジョルナーレファミリー」

全員が目の前の少女に視線を集めた。
驚き、言葉を発することができなかった。

リボーンだけが口元をにやりと動かした。

標的3　新たな仲間

ツナは頭が爆発しそうだった。
突然現れた敵。
目の前で繰り広げられる争い。
突然現れた一人の少女。

すべてが謎だ。
なにが起きているのか、状況を把握できなかった。

「…君、誰なの？」
ニコールが少女に話しかけた。
「わたし？わたしは結加（ゆいか）。綱吉くんたちを助けに来たの」
「え、オレたちを！？」
ツナは驚いていた少女…結加を見た。
結加はツナに微笑んだ。

「で、君は僕らのこと知ってんの？」
「多少は知ってるよ」
「なにあの子！なんかむかつくっ」
マリネはそう言うと手裏剣を結加に投げた。

「あぶな…っ」
ツナは叫んだが、結加はじっとしていた。
そして掌から光の玉を出し、手裏剣に向けて投げつけた。

パアンッ

光が弾けると手裏剣は粉々に砕かれ地面に落ちた。
「あ、あたしの手裏剣が！」
「ただ者じゃないみたいだね、あの子」
ニコールは少し驚いた表情で言った。

「マリネ、ここはいったん退こう。あんな子が出てくるなんて予想外だ」
「え～なんで!?まだ守護者倒してないし、綱吉くんも捕まえてないし！」
マリネはニコールに文句を言ったが、ニコールはマリネを説得した。
「次来たらやればいいだろう?今は作戦を立て直さなきゃ」
ニコールはツナたちに言った。
「ごめんね、この続きはまた今度」
そういうとニコールとマリネは屋根にとびうつり逃げた。

「待ちやがれこの…」
「まて獄寺。追っても無駄だ」
獄寺はリボーンに止められた。
リボーンに逆らえない獄寺はしぶしぶ従った。

「久しぶりだな、結加」
「お久しぶりですリボーンさん」
リボーンと結加は親しそうに話した。
「え、二人は知り合いなの!?」
「知り合いもなにも、結加はボンゴレの人間だぞ」
「えええ!?」
ツナは大声を上げた。それもそうだ。
突然目の前に現れ、自分たちを助けてくれた少女がリボーンと知り合いなのだから。

「まあここで話すのもあれだ。家に帰るぞ。」
「ああ、うん」
ツナたちはいったん帰宅することにした。

「ただいま」
「おかえり。あら、お友達も？いらっしゃい」
ツナの母、奈々は山本、獄寺、結加を快く家に招いた。

「で、お前なんで日本にいるんだ？」
リボーンは結加に聞いた。
「わたしは…みなさんを守るというか、援護するために来たんです」
「援護？」
「はい。最近、ボンゴレリングを狙ってあるファミリーが動き出したんです。なのでそれを知らせるため、みなさんを援護するために…」
ツナは不思議だった。自分と同じくらいの少女がボンゴレの組織に関わっているとは思ってもいなかった。

「さっき襲ってきた奴らはそのファミリーなのか？」
「はい、アッジョルナーレファミリーと言って、今まで無名同然だったんですが…。突然ボンゴレリングを狙いイタリアのボンゴレ本部に襲撃してきたんです」
「しゅ、襲撃！？」

自分たちが平和に生活している間にそんなことが起きているだなんて知らなかった。
リボーンを除く三人は驚いた。

「なんで奴らはリングを狙うんだ?」
「理由まではわかりませんが…同時に綱吉くんを狙っているんです。まったく理由がわからなくて、調べてるんですが…」
リボーンは考えた。なぜリングとツナを狙うのか。
おそらくは強大な力を手に入れたいということはわかったが、その理由まではわからなかった。

「大丈夫です十代目!心配しなくてもオレたちが十代目を守りますから!」
「そうだぜツナ!親友が困ってんのになにもしないなんておかしいらな!」
山本と獄寺はツナに言った。
「二人とも…ありがとう!」
ツナは嬉しかった。心から二人に感謝した。

「綱吉くんはいいお友達をもってるのね」
結加はツナに笑いかけた。
「でも二人は守護者なのよね。たしか嵐と雨…」
「二人は強えが、もっと強い守護者がいんだ」
リボーンはにやりと笑った。
「ま、まさか…雲雀のことじゃ…」
「そのまさかだ。雲雀もツナの守護者だろ」
控えめに聞いた獄寺にリボーンはさらりと返事をした。

雲雀は一応雲の守護者だが、ツナたちには好意的ではないと見える。

群れているだけで攻撃をしてくるのだ。
それが仲間だとは思いがたい。
しかし今までの戦いの中では味方として一緒に戦った。
雲雀の行動は常に謎だった。

「たしかボンゴレ十代目の守護者たちは個性的なんですよね」
「え、知ってるんですか？」
ツナは結加に聞いた。
「もちろん、ボンゴレの次期後継者と守護者たちですし、基本的なことはわかってます」
結加はおかしそうに笑った。
「あなたたちの日常のことも、九代目から聞いてます。」
「え、うわっ恥ずかしい！」
ツナは恥ずかしくなってしまった。
自分の日常が初対面の少女にばれているのだ。どこまでばれているかわからないからさらに恥ずかしい。

「大丈夫ですよ。わたしが聞いてるのはただあなたたちが楽しく生活している、くらいのことですから」
結加は笑いながら言った。

「で、ひとつ聞きたいんですけど」
「え、何？」
「その指輪、何ですか？」
結加が指差したのはツナの指にはめられているリング、アニマルリングだった。

「ああ、これは…」
「ガウッ」
アニマルリングが吠えた。

それに結加はとても驚いた。
「えっリングが吠えた！？」
「ナッツ…」
ツナは苦笑いした。

「どうせだから結加にナッツを見せてやれ」
リボーンがツナに言うと、ツナは頷きリングからナッツを出した。

天空ライオンＶｅｒ．Ｖ（レオネ・ディ・チェーリ　バージョンボンゴレ）

「わわわっすごい！動物！？ライオン！？」
結加は興奮してツナに聞いた。
「う、うん。山本や獄寺くんも持ってて…」
「すごい！どういう仕組みなの！？」
興奮している結加にツナたちは今までにあったことを話した。
話し終えるころには結加の興奮も冷めていた。

「す、すごいことがあったんだね…」
結加はまじまじとナッツを見ながら言った。
「ま、こいつらは見た目によらず強えから安心しろ結加」

（見た目によらずって失礼じゃ…）
ツナは心の中でリボーンにつっこんだ。
「クウ～…」
ナッツは結加に怯えてツナのうしろに隠れていた。
「ナッツ、結加さんは味方だから怖がらなくても大丈夫だって」
「仕方ないよ、初対面だもん」

結加は優しく笑った。
ナッツは恐る恐る結加に近づき、じっと結加の顔を見た。

結加は少し緊張した。
ナッツの目が、あまりにも、澄んでいたから。
（悪を知らない…すべてを見透かすような目…）
結加はしばらくナッツの目を見ていた。
するとナッツは安心したように結加の元に行き、頬を擦り寄せた。
「えへへ、よろしくね、ナッツ」

「おい、結加、お前日本にいるあいだ何処にいるつもりだ？」
リボーンが結加に聞いた。
「あ、えっと、山で過ごそうかと…」
「や、山ああ！？」
女の子が山で暮らすなんて考えられず、ツナは驚いた。
なんだか驚いてばかりだ。
「う、うん。大丈夫だよ！今までもこんなこと何回か経験してるし！」
結加は笑って答えた。

「泊まるとこがないならここにいろ、結加」
リボーンが結加を引き止めた。
「えっ、そんな、悪いですよ」
結加は慌てて断った。
「気を遣うな、結加。ここには居候が何人もいる。一人増えたってかまわねえよ」

（あたかもここが自分の家みたいに言って…）
当の住人のツナにかまわずここに住むことを進めるリボーンにツナ

は呆れた。

「大丈夫だ。ママンにはオレの友人だって言っておくから」
「で、ではお言葉に甘えて…」
結加は丁寧にお辞儀をした。

「もう夕飯の時間だし、そろそろ帰るな、ツナ」
「十代目、そろそろオレも失礼させていただきます」
山本と獄寺は立ってツナに言った。
「あ、うん！二人とも気をつけて！」
ツナは二人に挨拶した。

「じゃあオレはママンに言ってくるからな」
リボーンは階段を下りて行った。

部屋にはツナと結加とナッツだけになった。
ツナは結加をまじまじと見た。
（きれいな顔立ちだなあ…）
ツナは思った。素直にそう思った。

髪の毛はサラサラで毛先は綺麗にウェーブがかかっている。
目は大きく、つり目で睫毛が長い。
小顔で背は少し小さいが細く、しぐさのひとつひとつに目を奪われた。

「…ん？」
結加はツナに気付き見つめた。
「あっ、なっなんでもない！」
ツナは慌てて目をそらした。

「ガウッ」
ナッツは吠えるとリングに戻った。
部屋に沈黙が訪れた。

（どうしよう…気まずい！）
ツナは焦ったが、沈黙をやぶったのは結加だった。

「綱吉くんってさ、大空…大空のボンゴレリングをもってるんだよね」
「う、うん」
そう言うと今度は結加がツナを見つめた。
どうしていいかわからずツナも結加を見つめた。
「…やっぱり」
結加は笑って言った。
「さすが大空、綺麗な目をしてる」
ツナは意味がわからずに黙っていた。

「オイ二人とも、夕飯だ」
部屋にリボーンがはいってきた。
「わ、わかった！」
ツナは慌てて部屋をでていった。

「どうだ、結加。ボンゴレの次期後継者は」
リボーンは結加に聞いた。
「最初知ったときは何故後継者に選ばれたかわかりませんでしたが…」
結加は笑いながら言った。
「なんとなく、理由がわかった気がします」
そう言うと結加は階段を下りていった。

「選ばれた理由はそれだけじゃねえがな」
リボーンはにやりと笑って言った。

標的４　転入生として

朝、珍しくツナは誰にも起こされず自分で起きた。
なにかを感じたのだ。

（…なんだろう、少しだけど嫌な感じがした）
眠たい目を擦り空を見る。
なにかが起こる前触れかのように空は曇って暗かった。

着替えて下に行くと、昨日出会ったばかりの少女、結加が台所で朝食の準備を手伝っていた。

「あ、おはよう綱吉くん！」
ツナに気付いた結加は笑顔で挨拶した。
「うん、おはよ」
ツナもそれに笑顔で答えた。
「珍しいな、ツナが一人で起きるなんて」
椅子の上に座っていたリボーンがツナに話しかけた。
「うん、ちょっと…」
ツナはためらいがちに言った。
リボーンがそれに気が付かないはずがない。
少し様子のおかしいツナを見てリボーンは考えた。

（まさか、なにかを感じとったのか…）
ツナは超直感をもっているからそういうところは侮れない。

「さ、ごはんよ」
奈々が机の上にご飯を並べた。

「いただきます」
ツナたちは朝食を食べはじめた。

「お、そうだツナ。結加も今日から並盛中に通うことになったからな」
リボーンは唐突にツナに告げた。
「え!?なんでっ」
「結加はおめえらを援護するために来たんだ。離れてちゃ意味ねえだろ」
リボーンにごもっともなことを言われ言い返すことができなかった。

「よろしくね、綱吉くん」結加は呆れているツナに言った。
「あっ、うん!よろしく…」
ツナは笑顔で言われた結加に苦笑いで答えた。

(なんでこんな簡単に入学手続きができるんだ…)
ツナは疑問に思った。マフィアの中ではこれくらいどうってことないのだろうか。

「はやく食わねえと遅刻すっぞ」
リボーンに言われ時計を見るとそろそろ家を出る時間だった。
「あっ、ほんとだ!ごちそうさま!」
急いで準備をして二人は家を出た。
「いってきます」
「いってきます、みなさん」
「はいはい、気をつけてね」
ドアを閉めると外には獄寺がいた。

「おはようございます十代目!」
「おはよう獄寺くん」

ツナに挨拶をした獄寺は隣に結加がいるのに気付いた。
しかも並盛中の制服を着ている。
「…まさか、おめえ」
「並盛中に転入することになりました」
獄寺の問いに結加は笑顔で答えた。
「な…っ!!!」
「おはよーツナ、獄寺!」
うしろから山本がやって来た。
「あれっ、結加じゃん。並盛中の制服なんか着てどうしたんだ?」
「今日から並盛中に通うことになったの」
「ははっ、そっか!よろしくな」
山本はすんなりと受け止めた。
「なんで何も疑問に思わねえんだよ野球馬鹿!」
獄寺は山本に向かって叫んだ。

「あの、そろそろ行かないと遅れるから…」
「は、はいっ!行きましょう十代目!」
ツナが話しかけると獄寺はすぐに従った。

(なんて変な人たちなんだろう)
結加は三人を見て思った。

学校に着いて先生が結加を紹介した。
一応帰国子女となっているらしい。
席もツナの知り合いと言うことでツナの隣だった。
ツナたち三人以外の男子は結加を見て頬を赤らめていた。

「ねえねえ、結加ちゃんはどこの国に住んでたの?」
休み時間になると結加のまわりには女子がいっぱいだった。

「ははっ、人気だな結加のやつ」
「なんで女子って転入生が来るとそいつに群がるんだろな」
山本と獄寺は女子に囲まれて笑っている結加を見て思った。

それから一日中、結加は女子に囲まれてばかりだった。
休み時間もずっと話しかけてくる女子たちを対応していた。

「つ、疲れた…」
結加は机の上に突っ伏していた。
「お疲れさま、大変だったね」
ツナは苦笑いして言った。
「うん、でも…こういうの久しぶりだから楽しかったかな」
結加はツナに笑顔を見せた。

結加はボンゴレに携わっていたため、学校など行けなかった。
だからこうして同年代の女子たちと話すのがとても嬉しかった。

「十代目帰りましょう！」
「帰ろーぜ、ツナ、結加」
獄寺と山本がかばんを持って言った。
「そうだっはやく帰らなきゃ！」
ツナは急いでしたくをした。

「なんでそんなに急ぐの？」
慌てているツナを見て結加は聞いた。
「あっ、そっか！結加は知らないんだ」
ツナたちは急いで校庭に出た。

「学校に遅くまで残ってたら怒られるんだ」

「誰に？」
説明するツナに結加は聞いた。
「誰って、群れることを嫌う暴力的な風紀委員の…」
「それって僕のこと？」
その声を聞いた途端ツナと獄寺は固まった。

「ひっ、雲雀さん！！」
ツナは後ろを見て叫んだ。
「雲雀っ、てめ…」
「よっ、雲雀」
山本は相変わらずな調子で雲雀に話しかけた。

「君たち、なに群れてるの？咬み殺すよ」
雲雀はトンファーをかまえて言った。
「ごっごごめんなさい！！すぐ帰りますから！」
ツナは慌てて謝り帰ろうとした。
しかしそんなツナにかまわず結加は雲雀に話しかけた。

「へえ、あなたが雲の守護者の雲雀さんかあ」
「なに、君転入生だよね？」
「結加です。これからよろしく雲雀さん」
結加は雲雀に笑顔で言った。

雲雀はしばらくなにも言わなかったが、突然結加に聞いた。
「…君、強いの？」
「え？…ええ、一応」
少し結加は驚いて答えた。
「ふうん、なら僕と戦おうよ」
突然の誘いに結加はさらに驚いた。

（女の子相手に勝負申し込んだー！！！）
ツナは心の中でつっこんだ。
女の子に勝負を申し込む人をはじめて見たからだ。しかも相手は雲雀。

「……」結加はまだ驚いていた。
するとそこに堂々とあの男が割り込んできた。

「おおーっ、沢田たちではないかあ！極限にどうしたのだあ！？」
鼻にテープをはった三年生の笹川了平だ。
「おっ、お兄さん！」
「先輩！」
「げっ、芝生頭！！」
獄寺だけが嫌そうな顔をした。

「あっ、あなたは…晴の守護者の…」
「お前は誰だあ、沢田たちの知り合いかあ？」
了平はツナたちに聞いた。

「えっと…」
「ちょうどいいじゃねえか、ツナ。こいつらにも話しとけ」
いつのまにか足元にはリボーンがいた。
「リボーン！！！」
「よっ、雲雀、了平。こいつはな…」
リボーンは結加のこと、昨日あったことなどを二人に話した。

「極限にわからんが、そいつは仲間ということだな！」
話のほとんどを理解できなかった了平は考えた末、その答えにたどり着いた。
「ふうん、強いんだ。」

雲雀は話を理解してはいたがそこにしか興味がなかった。

「よ、よろしくおねがいします」
結加は二人にお辞儀をした。
「極限によろしくたのむぞ！」
「僕は群れるのが嫌いだから」
結加は少し固まったが再び笑顔を見せた。

（おもしろいな、この人たち）
個性的な守護者を見て思った。

それを見ていたツナは安心した。（よかった、お兄さんも雲雀さんもわかってくれたみたい…）
笑って三人のやりとりを見ていた時、嫌な視線をツナは感じた。嫌な気配を感じた。

どんどんこちらに近づいてくる。
自分たちに向かってくる。
その気配が来る方向をツナは見た。
リボーンもそれに気付きツナが見ている方向を見た。

全員がその異変に気付くと、視線の先には気配の根源がいた。

「へえ、気配に気付くなんてすごいすごい」
「ほんとにお前気配消してたのかよ」
見るとそこには同じ服装、同じ髪型、同じ声、同じ顔の人物が二人立っていた。

全員がその二人、双子を見つめた。

双子はにやりと笑った。

標的5　大空の目（前書き）

どうすれば文を書くのがうまくなるんですかね…

気まぐれ更新してたら
標的5まで来ちゃいました（笑）

標的5　大空の目

突然双子が現れた。
全員が双子を見た。
双子は笑っていた。
その顔を見てツナは少し怖くなった。

「誰だてめえら」
リボーンは二人に話しかけた。
「僕ら？僕らは」
「アッジョルナーレファミリーの」
「双子のアロッチと」
「スコッチだよ」
双子は交互に話した。
まったく見分けがつかない。

「あの二人は…」
結加が二人を見て口を開いた。
「知ってんのか、お前」
リボーンは結加に聞いた。
「はい、あの二人はアッジョルナーレの双子で、瓜二つの顔で相手を惑わします。そして武器は…」
「呑気に説明なんかしてると」
「君たち死んじゃうよ」
双子はツナたちに向かってなにかを投げつけた。

「わっ！」
慌てて避けると地面になにかが刺さっていた。
「あの二人の武器は…槍です」
結加は二人を見て言った。
「そうだよ、しかも」
「毒針付きの、ね」
そう言うと再び双子は槍を投げた。
槍と言っても２０ｃｍほどの大きな針だった。

「みなさん、下がって！」
結加は前に出ると掌からあの光の玉を出し双子に投げた。
双子は冷静に言うと二手にわかれて避けた。

「あれがニコールの言ってた」
「光の玉、かあ」
「その玉、何？」
双子は一緒に結加に聞いた。
「これはわたしの力…炎を固めた玉よ」
掌に光の玉を出して言った。
「まさか…死ぬ気の炎！？」
ツナが聞くと結加は頷いた。

「へえ、ボンゴレの…」
「でも、僕たちには」
「君は」
「勝てないよ」
そう言うと双子は一斉に槍を投げた。
結加は地面を蹴ってそれを避けたが、避けても避けても槍はおちてくる。

「あははっ遅い遅い」
「そんなのだと当たっちゃうよ」
さらに数の増えた槍を避けようと結加は逃げつづける。
しかし疲れてスピードダウンした結加は足元に刺さっていた槍に気付かず、つまずいてしまった。

「いた…っ」
受け身を失敗して手首を捻ってしまった。
「残念だね、これが」
「最後だよ」
双子は槍を結加に投げつけた。
広範囲に投げられた槍を避けるのには時間が足りない。
結加は死を覚悟して目を閉じた。

しかし、いつまでたっても変化がない。
どこも痛くならないし感覚もある。
恐る恐る目を開けると、目の前には自分を庇うように人が立っていた。

「…え……」
結加は驚いてその人を見た。
並盛中の制服を着た、茶色の髪の毛で身長の小さい男の子。
頭に炎をともしていた。
「大丈夫か、結加」
ツナに話しかけられ結加は黙って見ていた。
「…結加?」
「…あっ、はい!だ、大丈夫です!!」
結加は慌てて答えた。

（この人…ほんとに綱吉くん！？）
結加は驚いてツナを見た。
まったく違ったからだ。
普段のドジで頼りなさそうなツナではなかったからだ。

「え、あれ綱吉くん？」
「写真とまったく違うじゃん」
双子も驚いていた。
ボスからの情報にはこんなツナのことは書いてなかったから。

「お前ら、どこのどいつだかは知らないが、オレの仲間に手出しはさせない」
ツナが双子を見据えて言った。
その目に双子はたじろいだ。
あまりにも澄んでいたのだ。

「…あれが大空か、どうりで」
「ボスが欲するわけだ」
双子はにやりと笑った。
そんな双子に気にも止めず、ツナは手に炎をともして双子に向かって飛んだ。

「うわっ、飛べちゃうんだ」
「想像してたよりもやばいね」
双子は同じ方向に避け槍をかまえた。
「ねえ、綱吉くんって無傷で連れて行かなきゃいけないんじゃないの？」
「まあ多少の怪我は仕方ないでしょ。毒だって解毒剤があれば大丈夫だろ」
そう言うと双子はツナに向かって槍を投げた。

ツナは飛びながら槍を避け、炎を使い高速移動した。
ツナが突然消えたので双子は驚いた。

「…っ消えた!?」
「どこに行った!?」
双子はまわりを見渡した。
すると目の前にツナが現れた。
双子は驚いて動くことができなかった。
ツナは双子めがけて思いきり蹴りを入れた。
あまりにも速かった。
全員が呆気にとられていた。

「…すごい」
結加は自然と言葉を発していた。
「あれがボンゴレ次期後継者、ツナの力だ」
リボーンはツナを見て言った。

ツナの強力な蹴りを喰らった双子は地面に倒れた。
「いって…」
「久しぶりに怪我したよ…」
双子は自分の身体を見て苦笑いをした。

「もう終わりか」
ツナがそう言うと双子はしばしの沈黙の後、にやりと笑った。
「まいったまいった、綱吉くん」
「今日は僕らの負け」
双子は両手を上げて言った。
しかしツナは黙って二人を見ていた。
まったく二人が降参しているように見えなかったからだ。

「君、強いね」
「ますます君の必要性がわかったよ」
双子は立つとツナに言った。

「どうしても僕らと」
「手を組むつもりはない？」
「ない。」
ツナはすぐにきっぱりと言った。
その目に嘘はなかった。

「…ふうん、なら」
「無理矢理に奪うまでだ」
双子はにやりと笑って、一歩うしろに下がった。

「じゃあね綱吉くんと」
「守護者さんたち」
そう言うと双子はツナたちに向けて煙幕を投げると、すばやく逃げるように去って行った。

そこにはツナたちしかいなかった。

「十代目！」
「ツナ！」
「沢田！」
獄寺、山本、了平がツナのもとに駆け寄った。

「大丈夫ですか十代目！」
「ああ、心配ない」
心配する三人にツナは笑顔を見せた。
「…綱吉くん」

控えめに結加がツナに話しかけた。
「…さっきは助けてくれてありがとう」
結加はツナに笑顔で言った。
「…ああ」
ツナはそう言うと元のツナに戻った。

「…沢田綱吉」
「ひ、雲雀さん!?」
雲雀が突然雲雀に話しかけた。
「君、僕の獲物を横取りしたね」
雲雀はトンファーをかまえて言った。
「…咬み殺す」
「うわわわわっ、待ってください雲雀さん!」
ツナは慌てて雲雀を止めた。

(…さっきと、全然違う。)
結加はア然とツナを見ていた。

「まったくの別人だろ」
「リボーンさん」
リボーンは結加に言った。
「あいつはいつもはドジでダメダメだが、やるときはやるんだ」
リボーンはにやりと笑った。
「…そうですね」
結加は笑って答えた。

「いってー、まさかあそこまでとは…」
「思ってなかったよなあ」
双子は傷の手当をしながら言った。

はじめツナの写真を見たとき、弱そうな印象を持った。
これならすぐに連れ出せるだろうと思った。
しかし、違った。ツナはあまりにも強かった。
甘く見ていたのだ。中学生だから、背が小さいから。
双子は後悔していた。

「どうしたの～双子っ」
うしろを見るとマリネが笑いながら歩いてきた。
「げっ、マリネだ」
「最悪だー」
「なによ失礼ねっ！あたしじゃ嫌なの！？」
マリネは双子に言った。

「だって」
「マリネの」
「相手するの」
「疲れるんだもん」
双子は嘲笑った。
「むかつくーっちょっと！そこに座りなさい！」
マリネは叫び暴れた。

「まあまあ、やめなさい三人とも」

三人をなだめるように男が割ってはいった。

「だってこいつらがっ」
「このくそ女が」
「このあほ女が」
三人は子供のように文句を言っていた。

「まったく、大人気ないですね」
男はため息をもらしながら言った。

「では、わたしも綱吉くんを見てきましょうか」
男は、長髪をなびかせて言った。

標的６　警告（前書き）

なんだかんだ標的６まで書いちゃってますが…

実はわたし、
家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！は
アニメでしか見たことがありません（笑）

原作は見たことがありません、
アニメオンリーです。

なのでいろいろ目茶苦茶だと思いますが、
暖かい目で見守ってくださいませ。

アニメだけの記憶を頼りに書いてるので
絶対読みにくいですよね…

でも懲りずに書いていきます（笑）

ではどうぞ！

標的6　警告

広がる緑
吹き抜ける風

そんな場所でクローム髑髏…凪はある人物を探していた。

（今日は、いないのかな…）
凪がため息をつくとうしろから恩人である人物の声が聞こえた。

「僕はここにいますよ、凪」
「む、骸様！」
凪の表情が和らいだ。
今日は会えないかと思っていたので安心したのだ。

「すいません、少し気になることがありまして…」
骸は苦笑いをして謝った。
「なにか…あったんですか？」
凪は骸に心配そうに聞いた。

「…実は、最近ある組織が動きだしたらしいんですが…、その組織の目的は…」
骸は凪をみつめた。
「…凪」
「は、はい」
「…気をつけるんですよ。まあ、なにかあったときは沢田綱吉が助けてくれるでしょうけど」
「…？」

凪は黙って骸の話を聞いていた。

「凪、くれぐれもそのリングを手放してはいけませんよ」

「はっはい！」

凪は慌てて返事をした。そんな凪を骸は穏やかな笑顔で見つめた。

なにが起こっているのか、骸にもわからなかった。

「おじゃまします、十代目！」

「邪魔するぜ、ツナ」

「二人とも、いらっしゃい！」

今日は土曜日。学校が休みなので獄寺と山本はツナの家にやってきた。

「おう、獄寺と山本か、ゆっくりしてけ」

リボーンも二人に気付き挨拶をした。

ツナ、獄寺、山本、リボーンの四人は、昨日襲ってきた双子のこと、ニコールやマリネのことについて話しはじめた。

「敵が何故ボンゴレリングを欲するかはわかる。ボンゴレリングには強大な力が秘められているからな。しかし、わかんねえのは…」

「何故十代目までもを狙うか…ってことですよね」

獄寺の問いにリボーンは頷いた。

確かに、ボンゴレリングならともかく、ツナまでを欲する理由は誰にもわからなかった。

「しかも、なんか計画…とか、言ってた…よね。どんな計画なんだろう」
「そりゃあ、世界征服だろ」ツナの疑問に山本はすんなりと答えた。
「ばっか！世界征服だなんて餓鬼の考えることを誰が…」
そこで獄寺は止まった。

ああ…いた。世界征服を企んだ奴が。
かつてツナたちが戦った白髪の男、白蘭だ。
ツナや獄寺、山本までもが黙り込んでしまった。

「少なくとも、世界征服っていうのは間違っちゃいねえだろうな」
リボーンは三人にきっぱりと言った。
部屋の空気がさらに重たくなった。
居づらくなった。喋りにくくなった。

しかし、そんな空気を壊してくれたのは、まさかの子供だった。

「ギャハハハハ、ツナー遊べーっ」
部屋のドアを思いきり開けて乱入してきたのはボンゴレの雷の守護者、ランボだった。
「ランボ、ダメ！」
その後を追うようにイーピンが部屋に入ってきた。

「アホ牛っ、勝手に部屋に入ってくんな！オレらは大事な話してんだよ！」
「そんなのランボさんには関係ないもんねーっ」
ランボはさっきまでの雰囲気をまったく無視して部屋で暴れていた。

「仕方ないなあ…。ランボを連れて散歩に行ってくるよ」
ツナはしぶしぶ立ち上がりランボを抱きかかえた。
「じっ十代目が行くならオレも行きます！」
「じゃあオレも行くぜ」
獄寺と山本も立ち上がって言った。
「じゃあ気分転換に散歩するか」
リボーンは山本の肩に乗って言った。

階段をおりるとちょうど結加と鉢合わせた。
「あれ、みなさんお出かけですか？」「ああ、ちょっとな。ついでに結加に並盛を案内してやる。ついて来い」
リボーンに誘われ結加も一緒に出かけることにした。

「ここに、ボンゴレ次期後継者が…」
並盛を見渡しながら長髪の男はつぶやいた。
「おい、さっさとボンゴレ十代目を連れて帰ろうぜ。たるくてたるくて仕方ねえよ」
左目に縦に切り裂かれたような傷が残る男は眠たそうにあくびをしながら言った。

「そんなに余裕ですか。ニコールたちが言ってたでしょう。彼らは強いと」
「そんなのオレの前では関係ねえ。ただ邪魔なもんは消すまでだ」
男は余裕な笑みを浮かべて言った。

ツナたちは人通りの少ない道を歩いていた。
すると道の向こうからよく知る人物が歩いてきた。
「あ、クローム！」
「…ボス」
クロームは少しだけ微笑むと見知らぬ人物、結加の方へ視線をやった。
「ボス…この人…誰…？」
「あっ、そっか、クロームにはまだ紹介してなかったね！」

ツナはクロームに結加のこと、最近あった出来事を話した。
「よろしくね、クロームさん」
「よろしく…」
クロームは頬を赤らめて言った。

「そういやあクローム、おめえ何してたんだ？」
リボーンはクロームに問うた。
「…ボスに…用があって…」
「えっ、オレ！？」
クロームはこくんと頷いた。

「実は…骸様が言ってたの…」
「骸がオレになんて…？」
クロームはつづけた。
「最近…その、リングを狙って組織が動き出したって…」
ツナたちは先日襲ってきたアッジョルナーレファミリーのことだと思った。

「それで…その人たちはリングとボスを狙ってるんだけど…その理由は…」
クロームが何かに気付いたように会話をやめた。

「…クローム？」
ツナは突然黙ったクロームに話しかけた。

「…骸様がなにか言ってる……」
「なんて言ってんだ」
リボーンが先を促した。

「…逃げろって」
クロームの言葉と同時に、その場にいた全員がなにかを感じた。

次の瞬間、ツナたちの頭上から何かが落ちてきた。
「あぶな…っ」
結加は慌てて頭上めがけて光の玉を投げつけた。

光の玉によって砕かれたものを見てみると…
「へ、蛇…？」
大小様々な大量の蛇だった。
しかもただの蛇ではなく、猛毒を持つものばかりだった。

「へえ、確かに…勘は鋭いですね」
声のする方を見ると、長身の男二人が立っていた。
「こんにちは、ボンゴレのみなさん」
長髪の男は丁寧に挨拶をした。
「おい沢田綱吉！ボンゴレリング全部集めてこっちに来やがれ！」
「ぐぴゃっ！！怖いもんねっ！！」
ランボは半泣きで男たちを見た。

「あなたたちは…アッジョルナーレファミリーの…」
結加は警戒しながら前に出た。

「わたしはミノイ。彼はビンツです。以後お見知りおきを」
長髪の男…ミノイは丁寧に挨拶をしてお辞儀をした。
「そんなめんどくせえことしてねえで、さっさとおわらせようぜ」
左目に傷を持つ男…ビンツはあくびをした。

「なんだあのヤロー、いけ好かねえな」
獄寺はビンツを見て言った。
「なんか言ったか餓鬼」
ビンツは獄寺を睨んだ。

「落ち着いてビンツ。まずは交渉を」
ミノイはビンツをなだめて話しかけた。
「沢田綱吉くん」
「!!…はいっ」
ツナは驚いて返事をした。

「何故あなたはこちらに…アッジョルナーレファミリーに来ることを拒むのですか?」「…まずあなたたちの目的が、わからないです」
ツナはミノイを見て言った。それを見てミノイは少し笑った。

「理由ならこちらに来ていただければわかります。あなたがこちらに来てくださるのなら、わたしたちはあなたに最高のおもてなしをしますよ」
ミノイは微笑んでツナに言った。
「…すいません。オレはあなたたちの方には行きません」

ミノイは予想していた通りだと思い理由を聞いた。
「ほう、何故ですか?」
「あなたたちが何を企んでるかわからないけど…オレは、あなたたちといることを望まない」

ツナはミノイたちにきっぱりと言った。
「オレの居場所はここだ！オレはみんなを守るためにここにいるんだ！」

リボーンはにやりと笑った。
「十代目…」
「ツナ…」
獄寺と山本は感動してツナを見た。

「…どうしても、だめですか？」
「はい」
ミノイはため息をついた。
その瞬間、空気がかわった。

ミノイの柔らかな表情は消え、
獲物を見つめる猛獣のような目でツナたちを見た。

「わたしは、自分の思い通りにいかないことが大嫌いでしてね」
先程のミノイとは違う、危険な雰囲気にツナたちはたじろいだ。

「力づくでも、自分の思い通りにしたくなるんです」

ミノイは危険な雰囲気をまとって言った。

ビンツだけが余裕そうにあくびをしていた。

標的7　二重人格と幻覚（前書き）

後半…結加、山本、ランボが放置されてます（笑）

ごめんね、三人共…

そろそろ大きい出来事を
起こさせないとつまらないですね。

標的7　二重人格と幻覚

世の中には二重人格というものが存在する。
一人の人間に二つの同一性または人格状態が入れ替って現われる現象だ。

二重人格は出来れば関わりたくないものだ。
対応が大変だし、頭を混乱し兼ねない。

しかし、ツナたちは関わってしまった。
関わざるを得なかった。
ボンゴレリングを持っているかぎり、こういうハプニングはつづくのだ。

先程の紳士的な雰囲気とは打って変わって、いかにも危険性を纏う人物へと変化したミノイ。
ツナたちは黙って見ていた。
そのかわりようを。

「自分に逆らうものは、すべて従わせなければ」
不気味な笑みを浮かべたミノイにビンツ以外の全員が息をのむ。

危険だ。
はやくなんとかしなければ。
しかし、怖いのだ。
目の前の男が。

呆気にとられているツナたちにミノイは容赦なく攻撃をした。
「黙っていてはなにもはじまりませんよ！！」
言葉は丁寧なのに顔が、行動が、あきらかなギャップをつくっていた。

ミノイは再び大量の毒蛇を出現させ、ツナたちを襲った。
あまりの速さにツナは目を閉じた。
しかし。

「させない」
クロームは三叉槍を持ち、意識を集中させた。
次の瞬間、地面から激しい火柱がのぼった。
毒蛇は火柱によって消えた。

「！？…あなたは幻覚を使えるのですか」
少し驚いたミノイはクロームの幻覚を見てにやりと笑った。
クロームはその顔を見て怯んだが、再び意識を集中させ、さらに幻覚を作り出した。

後ろのツナたちを守るように、さらに火柱は増え、威力を増した。
あまりの力にミノイはしばし驚いた表情でクロームを見た。

（…甘く見ていたら、負ける）
そう感じとったミノイは先程の毒蛇の数倍もの大きさの毒蛇をクロームに向けて放った。

ミノイを囲む火柱、ツナたちを守る火柱に集中していたクロームは、自分の身を守ることを忘れていた。
気付いたときには、身体に巨大な毒蛇が絡み付いていた。

「……っ！！！」
首をも絞められクロームは苦しそうにもがいた。
しかし声が出ない。

「クローム！！」
ツナたちがクロームを助けようとすると、目の前に二人の戦いを傍観していたビンツが現れた。

「行かせねえよ。こっちはこっちで楽しく遊ぶんだからな」
ビンツはそう言うと巨大なハンマーで攻撃してきた。
その威力は強く、ハンマーで打ち付けられた地面には大きなクレーターができた。

「ひいっ！！？」
あまりの力にツナは悲鳴を上げ一歩下がったが、突然後ろから大きな声で叫ばれた。

「極限オレにまかせろ！！」
常に死ぬ気モードの了平だった。
「お、お兄さん！？なんでここに！？」
「ロードワークの途中で大きな音が聞こえてな、来てみれば沢田たちが襲われているから助けに来た！！」
「誰だてめえは…と、よく見れば晴の守護者じゃねえか」
ビンツはめんどくさそうに顔をしかめた。

「お前の相手はオレだ！極限に勝負だ！！」
「はっ！オレと勝負？馬鹿なこと言ってんじゃねえよ！！」
ビンツはハンマーを振り上げて了平に襲いかかった。

「極限太陽（マキシマムキャノン）！！」
ハンマーめがけて了平は極限太陽（マキシマムキャノン）を放った。
それをもろに喰らったハンマーにはひびがはえた。

「げっ！なにしてくれんだてめえ！！」
了平のパンチのあまりの威力に驚き、自分の武器を壊されたことに怒った。
了平は弱いと甘く見ていた。だから力をあまりいれなかった。
そしてハンマーは壊された。
ビンツは驚きを隠せなかった。

「さあさあ、早くあなたの幻覚とやらでこれをといてみなさい」
ミノイの毒蛇はさらにクロームを縛り付ける力を強めた。
「クローム…っ！」
ツナはクロームのもとに駆け寄ろうとした。

しかし、なにかを感じて足を止めた。
その場の空気が変わった。
ミノイの危険な雰囲気をもろともせず、それは近づいてくる。
…来る。あいつが。

「あまりクロームをいじめないでくれますか」
クロームの姿が変わっていく。
あの男の姿へ。

「…！！？」
ミノイはその男の気配を感じたじろいだ。
その瞬間、クロームを…その男を縛り付けていた毒蛇が悲鳴を上げて消えていった。

「…っ、わたしの毒蛇が！」
ミノイは驚いて男を見た。
男は…六道骸は、真っ直ぐミノイを見てあやしい笑みを浮かべた。

「む、骸！！」
「お久しぶりです、沢田綱吉。」
驚いて名前を呼ぶツナに骸は挨拶をした。
「だからあれほど逃げろと言ったのに…君という人は」
骸は呆れた顔をして言った。

「あなた…先程の女の子はどうしたんですか？」
ミノイは冷や汗を浮かべながら聞いた。
「ああ、あなたがあまりにも彼女をいじめるので、隠したんです」
骸はミノイに微笑みながら言った。
しかし、目は笑っていなかった。

「彼女を苦しめた君には罰が必要ですね」
そう言うと骸はクロームのものよりも強力な火柱を出した。
その火柱は熱く、苦しく、辛かった。

（…彼の憎しみが…、火柱となっているのか…！）
火柱に耐えながらもそう察したミノイは骸を見た。
その目はあまりにも冷酷だった。
ミノイは恐怖を覚えた。

「そろそろおわりにしましょう。僕も疲れました」
そう言うと骸は右目の数字を六から三に変えた。
その瞬間、すさまじい威力の火柱がミノイの身体を包み込んだ。

「っく、…あああああ！」
ミノイの身体中には傷や火傷の跡が多く残された。
ふらふらになりながらもミノイはなんとか立ち、骸を見た。

（…なんという男だ）
ミノイは身体中の傷をおさえながら思った。
先程までの危険な雰囲気はどこかへ消えた。
骸の圧倒的な力に押されたのだ。

「ミノイ！てめえ大丈夫かよ」
ビンツが駆け寄りミノイを支えた。
「…ビンツ。帰りましょう。わたしもあなたも、今は戦える状況ではない」
ミノイはビンツにそう言うとツナたちの方を見た。

「…綱吉くん」
名前を呼ばれツナは跳ね上がった。
「…また会いましょう。それまでには正しいご決断を。わたしたちはあなたを歓迎しますよ、いつでも」
そう言うと二人は屋根をつたって逃げていった。

それを見ていたツナに骸は話しかけた。
「…沢田綱吉」
「っ！？」
ツナは驚いて骸を見た。

「最近、あなたとボンゴレリングを狙ってある組織が動き出しているのはもう気付いてますよね？」
「あ、うん…」
「くれぐれも気をつけるように。奴らに好き勝手にはさせないように」
ツナは骸の言葉に素直に頷いた。
なにが起きているか今だにわからないが、奴らにボンゴレリングの力を渡してはいけない、自分は奴らと手をとってはいけない、ということはわかっていた。

「僕は奴らの目的とやらを調べてみます。…クロームを、頼みますよ」
「わ、わかってる！……骸、助けてくれてありがとう！」
ツナは骸に感謝した。そんなツナを見て骸は少しだけ黙っていたが、次の瞬間には笑顔を見せた。

「クフフ、君はまだ甘いようですね。…そんな君を少しでも信じている僕も甘いですが」
そう言うと骸はクロームへと戻った。
最後に優しい笑顔を見せて。

「…ボス」
「クローム！大丈夫だった！？」
クロームが頷くとツナは安心してため息をもらした。

「…骸様が、助けてくれたから」

クロームは嬉しそうに笑った。
クロームの骸への感謝の気持ちがツナにもわかった。

「しっかし、わかんないっすね、奴ら。こんな続けて十代目を襲うなんて」
「まあ、力試しだろ。ツナとお前ら守護者の実力を見に来たってとこか？」
リボーンはにやりと笑って言った。
「次は容赦ねえかも知んねえぞ」「そんなこと言うなよリボーン！」
ツナはそんなことあってたまるかと心の中で叫んだ。

「全員無事だったんだからよかったではないか！」
了平は笑顔でツナに言った。
「そ、そうですね。お兄さん、ありがとうございました。クロームもありがとう」
ツナは了平とクロームに感謝した。

（…骸、ありがとう）
骸にもう一度、感謝の言葉を送った。

「えっ、ミノイ！？どうしたのその傷！」

「うっわ、派手に」
「やられちゃったね」
マリネと双子のアロッチ、スコッチはミノイの傷を見て言った。

ビンツに支えられてミノイはソファに座った。
「もしかして、綱吉くん？」
「いいえ。残念ながら、綱吉くんの力は見れませんでした」
ミノイは傷をさすりながら言った。

（あの…男…）
ミノイは拳を握りしめた。
許さない。次に会ったときは…
「…わたしが、あなたを苦しめてさしあげましょう」
ミノイは独り言のようにつぶやいた。

「見てくれよ、これ。オレのハンマーも壊されちまった」
「全然だめじゃん！」
ビンツの壊されたハンマーを見てマリネは呆れていた。

「こんなんでボンゴレリングと綱吉くんを手に入れられるのかな」
ニコールは半ば諦めたように言った。

「どうだった？みんな～」
「…ボス！」
全員がボスと呼ばれる男…ウライラを見た。

ミノイや双子たちの傷を見てウライラは言った。

「…やっぱり、今のままじゃダメかあ」
「すみませんでしたボス。次こそは…」
ミノイは申し訳なさそうにウライラに謝罪した。

「うん、大丈夫だよ！まだチャンスは沢山あるし～」
ウライラは笑ってミノイに言った。

しかし、その刹那、ウライラの笑顔が変わった。

「…ねえ、みんな。」

全員がウライラを見た。
全員がウライラのその笑顔に凍りついた。

「もっと、強くなりたくない？」

とてつもない欲望を持った、恐ろしい笑顔だった。

標的8　夢の中の恐怖（前書き）

ツナとある男しか出てきません。

ちょろっと、リボーンが出てきます。

ほんとにちょろっと。

標的8　夢の中の恐怖

なぜ、幸せとは、平和とは、
長く続かないのだろう。

ツナはベッドに寝転がり、天井を見つめながら思った。

思い返せば、未来から帰ってきた直後、
ツナはやっと平和が訪れると喜んだ。
もう争いはしなくてすむと心から安心していた。

それから数週間は平和な日々が続いた。
相変わらず勉強も運動も出来ないダメツナだったが、一緒に笑いあえる友達が側にいたから、信じる仲間がいたから平気だった。

しかし数日前、突然襲われた。
やたらと身長の高い怪しい奴らに。
活発女や双子、更には二重人格など、おかしな人物ばかりだった。

しかし、自分の危機を救ってくれたのは同年代の女の子。
背は小さいが頼りになり、パニックに陥っていたツナにはヒーローに見えた。

そして敵が襲ってくるたび、助けてくれたのは仲間だった。
今まで共に戦ってきた心強い仲間。
彼らがいるから、ツナは強くなる。
守りたいものがあるから、ツナは強くなる。

しかしいくら強くなっても、ツナは勝てなかった。

風邪には。

（…身体が重い）

一昨日、目を覚ますと身体がだるく頭痛もひどかったので熱をはかった。

すると３９度も熱があった。

リボーン曰く、風邪がストレスによって悪化したらしい。

ボンゴレ次期後継者なのにみっともないと言われてしまった。

好きで風邪をひいたわけじゃない。

好きでストレスを溜めていたわけじゃない。

最近のおかしな出来事のせいだとツナは思った。

しかし喉をやられてしまって声が出ないのでなにも言えなかった。

（このまま死ぬのかなあ）

ツナは高熱で思考がはたらかない中、そう考えた。

今まで何度も死にかけているのに風邪ごときで死を考えるとは、相当風邪がひどいようだ。

咳は止まらない。

身体の節々は痛い。

だるい。

頭は痛い。

暑いのか寒いのかわからない。

視界はかすんでよく見えない。

最悪だった。

一向によくならない風邪をツナは怨んだ。

（学校休めてラッキーとか思ってたけど、みんなに会えないのは寂しいなあ）

ツナはそう思いながら目を閉じた。

しばらくすると風の音が聞こえた。

ツナの栗色の髪の毛が風に揺れる。

（…心地いい）

身体は軽く、あたたかい。

まるでなにかに包まれているかのようだ。

ツナはしばらくそれに身体を預けていた。

ゆっくりと目を開けると、そこは空だった。

真っ青な大空。

上では太陽が輝き、周りにはゆったりと流れる雲。

下では嵐が起こり、それに連動するように雨が降り、雷が鳴っている。

嵐の去ったところには霧があった。

「…ここはどこだろう」

確か自分は部屋のベッドで寝ていた。

空に来た、だなんて記憶にない。

「…オレ、とうとう死んじゃったのかな？」

ツナは苦笑いしながらつぶやいた。

「あはは、死んでなんかいないよ」
いきなり声をかけられた。空の上で。
驚いて声が聞こえたほうを見ると、一人の男が笑いながらこちらを見ていた。

茶色の服に真っ黒な髪の毛。
彼はなかなかの長身だった。
１６０ｃｍにも達していないツナと見比べるとかなりの差だった。

見覚えのない人に声をかけられてツナは戸惑った。
そんなツナを見て男はまた笑い言った。
「ここは夢の中だよ。現実ではないんだ」

そうか、自分の夢なのかとツナは納得した。
そんなツナの指にはめられているリングに気付き男は聞いた。
「そのリング、綺麗だね。どこで売ってたの？」
ツナは男にボンゴレリングのことを指摘されて困惑した。
ボンゴレリングはただのリングではないのだ。

「えっと、貰い物っていうか、譲り受けた物っていうか…」
ツナは一生懸命遠回しな言葉を選び話した。

「へえ、近くで見ていい？」
ツナが頷くと男はツナに近づきリングを眺めた。

「ほんとに綺麗だ。うらやましい」
男はボンゴレリングに触れようと手を伸ばした。

―バチンッッ!!

男は驚いて手を引いた。
ツナはなにが起きたのかわからなかった。

リングからなにかが発せられた。
オレンジ色の炎が男の手をはじいた。
つまり、拒んだのだ。
男を。

男はしばらく黙っていたが、口元を緩ませて手をさすりながら言った。

「あはは、痛かった!静電気かあ」
ツナは疑問に思った。
今のはほんとに静電気なのか、と。
なぜならリングがかすかに震えているからだ。
威嚇するように、ツナを守るように。

ツナは嫌な気を感じた。
この男の笑顔にはなにかがひっかかる。
この男にはなにかがある。
ツナの超直感がはたらいた。
―この男に近づいてはならないと。

一刻も早くこの男から離れなければならない。

「…あ、あのっ、オレはそろそろこれで」

ツナはそう言って立ち去ろうとした。
しかし、男がツナの手首を掴んだ。
ツナは驚いて男を見た。
先程と同じ笑顔。
しかし、嫌な気は消えなかった。
むしろ増えた。危険を感じた。
早く離れなければ。

「あのっ、離してください！」
ツナは男の手を振り切ろうとしたが、さらに強く手首を握られた。

「なんで逃げようとするの？」
男は笑いながらツナに問うた。
しかしツナは男から離れようと必死に手を振りほどこうとしていた。

「ねえ、なんで逃げようとするの？綱吉くん」
名前を呼ばれツナの動きがとまった。
いや、動けなかった。
まるで金縛りにでもなったかのように、身体が動かなかった。

「綱吉くん、なぜ僕から逃げようとするの？」
男は微笑みながらツナに言った。
ツナは必死に金縛りをとこうとしたが、身体がまったく動かない。
ツナの手首を握る男の手がさらに力を入れた。

「ーーっつ…！！！」

手首に焼けるような痛みが走った。
ほんとに焼かれているかのように熱く、痛い。
その痛みは手首をぐるりと一周した。

すると男はもう片方の手首も掴み、力を入れた。
同じように、焼かれるような激痛がツナの手首を覆った。

「っいてえ！！」
ツナが叫ぶと、ボンゴレリングが光り男を突き飛ばした。

両手首に激痛が走る。
ズキズキと、骨までもを襲う激痛。

男がふらりと、またツナの手首を掴もうとした。
ツナはそれをかわして逃げた。
どこに行けばいいのかわからなかったが、とにかくあの男から離れたかった。

「綱吉くん、君は僕から離れられないよ。呪いをかけたからね」
逃げても逃げても男の声は響く。
「右手首の呪いが左手首にたどり着いたとき、君は死ぬんだよ。死んで、僕のための力となるのさ」

男は笑いながらツナに言った。

「またね、綱吉くん」

「…っうわあああああ！」

ツナは叫びながら目を覚まし、起き上がった。
しかしすぐにめまいがツナを襲い、ベッドに倒れ込んだ。

とても、嫌な夢だった。
思い出すだけでも悪寒が走る。
ツナは冷や汗を拭った。

ーズキッ

右手首に痛みが走る。
この痛みは…。
恐る恐る右手首を見ると、
手首を一周するように、鎖のような、
黒い痣が出来ていた。

呪い。

呪いをかけられた。

ツナは言葉をなくし、ただ震える右手首を見ていた。

標的9　呪いと焦燥（前書き）

登場人物…

ツナ　リボーン　男

…ごめんなさい。

次回から、頑張ろう。

標的9　呪いと焦燥

呪い。

呪いとは、人あるいは霊が、
精神的・霊的な手段で、人などに、悪意をもって災厄・不幸をもたらす行為をいう。

種類は様々だが、不吉なことにはかわりない。

ツナは右手首と左手首を見つめて、ただ呆然としていた。

たった今、自分は呪いにかけられた。

見知らぬ男に。

しかも、よくわからないが死ぬらしい。

突然の出来事にツナは思考が停止していた。
ただ、自分の両手首を見ていた。

「よう、ツナ。具合は良くなったか？」
リボーンが部屋にはいってきた。
しかしツナは反応しない。ただ黙っていた。リボーンの声が聞こえ

ていないようだ。

そのツナの異変にリボーンが気付かないわけがない。
リボーンはベッドに飛び乗り、思い切りツナの耳元で名前を呼んだ。

「おい、ツナ!!」
ツナは、はっとしてリボーンを見た。
やはりリボーンの存在に気付いていなかったらしい。

ツナは震えていた。怯えていた。
なにかを恐れていた。

リボーンはツナの両手首のあざに気付いた。
黒い、鎖のような痣。

「おい、ツナ。これはなんだ?」
リボーンは痣を指差しツナに聞いたが、ツナは何も答えない。ツナは声が出なかった。出せなかった。

ツナは口をぱくぱくさせてなにかを訴えた。
その顔には焦燥の色が伺えた。

「落ち着け、ツナ」
リボーンがツナをなだめたが、ツナは焦っていた。
リボーンに夢のことを言いたいのに声が出ない。

「落ち着けっつってんだろ」
リボーンはレオンを銃に変化させてツナに向けた。

「ひいっ！！やめろよ！」
ツナは慌てて自分を庇った。

「声、出たじゃねえか」
リボーンはにやりと笑った。

「…ほんとだ」
ツナは声が出たことに安心した。
しかし風邪のため喋るたびに喉は痛むし、声は出しにくい。

「なにがあったんだ」
リボーンはツナに聞いた。
ツナは一瞬黙り、静かに夢のことを話した。
不思議と落ち着いて話すことができた。

話し終えるとリボーンは黙り込んでしまった。
ツナも黙ってもう一度自分の両手首を見た。

「…ねえ、リボーン」
ツナに話しかけられリボーンはツナの顔を見た。

「…オレ、死んじゃうのかな」
ツナは暗い面持ちでリボーンに聞いた。
リボーンはツナが死を怖がっていることに気付いた。

そんなツナにリボーンはいつものように言った。
「馬鹿、なに言ってんだ」

リボーンの言葉に驚いてツナはリボーンの方を見た。

「おめえ、今まで何度も死にかかったが、結局死ななかったじゃねえか」

リボーンは続けて言った。

「こんな呪いでおめえ、自分が死ぬと思ってんなら、大間違いだぞ」

ツナは静かにリボーンの話を聞いていた。

「おめえは死なねえ。絶対な。家庭教師のオレが言うんだ。おめえは、死なねえんだ、ツナ」

リボーンは笑ってツナを見た。

ツナはひどく安心した。

リボーンの言葉を聞いて、何故か、信じてしまった。

言ってることは目茶苦茶だが、自分は死なないと思えた。

「…そうだよな」

ツナも笑ってリボーンを見た。

ーズキッ

「…っ！」

右手首が痛んだ。先程の激痛まではいかないが、痛かった。

右手首を見ると、痣が、増えていた。

いや、のびていた。

鎖が右腕を這うように、のびていた。

「の、の、のびたあああ！」

ツナは叫んで、再びパニックに陥った。
「うっせえぞ」
しかし、リボーンにまた銃を向けられ、強制的に黙らされた。

「厄介な呪いだな。」
リボーンはツナの右手首を見て言った。
「進行は遅いが、このままだといずれは左手首にたどり着くだろうな。」
「ど、どうすればいいんだろう」
ツナは困惑しながらリボーンに聞いた。

「そりゃあ、おめえ、呪いをかけた奴を捕まえて呪いを解くんだろ」
さらりとリボーンは言った。

「そ、そんな簡単に言うなよリボーン！相手がどこの誰だかもわからないのに！」
「わっかんねえぞ。こういうのは意外と近くにいることが多いんだ」
リボーンはまたにやりと笑った。

（…ほんとかなあ。わけわかんないや。あああ、また頭が痛い……）
ツナは頭をおさえてため息をついた。

確かに、具合は先程よりも悪くなっていた。
ただでさえ風邪がひどいのに呪いの痛みは地味に辛い。
ツナは泣きたくなった。
泣いてしまいそうだった。

「ま、今は寝とけ。とにかくさっさと風邪を治して、呪いを解く方法を考えるぞ」
リボーンに言われ、ツナは素直に従った。
風邪を治さなきゃ何もできない、そう思ったからだ。

時計を見ると、まだ昼前だ。
ツナはまたため息をついて布団にもぐった。

リボーンは部屋を出て、考えた。
（夢に出てきた男…もしかしたらな）
今までの出来事を考えれば、その可能性は高い。

（…結加に聞いてみるか）
結加が帰ってきたら聞こうと考え、階段を下りた。

（おめえは死なねえ。死ぬわけにはいかねえんだ、ツナ）
ツナの部屋のドアを見つめ、リボーンは心の中でツナに言った。

「確かに、小さくてかわいいかもね」
目の前のワインの入ったグラスを見つめ男は言った。

「あまりにも腕が細かったから、折っちゃうかと思ったよ」
自分の手を見ながら楽しそうに笑った。

「…綱吉くん」

空は淀み、差し込む光は弱々しかった。

「僕からは、決して逃げられないんだよ」

男は、…ウライラは不気味な笑みを浮かべて言った。

弱々しかった光が、途絶えた。

標的１０　鎖の呪縛（前書き）

動き出しそうで動き出しませんね…

ゆっくりと話は進みそうです。

でもそろそろみんなを
暴れさせてあげたいです。

標的１０　鎖の呪縛

風邪で寝込んでから五日目。
徐々に体調は良くなりはじめたが、まだ熱はあり、だるい。
することもなくツナは、右手首を眺めていた。

鎖のような痣。
ツナは呪いをかけられた。

呪いをかけられたのは二日前。
どうやら放っておくと死ぬらしい。
しかし呪いの解き方がわからない。

「…はあー」
ツナはため息をして寝返りをうった。

痣は…鎖は右腕をくるりと巻き付くようにのびている。
時々、地味に痛む。
激痛を伴うこともあり、寝ているときでも痛みで起きることがあった。

「はやくあの男の人を探さないと」
しかし、見たことのない人を探すのは無理だ。
見つかる可能性は低い。

どうしようかと考えていると、階段をのぼる音がした。
しかも複数。

「大丈夫ですか、十代目！」
心配そうな顔で獄寺は部屋に入ってきた。

「よっ、ツナ！少しは良くなったか？」
獄寺に続いて山本がいつもの調子で言った。
肩にはリボーンが乗っていた。

「二人とも、来てくれたんだ…」
一人で部屋で寝ているのは寂しかったのでツナは嬉しかった。

「すいません、十代目。一昨日と昨日来られなくて…」
獄寺は申し訳なさそうに謝った。

「い、いいよ獄寺くん！そんなこと！」
（風邪で毎日お見舞いっていうのもなんかおかしいし…）
ひそかにツナは心の中でつっこんだ。

「ツナ！プリン買って来たから食おうぜ！」
山本がコンビニの袋を持ち上げ言った。

「わ、ありがとう！」
微熱で少しだるかったが食欲はあったので食べることにした。

すると、獄寺がツナに話しかけた。
「あれ、十代目。その手首の鎖…なんですか？」
「…あ！！」

ツナは二人が来てくれたことが嬉しかったので、すっかり呪いのことを忘れていた。

「もしかして、入れ墨か？やるな、ツナ！」
「馬鹿！十代目が入れ墨なんてするわけねえだろ！」
山本が笑いながら言うと獄寺はツナのかわりに否定した。

「えっと…これは…」
「呪いだぞ。」
二人に話していいのかわからず戸惑っていると、リボーンがコーヒーを飲みながら言った。

「っリボーン！！」
「の、呪いって…本当ですか十代目！」
「入れ墨じゃないのな」
焦るツナ、驚く獄寺、何故か納得する山本。

（いいのかよリボーン！二人にこのこと話して…！）
「黙ってたっていずれはバレるだろうからな。今話しとけ」
ツナの心を読んだかのようにリボーンは言った。

「話してください、十代目！」
「それ、ほんとに呪いなのか？」

二人に聞かれツナはこくりと頷いた。

「その…夢の中で、知らない男の人に会ったんだ。その人に手首を

つかまれて、一応逃げたんだけど…目が覚めたら、こんなのになってて…」
ツナの話を二人は黙って聞いていた。

「右手首からのびる首の痣が左手首にたどり着くと、死んじゃう…みたい」
「死ぬって…本当ですか！？」
獄寺は驚いてツナに確認した。

「ほんとに痣ってのびてんのか？」
山本がそう言うとツナは服の袖をまくり見せた。
「少しずつだけど…確かに、のびてるんだ」
今はまだ右腕だけだが、いずれは全身に痣がのびる。

「どうすれば…呪いは解けるんですか」
「呪いをかけた本人を見つけて解かせるしかないみたい」
ツナの言葉に獄寺は絶望的な表情をした。

それとは反対に山本は楽観的な表情で言った。
「よっしゃ！じゃあそいつを探せばいいんだな？」

「どうやって見知らぬ奴をさがすんだよ馬鹿！」
余裕な山本に獄寺は怒って言った。

「焦ったって仕方ないだろ。まだ時間はあるんだし、大丈夫だろ！」
「山本の言うとおりだぞ」
リボーンは山本の肩に飛び乗り言った。

「…なんか」
ツナがぽつりとつぶやいた。
「…相手は、そう遠くにいないと思う」
なぜだかそう思った。遠くではなく、近くにいると思った。
（ツナの超直感だな）
リボーンはツナの超直感がはたらいたとわかった。
「ツナがそう言うなら、相手は近くにいるだろうな」
リボーンはそう言うと、先日結加に聞いたことを思い出した。
（たしかあいつ、こんなたちの悪い呪いをかけるのは特殊な奴だと言っていたな…。）
二日前、結加にツナの呪いのことを話すと、そんな呪いは聞いたことがないと言った。
結加は呪術に関しても詳しかった。
すると、部屋のドアが開いて、結加がはいってきた。
「綱吉くん、大丈夫？」
「結加ちゃん…昨日よりは大丈夫だよ」
「そう、ならよかった」
結加はツナに微笑んだ。

「おい結加、なにかわかったか？」
リボーンは結加に呪いのことについて聞いた。

「はい、色々調べたんですが…。その呪いは“鎖の呪縛”と言って、かなり危険性の高い呪いです」
結加は呪いについて話しはじめた。

鎖の呪縛とは、その名のとおり、鎖のような痣があらわれ、相手をどんどん弱らせるらしい。
鎖の呪縛には始発点と終着点があり、日が経つごとに鎖はのび、全身を這うように繋がっていく。

最初はあまり痛みはないが、鎖の長さがのびるほど痛みは増し、相手を苦しめる。
鎖が繋がったとき、まるで締め付けられるかのような感覚に襲われ、死んでしまう。

呪いを解く方法は、呪いをかけた本人にしかわからず、他者が解くことはできない。

「本人にしかわからない呪いの解き方か…」
「本人が忘れたらやばいってことだよな」
山本はさらりと重要なことを言った。

「や、やめてよそんな不吉なこと言うの！」
ツナはもしあの男が解き方を忘れていたらどうしようかと焦ってしまった。

「あはは、わりぃっ！」
山本は笑ってツナに謝った。

（笑い事じゃないんですけど…）
ツナは一気に絶望的な気持ちになってしまった。

あの男が呪いの解き方を忘れていないようにと願うだけだった。

「大丈夫だよ、綱吉くん」
結加がツナを励ますように言った。

「そうですよ十代目！オレらが呪いをかけた奴をつかまえますよ！」
「だな！そんなすげえ呪いをかけた奴が解き方を忘れるわけねえよ！」
獄寺と山本はツナに言った。

「みんな…ありがとう」
ツナは嬉しかった。
みんなが自分のために協力してくれる。
心から感謝した。

「さ、プリン食べましょう十代目！」
獄寺が袋からプリンとスプーンを取り出してツナに渡した。

「あ、結加も食べるか？」
「いいんですか？ありがとうございます！」
山本が結加にもプリンを渡した。

どうやら沢山買ってきたらしい。

ツナは、コンビニのプリンが一段とおいしく感じた。

「意外と時間かかるなあ、みんなのレベルアップ」
ウライラはつまらなさそうにソファーに寝転び言った。

「はやく僕も本物の綱吉くんたちに会いたいのに」
するとウライラは、ひらめいたように立ち上がった。

「みんながいないなら、僕ひとりで会いに行けばいいのか」
ウライラは満面の笑みでひとりしゃべっていた。

「待っててね、綱吉くん」

夕方の空に不吉な声が響いた。

標的１１　呪いの弱点（前書き）

短いです。

次回くらいから、
みんなは暴れてくれるでしょう。

それにしても短い…

標的１１　呪いの弱点

暗い暗い闇の中、ひとつの建物が寂しく建っている。
しかしそれはどこか不気味で、近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。

「ウライラ様」
ウライラが部下に気付くと笑顔で対応した。

「ん、どうしたの？」
「ミノイ様達の強化オペレーションはまだ多くの時間を要するかと…」
部下は申し訳なさそうに報告した。

「ふうん、そっかあ」
ウライラはしばらく考えるようなしぐさをして、部下に言った。

「僕、暇なのは嫌いだから、また綱吉くんに会いに行こうと思うんだあ」
部下は黙ってウライラの指示を待つ。

「うん、戦闘能力のある部下たちを連れていこうかな！」
「では、ただちに厳選して参ります」
「よろしくね～」

部下はお辞儀をして部屋をでていった。

「結構時間かかるもんだなあ」
ウライラはため息をついて窓の外を見た。
しかしその目はどこか楽しげだった。

「まあその分強くなるだろうし、気長に待とうかな」
紅茶を飲み、ウライラは手元の資料を見はじめた。

目覚めもよく、身体も軽い。
ツナは大きく伸びをして、ひとつあくびをした。
風邪もすっかりよくなり、体調も回復した。

「と言っても、学校は休みなんだけどな…」

今日は土曜日なので、学校は休みだった。

「なにしようかなあ」
ツナは着替えてごろりとベッドに寝転がった。

ーズキッ

「いたたっ」
ツナは痛んだ手首の痣を見た。
手首の痣…呪いはだんだん長さをのばしている。

（せめてこの地味な痛みに耐えれればなあ…）
激痛はごく稀なので仕方ないが、地味な痛みはしょっちゅうだ。
そんなものにいちいち構ってられない。

「どうすれば痛みに耐えれるんだろう」

「オレが指導してやる」
部屋のドアが開き、リボーンが立っていた。

「指導してやるって…痛みに耐えれるようになるのかよリボーン！」
ツナはリボーンが痛みを抑える方法を知っているのかと疑った。

「ああ、おめえが痛みに耐えれるような身体をつくればいいんだ」
「…は？」

意味がわからない。まったく意味がわからない。
ツナはどうしてそうなるのかとリボーンを疑った。

リボーンの話によるとこういうことだった。

鎖の呪縛は、呪いをかけられた人の体力・精神を食べて進行を早める。
当然体力・精神を食べられた人は衰弱するので、すぐに死んでしまう。

鎖の呪縛は莫大な力を要する。

しかし、初期段階ではこの呪いは呪いをかけた人の力で維持される。
つまり、初期段階で呪いに耐えられるようになれば、呪いをかけた人のダメージが大きくなる。
そうすれば、進行を遅くすることができるし、痛みもそれなりに抑えることができる。

「そのためには、丈夫な身体にするために鍛えなきゃなんねえんだ」
ツナは納得した。
それと同時に、自分はなんて恐ろしい呪いにかけられたんだろうと思った。

「んじゃ、早速修行すっぞ」
「え、今から!?」

(病み上がりの人になに言っちゃってんの!?)
ツナは構わず修行をしようとするリボーンに呆れてしまった。

「お前、病み上がりだからって修行しねえとか言うんじゃねえぞ」
心を見透かしたようにリボーンはにやりと笑った。

(心を読まれたー!!!!)
ツナは苦笑いをするしかなかった。

「お前がさっさと死んでいいって言うなら、修行はしねえがな」
「しっ、死にたくない！！！死にたくないよ！！」
部屋を出ていこうとするリボーンをツナは必死で引き止めた。

「んじゃ、やるぞ。一応結加や獄寺たちにも修行するように声をかけといたからな」
「え、みんなも！？」
「最近平和続きでなまってるだろうからな。いい機会だろ」
そう言うとリボーンは部屋をでていった。

（みんなも修行するんだ…頑張ろうとしてくれてるんだ…）
ツナは心強くなった。
「…がんばろう」
独り言のようにツナは言った。

ツナと守護者たちの修行がはじまった。

標的１２　修行開始（前書き）

短いですねー

まだ暴れてませんねー

あとがきでは、ツナ、獄寺、山本がわたしののかわりになにかを説明してくれるようです。

…押し付けただｋ（ｒｙ

標的１２　修行開始

すべてのものに弱点があるように、
呪いにも弱点があったらしい。

よくわからないが、自分が強くなればいいとのこと。

ただしそれは呪いの進行を遅らせるものであって、呪いが解けるわけじゃないらしい。

でも呪いを妨げられるのであれば、ツナはそれでもいいと思った。

呪いの進行を遅らせる方法、それは
己の身体を、鍛え上げることだった。

「こ、ここーーー！！？」
ツナの叫び声が響く。

「修行っつったら過酷な場所のがテンション上がるだろ」
「テンションの問題じゃないだろ！？」

リボーンの目茶苦茶な理由にツナは思い切りつっこんだ。
修行はテンションの問題なのか。

果してテンションは関係があるのか。

ツナたちがいるのは周りを森に囲まれた、大自然のど真ん中、崖の目の前に立っていた。

さかのぼること一時間半前…

ツナたちが家を出ると、外では獄寺と山本が待っていた。

すると突然、全員一台の車に押し込められ、拉致られた。

そして連れてこられたのがこの森だった。

（なんか前にもこういうとこきたような…！！）

ここは以前ボンゴレリングをめぐってヴァリアーと戦うために修行した森に似ていた。

「なっ、テンション上がるだろ？」

「上がるわけないだろ！」

ツナはリボーンの言葉を否定した。

「オレはこういうの楽しいから好きだぜ？」
「お前は黙ってろ野球馬鹿！」山本が楽しそうに言った。
獄寺は山本はどこまで馬鹿なんだと思っていた。

「で、なにすんだ小僧？」
山本がリボーンに問いかけた。

「ああ、お前らには鬼ごっこをしてもらう」

「…へ？」
「…は？」
「…え？」
上がツナ、真ん中が獄寺、下が山本の声。

「鬼ごっこってなんだよそれ！ただの遊びじゃないか！」
「そうですよリボーンさん！なんで修行なのに鬼ごっこなんですか！」

ツナと獄寺はリボーンに詰め寄ったが、山本は
「鬼ごっこか、楽しそうだな！」
と普段通りだった。

「ただの鬼ごっこじゃねえぞ」
リボーンはなにかを取り出した。

「…それ、死ぬ気弾？」
「ちげえぞツナ。これは逃走弾と言って、敵を欺くために使われて

んだ」

そう言うとリボーンはレオンを銃に変化させ、弾を発砲した。

ーパアンッ

光が弾けると、なにかが現れた。
それはリボーンの元へとんできた。

「これは…鳥ですか？」
獄寺は目の前にいる、カラスほどの大きさの鳥を指差した。

「ただの鳥じゃねえ。特殊な能力を持った動物だ」
鳥は翼をばさばさと羽ばたかせた。

「お前らにはこいつを捕まえてもらう。制限時間は一時間。範囲は半径３ｋｍ以内だ。目印をつけておいたから、そこから少しでも出れば失格だ」

（だからリボーンは時計を持って行けって言ったんだ）

ツナは左腕の腕時計を見て思った。

「あいつの速さはハンパねえ。修行だからもちろん武器は使っても構わねえぞ」

「じゃあ、瓜たちも使っていいってことですか！」
獄寺の言葉にリボーンは頷いた。

「言っとくが、そいつはなにをされても死なねえ。だから安心して煮るなり焼くなりなんでもしろ」
リボーンはにやりと笑って鳥の頭をなでた。

（ひどい、ひどすぎる…！）
ツナは鳥のことを哀れに思った。

「んじゃ、はじめるぞ」

リボーンが鳥を空に放った。

ツナはイクスグローブを手にはめ、炎を額にともした。

獄寺はアニマルリングから瓜を出した。

山本は時雨金時をかまえた。

１３：３０ＰＭ　鬼ごっこスタート

標的１２　修行開始（後書き）

ツナ「えっと、なんか知らない人に頼まれたので、この話について少し説明します」

獄寺「なんでオレらが話さなきゃなんねえんだ」

山本「まあまあ、いいじゃねえか」

ツナ「この話は、白蘭との戦いを終え、未来から帰ってきたあとの話です。漫画の方で続いているシモンリングとか、そういうものはまったく出てきません」

獄寺「で、匣兵器は未来には置いてこないで、こっちに持って来たってわけだ」

山本「でもなんで匣兵器は持ってきたのにアニマルリングがあるんだろうな、あはは」

ツナ「や、山本！それは言っちゃだめだって！」

山本「あ、わりっ！あはは」

獄寺「てめえ、十代目の手をわずらわせんじゃねえよ！」

ツナ「えーっと…ではまた次回！」

標的１３　第一関門“感謝”（前書き）

なんだかややこしくなりました！

多分これからは
修行は基本

ツナ　獄寺　山本

の三人にちょくちょく
ほかの守護者が混ざります。

一回くらいはツナと修行させないと！

標的１３　第一関門“感謝”

飛び去る鳥の帯びる光
その煌煌としたさまは
悪を浄化しあまねく希望
それを決して潰してはならない
それは人の及ばぬ世界の使い
ただ　優しく美しく光る者には
同じ景色が見えるであろう

ツナ達は一斉に鳥の飛び去った方向へ走り出した。
しかし鳥の飛ぶスピードは速く、人の足では追いつくことができない。

「速えのなー、あの鳥」

野球部の山本も鳥のスピードには敵わなかった。

「どうしますか、十代目」

獄寺に聞かれ、ツナはしばし考えたあと、二人に告げた。

「オレが上から探すから、山本たちは下から頼む」

「了解です」

「わかったぜ、ツナ！」

そしてツナはグローブに炎をともして空へ飛んでいった。

「そういえば獄寺、お前も飛べるんじゃないのか？匣あるだろ？」

「十代目がわざわざ任務を与えてくださったんだ！オレは下から行く！！」

獄寺は勝手にツナからの任務だと勘違いしていた。

「お前こそ少しは飛べるだろ！」

「いや、オレもツナに頼まれたからなっ」

山本は笑いながら答えた。

「…いないか」

上から森を見渡していたが、鳥の姿はどこにもない。
あれからスピードを上げて追いかけたが、あまりにも木が多いので見失ってしまった。

再び飛び出そうとすると、数メートル先になにかを感じた。

（これは…仕切り？）

地上に下りてみると、木から木へとピアノ線のようなものが張り巡らされてあった。

「よく見破れましたね。さすがボンゴレ次期後継者」

振り向くと黒服の男が立っていた。
敵かと思いかまえたが、男からは悪い気は感じられない。

「安心してください。私はボンゴレの者。リボーンさんに頼まれてこちらへやって来ました」

「リボーンが？」

「はい、どうやらとても大切なことだそうで。九代目へ相談なさったんです」

男の言葉にツナは納得した。

（だから家を出た瞬間、車に乗せられたのか…）

「綱吉様。あなた方はこの修行を単なる鬼ごっこだと解釈してませ

んか？」

「…どういうことだ」男の意味深な言葉にツナは疑問を持った。

「忍耐とは、苦しさ、辛さ、悲しさなどを耐え忍ぶこと。自分を上手くコントロールしなければ忍耐とはならないのです。」

「…何が言いたい」

「つまり、うやむやに行動しては忍耐など不可能。周りのことも考えなければ意味がないのです」

すると男はツナに一枚の紙を渡した。

「それを読み、よく考えてください。あなたなら…超直感を持つあなたなら分かるだろうと、九代目とリボーンさんがおっしゃってました」

「…！九代目とリボーンが…」

「はい。私も、あなたを信じています。ボンゴレ次期後継者、沢田綱吉様」

男はツナに向けて丁寧にお辞儀をした。

「…名前は」ツナは男の名を聞いた。

「はい、ロンジと言います」

「…そうか、…ロンジ、ありがとう」
そう言うとツナは飛び出して行った。

「ふふ、あの炎、あの目、確かに似ていますな、ボンゴレ一世に」
男は嬉しそうに笑って言った。

「中学生と聞いてどんな子かと思えば…なるほど、やっとわかった」
男はツナの飛んでいった方向を見てつぶやいた。

「あの覚悟の炎こそ、ボンゴレボスにふさわしい。あなたこそ、ボンゴレを継ぐべき者ですよ、沢田綱吉様」

ツナは男に渡された紙を見た。

飛び去る鳥の帯びる光
その煌煌としたさまは
悪を浄化しあまねく希望
それを決して潰してはならない

それは人の及ばぬ世界の使い
ただ　優しく美しく光る者には
同じ景色が見えるであろう

何かの詩のようなものが書かれていた。
先程の男の言葉といい、この詩といい、まったく意味がわからない。

（ここに書かれている鳥は、あの逃走弾の鳥か…？）

―ドオォォンッ

とてつもなく大きい爆発音がした。
すると、木々の間から煙が立ち込めていた。

（まさかあそこに…！？）

ツナは煙の方向へ飛んでいった。

「くそっ、うろちょろしやがって」

獄寺はダイナマイトをかまえて鳥を睨んだ。
鳥は黙って飛んでいた。

「スピードすげえな、あいつ。まったく捕まらねえじゃねえか」
山本が時雨金時を持ちながら感心したように言った。

「感心してる場合かよ！さっさとあいつを捕まえるぞ！」

獄寺はリングに炎をともし、匣兵器、ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．（スィステーマ　シー・エー・アイ）を出した。

「さっさと捕まりやがれ！フレイムアロー！！」
しかし鳥は素早くフレイムアローを避けた。
山本は違和感を感じた。

「なあ、あいつおかしくないか？」

「なにがだよっ」
獄寺はイライラした口調で聞いた。

「だってさ、オレらがいくら攻撃したって、あいつ反撃しねえんだぜ？」

獄寺もそれに気付き、疑問を感じた。
確かに、鳥は獄寺たちの攻撃は避けても、反撃はまったくしてこない。

「なにを考えてんだ、あいつ」
獄寺は攻撃が無駄だと感じ始めた。

「ここにいたのか」

突然声がしたので後ろを見ると、ツナが上から飛び降りてきた。

「十代目!!」

「なあ、ツナ。あいつおかしいんだよ」

山本はため息をしてツナに事情を話した。

「反撃してこない?なぜだ?」

「それが全くわからないんだよな。攻撃を避けてずっとこっちを見てんだよ」

ツナの問いに山本もわからないといった表情で答えた。

(攻撃されても反撃しない?まさかロンジの言っていたこととこの詩が関係あるのか?)

ツナが考えている間に痺れを切らした獄寺はさらに攻撃をしかけた。

「くそっ、らちがあかねえ!十代目、今すぐあいつを仕留めます!

！」

獄寺は再び鳥に向けてフレイムアローを放った。

「ギャキャッ」

フレイムアローが身体を掠めて鳥は痛そうな声をあげた。
ツナはそれを見て心が痛くなった。

（なぜだ…あいつを攻撃しては…傷つけてはいけない気がする…）

ツナは鳥を攻撃することに躊躇した。
しかし、それに気付かない獄寺と山本はツナに声をかけた。

「十代目！今のうちにトドメを！！」

「そうだぜツナ！早くしねえとあいつが逃げちまうぜ！」

ツナは不安を抱えつつも鳥にトドメをさそうとした。

ーズキンッ！！！！

しかし、突然ツナを呪いの激痛が襲った。

「！！！？」

あまりの激痛にツナは地面へ倒れた。
今までにないほどの痛みだった。

「十代目っ！」

「ツナ！大丈夫か！？」

獄寺と山本がツナに駆け寄った。
ひどい激痛なのだろう、ツナは汗を大量にかいていた。

「…っ、い…てえ…っ」

ツナが激痛に苦しんでいると、鳥がツナの近くへとやって来た。

「「！？」」
獄寺と山本は驚いて鳥を見た。

鳥はツナの目の前へ行き、ツナの顔を覗き込んだ。

「…お前、…っ心配して…くれてるのか……？」

鳥は心配そうにツナの顔と呪いの痣を見ている。
「キュルルル」と鳴いてツナの汗をくちばしで拭った。

「っお前も…怪我してるのに…ありがとな……」

ツナは鳥の頭をそっとなでた。
鳥は気持ち良さそうに目をつむる。

「そこまでだ」

「「「!!!?」」」

驚いた三人の前に、リボーンと、先程ツナが出会ったロンジが立っていた。

「リボーンさん!そこまでってまさか…」

「そうだ。たった今、ツナがそいつを捕まえた。だからお前らの勝ちだ」

リボーンとロンジはツナに近寄った。

「ツナ、お前が気付いたことを言ってみろ」

ツナは一瞬黙って、静かに、痛みに耐えながら話しはじめた。

「こいつが…反撃してこなかったのは…オレ達に対して全く敵意がなくて…、オレ達を…傷つけたくなかった…から」

「なっ!まさか!」

獄寺は驚いて声を上げた。

「さっきロンジが言ってたんだ。“うやむやに行動しては忍耐など

不可能。周りのことも考えなければ意味がない”って…。」

ツナは、鳥に攻撃しても無駄ということ、反撃してこない鳥の気持ちに気付いた。

鳥は、待っていた。
自分にはまったく攻撃する気はないと気付いてくれるのを。

「そして…」

ツナは一枚の紙をだした。

「？なんだそれ」
山本は紙を覗き込んで聞いた。

「さっき…ロンジからもらったんだ。この詩のことも…、関係してんだろ…リボーン」

リボーンは黙ってうなずいた。

飛び去る鳥の帯びる光
その煌煌としたさまは
悪を浄化しあまねく希望

それを決して潰してはならない
それは人の及ばぬ世界の使い
ただ　優しく美しく光る者には
同じ景色が見えるであろう

「この鳥っていうのは…こいつのことだ。」
“悪を浄化しあまねく希望”というのは、鳥には悪意はないということ。
悪意のない者を潰してはならない。
悪意のない者こそが犠牲となってはいけない。
だからそれに気付いた者には…ツナには、鳥は近づいて行ったということだった。

「正解だぞ」
リボーンはにやりと笑った。

「痛みに耐えるには忍耐が必要だ。忍耐とは苦しさ、辛さ、悲しさなどを耐え忍ぶこと。それに必要なのは体力と精神だか、特に必要となるのが精神、つまり感情なんだ」

「感情…ですか？」
獄寺はわけがわからず聞き返した。

「この呪いに耐えるのに必要な感情は感謝、冷静、幸福、リラックス、勇気、安心、愛しさの七つ。そのうちの感謝を今回は試したんだ」

「綱吉様は、その鳥に感謝したでしょう。なので今回は合格、ということなのです」

ロンジは優しく微笑んで言った。

「じゃあ、まったく鬼ごっこなんて関係なかったのな！あはは」
山本はすっきりしたように笑った。

「ちなみに、呪いを耐えるにあたって、邪魔な感情もあるんだ」

「邪魔な…感…情？」
ツナは苦しそうにリボーンに聞いた。

「そうだぞ。欲望、執念、無念、空虚、軽蔑、シャーデンフロイデ、嫉妬の七つだ。」

「シャーデンフロイデ？なんだそれ？」
山本がリボーンに聞いた。

「簡単に言えば人の不幸を喜ぶ事だな。しかし、この七つはツナはあまり感じねえ。人間だから多少はあるだろうがな。ツナの場合、

今までダメダメが当たり前だったからそんな感情もわかんねえんだろ」
リボーンは笑いながらツナを見て言った。

「…じゃあ、その七つの邪魔な感情は放っておいても…っつ!!!」

再び激痛が襲い、ツナが痛みに顔を歪める。
それをまた心配そうに鳥が見つめる。

「大丈夫だ…お前…が、そんなに…心配することじゃ…ない」
汗をうかべながらツナは鳥に優しく言った。

鳥の目にツナのオレンジ色の目がうつる。その目は優しく、あたたかい目だった。

「大丈夫か、ツナ」

「…これが、大丈夫に…見え…るか…っ…うっ……!」

先程よりも痛みは増し、ツナはあまりの激痛に意識を手放した。
そして額の炎も消えた。

「っ十代目!!」

「しっかりしろ、ツナ!」

二人が呼びかけるが、ツナはぴくりとも動かない。

「痣がまたのびてやがるな…。かなり強力な呪いってわけか」

リボーンは気を失ったツナを見た。

冷や汗を大量にかき、時々苦しそうに顔がひきつる。

気を失っても、ツナは痛みと戦っていた。

「ロンジ、すぐに車に連れてけ。ツナを家で休ませるぞ」

「かしこまりました」

ロンジはツナを抱えて車へ向かった。

それを追って獄寺たちも歩いた。

ロンジの肩には、鳥が心配そうにツナの顔を覗き込んでいる。

（なんという方だ。逃走弾の鳥を実態化させてしまうとは）

ロンジは驚いていた。

逃走弾に使われる動物などは、役目を終えると姿を消す。

しかしこの鳥は役目が終わったにも関わらず消えない。

それは、さっきツナが鳥の頭をなでたとき、かすかにツナの死ぬ気の炎が鳥へと流れ込んだからだ。

ツナの炎の属性は調和。
今までは相手を石化していたが、今回は鳥を実態化させた。

（この方は…今までにない力を持っている）

ロンジはツナの顔を見ながら思った。

はじめてツナに出会った時。
ロンジはツナの目に釘付けになった。
まるで大空のようだった。

一全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する大空。

（確かに、この方は大空にふさわしい）

ロンジは優しく微笑んだ。

第一関門　“感謝”クリア

標的１３　第一関門“感謝”（後書き）

ツナ「そういえばロンジさん。ボンゴレの本部で働いてたんですか？」

ロンジ「ええ。書類関係にも携わってましたが、主に九代目の身の回りのお世話を」

ツナ「えっ！す、すごい人だったんですか！！」

ロンジ「いえいえ。それほどすごくは…。いずれ綱吉様がボスになられたときは、私が綱吉様のお世話をさせていただくかも知れませんね」

ツナ「えっ、オレボスになるなんて…」

リボーン「まだ言ってんのかダメツナが」

ツナ「ひっ！リボーン！！」

リボーン「ロンジはいい奴だぞ。しかもツナのことを相当気に入ったらしい」

ツナ「え…？」

ロンジ「私は現在結婚しておらず…妻もいなければ子供もいない。なので、どうしても綱吉様が自分の子供のように思えて…」

ツナ「あ…ははは」

（オレってそんな幼く見えるかな…）

リボーン「よかったな、ツナ。パパが出来て」

ツナ「パパとか言うな！第一父さん二人もいらないよ！！」

ロンジ「では、第二のパパということで…」

ツナ「うわあああああああ！！いやだあああああああああ！！」

ロンジはかわいい人です（笑）

標的１４　ライオンと鳥（前書き）

うわわわわ、

結加ちゃんがでてきません。

次回から…無理矢理出します（笑）

標的１４　ライオンと鳥

まったく、なんていう痛みだ
修行の途中で気を失っちゃったじゃないか
今までで一番痛いし、死ぬかと思ったよ
ああ、早く起きなきゃ
いろいろ聞きたいこともあるんだ
早く…早く起きなきゃ…

「十代目、どうですか？」
獄寺が控えめにツナの部屋のドアを開けた。
「ああ、まだ目を覚ましちゃいねえぞ」
「そ、そうですか…」

しょんぼりとうなだれた獄寺にリボーンは座ることを促した。
獄寺は言われるままに腰をおろした。

「ったく、最近たるんでんだコイツは。簡単にパタパタと倒れやがって」
リボーンは呆れたようにツナの顔を見て言った。

「十代目…すげえ痛そうでしたよね」

「まあな。寝てる間にも激痛があるらしく、起きちまうこともあるらしいがな」

獄寺はそれを聞いてますますうなだれた。

「たまに、痛くて泣いてるぜ」

リボーンはにやりと笑った。
少なくともツナが泣くことをおもしろがっているらしい。

「十代目がそんなお辛いのに…オレはなにもできねえなんて！」
獄寺は悔しそうに拳を握りながら言った。

「痛いは痛いだろうが…ツナは、これでも安心してんだ」
リボーンの言葉の意味をとらえることができず、獄寺は黙っていた。

「前、こいつ言ってたんだ」

“ねえ、リボーン。この呪いはオレがかかってよかったって思わない？…だってさ、こんな辛い思い、みんなにさせたくないじゃないか。痛いけど…オレは、安心してるんだ…”

記憶の中のツナが笑う。
すべてを包み込む大空のように。

「まったく、あまちゃんにもほどがある」

「十代目がそんなことを…っ」

獄寺はうつむいて黙ってしまった。

ーガチャッ

部屋のドアが開き、山本がはいってきた。

「あ、来てたのか！」

「あたりめえだ、野球馬鹿…」

そう言うと獄寺は再びうつむいた。

「チャオッス、山本」

「よっ、小僧！ツナ目え覚ましたか？」

「いや。相変わらずダメダメだからな」

山本はツナに目を配ると、獄寺の隣に座った。

「…隣に座んじゃねえよ」

「あはは、いいじゃねえか！」

「よくねえ！オレは今落ち込んでんだよ！！」

獄寺はイライラした口調で山本に叫んだ。
山本はいつものように笑って流した。

「…んん……」

もそりとツナが動き、目を開けた。

「お、ツナ起きたか」

「じゅ、十代目ええ！！」

「おはよっ、ツナ！」

三人はツナに声をかけたが、ツナはただぼーっとして三人を見ていた。
そして突然何かに気付いたようにがばっと起き上がった。

「ああっ！オレまた…！」

「暴れんな。安静にしてろ」

リボーンに鎮められ、ツナはおとなしく上半身を起こした。

「大丈夫ですか、十代目！」

「うん、今は痛くないから大丈夫だよ」

笑顔のツナを見て安心した獄寺は心底嬉しそうだった。

「ツナ。このまま激痛で気を失ってたらきりがねえ。明日から修行再開させるぞ」

「え！学校は！！？」

明日から、と言えば学校とかぶる。

まさか放課後じゃなかろうかとツナはリボーンに聞いた。

「学校自体を休みにしちまえばいいだろう」

リボーンは怪しく笑った。

（何かする気だーーーー！！！）

脅しか、脅しだろうか。こいつなら校長をも脅し兼ねないとツナは思った。

「って、そうだリボーン！聞きたいことがある…」
ツナがリボーンに話しかけようとした時、突然目の前をなにかが通り過ぎた。
敵か、と警戒したが目の前に降り立った生き物を見てすぐに警戒はとけた。

「キュルルルッ」

「え、昨日の鳥……！？」

ツナは自分に擦り寄ってくる鳥を見て言った。
そう、この鳥は昨日の修行で使われた逃走弾の鳥だ。

「こらっ、待ちなさい！」

階段を静かに駆け上がり、ツナの部屋に入って来たのは、やはり修行の時の男、ロンジだった。

「わっ、ロンジさん！？」

「あ、綱吉様、お目覚めになりましたか！」

ロンジは満面の笑みでツナを見た。
そして身なりを整えて鳥に向けて言った。

「君と言う鳥は！ちゃんと肩にとまっていなさいと言ったでしょう

！リードをつけますよ！」

すると鳥はツナの後ろに隠れるように逃げた。
ツナはまったく状況がつかめていない。

「ちょ、この鳥って…昨日の…鳥だよね？」

「ええ、そうなんですが…」
ロンジが申し訳なさそうにうなずいた。

「普通は逃走弾は役目を終えると自然と消えるんだが、こいつはお前の死ぬ気の炎で実態化しちまったんだ」

「…じ、実態…化……？」

何がどうなっているのかわからず、ツナは呆気にとられた顔で聞き返した。

「本来こいつらは、空気のようなもんを一時的に実態化させたもんなんだ。でもこいつは、お前の炎の力で常に実態化、本物になっちまったってことだ」

「うっそおおおおお！！！」

ツナは耳を疑った。聞き間違いだろうと。

（死ぬ気の炎で実態化？そんな力オレにはない！！）

事実は受け入れ難かったが、現に、この鳥は消えずに生きている。
本物の命が、宿ってしまったのだ。

「おめえ、自分の力見くびんなよ」
リボーンはため息をついて言った。

今までの経験でツナは最初と比べて格段に力は強くなった。
死ぬ気の炎も純度が上がったのでさらに強さは倍増した。

「ツナ。おめえが責任とってこいつの面倒を見ろ」

「えっ、この鳥を!!?」

ツナは自分の隣にいる鳥を指差して言った。

「そいつ、ツナに懐いてんだから問題ねえだろ。ママンだって許してくれるだろうし、あとはおめえ次第だ」
ツナは隣でおとなしく座っている鳥を見た。
オレンジ色の真っ直ぐで純粋な目。
金色がかった羽をひそかに震わせて、鳥はツナを見つめた。

「…わかったよ。オレの炎が原因なんだろ?オレが責任持って飼うよ」

「ふっ、やっぱりな」
リボーンはわかっていたかのように言った。

「ありがとうございます、綱吉様」
ロンジは一礼して礼を述べた。

「ていうか！オレ鳥の飼い方なんて知らないよ！どうしよう！」
今までペットを飼ったことのないツナは世話の仕方もわからなかった。

「雲雀に聞けばいいじゃねえか。あいつ鳥飼ってるだろ」

「雲雀さん！？そそれは無理無理！！絶対無理だよ！！」
雲雀にむやみに話しかけたら咬み殺されかねない。
リボーンの提案をツナはかたく拒んだ。

「その鳥は、基本何も食べないんですが…力を供給する必要はありますね」
ロンジはツナをじっと見ていた。

「…あのー？」

「綱吉様。その鳥に死ぬ気の炎を与えてみてください」
死ぬ気の炎を与える？なぜ？とツナはぽかんとしていた。

「え、死ぬ気の炎を…？」

「そうだな。ものは試しだ。ツナ、やれ」

「こ、根拠もないのにいい！！？」

得体の知れない生き物に死ぬ気の炎を与えても大丈夫だろうかとツナは思っていた。

暴走でもしたら、死んでしまったらどうしようと心配になった。

リボーンはレオンを変化させてツナに向けた。

「つべこべ言わずにさっさとしろ！」

「うわあああああ！ちょ、ま！！」

ーズガアアン

抵抗もむなしく、ツナは無理矢理超死ぬ気モードにさせられた。

額の炎がゆらゆらと揺れている。

「……。」

「さっさとしろ

」

無言でなにかを訴えるツナを無視してリボーンは促した。

ため息をつくとツナはグローブに炎をともして鳥に近づけた。
鳥はゆっくりと炎に近づき、炎を食べはじめた。

「やはり、そうですか…」
ロンジは納得したように言った。

鳥は気持ち良さそうに炎を浴びていた。

「…お前、この炎が好きか?」

「キュルルル」

鳥の安心したような鳴き声にツナは優しい笑みを浮かべた。

「そいつ、金色で綺麗だなっ」
山本が鳥を見て言った。

「十代目と同じ目の色か…」
獄寺はツナと鳥を見比べて観察していた。

ークンクンッ

突然ツナのアニマルリング、ナッツが騒ぎはじめた。
ツナの炎に反応したらしい。

「…ナッツ」

ツナが呼びかけるとナッツが姿を現した。
あくびをしながらのびをして尻尾をゆらゆらと動かした。

「ガウッ」

ナッツは鳥を見て少し驚き、じっと鳥を見ていた。
鳥はゆっくりとナッツに近づき、ナッツのたてがみを毛づくろいし始めた。

「ガウッ」

「キュルルル」

どうやらナッツと鳥は仲良くなったらしい。
ベッドの上で遊びはじめた。

「これが…噂の匣兵器…」

ロンジが驚いた様子でナッツを見ていた。
見た目は小さなライオンだが、秘めた力を持っている。
ロンジはそう感じた。

「おいツナ。こいつの名前どうすんだ」

リボーンが鳥を指差し言った。
名前をつけるのも飼い主だ。
さすがに名前がないのはかわいそうだ。

「名前か…なににしよう」

ツナは鳥を見て考えた。
しばらく考えたあと、ツナがぽつりと言った。

「…トンノ」

山本以外の全員が耳を疑った。

トンノとは、イタリア語でマグロを意味する。
つまり、こういうことだ。

綱吉
←
ツナ
←
日本語でマグロ
←
イタリア語でトンノ

「「「……」」」

山本を除く三人はこう思っただろう。

(安直すぎやしないか!!!!!)

しかしイタリア語もわからない山本は
「トンノ?ははっ、いい名前だな!」
と名前を褒めていた。

ツナは山本に微笑んだが、三人の反応がなかったので不思議だった。

「…いけないのか。」

超死ぬ気モードのツナは冷静沈着。
表情は崩さないが、不安になったらしい。

「いっ、いいえ十代目！とてもいい名前ですね！！」

「そそうですよ綱吉様！愛情が伝わってきます！！」

獄寺とロンジはツナが落ち込むといけないと、精一杯褒めた。
しかし、空気を読まないリボーンは聞こえないように本音を言った。

「…相変わらずネーミングセンスがないな」

しかしツナには聞こえていたらしく、あまり表情は変わらないが、
落ち込んでしまった。

額の炎が活気をなくしたかのようにゆらりゆらりと寂し気に揺れていた。
それを感じ取ったナッツも鳥も、急に元気をなくしてツナの膝の上でしょんぼりとしていた。

「じゅっ、十代目！！オレはいい名前だと思ってますよ！」

「私もそう思っております綱吉様！だからお気になさらず…」

「オレは気に入ったけどなあ、その名前！似合ってるぜ！」

三人のフォロー（山本は意味をわかっていないので、素直にいい名前だと思っている）もツナには効かず、気まずい空気が漂っていた。

「…寝る」

ツナは超死ぬ気モードのまま布団にもぐりこんだ。

ナッツと鳥も一緒に布団にはいり、閉じこもってしまった。

「「「……」」」

「どうしたんだツナ？大丈夫か？」

まだ状況もなにもわかっていない山本がうらやましくなる三人だった。

想像以上にツナは傷ついたらしい。

リボーンはため息をついてツナに話しかけた。

「ツナ、そんなことで落ち込むな。おめえがその名前でいいと思ったんならそれでいいじゃねえか」

「…お前が言ったくせに何言ってんだよリボーン」

布団の中からツナが言う。

リボーンは呆れたとばかりにまた大きなため息をついた。

この状況を、どうすればいいのか。
誰もなにも出来ず、ただ座っているだけだった。

しかし、この空気を壊してくれたのは、今だにすべてを把握できてない山本だった。

「おいツナ、なんでそんなに落ち込んでんだよ！オレはその名前好きだぜ？」

布団がぴくりと動いた。
山本は続けて言う。

「ネーミングセンスなんてどうだっていいじゃねえか。大切なのは愛情だぜ！精一杯かわいがってやることだぜ！周りが何と言おうと、そいつの名前はトンノだ！！」

「山本…」

ツナは布団から顔を出し、山本を見た。
山本は嘘のない笑顔だった。

額の炎が消え、ナッツたちも布団から出てきた。

「…ありがとう！山本！」

ツナは山本に感謝すると、鳥の目を見て言った。

「お前は今からトンノだ！」

鳥は…トンノは「キュルルル」と喜ぶように部屋を飛び回った。

ロンジは安心したように笑っていた。

獄寺も今日ばかりは山本に感謝した。

リボーンはにやりと笑った。

「ウライラ様！新しい情報です！」

ウライラの部屋に一礼して入って来た部下は、ソファーでくつろいでいるウライラに告げた。

「うん、なに？」

「沢田綱吉の情報です。ボンゴレが独自開発した一時的な命の囮兵器を、本物の生き物にするほどの炎を持つそうで…」

その言葉を聞いた瞬間、ウライラは不気味な笑みを浮かべた。

「そうかそうか！やっぱりすごいな、綱吉くん！」

ウライラは情報の書かれた書類を見てつぶやいた。

「その力は、僕のために使うんだよ。綱吉くん。」

側にいた部下も怯むほど、その時のウライラは不気味だった。

標的１４　ライオンと鳥（後書き）

ツナ「思ったんだけどさ」

リボーン「どうしたツナ」

ツナ「アニマルリングがあるのに、ボンゴレ匣なんて必要なのかなあ」

リボーン「知らねえぞ」

ツナ「そういえば獄寺くんのリングは瓜だけど、一緒にＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．も出てくるのかな？」

リボーン「さあな。管理人がアニメの記憶を頼りにつくってるダメダメ小説だからな。そこらへんはわかんねえんだろ」

ツナ「ふうん、へんなの」

リボーン「噂だが、管理人がアニマルリングとボンゴレ匣を一緒にしちまうとか言ってたぞ」

ツナ「え！リングの意味ないじゃん！！」

リボーン「う・わ・さ、だがな」

本気で迷ってます。↑

標的１５　第二関門“勇気”（前書き）

いい修行が思い付きません…

アイデアが浮かび上がらないですねえ

標的１５　第二関門“勇気”

すべての生き物に与えられた試練
己よりも勝る力を持つ者に
恐れず逃げず立ち向かうとき
心に芽生える小さな芽は
やがて大きな己を生む

「ほんとに休校させたんだな、リボーンの奴…」
ツナは配られたプリントを見ながらつぶやいた。
今朝、学校に行ったら突然、緊急集会が行われた。
「今後、しばらく休校します」

校長からの突然の言葉。
生徒たちは驚きを隠せなかった。
素直に喜ぶ奴、勉強ができないと嘆く奴など、様々だった。

プリントが配られ、詳細を見ると、
“常に勉学に励む生徒たちへの配慮”
と書かれていた。

絶対嘘だろ、金に目が眩んだんだろ、もしくは脅されたんだろ。
ツナはプリントの文を見てツッコミをいれた。

これはリボーンの仕業だ。
彼ならこんなことをするのは朝飯前だろう。

「学校が休みでよかったのな！ま、部活がないのはしっくりこねえけどな！」

隣で山本がバットを振るかまえをしていた。

「ほんとにてめえは野球馬鹿だな！自主練でもしてればいいじゃねえか！！」

獄寺がいつものように山本に言い放った。
二人の言い争い（主に獄寺が噛み付いているだけ）は日常茶飯事だ。
しかしその間に挟まれるツナには迷惑で仕方ない。

「綱吉くん！」

後ろから声をかけられ、その方向を見ると、結加が走ってきた。

「あれ、結加ちゃん！雑用済んだの？」

「適当に終わらせてきちゃった！」

結加はなかなか要領がいいため、よく先生に仕事という名の雑用を頼まれる。

「そういえば綱吉くん、さっきからあなたのことずっと見つめてるんだけど…」

「何が？」

「アレ。」

結加の指差す方を見ると、木の枝に主を待つ鳥がこちらを見ていた。

「えっ、トンノ！！」

ツナに気付いてもらえたのが嬉しかったのか、真っ先にツナの元へと飛んできた。

「キュルルルッ」

「なにしてんだよ。家で待ってなきゃだめだろ！」

ツナは困った様子でトンノの頭を撫でた。

「しかし、やけに外見目立ちますね」

獄寺はトンノを見て言った。

トンノはオレンジ色の目に金色がかった羽で、太陽の光できらきらと輝いている。

こんな風になったのはツナの炎のせいなのだが。

「ん、なんだこれ？」

ツナはトンノの足になにかが縛られていることに気付いた。

小さなメモのようなものだった。

すべての生き物に与えられた試練

己よりも勝る力を持つ者に

恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は
やがて大きな己を生む

「…は？」

ツナは紙に書かれた文章を読み、間抜けな声をあげた。

謎の文章。
まったく意味がわからない。

トンノの足に縛り付けてあったということは、誰かのいたずらだろうか。

ポケットにその紙を入れて、ツナは肩にトンノを乗せて帰宅した。

「よっ、帰ったか」

部屋には優雅にコーヒーを飲むリボーンとロンジがいた。

「さっそくだが、修行するぞ」

「え。いきなり！！？」

突然の修行宣言にツナは驚いた。

「なに言ってんだ。さっさと忍耐力つけねえと、おめえ死ぬんだぞ」

「そうなんだけどさ…」

あまりにも突然でツナは受け止め難かった。

今回はなにをするのだろうか。少しドキドキしながらリボーンの言葉を待った。

「今回は“宝探し”だぞ」

「……は？」

本日二回目のツナの間抜けな声だった。

前回は“鬼ごっこ”。

今回は“宝探し”。

何故子供のする遊びばかりなんだ、とツナは思った。

「今度は宝探しか？ははっ、楽しそうだな！」

「鬼ごっこん時も同じこと言ってたぞてめえ！」

「宝探しって…なにを探すんですか？」

結加がリボーンに聞いた。

「オレだぞ。オレを探せ」

「リボーンを探すの！？かくれんぼじゃん、それ！！」

「なに言ってんだ。オレは宝だぞ」

偉そうにリボーンが言った。
まるで自分を敬えとでも言っているかのように。

「場所は並盛中学だ。一時間後に行うから来いよ」

そう言うとリボーンは窓から飛び降りて行ってしまった。

「そんないきなり…！！」

ツナは頭を抱えて慌てていた。

「今のうちに、私がルールを説明しましょう」

ロンジが“宝探し”の説明をし始めた。

「まず、捜索範囲は並盛中学の中。校舎の中や校庭などです。制限時間は夕方の5時。それまでにリボーンさんを見つけたら合格…とのことです」

「並盛中学か…教室の中も、ってことだよな」

「ははっ、大変だなあ」

山本が脳天気に笑った。

「宝探しってことは、相手は動かないんですよね。かくれんぼじゃないっていうのはそういう事なんでしょうか」

結加がぽつりとつぶやいた。

「一時間後って…夕方まであんま時間ないじゃん！」

時計を見てツナが叫んだ。

「まあまあ、みんなで探せばすぐ見つかるって！」

「そうですよ十代目！オレも一生懸命がんばります！！」

「わたしも手伝うよ綱吉くん！」

三人はツナの力になろうと意気込んだ。
そんな三人にツナは感動した。

「いいお仲間ですね、綱吉様」

ロンジが隣で微笑みながらツナに言った。

「…はい」
ツナもつられて笑った。

みんながついている。
一緒に頑張ってくれる。
それだけで嬉しかった。

一時間後。
リボーンの言うとおり、ツナたちは並盛中学へとやってきた。
学校には生徒も教員もいない。

なぜなら突然休校になったから。
このためでもあったのかとツナは納得した。

「では、今から一時間半。がんばってください」

3：30PM　宝探しスタート

「闇雲に探しても時間の無駄です。手分けして探しましょう」

結加が学校の地図を取り出して言った。

「さすが結加ちゃん頭いい！！」

計画性のないツナは結加の考えに感心した。

「まず、山本くんは体育館と体育館周辺。獄寺くんは校庭とプール。
綱吉くんはこっちの校舎で、わたしは反対の校舎を」

「なんでお前が仕切ってんだよ！それは十代目のお役目だろうが！
！」

話を進める結加に獄寺は刃向かった。

「ま、まあいいんじゃないかな獄寺くん！オレこういうの苦手だし…」

ツナは苦笑いしながら獄寺をなだめた。

「じゃ、行ってくるぜ！」

「こっちがおわったらすぐ向かいますんで！！」

「またあとでねっ」

山本、獄寺、結加はそれぞれの場所へと移動した。

その場に残されたツナは、学校の地図を見て思った。

（オレの探す所ってまさか…！！）

綱の頬を冷や汗がたらりとたれた。

「おーい、小僧！出てこいよー」

出てくるはずない相手を呼びながら山本は体育館を探していた。

体育倉庫の中を探していたが、まったく見つからないので側にあったマットに寝転んだ。

「ここにはいねえんじゃねえのか？」

山本は笑いながら独り言を言った。

しかし、この男の勘ははずれてはいなかった。

「くっそー、全然見つかんねえ！」

獄寺は草むらの中をただひたすら探していた。

「瓜！お前も手伝えよ！」

こんな広範囲を探すのは不可能だと判断した獄寺は、瓜にも手伝わせようと瓜を出していた。

しかし瓜は木の枝の上で寝ているだけだった。

校庭には獄寺の怒る声だけが響いていた。

「やっぱいないなあ」

教室をひとつひとつ丁寧に、結加は捜索していた。

「でもこれって、綱吉くんが見つけないとあんまり意味がないような…」

そう言いつつも結加はリボーンを探しつづけた。

なにもしないよりはましだと判断したからだ。

「リボーンどこに隠れたんだよ…。絶対トイレや掃除道具を入れるロッカーになんかいるわけないし…」

あんな俺様なリボーンが汚いところにいるはずがないとツナはわかっていた。

しかしまったく見つからない。

廊下の角を曲がろうとすると誰かとぶつかった。

「わっ」

「おっと」

ぶつかった反動で倒れそうになったが、相手に腕をつかまれて平気だった。

「すっ、すいません!!」

「あはは、大丈夫だよ。君こそ大丈夫?」

長身の制服を着た男子生徒はツナに笑いかけた。

ツナはその顔に見覚えがあった。

(あれ…この人どっかで…)

ツナがうつむいて思い出そうとしていると、男子生徒はまた笑いながら言った。

「気をつけてね、沢田綱吉くん」

「…!!?なんで名前……」

ツナが顔を上げて問うと、そこにはもう男子生徒の姿はなかった。

「いない…。先輩とか…なのかな」

ツナは疑問を残しつつも捜索を再開した。

「…あとはここだけかあ」

ツナはドアの前に立ちながらため息をついた。

“応接室”と書かれたそこは、ツナが苦手とする人物のいる場所だった。

（学校が休みでも雲雀さんって絶対ここにいる気がするんだよな…）

ツナは校舎を探すとき、応接室を後回しにしていた。

行くのが怖かったから。

しかし他の場所にはリボーンはいない。

自分の探すべき場所はここしか残されていなかった。

（どうか雲雀さんがいませんように…！！）

そう願いつつツナは一応ドアをノックした。

しかし、ツナの願いが叶うことはなかった。

「誰？」

（い、いたあああああああ！！）

一気に緊張感が上がり、喋ることも動くこともできない。

するとドアが開き、中からツナの苦手とする雲雀が出てきた。

「…なに君。なんで校舎にいるの」

「ひっ、雲雀さん！オレはただ…」

「咬み殺す。」

「ひいいいいい！！！！」

ツナは動けなかった。逃げたかった。

しかしリボーンを探さなければならない。

トンファーをかまえる雲雀は怖かったが、後でリボーンに怒られるのも怖い。

ツナは殴られるのを覚悟して雲雀に言った。

「…あのっ、オレ今リボーンを探してて…！！ひ、雲雀さん知りませんか！？」

足が震える。怖いものは怖い。
しかしこのままでは駄目だとツナは自分を奮い立たせた。

「赤ん坊？赤ん坊ならここにいるけど」

雲雀がソファーを指差して言った。
そこにはくつろぐリボーンがいた。

「チャオっす！どうやら時間内に見つけたみたいだな」

「リ、リボーン！！」

リボーンを見た瞬間、ツナは気が抜けてその場に座り込んだ。
ひどく疲れた。精神的に。

「十代目っ！見つかりましたか！？」

「ツナ～大丈夫か？」

「綱吉くんっ、何で廊下に座ってんの！？」

自分の場所を探し終えた三人が、ツナの元へ駆け付けた。

「全員揃ったみたいだな。合格だぞ」

リボーンがソファーに座ったまま言った。

その言葉を聞いて全員が喜んだ。

「君達なんなの。もしかして群れてるの？」

雲雀がさらに険しい顔で言った。

リボーンを除く全員が身の危険を感じた。

「ていうか学校は休みだよ。不法侵入だよね」

「えええええ！？ささささっき校舎に人がいましたけどっ！！」

ツナは慌てて言い返した。

すると雲雀は少し驚いた様子で言った。

「なに言ってるの。校舎にいるのは僕と草壁だけだけど。まあ、今草壁は買い出しに行ってるけど」

「…え？だってさっき、生徒が一人いました…けど……」

ツナは先程ぶつかった男子生徒を思い出しながら言った。

「まあ、いいじゃねえか。とにかく合格だ。よかったな、ツナ」

「こ、今回は何を試したんですか？」

獄寺がリボーンに聞いた。

「今回は“勇気”を試させてもらったぞ。オレがここにいたのは、ツナが雲雀を苦手としているからだ。それを勇気を出して克服してオレを見つけさせたってわけだ。一応ツナに今回の修行のヒントを出しといたはずなんだがな」

「ヒント!?そんなの知らないよ!!」

「そんなはずねえぞ。トンノに渡しといたからな」

「…トンノに?」

トンノからは何ももらってないと言おうとしたが、ツナは何かを思い出してポケットから紙を取り出した。

「それって、トンノの足に縛り付けてあったやつですよね?」

獄寺が聞くとツナは頷いて紙に書いてある文章を読んだ。

すべての生き物に与えられた試練
己よりも勝る力を持つ者に
恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は
やがて大きな己を生む

「この“芽”ってまさか…」

「そうだ。それが勇気だ」

「ははっ、これってツナと雲雀のことだったのか」

早く気付けばよかったとツナは後悔した。
そうすれば学校全体を探さないでよかったのだ。

「ねえ、そろそろ散らないと咬み殺すよ」

話を聞いていた雲雀が痺れを切らしてトンファーをかまえて言った。

「うわっ、待ってください雲雀さ…」

ーチクッ

「いてっ…」

腕に痛みが走る。痛みはだんだん増し、ツナを襲う。

「どうした、ツナ」

リボーンがツナの元へ跳んだ。

「っまた…痛み…がっ…」

ツナは腕をおさえて痛みに耐えていた。

「大丈夫ですか、十代目っ」

獄寺たちもツナへと駆け寄る。

それを見ていた雲雀が、何かに気付いた。

「…なにか来たよ」

雲雀はトンファーをかまえて校庭へと走って行った。

「…っ待ってください雲雀さん！」

ツナは痛みに耐えながら雲雀を追いかけた。

そしてツナの後をリボーンたちも追う。

校庭に出てみると、全員が言葉を失った。

そこには無数の人。
手には剣や銃をかまえていた。
間違いなく、自分たちを狙っている。

ツナの腕の痛みが危険信号のように痛みを増す。

第二関門“勇気”クリア

標的１６　ボス、出現（前書き）

戦っている文章が下手くそです…

説明できません…！！！

それでもよろしければ…

どうぞ！

標的１６　ボス、出現

ズキズキと痛む腕。

まるでなにかに絞められているかのようだ。

その痛みは鎖を拠点として全身を駆け巡りツナを苦しめる。

しかし、いつまでもその痛みに苦しんではいられない。

目の前には敵。

圧倒的な数だ。

ツナたちは黙ってそれを見ていた。

「お前たち、ボンゴレだな？」

敵の隊長であろう男がツナたちに問うた。

ツナたちは何も言わずに男を見る。

「ボスの命令により、沢田綱吉とボンゴレリングを回収しに来た。大人しく渡せ」

男は偉そうに手を差し出した。

「誰がてめえなんかに渡すかよ！！」

「そうだぜ。ツナもリングもオレ達の大切なもんだからな！」

「僕には関係ないけど、並盛中で暴れるなら咬み殺すよ」

獄寺、山本、雲雀、結加がツナの前に立ちはだかる。

それを見ていた隊長が口を開いた。

「それならば、邪魔なものは消させてもらう」

その言葉を合図に敵は容赦なく襲ってくる。

獄寺たちもそれに挑む。

それぞれの匣に炎を注入し、匣兵器を出した。

「フレイムアロー！！」

獄寺が放つ後、山本が攻撃を仕掛ける。

「攻式八の型　篠突く雨！！」

二人の攻撃により敵はばたばたと倒れていく。
しかしその後ろからまた敵が攻めてくる。
これではキリがない。

「ちっ、どんだけいんだよ！！」

「数が多すぎてわかんねえのな」
二人は敵の多さに驚いたが、怯むことなく攻撃を仕掛けた。

「数が多すぎるのよ馬鹿！！」

結加は敵の攻撃を避けながら叫んだ。
敵の多さにだんだんいらいらが増していた。

「一応女の子なんですけどっ！！」

結加は掌に力を集中させ、思い切り光の玉を投げつける。
結加の怒りは強力な力となっていた。

トンファーに炎を纏い、雲雀は次々と敵を倒す。
しかしあまりの数の多さに雲雀のトンファーでは限界があった。

「行くよ、ロール。形態変化だ」

雲雀の声でロールは手錠へと形を変えた。
そして雲雀は炎の力により手錠を増殖させ、敵を拘束していった。

「君達、いい加減にしなよ。この僕に逆らったことを…後悔するんだね」

雲雀はそう言いながら敵に不敵の笑みを向けた。

三人が敵と戦っている間、ツナは痛みと戦っていた。

(早く行かなきゃ…みんなが…)

しかし痛みはおさまらず、立ち上がることができない。そんなツナに、敵の攻撃がふりかかる。

「っわ!!」

ツナは敵の剣を避けたが、その衝撃によりさらに腕は痛みを増した。
すると再び敵の剣がツナを襲う。
避けきれないとツナは目を閉じた。

―パァンッ

敵の剣は弾によって弾かれた。
そして敵の断末魔が聞こえた。
目を開けると、そこには小さな赤ん坊が一人。

「油断すんじゃねえぞ。ダメツナが」

リボーンは背を向けて言う。

「あいつらが頑張ってんのに、おめえ何ねっころがってんだ。苦しいのはおめえだけじゃねえんだぞ」

その言葉にツナは、はっとした。

自分は痛みに苦しんでいる。
しかし、獄寺も山本も雲雀も結加も戦いで苦しんでいる。
みんな、戦っているのだ。

自分だけではない。
みんな、同じなのだ。

ツナは痛みに耐えながら立ち上がった。
今でも激痛が襲い、冷や汗がたれる。
しかしそんなものに負けてられない。

「…オレだけじゃない。みんな、一緒なんだ」

ツナは手にグローブをはめて、死ぬ気丸を飲み目をつぶる。
次の瞬間、額とグローブに炎がともった。

その強い炎に皆が圧倒された。
強く、美しい炎。

敵はそれを見て怯んだが、一斉に襲い掛かった。

ツナは炎の噴射でそれをかわし、敵に向けて炎を放つ。

次々と倒れる敵、次々と襲い掛かる敵。

ツナは匣へ炎を注入する。
そして現れたのはツナの目と同じオレンジ色のライオン。

「ガオッ！」

ナッツは威勢よく吠える。

「行くぞナッツ。形態変化　攻撃モード（モードアタッコ）！！」」

ナッツはみるみる変化し、？世のガントレット（ミテーナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）へと変化した。

ツナは自分に襲い掛かる敵目掛けて攻撃する。

「ビックバンアクセル！！」

その圧倒的な力に敵は大きなダメージを受け、倒れ込んだ。

獄寺たちも、襲い掛かる敵を見事に倒した。

敵がいなくなったのを確認すると、ツナはその場へ倒れた。

敵と同時に痛みと戦っていたツナは、力を大量に消費していた。

「十代目！！」

「大丈夫か、ツナ！」

獄寺と山本、結加がツナに駆け寄る。

雲雀はマイペースに歩み寄る。

「…体力を消費しまくってんな」

リボーンはツナの苦しむ姿を見て言った。
息は荒く、大量の汗をかいていた。
歯を食いしばって痛みに耐えていた。

「うわ、すごい！こんなに僕の部下たちを倒したのかあ！！」
突然、知らない男の声がした。
全員がその男を見る。

ツナはその男を見て言葉を失った。

男は並盛中の制服を着ている。
ツナが先程廊下でぶつかった男子生徒だった。

「…お前は…さっきの…！！」

男はツナを見て微笑んだ。

「こんにちは、綱吉くん。久しぶりだね」

ツナは男の顔を見て違和感を感じた。
なにかが引っかかる。
腕の痛みが鋭く身体を貫いたとき、ツナは思い出した。

「っお前…夢に出てきた…」

「そうだよ。やっと思い出してくれた？さっきぶつかったとき、ばれたと思ったんだけどなあ」

男はへらへらと笑って言う。

「ツナ…あいつが呪いをかけた奴か？」

リボーンの問いにツナは頷いた。

ツナの夢に現れ、ツナに呪いをかけた男。
そいつが今、目の前にいる。

ツナは悪寒を感じた。
危険だと、ツナの超直感が告げる。
近づいてはならないと。

「えっと～、はじめましてボンゴレのみんな。僕はアッジョルナーレファミリーのボス、ウライラです。よろしくね」

ウライラは笑みを浮かべながら言った。

ツナたちに衝撃が走る。

目の前の男が、ツナに呪いをかけた男が、

自分たちを襲ったマフィアのボス。
全員何も言えず、ただ黙ってウライラを見ていた。

「おい、てめえ」

その沈黙を破るように、リボーンがウライラに話しかけた。

「なに?アルコバレーノのリボーンさん」

「なにが目的でツナを狙う」

リボーンは淡々とウライラに問う。
しかしその姿からは殺気が漂っていた。

「そんなに殺気を出さないでくださいよ。僕はただ、君達に会いに来ただけなんだよ」

「会いに来ただけの奴が攻撃をしかけてくるわけねえだろ!!」

獄寺がウライラにそう叫んだ。

「まあ、君達の力を見てみたかったんですよ。ごめんね」

まったく悪気がないかのようにウライラは謝った。

「まあ、僕の目的は言えないんだけど、ちょっとだけなら教えてあげますよ。僕はね、ただ力が欲しいだけなんだ。ボンゴレリングの、真の力をね」

「真の力？」

リボーンがウライラに聞き返す。
ウライラは続けて言った。

「君達の持つボンゴレリングは、まだ真の力を出してないんですよ。その力を引き出せば、すべてを手に入れたも同然。…でもね」

ウライラはツナを見つめる。
ツナはウライラの目を見て身体が強張った。

「その力を引き出すには、綱吉くんの力が必要なんです。綱吉くんは、僕の目的の鍵となっているんですよ」

「十代目が…鍵…？」

「まったく意味がわかんねえのな」

獄寺と山本はウライラの言うことが理解できなかった。
リボーンは黙って聞いていた。

「これ以上は言えないかな。ごめんね。」

「ツナに呪いをかけた理由はなんだ」
リボーンは未だ殺気を放って問いかけた。

「人って、追いつめるとなんでも言うことを聞くようになるでしょう？だから脅してみたんだよ。痛いでしょ？それ」
ウライラの目は冷酷だった。
なにも感じない、人間ではないような目。

「そんな理由で十代目を…っ！！」
「落ち着け獄寺。あんな奴になに言っても無駄だって」
山本は獄寺をなだめた。
獄寺は悔しそうにうつむいた。

「今日はもう帰りますよ。君達の力も見れたし。ねえ、綱吉くん」
ウライラはツナに話しかけた。
冷酷な視線とオレンジ色の視線がぶつかる。

「死ぬ前にちゃんとした判断をするんだよ。君が死んでしまっては意味がなくなっちゃうからね。…まあ」

ウライラが笑う。心のない笑み。

「無理矢理にでも、君とボンゴレリングを手に入れるけどね」

ウライラが指をパチンと鳴らすと、辺りが白い煙に覆われる。

煙が晴れると、今までいたウライラと大量の倒れた敵は一人残らず消えていた。

「…奴の力はかなり強力ね」

結加は悔しそうにつぶやく。

「自分のためなら手段を選ばねえ奴ってことだな」

リボーンの言葉に結加は頷いた。

「オレの…力ってなんだよ…そんな力…オレにはねえ…っ」

ツナは苦しみながらも言う。

ようやく痛みが引きはじめる。

呼吸もようやく正常になり、深呼吸をする。

「奴の言っていたことも否定出来ねえ。ボンゴレリングにはまだ謎が多い。おめえの力もな」

リボーンが静かに言う。
その姿からは嘘が見られなかった。

「とにかく、家に帰るぞ。もうここには用がねえ」

ツナは額の炎を消し頷いた。

早く、修行を完了させなければならない。

自分が痛みに耐えることが出来れば、リングとみんなを守ることができる。

ツナは修行に励むことを決意し、拳を握りしめた。

リングがキラリと輝いた。

標的１６　ボス、出現（後書き）

ツナ「結局アニマルリングもボンゴレ匣も両方出すんだって」

獄寺「意味わかんないスよね！どっちかにできないんでしょうか」

山本「まあまあ、知識が少ない中で書いてんだから仕方ないだろっ」

わたしの中で山本は救世主。
ツナも救世主。
獄寺は……時には救世主。↑

標的１７　消えた大空（前書き）

…あ、
タイトルこんなんですけど、
大丈夫ですよ！（笑）

消えた消えたけど
単純な消えたであって…

…どうぞ！（笑）

標的１７　消えた大空

うつらうつらと眠る鳥。
全身は金色がかった美しいもので、
得も言われぬ魅力がある。

ふと、トンノの目が開く。
オレンジ色の、暖かい目だ。

再びトンノの目が閉じる。
かすかな炎を残して。

ズガアアアアンッ

派手な音を立てたのはいつもの時間、いつもの場所。

その音の根源、リボーンは銃をくるりと指でまわして立っていた。

そしてその弾の的となったのは、毎日毎日リボーンの銃の被害を受

けるツナであった。

「ちょっ、もう少し寝てたっていいだろ!?」

ツナは弾を避けた拍子にぶつけた頭をさすりながら言った。

「毎日同じこと言ってんじゃねえぞダメツナが。さっさと修行するぞ」

リボーンは再び銃の標的をツナに定める。

ツナは慌てて謝罪する。

これがいつものこととすると、なんとも嘆かわしい。

「今日はなにするんだよ。まさかまたお遊び?」

朝ごはんを食べ終えたツナはベッドでくつろぐリボーンに聞いた。

「さあな。今日は山に行くんだ」

「や、山?」

リボーンはツナに小さなバックを渡した。

「山登りだぞ、ツナ」

「……山登り？」

これも遊びなのだろうか。

しかし今までの修行に比べれば幾分マシだろう。

「そのバックを持っていけ。さっさと出かけるぞ」

リボーンはベッドから飛び下りてスタスタと歩いていった。

（今回はなんだろう）

ツナは嫌な予感がしてたまらなかった。

その嫌な予感は思わぬ方向へと進むものだった。

「おはようございます十代目！」

「よっ、ツナ！」

玄関では獄寺と山本が笑顔で迎える。
二人は手ぶらだった。

「あれ、二人とも手ぶら？」

「だって今日は山に散歩しに行くんだろ？オレは時雨金時と匣があれば十分だな！」

山本は肩にかけてある時雨金時と匣を取り出して言った。

「獄寺くんは？」

「オレは一応腹ごしらえの食い物と匣を」

ポケットから出したのは小分けのチョコレートが幾つか入っていた。

「ツナはそのバック持ってくのな！」

山本はツナの持つ小さなバックを指差し言った。

「リボーンが持ってけって言うからさ」

ふと、何が入っているのだろうとツナは気になった。
ツナがバックを開けようとすると、リボーンが三人に声をかけた。

「さっさと行くぞ」

隣にはいつの間にかロンジが立っていた。
リボーンにうながされるまま、三人は歩いてあとを追った。

目の前にそびえ立つ山。
三人はそれを見て呆気にとられていた。

「さっ、これに登るぞ」

「そんな簡単に言うなよ！なんか危険な感じがするんですけど！」

ツナは山の至るところを見て叫んだ。

まわりには崖。
ところどころ土砂崩れが起きている。
木は薙ぎ倒され痛々しい跡を残していた。

「二人には山に散歩って言ってたんだろ!?これじゃ二人を騙したことに…」

「なんねえぞ」

ツナの話をリボーンは遮った。

「見てみろ」

リボーンに言われ二人を見てみると、自分なら有り得ないだろう発言をしていた。

「すげえ山だな!楽しい散歩になりそうだなっ」

「不思議な生き物の匂いがするぜ!」

山本と獄寺の言葉にツナは固まった。
あまりにもマイペースだからだ。

(…まあ、これも二人のいいところだよな)

ツナは笑いながら二人を見ていた。

「ちょっとどこまで行くんだよリボーン！もうへとへとだよーっ」

山を登りはじめて数時間。
頂上にたどり着く気配はない。
体力の戻りつつあるツナには過酷だった。

「うるせえぞ。さっさとしやがれ」

リボーンは容赦なくツナに言い放った。
そんなリボーンをツナは怨んだ。

（お前ロンジさんの肩に乗ってるから疲れないんだよ！）

しかしロンジは疲れた気配を見せない。
獄寺も山本もまったく息が上がっておらず、平気そうな顔をしている。

「大丈夫ですか十代目？」

「ほとんど病み上がりだもんな。休憩でもするか？」

リボーンとは反対に二人はツナに優しく声をかけた。
あまりの感動に二人が神に見えたほどだ。

「う、うん。大丈夫…」

しかしツナはあまり大丈夫じゃなかった。
息が上がるのも疲労のせいだけじゃない。

（時々めまいがするくらいだけど…）

頭がくらくらする。
視界も少しぼやけていた。

だんだんみんなとの間に距離が開く。
すると、頭上から羽の羽ばたく音が聞こえた。

「キュルルル」

「え、トンノ！？」

トンノは降下してツナの肩にとまる。
どうやらついて来たらしい。

「家にいろって言ったのに…」

ツナは苦笑いしながらトンノを撫でる。
しかしトンノが来てくれたことは素直に嬉しかった。

「お前はいいなあ。羽があるから飛べるじゃないか」

そう言うとツナはみんなに追いつこうと歩を早めようとした。

すると、視界が歪んだ。

ぐにゃりと全てが淀む。

思考が停止する。

天と地がひっくり返る。

誰かの叫ぶ声。

何かが羽ばたく音。

無重力の世界。

のばされた手には
空気がふれるだけ。

意識は闇に吸い込まれた。

木々のざわめく音
川のせせらぐ音

意識を集中させると、
次第と五感が戻ってくる。

身体を動かそうとすると、

痛みがそこらじゅうに散る。

ツナは重たい目を開けた。

広がる大空。
しかしそれはオレンジ色で、
どこかでカラスの鳴く声がする。

身体を起こすと、そこは河原だった。
何が起こったのかわからずただ辺りを見渡す。

「…ここは？」

先程いた場所とはまったく違う景色だ。
よく見ると、全身が水で濡れている。

「キュルルル！！」

突然隣から鳴き声が聞こえた。
トンノが羽を羽ばたかせながら全身を震わせる。
すると、ツナと同様にトンノも水で濡れていた。

「…まさか、お前がオレを助けてくれたのか？」

ツナがトンノに話しかけると、トンノは肯定するようにツナを見つめた。

「…そっか。ありがとな」

トンノは嬉しそうにツナの頭上をぐるぐると飛び回る。

しかし、ツナは驚いた。

トンノの身体に、ツナを運べるような力があるのか、と。

（…もしかしたら）

トンノには、あるのかもしれない。

不思議な力が。

ツナはそう思わずにはいられなかった。

立ち上がろうとすると、めまいと痛みが邪魔をする。

身体中には切り傷や、かすり傷がある。

頭を強く打ったのだろうか。
鈍い痛みが止むことなく続いていた。

「…どうしよう」

どうやら崖か急な斜面から川に落ち、流されてきたようだ。
まわりには人の気配はない。

身体がぶるりと寒さで震える。
全身びしょ濡れなのだ。

とにかく暖をとろうとツナは燃えるようなものを探しに行った。

「じゅ、十代目えええ!!!」

ツナが落ちた。
自分がいながら。
守れなかった。

「獄寺落ち着け!」

山本がなだめるが獄寺は落ち着かない。
自分の尊敬する人が、ついていくと決めた人が消えたのだ。
落ち着けるわけがない。

「十代目を探しに行く！はなせ！」

「んなこと言ったって、お前も落ちる気かよ！」

「うっせえ！お前は十代目のことが心配じゃねえのかよ！」

獄寺はひどく取り乱していた。
はたから見ればこれは修羅場同然だろう。
しかし、その空気を一変させたのはリボーンだった。

「しっかりしやがれ、獄寺」

その一言であたりが静寂に包まれる。

「おめえ、ツナの右腕なんだろ。右腕が取り乱してどうすんだ」

獄寺は黙ってそれを聞いていた。

「右腕なら、右腕らしく主人を信じろ。ツナは死なねえ。それくらいわかってんだろ」

リボーンはにやりと笑った。
獄寺はやっと正気に戻った。

「…そう…ですよね！十代目はお強い方ですもんね！」

「そうだぜ獄寺！慌てたって意味ねえぜ！」

山本が獄寺の肩を叩く。
不意に叩かれた獄寺は転びそうになり、山本に食ってかかった。

「これくらいで取り乱しちまって、まだまだだな」

「しかし、あの方達は綱吉様をとても慕っていらっしゃるのですね」

リボーンとロンジが笑いながら獄寺と山本を見る。

「しかし、この状況で…修行を行うのですか？」

「ああ。ツナが強くなるためだ。しかも、これは結構いい修行になるはずだ」

リボーンはツナの落下した場所を見つめた。

「強くなるんだぞ、ツナ」

仲間を守るために。

3：32PM　修行スタート

その内容は、ツナは知らない。

標的１８　第三関門“カピターレ”（前書き）

タイトルは…まあ、
読めばわかりますよ！

なんか長くなりました…

標的１８　第三関門〝カピターレ〟

荒む天気　荒む空気
それは光を見失った心の暴走
しかしそれを包みなだめるのは
広く大きな晴れ渡る空
その優しい空に触れたとき
癒され浄化されるとき
完全な大空があらわれる

「キュルルル」

トンノがツナの元へと寄る。
足で薪をつかみ降り立つ。

「ありがとう」

ツナはトンノから薪を受け取り頭を撫でる。

ツナは今一人だ。
どうやら崖から落ちたらしい。
トンノが助けてくれたらしく、無事だったのだが。

びしょ濡れの身体を暖めるため火をつけようと、ツナは薪を探していた。

すると、偶然にも小さな洞窟を見つけた。

熊や何か獣がいるかと思えば、そこはからっぽだった。

いつ、救助が来るかもわからない。
ツナは野宿を覚悟して洞窟へ入った。

薪を集めたはいいが。

「火…どうしようか」

死ぬ気の炎で大丈夫だろうか。
死ぬ気の炎は超圧縮エネルギーだ。
だが薪に燈せば火として働くかもしれない。

ツナは死ぬ気丸を飲んで、超死ぬ気モードへと変化する。
グローブに炎をともして薪に触れる。

すると、炎は薪へとうつり、パチパチと音をたてて燃えはじめた。
その炎を重ねた薪につぎつぎとうつし、ひとつの大きな炎になった。
それはとても暖かかった。

「ほら、トンノおいで。」

ツナはトンノをひざの上に乗せてトンノの羽を乾かした。

（一応超死ぬ気モードにはなれるけど…いつもより体力を消費してる。飛ぶことは不可能か…）

超死ぬ気モードを無駄に維持するのはよくないと思い、炎を消そうとした。

「…あ。トンノに炎あげとくか」

ツナはグローブの炎をトンノに差し出す。
トンノはお腹が空いていたのか、沢山炎を吸い取った。

「キュルルル」

「お腹いっぱいになったか」

トンノがお腹いっぱいになったのを確認すると、ツナは炎を消した。
意外と体力を消費したらしい。
ぐったりと疲れてしまった。

「これからどうしようかなあ」

ふと、ツナはリボーンに渡されたバックを思い出した。
川に流されたとき、運よくバックは流されなかったらしい。

チャックを開けて中身を見ると、
一枚の紙、錠と鍵が入っていた。

錠にはなにかが書いてあるが、錆びていてあまり見ることができない。

紙には、また詩のような文が書かれていた。

荒む天気　荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは
広く大きな晴れ渡る空
その優しい空に触れたとき
癒され浄化されるとき
完全な大空があらわれる

今までとおなじように、なにか意味があるのだろう。
しかし考えようにも頭が働かない。
鈍い痛みがツナの頭を働かせようとしない。

しばらくツナは紙を眺めていたが、まったくなにも思いつかないので見るのをやめた。

「第一、勉強が苦手なオレにこんな読解力の必要そうな文の意味がわかるわけないだろ…」

地面に紙と錠、鍵を並べてみた。
しかし繋がるものはなにもない。

普段考え事をしないツナはそれを考えるだけでお腹が空いてきた。

「…お腹、空いちゃったなあ」

バックの中を探ったが、食べ物らしきものは見つからない。
ツナも食べ物を持っていなかった。

どうしようかとツナが考えていると、ひざの上で大人しくしていたトンノがいきなり羽をばたつかせ、洞窟の外へと飛んでいってしまった。

「…トンノ！？」

ツナが呼びかけると、トンノは洞窟の外で一度ツナを見つめ、再び飛んでいった。

「…散歩でもしたかったのかな」
すぐに帰ってくるだろうと、ツナは炎に近寄り身体を暖めた。

しばらくすると、鳥の羽ばたく音がした。
トンノが帰ってきたのだろうとツナは外を見た。

「…えっ!?トンノ……っ!!?」

ツナはトンノを見て驚いた。

トンノの口には魚がくわえてあった。
おそらく鮎だろう。
トンノは魚をくわえながらツナの前に降り立った。

「…トンノがとってきたの?」

トンノは「キュルルル」とくもった声で鳴いた。
魚をくわえているのでうまく鳴けないらしい。

「…オレにくれるの?」

するとトンノは差し出すように魚をくわえ直した。

その姿を見て、ツナは心があたたまった。
混乱していた頭も冷え、自然と笑みがこぼれる。

「あはは、…ありがとうトンノ」

トンノは嬉しそうに跳びはねた。

「たしか、こういうのって棒に刺すんだよね」

ツナは一本の枝に魚を刺し、炎で焼きはじめた。

トンノのくれた魚はおいしかった。

味こそはあまりしなかったが、いつもよりもおいしく感じた。

夜になると山は闇に包まれる。

いろんな動物が動き出し、危険性も一気に上がる。

（怖いなあ…早く助けに来ないかなあ）

歩いてみんなを探すことは不可能だ。

夜の山に迷い込めば、おそらく死んでしまう。

それに身体中の傷も痛む。

こんなので動いたら獣の餌食になるかも知れない。

トンノはひざの上で毛づくろいをしている。

「…あ、そうだ」

ツナはベルトにかけてある匣を見た。
そしてリングに炎をともし、匣へ注入した。

オレンジの炎に包まれて現れたのは天空ライオン（レオネ・ディ・チェーリ）Ｖｅｒ．Ｖのナッツ。

ナッツはツナの顔を見ると、嬉しそうにしっぽを振った。

「ガオッ」

「キュルルル」

トンノとナッツは挨拶のように鳴き、二匹で遊びはじめた。
その光景を見ていると気分も穏やかになる。

腕時計を見ると夜の１０時
ずいぶん遅い時間になってしまった。

動くこともできないし、怪我の治療もできない。
することがないツナは、体力をつけるために眠ることにした。

「ナッツ、トンノ。寝るからおいで」

ツナが手招きをすると、二匹はツナの腕の中にすっぽりとはまる。

乾かしておいた上着を布団代わりにして、ツナたちは眠りについた。

三日月と星がきらきらと輝いていた。

どれくらいの時間がたったのか。

炎は衰えることなく燃えているらしい。

あたりは静寂に包まれ、どこかでフクロウが鳴いている。

再び眠りにつこうとすると、ツナは嫌な気を感じた。

ザワザワと何かを感じる。

なにかが近づいてくる。

「グルルルルッ」

ナッツの威嚇するような声。

目を開けると、洞窟の外に無数の影。

寝起きの目ではその姿をしっかりととらえることができない。

目をこらすと、それは、
化け物と言っていいような姿をした獣。

頭は熊、両足は鷹のようなするどい爪をはやし、胴体は蛇というなんとも異常な姿をした化け物が数多く洞窟を囲っていた。

ツナは声も出ずそれを見ていた。

化け物たちは唸りながらツナを見ている。

このままでは殺されてしまう。

ナッツもトンノも傷つけたくない。

ツナはグローブをはめ、死ぬ気丸を飲み、超死ぬ気モードへと変わる。

少しふらつくが、今はそんなものは気にしていられない。

ツナは化け物たちを追い払うべく、洞窟を出た。

洞窟を出た途端、化け物たちはツナに襲い掛かる。

ツナはそれを避け、化け物の出方を伺う。

どうやら頭は悪いらしい。
化け物同士ぶつかり合って混乱している。

しかし攻撃力は高く、油断すると噛み付かれそうな速さで襲ってきた。

ツナは片っ端から襲ってくる化け物を炎をまとった拳で追い払った。

ナッツと一緒に戦う方が有利だが、自分の力が不安定な状態で戦わ

せたらナッツが怪我をするかもしれない。

「ガオッ…」

ナッツが空中で戦うツナを心配そうに見つめる。
ツナが万全の状態じゃないことも、ナッツは感じ取っていた。

身体の傷の痛みで素早く移動することが難しい。
化け物の数が多いこともある。
次々と化け物はツナに攻撃してきた。

めまいがする。
鈍い頭痛がつづく。

「…っ！！」

痛みに気をとられていると、化け物がツナに殴り掛かった。

避けきれず、まともにくらったツナは地面へと叩き落とされた。

痛みに顔をしかめると、またもや化け物の攻撃を受けた。
しっぽの遠心力により思いきり胴体を殴られる。

「かっ…は……！！」

あまりの衝撃に意識が飛びそうになる。
ここで死んではいけないとねばるが、身体がまったく動かない。

ゆらゆらと化け物の影が動く。

（…このまま…死んでしまうのか）

朦朧とする意識の中でツナはそう思った。

全ての化け物が襲い掛かる。

しかし、それをなにかが弾いた。

目の前には大きな炎。

暖かく、優しい炎。

ツナは重いまぶたを上げ、それを見た。

願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

（…なにかの…詩？）

自然と頭に流れ込む詩。
それが何だかわからなかった。

ツナの前に立ちはだかるのは
全身をオレンジの炎に包まれ、
金色に輝く、鳥。

「キュルルル」

「！？」

その鳴き声でツナは理解した。

「まさか…トンノか！？」

しかし普段のトンノとは大きさも姿も違う。

ツナの数倍の大きさで、頭の毛はたてがみのようになびき、炎をまとっている。

しかし、確実に。

（これは絶対に…トンノだ）

目が、確かにトンノの目だ。

オレンジの優しい目。

トンノの姿を見て、化け物は怯んでいたが、数匹のまとまりでトンノを襲った。

「っトンノ！！」

ツナが危ないと叫んだが、次の瞬間、言葉を失った。

トンノは翼を広げ、炎の出力を上げた途端、炎で化け物を縛り上げ、浄化させた。

化け物は一斉に襲い掛かる。
どうやらこの一撃で決めるらしい。

トンノは「キュルルル」と鳴き、全身の炎を化け物に浴びせた。

その力はあまりにも強力で、まわりの岩が砕け散った。

砕け散った岩は辺りにもおよび、ツナめがけて大きな岩が勢いよくとんでくる。

ツナは避けようと身体を動かしたが、あまりの岩の多さに動くことができない。

突然、目の前が暗くなった。

岩の弾く音がする。

しかし、痛みは感じられない。

バサッと布の音がした。

黒い布はみるみる形を変え、小さなライオンの姿になった。

「…ナッツ」

「ガオッガオッ」

ナッツはツナに擦り寄った。
小さなライオンにツナは助けられたのだ。

「マントでオレをかばってくれたのか…ありがとう」

ナッツは嬉しそうに、誇らしげにしっぽを振った。

そして、ツナはトンノを見た。

大きく美しい鳥はツナを見返す。

「…トンノも、ありがとな」

「キュルルルッ」

トンノはツナの怪我を労るように頭を擦り寄せる。

辺りがだんだん明るくなる。
朝日がのぼる。

ツナの炎が、
ナッツのたてがみが、
トンノの羽が、
きらきらと輝いていた。

「キュルルル」

トンノがツナに背を向けて鳴いている。

「…乗れっていうことか？」

「キュルルルッ」

トンノはそうだと言うように鳴く。

ツナはバックを持ち、トンノの背に乗る。

ナッツもトンノに飛び乗る。

トンノは翼を大きく羽ばたかせ、大空へ溶け込んだ。

美しい、三つの炎をまといながら。

獄寺は夜も眠れず、ただ空を見ていた。

あまりにツナのことが心配で、寝る気にもなれない。

獄寺たちは山の一角にテントをはり、一夜を過ごした。

獄寺が朝日を見た。

すると、何か輝くものがこちらへとんでくる。

敵か、とかまえたが、その姿には見覚えがある。

「っおい！全員起きろ！！」

獄寺の声でテントの中で寝ていた山本、リボーン、ロンジは何事かと出てきた。

全員が驚いた。

こちらへとんでくるのは
大きく金色に輝く鳥。

その背中には美しい炎がふたつ。

「十代目！！！！」

「ツナ！！！！！」

「やはり…ですね。リボーンさん」

「だな。」

トンノが優しく地上へ降り立つ。
背中には傷だらけのツナとその腕の中で眠るナッツがいた。

「大丈夫ですか十代目！」

獄寺に支えられてツナはトンノから下りる。
するとトンノは元の大きさに戻り、リボーンの目の前に立った。

「…ふっ、そうか」

トンノの目を見てリボーンは状況を理解したらしい。
ロンジもリボーンの反応でわかったようだ。

「…心配かけて、ごめん」

ツナも超死ぬ気モードをといて謝る。

「いえっ、こちらこそ…お守りできなくてすいません！！」

「無事でよかったぜ、ツナ！」

二人の暖かい言葉にツナは心が暖かくなった。

「ツナ」

リボーンがツナの名を呼ぶ。
叱られるだろうとツナは覚悟した。

しかし。

「合格だ」

「え？」

リボーンの口から出たのは、お咎めの言葉ではなかった。

「合…格って…」

「修行のことだ。よかったな」

ツナはなんのことかまったくわからなかった。

「お前は一人になって、焦った。しかし、冷静さを取り戻し、落ち着いて行動した。それにより、自分が安心してリラックスするだけじゃなく、まわりにも影響させたんだ」

トンノも、ナッツも。

「ま、現に今、獄寺たちにも影響してるがな」

リボーンは笑いながら言う。

「そして今回、トンノの力を引き出すことに成功した」

「トンノの…力？」

化け物を見事に倒した、あの力だとツナはわかった。

「トンノはお前の力で実態化した。だから力もそれなりに強い。だがそれを引き出すのが難しいんだ」

トンノは一時的にしか実態を持たないものだった。
しかし、ツナの力により実態化した。
それにより、力もツナと同様炎を使うものとなったらしい。

その力を引き出す方法は不明。
しかし、思い当たることは、ひとつ。

「誰かを守りたいと思う心だ」

「心…？」

ツナは仲間を思うことで、守りたいと思うことで強くなる。

ツナの力で実態化して大空属性の力を得たということなら、その力を引き出す引き金はツナと同じだろうと、リボーンは推理した。

「今回の修行は“冷静”“リラックス”“安心”だ。この三つはマフィアには特に重要であって、一部では“カピターレ”と呼ばれるんだ」

マフィアは常に何があっても冷静でなければならない。

さらにボスは周りをリラックスさせ、安心させることも重要となる。

今回の修行は、ボスにふさわしい要項を試す修行でもあった。

「…あっ、じゃあこの詩…」

ツナはバックから紙を取り出した。

荒む天気　荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは

広く大きな晴れ渡る空

その優しい空に触れたとき

癒され浄化されるとき

完全な大空があらわれる

荒んだ天気・空気はツナが遭難したときの全員の心情

しかしツナは冷静さを取り戻し、見事帰ってきた。
優しい空とはもちろんツナのことだ。

「読解力のねえやつだな」

「う、うるさいなっ！」

ごもっともなことを言われ、ツナは恥ずかしくなった。

「とにかく、お前の傷の治療もあるし、さっさと帰るぞ」

「…うん！！」

ツナはリボーンに笑いかけた。
リボーンもツナに笑いかけた。
ただし、ニヒルな笑みで。

そして、全員が家路についた。

第三関門“カピターレ”（“冷静”“リラックス”“安心”）クリア

標的１８　第三関門“カピターレ”（後書き）

謎が多く残りましたが、
次回解き明かそうと思います。

標的１９　“セッラッジョ”の目覚め（前書き）

新たな設定来ました！
でもまだ解き明かす予定はないです。

標的19 “セッラッジョ”の目覚め

「いってえええええ!!!!」

室内にツナの悲痛な声が響き渡る。
少し甲高いツナの声は意外と広範囲に聞こえる。

「これぐらい我慢できねえのかダメツナが。弱っちい男だな」

リボーンが呆れたようにため息をした。

崖から転落し、奇跡的に川に落ちたからこそ、かすり傷と切り傷という軽傷ですんだのだが…。

「敵に襲われて首と腹、背中と脚を打撲するなんて、まだまだだな」

「仕方ないだろ!頭とか傷とか痛かったんだから!」

ベッドに寝転がりツナは治療を受けている。
しかし、病院に行くと面倒だし、リボーンにはたやすい治療だったため、ロンジが寝泊まりをしているホテルの部屋へと連れ込まれた。

全身痛々しいほどの絆創膏やら包帯に加え、打撲した場所の湿布。
崖から落ちてこれくらいの怪我ならばまだ運がいい方だ。

「いたっいたたたた！！ガーゼに消毒液つけすぎじゃないの！？すごくいた…いったあああああ！！」

さっきからこの調子。
傷の消毒で痛み、動くため打撲の痛みを繰り返す。
もはやツナは泣いていた。

「泣くほど痛くねえだろ。目に消毒液ぶっかけるぞ」

なんて恐ろしい赤ん坊だろうか。
ツナはぶるぶると恐怖で震えた。
普通の赤ん坊はそんなことはしない。
いや、そもそも話さない。

「じ、十代目…大丈夫スか？」

「すっげえ痛そうだな…」

獄寺と山本が心配してツナに話しかける。
なんて優しい二人なのだろう。
それに比べてこの赤ん坊。

「だ…大丈…いたたっ！」

こめかみがズキズキする。
ここも切ったらしく、切り傷よりも少し傷が深かった。

「おわったぞ。最後までさわぎやがって」

「っぎゃあ！！」

リボーンがとどめに背中を蹴った。
しかも絶賛打撲中区域に。
ツナは事切れたように静かになった。

「綱吉様…大丈夫なんですか、リボーンさん」

ロンジが苦笑いしながらリボーンに聞いた。

「こいつは柔じゃねえからな。大丈夫だろ」

他人事のように、リボーンはさらりと言う。
そしてなぜだか楽しんでいるように見える。

「綱吉様、お水です。飲めますか？」

ロンジがコップとタオルを持って来た。

「す、すいません…。ありがとうございます」

ツナは痛みに耐えながら起き上がる。
そしてコップを受け取り水を飲み干した。
からからに渇いた喉が潤される。

するとロンジがタオルでツナの汗を拭いてくれた。
濡れタオルはひんやりとして気持ち良かった。

「新しい着替えを用意しました」

「…なんだかすいません」

「いえ、お気になさらないでください。私の仕事ですから」

ロンジはにっこりと優しい笑みをツナに向ける。
自分の仕事に生きがいを持っているのだろう。
その顔は生き生きとしていた。

ツナが着替えるとトンノとナッツが飛び込んできた。
ツナの治療が終わるのをおとなしく待っていたらしい。

「ガオッ」

「キュルルル」

「っわ！！」

二匹は嬉しそうにツナに擦り寄る。
ツナは優しく二匹の頭を撫でた。

「あ、そうだ。リボーン、聞きたいことがいくつかあるんだけど…」

「なんだ」

リボーンは床からベッドへと跳びうつった。

「なんで、オレが一人でいたときのことがわかったんだ？修行のことだって…」

「ああ、それはトンノが教えてくれたんだ」

リボーンはトンノを撫でながら言った。

「トンノの瞳には出来事を記憶する力があるんだ。おめえが一人でいたときのことは、全部こいつが伝えてくれたんだ。ま、テレパシーってやつだがな」

「…トンノが」

ツナは少し驚いたようにトンノを見る。

まさかそんな力があったとは思ってなかった。

それはトンノがもともと持っていた力なのだろう。

「んで、他に聞きたいことがあんだろ」

「…あ、うん。これなんだけど」

ツナは先日リボーンから渡されたバックの中から錠と鍵を取り出した。

「あ、あれ？昨日となんか違う…」

先日は錆び付いててなにが書いてあるのかもわからなかった。
しかし、錆はなく、きらきらと輝いている。

「…それは！！」

ロンジが驚いたようにそれを見る。

「どうやら、本当らしいな」

「な、なにが？」

リボーンが真剣な顔をする。
それを見てツナは自然と緊張した。

「それは、マフィアに伝わる“ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）”というもんのひとつだ。本当は他にもいくつかあるんだが、まだ見つかっていない。だが、これだけは…“ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）”だけは見つかったんだ」

「て、てぞ…？せっら…？」

「ははっ、なんだそれ」

イタリア語のわからないツナと山本はちんぷんかんぷんだった。

tesoro（テゾーロ） nascosto（ナスコスト）
serraggio（セッラッジョ）は鍵をかけること。

「なんで…そんなものをボンゴレが？」

「ボンゴレ見くびんなよ。ボンゴレの…ボスや守護者たちにしかわからない、はいれないところにあったんだ」

とても綺麗な錠と鍵だった。
ふちは金色でほどこされ、中には広がる大空と、燃える…炎。

ツナがそれを指先で撫でる。

―ドクンッ

動悸が激しくなる。
キンキンと頭の中でなにかが鳴り響く。
そして、流れてくるのは

淡い、かすかな声。

願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界
混沌とする人々の心
しかし、それをなだめ
清め、澄ませるものは
ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心
それを唯一動かすものは
覚悟と意思と希望と仲間

自然と流れる心地のいい声。
ツナはそれに心をあずける。

ピクリと、錠が動き出す。
カタカタと、鍵が動き出す。

熱を持ったそれは、ツナの心と連動していた。

「…やっぱり大空か」

錠と鍵の動きがおさまると、リボーンはそれに触れる。
あたたかなそれは、明らかにはじまっていた。

「ロンジ、九代目にすぐ連絡しろ」

リボーンが錠と鍵を見つめながら言う。

「セッラッジョが…発動しはじめた」

「っ！…はい！！」

ロンジは急いで電話をとり、隣の部屋へ移動した。

「……」

ツナはただ今起きたことを見ていた。
頭に流れてきたものは、今のはなんだったのだろうか。

「ツナ、なにか変わったことはあったか?」

リボーンの問いに一瞬驚いたが、静かに言葉を発する。

「願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界
混沌とする人々の心
しかし、それをなだめ
清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間…」

「…！！！」

珍しくリボーンが動揺した。

一瞬、身体が強張る。

「…おめえの力ってことか」

「え？」

ぽつりと呟いたリボーンの言葉がわからなくて、ツナはリボーンを見た。

（誰も…今まで、九代目さえも出来なかったこれを、ツナは…出来たのか）

リボーンは口許を上げる。

（こいつの力は未知…ってことか。ならば…）

ウライラがツナを欲するのもわかる。
しかし、なんのために？

「リボーン、意味がわからないよ！今のって…」

ツナの声でリボーンは我にかえる。
そしてツナを見つめた。
ツナは訳がわからず、リボーンを見つめかえす。

「…こんな凡人がな」

「んなっ！！なにがだよ失礼な！」

ツナはリボーンの言葉に怒りを覚えた。
突然失礼なことを言う赤ん坊だ。

「お前が言った今の詩は、錠と鍵に伝わるものだ。そいつらは持つべき者を選ぶ。主と決めたやつには、そいつらは力となるはずだぞ。目を閉じて、問いかけてみろ」

ツナは言われたとおりに目を閉じた。
そして、優しく問いかける。

「「……主よ。我らの主よ。」」

「!?」

突然聞こえた声は二重。
二人が同時に話している。

「「主よ。あなたは選ばれた。我ら“ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコストト）”の“ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）”によって。」」

「…あなたたちは一体……」

「「我らは世に伝わる秘宝のひとつ。それは昔、宇宙が始まった頃からはじまる」」

錠と鍵は静かに語る。
ツナたちは黙ってそれを聞いていた。

「「我らは、いずれ訪れるであろう世界の波乱をなるべく抑えるため、このような姿となり世界に散らばった」」

…ばらばらとなった彼らは、人の近くで、静かに人を見守った。
最初は誰もが優しく、美しい心をもっていた。

しかし、この世に完璧などなく、どんどん世界は傾いていった。

「「悪は人を汚し、世界をも汚した。その力に耐えるため我らは己を封印し、目覚めのときを待った」」

突然見えた、ほのかな光。
彼らを包むのは、あたたかく優しい炎。
その炎に導かれるように、彼らは目を覚ました。

「「我らを目覚めさせたのは、あなたがはじめて。あなたの力であれば、近づく悪を止められる」」

「悪って何？てか、オレの力はそんな…」

彼らの言うことをツナは理解できなかった。
先程リボーンに言われたとおり、ツナは凡人だ。
そんな自分に力なんてあるのかとツナは疑う。

「「現に、あなたは我らを目覚めさせた。我らがあなたの力となりましょう」」

錠と鍵は、輝きながら形をかえる。
それはだんだん人の形へと変化した。

両手には、小さな人がふたり。
緑の髪にオレンジの目をした、かわいらしい姿だった。

「「我らは錠と鍵の神。」」

「んなっ！！同じ顔！！！」

ふたりの顔を見てツナは叫んだ。
同じ顔がふたつ。
しかし、髪型だけは異なっている。

「我はシクロ」

「我はシスイ」

ふたりはぺこりとお辞儀をして挨拶をした。
シクロは長髪でシスイはおかっぱ頭をしている。

「本来は大人型なのだが、“ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ”が揃わないためこんな姿なのです」

「それゆえ使える力も限られ、仲間を探すことができないのです」

ふたりはツナの掌で語る。
そんな二人にリボーンは問う。

「おめえらが言う悪とは、ウライラのことか」

「「いえ、あれからも悪を感じますが、違う悪のことです」」

ふたりの言うことはよくわからなかった。
長い眠りで鈍っているのだろうか。

「「綱吉様」」

「わっ！そんな呼び方しないで！オレそんな偉いわけじゃないし！」

自分に“様”などつけることはないだろう。
ツナは必死にその呼び方を否定する。

「「では、何と呼べば…」」

「普通にツナでいいよ。その方が落ち着くし…。」

「「主の命令であるならば、ツナ。」」

ふたりの目がツナをとらえる。
ツナもふたりを見つめる。

「「…よろしく、おねがいいたします」」

「うん、よろしくね」

ツナはふたりに笑顔を向ける。
ふたりもツナに笑顔を向けた。

「やはり、綱吉様は不思議なお方だ」

「そういう奴だからな、ツナは。時々すげえ成長を見せる」

ロンジとリボーンはツナを眺めながら言う。

「ま、オレの生徒だからな」

リボーンは当たり前とでも言うように笑いながらコーヒーを飲んだ。

（おめえの力、オレがぜんぶ引き出してやるぞ、ツナ。）

太陽が生き生きと輝いた。

標的１９　“セッラッジョ”の目覚め（後書き）

獄寺「なんか…途中からオレら空気じゃねえか？」

山本「ははっ！確かにそうだな！」

獄寺「なんでだ！なんで十代目の右腕であるオレが空気なんだあああ！！！！」

山本「まあまあ、落ち着けって」

…申し訳ない（´・ω・`）

ごめんね二人とも（笑）

標的２０　誕生の理由（前書き）

ごちゃごちゃして読みにくいですね！
はい、ごめんなさい！

あとがきにちょっと説明つき！

標的２０　誕生の理由

あと少し、あと少し
ああ、まだ力が足りない
力があれば、簡単なのに
早く、早く、早く、早く
僕の手の中に落ちるんだ。

「うわあ、おいしい！」

「ロンジは料理が上手いからな、九代目もロンジの料理を気に入ってたんだぞ」

「ありがとうございます」

ツナはロンジが作ってくれたリゾットとオニオンスープを頬張った。

せめて打撲の痛みがおさまるまでと、ツナ達はロンジの泊まるホテルで休養していた。

湿布のおかげで痛みは最初よりもだいぶマシになった。

「「ツナ」」

「わっ！びっくりした！」

ツナに話しかけたのは、ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏのｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）、シクロとシスイ。

二人は申し訳なさそうな顔をしていた。

「「申し訳ございません。まだ、仲間と会話ができないみたいです。おそらく、まだ封印されたままだと…」」

「いいよ、気にしないで！そんな簡単に見つかるわけでも封印がとけるわけでもないみたいだし…」

二人がとてもかわいそうに見え、ツナは慌ててフォローした。

「どこにいるのかもわかんねえのか」

「「はい。わたしたちはその力は弱く…」」

リボーンの問いに二人はうなだれた。

「“わたしたちは”？」

二人の言葉に疑問を持った。

「「はい、わたしたちは錠と鍵を守る者なので…」」

「ま、まさか他にもいるの？」

「なに言ってんだ、ツナ。こいつらもボンゴレリングの守護者やアルコバレーノと同じように七人いるんだぞ」

リボーンが当たり前とでも言うかのようにツナに説明した。

そんな話しなかっただろうとツナは心の中で思った。

「シクロ、シスイ、ツナに説明してやれ」

「「では、ツナ。今からｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）についてお話いたします。」」

シクロとシスイは優しく話しかけるように、懐かしむように話しはじめた。

はるか昔。

地球も、宇宙も、なにもかもが存在しなかったとき、ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）
ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）は生まれた。

七人はただ真っ暗闇を漂っていた。
七人で楽しく会話をしながら。

すると突然、大きな音をたててなにかがはじけた。
それは後にビックバンと呼ばれるようになるのだが、七人はまだなにも知らない。

どんどん広がる宇宙。

石と石とがぶつかりあい、
ひとつの大きな星となる。

目の前に誰かが現れた。
その人は名前がないという。

ひとりぼっちで寂しいと。

七人はその人に気に入られ、共に過ごすようになった。

名前をもらい、力をもらう。
そして七人も、その人に名前を与えた。

しばらくは楽しい日々がつづいた。
広がりゆく宇宙を見つめながら彼らは話をした。

しかし、みるみるその人の力は弱まっていく。

“何故?”と七人が聞くと、その人は静かに答えた。

“わたしは、ある星に希望を託したんだ”

その人はひとつの星に指をさす。

その先には、まだまだ小さな星。

“わたしはあれに、わたしの全ての力を使って、生命が住めるようにしようと思う。水をつくって、大地をつくって、空をつくるんだ”

その人はうれしそうに話す。

しかし、突然悲しい顔をしてつづけた。

“でも、この星に後に生まれる生命、人間は、どうやら争いを起こしてしまうらしい。しかし、わたしは彼らを愛している”

その人は愛しそうにその星に手をかざす。

長い年月をかけて、その星は青い星へと生まれ変わる。

“この星はわたしの命。彼ら次第でわたしは死ぬだろう。でも、わたしが勝手にこの星をつくったのだから、仕方のないこと。”

その人は苦しみながら言った。

“わたしは力を使いすぎた。しばらく眠りにつく。その間、この星になにが起こるかわからない。だから…”

七人はその人の苦しむ姿を、涙を流しながら聞く。

“君たちが、この星を守ってくれないだろうか”

苦しみながらも見せる笑顔。
七人は胸が苦しくなる。

“いずれ、君たちは人間たちの悪によって汚れた世界にいることが辛くなる。その時は、自分たちを封印してくれ。でも、心配はしなくていいよ。…これを”

するとその人は、掌に映像をうつす。
そこには、美しく燃えるオレンジの炎。

“この炎なら、君たちは目覚めることができる。そして、この炎を出すことができる少年を、どうかわたしの元へ導いてほしい”

炎を見つめながらその人は言う。

“彼なら…わたしを目覚めさせることができるはずだ”

そういうとその人は七人に最後の力を授ける。
七人に備わったそれぞれのアイテムはきらきらと輝いている。

“それは、わたしの居場所へ導くアイテムとなる。それを使うことができるのも、炎の少年…”

その人は眠たそうに話しながら、七人を抱きしめる。

“…しばらくは会えなくなるけど、大丈夫。また会えるからね”

暖かなぬくもりは静かに離れていく。
その人は幸せそうな笑顔を見せて消えていった。

その人は生きてる。
この星のどこかで。

七人はその人の願いを叶えるべく、青い星…地球へと向かった。

「「わたしたちは、その人からもらったアイテムを大事にしながら、しばらくは幸せに過ごしていたんですが…」」

たえない争い。流れる血。

罪なき人々が死んでいく。
世界は悪で汚れ、七人はとうとう自分たちを封印することにした。

大丈夫。
また会える。

いつかまた出会えることを信じて。

「「そしてわたしたちは自ら封印をし、あなたがくるのを待っていました」」

「そんな大変なことが…」

二人の話を聞いて、今までどんなに大変だったかを思い知った。

この星を、地球をつくったその人は眠りから覚めるのを待っているのだ。

「「tesoro（テゾーロ） nascosto（ナスコスト）とかserraggio（セッラッジョ）って言うのは、その人がつけてくれた名前なの？」」

「「はい。英語とか日本語とか、人間が作る言葉を知ってたらしく、

気に入っていたイタリア語で名前をつけてくれました」」

二人はにこにこ笑いながら言った。
その名前に誇りをもっているのだろう。
とてもうれしそうにしている。

「ということは、あとのｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）は五人？」
シクロとシスイを入れればあと五人、と思っていたのだが、どうやら違うらしい。
二人は首を振って説明しはじめた。

「「わたしたちは二人で一つ。二人でｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）という役目なのです」」

ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）には七つの役割がある。

ＮＯ．７　ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）
名はセブラーノ
ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）は同盟という意味を持ち、印判を守る。

ＮＯ．６　ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）

双子で名はシクロ（兄）、シスイ（弟）
ｓｅｒｒａｇｇｉｏは鍵をかけることで、錠と鍵を守る。

ＮＯ．５　ａｔｌａｎｔｅ（アトゥランテ）
名はファイアス
ａｔｌａｎｔｅは地図帳という意味で地図を守る。

ＮＯ．４　ｂｉｎｏｃｏｌｏ（ビノーコロ）
名はフォア
ｂｉｎｏｃｏｌｏは双眼鏡という意味で双眼鏡を守る。

ＮＯ．３　ｖｅｉｃｏｌｏ（ヴェイーコロ）
名はスリノキ
ｖｅｉｃｏｌｏは乗り物という意味でほうきを守る。

ＮＯ．２　ａｒｍａ（アルマ）
名はツイ
ａｒｍａは武器という意味で盾と矛を守る。

ＮＯ．１　ｇｅｎｕｉｎｏ（ジェヌイーノ）
名はワンゴラ
ｇｅｎｕｉｎｏは真実のことで水晶を守る。

「ほ、ほんとに七人なんだ…」

二人の説明にツナは戸惑っていた。

「なんでＮＯ．３のやつは乗り物にほうきなんだ」

「「現代の“車”とか“バイク”とかは環境に悪いから、らしいです。でも実際の移動手段はほうきの力による瞬間移動みたいですね」」

謎が多い。

まったくわからないことばかりだ。

今まで封印されていたので謎が多いのも無理はないのだが。

「リボーンは知らなかったの？」

「オレはアルコバレーノになるときに少し聞いたぐらいだ。まさか本当にいるとはな…」

リボーンでも知らないのだ。

前まで一般人だったツナが知るはずないだろう。

「ねえ、シクロ、シスイ。」

「「なんでしょう、ツナ。」」

返事までも息ピッタリの二人がツナを見る。
顔も身長も声も同じ。
唯一違うのは長髪とおかっぱ頭という髪型だけだ。

「地球をつくったっていう…神様？みたいな人の名前はわかる？」

「「彼は…そうですね。神様みたいなものでしょうね。彼の名は、スペランツァ。彼の好きなイタリア語で“希望”という意味です」」

ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）。

希望。

彼は地球に希望を抱いていた。

人間に希望をかけたのだろうか。

「…そっか。いい名前だね！」

ツナは笑顔で二人に言う。
二人もつられて笑ってしまった。

「「…あの、ツナ」」

「ん、なに？」

「「ツナの腕から、とても嫌な気を感じるのですが…」」

二人は心配そうな表情をしてツナの腕を見る。
ツナは服の袖をまくり、鎖の痣…呪いを見せた。

「「わあ！！！」」

二人は飛び上がって驚き、震えながら腕の痣を見る。

「ご、ごめんね！驚かせちゃった…かな。これは…あの、ボンゴレリングとオレの力を狙う奴にかけられた呪いなんだ」

「「のっ、呪いいい！！！？」」

二人はさらに驚いて、怖がってしまった。

「あ、怖かった！？ごめんごめん！」

「「すいません…驚いてしまって…」」

ツナが慌てて呪いを隠すと、二人は安心したようにため息をもらす。

「「…ツナは、狙われているんですね」」

「うん…。だから君たちにも被害が及ぶかも知れないけど…」

「「いえ、大丈夫です!!我らはツナを守るために戦います!」」

二人は握りこぶしをふるふると震わせ、闘志をあらわした。

「え、いいよいいよ!危ないし…」

「「大丈夫です!主であるツナの力になるためにここにいると言っても過言ではありません!」」

二人の気迫におされ、ツナはなにも言えなくなってしまった。
あまりにも二人の闘志が熱い。

「よかったじゃねえか、ツナ。仲間が増えたぞ」

「よ、喜んでいいのかな…」

ツナは、はは、とかわいた笑い声をあげた。

二人の闘志はしばらくの間燃えつづけた。

「ねえ、まだなの？」

部屋に険悪な雰囲気が漂う。
部下は怯えながらウライラに深々と頭を下げた。

「もっ、申し訳ございません！力の反動が強く、まだ全員…」

部下が話している途中で、ウライラは机を思いきり叩いてさえぎった。

「あまりにも遅すぎですよ！使えないな…」

ウライラはイライラしながら部下を睨む。
部下は一礼をしてそそくさと部屋をでていった。

「はやく…はやくほしい…」

ウライラの目は欲望に燃え、声は地を這うように低い。
凄まじい黒いオーラをまといながらウライラはつぶやいた。

「わたしをさらに強くする力…ボンゴレリング…沢田綱吉……」

悪を増殖させるのは欲望。
欲望を増殖させるのは人。

「はやく…器を変えなければ……」

欲望の犠牲となれば、人など、操り人形同然なのだ。

標的２０　誕生の理由（後書き）

なんか文章では、ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）とあらわされているみたいですが、
実際は、

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ

です。
つながってます。

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏで（テゾーロ　ナスコスト）と読みます！

標的２１　姿を変える鳥（前書き）

短め？でしょうか。

いつ戦わせようか、迷います。

標的２１　姿を変える鳥

きしきしと痛む右腕

呪いをかけられ数日経ったが、
鎖は右腕を徐々に覆い、
右ひじを通り越し、二の腕にまで進行していた。

同時に地味な痛みも増すばかり。
本当に修行は意味があるのだろうか。
そんな疑問さえも浮かんできた。

ロンジの泊まるホテルで休養をとり、なんとか打撲が和らいだツナは三日ぶりに帰宅した。

ツナの母、奈々にはリボーンがどうやら上手く言っていたらしく、何も聞かれなかった。

夕ごはんと風呂を終え、部屋でくつろいでいたツナは、ふと自分の右腕を見る。

袖を捲れば入れ墨のような呪いが腕いっぱいに広がっている。

「うっわあ、入れ墨みたい。このまま学校に行ったら絶対停学とか

退学とかだよな…」

本当に学校が休みでよかった。
自分は普通の生徒でいたいのに、こんな呪いのせいで不良と見なされてしまうかも知れない。
獄寺ほどの不良であれば、堂々と入れ墨を容れられるだろうが…。

ツナは普通に生きたい。
不良になどなる気はないし、そもそもなれない。

「…オレがなにしたって言うんだよ……」

布団に顔を埋め、ぽつりと呟く。

すると、傍でずっと見ていたトンノが、小さな足音をたててツナに寄り添う。
ツナがトンノに視線をやると、トンノがじっとツナを見つめていた。

「…なに？心配してくれてるの？」

「キュルルル」

差し出された掌にトンノは顔を寄せる。
ふわふわとした羽が気持ちいい。

トンノが顔をあげ、再びツナを見つめる。

―ザワッ

暖かい風が吹きわたる。

オレンジ色の、炎が全身を包み込む。

その心地良さにツナは身体を預け、目を閉じた。

「……。」

どこかから声がする。

柔らかく、落ち着いた声。

それはどんどんツナに近づき、それと共にツナの意識も覚醒する。

「…ツナ。」

傍でツナをよぶ声がする。
その声に答えようと口を開くが、まだ声はでない。

「…焦らないで。ゆっくりでいい。僕はここにいる」

声の主はツナの手をそっと握り、大丈夫とツナに言う。
ツナはゆっくりと身体の感覚を取り戻す。
そして、声の主を確かめるべく、重たいまぶたをあげた。

金色の髪

オレンジ色の目

白色の服

優しく微笑む声の主に、ツナは見覚えがない。
しかし、握られた手の温もりは、確かに知っている。

「…誰？」

「わかるわけないよね。こんな姿じゃ」

声の主は笑いながら姿を変える。
オレンジの炎に包まれた、それは。

「…っ、トンノ！？」

「その通り」

金色と白色の混ざる美しい羽。
オレンジ色の目。
その姿は本物のトンノだった。

また炎に包まれ、再び人の姿へと変えたトンノは嬉しそうに笑った。

「嬉しいな、ツナと普通に会話ができてる！」

ツナはまだ信じきれていなかったが、確かに目の前にいるのはトンノだ。

「どうして…トンノが人の姿なの？」

「これもツナの力だよ。人の姿になれるのも、普通に話せるのも」

そう言うとトンノは、掌にオレンジの炎を出す。

「ツナの炎で、僕も大空属性になったみたいだよ。まあ、例えるならナッツと似たようなもんかな」

「ナッツと…って、匣兵器みたいな？」

トンノは頷いて話をつづける。

「ツナの力があまりにも強いから、短期間で僕は敵と戦ったり、人に変化出来るようになったってわけ」

「ま、まさか！そんな力、オレには…」

「あるんだよ。ツナ。」

ツナの否定をトンノが遮る。
トンノの瞳に嘘はなかった。

「ほんとは、ツナの意識の中に流れ込まなくても会話はできたんだけど、こういうことも出来るのか試してみたくなっちゃって」

トンノは無邪気に言った。
外見は大人だが、中身は少年のようだ。

トンノはツナの右腕を見つめ、明るい声で言う。

「大丈夫だよ、ツナ。少しずつ、呪いの力を抑えられるようになってる」

暖かい手がツナの腕に触れる。
ピリッとかすかな痛みを感じた。

「確かに、この進行じゃあすぐに左腕にたどり着くけど…修行を終えれば、進行にも、…ウライラにも、影響を与えられるはず。」

心配しないでと、笑顔を見せるトンノ。
その笑顔にツナはひどく安心感を持った。

「…あ。」

「何？」

トンノが何かに気付いたように反応する。

「リボーンがツナのこと呼んでる。そろそろ戻ろうか」

すると、再びツナは炎に包まれる。
そして同じように意識が遠退いた。

「……おい！ダメツナが！！」

リボーンの声で目が覚め、次の瞬間、頬を銃弾がかすめた。

「っんな！！びっくりするじゃないか！」

「起きねえお前が悪いんだ」

自分が正しいとでも言うかのようにリボーンは堂々と言い張った。

「キュルルル」

ツナの隣で鳥の泣く声がした。
トンノがばさばさと羽を動かす。

「ん、なんだトンノ。いつもと何か違うじゃねえか」

トンノを見てリボーンが気付く。
さすが最強のヒットマン。

「…トンノ。大丈夫だよ」

ツナがそう言うと、トンノが炎に包まれ、人の姿に変化した。

「！！」

「…この姿では、はじめましてだね。リボーン」

人の姿のトンノが、驚いているリボーンに話しかける。

「…それも、ツナの力か」

「うん。さっきまでは、ツナの意識の中で会話してたんだよ」

ね、とトンノがツナに同意を求め、慌ててツナは頷いた。

「…まだまだいろんな力があるってことか」

リボーンがにやりと笑い、ツナを見た。

本当におもしろい奴だ、とリボーンは思った。

「そうだ、ツナ。明日は修行だぞ」

「えっ、いきなりすぎじゃないか！！」

「怪我してもするもんはする。明日だぞ、わかったな。」

リボーンは一枚の紙をツナに投げる。
慌ててツナはそれを受け取り、それが何かはすぐにわかった。

「…ヒント！？」

「そうだぞ。まあ、読解力のねえお前には意味がないかも知れねえがな。」

リボーンはツナを馬鹿にして部屋を去った。
ツナは何も言い返せずにリボーンを見送った。

「確かに読解力はないけどさ…」
ぶつぶつ言いながら紙を見る。
隣からトンノも覗き込む。

ふと感じる暖かさ

それは当たり前のようで

手に入れ難いぬくもり

忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて
そのありがたさに包まれる

「…やっぱり」

やはりわからない。
ツナはため息をついた。
しかし、トンノは納得したように頷いていた。

「なに、わかったのトンノ!?」

「なんとなくだけど、わかったかも」

トンノが理解したことにツナはショックを受けた。
そして自分の読解力のなさを実感した。

「そんなに落ち込まないで、ツナ。ツナは、…もうこのことはわか

ってるはずだよ」

「え!?嘘だろ!?」

トンノの言葉にツナは驚く。
今もさっぱりわからないのに、わかっているだなんておかしい。

「ツナが気付いてないだけだよ。ほんとかわかってるんだ。」

トンノは炎に包まれ鳥の姿へ戻る。
そして自分の寝床へ移動して目を閉じた。

ツナはしばらく紙を見つめていた。

標的２２　第四関門“幸福”（前書き）

いつもより文が悲惨…！！

見苦しくてごめんなさい！

標的２２　第四関門“幸福”

ふと感じる暖かさ
それは当たり前のようで
手に入れ難いぬくもり
忘れてはならないぬくもり
気付いたときにはじめて
そのありがたさに包まれる

「極限に修行だあー！！」
「うっせえ、芝生頭！！」
「なんだと、タコヘッド！！」
晴れ渡る空の下で、二人の守護者が言い争う。

ぎゃいぎゃい騒がしい中、ツナ、山本、リボーン、ロンジはシートに座りながら獄寺と了平のやりとりを無視して会話をして楽しんでいた。

今日も修行のため、広い森へとやってきたが、まずは腹ごしらえだとロンジが昼食を用意してくれた。

おにぎりや卵焼きなど、さまざまな惣菜が弁当箱いっぱいに敷き詰められていた。

さらにはデザートまでも用意してあり、完食する頃にはツナたちはお腹いっぱいになっていた。

この状態ではお腹の中で食べたものがぐるぐるとまわり、気持ち悪くなってしまうだろうと、しばしの間休憩をとることにした。

そしてあの二人の言い争いがはじまったのだった。

「極限に空気が美味いぞー!!」

「さっきからうるせえって言ってんだろ芝生!! 少しは黙りやがれ!!」

「これはオレの心の叫びだ! それを素直に口に出して何が悪いんだ?」

「お前の心の叫びはただうるせえってだけなんだよ!!!」

こんな会話を繰り返しはや１０分。
止まることのない言葉のキャッチボールは、いびつな形で成り立っていた。

「ははっ、相変わらずだな、あの二人」

「まったくだ。騒がしいったらありゃしねえ」

山本が時雨金時を素振りしながら笑って言うと、リボーンは鬱陶しそうな顔をして持参のコーヒーを飲む。

「さすが晴の守護者。輝いていらっしゃる」

ロンジが可笑しそうに笑いながら後片付けをする。
ツナもそれを手伝いながら二人を見た。

「獄寺くんとお兄さん、いつもあんな感じなんです。でも二人って、どこか似てるんですよね」

「確かに、似ていそうなお二人だ」

止まない言い争いをＢＧＭにして、それぞれの時間が過ぎる。

（久しぶりだなあ、こういう平和な感じ）

深呼吸をすると、澄んだ空気が肺を満たす。
ぽかぽかとした日差しは眠気を誘った。

「キュルルル」

「わっ」

突然頭の上にトンノが降り立ったので、ツナは驚いて声を上げた。
ツナが腕にトンノをうつすと、トンノは耳元でツナに話しかけた。
トンノが話せるということはまだ獄寺たちに話していないからだ。

「ツナ、森の向こうに嫌な気を感じる」

「嫌な気？」

ツナはトンノの言う森の方向を見る。
しかし、嫌な気は感じられない。

「オレにはわからないけど…ほんとに感じる？」

「感じるよ。ツナの腕の呪いと同じだ」

「…！？ほんとか、トンノ！！」

まさか、とツナは思った。

“鎖の呪縛”と同じ嫌な気ならば、呪いをかけた男、ウライラが近くにいるということになる。

（でもあいつが近くに来るとこの呪いが反応して痛むはず…。）

腕に痛みはない。
しかしトンノは嫌な気を感じている。
トンノの言うことに間違いはないとツナは思った。

ツナが考え込んでいると、トンノが何かに気付いたようにバサバサと羽を動かして慌てだした。

「ど、どうしたんだよトンノ！！」

「ツナ、気配が変わった！こっちに向かって来る！！」
トンノがさらに慌ててツナに告げる。
するとツナにもその気配が感じられた。
リボーンもそれに気付き、ツナの側に寄る。

「ツナ、何か来るぞ」

「…うん」

ツナとトンノ、リボーンは身構える。

きらりとなにかが光った。

「！！ツナ避けろ」

「っうわ！！」

リボーンに蹴り飛ばされ、ツナは地面に倒れた。
身を起こすと、ツナのいたところになにかが刺さっている。

「あ、ありがとリボーン…。これって…」

「毒針だな。しかしこれは人間の作ったもんじゃねえ」

「大丈夫か、二人とも！！」

今の異変に気付いた山本たちが駆け寄る。
そして毒針の飛んできた方向を見た。
ぴりぴりと殺気が伝わる。

するとまた毒針が飛んできた。
しかし、今回は一本ではなく複数。

全員は慌ててその場から離れた。
止まない毒針の雨。
避けても避けても毒針はとんでくる。

「…っくそ!!キリがねえ!!」

獄寺はリングに炎をともし、ボンゴレ匣を開口させた。
そしてフレイムアローを放ち、毒針を砕く。

「すげえな獄寺!」

「そんなこと言ってる暇があったらてめえもかわしやがれ!!」

山本はのんきに感心した。
しかし、山本にも大量の毒針が襲い掛かる。
山本も匣を開口させ、技をしかけた。

「時雨蒼燕流総集奥義、時雨之化!」

毒針を減速させ、山本たちはそこを離れた。

「誰がこんなもの飛ばしてきてるのだ！！」

了平が当たりを見回すが、人影は見当たらない。

すると、木々の間からなにかが飛んできた。

それは巨大な蛇の姿をした化け物で、まるで以前ツナを襲った化け物のようだった。

蛇は口から毒針を大量に放ち、ツナたちを襲う。

至近距離かつ先程とは全く違う高速な攻撃に、防御が間に合わないと、誰もが一緒あきらめた。

ひらりと、なにかが舞う。

軽やかに、美しく。

炎をまとい、毒針に立ち向かう人影。

「ガオオオオオ！！！！」

ナッツの雄叫びにより、毒針が石化される。

ただの石となった毒針は、ぱらぱらと地面に落ち、砕けた。

その異様なスピードに全員が驚いた。

「じゅ、十代目！」

「ツナ！」

「沢田！」

獄寺たちを守るように蛇の前に立ちはだかるツナは、肩にナッツを乗せてハイパー化していた。

ツナは獄寺たちを一瞥し、笑顔を見せると再び目の前の化け物に向き直る。

「前の化け物と似たようなやつだな、トンノ」

ツナがもう一方の肩にとまったトンノに話しかける。

「多分ね。僕も戦うよ、ツナ。獄寺くんたちの攻撃じゃあ、あいつは倒せない」

「…わかった」

トンノは羽ばたき、光を放ち姿を変える。

ツナの力によって大空属性となったトンノは、身体から炎を放ち蛇

に立ち向かう。

蛇が毒針を放つが、トンノの炎により石化され、巨大化したトンノの体当たりをくらい大きな音をたてて地面に倒れ込む。

トンノがツナの元へ戻ると、ツナがトンノとナッツに何かを告げる。それに承諾するように頷いたトンノとナッツは、蛇に向かって走り出す。

激怒した蛇は、なりふりかまわず毒針を放ち散らした。毒針が獄寺たちに当たらないように、二匹はどんどん毒針を石化させた。

「…あいつらが頑張ってんだ、オレたちもやるぜっ」

「当たり前だ野球馬鹿！」

「極限にやるぞおお！！」

三人もそれぞれの攻撃で毒針をかわす。

「綱吉様はなにを思いついたのでしょうか」

「ああ、ロンジは見たことがねえのか」

「なにをですか？」

「ツナの技だ」

リボーンは口許を上げて頭上のツナを見る。
ロンジはわけもわからず、ただツナたちを見ていた。

ツナは二匹に時間を稼いでもらい、Ｘ　ＢＵＲＮＥＲを放つ準備をしていたのだ。

「ゲージシンメトリー！発射スタンバイ！！」

コンタクトディスプレイにＸ字が浮かび上がり、ピーッと合図の音が鳴る。

「Ｘ　ＢＵＲＮＥＲ！！！」

剛の炎が勢いよく放たれ、蛇を包み込む。

「ギャアアアアアア！！！」

蛇は悲鳴をあげ、邪悪なオーラを放ちながら消えていった。

そこに残ったのは、小さな普通の蛇。

「あれ、こいつがさっきの蛇なのか？」

山本が蛇のしっぽを掴み、ぷらぷらと振ってみせた。

「誰かに化け物に変えられてたんだな」

リボーンが山本の肩に飛び乗って答えた。

ツナはナッツとトンノの元へ降り立ち、二匹の頭をなでる。

「ありがとな、ナッツ、トンノ」

「がるっ」

「どういたしまして、ツナ」

トンノは元の姿に戻り、ツナの肩にとまる。

ツナもハイパー化をといて、ナッツを抱えてリボーンたちの元へ駆け寄った。

「考えたじゃねえか、ツナ」

「そうですよ十代目、さすがです！」
「そ、そうかなあ」
ツナは照れ臭くなって頬を赤くする。

「あ、そうだリボーン！修行のこと…！！」
「ああ、すっかり忘れてたな。だがお前はすでに合格だぞ」
リボーンはけろりとツナに言った。
ツナは一瞬リボーンが何を言っているのかわからなかった。
「え！！？合格って…いつ合格してたの！？」
「最初からだな」

「んなっ！！？意味わかんないよ！」
ツナは思い出したようにポケットから一枚の紙を取り出す。

ふと感じる暖かさ
それは当たり前のようで
手に入れ難いぬくもり
忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて
そのありがたさに包まれる

「どういう意味だよ、これは！」

「お前、ほんとに気付いてないのか」
リボーンがため息をついて話しはじめた。

「今回は“幸福”。だがお前にはすでにこの感情が十分にあった。
修行もやる必要なかったんだが、一応な」

「じゃあ、この詩の意味って…」
ツナは詩を見てやっと意味がわかった。

「そうだぞ。その“ぬくもり”っつうのが“幸福”だ。幸福なんて
そんなもんだからな」

「なんだよーっ、なんで気付かなかったんだろう！」
ツナは地面に座り込んだ。

幸福なんて、そうやすやすと気付くものじゃない。
簡単そうで難しい幸福。
でも、人はふとしたことで幸福を感じているのだ。
それがどんなにちっぽけでも。

「よかったですね、十代目！」
「おめでとう、ツナ！」
「極限にわからんがよくやったぞ沢田！」
「あ、ありがとうみんな」

ツナは自然と笑みがこぼれ、心があたたかくなった。

（…あ。そっか。これが幸福って言うんだ）

一瞬感じたぬくもり。
これが幸福なのだと、ツナは意識した。
それはとてもあたたかいものだった。

「んじゃ、帰るか」

時は夕暮れ。
そろそろ帰らなければ家につくころには真っ暗だろう。

ツナたちはたわいのない会話をしながら歩いて帰った。

小さな幸福を感じて。

第四関門“幸福”クリア

標的２２　第四関門“幸福”（後書き）

学校がはじまります…。

更新が遅れるかも知れません。

でも途中でやめたりとかはしませんよ！

受験が関わってくるので不安ですけどね…（涙）

標的２３　疑問（前書き）

小説を更新すると、
多くの方が見てくれるのが
とてもうれしいです！

癒されてます（＾ｏ＾）／

標的２３　疑問

夜も更けた夜中の３時。
部屋には苦しそうな声が響く。

痛みが治まらない。
最初のころと比べ、痛みの継続時間が長くなっている。
そして間隔をあけずに襲ってくる。

額には大量の冷や汗。
息遣いは荒く、時々呼吸が止まる。
なんとか耐えようと、身体に力をいれてみるが、そんな努力はすぐに崩される。

腕を抑える手は震え、まったく役に立たない。

みしみしと音をたてる痣。
それは右腕を制覇し、ついに右足へとうつる。
いや、あらたに痣が出来上がったのだ。
足首には腕と同じように痣のはじまりがある。

痛みはどんどんツナを苦しめる。

「…ぅあっ！！」

苦痛な悲鳴を上げたツナは、力尽きたように気を失った。
身体はかたかたと痙攣しており、呼吸も不安定だ。

それを、上の寝床からリボーンは黙って見ていた。

（忍耐力を鍛えてもこの力…厄介だな）

リボーンは寝床から飛び降り、ツナのベッドへ乗り移る。
まるで生きているのかわからなくなるほどの顔色。
不規則な呼吸を繰り返し、それに連動するように汗が滴り落ちる。

「死ぬな、ツナ」

リボーンはそっとツナの手に触れた。
未だ痙攣は続いており、リボーンにもその振動が伝わる。

しばらくの間、リボーンはツナを見つめていた。

「……んー…？」

深い眠りから覚醒する。
正確に言うと、覚醒させられた。

なにかが身体を揺すっている。
しかしそれは小さく、ほんの小さな動きでしかないが。

ツナは無理矢理重たいまぶたをあげる。

すると、目の前に小さなシルエットがふたつ見えた。

「「ツナ！！」」

二人してツナに声をかける。
一瞬何がなんだかわからなかったが、少しずつ脳が働きはじめ、しばしの沈黙のあと、ツナは思い出したように声をあげた。

「…シクロ、シスイ？」

ツナに名を呼ばれ、二人は嬉しそうに笑った。

「「よかったです。ツナ、苦しそうだったから」」

「ん…苦しそう？オレが？」

ツナは二人が何を言っているのかわからなかった。
しかし、二人が指し示す方向を見て、一気に眠気が吹っ飛んだ。

「っんな！！！痣が増えたあああああ！！」

ツナは自分の右足を見て叫ぶ。
右足首には、手首と同じように鎖の痣が巻き付いている。
慌ててツナは右腕を確認する。
痣は肩にまで及び、やっと二人の言葉が理解できた。

（また痣が進行してたんだ…。そういえば、夜中苦しかったな…）

すっかりツナは夜中の痛みを忘れていた。
気を失ってしまったから頭が混乱していたのだろうか。

「「ツナ、痛いですか？」」

二人が心配そうに顔を覗き込む。
ツナはそれに微笑んで大丈夫と伝えた。

「二人こそ大丈夫なの？あのあと、疲れちゃってずっと眠ってたけ

ど…」

あのあと、とは二人がツナたちに自分たち、“ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ　ナスコスト）”の話をしたあと、久しぶりに姿を戻し、喋ったためか疲れてしまい、何日か眠っていたのだ。

「「はい。沢山寝たので回復しました」」

「そっか、ならよかった」

ツナは指で二人の頭を撫でた。
二人は頬を赤らめて笑っていた。

「お、起きたのか」

ドアが開き、リボーンが入って来た。

「ったく、トンノが心配してたぞ。おめえに呼びかけても返事はないし、意識の中にも潜り込めないってな」

「…よく覚えてないんだけど、そんなにオレ苦しんでた?」

「かなりな。冷や汗大量で苦しそうな声で、オレの睡眠を妨げるくらいにな」

「…すみません」

ツナは素直にリボーンに謝った。
しかし、不可解なことに気付いた。

（汗をかいたっていうのに…ベタベタしないし…）

額にも頬にも、何処にも汗の跡はない。
ペタペタと自分の顔を確かめるように触るツナを見ながら、リボーンは心の中で文句を言った。

（睡眠を妨げられた上に、おめえの汗を拭いてやったんだ。ほんとに世話のやける生徒だ）

ツナは知らない。
ツナが気を失ったあと、ため息をつきながらもわざわざ台所まで行き、タオルを湿らせてリボーンがツナの汗を拭いてやったことを。

「さっさと降りてきやがれ。ママンが朝飯が出来たって言ってたぞ」

「あ、うん…。……リボーン」

ツナがリボーンを引き止めた。

リボーンは立ち止まって何も言わずにツナの言葉を待つ。

「…ありがとう」

にっこりと笑ってリボーンに礼を言った。

わかっているのかわかっていないのか。
リボーンは「ああ」と短く返事をして部屋から出ていく。

小さなため息がひとつ。

しかし、それは機嫌のいいため息だった。

朝食を終えたツナは、特にすることもなく部屋でくつろいでいた。

奈々とランボ、イーピンやビアンキは一緒に出かけていった。
リボーンもついていくかと思ったら、行かないと意外にも断っていた。

学校もない、宿題も出されてない、ゲームもする気でない。
久しぶりの暇を満喫しながらツナはベッドへとダイブした。

ちくり、と痣が痛む。
しかしそれは一瞬だったため、地味な痛みでしかなかった。

修行は着々と進んでいる。
あとひとつで修行完了となる。
それなのに。

（まったくよくならないなあ）

天井を見つめ、ツナは心の中でそう思った。

修行の仕方を間違っているのだろうか。
しかし、そんなヘマをリボーンはするはずがないとその考えはすぐに消えた。

（…なにかが足りない？）

ふと、ツナは思った。
足りない。足りない。
なにかが足りない。

（それだけじゃない？）

なにかが心に引っかかる。
なにかが足りない。

しかし、その“なにか”がわからない。

ツナは思考をやめ、目を閉じた。
こういうとき、必ず頭に浮かび上がるのは…。

自分と同い年くらいの女の子。
そして女の子を守るように傍に立つ男の人。

はかなくも散ってしまった命。

そして、その原因となった男の姿までもが現れる。

（ユニ…γ…）

１０年後の世界で失った命。

気分が落ち込むと、必ずこのことを考えてしまう。

（…白蘭）

ツナは白髪に目の下に不思議な痣を持った男を思い出す。

彼は消えた。

だから世界は平和になった。

だが。

（あいつは…死んでない）

ツナの超直感がそう告げる。

あの時、白蘭はツナのＸ　ＢＵＲＮＥＲに包まれた。

しかし、決して人を殺すことをよしとしないツナは、白蘭を殺さないためにあのＸ　ＢＵＲＮＥＲを放った。

彼は消えた。

しかしツナはわかっていた。

白蘭は生きていると。

「～っ、こんな気分になるといつもこれだ」

呆れたようにツナは独り言を言った。

「…ツナ」

枕で声がする。
目をやると、シクロとシスイ、トンノがツナを見つめていた。

「…大丈夫だよ」

ツナはふわりと優しい笑顔を向けた。
三人も同じように答えてくれた。

しかし、謎は残ったまま。

“なにか”とはなんだろう。

同じ疑問を、台所でコーヒーを飲んでいる赤ん坊も抱いていた。

（ツナは修行を完璧にこなしている。だが進行はあまり変化を見せ

ない。）

リボーンは目の前にいるレオンを見る。
レオンは眠たそうに寝転がっていた。

「お前はわかるか？」

レオンはリボーンが何を問うたのかわからず、首を傾げた。

（なにかが足りない、それは絶対だ）

リボーンはレオンを撫でながらその言葉を繰り返していた。

なにかが足りない。
なにかが引っかかる。

そして、ツナの超直感は別のなにかを捕らえていた。

小さくも黒い、欲のかたまりを。

標的２３　疑問（後書き）

ツナの放ったＸ　ＢＵＲＮＥＲの正体。
これは私オリジナルなのですが、
まだ言えません！

近々発表しようかなと。
あ、物語上で。

いつ出そうか迷います。
でも楽しみ！

ツナが人を殺すわけない、と思っている私の勝手な考えですけどね！

ツナがボスになったあとのお話も企画してます（＾＾）

もちろん、平和で。

“ツナに人を殺させない”
これがわたしの覚悟だ！↑

読んでくださってありがとうございました！

標的２４　誘拐（前書き）

余裕があったので更新しました！

みるみるアクセス数が増えていきます…

ありがとうございます！

標的２４　誘拐

誰も寄り付かない路地裏。

異様な空気が漂い、足がすくむほどの寒気を感じる。

そこにいるのは複数の人間。

「…わかったな、てめえら。殺さないで連れて来いよ」

奴らの中心核であろう男が、部下に確認するように言う。

部下は黙って頷く。

男たちの腕には、ネズミのようなシルエットの入れ墨が施されてある。

「よし、行け。沢田綱吉を捕らえに。」

男の合図で部下がばらばらに駆け出す。

複数のネズミが、深い夜に放たれた。

部屋を小さなライオンと鳥が走り回っている。
それぞれの背中には小さな人間が乗っている。
楽しそうな声を聞きながら、ツナはそれらを見守っていた。

今日も家には誰もいない。リボーンも今日は調べ物があると言って出かけて行った。

そして、リボーンが最後の修行だと言ってまた謎の詩が書かれた紙をツナに渡した。

ツナはその紙を広げ、詩を読んだ。

守りたい者。

傍にいたい者。
笑いあいたい者。
なくてはならない者。
その者のためならば、
人は何にでもなれるもの。
己を動かす感情。
自然の節理、自然な行動。
人はそれ無くしては生きられず。
理屈ではあらわせれない感情。
それに気付いたとき、
人は強さを手に入れる。

しばらくツナはそれを見つめていた。
今までの修行からして、今回試される感情は消去法でわかるはず。
だが、ツナは七つの感情のことは覚えていなかった。

ふとツナは遊んでいる二人と二匹を見る。

（ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）って神様みたいなもんだと思ってたけど…）

ツナはシクロとシスイの笑顔を見て思う。

（子供みたいなところもあるんだなあ）

二人と二匹が遊んでいる図は、とてもかわいらしく、自然と笑みがこぼれてしまうほどだ。

しばらくそれを見ていると、ピンポーンと家のチャイムが鳴った。

ツナは一声返事をすると、急いで階段を降りた。

「わっ、獄寺くん、山本！！」

「こんにちは、十代目！」

「よっ、ツナ！」

玄関のドアを開けると、そこには二人の友人がいた。

ツナは二人を招き入れ、リビングにあがるように行った。

そして部屋で遊ばせていた二人と二匹を思い出し、一階に来るように声をかける。

するとパタパというナッツの足音と、ババサというトンノの羽の音が聞こえた。
シクロとシスイはまだ二匹の背中に乗っている。

「ち、ちっちぇ…」

「おっ、確かｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）っていう奴らの仲間だったよな！前にも一度会ったんだけど、覚えてるか？」

二人の小ささに改めて驚く獄寺とフレンドリーに話しかける山本。
二人は少しびくびくしながら頷いた。

「大丈夫だよシクロ、シスイ。二人はオレの友達だから」

ツナが獄寺と山本にジュースを渡すと、怯えている二人に言った。
すると安心したように、それぞれ獄寺と山本の膝の上にちょこんと座った。

しかし身体が小さいので、片方の膝に座っているかたちだ。

「うおおお…っ、小さい…っ」

獄寺は膝の上の生物のシクロという存在に感動していた。
知ってのとおり、獄寺は不思議な生物に興味を持っているからだ。

「ははっ、ほんとにツナに懐いてんのな。ツナが言っただけですぐなれちまった」

山本はシスイの頭を撫でながら言う。
しかし力が強いため、指先で撫でても髪の毛がボサボサになるくらいぐりぐりと強く撫でてしまっていた。
しかしシスイはにこにこ笑っていた。

「これでもｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）っていう大切な役割を持ってるんだけどね」

ツナは笑いながらシクロとシスイ、ナッツとトンノにもおやつを用意してやった。
二人と二匹は嬉しそうにおやつを食べはじめた。

「やっぱ学校がないと暇だよね」

「そうッスよね。十代目にも会えないし」

「ツナたちには会えないけど、会いに行けるからまだましだぜ。部活がないなんて身体がなまっちまうな」

山本は肩をまわしながら苦笑いして言った。
聞くところによると、部活がない今は、山本はトレーニングやラン

ニングをしているらしい。

「このまま春休みとか夏休みとか冬休みとかと休みが繋がっちゃったらどうなるんだろうね」

「や、それはまじ勘弁だな」

たわいのない会話をしてツナたちは笑う。
何故かこういうのは久しぶりのような感じがした。

「そういえば、リボーンさんは？」

「あ、なんか調べ物があるみたいで、今は出かけてる」

「だからこいつらと遊んでたのな」

山本は仲良くおやつを食べる二人と二匹を見て言う。

「なんかツナ、お母さん状態だな」

「お、お母さん！？」

何故お父さんではなくお母さんなんだろうとツナは思った。
しかし、それほどツナは小さい子供の面倒を見るのがうまい。

「二人の匣兵器たちも遊ばせたら？」

「だな！おーい、次郎、小次郎！」

山本はアニマルリングに炎をともして呼びかける。
すると目の前に雨燕Ｖｅｒ．Ｖ（ローンディネ・ディ・ピオッジャバージョンボンゴレ）と雨犬Ｖｅｒ．Ｖ（カーネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）の二匹が現れた。

二匹はナッツたちの元へ行き、一緒に遊びはじめた。

「瓜はいいの？」

「えっ、いや…あの、あいつは…」

獄寺は気まずそうに頭をかく。

「瓜があいつらに何かするんじゃねえかって心配なんだろう獄寺」

「わ、悪いかよ！！」

山本は獄寺の考えを見透かしていた。
瓜は獄寺に慣れているのか慣れていないのかわからない。
ただ、しつけがなっていないのは事実。
ナッツたちに何かするかもしれない、と獄寺は思っていた。

「あいつらになんかやったら、飼い主である獄寺が責任とればいいんじゃね？」

「な…！」

獄寺は山本に反抗しようとしたがやめた。
山本が言うことにも一理あったからだ。

獄寺は何も問題を起こさないでくれ、と思いながらアニマルリングに炎をともす。

「にょおん」

リングから現れた瓜は、ひとつ欠伸をして、ナッツたちの方向へ歩いていく。

それを獄寺は飼い主、というよりも親の気持ちで見守っていた。

そんな心配をよそに、瓜はナッツたちに危害を加えることなく、一緒にじゃれはじめた。

それを見て獄寺は安心したようにため息をした。

「しっかし、あれが匣兵器なんて思えねえよな！普通にペットみたいな感覚だし」

山本の考えにツナは頷く。
一般人はライオンなんて飼ってないが、ナッツは子供だ。
ライオンと言うよりも、ポメラニアンのように見える。

「親父なんて、次郎と一緒に散歩に行っちまうんだぜ！肩に小次郎乗せて」
「あははっ、母さんもナッツのことすごい気に入って可愛がってくれるんだ。トンノも普通の鳥って思ってるからさ」

ツナと山本は自分の匣兵器の話を続ける。
獄寺は瓜の見張りと、不思議な生物の観察をしていた。

「でも、匣があってよかったかもね。アニマルリングじゃあ力を出しきれないみたいだし」

「だなっ！ジャンニーニと小僧に感謝だな！！」

未来から帰ってきたあと、リングに興味を持ったジャンニーニが、匣兵器たちの力を試したいと出向いてきた。

そしてツナたちはそれぞれ匣兵器たちの力を試したが、何故か完全な力は出せなかった。
ジャンニーニが調べた結果、アニマルリングではナッツたちの力でリングが壊れてしまう可能性があったため、リングから姿を現す場合、力を抑える必要があった。

ナッツたちの力を出し切るには、ボンゴレ匣でないといけないということで、リボーンがランボの１０年バズーカを使って未来へ行き、

事情を話してボンゴレ匣をもらってきたのだ。

未来のボンゴレの最新技術により、ボンゴレ匣のコピーをつくることに成功した。

しかし、最新技術でも限界があり、１０年後のツナたちの匣兵器は、何故か大人の姿になってしまったらしい。

ナッツは完全なライオンに、瓜は嵐豹（パンテーラ・テンペスタ）へと成長した。

次郎や小次郎などは、姿は変わっていないものの、精神年齢が大人へと変わったという。

しかし、姿は自由自在に変えることができ、１０年前の姿に戻ることもできるし、１０年後の姿になることもできるらしく、逆にボンゴレの技術者たちは喜んでいた。

「驚いたよな！しばらく小僧がいなくなったと思ったら、ボンゴレ匣持って出てくるんだもんな！！」

「リボーンはいつも何やってるのかわかんなくなるよ」

突然現れて消える。

消えたと思ったらまた現れる。

まさに虹、アルコバレーノだ。

「十代目、ナッツが寝てしまいました」

獄寺がナッツを抱えてツナに話しかける。
ナッツは獄寺の腕の中で気持ち良さそうに眠っていた。

「わ、ごめんね！瓜たちは？」

「まだ遊んでますよ」

どうやらナッツだけが疲れて眠ってしまったようだ。
ツナはナッツをリングに戻し、おやすみ、と声をかけた。

「あいつが沢田綱吉か」

「子供だからと言ってあなどるなよ」

外の物陰からツナを見ていたのは、怪しい黒服の男たち。

「行け」

一人の男が玄関に近づき、チャイムを鳴らした。

「あ、はーい」

ツナは急ぎ足で玄関のドアを開けた。
すると、目の前には長身の黒服。

「あの…どちらさま…ですか？」

「沢田綱吉、」

名前を呼ばれた瞬間、ツナはゾクリとなにかを感じる。
超直感が告げた。
こいつは危険だと。

しかし、気付いたときには遅く、ツナは首を強く叩かれ、玄関に倒れ込んだ。

「ツナ？どうした…、！！？」

異変に気付いた山本が部屋から顔を出すと、玄関には黒服の男がツナを抱えて出ていくところだった。

「おい、お前！！ツナになにをした！！」

山本の声に驚き、獄寺も玄関に出た。
気を失っているツナを見て、獄寺は状況を判断し、男をダイナマイトで仕留めようとした。

「オレに手を出したら、こいつの命もねえぜ」

男はツナの顔にナイフをそえ、脅すように言う、
ナイフが当たった頬からは、血がたらりとたれた。

山本と獄寺は、なにもできずに男を見る。

「まあ、こいつは人質だから一応殺さないでおく。オレたちの目的は、お前らボンゴレをつぶすことだからな」

「ボンゴレをつぶすだと!?」

「ボンゴレボスに伝えろ。次期後継者を助けたければ、我らアルヴィーコラファミリーの言うことを聞け、とな」

そう言うと男はすばやく逃げ出し、近くに止めていた車へ乗り込んで逃走した。

「ツナ!!」

「十代目!!!」

二人はなす術もなくその場に立ち尽くしていた。

「…どうする、山本」

しばらくしてから獄寺が山本に聞く。
山本は悔しそうに拳を震わせていたが、深呼吸をして答えた。

「これは九代目の出る幕じゃねえしな。ツナの守護者はオレたちだ、
オレたちがなんとかするしかねえだろ!!」

「…だな。」

獄寺は車が去っていった方向を一瞥し、山本に向き合って告げた。

「オレはリボーンさんを探す！山本は守護者全員に声をかけろ!!」

「了解っ」

二人はそれぞれ違う方向へ走り出す。

目的はひとつ。

ツナを助けるために。

標的２４　誘拐（後書き）

やっと私流のアニマルリングとボンゴレ匣の謎がとけましたー…

大人のナッツ…見たいです！

標的２５　集い（前書き）

勢いで書きました（笑）

今から学校です。ううー…

標的25　集い

「ほんとにこいつがボンゴレ次期後継者なんですか？ただの子供にしか見えませんけど…」

「ばーか。指をよく見ろ。ちゃんとボンゴレリングがあるだろ」

深い森へと入っていく車。
その中には気絶したツナをはさみ、リーダーである男と部下が座っていた。

車は砂利道に差し掛かり、ガタガタと揺れる。

「このリングがあると厄介だ。回収しとけ。」

部下は命令に従いボンゴレリングを指から抜こうとした。
しかし。

バチンッ

「うわっ、いってええ！！」

リングに触れた部下が手を抑えて呻く。
身体中が痙攣していた。

ボンゴレリングはツナから離れることを拒むように、光を放っている。

「…はっ。リングにこんなに気に入られてんなら、相当な奴だぜこいつは」

リーダーである男が深刻そうに、だが楽しそうにツナを見ていた。

「見物になりそうだなあ、これは」

「なに？ツナが連れ去られた？」

「はいっ、黒服の男たちに…確か…アルヴィーコラファミリーと言ってましたが…」

獄寺が息を切らしてリボーンに伝える。
その名前にリボーンは一瞬表情を強張らせた。

（まさかあいつらがまた襲うとはな…オレのいねえ間を狙ったわけか）

リボーンはしばらく考え込み、獄寺の肩に乗って言った。

「一回家に帰るぞ。」

「な、なぜですか!?」

そう言いながらも獄寺は家に向かって走る。

リボーンは思考回路を巡らせてひとつのことに気がついた。

（あいつなら…できるかも知れねえ）

リボーンは腕組みをして黙っていた。

一方山本は、ツナを助けるべく、守護者巡りをしていた。

商店街でランボを発見し、ツナの母親の奈々に適当な理由を言ってランボを連れてきた。

続いて、ちょうどロードワークをしていた了平を見つけ、事情を話

すと快くついて来てくれた。

了平にランボを預け、山本はクロームを探した。
偶然にも街を歩いていたクロームを見つける。
クロームも事情を聞いて、ボスのためなら、と了解してくれた。

残るはあと一人。
一番厄介な守護者、雲雀恭弥。

山本は学校へ行き、応接室へと入る。
雲雀は特に驚きもせず、山本をチラ見して手元の資料へと視線をうつす。

「雲雀、一緒に来てくれないか？大変なんだよ」

「事情がわからないんじゃあ、何も言えないよ」

雲雀は山本を見ようとせずに聞き返す。

「ツナが変な奴らに連れていかれたんだ。だからお前にもツナを助けるために協力してほしいんだ」

「なんで僕があの草食動物を助けなきゃいけないの」

雲雀は淡々の山本に聞く。
やっぱりな、と山本は諦めずに説得をした。

「なんでって、お前もボンゴレリングを持った守護者だろ？ツナの仲間だろ？」

「僕は群れるのが嫌いなんだよ。ひとまとめにしないでくれる？」

その言葉にさすがの山本も怒りを覚えた。
雲雀がその気なら、と山本は雲雀に言った。

「そういえばあいつら、並盛を散々荒らしていったな。建物とか、公園とか、そりゃあもうボロボロに」

ピクリと雲雀の肩が動く。
そして山本に聞いた。

「それ、ほんと？」

「ああ。並盛の風紀を荒らす奴らだぜ？」

山本の言葉をあっさりと信じ、雲雀は席から立ち上がった。

「並盛の風紀を荒らす奴は僕が許さないからね。あと沢田綱吉は並盛中の生徒だ。誘拐事件として扱わせてもらうよ」

そう言うと雲雀は窓から飛び降りてスタスタと歩いて行った。

（ツナのこと心配なんだろうな）

山本は笑いながら雲雀のあとを追った。

「…うう…っ……」

少し錆くさい真っ暗な空間。

ツナは頭を抑えながら起き上がった。

朦朧とする意識を無理矢理働かせ、何故このようになったかを思い出す。

（そっか、オレ…黒服の男に殴られて…）

辺りを見渡すが、なにもない。窓も、家具も。

唯一あるのは、ひとつの頑丈なドアだった。

ツナは立ち上がろうとするが、つまずいて倒れてしまった。

気付けば、両足と胴体、両手をロープでぐるぐる巻きにされていた。

ロープを解こうとするが、かたく結ばれたロープはまったく緩む気配がない。

（ポケットにグローブと死ぬ気丸が入ってるけど…これじゃ取れないな）

どうしようかと考えていると、頑丈なドアが開き、黒服の男たちが入ってきた。

「よー坊主。目は覚めたのか？」

「…ここはどこですか」

陽気な男の問いに答えず、ツナは男に質問をする。

男は苦笑いしながらツナに話しかけた。

「お前には抵抗しなけりゃ何もしねーって。オレらの目的は、ボンゴレをつぶすことだからな」

「ボンゴレをつぶす！？」

「ボンゴレはオレらにとっては邪魔ものでしかない。詳しいことは言えないが、お前な大切な人質さんだ。殺しはしないさ。ちなみにここは廃墟ってやつだな」

男はぺらぺらと話す。
そしてなにかを思い出したようにツナに問うた。

「そのボンゴレリング。不思議だよなあ。部下がそいつに触れただけで奴の神経がいっちまったよ。お前そいつになにをした？」

ツナは訳がわからずただ男を見ていた。
しかし、ひとつだけわかっていることがある。

「ボンゴレリングは人を選ぶ。」

「ふう～ん、お前はそんなリング様に選ばれたってわけか。」

男は歩いてツナに近づく。
そしてツナを見つめてにやりと笑う。

「お前にはすげえ力があるってんだな。まだ坊主のお前がボンゴレリングを嵌めれるってことは…」

そしてくるっと足を引き返してツナに告げた。

「その力、いつか見せてくれよ？」

オレがボンゴレをつぶしたあとにな。

そう言うと男たちは部屋からでていった。

また再び部屋に闇が訪れた。

「リボーンさん、十代目の家に全員集めてどうするんスか!?」

ツナの家のリビングにはリボーン、獄寺、山本、ランボ、了平、クロームと、少し離れたところに雲雀が集まっていた。

「いいか。今からツナの居場所を探す。それまでは誰も動くな」

「探すって、小僧にはツナの居場所がわかんのかよ!」

山本がリボーンに問うが、リボーンはそれを否定する。

「オレはわからねえが、こいつならわかる」

リボーンは隣にいたトンノを指差した。

「…トンノが？」

「トンノ、もういいぞ」

リボーンが合図すると、トンノは頷き、喋りはじめた。

「僕の力なら、ツナの居場所がわかるかも知れないんです」

「っトンノがしゃべった…！？」

「…すごい」

獄寺が驚く隣で、クロームが感動したようにつぶやく。

「僕はツナの力によって、大空属性となり、様々な力を使えるようになったのです」

「わかんねえかも知れねえが、そういうことだ。詳しいことは後か

ら聞け。今はツナの居場所を探すのが優先だ」

全員が頷くと、トンノは目を閉じ、集中する。

大空であるオレンジの炎を、トンノの炎で探す。

ピンッ

トンノは意識の中にある強い炎を見つける。
あたたかく、優しい。
確かにこの炎は…。

「…見つけた」

トンノは目を開け、炎を感じた方向を見つめる。

「…あっちだな」

リボーンはトンノに確認をして、全員に話しかける。

「行くぞ、お前ら」

そして全員がトンノを目印に目的地を目指す。

「トンノ、距離はどれくらいかわかるか」

リボーンは山本の肩に乗り、飛んでいるトンノに問いかけた。

「多分…５０ｋｍくらい」

「そんな距離走れるわけねえだろ！」

獄寺はあまりの距離にめまいを覚えた。

「安心しろ。そろそろだ」

リボーンがにやりと笑って言う。

その言葉の意味がわからなかった。

リボーンたちの前に、何台かの車が止まる。
そして中から出てきた人に、彼を知る獄寺たちは驚いた。

「ロンジ、遅かったな」

「すいませんリボーンさん。さあ、みなさん乗ってください。」

全員が呆気にとられていたが、そんなことをしている場合じゃないと、急いで車に乗り込んだ。

「ロンジ、トンノの後について行け」

「わかりました」

ロンジはトンノを追いかけて車を走らせる。

（今さらアルヴィーコラファミリーが…なぜだ?）

リボーンは一人、俯いて考えていた。

標的２６　アルヴィーコラの罪（前書き）

文を書く力が欲しいです。

後書きには今回の話の裏話を書きました。

くだらないもんだと思いますけど（笑）

標的２６　アルヴィーコラの罪

白と金の色をした羽を羽ばたかせ、あたたかな炎を目指す。

トンノは自分を追いかける車を気にしつつも、ツナのことを考えていた。

（僕が気配に気付いていれば…何故気付かなかったんだ！）

心の中で後悔が渦巻く。
ツナを守ると決めたのに。
トンノは自分を責めながら、ツナの無事を祈る。

（せめて、ツナの意識の中に入り込めれば…無事でいて、ツナ！！）

美しい翼と混ざり合って何かがきらりと輝いた。

「…っあー、ほんとに解けないや」

暗い部屋でひとり、ツナは縛られた縄を解こうと奮闘していた。
しかし頑丈な縄はびくともせず、縄の当たる肌は赤く変色していた。

部屋は暗いが、なんとか暗順応が働き、うっすらとまわりが見えるようになった。
だが、縄を切ることができるようなものはなにもなかった。

「どうしよう…すごい肌が痛い…」

特に呪いのある右腕が痛む。
たいした痛みではないが、地味な痛みが長い間続いていた。

「がるっ」

「!!?、ナッツ!?」

突然、ナッツの声が聞こえると、アニマルリングが光り、目の前にナッツが現れた。

「こらっ、勝手にでてきちゃだめだろっ」

「がるっ」

ナッツはぱたぱたとしっぽを振ってツナに寄り添う。
ツナは少々呆れつつも、暗闇の中でひとりだったので心強くなった。

ツナに寄り添うナッツは、しばらく離れようとはしなかった。

「っくそ！まだなんスかリボーンさん！！」

獄寺が耐え切れずに怒鳴る。
リボーンは獄寺に淡々と言う。

「落ち着け獄寺。トンノが言っていた距離は直径だ。だがオレたちは車で移動してんだ。わかるだろ、そんくらいは。オレたちも直径で行ったらどうなるかってこと」

「そりゃあ、いろんなもんにぶつかっちまいますが…スピードくらいあげれませんか！？」

「我慢しろ。車よりトンノのほうが断然スピードは出せるが、トンノはオレたちのためにスピードを落としてんだぞ。」

リボーンの言葉で獄寺は何も言えずに黙り込んでしまった。

頭上ではトンノが車を気遣うように羽ばたいていた。

（きっとみんなぴりぴりしてるだろうな…早く人気のないところにいかなきゃ…）

トンノはあたりを見回して道を探す。

すると、ある一点から炎の反応を感じた。

（…あの炎は！）

トンノは炎の方向へ向かった。

「！！、リボーンさん、トンノが方向を変えました！」

「よし、ついてけ」

ロンジがリボーンに話しかけると、そのままトンノに従うように指示をした。

「いいのか？小僧」

「ああ、あいつがいるんだ」

山本はわからないといった表情でリボーンを見ていた。

すると、車は一気に人気のない田舎道に出た。
そして鋭い音を立てて車が止まった。

「リボーンさん！！」

車のドアが開き、よく知る顔の人物が入って来た。

「結加、遅かったな」

「すいません！なかなか資料がなくて…」

結加は息を切らせながらリボーンに謝った。
驚きで黙っていた山本たちは、しばらく状況がつかめなかった。

「…っな！なんで結加がここに！！」

「結加にはあるものを調べてもらってたんだ」

「だから最近結加を見かけなかったのかあ」

休校になってからは、山本たちはまったく結加に会っていなかった。

「リボーンさん、アルヴィーコラは確かに九代目が抑えましたが…ボスが散らばった部下を集めて再びボンゴレを潰そうと目論んでいたそうです」

「小僧、アルヴィーコラってのはなんなんだ?」

結加の話を聞いていた山本がリボーンに聞いた。

「アルヴィーコラっていうのは、数年前にボンゴレを潰そうとボンゴレのまわりの一般人や同盟ファミリーを襲っていた奴らだ。それを九代目とその守護者たちがおさえつけ、鎮めたんだが…」

九代目はアルヴィーコラのボスがこのようなことは二度としない、と約束をしたため、ボスや部下を念のためにばらばらにして逃がした。

「だが復讐をしようと集まったってわけだな」

「それでツナを襲ったのか」

「許せねえ!!」

獄寺は拳を握りしめて怒りをあらわにする。

「奴らは多分、この先の森にある廃屋にいます」

「そうか、ご苦労だったな」

リボーンはしばらく考え込み、守護者たちに全員外に出るように言った。

「ツナの居場所が完全にわかった。だが車じゃスピードにも限度がある。だから匣兵器で移動できる奴は匣兵器を使って行け。無理な奴はトンノが乗せてくれる」

「わかったぜ！小僧！」

「わかりましたリボーンさん！」

「極限にわかったぞお！」

「ランボさんトンノに乗るもんね！」

「…わかった」

「咬み殺せばいいんでしょ」

獄寺、山本、雲雀は匣を開匣させる。

ランボ、クローム、了平、結加は巨大化したトンノの背中に乗る。

「ロンジ、ボンゴレ部下を集めてきてくれ」

「わかりました。お気をつけて！」

リボーンはトンノの頭に乗り、ロンジに見送られて獄寺たちと共に廃屋へと向かった。

「もうちょっと右…いたたっ！ナッツ、それは手だって！！」

暗闇にツナの声が響く。

ツナはナッツに縄をちぎらせようとしていた。

しかし縄はかたく、ナッツはさっきから誤ってツナの手やら足やら

をかじってしまっていた。

「くぅん…」

「ナッツが悪いわけじゃないって！そんな顔すんなよ！」

落ち込んでしまったナッツをツナは慌ててなぐさめる。

縄がちぎれないとすれば、ポケットのグローブと死ぬ気丸を取り出すしかない。

しかしポケットにまでも縄が巻かれており、取り出すことができなかった。

「ナッツ、縄はいいからさ、ポケットの中のグローブと死ぬ気丸を取ってくれる？」

「がるっ」

ナッツは今度こそ、とばかりにポケットのまわりの縄を鼻で押し上げながらポケットの入り口を目指す。

ツナもナッツがグローブと死ぬ気丸を取り出しやすいようにと出来るだけ体制を変えた。

「がんばれナッツ」

ひとりと一匹の大空は闇の中でもがいていた。

「お、あれじゃねえか」

リボーンが空から廃屋を見つけた。
かなり広範囲に及んでおり、まわりは森だけしかなかった。

シュンッ

トンノの脇をなにかが通り過ぎた。

「ちっ、来たか」

リボーンは舌打ちをしてトンノに下に降りるように言った。

異変に気付いた獄寺たちは、トンノが降り立った場所で止まった。

「まわりに敵がいる。気をつけろよ」

リボーンの言葉で全員が身構える。

すると茂みから黒服の男がリボーンたちを囲うようにぞろぞろと現れた。

「ここから先は行かせねえぞボンゴレ」

「大切な人質さんはボンゴレがオレたちに屈するなら解放してやるよ」

男たちは殺気を含んだ笑顔を見せた。

「そんなことはしねえ。ボンゴレに刃向かうとはいい度胸してんじゃねえか」

リボーンはレオンを銃に変化させ、男たちに銃口を向けた。

「そんなこと言ってられるのも今のうちだぞ。ヒットマン」

男たちもリボーンたちに銃口を向ける。

一瞬の沈黙。

ズガアアアアアアンッ

森に銃音が響きわたった。

銃をうったのはアルヴィーコラファミリー。

まわりが煙に包まれる。

男たちは顔を歪ませてにやりと笑った。

しかし、その余裕も次の瞬間に砕かれた。

キュインッ

突然男たちの銃が手から弾かれ地面に落ちる。

銃は真っ二つに割れていた。

「な、なぜだ!?」

「なぜかって?」

煙の中から青い炎が浮かび上がる。

風が吹き、煙が吹き飛ばされた。

「！！！！？」

「おまえらとは違うんだよ、覚悟がな！！！」

男たちは目を見開いて固まっていた。

青い炎を帯びた剣を持った山本が立ちはだかる。

その裏では、リボーンたちを守るように赤い炎がゆらゆらと揺れる。
炎がおさまると、リング状のフィールドが浮いていた。

「発砲寸前にＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．の防御匣を発動させるとは、獄寺もなかなかだな」

「いえっ！滅相もございません！」

「山本も煙で何も見えない中でよく銃だけを狙えたな」

「ははっ、まあな！」

リボーンたちのあまりの強さに、男たちは臆してしまった。

「んじゃ、」

リボーンが銃を再び男たちに向ける。

「反撃させてもらうぞ」

リボーンがにやりと笑う。

余裕の笑みには殺気が滲み出ていた。

標的２６　アルヴィーコラの罪（後書き）

さて、
今回は雲雀さんに私の理想をちょっと叶えてもらいました。
雲雀の匣兵器のロールは、トゲトゲした物体みたいなやつになりますよね。
あれに雲雀を乗せてみたかったんです↑
あれで移動してもらいたかったんです！
トゲが掴む場所になっていいかな、とか思ったり。

あと、了平をトンノに乗せたのは、
了平がひそかにトンノに乗ってみたいと思っていたという裏があったんです。
ちょっとお茶目な了平が見てみたかった。
ごめんなさい！

そういえば、トンノとムクロウって仲良くなれそうですよね…

以上、くだらない裏話でした！

標的２７　それぞれの奮闘（前書き）

ぶ、文がひどいです…！

こめんなさい…

標的27　それぞれの奮闘

鬱蒼とした森の中、さまざまな音が入り混じる。

剣で銃を弾く音。
なにかが爆発する音。

次々と黒服の男たちが襲い掛かる。
それを華麗に避け、攻撃をしかける山本と獄寺。

二人を先頭にして守護者とリボーン、結加たちは廃屋を目指す。

「二人とも大丈夫か？」

「大丈夫ッス！まだいけますよリボーンさん！」

「まだまだ余裕だぜ！」

リボーンが二人に問いかけると、二人は笑顔で答えた。
汗をかいているが、疲れた様子ではないらしい。

絶えない襲撃を、もろともせずうちかえし、ついに廃屋の目の前ま

でやってきた。

「でけえな」

「ここに十代目が…」

「よっしゃ、いこうぜ！」

山本が重いドアを開ける。
中は闇に包まれ、光の差し込むところはドアと所々にあいた穴だけだった。

「何も見えねえな。結加」

「はい」

結加は掌に光の玉をともし、天井に向かって放つ。

目の前が一瞬光で真っ白になったかと思うと、光の玉は太陽のように輝き、部屋を照らした。

「結加って晴の守護者なのな？」

「はい、一応は…」

「極限にオレと同じってことだなああ！？」

結加の光の玉の温もりは、疲れを癒すようなあたたかさだった。
それは晴の活性の力であるものだった。

「それにしても広いな。捜索範囲が広すぎる。ひとまず手分けしてツナを探すぞ」

リボーンは廃屋の中を見渡して告げた。
廊下はいくつもあるし、階はそれほどないもののおびただしいほどの部屋の数だ。
それを全員が共に行動して探すのはあまりにも効率が悪い。

そして割り振りはこのようになった。

・獄寺、山本
・了平、クローム、ランボ
・結加、トンノ
・雲雀、リボーン

雲雀は単独行動を望んだが、リボーンと行動をするということで承諾してくれた。

「そんじゃ、気をつけるんだぞ」

全員が頷いてそれぞれがパートナーと共にツナを捜索しはじめた。

「がるっがるっがるっ」

「もうちょっと、がんばれナッツ！」

ナッツは鼻を赤くしつつもあきらめずにポケットからグローブと死ぬ気丸を取り出そうと奮闘していた。

十分以上も時間が経過しているからか、縄もしだいにゆるくなりはじめていた。

「ぐるるるるっ」

ナッツが小さな身体の底力をしぼりだしたそのとき、ナッツはついにグローブと死ぬ気丸を掴むことができた。

しかしそのあまりの勢いに、ナッツはごろごろと地面を転がってしまった。

「うわああ、ナッツ！！」

ツナは慌ててナッツのもとへはいずりながら近寄った。

「大丈夫かナッツ？」

「がる…」

ナッツは弱々しい声で鳴いたが、その口にはしっかりとグローブと死ぬ気丸がくわえられていた。

「ありがとうナッツ！！」

ツナはナッツに笑顔で感謝した。

ナッツもそれにしっぽをふってこたえた。

ナッツからグローブと死ぬ気丸を受け取り、なんとかグローブを手にはめた。

そして死ぬ気丸を地面に転がして服用した。

額とグローブに炎がともる。

身体に力をいれれば縄はいともたやすく破れた。

身体に痛々しい跡は残るものの、体力はそれほど消費してはない。

ツナはドアに手をかけたが、頑丈な上に鍵がかかっているため開かない。

「ドアを突き破るか、壁をぶち壊すか…」

ナッツの力を借りることもできたが、ナッツは先程の作業で疲れており、さらにアニマルリングから現れたので力が制限されているのであまり無理はさせられなかった。

ズガンッ

試しにドアを殴ってみるが、多少のへこみができただけだった。

「おそらくここは地下だろうな…壁を壊してしまったら部屋自体が潰れてしまうかも知れない」

そうなればツナもナッツも生き埋めになってしまう。

となればここを脱出するにはこの頑丈なドアを壊すしかない。

ツナはひとつ深呼吸をして拳に力を込めた。

ある廊下では、戦いが繰り広げられていた。

山本は前に出て先陣をきる。
そして山本を守るように獄寺のＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．の防御匣のフィールドがまわりを漂っている。

敵が攻撃するとフィールドに邪魔をされ、反撃をしてくる山本の剣さばきはあまりの威力という最悪な状況に追い込まれつつあった敵は、だんだん冷静さが欠けてきていた。

「ガキのくせにふざけんな！！」

「ガキだからってなめんじゃねえ！！」

獄寺がフレイムアローを撃ち放った。
見事にそれは黒服の男たちに当たり、一人残らず倒れた。

「やるじゃねえか獄寺！」

「当たりめえだ野球馬鹿！てめえこそなかなかじゃねえか」

山本は獄寺を素直に褒めた。

獄寺も毒つきながらも山本を褒めた。

しかし、二人共打撲や捻挫はないものの身体中に傷を負っていた。

だがそんなことを気にしている場合ではない。

早くツナを探さねばと二人は自分を奮い立たせて先へ進んだ。

「マキシマムキャノン！！」

了平のパンチをくらった男たちは次々と倒れていく。

「うわあああ！なんだこれは！！！」

黒服の男たちのまわりに火柱がのぼる。

クロームは後ろから幻覚で了平を援護していた。

同時にクロームはあまり戦えないランボのことを幻覚で隠していた。

「よくやったぞクローム！！」

「…ありがとう晴の人」

了平が礼を言うとクロームは頬を赤らめて微笑んだ。

「よし、次の部屋だ！」

クロームは頷いてランボを抱えて了平につづいた。

「こっち来ないでよ！しつこいのよあんたたち！！」

結加は追いかけてくる男たちを光の玉で攻撃しながら逃げ回っていた。

しかし黒服の男たちは結加を捕まえようとしつこく追ってきていた。

「結加、僕にまかせて」

トンノは結加を後ろにかばい、オレンジの炎を放ち男たちの手と足を狙って突っ込んだ。

トンノの炎に当たった男たちは、調和の力によって手足が石化され、身動きがとれなくなってしまった。

「ありがとうトンノ！」

「どういたしまして」

「でもびっくりしちゃった…。トンノが綱吉くんの力で話せるようになったり、大空属性になったり…」

結加はひとつひとつ部屋を探しながらトンノに話しかける。
先程トンノからさまざまな事情を聞いたところだった。

「ツナはそれほど強い力を持ってるってことだよ。だからいろんな人に狙われる。そんなツナを僕は守りたいんだ」

トンノの目はオレンジ色に輝いていた。
それを見てトンノがどれほどツナを大切に思っているのかが痛いほどに伝わった。

「早く綱吉くんを助けなきゃね」

結加とトンノは互いに見つめ合い、捜索のスピードをあげた。

ズガンズガンッ

広い居間に銃声が鳴り響く。
それは威嚇するためのものであり、こちらに攻撃をしてくるようなものではなかった。

「おめえら、ツナがどこにいるかわかんねえのか？」

「残念ながらリーダーとその側近くらいしか知らないんだよ。オレらはあんたらの足止め役ってわけ。」

「そうか、ならおめえらに用はねえ。消えろ」

リボーンは銃口を黒服の男たちに向ける。
男たちも怯まずに銃口をリボーンに向けた。

リボーンの口許がゆるむ。

男たちはその笑みに疑問を抱いた。

その瞬間、後ろからなにかに殴られた。
一瞬にして男たちは気を失った。

「よくやったな、雲雀。おめえ気配を消すのが上手いな」

「まあね」

雲雀はトンファーを振って得意げに答えた。

黒服の男たちはまんまとリボーンたちの囮作戦に引っ掛かったのだった。

「こんな広い廃屋を探すのには無理があるよ、赤ん坊」

「まあな。だが、確かにツナは今生きてんだ。死ぬ前に見つけるしかねえだろ」

リボーンはレオンを一回り大きい銃に変化させた。

「雲雀、耳を塞げ。こいつの銃声はかなり響くぞ」

リボーンがにやりと笑う。

雲雀は仕方なく耳を塞いだ。

（この音なら廃屋中に響くだろうからな。気付けよ、ツナ）

そしてリボーンは引き金を引いた。

ドガアアアアアアアンッ

「！！？」

壁がびりびりと震える。
建物自体がかすかに揺れた。
それは地下にいるツナにも伝わった。

「…まさか、今の」

（リボーンか？）

ツナは直感的にそう思った。
もしそうならば、こんなところで足止めをくらっている場合ではない。

ツナは拳にありったけの力を込めてもう一度ドアに向けて拳を放った。

「はあああああああ！！！」

ガシャアアアンッ

炎を帯びた拳がドアにぶつかり、一気にドアが砕け散った。
そして急いで一階へのぼる階段を探す。

そしてひとつの階段が見えた。
ツナはそれをものすごいスピードでのぼっていく。

一階へ降り立ち、あたりを見渡す。
すると、暗闇の中から声が聞こえた。

「おっ、逃げ出しちまったのかあ坊主」

声のする方向を見ると、アルヴィーコラファミリーのリーダーが苦笑いをして立っていた。

「みんなはどこだ」

「知らねえよ、勝手にあいつらがやってきたんだよ。守護者全員来ちまうし、ヒットマンやら女の子やらも来たしよお」

その言葉にツナは驚愕した。

（みんなが…来てくれた！？）

獄寺たちだけでなくあの雲雀までもが来てくれたのだろうか。
リボーンや結加も。

ツナは目を閉じ、そしてリーダーを見据える。

「オレの仲間に手を出すならば、オレが許さない。」

このとき、ツナの心に変化があらわれた。

それをまだツナは知らない。

標的２８　最終関門“愛しさ”（前書き）

所々が雑ですね…

ちょっといつもより長くなりました

標的２８　最終関門“愛しさ”

守りたい者。
傍にいたい者。
笑いあいたい者。
なくてはならない者。
その者のためならば、
人は何にでもなれるもの。
己を動かす感情。
自然の節理、自然な行動。
人はそれ無くしては生きられず。
理屈ではあらわせれない感情。
それに気付いたとき、
人は強さを手に入れる。

「オレの仲間に手を出すならば、オレが許さない。」

ツナはアルヴィーコラファミリーのリーダーに向かって言う。

リーダーはツナを見て一瞬表情が強張った。

（嘘のない目…あれが大空か）

そしてあやしく笑いリーダーはツナに話しかけた。

「でもお前みたいな坊主がオレに勝てると思うのか？」

「勝てるさ。」

リーダーの挑発を嘲笑うかのようにツナが言い切る。

しばしの静寂のあと、動いたのはリーダーだった。

「あとで泣いても知らねえぜ！」

リーダーは銃をツナ目掛けて発砲する。

しかし、ツナは瞬時に移動し、リーダーの裏に回る。

「お前がな。」

背後から声が聞こえ、振り向こうとしたが気付いたときにはすでに遅く、背中にツナの蹴りが入った。

あまりの力に倒れそうになるが、なんとか踏ん張って持ちこたえた。

「…はっ！貧弱な身体のどこにそんなすげえ力があるんだか！」

「さあな。」

ツナは拳をリーダーに食らわせようとするが、手首を捕まれて阻止されてしまった。

「こんな軽い体重なら遠くまでぶっ飛ぶかもな？」

ギリッ、と力強く手首を握られ、ツナの顔が痛みで歪む。

だがツナは捕まれた手首を軸にしてリーダーの頭上をぐるりと回り、背中を蹴飛ばして拘束を逃れた。

「っく、この坊主が！！」

リーダーは再びツナを捕まえ、回し蹴りを食らわした。

「ぅあっ！！」

逃げることができなかったツナはもろにくらい、地面へ投げ出された。
そしてリーダーが倒れたツナに発砲した。

パアアアアンッ

「！！」

「今のって…」

「…行ってみようぜ」

守護者たちは銃声のした方向へ向かった。

「…ちっ、はずれたか」

リーダーは舌打ちをして銃を指でくるくるとまわす。
その視線の先には、宙に浮かぶ少年。

「ずりいぞ、飛べるなんてよお」

「これはオレの力だ。ずるいとか関係ないだろ」

頭上からツナがリーダーを見る。
それが気に入らないのか、リーダーはまた舌打ちをしてポケットに手を突っ込んだ。

「ならこれもずるくもなんともねえよな!!」

リーダーはポケットからもうひとつの銃と複数の手榴弾を取り出した。

そして時間をあけずに巧みに手榴弾と銃を使いこなす。
手榴弾を投げたかと思えば発砲、発砲かと思いきや手榴弾、といった小癪な攻撃を仕掛けてきた。

切り替えるスピードがとてつもなく速く、ツナは避けるのに精一杯だった。

シュッ、シュッ、シュッ、

手榴弾を避けると肌を銃弾が掠める。
銃弾を避けると手榴弾の破片が肌を傷つける。

ツナは顔やら手やら足やらが切りさいなまれていた。

（これじゃあ攻撃ができない…一度どこかに移動して…）

「十代目!!!」

「ツナ!!!」

「沢田!!!」

「ボス!!!」

「綱吉くん!!!」

一斉にツナを呼ぶ声。
振り返ると、守護者全員、リボーン、結加、トンノがツナを見つめていた。

「みんな!!!」

ツナが一瞬敵の存在を忘れ、仲間に気を取られる。
それをリーダーは見逃さなかった。

ドオオオオンッ

「っ！！！」

ツナがよそ見をしているうちに、リーダーはツナに手榴弾を投げつけた。

間近で爆発した手榴弾によって、ツナは吹き飛ばされ、壁へと激突した。

「十代目！」

獄寺たちがツナの元へ向かおうとするが、それをまだ残っていた部下たちに止められた。

銃を向けられ身動きのできない獄寺たちは、ただツナを見ていることしかできなかった。

「ははっ、ボンゴレ十代目と言っても所詮はガキだ。オレにかかればこんなもんだろ」

リーダーがゆっくりと倒れたツナに近づく。
リーダーの余裕の笑い声がツナの耳にはいりこむ。

（…身体が動かないや。このままオレ、死ぬのかなあ）

指先さえも動かすことのできないツナは、死を覚悟した。

（いつもオレはこうだ。なにをやってもダメダメで、ずっと悔しい思いをして…）

コツ、コツ、と足音が近づいてくる。

（今までの努力は無駄になるんだな…ごめん、みんな）

ツナは目をぎゅっ、とつぶり死の時を待った。

「ふざけんな！！！」

広い部屋にリボーンの声が響く。

誰もが黙ってリボーンを見た。

「悔しい思いなんて誰でもしてんだ！努力が無駄になることだって

あるんだ！だが、その悔しさは、努力は、いつか必ずどこかで役に立つんだ！
それをおめえはいつもダメダメな自分がいけないだとかで簡単に片付けやがって…。

いいか、ツナ。そんな無駄な感情は捨てろ！自分を見下すな！あきらめるな！最初からあきらめてたら意味がねえだろ！
可能性はいくらでもあんだ、それが例えどんなに低くても信じろ！

おめえは今、なにをするべきだ？

仲間を守るんだろ？
仲間を救いたいんだろ？

おめえが仲間に対して抱いた感情をさらけ出してみろ！

おめえが日常の生活に対して抱いた感情をさらけ出してみろ！

オレが育てた生徒はそういう奴だ、わかったか、ツナ！！」

ツナは、はっと我にかえった。

（仲間に…日常に対しての…感情…）

いつものように朝に目覚めて、優しい母とあいさつをする。

家を出れば友達が笑顔で出迎えてくれて、学校では昼寝したりたわいのない話をしたり。

夜はチビたちと遊んだり家庭教師から勉強を教わる。

現代でも未来でも、共に笑い、共に苦しみ、共に生きてきた仲間。

そして、死んでしまった仲間。

（ユニ…γ…）

『…沢田さん』

「！！？」

『おいボンゴレの十代目さんよお』

「この声は…ユニ、γ！？」

『沢田さん、あなたが仲間に、日常に対して抱いている感情はなんですか？』

『てめえ、とっくにわかってんだろ？』

「わ、わかんないよ！」

『よく考えてみて、沢田さん。仲間とは、日常とはかけがえのないもの。あなたを動かしているのは、その感情なの。』

『仲間を守りたいだとか、それだけじゃねえだろ？もっと大切な感情があるんだろ？』

「もっと大切な感情…？」

『わたしたちのために泣いてくれるのはうれしいわ。そしてわたしたちは沢田さんに対してその感情を抱くの』

『この感情なくしては人間なんか生きていられないさ。ほらお前、あの生意気なジジイにぎゃふんと言わせてやれ』

「ユニ…γ…」

『さあ、沢田さん。みんなが待ってます』

『さっさと助けてやれよ』

二人は一瞬にして消えた。

ツナに大切な言葉を残して。

（仲間に…日常に抱く…大切な…人間が必ず抱く…）

ドクン、と心臓が跳ねる。
そしてぽかぽかとあたたかくなる。

「…ああ、そっか。そうだったんだ」

「あ？」

突然喋りはじめたツナをリーダーは不審な目で見る。

「オレは仲間のために、平和な日常を送るために…戦ってたけど、ただ守りたいってだけじゃ勝てないんだ…」

ツナはふらりと立ち上がり、リーダーと向き合う。

「みんながいたから今のオレがいる。仲間も日常も、オレにとってかけがえのないもの。そして…
愛しいものなんだ！！！」

ツナの目がオレンジ色を帯びて輝く。

したたかで、まっすぐな。

そして炎が大きく燃えはじめ、風が吹き荒れる。

その威圧はすさまじく、その場にいた全員が圧倒された。

ヒュッ、と目の前からツナが消える。

先程よりもスピードが断然にあがっていた。

また後ろだろうとリーダーが振り向くと、ツナは真上から攻撃をしかけた。

思いきり蹴りをくらったリーダーは地面に突っ伏す。

リーダーが反撃しようとするが、ツナの動きのが速く、すばやく防御をして腹目掛けて拳を突き上げた。

その一撃でリーダーは完全に動けなくなり、その場に倒れてしまった。

それを見ていたリボーンが笑う。

「十代目!!」

「ツナ!」

守護者たちがツナに駆け寄る。
守護者たちは多少の傷はあるがツナほどでない。
そのことにツナは安心した。

「ツナ」

「リボーン」

足元でリボーンがツナを呼ぶ。
ツナはリボーンに目線を近づけるためにしゃがみこむ。

「合格だ。これで修行はコンプリートだぞ」

「…今回は、“愛しさ”だったのか？」

「そうだぞ。渡した紙を見てみろ」

ツナはポケットから紙を取り出して見る。

守りたい者。

傍にいたい者。

笑いあいたい者。

なくてはならない者。
その者のためならば、
人は何にでもなれるもの。
己を動かす感情。
自然の節理、自然な行動。
人はそれ無くしては生きられず。
理屈ではあらわせれない感情。
それに気付いたとき、
人は強さを手に入れる。

「その詩のとおりだ。“愛しさ”という感情がなければ人間生きていけねえんだ。
それとお前が今まで修行をしても呪いに効果がなかったのは、お前に余分な感情があったからだぞ」

「…余分な感情？」

ツナは、前にリボーンが言っていたことを思い出した。

この呪いの進行を妨げるにおいて必要な感情は、
感謝、冷静、幸福、リラックス、勇気、安心、愛しさ。

必要のない感情は、
欲望、執念、無念、空虚、軽蔑、シャーデンフロイデ、嫉妬。

ツナは自分自身に悔しさを抱く無念と、自分自身をむなしく思う空虚を持っていた。

だがしかし、無念と空虚を捨て、愛しさに気付いた今、遅効されていた忍耐力を完全に働かせることができるようになったのだ。

「これでおめえの呪いは進行を遅らせることができるはずだ」

「やったじゃねえか、ツナ！」

「おめでとうございます十代目！」

山本と獄寺がツナにことほぎた。

ツナはオレンジの目にかすかな動揺を浮かべつつも、目の前にいる仲間に笑顔を向けた。

「…くそっ、今度こそはボンゴレを足蹴にできると思ったのに…っ

！」

地面に倒れていたリーダーは悔しそうに握りこぶしを震わせていた。

「おめえがツナをなめてたってことだ。おめえみてえな奴にボンゴレが潰せるかってんだ」

リボーンの言葉にリーダーは更に悔しそうな表情を見せた。

「…ボンゴレ十代目さんよお…、」

「なんだ？」

リーダーとツナの視線がぶつかる。

ツナのまっすぐな目にリーダーは少し怯みながらも言い放った。

「オレを…今すぐここでオレを殺せ！！！」

「っ、なに言ってるんだ！」

リーダーの突然の発言にツナは驚いた。

「お前さんに負けた今、オレはアルヴィーコラとしての権力を失った！居場所がなくなった！生きている意味がなくなった！

だからオレを負かしたお前さんがオレを殺せ！」

「そんなこと、できるわけないだろ!?」

「うるせえ!それがマフィアの世界なんだよ!負けたら死ぬ、それが当たり前なんだ!!」

リーダーの言葉にツナは表情を歪ませる。
この男はマフィアの世界の決まりごとによって殺害を希望している。
それがツナには許せなかった。

「…っ、ふざけんな!!!!」

ツナの怒声にリーダーは驚いて目を見開いた。
額の炎が怒りをあらわすかのように揺れる。

「ふざけんな!そんなくだらない決まりごとで死ぬなんて、おかしいだろ!?世の中には死にたくなくても死んでしまった人たちがいるのに…っ、命を無駄にするようなことはするな!!」

「しかしこれがマフィアだ!昔からの、マフィア世界の掟だ!」

「オレはそんなの信じねえ!もしそんな掟があるなら…オレがっ、…オレがそんな世界を壊してやる!!」

「!!」

リーダーが、守護者が、アルヴィーコラの部下たちまでもが驚いた。

リボーンはにやりと笑ってツナを見た。

リーダーはしばらく目を見開いていたが、口許が緩み、自然と笑っていた。

「…ふっ。おもしれえな坊主。さすがボンゴレの次期ドンだ。…その指輪に気に入られてるわけがわかった気がするわ」

リーダーはツナに笑みを向けながら告げた。

「坊主。オレをボンゴレの部下にしてくれねえか？」

「…部下？」

「ふざけんじゃねえぞてめえ！！」

「落ち着けって獄寺！」

リーダーの信じられない言葉にツナは戸惑った。

「…なぜ？」

「お前さんになら、ついていってもいいと思ったからだ。今後ボンゴレのためにオレは生きる。必ず誓うさ」

ツナはリーダーの目を見た。
その目には、確かに偽りはなく、覚悟が見られた。

「お前が決めろ、ツナ」

リボーンが戸惑うツナに言う。
ツナは頷いてリーダーを見た。

「…わかった。お前を信じる」

「…さんきゅ、坊主」

ツナは優しい目をリーダーに向けた。
リーダーもはじめて優しい笑顔を見せた。

カツンッ

頭上から石が落ちて転がった。
なんだろう、とツナが上を見た。

すると、天井が今にも崩れそうな状態になっていた。

「っ！全員ここから離れろ！！」

ツナの言葉で全員が異変に気付き、急いで部屋を出る。

リーダーも逃げようとするが、ついに天井が崩れ、リーダーに襲い掛かった。

「リーダー…！！！」

ガシャアアアアンッ

あたりに砂埃がたちこめる。
しばらく視界が煙でおおわれ、なにも見えなかった。

リーダーはふと、不思議に感じた。
まったく痛みがなかったのだ。
恐る恐る目を開けると、驚愕した。

「…っ坊主！！」

「大丈夫…、か？」

ツナがリーダーに無事を確認する。
ツナは瓦礫から守るようにリーダーに覆いかぶさり、瓦礫をツナ一人で受け止めていた。

「大丈夫って…、坊主のが大丈夫なのかよ！？」

「…少し、大丈夫ではない気がする」

ツナは苦しそうに笑った。

炎が弱々しく揺れ、汗が滲み出ていた。

「…くっ！！」

ツナは力を振り絞り、炎で自分に被さる瓦礫を退かす。

そしてふらりと視界が歪み、リーダーの隣に倒れ込んだ。

「坊主！！！」

「ツナ！」

リボーンがツナたちに駆け寄る。

「…やべえな」

「なにがだ？」

リボーンが焦燥の表情をうかばせる。

そしてある一点を指差した。

リーダーはその一点を見て驚愕した。

ツナの腹部に、鋭い瓦礫が突き刺さっていたのだ。
服に血がにじみ、ツナの顔色がどんどん悪くなっていた。

「…くそっ、おめえらはすぐにボンゴレの救助班を呼んで対応しろ！いそげ！！」

守護者たちはリボーンの言葉ではじかれるように我に返り、忙しく動き出した。

「…なんでオレなんかを庇って…」

「そういう奴なんだ、ツナは。」

リボーンは応急処置をするために治療セットを取り出す。

「かつては敵だった奴でもツナは優しさを見せる。それにおめえはさっきボンゴレの仲間になった。だからツナはおめえを助けたんだ。…大空だからな。」

リボーンは無表情で治療の準備をする。

「…っ、リ…ボーン？」

ツナが荒く息を繰り返しながら、リボーンに話しかけた。

「坊主！！」

「…あなたは、無事…ですか？」

「お前さんが助けてくれたからな！」

「…よかった」

その言葉にリーダーは驚きを隠せなかった。
自分のことよりも他人のことを心配しているのだ。
リーダーは目にあついなにかが滲むのを感じた。

「ツナ、痛いかもしれねえが我慢しろよ」

リボーンは生理食塩水でツナの傷を洗いはじめた。

ツナの表情が苦痛で歪む。
そしてふとリーダーを見た。

「…なんで泣いてるんですか？」

リーダーはたくさんの涙を流していた。
そしてそれをなぐさめるようにツナが笑いかける。

「泣かないでくださいよ…」

そう言うとツナはゆっくりと目を閉じた。

腹が痛むがそれよりも眠気がツナを襲う。

ツナは深い眠りについた。

最終関門“愛しさ”クリア。

標的２８　最終関門“愛しさ”（後書き）

ツナが怪我しちゃいました。
書いてて苦しかったです…

修行がおわったので、そろそろ違うアレを出そうと思います。

標的２９　脱アルヴィーコラ（前書き）

お、お待たせしました…！
待たせてしまったくせに短い…！
ほんとにごめんなさい！

受験生は忙しいんです…

標的29　脱アルヴィーコラ

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ

定期的に聞こえる音。

それはツナの生きていることを証明する音でもある。

広い個室の中では守護者たち、リボーン、結加、ロンジ、トンノ、元アルヴィーコラのリーダーが眠っているツナを黙ってみていた。

森の廃屋でツナはリーダーを庇って怪我をした。

腹部に刺さった瓦礫は思いのほか深く、あたりどころが悪ければ臓器に突き刺さり死亡していた可能性があった。

しかし奇跡が重なり、臓器にあたるすれすれのところで瓦礫は止まっていた。

出血は多かったが、リボーンの応急処置とツナの人並みを超えた生命力で一命を取り留めたのだった。

だが油断はできない。ツナの顔色はまだ悪く、意識も戻っていない。

「…なんで十代目がこんなことに！」

獄寺がツナの傍らで泣きそうになりながらつぶやく。

「オレのせいだ…すまない。オレがいたから…」

「そんなこと言うなよオッサン。オッサンは悪くないと思うぜ？」

自分を責めてうなだれるリーダーを山本がなぐさめる。

先程までは敵だったが、次期ボンゴレボスであるツナがリーダーを仲間にすると決めたため、リーダーも病室に居座ることになった。

「ツナがてめえを助けたいと思ったから助けたんだ。無理矢理じゃねえんだ。てめえが気にすることはないと思うぞ」

リボーンにもなぐさめの言葉をかけられ、リーダーは苦笑いをして応えた。

「おい、今日はもう遅えから一旦全員帰れ」

リボーンが部屋にいる全員に言い放った。

時計の針は午後十時をまわっていた。

「しかし、リボーンさん…！」

「心配すんな獄寺。ツナにはオレとロンジがついてる」

「そうですよ。皆さんお疲れでしょう。一回家でゆっくりなされたほうがよろしいですよ。」

納得のいかないというような顔の守護者たちにロンジが優しく促した。

「そんなやつれた顔してたら、目覚めたツナが心配するぞ。ツナのことを思うなら、家に帰って寝ろ」

ツナのことを思うなら、その言葉で全員は渋々帰ることを決めた。

「僕は風紀の仕事で忙しいし、群れるつもりはないから行くよ」

雲雀が上着を翻して部屋を出ていった。

素直じゃねえな、とリボーンは思いながら雲雀を見送った。

「ボス…またくるね」

「沢田！極限にファイトだぞ！」

そう言ってクロームと了平も部屋をあとにした。

「ランボくん、行こ」

「ええ～っ、オレっち、ツナといたいんだもんね！」

「ママンが心配してるよ。こんな時間までお出かけしちゃってるんだから…。おいしいご飯つくって待ってるよ」

少し眠たそうにぐずるランボをあやしながら、結加がトンノに話しかける。

「あなたは…やっぱり、残るんだよね」

「うん、ツナの傍にいたいから。気をつけて帰ってね」

結加はトンノに微笑み、リボーンたちにお辞儀をし、ランボを抱えて帰っていった。

バサバサと羽を羽ばたかせてトンノがツナのベッドへ降り立つ。
衰弱しているツナを見て、トンノは気付かぬうちに涙をぽろぽろと流していた。

「…鳥が涙を流してる」

「そういや、普通に喋るし、やっぱ不思議な鳥なのな」

「今回のことは僕がいけないんだ。僕が気配に気付いてなかったから…」

トンノは涙を止めることができなかった。
そして自分のせいだと己を責めるトンノを見て、リーダーは心が痛くて仕方がなかった。

「獄寺たちも帰れ。明日来ればいいだろ」

「そうッスね…。朝一で来ます！」

「なんか差し入れでも持ってきてやるからな！」

「ああ、ありがとな。獄寺、山本」

獄寺と山本は意識のないツナに明日来るから、と伝えて部屋を出ていった。

「……すまねえな、鳥さんよお」

リーダーが涙を流すトンノに謝る。
トンノは驚いてリーダーを見遣った。

「オレが馬鹿なことしちまったから坊主はこんなんになっちまった。

ほんとに申し訳ねえ…責めるならオレを責めろ。オレが悪いんだからよ」

「……」

トンノは黙ってリーダーを見つめていたが、ふるふると首を横に振り、リーダーに話しかけた。

「いいんです。僕はツナを守らなければいけないから…今回のことは僕の不注意だ。……確かに、あなたはツナをさらって、ボンゴレを潰そうとしたけど…、あなたは反省してるし、悪い人じゃないし…それに、もう僕たちは仲間でしょ？」

トンノの優しい言葉が信じられなくて、リーダーは目を見開いた。
目の前にいる小さな鳥。
そのぬくもりは、自分を受け入れ、庇ってくれたツナと似ていた。

「…すげえな、大空ってよお。」

リーダーはくしゃっと笑ってトンノの頭を撫でた。

「ありがとよ、小さな鳥さんよお」

トンノは目を閉じてリーダーの手に擦り寄った。
それが嬉しくて、リーダーは目に涙をにじませた。

「腹が減ったな。ロンジ、何か買ってきてくれ」

「かしこまりました」

リボーンに買い出しを頼まれ、ロンジは嫌な顔せずそれに従った。

ロンジが部屋を出ていくと、リボーンはベッドに飛び乗って、布団を静かにめくった。

ツナの腕から伸びる痣。

それは鎖骨のところまで伸びていた。

さらに右足にも痣がおよび、いつの間にか太ももにまで達していた。

だが、忍耐力を強くする修行は完了した。

だから前よりは進行も痛みもマシになったはず。

しかし油断はできない。

相手がどれほどの力をもっているのかわからないから、その忍耐力までもを押しやって呪いの進行を早め、痛みを増させるかも知れないのだ。

「…そういえば、気になってたんだがよお、その気味わりい痣はなんなんだ?」

「そうか、おめえは知らねえのか。これは、ツナにかけられた呪いなんだ。」

「の、呪いだと!!?」

リーダーが目を見開いて驚いた。
リボーンは静かに頷いて話を続けた。

「左手首にも同じような痣があるだろ？それと伸びる痣がすべて繋がると、死んじまうんだ。
だが、その進行を遅くする方法…修行があることがわかった。ツナはさっきそれを完了させたんだ」

「さっき言ってた…“愛しさ”とかか？」

「ああ。それらが呪いに対抗する忍耐力を強くするのに必要だったんだ。だから一旦、今は一安心というところだな」

その言葉にも関わらず、リボーンが険しい表情をしているのに気付き、リーダーはそっとその痣に触れてみた。
しかし、すぐに手を離してしまった。

ツナの腕はとても冷たく、血の気はまったくない。
先程のツナとはまったく違い、身体がひんやりとしていた。

「大丈夫だ。こいつの生命力はかなり強い。すぐに目が覚めるだろ」

リボーンがそう言うと、部屋のドアが静かに開き、ビニール袋をぶら下げたロンジが入って来た。

「おっ、早かったなロンジ」

「皆さんがお腹を空かせていらっしゃるようでしたので…走ってきました」

ロンジは少し息を切らして笑顔で買ってきたパンを渡した。

「すまねえな。ほら、お前も食え」

ロンジに礼を言って、リボーンはリーダーにパンを投げた。

「…ありがとよ」

リーダーはぽかんとしたままリボーンに礼を言った。
そして受けとったパンを見たままつぶやいた。

「なんか…アルヴィーコラと全く違うな。アルヴィーコラはボスだけしか信じねえファミリーでよ…、こんなパンもらったり…優しくしてもらったことなんて一度もねえんだ」

「そんな冷てえファミリーなのか、アルヴィーコラは。」

「冷てえもなにも、仲間意識なんてもんはねえんだ。ボスだけが全て、みてえな集まりだったんだよ」

リーダーはくだらねえ、と鼻で笑った。
そのファミリーのボスが自分だった。
それがあまりにもくだらなく思えたのだ。

「まあ、アルヴィーコラがそんなファミリーだったとしても、ボンゴレは違うからな。ボンゴレは仲間意識は高いぞ。ツナがボスになれば、かなり仲間意識が強まるだろうな。こいつはそういう奴だからな」

パンを食べながらリボーンは言った。
リーダーは黙ってそれを聞いていたが、ふと口許をゆるめて笑った。

「オレはもうアルヴィーコラじゃねえ。オレが倒されたときから、もうアルヴィーコラなんていうマフィアは無くなったんだ。……オレは、こいつについてくさ。」

そう言うとリーダーはパンの袋を開けて一口食べた。

そして顔が綻びた。

先程の笑顔とは違う、優しい笑顔だった。

「…こんなうめえパン、はじめてだな」

リーダーと目が、一滴の水できらりと輝いた。

標的３０　不完全な力（前書き）

がんばって一日2話更新！

では、どうぞ（´ω`）

標的３０　不完全な力

真っ暗闇な空間。
光も音も、全てが遮断された場所。

そんなところに、ただ一人、ツナは立っていた。

「…ここどこだろ？」

辺りを見回しても黒が広がっているだけ。
なんの感覚もなく、足も地面についているというわけではないらしい。
つまりは、浮いているようだ。

「なんでだれもいないんだよ…、おーいっ、誰かー！！」

終わりの見えない闇にツナは声をかけてみるが、なんの返答もない。

確か先程までは森の廃屋にいて、アルヴィーコラのボスと戦い、彼をボンゴレに迎え入れると言っていた。
すると天井が崩れ、自分が下敷きになった。
そこから何か会話をしたような気がするが、まったく覚えていない。

気付けばここにいた。
ただそれだけしかわかっていなかった。

「何がどうなってるんだよ…！」

見えるのは自分自身のみ。
精一杯手を伸ばしてみるが、何も触れるものはない。

ツナはただ立ち尽くしていた。
実際は浮いているのだが。

途方にくれていると、どこからか音がかすかに聞こえた。
方向はわからない。
ただ、自分を囲む闇全体から聞こえた。

わけもわからず、きょろきょろと音の根源を探していると、かすかだった音がだんだんとはっきりしたものとなってきた。

「…の……、……を…」

「え？」

ツナはじっとその音に集中した。
そしてその音は誰かの声だとわかった。

「……飛び去る鳥の帯びる光
その煌煌としたさまは
悪を浄化しあまねく希望
それを決して潰してはならない
それは人の及ばぬ世界の使い
ただ　優しく美しく光る者には
同じ景色が見えるであろう」

「…！？」

ツナは驚愕した。
それは聞いたことのある詩だった。
不思議な声はつづける。

「すべての生き物に与えられた試練
己よりも勝る力を持つ者に
恐れず逃げず立ち向かうとき
心に芽生える小さな芽は

やがて大きな己を生む」

「これって…」

ツナは驚きながらも耳をすまして声を聞いている。

「荒む天気　荒む空気
それは光を見失った心の暴走
しかしそれを包みなだめるのは
広く大きな晴れ渡る空
その優しい空に触れたとき
癒され浄化されるとき
完全な大空があらわれる」

「やっぱり、修行のときのヒントの詩だ…」

ツナは落ち着きを取り戻そうと深呼吸をするが、なかなか心臓は不定期な動きをやめない。

なおも声は聞こえてくる。

「ふと感じる暖かさ
それは当たり前のようで
手に入れ難いぬくもり
忘れてはならないぬくもり
気付いたときにはじめて
そのありがたさに包まれる」

「……」

ついにツナは無言になった。
ただ緊張する身体を、手を震わせていた。

「守りたい者。
傍にいたい者。
笑いあいたい者。
なくてはならない者。

その者のためならば、
人は何にでもなれるもの。
己を動かす感情。
自然の節理、自然な行動。
人はそれ無くしては生きられず。
理屈ではあらわせれない感情。
それに気付いたとき、
人は強さを手に入れる。」

ふと、声がやんだ。
しばしの沈黙。
それがさらにツナの緊張感をあおる。
チカッ

暗闇の中で、なにかが瞬いた。
次の瞬間、あたりは光につつまれ、白におおわれた。
ツナはあまりの眩しさに目をつぶって、両腕で目を保護する。

光がおさまりかけたとき、また不思議な声が聞こえた。

「願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる」

ゆっくりと目を開けると、ツナは再び驚愕することとなった。

目の前にいるのは。

「オ……オレ!?」

くせのある髪の毛。
小さな身長。
両手にはグローブ。
目はオレンジ。
額にはゆらめく炎。

それはハイパー化したツナだった。

「な、なななんで!?」

ツナは震える指先をもう一人の自分に向ける。
ハイパー化したツナは優しく微笑んだ。

「オレは、もう一人のお前。つまり、心の中に生きているお前ってわけ」

「もう一人のオレ!?」

目の前の自分が話している。
目の前の自分が存在している。
それだけで驚くには十分だと言うのに。

「忍耐力を強くするために、修行ってやつをしただろう?そのおか

げで、長年封印されていたオレは目覚めたってわけだ」

「封印って…なに、知らないよ！？」

「お前は知らないだろうけど…まあ、オレ自身が自ら封印したんだけど」

「なんで自分で自分を封印するんだよ！」

ツナは驚くことに疲れてしまった。
だがそんなツナに単発入れずにもう一人のツナは話をする。

「お前が小さい頃、オレはお前の能力として心の中で生きていたんだが、お前の能力…オレがあまりにも強い力だったから、オレはオレ自身を封印したんだ」

「なんで封印する必要があったの？」

呆けた表情で質問するツナに、もう一人のツナがため息をついて説明しはじめた。

「考えてみればわかる。お前はプリーモの子孫だ。ということは必然的にボンゴレ十代目候補として名があがる。そうなるといろんな奴らから狙われるんだ。オレが心の中に生きていることで、お前は普通の人間とは違う気を纏っていた。それはマフィアの目にとまるものだった。お前を守るためにも、オレはオレ自身を封印した。こ

こまで言えばわかるか？」

ツナはおずおずと頷いて苦笑いをした。
あまりにも自分とは違ったのだ。
雰囲気から喋り方、頭のつくりまでもが。

「ま、オレが封印されればお前はただの凡人にしか見えないからな。流石に中学生ともなれば、ボンゴレボスとしてのなにかが起こるかも知れないと思ってたんだが…変なことに巻き込まれまくったな」

「オレだって、まさかこんなことになるなんて思ってなかったよ！マフィアのボスだなんて…なれないのに」

ツナは膝を抱えてぼそぼそとつぶやいた。
もう一人のツナは呆れたように二度目のため息をついてツナに話しかけた。

「お前…ボンゴレをぶっ壊すんだろ？プリーモたちに宣言してたじゃねえか」
「あれは勢いっていうか、なんていうか…」

「なんと言っても、お前はボンゴレのボスになるんだ。だが、その前に呪いを止めなければいけない。そのために忍耐力を鍛え、オレが目覚めた。」

もう一人のツナは真剣な眼差しでツナを見つめる。
それにつられてツナも見つめかえす。

「オレは目覚めたばかりだ。完全な形ではない。完全なオレを目覚めさせるには、まだ必要なものがある」

「必要なもの？」

忍耐力のほかになにが必要なのだろうかと、ツナはあれこれ考えてみたが、その答えは意外なものだった。

「ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）の持つオレの…ｃｕｏｒｅ（クオーレ）、心臓のようなものだ」

「し、心臓!?心臓って、じゃあオレには心臓がないっていうの!？」

「馬鹿。お前のじゃない。それに心臓のようなものであって心臓ではない。つまりはオレの中心核のようなものだ」

自分につっこまれるとおかしな気分だな、とツナは呑気に思っていたが、もう一人のツナは話を進める。

「オレが完全に目覚めるためにも、ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）を目覚めさせるためにも、お前はｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）を七人集めなければならないんだ。ウライラに捕まる前にな」

「どうすればいいんだよ…」

「心配するな。お前は自分が正しいと思ったことをやればいい」

もう一人のツナは優しく微笑み、ツナの頭をぽんと軽く叩いた。

「そうだ、オレのことは綱吉と呼べ。」

「自分の名前を呼ぶのっておかしいよね…」

「気にするな。そろそろ目覚めたらどうだ？リボーンが心配そうにお前を見ているんだけど」

もう一人のツナ…綱吉は、上を指差しておかしそうに笑った。

「オレはお前の一部だ。だからいつでもお前の心の中にいる。呼べば必ず答える。だから聞きたいことがあったらいつでも聞け」

そう言うと綱吉はツナの背中を軽く押す。
すると白い世界がゆがみ、ツナはゆがみの中へ引きずり込まれていった。

綱吉に話しかけようとしたが、その前にすべてが消えてしまった。

「…っう、ゲホッ、ゲホゲホッ！」

「ツナ！？」

突然ツナが苦しそうに咳込んだので、リボーンは驚いてベッドに飛び乗った。

「おい、ツナ、しっかりしろ！」

その声に応えるように、ツナのまぶたがゆっくりと開かれる。

そして琥珀色の目がリボーンの姿をとらえた。

「……リ…ボーン？」

「…ったく、迷惑かけやがって」

リボーンがツナの額を叩いた。
少し痛かったが、リボーンがずっとそばにいてくれていたということを知り、思わず笑顔になってしまった。

「ありがとう、リボーン」

「オレだけじゃねえ、全員にも言っとくんだぞ」

ツナは頷いて深く息を吸う。
今さら酸素マスクをしていることに気付いた。

そして腕には点滴やら何やらが沢山刺さっていたりついていたりしていた。

「おめえの運の良さに医者が驚いてたぞ。少しでも瓦礫がズレて刺さってたら、即死だったみてえだぞ」

「ああ…だからお腹が痛いのか…」

目覚めたときからズキズキとお腹に痛みが生じていた。
それは瓦礫の刺さったせいなのだと今気付いた。

「よかったなー、生きてて」

「おめえがすぐ死ぬようなヤワな奴だなんて思ってねえよ」

リボーンはロンジに買わせたであろう缶のエスプレッソコーヒーを飲んでつぶやいた。

ツナはそうなんだ、と独り言を言い、思い出したようにリボーンに話しかけた。

「…リボーン」

「ん、なんだ？」

「…ただいま」

ツナは笑顔でリボーンに言った。
リボーンもにやりと笑って答えた。

「ああ、おかえり」

朝方の清々しい大空は、町一帯を包み込んでいた。

大空の目覚めを喜ぶかのように、鳥がさえずりをはじめた。

標的３０　不完全な力（後書き）

なんだかんだで３０話になりました。
まったくおわる気配がない！

こんなだらだらな小説ですが、これからもよろしくおねがいします！

標的３１　もう一人のツナ（前書き）

週末に沢山更新しようと思ったけど…
疲れすぎて寝てしまってました！

ごめんなさい…

標的３１　もう一人のツナ

「もう一人のおめぇだと？」

リボーンが顔をしかめて確認する。
それにツナはおずおずと頷いた。

病院の広い個室にはツナ、リボーン、リーダー、ロンジ、トンノがいた。
だが、ツナとリボーン以外全員はソファで寝ていた。
起こしては悪いとツナはリボーンに静かに話しかけた。

「夢…っていうのかな？なんか最初は真っ暗だったんだけどさ、いきなり明るくなって、そしたらもう一人のオレが出てきたんだ」

「で、そいつがツナの“能力”だとか何とか言ってたんだな？」

「うん。でも姿はオレがハイパー化したときの姿で、頭も…悔しいけどオレより良かった…」

ツナが不満を表情にあらわす。
ツナの“能力”である“綱吉”は、ハイパー化したときの冷静さに加え、なかなか頭が冴えていた。
自分とまったく同じなのに、とツナは不平を言った。

「んで、今回の修行でそいつの一部が目覚めて、ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）

を探せと？」

「その人が、オレの…綱吉の中心核みたいなものを持ってるみたいなんだ。…あ。」

「ん、どうした？」

話の途中で突然口を開けて固まったツナに、リボーンは話しかける。
ツナの顔は相当間抜けだった。

「…そういえば、話しかければこたえてくれる…みたい」

ツナがへらっと笑う。
そんな大切なことを忘れていたのかと、リボーンはため息をもらした。

「じゃあ、今も会話できるのか？」

「んっと…、待って」

ツナは自分の意識を集中させ、心に問いかける。

（…ねえ、綱…吉？）

（…どうした？ツナ）

「！！！」

本当にこたえた。
もう一人の自分が。

その様子を見て状況を理解したリボーンは綱吉に話しかけた。

「おい、外にでられるか？」

（…でれないことはない）

綱吉は一瞬黙ったが、それにこたえた。
そしてツナの心臓部分が輝き、人の姿となってなにかがあらわれた。

「うわっ！」
「まじでツナと同じ顔か」

揺らめく額の炎とオレンジ色の目。
たしかに外見はハイパー化したツナだ。
だが、本物はベッドの上で驚いた顔をしている。

綱吉はそんなツナを見て微笑み、頭をぽんぽんと撫でた。

「おめぇがツナの“能力”か」

「そうだ」

綱吉が短く返事をする。

リボーンはふんっ、と鼻をならしてツナと綱吉を見比べて言った。

「たしかに、綱吉のほうが冴えている雰囲気だな」

「なにそれ、ひどいよリボーン！」

ツナがリボーンに文句を言うが、それを綱吉に止められた。

「騒ぐな。傷口に響くだろ？」

「…うう。」

綱吉に注意されツナは呻いて大人しくなった。
はたから見れば双子の兄弟にも見える。
そっくりすぎておそろしいが。

「おい、おめぇ、まだ完全に目覚めていないと言うが、ツナの能力としては、どれほどの力を持ってるんだ？」

「能力として…か。よくわからないが、まあ…地球ひとつは支配できるんじゃないか？」

「ありえないありえないありえなーい！！」

真剣に考える綱吉にツナがつっこみを入れる。

（地球ひとつを支配！？なんで世界征服で例えてんの！？）

冗談はやめろ、とツナは綱吉を睨む。
綱吉は微笑んで話をつづけた。

「とにかく能力としては申し分ないほどだろうな。だがその分（スペ）ｓｐｅｒａｎｚａ（ランツァ）の元へ行くのは難しい」

「おめぇはｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）がどこにいるのか知らねぇのか？そこにおめぇもいるんだろ？」

「…それが……」

綱吉は眉を寄せて俯いた。

「…ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）とオレの居場所が…霧がかったみたいにわからないんだ」

「なに？」

リボーンは深刻な顔をしている綱吉に問いただす。

「自分の場所ならわかるはずなのに…まったくわからないんだ。なにかに邪魔されているみたいだ」

「なにかに邪魔されてる？」

「よくわからない…なにがどうなってるのか…」

綱吉はひそかに混乱しはじめた。
それをツナは感じ取った。

綱吉はツナであり、ツナは綱吉なのだ。

「…っ綱吉！！」

ツナは綱吉の服の袖をつかんだ。
綱吉ははっとしてツナを見つめた。

「綱吉…もういいよ！慌てなくて、焦らなくていいから！」

ツナは綱吉がかすかに震えているのを感じた。
ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）と綱吉自身の居場所がわからなくて不安なのだろう。

「大丈夫だよ！ｔｅｓｏｒｏ　ｍａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）が揃えば連れてってくれるって言うし！綱吉が気にすることないよ！」

「…ツナ」

「そうだぞ綱吉。ツナが連れてってくれるんだ。安心しろ」

「え、オレが連れてくの！？」

ｔｅｓｏｒｏ　ｍａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）が連れてってくれるのではないか、とツナはリボーンにつっこんだ。

それを見ていた綱吉は笑顔をこぼした。

「馬鹿みてぇな笑顔もツナそっくりだな」

「ひでぇ！！」

「オレはツナの能力だからな」

笑顔の戻った綱吉を見てツナはほっとした。
自分と同じ顔なのにまったく別人のように感じるのはハイパー化しているからだろうか。

「しかし、ツナと同じ顔のやつを綱吉って呼ぶのは変な感じがするな」

「…名前を変えたほうがいいか？」

「確かにオレも…変な感じしてたんだよね…」

リボーンとツナは目の前の“ツナの能力”の“綱吉”の名前に違和感を感じていた。

「よし、ツナ。決めろ」

「えっ、名前を！！！？？」

ツナは綱吉の新たな名前を決めることにたじろいだ。
トンノの名前を決めたとき、ネーミングセンスがないと言われたからだ。

「オレが決めたら…へんな名前になるんじゃ…」

「ツナがつけてくれるなら…オレはかまわない」

ツナはまさか、と綱吉を見遣った。

綱吉は微笑んで頷いた。

「オレはツナがつけた名前がいい」

「…だそうだ。さっさとつけてやれ」

綱吉に指名され、リボーンに促され、ツナは後に引けなくなった。

前回のようなヘマはしないように、ツナは真剣に考えはじめた。

ツナが一生懸命考えている間、リボーンと綱吉はツナの顔を見て笑っていた。

ひらめいたかと思えば暗い顔になり、しかし次の瞬間には明るい顔に戻り、とさまざま表情を浮かべながら考えていたのだ。

ツナが百面相を繰り広げて考えること数分。

「…うん。決めた」

ツナが自信満々に顔をあげた。

しかし。

「…なにやってんの？」

ツナは笑い転げているリボーンと綱吉につっこんだ。

「いや…なんでもねぇ。…で、どんな名前にしたんだ？」

リボーンが笑いをこらえながらツナに聞いた。

ツナはこれでいいのかな、と独り言を言いながらも答えた。

「…と、徳松なんて…どう？」

「…徳松？」

綱吉ははじめて聞いた名前を聞き返した。

「徳松っつったら…将軍徳川綱吉の幼名であり、子供の名前でもある名だな。よく知ってんじゃねえか、ダメツナが」

「いや…小さい頃から父さんにずっと聞かされててさ…、オレの能力ってことは、オレ自身だし、なんか…オレの子供、みたいな感じがしたんだよね！」

ツナは照れながら笑い、綱吉を見た。

「…どう、かな？渋いかな？」

「…いい。」

綱吉は嬉しそうに笑って答えた。

「ツナが考えてくれたから…オレは、徳松でいい」

「親バカならぬツナバカだな」

リボーンはにやりと笑って二人を見た。

「んじゃ、おめぇは今から徳松だ。よろしくな、徳松」

「ああ、よろしく頼む」

綱吉は…徳松は、優しい微笑みで二人を見つめた。

「んー…なんだあ？さわがしいなあ」

もそりと、ソファで眠る男が起き上がった。
その男の懐で寝ていた鳥もつられて目を覚ました。

反対側のソファで寝ていたロンジは、寝起きではないかのようにスッキリとした顔で起きた。

「なにがあったん……」

なにがあったんだ、と言いかけた途中で、リーダーは氷のように固まってしまった。

同じようにトンノもロンジもぴたりと固まってしまった。

「…ど、どうしたの？」

ツナが三人に問いただすが返答はない。

「ねえ、ねえってば！」

「…つ、……つ、…」

ロンジが目を見開いてツナを指差す。

「…ツ…ツ、…ツ……」

トンノが小さな身体を震わせる。

リーダーは無口になっていた。

「…ねえ」

「綱吉様が目を覚ましたあああああ！！！！」

「ツナが二人いるううううう！！！！！」

「ぎゃあああああああああああ！！」

ツナが目を覚ましたことに驚くロンジ。

ツナが二人いることに驚くトンノ。

なにに驚いているのかわからないリーダー。

三人の叫び声が、早朝の病院に響き渡った。

標的３２　友人と能力の対面（前書き）

い、急いで書いたらこんなことに…（笑）

相変わらずのダメダメ文章ですが、どうぞ見てってください！

標的３２　友人と能力の対面

ツナたちは耳が痛かった。

鼓膜がやぶれそうで、頭までもがキンキンと痛んだ。

その原因はロンジ、トンノ、リーダーの三人。

この三人が病室内で叫び声をあげたからである。

叫び声の理由はツナともう一人のツナ、徳松。

彼はツナの“能力”である。

ツナが目覚め、しかもツナそっくりの徳松がいるため、三人は驚いて叫んだのだった。

「うるせえ！」

リボーンが不機嫌そうに銃を三人に向けた。

すると三人はひっ、と小さな悲鳴をあげて固まった。

「おい、ツナ。説明してやれ」

「ええっ、オレ？」

「あたりめぇだ。おめぇの事で驚いてんだぞ」

それもそうだ、と徳松も頷いた。
ツナはしぶしぶ説明しはじめた。

説明をしはじめて数分、ようやく三人は落ち着きを取り戻し、冷静にツナの話を聞いていた。

「…つまり、この方は綱吉様であって綱吉様ではなく、綱吉様の“能力”と言うことですか？」

「うん、そうなんだ」

ツナは自分の説明で理解してくれるだろうかと心配していたので安心した。

「しっかし、まじで坊主と瓜二つじゃねえか。」

「オレはツナの能力だからな」

徳松がリーダーに当たり前とでも言うかのように答えた。

「だが徳松、おめぇこれからどうすんだ?そのままの姿でいんのか?」

「…そのつもりだけど」

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

ツナが慌てて徳松を止める。

「オレとまったく同じ姿だったら、いろいろややこしくなるだろ!?みんな混乱しちゃうって!」

ツナは自分の顔と徳松の顔を交互に指差して説明した。
徳松は、ああ…そっか、と今気付いたようにつぶやいた。
ツナよりも頭は冴えているが、どこか抜けているらしい。

「徳松…なんか、姿変えられない?」

「無理だな。オレはツナの能力だから、ツナと同じような姿だけしか出来ないんだ。」

すっぱりと言い切られてツナは言葉をなくしてしまった。
一体どうすればいいのかと考えを巡らせていると、徳松がなにかを思い出したらしく、ツナに話しかけた。

「姿を変えることはできないが…小さくなるくらいなら出来るはずだ」

「ほんと!?」

ツナが確認すると、徳松は目を閉じてなにかをつぶやいた。

すると、徳松から光が発せられ、その姿がみるみる小さくなっていく。

光がおさまると、そこには掌サイズのハイパー化したツナと同じ顔の徳松がいた。

ちょこんと座る姿はかわいらしい小人のようだ。

「どうだ、ツナ？」

「すごいよ徳松！」

「これならいつでもツナのそばにいれるな」

リボーンも納得したように頷いた。

「オレはツナの能力だから、ツナの心の中で生きているけど、外に出るときはこの姿で現れればいいか？」

「うん、ありがとう徳松」

ツナは笑顔で徳松にお礼を言った。

それをロンジたち三人は黙って見ていた。

「なんか…すげえなあ坊主。」

「ツナの能力ってまだ未知なんだ…」

「さすが綱吉様…ですね」

ツナは両手を振ってそんなことない、と否定する。
しかしそれを徳松は肯定した。

「ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）から聞いただろ。ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）はツナを待ってるんだ。地球を生み出した神がお前を頼っている。つまりそれは、ツナがそれほどの能力を持ってるってことだろ？」

「そうだぞツナ。だからおめぇはアッジョルナーレに狙われてんだ。そんくらいわからねぇのか」

二人にごもっともなことを言われ、ツナは何も言えなくなってしまった。

「…そうなのかな。全然わかんないや」

「今はわからなくても、いずれわかる。近い将来にな」

徳松がツナの肩に飛び乗って言った。
その目は真実しか語っていなかった。

バタバタバタと廊下を走る音が聞こえる。
なんだろう、とツナがベッドの上からドアをのぞくと、そのドアが思い切り音をたてて開けられた。

「十代目えええええ!!!」

「ツナー、起きたかー?」

ドアを開けたのは、ツナの友人であり、守護者である獄寺と山本であった。

「ご、獄寺くん!山本!」

「おめぇらもう少し静かに来い」

目を覚ましていたツナを見ると、獄寺は泣きそうな顔で、山本は満面の笑みでツナの元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか十代目!」

「おはよーツナ!傷は大丈夫か?」

「うん、なんとか大丈夫…いててっ！」

ベッドから起き上がろうとすると、縫ったばかりの傷が痛み、ツナはベッドに伏せた。

「ダメツナが。手術したばっかなんだぞ」

「う…忘れてた…、いてーっ」

傷口をさするツナを心配して獄寺がおろおろしている。
山本は苦笑いで大丈夫かと声をかけた。

すると、山本がツナの首の後ろになにかがいることに気付いた。

「ツナ…そいつ、誰だ?」

「え?」

ツナは首を指差され、なんだろうと首に手をそえる。
すると、こつんとなにかが当たり、忘れていた存在に気付いた。

「…あー！！徳松っ！！！」

ツナは慌てて首の後ろに隠れていた小さな自分の分身を掌に乗せた。

「ごめん徳松！大丈夫だった！？」

「ああ…お前こそ、傷大丈夫か？」

徳松は苦笑いしてツナを心配している。
その光景を獄寺と山本はア然として見ていた。

目の前にはツナとツナにそっくりな人間。
だがそれはあまりにも小さく、しかもハイパー化したツナだった。

「…あ、あの…十代目…その、十代目にそっくりな…そいつは誰ですか？」

「まじでツナと同じ顔なのなー！お前誰だ？」

二人の問いにツナがたじろいでいると、徳松はツナのかわりに答えた。

「オレはツナの能力である徳松だ。お前らは雨と嵐の守護者…だろ

？」

その堂々とした態度に少々驚きながらも、二人は頷いた。

ツナはなにも知らない二人に今まであったことを一通り説明した。

獄寺と山本は素直にそれを聞き、理解した。

「そっかー、すげえのなお前！」

「さすが十代目の能力様！」

「能力様、じゃなくて徳松だ」

徳松は“能力様”と呼ばれるのに違和感を感じ、獄寺に言った。

獄寺はすいません！と勢いよく頭を下げて謝った。

だが、いくら小さくても徳松はツナの能力だ。

ツナを尊敬する獄寺は徳松を呼び捨てにすることができなかった。

「と、…と…徳松…さん！」

「…呼び捨てでいいんだけど」

「いえ！十代目の能力様は十代目自身！オレが馴れ馴れしく呼び捨てをするわけにはいきません！」

獄寺は小さなツナの能力にペコペコと頭を下げた。
徳松は苦笑いしながらも獄寺を見ていた。

「ツナのまわりはおかしな人間ばっかりだな」

ツナの耳元で徳松がこっそりと耳打ちをした。

「…個性が強いんだよ！おかしいなんて言っちゃだめだって！」

ツナは慌てて徳松に言い付ける。
徳松は笑いながら続ける。

「でも、そいつらのおかげで今のツナがいるんだろ？」

一瞬とぼけた顔をすると、ツナは照れたように笑って頷いた。

「なら、オレはそいつらに感謝する。今のツナがここにいること、嬉しいから」

「…え？」

ツナはほうけた顔で徳松を見る。

「今のオレがいるのは、今のツナがいるからだ。今のツナがいるのは、その“個性の強い守護者たち”のおかげなんだろ？」

優しく徳松がツナに微笑む。
ツナはさらに照れながら笑った。

「…そうだね」

ひとつであり、ふたつのの大空がきらきらと輝く。

それは、まわりの人間、リボーンたちを優しく包み込むぬくもりとなった。

標的３３　事実と陰謀（前書き）

久しぶりにあとがきを書きました。

最近ほんとに忙しくて…
日曜日しか休みがないです（；＿；）

標的３３　事実と陰謀

空は晴れ渡り、のどかな雰囲気を醸し出す。

そんな空を病室から眺め、ツナは自分の上半身を見つめた。

怪しく広がる鎖の痣。
それは右の腕から伸び、今は右の鎖骨に及んでいた。

右足首から伸びる痣は、左の足に侵入し、さらには胴体をくるりと一周していた。

修行を終える前に、相当進行していたらしい。

しかし、今は進行はありえないほどスピードを衰えさせていた。

だが痛みはあるし、進行が止まったわけではない。
近づくタイムリミットに、少しずつ焦りを感じはじめていた。

「ツナ、明日退院することになったぞ」

病室のドアが開き、リボーンがてくてくと歩いて来た。

「え、まだ手術して数日しか経ってないよ？」

「てめぇの体力ならギリギリ大丈夫だろ。時間がねぇんだ、早くウライラの居場所を探らなきゃなんねぇんだぞ」

ぴょん、と身軽にジャンプしたリボーンは、椅子の上にそのまま座って言った。

「そりゃオレも焦ってるけど…まだ立ち上がるだけでも痛いし」

「それはオレがなんとかする」

一瞬まばゆい光を放ち、目の前にツナそっくりの徳松が現れた。

「おい徳松、なんとかするってどういうことだ?」

リボーンが徳松に聞くと、徳松はリボーンを一瞥して話しはじめた。

「オレがツナの傷を治す力を補う。もちろん、ツナが今まで通りに戦えるようにもする」

「えっ、それじゃあ徳松の負担が…」

ツナが徳松を心配するが、大丈夫、と徳松が首を横にふる。

「今はツナがハイパー化したときの力に、目覚めたオレの力が加わるんだ。だから傷を癒すくらいの力は使えると思う」

「そんなことできるのか？」

「オレはツナの能力だ。ツナの能力は未知だって言っただろ？」

その言葉を聞いて、リボーンはにやりと笑って頷いた。

ツナだけが、まだ納得していない。

自分の力が未だに信じられないのだ。

（徳松は嘘を言うはずない…けど…）

ちょっと前までは凡人の中の凡人だった自分が、世界を創造した人を救えるほどの力を持ち合わせているとは思えないのだ。

（確かに最初と比べれば自分は強くなったと思う。…でも、まだしっくりこないんだよなあ）

難しい顔をしながらツナは考え込んだ。
徳松は優しく微笑んでツナに告げた。

「信じられなくても、それが事実なんだ。オレがいる、ということはツナの力がすごいってことを証明してるんだ」

ツナはまっすぐ徳松を見つめた。
目を細めて笑う徳松はツナの指にそっと触れた。

「ｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）は、この手を待ってる」

「……うん」

長い沈黙のあと、ツナは小さく頷いた。

徳松の一言で、すこしだけ実感がわいた。
指に触れる小さなぬくもりが、事実を訴えていた。

「ゆっくりできるのは今日だけだからな。しっかり寝とけ」

「うん、わかった」

リボーンはそう言うと椅子の上で銃の手入れをしはじめた。

ツナはゆっくりとベッドに横たえ、目を閉じた。

すると、小さな身体が一緒に布団にもぐってきた。

「…徳松？」

「休むことで、力が回復するだろ？だから、オレも寝る」

そう言うと徳松はすっぽりと布団をかぶって視界を遮った。

「…つぶしちゃうかも」

「死ぬ気で逃げるから安心しろ」

「あはは、じゃあちゃんと逃げてよ？」

ツナは自分の分身に言い聞かせ、夢の世界へと旅立つ。

痣や傷は痛む。

だが、それに勝るようなぬくもりが、
たしかにとなりにあった。

「…なぜだ？」

暗闇の中、地を這うような声が響く。

その事実に動揺を隠せず、男は…ウライラは、動悸が激しくなるのを感じた。

「なぜ呪いの進行が遅いんだ…！？」

苦しい胸を抑え、地面を見つめながら叫んだ。

ここ数日、ツナにかけた呪いの進行が遅くなった。
最初は自分が疲れていたのだろうとウライラは思っていたのだが、
疲労を癒しても進行は断然遅いまま。

さらに時々呼吸ができなくなったり、胸が痛んだりと奇妙なことが
起こっていた。

「なにがあったんだ…」

痛みに耐え、ふらりと立ち上がって呪いを強めようと念じる。
しかし、いくら念じても呪いは強まらず、力を無駄遣いするばかり
だった。

ひどい目眩がウライラを襲い、地面に倒れ込む。

「…確かめればいいんだ、事実を」

そう言うとウライラはゆっくりと目を閉じて意識を飛ばした。

行き着いた先は真っ黒な世界。
ここはウライラの意識の中であり、ウライラの力の中、とも言う場所であった。

ウライラが頭の中でイメージすると、真っ黒な世界がみるみる景色を変え、広い空の真ん中に身体が浮かび上がった。

お気づきだろうか？

ここはツナの意識の中である。
以前、ツナに呪いをかけたときもここへ潜り込み、ツナを待ち伏せしていた。

意識の中は、その人の心をあらわす。

ツナは大空属性ということもあり、すべてに染まりつつ、包み込む大空が意識の中にひろがっていた。

それに対してウライラの意識の中は、ただの真っ黒な世界。すべてが謎のウライラにぴったりだろう。

ウライラは気配を消し、飛びながらツナを探す。

こんな広い大空では探すのは不可能だと思うだろうが、そうでもない。

なぜなら、ウライラにとってツナは対照的な存在だからだ。

ウライラには、ツナはあまりにもまぶしすぎる。

そんなまぶしすぎる存在を探すのは簡単すぎた。

探すこと数分、ツナはすぐに見つかった。
ウライラは見つからないように姿を消し、近すぎず遠すぎずの距離でツナを凝視した。

「…綱吉くんが…二人？」

信じられない、とウライラはつぶやいた。

そこにいたのは、琥珀色の目をしたツナと、オレンジ色の目で額に炎をともしたツナだった。

実際はツナとツナの“能力”の徳松なのだが、ウライラはそのようなことは知らない。

つい焦って、声を出しそうになってしまったが、落ち着きを取り戻し、二人を見つめた。

ツナを見ると、右腕と右足首からのびる痣が、鎖骨あたりと、腹のまわりにあるのに気づいた。

前までは順調に進行していたはずだとウライラは思い返していたが、

あることに気づいた。

（もう一人の綱吉くん…人間じゃない…？）

ハイパー化した時のツナ、つまり徳松を見て、ウライラは疑問を抱いた。

ツナからは人の気を感じるのに、徳松からは感じない。かすかに感じるものは、ツナと同じ気だった。

（力が圧縮されているから…なにかの力か？）

人の気を感じないかわりに、徳松からはとてつもない力を感じた。

しかも、ツナの力だ。

ウライラは、気づいてしまった。

徳松が、ツナ自身の力だということに。

そして、徳松がツナにかかった呪いの進行を遅くさせていることに。

（なぜだ…なぜだ!?あの呪いはそう簡単に操作できるものではないのに…!）

ウライラはひどく取り乱した。

“鎖の呪縛”は、最初呪いをかけた人の力で維持し、次第に呪いを受けた人の力で進行を早めたりする。

この呪いの難易度は高く、いくら力のある人物でもかけることは難しい。

もちろん操作することも難しいのだ。

だが、ツナの呪いは確かに進行が遅くなっている

ツナの力、徳松によって。

（なにをして、そのようなことを…綱吉くん）

チッ、と舌打ちをしたあと、ウライラはあやしく微笑んだ。

（この呪いを操ることができるほど、綱吉くんの力は強いってことだね…）

ウライラは目を閉じて、自分の意識をイメージする。

大空は消え、かわりに真っ黒な世界があらわれた。

「あの力が手に入れば…」

黒の世界にあやしい笑い声が響いた。

同時に泣き声も、かすかに響いた。

誰に聞かれるでもなく、それはぷつりと消えた。

標的３３　事実と陰謀（後書き）

ウライラはすごい力を持ってますよ。
トンノと同じように、人の意識の中に潜り込めるんです。

気になる方もいらっしゃるかと思いますが、最後の文章は、とても重要なことなんです。

勘の鋭い方は気付いていらっしゃるかも…！

そういえば、今日で“その先には。”を書いて一ヶ月になります。

一ヶ月で３４話…がんばったな、自分。
春休みで書きまくってましたからね…

最近はなんとなくイラストを書いたりしてます。
ツナしか書けませんが。

あとサイトをはじめたり。

コンテンツを増やしたいんですが、忙しくて…泣けます。

でも、ほかの方の小説を見て元気をもらってます。
あんな文章を書ける力がほしい！

いつも閲覧ありがとうございます！
見てくださる方がいるかぎり、続けていこうと思います。

失礼しました（＾ｏ＾）／

標的３４　さまざまな苦難（前書き）

タイトルがあんま関係ないように思える…！

標的３４　さまざまな苦難

目が覚めたとき、悪寒を感じた。

ツナは嫌な夢を見たものだと、部屋の時計を確認する。
時刻は夜中の３時を少しすぎたくらい。
まだ朝までは長いので、もう一度目を閉じる。

先程まで見ていた夢は、大空の真ん中で徳松と話をしているというもの。
それが普通に終わればよかったのだが、そうはいかなかった。

ふと辺りを見回すと、なにかを見た。

知らないものでありたかった。
知りたくはなかった。

それは、ツナが探している男、ウライラだった。

ウライラは奇妙な笑みで消えていった。

そこで目が覚めた。

あの笑みがあまりにもあやしく、ツナは眠ることができなかった。
もう一度、夢を見たら次もウライラが出てくるのだろうか。
そう思うと怖くて、眠れなかった。

痣が小さな痛みをツナに与える。

それがウライラと繋がっているということに目を背けたくなる。
だが、それを許さないかのように小さな痛みはツナにその存在を示す。

ツナが小さな痛みに耐えていると、頭の中に声が響いた。

“おいで、ツナ”

徳松がツナを呼んでいる。
優しく話しかけるように。

“大丈夫だ。オレがいるだろ?”

その言葉にツナは安心し、心を落ち着かせる。
そして、ゆっくりと意識の世界へ旅立って行った。

「うえ～っ、苦い…」

「そんくらい我慢しろ。男だろうが」

ツナが病院とボンゴレから処方された薬を飲み込み、その苦味に顔を歪ませる。

ツナの怪我のことを聞き、ボンゴレは傷の治療を早める薬を送ってきた。

よく効く薬はだいたいまずい。
ボンゴレの薬も、とてつもない苦さだった。
例えるなら、カカオ９９％のチョコレートのようだ。

薬の苦さをカバーするための市販のゼリーが食べたい、とツナは子供すぎる考えを抱いた。

最後の一錠を水で飲み干し、苦さを消すために飴玉を口に放り投げる。

オレンジ味が口いっぱいに広がり、苦さが消えた。

「「ツナ、大丈夫ですか？」」

「大丈夫だよ、ありがとう」

ツナはシクロとシスイに礼を言う。

ツナがさらわれ、怪我をして入院していた間、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）、シクロとシスイはずっと部屋でツナの帰りを待っていた。

だから久しぶりにツナを見たとき、嬉しさのあまりツナに飛びついた。

飛びついたのはかまわない。

だが飛びついた場所が問題だった。

シクロとシスイは、ツナの腹目掛けて飛びついたのだ。

ツナは腹に刺し傷がある。
まだ治っていないのだ。

言葉もなく床に倒れ込んだツナを見て、シクロとシスイは慌てた。
自分たちが原因であるとも知らずに。

それを隣で家庭教師がにやりと笑いながら見ていたのは言うまでもない。

「「我らが飛びついてしまったから…ごめんなさい」」

「だ、大丈夫だって！二人のせいじゃないから！」

申し訳なさそうにうなだれる二人をツナが慌てて慰める。
だが二人は落ち込んだままで、立ち直る気配はない。

「「すみません。しばらく休みます」」

二人はてくてくと歩き、寝床に潜り込んでしまった。

相当責任を感じているのだろう。

たしかにあのあと、しばらく歩くことができず、二階に上がってきた奈々に驚かれた。

奈々の手を借り、なんとかベッドにたどり着いたツナは、おさまらない痛みと格闘しつづけた。

シクロとシクロはおろおろとし、リボーンはそれを楽しそうに見ていた。

「二人のせいじゃないのになあ…」

「あれはしばらくは落ち込み続けるだろうな。立ち直るまでほっとけ」

リボーンはコーヒーを飲みながらツナに言った。

二人が気になったが、リボーンの言うとおり立ち直りそうにもなかったので、そっとしておくことにした。

「ウライラ様！」

部屋の扉が勢いよく開かれる。

「…！？ウライラ様、大丈夫ですか！？」

部下が慌てて苦しそうに胸をおさえるウライラに駆け寄った。

ウライラの額から汗がたらりとたれる。

呼吸は乱れ、顔色が悪い。

「すぐに、救護班を…」

「大丈夫大丈夫。すぐにおさまります」

ウライラはふらりと立ち上がり、ソファーに座って部下に話しかけた。

「で、どうかした？」

「ああ！ウライラ様、ようやく皆様の強化オペレーションが終了いたしました！」

その言葉を聞いて、ウライラはぴくりと反応し、あのあやしい笑顔を浮かばせる。

「そうかそうか！やっと終わりましたか！」

楽しそうにウライラは、部下の差し出した資料を受けとって眺める。

「弱点はあるけど、それさえカバーすれば前の彼らより何倍もの強さが発揮できる」

「ですがウライラ様、皆様はただ今休養が必要となっております」

「なんで？」

ウライラが聞くと、部下は言いにくそうに答えた。

「なれないプログラムのため、副作用が出てしまったようです。なんせ、人には初めて使われたプログラムですので…」

「そっか。ある意味実験台になった彼らには悪いことしちゃったね」

さっきの苦しそうな姿は消え、自信に満ちあふれた顔をしてウライラは陽気に笑っている。

資料を一通り読み、机の上にパサリと落とし、独り言を言う。

「もうすぐ僕の夢が叶うんだ」

歪んだ口から不気味な笑い声がもれる。

小さな小さな光が、精一杯瞬いている。

その光が意味するものとは。

それはまだ誰にもわからない。

誰にも。

標的３４　さまざまな苦難（後書き）

今回も意味深なことをかいてみました。

かきすぎるとバレちゃうかな？

ひかえめにしておきましょう！

標的35　carpe　diem（カルペ・ディエム）（前書き）

息抜きにと書きました。
平和な感じです。

標的35　ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ（カルペ・ディエム）

今を思いきり生きろ。

悔いのないように生きろ。

たまにこのような類の言葉を聞かないだろうか。

誰だって精一杯生きたい。

後悔なんてしたくない。

誰が好きで後悔をするのだろうか。

だが、生き物というものは、この世の中というものは、残念ながら“完璧”というものを持ち合わせていない。

“完璧”、なんとも魅力的な言葉だろう。

勉強も、運動も、人間関係も、すべてがうまくいく。

問題になっている環境問題だって、日本が絶賛交渉中の北方領土問題だって、自分勝手な子供のようなアジアの小さな国の問題だって、すべてがうまくいく。

“完璧”な世界とは、どれほど素敵なものだろうか。

誰だって“完璧”を望むだろう。
ツナだって人間だ。
それくらいのことは望む。

だが、それを嘲笑ったのは、最強と謳われるヒットマン、リボーンだった。

「馬鹿なこと考えてんじゃねえ」

まず、この言葉で現実に戻された。

「そんなくだらねぇ事考えてる暇があるなら勉強でもしろダメツナが」

そしてこの言葉でツナは現実に戻されるどころか劣等感に襲われた。

いいじゃないか、夢を見るくらい。

ツナは心の中でこっそりと反抗する。

実際に口に出したら何をされるかわからないのだ。

しばらくは自宅で安静するように言われているので、することもないからと仕方なく勉強をすることにした。

だが、普段あまり勉強をしないツナは、何をどうすればいいのかわからない。

しばらく机の前で腕を組んでどうしようかと考えていると、それを見兼ねたリボーンが一冊のテキストを取り出した。

「…なにこれ」

「見てわかんねぇか。国語のテキストだぞ」

リボーンに手渡されたテキストには、シンプルに“国語総合”と書かれており、中学生対応のものらしかった。

その厚さは推測で２ｃｍほど。

なかなか分厚いテキストだ。

ツナが不満そうな顔をしていると、リボーンがもう一冊テキストを取り出した。

「なんだ。国語が嫌なら数学にでもするか？」

「いいいいい！！国語でいいです！てか国語がいいです！」

ツナは慌てて国語のテキストを掴み、数学のテキストを拒んだ。

学生の大半は、国語か数学かと聞かれたら、国語と答えるだろう。

（実際、わたしだって数学は大嫌いだ。）

「なら最初から素直に受け取っとけ」

そう言うとリボーンは部屋から出ていった。

部屋に一人残されたツナは、嫌々ながらもテキストを開く。

長文、長文、長文、長文。

評論、小説、評論、小説。

見るだけで眠くなりそうだ。

机に突っ伏し、ぱらぱらとページをめくる。

すると、他のページよりも文字数の少ないページにたどり着いた。

手を止めてそのページを見ると、“詩”と書いてあった。
どうやら有名な詩人の作品を引用しているようだ。

だいたいそういうものは、詩の一部を紹介し、あとは説明やら解説やらという文章だろう。

それも読むのはめんどくさいが、他の長ったらしい評論や小説に比べればかわいいものだ。

ツナは早速それを読みはじめた。

ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ

皆さんは、「ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ」という言葉をご存じだろうか。「ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ」とは、「カルペ・ディエム」と読み、ラテン語である。

紀元前１世紀、古代ローマの詩人であるホラティウスの詩に登場する語句である。

「Ｃａｒｐｅ」とは、「花などを摘む」ことを意味する「ｃａｒｐｏ」の命令形で、「Ｄｉｅｍ」は「日」を意味する「ｄｉｅｓ」の対格で目的語となる。

ホラティウスは、日常生活や友人、愛などを綴った詩を多く残した。その中のひとつ、「ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ」は、長い一句の一部であり、正確には「Ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ　ｑｕａｍ　ｍｉｎｉｍｕｍ　ｃｒｅｄｕｌａ　ｐｏｓｔｅｒｏ」、つまりは「明日のことはできるだけ信用せず、その日の花を摘め」という意味である。

ホラティウスが言いたいのは、「遠い未来を見るよりも、今日を見ろ。」、「理想ばかりを追い求めるのではなく、現実を受け止めろ」、ということだろう。

ここまで読んでツナはふと気付いた。

「…あれ、これって……」

（さっきリボーンが言ってたのとそっくりだなあ）

偶然だろうかと、ツナは再び文を読みはじめる。

今日を捕らえよ。今を楽しめ。今この瞬間を楽しめ。今という時を大切に使え。

ホラティウスは、予想していたのだろうか。
毎日を退屈だとか、暇だとか嘆く人々のことを。

遠い未来を思い描くよりも、現実を見たほうがよいだろう。
確かに、予測は大切だ。
しかし、今から目を背けてしまっては、何がおこるかわからない。
だから人は後悔をするのだろう。

前に進め。振り返るな。
限りない可能性を秘めたわたしたちにあるものは、幸せか、不幸か。
それは、わたしたち次第なのだ。

そこで文章は終わっていた。
これはまるで。

「さっき…オレが考えてたことに似てる…」

ツナは少し驚いてしまった。

偶然にもほどがある。

これほど偶然が重なると恐ろしくなる。

だが、これはおそらく。

「リボーン…だからこのテキストを見せたのかな」

ツナはそう思った。

リボーンはいつも、ツナをさりげなく正解へと導いてきた。

いつも迷っているツナを、リボーンはさりげなく救ってくれた。

そして今回も。

なんだかんだ言って、リボーンはツナを助けてくれるのだ。

「…ありがと、リボーン」

ツナはこっそりと、下でくつろいでいるであろうリボーンに礼を言った。

なんとなくページをめくると、今までの平和だった気持ちが、一気に地獄へと突き落とされた。

そこには大量の問題。問題。問題。

当て嵌まる言葉を抜き出せとか、要約しろだとか、めんどくささ満点だ。

しばらく固まっていたツナは、大きなため息をついて問題にとりかかった。

部屋にはツナの悩む唸り声が響いていた。

「ツナ、頑張ってるみてぇだな」

「そのようですね」

リビングではリボーンとロンジがくつろぎながら会話をしていた。

「僕、ツナのところに行きたい」

「我慢しろトンノ。これもツナのためなんだぞ」

「でも…」

トンノはツナの部屋の方向を見つめる。

先程、リボーンが出ていくときに無理矢理トンノも連れてこられたのだ。

トンノの隣には、未だ立ち直れていないｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）の二人が眠り続けている。

リボーンはツナを一人にさせたかった。

「誰の力も借りず、あの文章で今の自分の考えを直せればまあまあだがな」

リボーンはコーヒーのおかわりをロンジに催促する。
ロンジは笑顔でコーヒーを継ぎ足した。

「あの文章でわかんなかったら、どうしようもねぇ奴だな」

リボーンは遠回しにツナを褒めた。
ロンジとトンノはそれをちゃんとわかっていた。

「なんだかんだ言って、綱吉様のことを大切に思っていらっしゃるのですね」

「なんか言ったか？」

「いいえ、何も」

リボーンが睨むと、ロンジは笑顔で対応し、リボーンの睨みをかわした。

ほんとに素直ではないんですね、とロンジは内心思った。

それからツナの達成感あふれる喜びの声が聞こえたのは何時間か後だった。

標的35　carpe　diem（カルペ・ディエム）（後書き）

carpe　diem（カルペ・ディエム）という言葉は冬に知りました。

わたしの大好きなアーティスト様のアルバム名になっていて、気になって調べたら“一日を楽しめ”的な意味だったんです。

それをなんとなくリボーンとかけてみたらこうなりました。

相変わらずのダメ小説です！わあ！

さて、いつツナたちとアルヴィーコラさんたちを戦わせようか。

気のむくままに書いているとこうなるんです（笑）

計画性がない小説ですいません！

標的３６　言霊（前書き）

ほのぼの雰囲気はそろそろ終わります

標的３６　言霊

リボーンに指示されたテキストをはじめてかれこれ数日。

国語から始まり、理科、社会、英語と次々に出された課題を、ツナは半泣きでこなした。

もちろん、ツナ一人では出来るものではないので、獄寺や山本に教えてもらいながら課題を終えた。

ただ、山本とは無駄話ばかりで獄寺だけが教えていただけだが。

今は数学の最中で、先程まで獄寺が教えてくれていたのだが、リボーンが帰らせてしまった。

「最後くらい自分でやりやがれ」

そう一言告げると、意地悪そうな顔をして部屋をあとにした。

残る問題は基礎やら応用やらをまとめた難題の総集ものだ。

そんな問題を一人で解くのは不可能だとツナは嘆いた。

「今までの基礎や応用の総集なんだから、わかるはずだよ」

そう言い残してトンノはリボーンの後についていった。

渋々問題を解きはじめて数分。
なんとなく、なんとなくだが、ちゃんと解けている気がする。
苦手だったグラフやら面積やらが、前よりも理解している気がする。
それが嬉しくて、ツナはどんどん問題を解いていく。

一人で解きはじめて数時間。
終えるのは無理と思われた数学の問題は、あと一問というところまできていた。

カリカリカリ
カチカチッ
カリカリ…ゴシゴシ
カリカリカリカリ

せわしなく動く右手。
数字を綴るシャーペン。
書き間違えた数字を消す消しゴム。そして再び数字を綴るシャーペン。

左手は今まで解いた問題のページをぺらぺらとめくっている。

カリカリ……

右手が止まった。

ぴたりと、最後の数字を綴った。

「……おわったあああああ！」

ツナは思いきり伸びをして、喜びの声をあげた。
コキコキと身体の節々が鳴る。
何時間も机に向かっていたのだから当たり前だろう。

あまりの喜びに、ツナは腹の怪我のことも忘れてベッドに飛び込んだ。

「いってえええ！」

いくら布団とは言え、腹からダイブすれば痛いものは痛い。
ツナは傷をおさえながら叫んだ。

「ごちゃこちゃうるせぇぞ」

リボーンが迷惑だとばかりに顔を歪ませながら部屋に入って来た。

「ツナー！」

部屋の中にトンノがうれしそうに飛んできた。
そしてツナの傍に降り立ち、ツナに擦り寄った。

「ツナー、お疲れ様！やっと遊べるよー！」

「トンノ…ごめんね、かまってあげられなくて」

ツナが課題をしていた数日間、トンノはかまわせてもらえなかった。

トンノは寂しさを我慢して、ツナを応援していたのだ。

「ほんとにごめん…トンノ…オレ、…すごい疲れて…眠い」

ベッドに突っ伏していたツナは本当に疲れた顔をしていた。

「かまって…あげられないかも…」

「…ツナ」

声もだんだん小さくなり、目もうつろになっている。

トンノはそっとツナの頭を柔らかい翼で撫でた。

「いいよ、ツナ。目が覚めたら、一緒に遊ぼう」

ツナはぼそぼそと何かを言っていたが、声が聞こえなくなった途端、安らかな寝息が聞こえてきた。

「ふふ、寝ちゃったよリボーン」

「ったく、弱っちい奴だ」

リボーンは軽くツナの頬を叩いた。
トンノはせっかく寝たツナが起きてしまうと慌てたが、その心配はまったくなかった。

ツナは既に爆睡していた。
まったく微動だにしない。

その幸せそうな寝顔にトンノは優しく話しかけた。

「明日、晴れたら一緒に散歩しようね」

簡単そうではかない夢。

叶いそうで叶わない夢。

全員、油断していた。

すぐそこまで、危険が迫っていることに気付かずに。

「久しぶりですね～」

「ウ、ウライラ様！」

ウライラの姿を見て声を上げたのは、長髪の男、ミノイだった。

「ミノイくん、元気にしてました？」

「しばらくぶりです、ウライラ様。ウライラ様が用意してくださった強化オペレーションは予想を遥かに越える辛さでしたが…おかげで私達は前と比べるとかなり力は強くなりました」

「そうかそうか！安心したよ！ほんとに待ちくたびれましたからね」

ミノイは素直に強化オペレーションを行ってくれたことに感謝した。
自分たちがモルモットにされたということに気付かないで。

「ところで、ビンツたちは？」

ウライラはミノイの他に強化オペレーションを実行させたビンツ、ニコール、マリネ、アロッチ、スコッチの姿がないことに気付いた。

「ビンツたちは、それぞれの病室で休養中です。ですが…」

ミノイは苦い顔をして話を続ける。

「唯一の女性であるマリネは、今回の強化オペレーションの辛さにたえることができずに、かなりの重傷を負ってしまったらしく…」

「ああ、マリネは女の子だもんね。仕方ないか」

ウライラはわざと肩をすくませて、困ったような表情をして見せた。

「そんなことより、ミノイくん」

そう言うとウライラはミノイに数枚の紙を手渡した。

「…これは本当ですか、ウライラ様！！」

ミノイは紙に書かれた文章に一通り目を通した。
そこに記してあったことが信じられなかった。

「綱吉くんにそのような力が…？」

「驚きましたよね？僕も驚きましたよ～」

ケラケラとあたかも驚いていない様子で答えた。

ウライラの手渡した紙には、ミノイたちが強化オペレーションを実行している間に起こった出来事が書かれていた。

もちろん、ツナの秘めた力のことも。

「予想外だったから、予定を早めようと思うんだ」

「予定を…って、まさか…」

「うん、そうだよ」

ミノイが手に持っている紙をわなわなと震わせる。

何か言葉を発しようとするが、上手く声にすることができない。

「そんな動揺しなくていいよ、ミノイくん！君たちは十分強くなったから大丈夫ですって！」

動揺しているミノイの肩を軽く叩き、なだめようとする。

冷静さが取り柄でもあるミノイが動揺することはめずらしかった。

「むしろ今がチャンスなんだ。より簡単にボンゴレリングと綱吉く

んを手に入れられるね」

欲望に満ちた声が、個室全体に響く。

「ね、ミノイくん」

ミノイは、自然と動揺が薄れ、いつもの冷静さを取り戻していた。
いや、取り戻させられていた。

「がんばろうね」

「…ウライラ様の、仰せのままに」

ミノイは深々とお辞儀をした。

（これが、ウライラ様の…力か…！）

ミノイは驚いた。
勝手に身体が動いているのだ。
ミノイ自身の意志ではない。
ウライラの力だ。

（ウライラ様のこの力…言霊とは…なんとも強力な…っ）

頭を上げたくても、まったく上がらない。
力を入れているのに、まったく力が入っていない。

相手の名を呼び相手を思いのままにする。
それがウライラの持つ、言霊の力だった。

だが、これには条件がある。

まず、名前を知る。
これは基本だろう。

次に、言霊を使用する者と契約をする。
簡単に言うと、主従関係を作り出すのだ。

方法は、契約を交わす者同士の心、つまり魂を一部だけ分け与え合うのだ。
契約を交わした相手の魂を持ち続ける限り、どちらかが死なない限り、契約は破棄されることはない。

アッジョルナーレの七人は、すでに契約を交わしていたのだった。

「さ、ミノイくん」

ぴくりと、意志の通じない身体が動く。

「みんなを起こしに行こう」

標的３６　言霊（後書き）

ウライラー！！
ひどい奴だなお前！
と書いている本人もウライラを非難。

でも、これには事情があるんですよ！

いろんな謎を解き明かしたいです。

わたしでさえも謎なことがあるんですから（笑）

標的３７　計画実行（前書き）

ちょっと気分がすっきりしました！

標的37　計画実行

夜の森とは、なんとも不気味なものだ。

風によって揺れる木々がざわめく音

静かに鳴く鳥の声

照らすのは小さな月と星だけだ。

そんな誰もいないようなところに、男は歩いて向かっていた。

複数の部下が待つところへ。

「その傷大丈夫なの、マリネ？」

「ほっといてよ！ウライラ様が治してくれたの、大丈夫に決まってるじゃない！」

「せっかくニコールがあなたの心配をしてくれているんですよ。そんな言い方はないでしょう、マリネ」

一人で声を荒げている女、マリネにミノイは呆れたように声をかける。

ウライラの実験のモルモットにされたミノイたちの中でも、一番強化オペレーションの被害を受けたマリネは重傷を負っていた。

その姿は、普通の女性であればショックで立ち直れないだろう。
多少ずぼらなところがあるマリネでも、一応は女性だ。

重傷を負った自分の姿を見て、数時間は思考力を失っていた。

所々の骨は折れ、切り傷、かすり傷は当たり前。
全身を包帯で巻かれていたのだが、その姿だけで衝撃は十分だった。

そんなマリネのところに、ウライラが現れた。

ベッドに座っている放心状態のマリネに、ウライラは微笑んで話しかける。

「大丈夫だよ。僕が治してあげますからね」

その言葉通り、ウライラはマリネの重傷を軽傷へ、そして多少の切り傷やかすり傷になるまでに治した。

そして、今ここにいるのだ。

「こんな切り傷、たいしたことないもの！」

「ふうん、それならいいけど」

ニコールはそっけなく返事をした。
その態度にマリネが食ってかかる。

それを止めるのはいつもミノイの役目だった。

「遅くなってごめんなさいね」

その声を聞くと、そこにいた全員が振り返る。
口論をしていたマリネもだ。

「ウライラ様」

ミノイがお辞儀をすると、ウライラはにこっと笑って謝る。

「ほんとにごめんね。身体が言うこと聞かなくって！…ほんとに」

ウライラの笑顔がぐにゃりと歪む。

「世話が焼けるったらありゃしないよ、この身体とかね」

全員が不思議そうにウライラを見ていた。
しかし、次の瞬間にはウライラはいつもの笑顔へと戻り、全員に話

しかけた。

「準備はいいですか？」

その言葉に六人がうなずく。

ウライラが地面に手をかざすと、その掌に杖が現れた。

真っ黒なそれを、ウライラは地面にこつん、と当てる。

すると、そこからは光の届かない世界が一気に広がった。

ザアアアアアッ

あまりの風圧に、ウライラ以外の六人は飛ばされそうになる。

かばうかのように、ミノイがニコールとマリネを、ビンツが双子のアロッチとスコッチを掴んで風圧に堪えていた。

そんな六人にかまうことなく、ウライラは真っ黒な世界を作り出し

ていく。

真っ黒な世界の、ウライラの意識を。

「さて、一人残らず連れていけるでしょうかね」

ウライラは力を込めて、意識の中にもぐりこんだ。

「あれ？」

ツナは異変を感じて辺りを見渡す。

だが、広がるのは綺麗な大空で、異変はどこにも見られなかった。

ここはツナの意識の中。
つまり、ツナは今就寝中である。

「なにか、あったね、ツナ。」

「徳松も感じた？」

ツナの隣にいたツナの“能力”、徳松が頷く。
ツナと徳松は一心同体。
だから同じように徳松も異変を感じたらしい。

「なにか…近づいてくるぞ、ツナ」

「うん…」

この広い大空になにかが入って来た。
そしてそれがどんどんこちらに近づいている。

今までで、ツナの意識の中に入り込めたのは、トンノとアッジョルナーレのウライラだけだ。
だが、トンノはこんな嫌な気配ではない。
ツナの大空属性の炎で実態化したトンノは、ツナと同じ大空属性で、温もりのある気配だ。

だとすれば。

「…まさか、また……」

きたのだろうか、ウライラが。

ツナと徳松は警戒して身構えた。

「お久しぶりですね、綱吉くん」

ザアアアッ、と音を立てて目の前に闇が広がる。
そこから現れたのは。

「…あ、あなたは！！」

「こいつが…ウライラか…」

徳松がオレンジ色の目でウライラを睨む。

そんなことはお構いなしに、ウライラは二人に近づく。

「迎えにきましたよ」

「む、迎え…？」

ウライラは満面の笑みでツナに話しかける。
しかし、ツナにはその笑顔が怖くて仕方なかった。
憎悪と欲望が入り混じる笑顔だ。

「僕の願望がやっと叶うから。それには綱吉くんは必要不可欠だから、ですよ」

「なに言ってんだあんた。ボンゴレリングも、ツナも手に入れていないくせに」

徳松が固まるツナを庇うようにウライラをさらに睨む。
だが、ウライラは徳松の睨みを気にすることもなく、話を続けていく。

「それはこれから集めるんです。リングなんてすぐに手に入れられるから。今は、」

ウライラの目が細められ、ツナを見据える。
その目があまりにも恐ろしく、ツナは金縛りにあったかのように動けなくなってしまった。

「綱吉くんや徳松くんたちについて来てもらわなきゃいけないからね」

「…っお前、まさか！！」

徳松が何かに気付いたようにウライラに噛み付く勢いで問いかけるが、そのときにはもう遅かった。

「話はあとだ。今はこっちに来てもらわなきゃ」

ウライラがまた笑顔に戻り言い放つ。

その途端、ウライラを根源として、真っ黒な世界が広がっていく。

真っ黒な、真っ黒な闇。

ツナの意識の大空が闇に染められる。
ツナの意識の大空が闇に飲み込まれる。
ツナの意識の大空が闇に包み込まれる。

全てに染まりつつ、全てを飲み込み包容する大空が。

「ツナ！！」

「どどどどうなってんの！？」

徳松は慌ててツナに手を伸ばす。
ツナは徳松の手を離さないようにしっかりと掴む。

そんな二人を見て楽しむかのようにウライラはへらへらと笑っていた。

「ようこそ、僕の理想世界へ」

ふたつの大空が、真っ黒な闇に消された。

標的３７　計画実行（後書き）

やっと動き出しましたよ！

すっきりしましたね。

これをどうやって最後まで繋げるか…

標的３８　見知らぬ森（前書き）

今週は忙しいので、あまり更新ができません…

標的３８　見知らぬ森

…あれ？

ここ、どこだろう。

真っ暗で何も見えないや。

てか、なんでこんなところにいるんだろう？

さっきまでは確か…寝てて、夢の中で徳松と話してたはずなんだけど…。

…あ、そっか！

アッジョルナーレのウライラがいきなり現れて、闇に吸い込まれたんだった！

でもその後の記憶がない…。

徳松も一緒にいたはずなんだけど…いないなあ。

オレの心の中にいないってことは、ここは夢…オレの意識の中？

この真っ暗などこかに徳松はいるんだよね。

探さなきゃ。

それでこのことをリボーンたちに話さないと…

…あれ？

リボーンの声が聞こえる。

てかリボーンだけじゃない…。

トンノと…ロンジさん？あれれ、結加ちゃんの声も聞こえる？

どこから聞こえるんだろう。

早く行かなきゃ、リボーンに怒られるよな。

早く、起きなきゃ。

「…おい、ツナ！！」

耳元で怒鳴られ、頬にビンタを食らい、ツナは覚醒した。

一瞬なにが起こったのかわからなかった。

そんな放心状態のツナに、リボーンはもう一度怒鳴る。

「ぼーっとしてると撃つぞ、ダメツナが！」

リボーン愛用の銃がカチャッと音をたてた途端、その音に反応してツナが悲鳴を上げた。

「ひい！？おおお起きてます起きてます起きてます！」

「なら返事くらいしろ」

リボーンが懐に銃をしまうのを見て安心したツナはため息をついた。

「あれ、ここどこ？」

ツナは辺りを見渡してリボーンに聞いた。

ツナたちがいたのは、見たことない森の中だった。
どうやら並盛の森ではなさそうだ。
なぜだかツナはそう思った。
超直感だろうか、それともただの土地勘か。

「オレにもわからねぇ。気付いたらここにいたんだ」

「え、みんなも？」

ツナは傍にいたよく知る人物を指差して問う。

それに指を差されているトンノ、ロンジ、結加はこくんと頷いた。

「ちなみにこいつらもいるぞ」

リボーンがロンジの膝を指差す。

「ぅえっ！？シ、シクロとシスイまで！？」

ツナはロンジの膝の上で座っているｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のシクロとシスイを見て驚いた。

まったく気付かなかったのだ。

「なんで、オレたちはここに…」

そこまで言いかけて、ツナはあのことを思い出した。

「まさか、あいつが言ってたのって…！」

「あいつって誰だ？」

リボーンがツナに問うと、ツナは先程までのことを説明した。

夢に突然、アッジョルナーレのウライラが現れ、こう言った。

「迎えにきましたよ」

「来てもらわなきゃいけない？確かにそんなことを言ってたのか？」

「うん、言ってた」

ツナが頷くと、リボーンは難しい顔をして考えた。

（迎えにきたってことは…ここはウライラのいる森ってわけだな。
…だが、どうして。なぜオレたちまで連れてこられたんだ？）

ツナを狙うならばツナだけを連れてくればいい。
なのにウライラはリボーンたちも連れてきた。

それがリボーンには謎だった。

「綱吉くん、大丈夫？」

結加がツナの傷を心配して声をかける。

ツナは大丈夫、と笑顔で答えた。

「なぜわたしや結加様までここにいるのでしょうか。綱吉様の話から、ここはウライラのアジトの近く、ということが予想できますが…」

「オレもそれを考えていたぞ。なんでオレたちもウライラに呼ばれたのか…」

ロンジもリボーンと同じことを考えていたらしい。

どうしてもその答えがまったくわからない。

「あのさ…」

トンノがツナたちに話しかける。

ロンジもリボーンも考え事をやめて、トンノの話に耳をかたむけた。

「僕の予想なんだけど、ツナ以外に僕らもここにいるってことは…」

ザワッと風で木々が揺れる。
数枚の葉がひらひらと舞って落ちた。

「…ボンゴレの守護者も、この森のどこかにいるってことだよね」

「！？」

ツナはまさか、とトンノの予想を否定しようとした。が。

「それはありえるな」

リボーンがトンノの予想を肯定した。
ツナはなぜだとリボーンに問い詰めるが、リボーンは冷静に言い放つ。

「ツナの他にオレたちも連れてこられたんたなら、他の守護者たちもここにいる可能性は高いぞ。ウライラの目的はツナとボンゴレリ

ングだからな」

「あ、そっか…」

ツナはすぐに納得した。

なにをしようとしているのかまだツナたちにはわからないが、ウライラはツナとボンゴレリングを欲している。

ボンゴレリングを持っているのはボンゴレの守護者たちであるから、ここに連れ込まれた可能性は十分にあった。

「じゃあ、どこに…」

「守護者、と言うと…ランボくんもそうだよね」

結加がぽつりと呟いて気付いた。

ランボも一応ボンゴレの守護者だ。

ツナやリボーン、結加にロンジとトンノ、ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のシクロとシスイがまとまって連れ込まれたということは、もちろんツナの家にいるランボもツナたちと一緒に連れ込まれたはずだ。

しかし、そこにはランボの姿がなかった。

「ラ、ランボがいない…！？」

「どっかに飛ばされたのかもな」

ツナはあわてふためいた。
ランボはまだ小さな子供なのだ。
そんなランボがこんな見知らぬ森に一人で飛ばされたとしたら…。

「どうしよう、敵に襲われるかも！！」

ツナはランボを探しに行こうと駆け出そうとしたが、小さな家庭教師の足にひっかけられ、豪快に転倒してしまった。

鼻が痛い。
鼻血が出たらどうしてくれるんだとツナは赤ん坊を睨んだ。

「あんな奴でも一応はボンゴレ雷の守護者だ。どうにかなるときはどうにかなるだろ」

「そんな…どうにかならなかったら！？」

「……そん時はそん時だ」

「ぅえええぇえええええ！！？」

なんて薄情な奴だろう。
ツナは目の前でにやりと笑っているリボーンを見て思った。
だが。

（…あ、この顔）

この余裕そうな口許をにやりと曲げた顔。
その顔をツナは今までに何度も見ていた。

（この顔は、リボーンが絶対大丈夫って思ってるときの顔だ）

今までの経験で、ツナはリボーンの表情の見分け方がなんとなくだがわかっていた。

感情をあまり出さないリボーンは、口がにやりと曲がるか、への字のように曲がるかくらいしか表情が変わらない。

だが、様々な経験をして、ツナはそんなリボーンの複雑な表情がわかってきていた。

そして今は、自信に満ちあふれている顔だ。

（リボーンがそう言うなら…絶対そうだよね）

ツナは終わりの見えない森の向こうを見渡して決意した。

全員を見つけだし、全員無事に並盛に帰らせると。

標的３９　忌憚の再会（前書き）

じりじりと動いてますー。

標的３９　忌憚の再会

「あれ、少し…無理がありましたかね…」

荒く息継ぎをしながらウライラは杖を支えにして呟いた。

「大丈夫ですか、ウライラ。少しお休みになられたほうが…」

ミノイがウライラに休息を促すが、ウライラは断固として頷かない。

「やっと、…綱吉くんがここに来たんだ。休んでいたらもったいないでしょう?」

「ですが、この現状では…。綱吉くんとそれぞれのリングがバラバラでは集めるのにも時間がかかってしまいますよ」

ミノイの言うとおりだ。

ウライラは、ツナたちをこちらへ連れ出すために、それぞれの意識の中へと侵入した。
そして無理矢理引っ張り出してきたのだが、限界があったのだろうか、全員まとめて連れて来るはずがバラバラになってこの森に散っ

てしまったのだ。

「まだこのようなモノを残しているとは…忌ま忌ましい身体ですね」

その言葉は何に対する言葉なのか。
ミノイたちは首をかしげた。

「ではウライラ様、こうなさるのはいかがです？」

ミノイがひらめいたようにウライラに話しかける。

「バラバラに散らばったボンゴレたちを、私達が倒し、綱吉くんとリングを持ち帰ってきます。せっかく、私達も強くなったのですから任せてほしいのですが」

ウライラが用意した強化オペレーションは、この時のために実行した。

だが、まさかボンゴレがバラバラになってしまうとは予想もしていなかった。

本来は、まとめて連れてきたボンゴレを強化オペレーションによって強くなったミノイたちが倒し、ツナとリングを奪うはずだったのだ。

「ミノイくんたちが手分けして綱吉くんたちを探すってことですか…」

「いかがでしょう、ウライラ様？」

ミノイの提案した作戦を聞き、ウライラはしばらく考え込んでいたが、にっこりと笑って頷いた。

「うん、いいでしょう。」

ウライラは杖で身体を支えながらゆっくりと立ち上がってミノイたちを見る。

「あなたたちがボンゴレを倒して綱吉くんとリングを持ってくる。それかボンゴレをここにおびき寄せて一気にたたきのめす。わかりましたか？」

ウライラの言葉に全員が頷く。

「さて、はじめましょう」

心底楽しそうに、ウライラは言った。

「十代目！十代目ー！」

「そんなに騒ぐなよ獄寺～」

彼独自のツナの名称を大声で呼びながら、獄寺はここにはいないツナの姿を探す。
その後ろを焦る獄寺をなだめながら山本が歩いていた。

「ここにはツナいないぜ？」

「わかんねぇじゃねえかそんなの！おめぇがいるってことは十代目もここにいるかも知れねぇだろが！」

能天気な声に怒鳴る声が歯向かう。

獄寺たちもまた、ツナたちと同じように森に飛ばされていた。

目が覚めたら見知らぬ森。
隣には同じ守護者が眠っていた。

最初に目を覚ましたのは獄寺で、隣に眠っている山本を見て、しばらく思考停止の状態だった。

そして、山本がここにいるのならば、もしかしたらツナもこの森にいるのではないかという考えに至り、ツナを捜索しはじめた。
そしてその声で山本が目を覚ましたということだ。

「なぁ獄寺、なんでここにオレたちはいると思う？」

「知るか馬鹿！」

「オレさ、夢ん中に変な奴が現れて、そいつにもやもやした真っ黒いもんに吸い込まれたんだよな～」

ぴたり、と獄寺の足が止まった。
それにつられて山本も足を止める。

「…おい、それまじか？」

「ああ、まじだぜ？」

「……オレも、だ」

獄寺が小さく言う。
あまり聞こえなかったのか、山本が首をかしげる。

「オレも…夢ん中におかしな奴が出てきて…闇のような真っ黒な何かに引きずりこまれたんだ」

「一緒なのな！そいつ、変なこと言ってなかったか？」

「…ああ、言ってたな」

獄寺は顎に指をそえて思い出す。

夢の中には見知らぬ男がでてきた。

その男はあやしく笑い、獄寺たちに話しかけたと言う。

「僕の願いが叶うのを見せてあげよう。」

そして不気味な闇に包まれ、気付けばここにいたらしい。

「あいつ…誰だ？」

「わかんねぇけど、オレの予想だと、アッジョルナーレ、とかいう奴らだと思うぜ？」

「っ!?アッジョルナーレって、まさか…」

目を見開いて獄寺は驚愕する。

以前、アッジョルナーレと名乗る敵である奴らに何度か襲われたのを思い出す。

「なんでわかるんだよ?」

「服だな。あいつ、アッジョルナーレと同じ服着てたぜ?」

白のラインと茶色の生地の服。
それがアッジョルナーレの制服だ。

「アッジョルナーレ絡みということは…」

何かに気付いたように獄寺がはっとした。

「……十代目が危ねえ！！！」

「あとオレらの持ってるリングもな」

二人は思い出した。
アッジョルナーレの目的は、ボンゴレリングとツナだと言うことを。

そして弾かれたように二人は駆け出した。
もし、もしここにツナがいたら。
その先を否定せずにはいられなかった。

「今さら気付いても」

「遅いよー」

その声を聞いた途端、鋭いなにかが二人に向けて飛んできた。

慌てて獄寺と山本は左右にわかれてそれをかわす。
地面にはきらりと輝く槍。

「あの声とこの槍…」

「ああ、あいつらだな」

二人は槍の飛んできた方向を見つめる。
すると、がさりと音をたて、見たことのある姿があらわれた。

「久しぶり」

「ボンゴレの守護者さん」

くすりと笑い、双子のアロッチとスコッチが二人に話しかけた。
獄寺と山本は黙って双子を見つめる。

「そろそろ綱吉くんと」

「ボンゴレリングを奪っても」

「いいころだから」

「奪いにきました」

交互に話す双子に、苛立ちを覚える。
そしてやっぱりかと獄寺と山本は心の中で舌打ちをした。

この森に、近くにツナがいる。

否定したかった事実を、認めざるを得なくなった。

まだツナは腹の傷が完全に癒えていない。
ボンゴレの開発した治癒を早める薬を服用しているからとは言え、
傷はまだ痛々しく残っている。

「ツナとリングは渡さねぇぜ」

「十代目には指一本触れさせねぇ」

山本は時雨金時、獄寺は匣兵器“ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．”を出してかまえる。

睨んで威嚇する二人を見て、双子がまたくすりと笑う。

「そんなこと言ってられるのも」

「今のうち、なんだけどね」

見下す笑みと怒る睨みがぶつかりあう。

ひとつの戦いが幕を開けた。

標的３９　忌憚の再会（後書き）

早く先に進みたい！

でもこの過程は重要なので、じっくりと進めます。

忙しくなかったら、ぱぱーっと書いてしまうんですが…。

一話に３時間くらいかけるので無理ですかね！

標的４０　おかしなトリオ（前書き）

短いですー（；＿；）

標的４０　おかしなトリオ

見知らぬ森で以前戦った敵と出会った山本と獄寺。
突然、この森に連れ去られたのだ。
だが、連れ去られたのは二人だけではなかった。

「極限にここはどこだぁぁぁ！！！」

頭を抱えてただ叫ぶボンゴレ晴の守護者、笹川了平。
そしてそれを見つめながら、小さな子供をあやすのは…。

「ねーねー、ここどこー？」

「…わからない」

質問してくる雷の守護者、ランボを対応しているのは霧の守護者のクローム髑髏。
この三人の中では一番の常識人だろう。

「クローム！なぜオレたちがここにいるのかわかるか！？」

「だから…わからない。」

了平がクロームに言い寄るが、困ったように答えるだけのクローム。
そしてそれをただ見ているだけのランボ。

なんともおかしな組み合わせができてしまったものだ。

どうしよう、とクロームが慌てていると、頭にクロームの尊敬する人物の声が響いた。

―クローム？

「…む…くろ…様……？」

その名前を聞いて了平がぴたりと騒ぐのをやめた。

―クローム、無事ですか？

「…はい、無事です」

骸が自分のことを心配してくれたのがうれしくて、クロームは自然と笑みをこぼす。
骸はよかった、と安心したように呟いてから、話をつづけた。

―どうやら、これもアッジョルナーレの仕業のようです。夢の中で、男があらわれたでしょう？

クロームは見た夢を思い出す。
間接的に骸の話を聞いている了平とランボも夢を思い出そうとする。

やはり三人が見たのも、獄寺と山本とまったく同じ夢だった。

―アッジョルナーレのボスには何やら不思議な力があるそうです。
そのせいで僕はなにもできなかったんですけどね。

クロームと骸は夢の中でも会話をしたりする。
お互い夢では自由に動けるのだが、男…ウライラがあらわれてから、
骸は金縛りにでもあったかのように動けなくなり、ウライラの力を
阻止できなかった。

そしてここにまんまと連れ込まれたのだった。

―どうやら、ボンゴレの守護者や関係者がこの森にいるみたいですね

「…ボスがここに?」

「なにっ、沢田もいるのか!?」

その言葉を聞いて、今までおとなしくクロームの腕に抱かれていた
ランボが暴れだした。

「ツナ、ツナがいるところにオレっちも行くんだもんね!」

「わっ…ランボくん、暴れちゃ危ない…」

じたばたとするランボをクロームが慌てて強く抱きしめるが、ランボの駄々こねはおさまらない。

「オレっち、一人で行くんだもんねっ!!!」

するり、とクロームの腕から抜け出したランボは、一人で走って行こうとした。

「ランボ!!一人では危ないだろう!!?」

了平がランボを追いかけ、クロームもついていく。
ランボは小さいため、すぐに了平に捕まってしまった。

「やだやだ、オレっちツナのとこに行く!!」

「一人では危ないと言っているだろう!!オレたちも行くぞ!」

暴れるランボにしっかりと了平は言い付ける。
了平と目が合ったランボはそのままぽかんと口を開けて固まってしまった。

「…ほんと？」

「ほんとに決まってるだろう！」

了平は微笑んで頷く。
それを見てランボは一瞬で笑顔になった。

側で二人を見ていたクロームにも自然と笑みが浮かぶ。

だが。

ークローム、気をつけなさい！

キィィィン、と耳鳴りがする。

クロームは骸の警告を受けて辺りを見回す。

見渡すかぎりの森、森、森。

だが、先程とは違う異様な雰囲気。

ゾクリ、と悪寒が走る。

「あれ、前会った守護者じゃない！なんだ、仕返しできると思ったのに！」

了平とクロームは驚いて声の主を見た。

スタスタとこちらに歩いてくるのは、アッジョルナーレのマリネだった。

だが了平とクロームはマリネを見るのははじめてだ。

ランボは怖いのだろうか、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「お前は誰だ！」

了平はランボの顔をうずめてマリネに尋ねた。

「わたしはマリネ。アッジョルナーレなんだけど…わかるよね？」

「ボスを…狙ってるマフィア……」

クロームがつぶやくとマリネはその通り、とにっこりと笑う。

「ちょっとしたトラブルがあって、全員揃ったところでボンゴレリングと綱吉くんを貰おうと思ったんだけど、バラバラになっちゃったから迎えにきたのよ」

「なぜ沢田とリングをねらうのだ？極限にわからんぞ！」

了平はマリネに答えを問うが、かえってくるのは曖昧な言葉。

「わたしたちはウライラ様のために動いてるから、詳しいことは言えないんだよーっ」

ケラケラと笑うマリネにクロームは少しだけ怯えた。
笑っているのに笑っていない。

その笑顔は確かに笑顔だ。
表面上は。

「あのさ、おとなしくリングを渡してくれたらあんたたちを殺さないであげてもいいんだけど、どうする？」

「そんな条件などいらん！渡さんものは渡さんのだ！」

了平が勢いよくマリネに怒鳴りちらした。

クロームもまっすぐとマリネを見て告げた。

「あなたたちにリングは渡さない。…ボスも、渡さない」

そんな二人を見てマリネはわざとらしくため息をついた。

次の瞬間、あたりに殺気が漂う。

「後悔しないでね」

にたり、とまがまがしい笑顔でマリネがつぶやいた。

標的４１　幕開け

広い森のある場所で、男は目覚めた。

その瞬間、ただならぬ危険を感じ、とっさに身体を翻して退いた。

目の前には、棒のような武器をかまえる少年。

「待て待て待て待て待て！一応、オレもボンゴレだから！仲間じゃねえか！」

「なに言ってるの？僕は仲間でもなんでもないよ」

黒髪の少年、雲雀は淡々と無表情で言った。

雲雀に襲われているのは元アルヴィーコラのリーダー。

（言っておくが、リーダーというのはれっきとした名前である）

雲雀とリーダーは廃屋と病室で対面している。

もちろん、リーダーがボンゴレにはいったのも雲雀は知っている。

だが、そんなことは雲雀には関係ない。

雲雀にとって、群れる奴はすべて咬み殺す対象となるのだ。

「ほんとに待とうぜ兄ちゃん！！」

「咬み殺す」

「一回話し合おうや！」

「咬み殺す」

「攻撃すんのやめろっつの！」

「咬み殺す」

「お前日本語わかってるのか！！？」

なにを言っても「咬み殺す」という返事しかかえってこない。
リーダーは冷や汗がたらりと垂れるのを感じた。
同時に、命の危機も感じた。

「っくそ!!!」

仕方ない、とリーダーは懐から銃を取り出して、威嚇するために一発空に向けて撃った。

大きな銃声が森に鳴り響き、驚いた鳥たちがバサバサと羽ばたいていく。

「ワオ。君、なにやってるの?」

「お前さんがオレの話をちゃんと聞いてねぇからだろ!!」

雲雀のペースにリーダーは疲労を感じる。
なんておかしな少年なんだろう。
関わるのが嫌になる。

「あなたの話なんて聞く必要ある？」

「あるわ！！大有りだ！」

次々と繰り出される攻撃は衰えを知らず、リーダーに襲い掛かる。

リーダーはそんな攻撃をする雲雀を少しだけ感心しながらも、雲雀から逃げ出す方法を考えていた。

すると、突然雲雀の目つきがかわった。

それにリーダーは少し驚き、次の瞬間には雲雀はリーダーの顔目掛けて攻撃してきた。

「ぅおわっ！！！」

慌ててリーダーはその攻撃をかわす。

リーダーのおかしな声と共に、ドカンッ、というなにかがぶつかる音がした。

「おや？かわされちまったな」

「あなた誰？僕の邪魔しないでくれる？」

雲雀のトンファーが大きなハンマーの攻撃を防ぐ。
あんな身体のどこに馬鹿でかいハンマーの攻撃を防ぐ力があるのだろうか。
リーダーはしばらく呆気に取られていたが、正気に戻った瞬間、なぜ雲雀が自分の顔を狙ったかがわかった。

（こいつ…気付いてたのか…！）

リーダーは雲雀の攻撃をかわすのに必死で気付かなかった。
後ろの攻撃に。

それに気付いた雲雀は、攻撃を防ぐためにリーダーの顔、ただしくはリーダーのうしろを狙ったのだ。

「す、すまんな…坊主」

「僕を坊主呼ばわりするの、やめてくれる？咬み殺すよ」

ギロリ、と雲雀の睨みがリーダーをとらえる。
それを見てリーダーは苦笑いをした。

「余裕じゃねえか、雲の守護者さん？」

ハンマーの力におされ、雲雀が後ろに飛ばされる。
しかし、すぐさま空中で体勢を整えた雲雀は、綺麗に地面に着地した。

「あなた、誰？」

「オレはアッジョルナーレのビンツってんだ。前ボンゴレに会いに行った時はおめぇらいなかったからな～。…つかよぉ、」

ビンツはへらへらと自己紹介すると、雲雀のそばにいるリーダーを見た。

「おめぇ誰だ？ボンゴレか？」

「つい最近入ったもんだ。」

ビンツの問いにリーダーは簡潔に答えた。
それにビンツは「へー。」と、適当に相槌を打つ。

だが、そんなビンツに突然雲雀が襲い掛かった。

ビュッ、と空気を切り裂く音の後、ビンツの服が切られた。

ビンツが避けなければ、肌が切れていただろうか。

「不意打ちかよ雲の守護者さん。こっちはまだ自己紹介中だぞー」

「そんなの関係ないさ。目の前で群れる奴は僕が咬み殺すだけだからね」

「…え。オレ群れてるのか？敵とか？」

リーダーは自分とビンツを指差して雲雀に確認する。
それに雲雀が黙って頷いた。

そんな二人を見ていたビンツが、突然大きな笑い声をあげた。

「あっはははははは！！！！なんだ、ボンゴレの守護者さんは！！
変わった奴が多いっつうのは本当か！！」

ビンツの言葉を聞いて、雲雀の機嫌がさらに悪くなったが、それに
気付いているのかそうでないのか、ビンツは話をつづける。

「おめぇとも仲良くなれそうだけどなあ、どっか似てるしな、オレ
とおめぇ」

「……。」

馴れ馴れしくビンツがリーダーの肩を叩く。

リーダーはただおかしなものを見るような目をビンツに向けていた。

「ほんと、残念だ。おめぇらがアッジョルナーレにいたら面白かっただろうがなあ……」

突然、空気が変わる。

ひやり、と空気が凍りついた。

リーダーは身の危険を感じてすぐにビンツから離れた。

「でもさ、オレたちは敵だから、戦わなきゃなんないんだ」

今までおとなしくしていたビンツのハンマーが、動き出す。

いかにも重そうなハンマーを、ビンツは片手で軽々と持ち上げている。

「さぁて、ボンゴレリング、いただこうじゃねえか？」

大きなハンマーが、音を立てて振り落とされた。

「…！？」

ツナはなにかを感じたように顔をあげた。

とてつもない嫌な予感がした。

「どうした、ツナ」

「…なんか、すごい嫌な予感がして……」

ツナは森を見回す。

あって欲しくない姿を探していた。

「…もしかしたら、だけど、」

とぎれとぎれに、ツナが言葉をつなげる。
リボーンたちはその言葉の先を黙って待つ。

「……みんなが、ここにいる。」

「ま、まさかみんなと言うのは…！」

ロンジの驚く声にリボーンが黙って頷いた。
やはり、飛ばされていたのだ。
ボンゴレの守護者、関係者が。

そして、この森に散らばっているのだ。

「よく気付いたね。それが超直感？」

どこからか聞こえる声。
それには聞き覚えがあった。

「…まさか、この声って……」

「あ、覚えててくれたんだ、うれしいなー」

ガサッ、と草をかきわける音がした方向を見ると、かつてツナたちを襲った姿があった。

「おめぇ、確か…ニコールとかいう奴だったか」

リボーンはその敵を見てつぶやく。
ニコールは肯定するように笑った。

「久しぶり、綱吉くん。迎えに来たよー」

「迎え…？」

ニコールは頷いて話しはじめた。

「今から、ここにボンゴレリングを持った僕の仲間が集まるんだ。
でも、僕らのボスはリングだけでは満足しないお方でね。綱吉くん
がいないとリングを集めても意味がないから迎えに来たんだよ」

「…じゃあ、やっぱり……！！」

ツナは顔が青ざめるのがわかった。

やはり、ここにはボンゴレ守護者と関係者がいる。
そして、戦っている。
アッジョルナーレと。

「わかってくれた？じゃあ一緒に行こうよ。ボスが待ってる」

ニコールは固まっているツナに近づく。

だが、それをなにかが阻止した。

パシンッ、とニコールの手をなにかがはじいた。

「…綱吉くんは渡さない」

「…結加ちゃん……」

ツナの目の前に結加が光の玉を作り出して立ちはだかる。
それをニコールはうっとうしそうに見た。

「…なに、君。リングを持ってないただの関係者？」

「ただの関係者、とは失礼ね。これでもボンゴレ九代目に認められた戦闘力を持ってんのよ」

口許をゆるめて結加がニコールを見つめた。
すると、さらにツナの前になにかが立ちはだかった。

「ツナは君達のものになんかならない。ツナは道具じゃないんだ」

バサバサと降り立った鳥…トンノは、大空属性の炎を纏ってニコールをにらむ。

「君はたしか…綱吉くんの力で実態化しちゃった空気、だった鳥だよねー」

「そんなことも知ってんのか」

リボーンは無表情でニコールに聞いた。

「そうだよ。それを聞いたときびっくりしたよ。そんな力を持ってるなんてさ……だから、綱吉くんの力が必要なんだ」

ニコールは懐から自分の武器、銃を取り出した。

「綱吉くん、一緒に行こうか」

カチャッ、とニコールの銃が音をたてた。

ボンゴレとアッジョルナーレの戦いが今、はじまった。

標的４２　怒る炎と光、そして双子

「綱吉くん、一緒に行こうか」

仲間に突き付けられた銃。
今にも引き金が引かれてしまいそうだ。

だが、銃を向けられているにも関わらず、ツナの前に立ちはだかる仲間、結加とトンノは怯むことなく、動かない。

「結加ちゃん、トンノ！！！」

「綱吉くんはそこにいて」

「ツナはまだ傷が治ってないんだから、無理しちゃだめだからね」

結加とトンノはツナに微笑みかけた。
ツナは二人を止めようと立ち上がろうとするが、腹の傷が痛んですぐにしゃがみこんでしまう。

そんなツナを見ていたニコールが、おもしろそうに口を開いた。

「へえ、綱吉くんは怪我してるんだね。しかも結構痛そう」
指で銃をくるくるとまわしながら距離を縮めてくる。
トンノたちの身体が強張る。

「それなら、簡単に手に入れられそうだね」

ドカァァァァァァンッ

ニコールが言葉を放った瞬間、どこからか爆発音が聞こえた。

「な、なに!?」

「お、他のところも始めたみたいだね」

驚くツナに、ニコールはさらりと告げた。

「始めた…って、まさか…」

嫌な予感は、見事に当たった。

戦闘がはじまったのだ。

ボンゴレ守護者とアッジョルナーレとの戦闘が。

「派手にやってるねー。これならボンゴレ守護者なんてすぐに死んじゃうかもね」

へらへらと笑いながら言うニコールに、ツナが叫んだ。

「…っみんなは、死なない！！！」

今まで数々の困難を乗り越えてきたのだ。
苦しいこともあった。
悲しいこともあった。
それを、全員で乗り越えてきた。

「お前らなんかに…負けるわけない！！！」

ツナの言葉にニコールは驚いていたが、やがてまたへらっと笑ってツナに言う。

「怒らせちゃってごめんね。許してくれる？綱吉くんとは仲良くなりたいんだよ。」

カチャッとニコールの銃が音を立て、ニコールの手におさまる。
ツナは黙ってニコールを睨んでいた。

「だって、綱吉くんは、アッジョルナーレの仲間になるんだから」

ニコールがそう告げた瞬間、バシュッ、と音を立ててニコールの足元へとなにかが放たれた。

「なに、鳥さん」

「ツナは渡さないって言ったはずだよ」

トンノはゆらりと炎を揺らめかせてニコールを見つめていた。
トンノから発せられる炎は、ニコールを威嚇するようにまたたいている。

「されど鳥。すぐに焼鳥にしてあげるからねー」

「侮らないでよ。僕はツナの炎で実態化した鳥だ。ツナには劣るけど、れっきとした大空属性だよ」

バサッ、とトンノが翼を動かした。
それに連動するように炎も大きく揺れ、あたりに散っていく。

「そんなの僕には関係ないよ」

ニコールがきっぱりと言い切る。
トンノに勝る自信があるらしい。

「綱吉くんやトンノには敵わないけど、わたしだって戦う」

結加の掌に発せられる光の玉が、煌々と輝いている。

「ふぅん。ま、楽しませてくれるならいいよ」

ニコールは銃を構えてにっこりと笑った。

「勝つのは僕らアッジョルナーレさ」

凄まじい音が森に響き渡った。
その方向を見遣ると、黄色と白を帯びた光とオレンジ色の炎が空に消えていくのが見えた。

「あの光と炎…まさかっ！！」

「よそ見してたら危ないよ」

獄寺の顔すれすれで槍が横切る。
体勢を直して獄寺は目の前の敵に睨みをきかせる。

「おめぇ…どっちだ？」

「うわ、失礼だな！僕はアロッチだよ！」

獄寺は双子の片割れ、アロッチと戦っていた。
だが双子の容姿はまったく同じなため、どちらと戦っているのかわからなかった。

「じゃあ、山本と戦ってるのがスコッチっつう奴か」

「そうだよ。なんでどっちがどっちっていうこともわからないのか

な！」

おかしく笑うアロッチは、軽く地面を蹴り空中へと移動する。

「いつだって…誰も僕らを個人として見ないんだ」

「は？」

突然寂しそうな顔をするアロッチに獄寺は疑問を抱いた。

だが、すぐにアロッチの表情は戻り、獄寺に槍を投げつけた。

「もう慣れたけどね！！！」

先程よりも槍のスピードがあがっている。

数も増え、逃げるのに精一杯だ。

「っちくしょう！」

獄寺はただ逃げることしかできず、ちらりと山本の方を見た。

「お前の槍ってすごいのな！丈夫に出来てんだなー」

「普通の鉄に僕の力が注入されてるんだから当たり前さ！」

山本は時雨金時でスコッチの槍を弾き返す。
その度にキンッ、キンッ、という鋭い音が聞こえた。

「お前の力？なんだそれ？」

「僕らはさらに強くなるためにウライラ様が用意してくれた強化オペレーションを実行して、力を手に入れたんだ。僕らの能力を増す力をね！」

スコッチは得意げに山本に説明した。

山本やツナで言う炎の属性の“鎮静”や“調和”のようなものだろう。

「すげぇなー。ていうかお前ら一人でも喋れるんだな？」

「馬鹿にしないでよ？双子でも僕らは個々の人間なんだから」

「そっか！わりぃな！」

山本が素直に謝ると、スコッチの表情が少しだけ強張った。

それは、驚いたような、哀しいような、でも嬉しいような表情。

山本は首を傾げたが、スコッチは我に返って顔をそらした。

「…気にしないって決めたのに」

「何か言ったか？」

「なんでもないよ！勝手に聞くな！！」

スコッチは怒鳴って山本に倍の数の槍を投げた。

「危ねっ！自分で勝手に話してたじゃねえかよ！」

「黙れ！今すぐ黙れ！！」

スコッチは狂ったように槍を投げつづける。
次第に時雨金時で交わすには限界が見られた。

「どうすっかなあ…」

山本の笑顔に少しだけ焦りが見られた。

「どうせ僕らは」

「二人でひとつ」

「「それ以外の何でもないんだろ？」」

標的４２　怒る炎と光、そして双子（後書き）

タイトルを考えるのが辛くなってきました（笑）

悩みます。うう～ん。

この小説に挿絵があればいいのに、という意見をいただきました。

…わたしにそんな力はないです（；д；）

でも、少しやってみたい気もします…

ＨＰで載せてみようかな…

標的４３　相性の良い二人（前書き）

書き散らしました！
短いですー（、Д、）

標的４３　相性の良い二人

ツナたちが連れてこられた広い森。

そこにボンゴレの守護者と関係者が散らばっている。

北には獄寺と山本。

東にはツナ、リボーン、トンノ、結加、ロンジ、ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のシクロとシスイ。

南にはクロームと了平、ランボ。

西には雲雀とリーダー。

そしてそれぞれの場所にはアッジョルナーレが姿を現していた。

北には双子のアロッチとスコッチ。

東にはニコール。

南にはマリネ。

西にはビンツ。

それぞれがそれぞれの戦いを繰り広げていた。

さて、森の南側。
了平たちのいるところでは、極限ボクシング男とずぼら女が口論をしていた。

「あんた馬鹿じゃないの！？」

「馬鹿と言う奴が馬鹿なのだ！」

「だってあんた馬鹿じゃん！わたしの手裏剣に素手で立ち向かおうだなんて！」

「そんなん、やってみなくては極限わからん！！」

ぎゃあぎゃあ騒がしい二人をクロームは戸惑いながら見ていた。

さっきからこの調子なのだ。

ランボは暇なのか眠いのか、うとうとし始めていた。

「どうなっても知らないんだからね！！」

マリネはどこからか手裏剣を取り出し、了平に向けて放った。

「きょっくげーん！！！」

へんな雄叫びをあげながら、了平は拳を突き上げた。

刃物と素手では明らかに素手が負けてしまう。

クロームはとっさに了平の拳を幻覚で作り出した拳でカバーした。

手裏剣は幻覚の拳によって呆気なく砕けた。

「なっ！？」

「ほらな！やってみなければわからんだろう！」

ほんとに素手で交わされてしまったマリネはショックを受けた。
了平はクロームの作り出した幻覚の拳が手裏剣を砕いたことに気付いていない。

自分の拳で手裏剣を砕いたと思っているらしい。
誇らしげに両腕をあげて笑っていた。

「晴の人…それ、わたしの幻覚…」

「ん？なにか言ったかクローム！？」

クロームは小さな声で了平に事実を言おうとしたが、言えなくなってしまった。

あまりにも了平が生き生きとしていたので。

「まじ意味わかんない！容赦しないんだからね！！」

マリネは悔しそうに歯を食いしばって、次々と手裏剣を放つ。

それにまたも素手で挑もうとする了平を慌ててクロームが手助けをする。

再び了平の拳を幻覚の拳で包み込み、手裏剣を阻止する。

きょっくげーん、きょっくげーん!!と何度も叫ぶ了平は太陽のように輝いていた。

「いい加減にしなさいよ!もう頭にきた!!」

怒ったマリネは、両腕を広げて指をパチン、と鳴らす。

すると、マリネの周囲におびただしい手裏剣が現れた。
百個以上はあるだろうか。
手裏剣は空中にふよふよと浮いている。

「前のあたしとは違うんだからね!」

ふふん、とマリネは得意げになる。
以前のマリネに会ったことがない二人に言っても仕方ないのだが。

「行くわよ、手裏剣豪雨！！！」

おかしな名前を合図に、大量の手裏剣が一斉に二人に向かって飛んできた。

「それならば極限に阻止するだけだ！！」

了平は拳に力を込めて振りかざす。

クロームもさらに集中してより強い幻覚へと変化させる。

「マキシマムキャノン！！！」

了平の拳を根源に、晴の炎と霧の炎が混ざり合う。

晴の炎は“活性”。

霧の炎は“構築”。

了平のマキシマムキャノンが、晴の炎によって活性した霧の炎の構築によって、二人を守るバリアの役目を果たした。

砕かれた手裏剣はぱらぱらと地面に落ちていく。

マリネは言葉を失ってしまった。

「極限になれば誰でも強くなれるのだ！！」

「みんなを守るために…わたしは戦うの」

一見食い違いの多い了平とクローム。

だが、実は相性のよい二人だった。

標的４４　リーダーの銃（前書き）

やっと出せましたー！

あたためていた技です！

標的４４　リーダーの銃

真っ暗闇な空間。

すべてが黒。なにもかもが黒。

どこがどうなっているのかわからない。

そんなところにウライラはいた。

「叫んだって無駄ですよ。あなたの声は届かない。」

ウライラはおかしそうに笑って目の前でもがき、助けを求める人間の姿を見ていた。

「抵抗しようと無駄なんだ。あなたは消えた。この世から。」

「……！」

「なに、事実を否定するんだ？これが現実だと言うのに！」

傑作だ、とウライラは大きな声で笑う。

目の前の人間は悔しそうに、辛そうにウライラを睨む。
それに気付いたウライラが馬鹿にするように鼻で笑った。

「あなたはもういない。僕が消してあげた。なのにまだここにいるということは、相当神経が図太いのかな?」

ウライラは見下すような目でその人間を見て、言葉を放った。

「完全に消してあげよう。綱吉くんが手に入ったらね。」

暗闇に悔恨と辛苦が入り混じった。

「そんなちっせぇ身体でオレに勝とうってか!?」

「僕をちび呼ばわりするのやめてくれる?僕より小さい人間なんて腐るほどいる。例えば、」

沢田綱吉とかね、とつぶやき雲雀がトンファーを振りかざす。

それをビンツは馬鹿でかいハンマーで防いだ。
ハンマーにはトンファーの食い込んだ後がしっかりと残されている。

「げっ、なんてことしてくれたんだてめっ!」

「僕は悪くないよ。あなたのそのハンマーが弱すぎるんだ」

雲雀は無表情でビンツを睨む。
ビンツはにやりと笑ってハンマーを軽々と肩に担いだ。

「ちいせぇから手加減してやったんだが…思い切りつぶされたいらしいな!」

ビンツは空いている片手の指をパチンと鳴らす。

すると、ゴゴゴゴゴ、という地響きのような音があたりに響きわた

った。

「何しようとしてるの？」

「教えてやらぁ！」

ビンツはハンマーを振りかざして地面にたたきつけた。
すると、そこから亀裂がはいり、地面がぱっくりと割れていた。
その亀裂は数メートル離れている雲雀の足元にまで届き、雲雀は片方の地面へと飛び退いた。

「ワオ。」

「反応薄いなあ雲の守護者さんよお！！もっと驚いていいんだぜ？」

「これでも十分驚いてるつもりなんだけどね」

「嘘つけ！！まったく変わらねぇじゃねえかその鉄仮面！！」

リーダーが雲雀に言うと、雲雀はくるりと振り返り、無言で怒りを

あらわにした。

睨むその目は、殺気が滲み出ている。

リーダーは苦笑いをして後ろに下がった。

（扱いにくいぜこの兄ちゃん！！）

そんなリーダーの心の叫びもつゆしらず、雲雀はハンマーを再び担いでいるビンツに話しかけた。

「あなたの力がどんなに強くても、僕には関係ないよ」

「おぉ、どうしてだ？」

雲雀の口許があやしく緩む。

「むかつく奴は咬み殺せばいいんだから」

「いい度胸じゃねえか！かかってこい！」

ビンツがハンマーを掲げて雲雀に向かってきた。

すると、雲雀のボンゴレリングから紫色の炎が出現し、それはトンファーへとうつっていく。

雲のような炎を揺らめかせ、雲雀がビンツを、詳しくはビンツの顔目掛けて攻撃を仕掛けた。

「ぅおっとー、危ない危ない」

それをビンツはハンマーの柄で防ぐ。

ピシリ、とハンマーの柄にひびがはいった。

「おいおい、こんなかってー木にひびいれるなんて、どんな力持ってんだよあんた」

「だから、あなたのその武器が弱すぎるんだよ」

雲雀はそのひびを狙ってトンファーで攻撃する。

ビンツは舌打ちをしてハンマーを地面に打ち付けた反動で雲雀の後ろにまわり、ハンマーを振りかざした。

「！」

「おせぇよ、雲の守護者さん」

ビンツがにやりと笑って雲雀にハンマーを振り落とした。

「ｓｃｈｉｖａｔａ（スキヴァータ）！！」

パァン、と銃声が鳴り響き、森にこだまする。

ビンツはとっさに弾を避けて雲雀から離れた。

「…なにしてるの、おじさん」

「おじさんじゃねえ！！リーダーだ！！つか助けてやったのになんだその態度は！」

不満そうな顔でこちらを見ている雲雀に、リーダーは思い切り怒鳴った。

発砲したのはリーダー。
雲雀を助けるためだ。

なのに感謝されるどころか、迷惑だと言わんばかりの態度をとられた。

「なんだ、今の技か？」

少し離れたところでビンツがリーダーに尋ねる。
リーダーは、あぁ、と答えて話しはじめた。

「オレの銃は特殊でな。命令を下せばその通りの攻撃ができるんだ」

銃を構えながらリーダーが誇らしげに笑う。

その銃の弾は攻撃と防御のふたつにわかれる。

山本の時雨蒼燕流の攻防の型のようなものだ。

ｓｃｈｉｖａｔａ（スキヴァータ）というのは
イタリア語で「避けること、かわすこと」を意味する。
つまりは防御の弾だ。

「攻撃っつうのはどんなんだ？」

「教えてやるよ」

得意げにリーダーは笑ってビンツの方へと駆け出す。
ビンツは警戒して構えをとった。

「ｕｒｔａｒｅ（ウルターレ）！！！」

勢いよく発砲された弾はビンツ目掛けてとんでいく。

ビンツは避けようと身を翻した。

翻したはずだった。

パシュンッ

「…なっ！！？」

ビンツが驚いて声をあげた。
リーダーがにっ、と笑った。

確かにビンツは避けたはずだった。
だが、弾はビンツの肌をかすめた。
弾がかすめた肌から、鮮血がたらりとたれた。

「…てめぇ、なにをしやがった？」

「お前さんが攻撃の弾を見たいっつぅから見せてやっただけだぞ？」

にやにやとリーダーは笑いながらビンツに言った。

ｕｒｔａｒｅ（ウルターレ）というのは「当たる」という意味で攻撃型だ。
その言葉のとおり、「当たる」。

「当たる」まで、標的を追いかける。

「リボーンもこの技を会得して、銃も持ってるはずだがなぁ」

「赤ん坊が？」

雲雀はそんなの見たことがない。
だいたいはレオンと愛用している銃を使う。
技だって、「カオス・ショット」しか知らない。

「その反応だと、リボーンはおめらの前で使ったことがねぇらしいな」

雲雀の表情を見て、リーダーがつぶやいた。

「…ま、あいつがこれを使ったら恐ろしいからな」

そう言うとリーダーは再びビンツを見る。
弾がかすめた腕をおさえながら、ビンツが悔しそうにリーダーを睨んでいた。

「お手柔らかにやろうや、な？」

ずっと木の上から見ていた黄色い鳥が、おかしな音程で高らかに歌いはじめた。

標的４４　リーダーの銃（後書き）

やっとリーダーの銃の技が出ました。

アルヴィーコラだった時から出そうか出さまいかと迷っていましたが、やっと出せました！

参考は山本の時雨蒼燕流。
攻防型だけ参考にしました！

リボーンの技をあまり見たことがないので、リボーンにもこの技を会得してもらいました。

これからリボーンを動かすのが楽になりそうです。

標的４５　二丁拳銃（前書き）

ぐだくだです（´・ω・`）

標的４５　二丁拳銃

ズガァァンッ　ズガァァンッ　ズガァァンッ

「…銃声？」

遠く離れたツナたちにも、リーダーの銃声が聞こえた。
その方向を見ると、キラキラとなにかが輝いていたり、煙があがったりしていた。

「…まさか、あいつ」

リボーンがぽつりと呟いた。

「ねぇ、よそ見しないでくれますー？」

結加とトンノと戦っている敵であるアッジョルナーレのニコールがツナとリボーンに話しかけた。

その隙をついて結加が光玉をニコールに向かって放つ。
が、ニコールはそれをやすやすとかわしてしまった。

「まったく歯がたたない…」

結加は息を荒くしながらニコールを睨んだ。

先程から何度攻撃を仕掛けても簡単にかわされる。
結加は数え切れないほどの光玉を放っていた。

結加の光玉は死ぬ気の炎を凝縮したもの。
沢山放てばそれなりに体力も消費される。

数え切れないほど光玉を放った結加の身体には大きな負担がかかっていた。

（身体が上手く動かない…）

もはや結加の身体は限界だった。
足元はおぼつかず、ふらふらしている。

そこを狙ってニコールが攻撃してきた。

「ほら、ぼーっとしてると危ないよ！」

ニコールの銃が発砲された。

結加はとっさに避けようとしたが、突然のめまいに襲われて避けきれなかった。

バシュッ

「……っ！」

「結加ちゃん！」

脇腹を弾がかすめた。

結加は痛みに顔を歪ませてその場に倒れ込んでしまった。

「…う…っ……」

「痛そうだね。大丈夫、すぐに楽にしてあげるから」

ニコールはにっこりと笑って銃の引き金を引いた。

「結加！！」

トンノは瞬時に全身から炎を放出して結加をかばう。

弾は炎によって石化され、ころんと地面に転がり落ちた。

「邪魔だよ、鳥」

「何とでも言えばいい。僕はどかないよ」

トンノは威嚇するように炎を揺らめかせて対抗する。

それをニコールはうっとうしそうに見ていた。

「うざいなー。ほんとに邪魔だよ。」

チッ、と舌打ちをすると、ニコールは懐からもう一丁取り出した。

「二丁拳銃か…」

「今時珍しくないよね。最強ヒットマンのリボーン。」

ニコールの問いに、リボーンは鼻で笑って答えた。
銃の腕前は誰にも負けないリボーンにとって、二丁拳銃などたやすい。
だが、今はそんなことを考えている場合ではない。
「逃げるなら今のうちだけど？」
「僕は逃げないよ。」
トンノが両方の翼を羽ばたかせ、結加を完全に隠す。
「トンノ…逃げ…て！！」
「なに言ってるの、結加。結加を置いて逃げるわけないでしょ？」
脇腹を抑えて立ち上がろうとする結加にトンノが優しく話しかける。

「すぐにおいしい焼鳥にしてあげるよ」

「やってみなよ」

炎がさらに大きくなる。
トンノは神経を集中させ、ニコールの出方を待った。

「…ふっ」

ニコールがかすかに笑った。
次の瞬間、目の前からニコールが消えた。

「…消え…た！」

ニコールが消えたことに驚き、トンノは動揺した。
それをニコールは狙っていた。

「隙あり。」

「…っ、しまっ…」

しまった、とトンノは思った。

ニコールが消えたことに動揺したトンノは、炎を弱くさせてしまったのだ。

全身から放たれていた炎が消え、無防備な姿となったトンノをニコールは狙っていた。

トンノは死ぬ覚悟で目を閉じた。

「…ぐはっ！」

聞こえたのは誰かの声。

死んでいない。
生きている。
なぜ?

トンノはゆっくりと目を開けた。

「……!!!」

「大丈夫か?」

トンノは驚愕した。

なぜなら目の前にいるのは…。

「…ツナ!!」

ツナは優しい笑みをトンノに向けた。

さっきの声の主はニコール。
その頬には殴られた跡があった。

それをやったのはツナだ。

トンノたちの危険を感じ、ツナはすぐにハイパー化したのだ。

腹の傷があろうとも。

そんなことは気にしなかった。

「…綱…吉くん……」

「オレの仲間に手を出すな」

普段よりも低い声でツナが告げる。
目は琥珀色からオレンジ色へと変わっている。

額の炎は鮮やかに燃えていた。

「……っ…」

ニコールは言葉を失った。

その姿が、その炎があまりにも美しかったから。

「…なるほど、ね。」

ニコールはゆっくりと立ち上がった。

そして口元から垂れていた血を袖で拭う。

「こんな力、誰でも欲しがるわけだよねー」

楽しそうにニコールは笑った。

ツナは無表情でニコールを見つめている。

「綱吉くんの力がすごいってこと、やっとわかったな」

「何がすごいんだ？」

「えー、気付いてないの？」

まあいいや、と言うとニコールは服の土を払い、再び銃を握った。

「綱吉くんは傷つけちゃいけないんだけど、その後ろの“お仲間”とかいう人たちは用がないから何でもしていいんだってさ」

「お前には指一本触れさせない」

ツナのグローブから炎がゴオッ、と音をたてて燃え盛る。

ニコールがおかしな笑みで言った。

「一人で五人と一羽を庇うなんて無理でしょ？」

「一人じゃないよ」

ツナの隣に同じ炎を揺らめかせるトンノが並んだ。

トンノの目はまっすぐニコールの姿を捕らえている。

「なんだ、焼鳥にされに来たの？」

「あんたこそ、石にされたい？」

負けじとトンノがニコールに言い放つ。
そんなトンノをなだめ、ツナはニコールを睨んだ。

「覚悟しろ」

「仲間になる人間になに言ってるの？」

「オレはお前たちの仲間になんかならない」

ツナの炎がさらに激しさを増す。

ニコールは仕方ない、とでも言うかのように肩をすくませた。

「多少の傷は我慢してよね」

二丁の拳銃が音を立てる。

ミシリ、となにかが鳴った。

それは黒い黒い、不吉な痣。

標的４５　二丁拳銃（後書き）

やっと結加の光の玉の名前を出せました。

今まで出すのを忘れてました。

光玉です。

こうぎょく。

安直ですね。

標的４６　双子合する（前書き）

ＧＷは一日一話を目標に頑張ってます。
なんとか今日の分は間に合いました。

標的４６　双子合する

あなたはどっち？
お兄ちゃん？弟さん？
同じ顔だからわからないわ
いいわよね
ふたりで一人のようなものだものね

そうやって、ごまかして
いつだって僕を、僕を、
僕らを
ひとまとめにして扱った

みんな、みんな、みーんな。

誰だって、

僕らを
一人として見ないんだ。

「…っいい加減にしやがれ！」

「そっちがだよ！まったく、しつこいったらありゃしない！」

木々の間からは赤い炎と槍がちらほらとうかがえた。
獄寺は双子の兄、アロッチと戦闘中だ。

「ほんとにうっとうしい！なにそのゴキブリ精神！」

「誰がゴキブリだぁ！！？果たすぞおめぇ！！！！」

アロッチは獄寺のしぶとさをあの姿を見るだけで誰もが顔を歪ませる虫に例えた。

頭にきた獄寺は嵐の死ぬ気の炎と少量の雷の死ぬ気の炎が合わさったフレイムアローをアロッチに向けて放った。

「おめぇのがゴキブリだろが！！」

ドォォォォンッ

「ぅわあ！！？」

獄寺のフレイムアローが頬をかすめ、アロッチは慌てて距離をとった。

頬をなにかがつたうのがわかる。

「ちょっと！今放ったやつ、嵐の炎とか言うやつ？なんか緑色の炎も見えたんだけど！」

「ああ、今のは嵐の炎と雷の炎を合わせたもんだ」

アロッチは信じられないと叫んだ。
少しパニック状態に陥っているらしい。

「なんなのあんた！ボンゴレの守護者ってひとつの炎しか使えないんじゃないの！？」

「知らねぇのか、おめぇ」

獄寺は右手の甲をアロッチに向けて指に嵌まっているリングを見せた。

「…五つ？」

「ああ。オレは大空と霧以外の五つの炎が使えるんだ」

そう言うと、獄寺の五つのリングからは赤、青、紫、黄、緑の色の炎がボゥッ、と音を立てて燈された。

「オレには嵐、雨、雲、晴、雷の波動が流れてるからな」

「そんなの知らないよ!!」

アロッチは目を見開いて驚いていた。
ウライラから聞いていたのは、この獄寺という人物は嵐の守護者で、嵐の死ぬ気の炎を使うと言うこと。
複数の炎を使うなんてウライラは言ってなかった。

「…どうして…ウライラ様!!!」

「情報が足りなかったみてぇだな!」

ショックを受けているアロッチに、獄寺は再びフレイムアローを放とうとした。

「これで終わ…っ!?」

突然、ただならぬ殺気を感じて獄寺は後ろへと退く。
すると、横から複数の槍が飛んできて獄寺のいた場所へ刺さった。

「アロッチに手を出すな！！」

「っおめぇ…」

「スコッチ！」

目の前にあらわれたのは、アロッチと全く同じ顔の双子の弟、スコッチだった。

スコッチは眉間にしわを寄せ、怒りをあらわにしている。

「あ、獄寺ー」

ガサガサとしげみから山本が出てきた。

「てめっ、山本！なに敵を逃がしてんだよ！」

「わりぃ！こいつ早いからさ！」

山本は笑って獄寺に謝罪した。

しかし獄寺は許す気などない。

「こいつが来なかったらトドメを…」

「させるか!!」

ヒュン　ヒュン　ヒュン　ヒュン

再び獄寺に向けて槍が放たれる。
相当スコッチは怒っているらしい。

「死ぬのはおまえらだ!」

スコッチが指をパチンッ、と鳴らす。
金属のジャラジャラという音と共に、大量の槍があらわれた。
その数、数百本。

「喰らえ!!」

スコッチの声で槍が一斉に獄寺たちに向かう。

獄寺は山本の手を引いた。

キン　キン　キン　キン　キン　キン

槍は小さな衝突音を鳴らせて地面へと落ちた。

「…なにそれ。」

「これも知らねぇか？」

獄寺は得意げに笑う。

「これはＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．（スィステーマ　シーエーアイ）の防御フィールドだ。簡単に言えばバリアだな」

「…それも、聞いてない」

「ウライラ様はそんなこと…」

「言って」
「なかった」

アロッチとスコッチの声が交差する。
声も同じなので一人が喋っているように聞こえるが。

「サンキューな、獄寺！」
「ぼーっとしてんな馬鹿！」

獄寺が山本の手を引いたのは山本をＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．（スィステーマ　シーエーアイ）のフィールド内に入れるためだった。

一応言っておくが別に山本を盾にしようとしていたわけではない。

「なあ、獄寺。あいつら前よりも強くなってねぇか？」

「確かにな」

「さっきあいつ、強化プログラムがなんとかって言ってたぜ」

「強化…プログラム？」

獄寺はあれこれと思考をめぐらせる。

双子の槍は前より断然スピードは早まったし、破壊力もあがった。

しかも前は指を鳴らして槍を出現させるなど、していなかったはずだ。

それに槍は手に持って放っていたのに、今は指示するだけで槍が放たれる。

（強化プログラム…って言うのと関係があるのか？）

獄寺は頭の中で次々と状況を整理していく。

山本も双子の強くなった理由を考えた。

（…そういえば）

先程アロッチは言っていた。

“普通の鉄に僕の力が注入されてるんだから当たり前さ！”

“僕らはさらに強くなるためにウライラ様が用意してくれた強化オペレーションを実行して、力を手に入れたんだ。僕らの能力を増す力をね！”

（…能力を、増す力？）

その言葉がひっかかる。

能力　を　増す　力。

すると、顔をなにかが横切った。

「余裕ぶってると死ぬよ！」

スコッチは大量の槍を獄寺たちに向けて放つ。

フィールドの間に入り込んだ槍が山本の顔を横切っていた。

「びっくりしたぜ！」

「呑気に驚いてんじゃねぇ！！」

どんな状況でも山本は山本だ。
あはは、と笑っている。
本当に驚いたのだろうかと疑ってしまう。

「ねぇ、さっさと終わらせようよ」

「こんなくだらない茶番をね」

双子が獄寺と山本に話しかける。
その場の空気が一気に変わった、

「僕らは強くなり続けるんだ」

「あれがあるかぎりね」

同じ笑顔がふたつ、獄寺と山本に向けられる。

謎の言葉を残し、双子は槍を放った。

標的４７　霧の男現る

我慢してちょうだいね
これはあなたのためでもあるの
あなたならできるわよ
だから、手を離して
わたし、行かなくちゃ
大丈夫
迎えに来るから

そう言って、二度と姿を現さなかったのはあんたでしょ
裏切ったのはあんたでしょ
誰も助けてくれなかった
だから、だからあたしは…

「きゃあ！！」

「おお、すまんな！」

「謝るならその攻撃やめなさいよ！」

ぼーっとしていたら目の前に拳が飛んできた。
マリネは慌ててそれをかわして退く。

しっかりしろ、と自分に舌打ちをする。

消えたはず。
忘れてたはずなのに…なぜ？

「…？」

幻覚で戦闘に参加していたクロームはマリネの異変に気付いた。

先程は余裕そうで、行動に無駄がなかった。

だが、今は余裕はなく、行動には隙だらけだ。

（なにか…あった…？）

クロームはマリネをじっと見つめた。
結構長いこと戦闘は続いている。
だがその間にはなにもなかった。
五感で確認できるうちは。

（…確かめなきゃ。でもどうやって……）

戦闘の間、マリネにあった出来事を調べなければ。
しかし、本人に聞くわけにもいかない。

クロームは悩み考えた。

そんなとき、脳内に響いた。
クロームが大切にする人物の声が。

―クローム。

「…っ骸様…！」

クロームは骸の声を聞き、はっとする。

―やっとこたえてくれた。

「…ごめんなさい」

―クロームが悪いわけではないのですよ。どうやら、その森は邪気が大量に漂っているようです。僕の力を遮るようなね。

クロームは黙って骸の話を聞いていた。
邪気とは、ねじけた気持ち、悪意などのことである。
だがそんな異様なものは、ここに来て感じられなかった。

「骸様、そんなもの…わたし、感じてないです」

―そうです。あなたたちは感じられないんです。…ボンゴレリングによって。

「…え？」

クロームは大きな瞳を揺らした。
そして右手の指に嵌められているリングを見つめた。

キラリと輝くリング。まるでその存在を示すかのようだ。

「なんで…リングが？」

―僕にもわかりません。ですが、確かにリングの力によってあなたたちは邪気から守られているようです。…それより

骸の声がより真剣なものになる。
美しく、低い声が脳内に響く。

―あの女の正体を確かめなければ。

「でも、どうやって…」

すると骸は大丈夫です、と優しくクロームに言った。

―あなたには、リングが…匣兵器があるでしょう？

「…あ！」

なぜ気づかなかったのだろうとクロームは思った。
すっかり忘れていた。
ボンゴレ匣の存在を。

「…開匣」

クロームがリングに炎をともし、匣に注入する。
そして匣から藍色の炎を纏い、全身が白いフクロウが姿を現した。
クロームの匣兵器、霧フクロウＶｅｒ．Ｖだ。

「ムクロウ、形態変化（カンビオ・フォルマ）」

クロームがムクロウに呼び掛けると、その姿を変えていく。
そしてあらわれたのは眼鏡のようなもの。
実体のつかめぬ幻影と謳われたＤ・スペードの魔レンズだ。

クロームは魔レンズを通して戦闘中の了平とマリネを見た。

「…え？」

クロームは目を疑った。
まさか、そんなことはあるまいと魔レンズの映し出した事実を否定した。

こんなことがあろうものか。
普通なら絶対にないはずだ。
普通なら。

―どうしました、クローム。

「…骸、様…。あの……」

骸は優しくクロームに問いかけるが、クロームは混乱していて上手く言葉を繋ぐことができない。

―しばらく身体を借りますよ。

声がぷつりと消えた。
そしてクロームの身体が霧に包まれる。
オッドアイの瞳が輝いた。

「クフフ、なんとかクロームと入れ代わることができましたか」

おかしな笑い方をして骸は手に持っていた魔レンズを再びマリネにかざした。

「…まさか、ですね。通りでクロームが混乱してしまったわけです」

骸は表情は変わらないが驚いているらしい。

またクフフ、という笑い方をした。

「さて、このボンゴレリング…本当に不思議なものだ」

骸はリングを眺めて呟いた。

ボゥッ、と霧の炎が揺らめく。

骸は口許をゆるめた。

「沢田綱吉…あなたの力はどこまで未知なんでしょうか」

「おおっ、六道骸ではないか!!」

了平がやっと骸に気付き、骸に話しかける。

骸はやれやれと小さなため息をついた。

「気付くのが遅いですよ、笹川了平」

「すまんな、こちらは戦闘中なのだ！」

「ちょっと無視しないでよ！」

その声と連動して大量の手裏剣が放たれる。
だが、それは先程よりもスピードが落ちている。
了平はステップを踏んで次々と避けた。

マリネが焦燥の色を見せている。
それと同時に、どこか苦しそうで、辛い表情をしていた。

「あなた、何者なんですか？」

骸がマリネに話しかける。
マリネは見知らぬ男がいつの間にか現れたことに驚いていた。

「あたしはアッジョルナーレのマリネだけど？」

「そういうことではなくて…」

骸は真っ直ぐマリネを見つめる。
マリネは固まった。動けなかった。

骸のオッドアイを見て。
震えた。
恐怖を覚えた。

「あなたのような人がなぜ、生きているのですか？」

「っ！！！？」

マリネが目を見開いて言葉を失った。
口からはかすかな声と二酸化炭素しかでてこない。

「極限に何の話だ？」

「後々わかります。それより、質問にこたえなさい。なぜあなたのような人が生きているのですか？」

骸の視線がより強いものとなる。
宙に浮いていたマリネはすとん、と地面にへたりこんだ。

「…知ってるの？」

「ええ、あなたが何者かを。しかし、理由まではまだわかりませんがね」

もう少し魔レンズでマリネを観察すれば理由もわかるはずだが、まずは事実を確かめようと骸はマリネに話しかけたのだった。

「話す気は、ないのですか？」

「ないわよ！」

「そうですか…仕方ない。」

ため息のあと、骸の目つきが変わった。

右目が、六から三へと変わる。

「こたえないのなら、無理にでもこたえさせるまでです」

骸のまわりに藍色のオーラが漂う。

「女とて、僕は容赦はしませんよ」

森を強い風が通り抜ける。

骸のスキルが発動した。

標的４８　雲の怒り（前書き）

一日一話のはずが、一日ニ話に（笑）

標的４８　雲の怒り

お願いだから、ここにいて
絶対に外に出てはだめ
あなたは特別なの
特別な、子供なの
だから、たやすく人に姿を見せてはだめ

なにが特別だ
オレを人から、世界から離れさせて
閉じ込めていたのは
オレが違うだからだよな
わかってんだよ、子供なりに
わかってたんだ
オレが普通じゃなかったことくらい

ところかわって森の西側。

ズガァァン　ズガァァン

銃声が鳴り響く。

その主は、大きな身体を軽々と宙に浮かせながら攻撃していた。

そしてその攻撃を避けるのは大きな身体と大きなハンマーを担いだ男。

「てめっ、その銃って飛ぶこともできんのかよ！」

「まあな。だが飛ぶと言っても一時的な跳躍だ。あとはオレの体勢の工夫だけどな」

リーダーは地面に銃口を向け、言い放つ。

「ｄｅｓｕｌｔｏｒｉｏ（デスルトーリオ）！」

銃声が鳴り響いた瞬間、リーダーの身体が再び宙に浮いた。

そして、一気にビンツの目の前まで迫り、ハンマー目掛けて発砲した。

「ｓｐｉｎｔｏｎａｒｅ（スピントナーレ）！」

「っが！！！」

見事リーダーの放った攻撃はビンツのハンマーに当たり、ビンツは突き飛ばされ地面へ落ちた。

「…ちっ」

痛みに顔を歪ませると、目の前に誰かの足があらわれた。

何だろうと顔をあげると、そこにいたのは黒髪の少年。

「なに君たち群れてるの」

「っ！！」

雲雀はトンファーを構えてビンツを見下す。
ビンツは慌てて雲雀と距離をとった。

「お、兄ちゃんここにいたのか」

「ちょっとオジサン。僕の獲物とらないでよ」

「だからオレはオジサンじゃねぇっての」

リーダーは苦笑いをして雲雀に言うが、雲雀は興味なさげにリーダーの言葉を流し、ビンツを見た。

「…なんだよっ」

「僕、あなたみたいな人嫌いなんだ」

リーダーが「は？」と疑問を浮かばせる。
だが雲雀は気にせずつづけた。

「ターザンみたいな野生生物みたいな人間、大嫌いなんだ。常識を知らないしね」

（お前が言えることじゃねぇよ）

リーダーはひそかに雲雀にツッコミをいれる。

常識のある人間ならば、普通は初対面の人に攻撃したりしない。

言っていることとやっていることが矛盾だらけだとリーダーは思った。

「失礼だなぁ雲の守護者さんよぉ。オレが野生生物だって？」

「例えるならゴリラだね。でもあなたはゴリラの頭脳にも及ばないだろうね」

ピキリ、とビンツの額の血管が浮き出る。

それに気付いていないのか、雲雀は気にせず言葉をつなぐ。

「あなたみたいな馬鹿、僕は嫌いだよ。なにも考えずにお気楽そうに生きてる…」

「黙れえええぇぇぇ！！！！！！！！！」

ビンツが思いきりハンマーを振りかざして雲雀に襲い掛かる。

それを雲雀はトンファーで受け止めた。

が。

「ワオ。まだこんな力が残ってたのかい？」

雲雀の足が、みるみる地面へと埋まっていく。

このままではやばいと、リーダーは慌てて発砲した。

「ｃｏｌｐｏ（コルポ）！」

ガゥンッ、と音を立ててハンマーが弾き飛ばされる。

その隙をついて雲雀は飛び退いた。

「なんで邪魔するの」

「そこは普通ありがとうじゃ……っぐ！！」

突然、リーダーが腹を抑えて地面に俯せになった。
雲雀は少し驚いてリーダーを見ていた。

「なに、便秘なの？」

「そんなかわいいもんじゃねぇっつの…」

はは、と渇いた笑い方をしたリーダーの口許には血がついていた。
それを服の袖で拭ってリーダーが事実を打ち明けた。

「実はよぉ…この銃の技…“ｐｉｓｔｏｌｅｒｏ（ピストレーロ）の戯れ事”って言うんだが、こいつには弱点があってな…」

カチャ、と銃を取り出してリーダーが苦笑いをした。

「“ｃｏｎｔｒｏｐａｒｔｉｔａ（コントウロパルティータ）”…日本語で“代償”っつうんだが、こいつの代償は…」

「使う人間の命、ってわけ？」

「…ご名答だ、兄ちゃん」

リーダーは汗を浮かべながら力なく笑って答えた。
相当苦しいのか、息も乱れている。

「まあ、5発ぐれぇなら身体に異常はないらしいんだけど、オレの場合、今回は多用しすぎたな」

「馬鹿じゃないの。僕は馬鹿は嫌いって言ったでしょ」

その雲雀の言葉を聞いて、リーダーは静かに「すまねぇ」と謝った。

リーダーの話をずっと離れたところで聞いていたビンツは、豪快な笑い声をあげた。

雲雀はうっとうしそうに振り向く。

「そんな危険な技を連発させてたのか、馬鹿か!!やっぱ人間は馬鹿だよな!!!」

リーダーはビンツを睨みつける。
そして悔しそうに歯を食いしばる。

「みんな、みんな馬鹿だよな!物事の区別ができねぇと思いやがってな!馬鹿だよなぁ!!」

「…ちょっと」

ビンツの罵言を雲雀が遮る。
その姿にはかすかに怒りが見えた。

「それ、僕も含まれてる？」

「あぁ？当たり前だろが、馬鹿が！」
ビンツはまた大きな笑い声をあげる。

次の瞬間、周囲を殺気が包み込んだ。
流石にビンツも異変に気付き、笑いを止めた。

「…ねぇ」

ゆらり、と雲雀が動く。
表情は見えないが、声はかなり低い。

「僕を馬鹿にしたよね、今」

リーダーは雲雀の後ろ姿しか見えなかったが、雲雀の怒りが痛いほどにわかった。
背中からも殺気が伝わるのだ。

「…咬み殺す。」

その瞬間、雲雀を紫の炎が包み込んだ。
ゆらゆらと揺れる炎はビンツを凄ませるのに十分だった。

雲雀はリングに炎をともし、取り出した匣へと注入した。

紫の炎を纏った動物が…ハリネズミがあらわれた。

「…なんだそいつは」

「この子は雲ハリネズミのロールって言うんだ。…ロール」

雲雀に名を呼ばれたロールは、「キュウ」と一声泣いて、球体から何本もの針を突き出している姿へと変わった。

「行くよ、ロール」

「キュウッ」

雲の炎が揺らめきながら燃え盛る。

ビンツは触れてしまった。

雲雀の怒りに。

触れてはならないものに。

標的４９　違和感（前書き）

ううん、読みにくいです

標的４９　違和感

いい加減にしなさい
なぜわたしの言うことを聞かないの？
わたしの言うとおりにすれば
なんだってできるの
なににでもなれるの
だから、おとなしく
言うことを聞きなさい

そりゃあいろんな人に褒められた
いい子ねって、出来た子ねって
でも正直嬉しくはなかった
だって、僕が望んだのは
こんな自分じゃなかったから

「ほんとに、僕と戦うの？」

「オレの仲間を傷つけた以上、オレはお前を倒す」

オレンジの瞳が一人の男を捕らえた。
その男は両手に銃を持ち、こちらを見ていた。

「…そんなに戦いたいんだね」

「戦いたくはない。…だが」

その視線が痛いものへと変わる。
静かな怒りを含んだものに。

「お前たちのやっていることは間違っている。」

「間違っている？なにが？」

「むやみに人を傷つけることだ！」

ツナの声があたりに響く。

ニコールは苦笑いをした。

「僕は、正しいと思うよ。だってさ、」

ガチャッ、と銃の引き金に指をそえる。

一瞬の怯みそうな殺気。

そして。

「自分が一番正しいってわかってるからね！」

ドゥンッ　ドゥンッ

発砲され、弾が素早くこちらに向かって来る。

だがそれよりも早く、トンノの炎がツナたちを包み込んだ。

トンノの炎に触れた弾は一瞬で石へと化し、弾としての力を失い地面に落ちた。

「邪魔だって何回も言ってるじゃないか、焼鳥」
「学習能力がないの？僕は焼鳥なんかじゃないよ」

トンノが両方の翼を羽ばたかせ、炎をさらに大きくさせる。
後ろにいるリボーンたちとニコールの間に炎の壁を作り上げた。
ニコールの攻撃をリボーンたちに食らわせないためだ。

「リボーン」
「なんだ、ツナ」

ツナがふいにリボーンに話しかける。
リボーンはいつものように問いかけに答えた。

「…結加たちを頼む」
「ああ、わかったぞ。おめぇも腹に負担かけんなよ」

リボーンは笑って了解した。

それにツナも口許をゆるめた。

「行くぞ、トンノ」

「了解」

ツナのXグローブから炎が放たれる。
一気にツナはニコールの目の前へと飛んだ。

「速いよー綱吉くん。どんな力持ってんのほんとに」

ニコールは余裕そうに笑ってツナに銃口を向ける。
発砲される前にツナは上へと飛び、身体を翻してニコールに蹴りを入れる。

だが、ツナの蹴りはもう一方の銃に当たって攻撃を防がれた。

「腕がビリビリするよ。力入れてなかったら銃が飛んでっちゃってたかもね」

「なら次は銃をぶっ飛ばしてやる」

再び舞い上がったツナは右足を蹴り上げて思いきりニコール目掛けて蹴りを放つ。

だが、またもやそれはニコールの銃によって止められた。

銃は手におさまったままだ。

「甘いね、綱吉くん」

「お前がな」

ツナはそう言い放つとニコールから距離をとる。

すると、背中になにかが衝突した。

声もなく、ニコールは飛ばされ地面に突っ伏す。

「…ぐ…っ」

「僕のこと忘れてたでしょ」

バサッ、と降り立った大きな鳥は得意げに笑っているように見えた。

ニコールは恨めしそうにトンノを睨んだ。

「…生意気な、焼鳥め！」

怒りをあらわにしたニコールは、地面を蹴って真っ直ぐトンノの元へと走る。

両手に銃をかまえ、狙いをトンノに定めて引き金をひいた。

ドゥンッ　ドゥンッ　ドゥンッ　ドゥンッ

ニコールの銃から弾が発砲された。だが、それはトンノに向かうことはなく、空へと放たれた。

「…綱、吉くん…！」

ニコールは目を見開いて後ろに立っている綱吉を見た。

引き金をひく瞬間、背中を蹴られた。

そして銃口が空を向いたとき、発砲された。

そしてそのまま倒れ込んでしまったのだ。

「お前の…やっていることは、間違っているんだ」

「そんなはずはない。僕はいつでも正しいんだ。僕自身、僕が信じたものが正しいんだ。綱吉くんこそ、間違っているんだよ」

ふらりと立ち上がってニコールは口を拭う。
手には血の跡がついていた。

「そんな力、使わないほうがもったいないじゃん。僕だったら絶対使いまわすよ。すべてが自分の思い通りになるようにね」

「それが間違っていると言うんだ」

「たわけたこと言うなよ綱吉くん！」

ドゥンッ　ドゥンッ　ドゥンッ

ニコールは笑いながら発砲しつづける。
まるで壊れてしまったかのようだ。

最初の印象とはまったく違う。冷静でおとなしそうだったニコールは、今や衝動によって動いているようなものだ。

「ねぇ、わからない？この世に信じられるものなんて一握りしかないってこと！家族だって友達だって簡単に嘘をついてさ、すぐに裏切るんだ！自分を守るためにね！信じていいのは己だけ、そうだろ！？」

乱雑なニコールの言葉にツナは眉をひそめる。
言い方がおかしいように聞こえたのだ。

まるで、同意を求めてすがるような言い方だったからだ。

「気付きなよ、今綱吉くんが守ろうとしてる人間たちも、必ず綱吉くんを裏切るんだ！人間なんてそういうもんだからさ！」

「違う、…リボーンたちは、そんなことはしない！」

「マフィアなんてなおさらだ！裏社会で何をしているかわからない集団なんだから、裏切るに決まってる。マフィアだけじゃない、ヒットマンだってそうだよ？」

もはや戦闘は近距離戦になった。

ふたつのオレンジの炎が乱発される弾を避ける。

ニコールはツナを傷つけてはいけないと言うことを忘れてしまっているようだ。

ビュッ

「…っ」

「ツナ！」

弾がツナの頬をかすめた。

摩擦の熱さと火傷の熱さに加え、かすめた痛さが頬に広がる。

それを見たトンノは、ニコール目掛けて炎を放った。

「ツナに何するんだ！」

「聞き分けの悪い子には痛みで覚えさせなきゃね！」

「そんなん間違ってる！」

「間違ってなんかないさ！僕はそう教えられたんだ！」

トンノはその言葉に違和感を覚えた。
“僕はそう教えられた”
“僕は”
僕　は。
「…まさか」
「ほら、頑張ってよけなよ」
にやりと笑ってニコールは二丁拳銃で乱射しつづける。
それを避けながら、トンノはさっきの言葉を思い返していた。
（まさか、だってあの言い方は…まるで、）
自分が、そう言われつづけていたかのよう。

「…ツナ」

「ああ、わかってる。あいつは…なにかがおかしい」

ツナはあやしい笑みを浮かべているニコールを見てつぶやいた。

「…その原因を、つきとめる」

「了解。」

ツナの言葉を聞き、トンノがニコールに向かって行く。

ツナも同時にニコール目掛けて飛んでいった。

「誰のいいなりにもならないよ。僕はアッジョルナーレしか信じない」

ぽつりと聞こえた小さな声。

それはかすかに震えを含んでいた。

「僕を救ってくれた、アッジョルナーレしか。」

信じない。

標的５０　錯乱（前書き）

殴り書きとは、こういうことを言うのですね…！

標的５０　錯乱

「逃げても無駄だって」

「何回も言ってるだろ？」

馬鹿にするようなふたつの笑いが合わさって鼓膜に響く。
それを鬱陶しく思いながらも、獄寺は走ることをやめない。

「おい、山本！ほんとにこっちなのかよ！」

「小次郎が向かってるから合ってると思うんだけどなー！…」

山本は先頭をきって飛ぶ山本の匣兵器、小次郎を見遣る。
小次郎は雨属性の燕で、大気中の水分を雨に換えることができる。

先程いた場所は水分があまりなかった。

山本の時雨金時は水を使って技を編み出す。
水がないとなにかと不自由なのだ。

すると突然、小次郎が止まった。
くるくるとその場を飛び回る。

「…ここか、小次郎！」

山本が話しかけると小次郎は一声鳴いて返事をした。

「よし、頼んだぜ小次郎」

小次郎はバサッッ、と翼を羽ばたかせて空へと向かった。

「なにやってるの？」

「やっと諦めた？」

ミシリ、と木の枝が軋む。
流石に男が二人も乗れば枝だって軋むだろう。

「はっ、諦めてなんかねぇよ」

「そうだぜ、オレたちが簡単に諦めるなんてありえないのな」

獄寺と山本が笑いながら言う。
双子はその表情にムッとした。
二人の余裕な顔が気に入らなかったらしい。

「…なにその余裕」

「むかつくんだけど」

「おめぇたちの余裕もむかつくんだよ！」

獄寺と双子が口論を始めようとしたとき、甲高い燕の鳴き声が響いた。

「おっ、準備できたみたいだな！」

山本がにっこりと笑って空を見上げた。
青い炎を帯びた燕が頭上を迂回している。

「…なんだろ」

「…燕？」

「よっしゃ、頼んだぜ小次郎！」

小次郎に向けて山本が大きく手を振った。

それを合図に、小次郎が炎をあたりに散らせる。

ザァァァァァ

大粒の雨が音を立てて降り出した。

双子は突然の雨に驚いて、慌てて空を見遣った。

「なんで雨が」

「降ってきたの！？」

「雨雲なんてなくて」

「晴れてるのに！」

見上げるとあるのは大きな空。
雨雲なんてひとつもない。
だが確かに雨は降っている。

「小次郎、もういいぞー！」
山本が声をかけると、小次郎は急降下して山本の肩に止まった。

「…なにその燕」

「こいつか？こいつは小次郎っていうんだ」

「…そいつが雨を降らしてたの？」

双子が問いかけると山本は「そうだぜ」と笑顔で答えた。
その笑顔を見て双子はうろたえた。

かわいらしい双子さんね
見てるこっちが笑顔になっちゃうわね

そんな笑顔嘘だろう？
わかるよそれくらい
みんな嘘をつくのが下手だね
引き攣った笑顔が
むかつく

（…なんで、この笑顔）

双子は表情を強張らせる。
身体がまったく動かない。

山本の笑顔を見てからだ。

（…なに、こいつ）

（はじめて見た）

（今までのとは違う）

（なにもかもが…これは）

嘘偽りのない

ありのままの、笑顔。

「…どうした？」

山本に声をかけられ、双子は我にかえった。

「なにぼーっとしてんだ？」

獄寺が不審な目で双子を見ている。

双子は二人同時に舌打ちをした。

（忘れてたはずなのに…なんでいまさら！）

（もう僕らには関係ないじゃないか…なのになんで今…）

全身がカタカタと震える。

顔が青ざめるのがわかる。

血の気が引く。

頭が混乱する。

記憶が次々とよみがえる。

「「…っいやだ！やめろ！」」

双子が頭を抱えてひざまずいた。

獄寺と山本は突然の変化に驚いた。

「おい…どうしたんだよ！」

「大丈夫か？しっかりしろ！」

二人が双子に声をかけるが、双子はただうずくまって震えているだけだ。

「…っ来るな！」

「…っ思い出させるな！」

「「消えろ！！！！！」」

双子が叫んだ瞬間、突然の爆発音があたりに鳴り響いた。

「うわっ！」

「なんだいきなり！」

獄寺と山本は腕で顔を庇いながら爆風にたえる。

「…！」

キィンッ

いきなり聞こえた金属のあたる音。

その原因が何なのかがわからない。
あたりには爆風による砂埃がおこっていた。

「…くそ、なんも見えねぇ！！」

獄寺がいらついて怒鳴るが、砂埃はやまない。
その間にも金属のぶつかりあう音はたえず響いていた。

ビュウウウッ

強風が砂埃を吹き飛ばした。
視界が一気に広がる。
獄寺の目に映し出されたものは…。

「…なっ！！！」

キンッ　キンッ　キィンッ　キンキンッ

目の前に広がっていたのは、仲間と敵の戦闘だった。

「山本！」

「やっべぇぜ、獄寺！」

山本が冷や汗をたらりと垂らして苦笑いを浮かべている。
手には時雨金時、そして目の前には双子の敵。

だが双子の様子がおかしい。

顔は真っ青で、表情はとても辛そうだった。

そして双子のまわりを、幾つもの、おそらく千はあるであろう槍がジャラジャラと音を立てて浮いていた。

「黙れ！黙れ！黙れ！」

「消えろ！消えろ！消えろ！」

双子は錯乱状態で山本に槍を放ち続けていた。

「なにがどうなってんだよ！」

「わかんねぇけど、いきなりこいつらが攻撃してきたんだぜ！？」

一旦山本が後ろに退き、体勢を整える。

身体には複数の切り傷ができていた。

「意味わかんねぇけど…とにかくあいつらを止めるしかねぇな」

「ああ、本気ださねぇと死ぬかもな」

二人な頷きあい、リングに炎をともす。

「「開匣！！」」

赤い炎と青い炎が小さな匣に注入された。

双子を鎮める方法は、あるのだろうか。

助けて　助けて　助けてよ

僕らを、僕ら二人を…

お願いだよ

標的５０　錯乱（後書き）

記念すべき５０話目！

（実際は５１話目ですが…）

なのにこんなひどい有様…

Ｌｅｔ＇ｓ　殴り書き。

５０話記念にイラストを書いたのですが…

ツナが…ツナが！！Σ（゜Д゜ノ）ノ

肩幅広くなりましたとさ。

でも載せてしまおう。

いつもこの乱雑小説を見てくださって、ありがとうございます！

目指せ１００話！

…いけるかなあ？（´・ω・`）

標的５１　聞こえた声（前書き）

つめつめΣ（´Д`ノ）ノ

ちょっと予定変更しちゃいました。

標的５１　聞こえた声

周囲が悍ましい空気に包まれる。

ぞわぞわと鳥肌が立つ。

その恐ろしい雰囲気を作り出しているのは、あの双子。

双子を根源にして、どす黒いオーラが放たれている。

それを獄寺と山本がア然として見ていた。

状況がわからない。

なにがおきているのかわからない。

ただその異変を見ていることしかできなかった。

「やべぇな…あいつら。変わっちまったぜ」

「…だが、オレたちはあいつらを倒さなければいけねぇんだろ？」

そうつぶやく獄寺は冷や汗を垂らす。
双子のオーラに圧倒されていた。
今ばかりは、勝つ自信を持てなかった。

「…やってみるしかねぇな！」

山本は時雨金時を構え、双子に向かって走り出した。

…時雨蒼燕流　攻式一の型……

車軸の雨！！

時雨金時を思いきり双子に向けて突く。

双子は一歩も動こうとしない。

「「……な。」」

「!?」

ドォォォオオォォン

刀が双子に当たる寸前、とてつもない爆風が山本を襲った。

「…っ山本!!!」

山本が爆風で吹き飛ばされて地面にたたき付けられた。
慌てて獄寺は山本の元へ駆け寄る。

「…ってー……。なんだ、今の…」

頭をさすりながら山本が顔をしかめて双子を見る。
双子は先程と変わらない場所でうずくまっていた。

「…な」

「……ろ」

ぶつぶつとなにかをつぶやいている。
だがあまりにも声が小さく、はっきりと聞こえない。

（止まらない…止まらない！）

（抑えられない…抑えられない！）

焦燥の色が伺える声。

そんな双子の声は、獄寺と山本には届いていない。

（誰か…誰か…あんたたちでもいい…！）

（お願いだ…お願いだから！）

お願い　だから

…止めて　抑えて

お願いだから

……助けて。

「あ！？」

「…今の」

「…っまさか！！」

獄寺と山本に届かなかった声。

だが、その声は違う場所の違う人物たちに届いていた。

「…アロッチ、スコッチ！」

「極限にどうしたのだ！？」

マリネが突然、攻撃を止めて叫んだ。
今まで戦闘中だった了平と骸のことなど気にもせず、マリネは辺りを忙しく見回していた。

「…っきゃあ！」

「僕を無視するとは、いい度胸ですね」

マリネの足元がぐにゃりと歪む。
骸のスキルが再び発動した。

「アロッチ…スコッチ！！」

骸の攻撃を受けながらも、マリネは双子の名前を叫びつづける。
その様子を今まで大人しく隠れていたランボが見ていた。

「こいつ、なんかおかしいもんねー」

「うむ、さっきとはまったく違うぞ」

マリネは一生懸命骸のスキルから逃れようともがく。
そのあまりの必死さに、骸は違和感を抱いた。

「アロッチとスコッチとは…人の名前ですね。あなたの仲間ですか？」

「そうよ！早く行かなきゃ…二人が、二人が！！」

骸が話しかけると、涙目のマリネがそう答えた。

意味はわからないが、そのマリネの必死さは嘘ではないとわかった。

「その二人がどうしたのですか？」

「早くしないと…飲み込まれちゃう、消えちゃう、なくなっちゃう！」

「なにがですか？」

「二人の、心がよ！！！」

ついにマリネが涙を流した。

次々と大粒の涙が目から流れ落ちる。

それには骸も驚いた。
こんな人間ははじめて見たのだ。

「…詳しく、教えてください」

骸の表情が、より真剣なものとなった。

「アロッチ、スコッチ！」

ビンツが双子の気配を感じた方向へと走り出した。
だが、それを大きなトゲをはやした球体に妨げられた。

「っくそ！どけよ！」

「なに逃げようとしてるの？」

「逃げてねぇよ！だが行かなきゃなんねぇんだ！」

ビンツが苛々した様子で雲雀に怒鳴り散らす。
雲雀は機嫌悪そうに眉をひそめた。

「なんでそんなに焦ってるの」

「オレの仲間がやべぇんだよ！助けにいかねぇと…いかれちまう！」

「…どういうことだ？」

木にもたれながら、辛そうにしながらもリーダーがビンツに聞いた。
苛々しながらビンツはその質問に答える。

「…心が、なくなっちまうんだよ」

「どうして？」

「言えねぇ！だが…ほんとにやべぇんだ」

舌打ちをして、ビンツが拳を震わせている。
そんなビンツを見てリーダーが笑って言った。

「じゃあ、そいつらんとこ行くか？」

「…あ？」

思いもよらないことを言われ、ビンツはマヌケな声を上げた。
かなりリーダーの言葉が意外だったらしい。

「なに行ってるの、オッサン」

「こいつの仲間が危ねぇんだぜ？オレだったら仲間んとこに今すぐ飛んでいきてぇって思うからよぉ」

アルヴィーコラにいたとき、そんなことは思わなかった。
だがツナと出会い、ボンゴレに入った今は、仲間の大切さを思い知ったのだ。

だから、ビンツの気持ちが痛いほどにわかる。

「僕は行かせないよ。ここでこいつを咬み殺す」

「待てよ兄ちゃん。こいつの仲間んとこに行けば、沢山の仲間が集まってるかも知れねぇぜ？」

リーダーが雲雀をなだめて納得させようとする。
雲雀は黙ってリーダーの話を聞いていた。

「集まってきた仲間を咬み殺せばいいじゃねぇか」

「……」

雲雀のしかめっ面が少しだけやわらいだ。
ビンツには相変わらずの不機嫌な顔に見えたが。

「…ならいいよ」

「ありがとさん！」

リーダーは雲雀に礼を言うと、腹をおさえながらゆっくりと立ち上がった。

ビンツは驚いた様子でリーダーを見ていた。

そんなビンツの肩を軽く叩き、リーダーは笑いかけた。

「ほら、行くぞ。仲間がいかれちまう前にな」

ビンツは、はっと我にかえって慌ててリーダーたちのあとを追いかけた。

胸の奥に、なにか不思議なものが芽生えた。

「…っ邪魔しないでよ！」

「なに逃げようとしてるんだよ！僕らを倒そうとしてるくせに！」

「うるさい！それどころじゃないんだ！」

目の前にはだかる大きな鳥をニコールは睨む。

こんなことをしてる場合じゃないのに。早く行かないと、危ないのに。

「それどころじゃないんだ！君たちの相手は後回しだ！」

「…なにかあったのか？」

ツナに問われ、ニコールは言葉をつまらせる。
言ってどうにかなるものだろうか。
敵であるツナたちに、理由を言って逃がしてくれるのだろうか。
ニコールは口を開くことにためらった。

「…言わなければ、わからない。理由があるなら教えてくれ」

ツナのオレンジ色の目がニコールをまっすぐ見つめる。
その視線がニコールの目にぶつかった瞬間、自然とニコールは理由を話しはじめた。

「僕の仲間が…危ないんだ。なくなってしまうかも知れないんだ…心が、…心が！」

炎を隔ててニコールを見ていたリボーンはその言葉を頭の中で繰り返した。

（心…？どういう意味だ？）

心がなくなってしまう。
どうなくなるのか。

心とは、心臓か、それとも…。

「止めないと…ばらばらになってしまう！せっかく…見つけられたのに…っ」

拳をぎゅっと握ってニコールがうつむいた。
表情は隠されているが、声は震えていた。

「お前は、仲間がそんなに大切なのか？」

「っ当たり前だ！二人は…みんなは、僕の大切な仲間だ…」

そのニコールの表情を見て、言葉を聞いて、ツナはゆっくりとうなずいた。

「…よし。行こう」

「…まじで言ってんのか、ツナ」

「ああ、本気だ」

リボーンがツナに問うが、ツナは迷いもなくしっかりと首をたてに

振った。

「今は仲間の方が優先だ。みんなが反対しても、オレは行かせる」

「…なぜ、綱吉くん……」

目を見開いて問いかけるニコールに、ツナは微笑んで言った。

「敵だろうが味方だろうが、仲間を思う気持ちは同じだろ？」

仲間を思いやる気持ちは、敵味方関係なく存在するもの。

自分のことよりも仲間を思うツナには、ニコールの気持ちが伝わったのだ。

仲間を心配し、かけつけようとするその思いが。

「だが、あやしい行動をするなら…オレは止める」

「…約束する。綱吉くんたちを襲ったりはしない」

ニコールはかたくうなずいた。
そして、小さな声でつぶやいた。

「…ありがとう」

かすかな声はしっかりとツナたちに届いた。
そして、ニコールの仲間がいる方へと駆け出した。

間に合うだろうか。
心がなくなってしまうまでに。

標的５２　敵と味方

助けて　助けて　助けて

なんでこんなことになっちゃったのかな

前はこんなこと、忘れてた

…あれをしてからだ

こんな消し去ったはずの記憶を思い出すのは

あれが…原因なのかな

なら、早く知らせなきゃ…

みんなに知らせなきゃ…

…でも身体が言うことを聞かない

勝手に身体が動く

…ああ

飲み込まれていく。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ぶつぶつと同じ言葉を繰り返すだけの双子。
その二人を囲むのは、数え切れないほどの槍。
互いにぶつかりあってたえない金属音を鳴らす。

そんな異様な光景を、獄寺と山本は黙って見ていた。

「ほんとに何なんだ…あいつら！」

「すっげー殺気なのな。…ピリピリして痛いぜ」

双子から発せられるどす黒いオーラと殺気。
獄寺と山本はそれを至近距離で痛いほどに感じていた。
肌が針でつつかれているような、そんな感覚。

「…とにかく、あいつらを捕まえてみるか」

「わかったぜ」

獄寺がＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．を、山本が時雨金時を構えて双子を睨む。

そして先に攻撃を仕掛けたのは山本だった。

…時雨蒼燕流　攻式八の型……

篠突く雨！

刀が空気を切り裂いて双子に向かう。

が、山本の攻撃は双子の槍の壁によって再びかわされてしまった。

「…やっぱりな！！」

思った通りだと笑った獄寺が、山本の後ろから攻撃を放った。

「フレイムアロー！！」

赤い炎が勢いよく槍の壁にぶつかった。

ガシャァァアアアンッ

槍の壁は見事に破壊され、破片があたりに飛び散った。

その隙をついて、山本が再び時雨蒼燕流を仕掛けた。

…時雨蒼燕流　特式十の型……

燕特攻（スコントロ・ディ・ローンディネ）！

前衛に小次郎を構え、山本が双子に一気に刀で突っ込んだ。

槍の壁が崩れた今、双子を守るものはなにもない。

「「…ぐ！！」」

攻撃を受けた双子は小さなうめき声をあげた。

だが、その表情は無だった。

「攻撃を受けたのに…表情変わんねぇのな…」

「やっぱおかしいぜあいつら！」

確かに今、山本の攻撃を喰らった。
確かに今、うめき声も聞こえた。
だが表情は変わらない。

「まじで意味わかんないのな」

「呑気に言ってる場合じゃ……っ！！」

双子の代わりに獄寺の表情が変わった。
破壊したはずの槍が再びあらわれたのだ。
ジャラジャラと音をたてて、不気味にゆれている。

シュッ

「うわっ」

慌てて二人は後ろに退く。
突然槍が二人目掛けて放たれたのだ。
それを合図に次々と槍が獄寺と山本を襲う。

「っちくしょう！」

逃げても逃げても追いかけてくる槍。
これではきりがないと獄寺は走るのを止めた。

「瓜！」

「にょおん」

肩に小さな猫が飛び乗った。
獄寺は瓜に大きな声で言い放った。

「瓜、形態変化（カンビオ・フォルマ）！」

その瞬間、瓜が輝きを放ち姿を変えていく。
そして姿を変えた瓜を、獄寺が構えた。

嵐の炎を纏ったそれは、初代嵐の守護者が使っていたとされる、Gの弓矢（ジーのアーチェリー）だ。

「いくぜ瓜、トルネード・フレイム・アロー！！」

赤い炎の矢が向かってくる槍にぶつかった。
それを根城に、嵐の炎が飛び交う槍に伝わり次々と爆発していく。
槍は嵐の炎の“分解”の力により、破壊されてしまった。

「やるな、獄寺！」

「当たりめぇだ！」

山本に感心され、獄寺は得意げな笑顔を見せた。

だが、そんな二人をあの爆風が襲った。

身体が浮いた。

身体を襲う浮遊感。

目には青い大空が見えた。

だが一瞬のうちに、二人は地面へとたたき付けられた。

「っぐあ！！」

激痛が全身を駆け巡る。

頭がずきずきと痛む。

「…な、なんだ…今の…っ」

咳込みながら獄寺が起き上がろうと身体に力を入れる。

だが力を入れると激痛が身体を襲った。

山本も同じらしく、うつぶせになったまま動かない。
二人はただ地面に転がっているだけだった。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ふらりと双子が立ち上がり、獄寺と山本の方へ向かってくる。
ゆっくりと距離を縮めていく。
逃げたくても身体が動かない。

無表情の双子が槍を構える。
二人は死を覚悟して目を閉じた。

「マキシマムキャノン！！」

真っ暗な視界に、聞き覚えのある声が響いた。
それと同時になにかが砕ける音も聞こえた。

獄寺はまさかと目を開けた。

目の前にいたのは、いつも口論をするあの男。

「極限に大丈夫か、タコヘッド！」

「…し、芝生頭…！！」

輝かしいほどの笑顔が獄寺を見下ろす。

存在自体が太陽のように眩しい、ボンゴレ晴の守護者、笹川了平だった。

「なんで、お前がここに…！」

「僕もいますよ」

「ランボさんもいるんだもんね！」

他方から聞こえた声に、獄寺はまたもや驚愕することとなった。

目を見遣ると、かつては敵、今では同じ守護者である六道骸と、いつもうざいと思っている守護者のランボが立っていた。

そしてその隣には…。

「アロッチ、スコッチ！」

「今行ってはいけません。あなたも殺されかねませんよ」

双子の姿を捕らえたマリネは、双子に駆け寄ろうとするが、骸に腕を掴まれ止められた。

「…なんで、そいつがいるんだよ…っ！」

「彼女はその目の前にいる仲間を心配していたので連れて来ました」

にっこりと骸が笑って答えた。

骸にしては珍しい行動をするな、と獄寺は骸を見た。

他人のことなどお構い無しな骸が、敵であるマリネを一緒に連れて来るものだろうか。

「タコヘッドと山本はここにいろ！」

了平が山本と獄寺を担いで木の幹にもたれさせた。

山本が痛みにたえながら「サンキュ」と礼を言った。

「アロッチ、スコッチー！！！！」

「いてっ、いていていてぇ！もう少しゆっくりしてくれ！！」

またまた他方から双子を呼ぶ声。
木々の間から、大きな男二人と、学ランを着た少年が現れた。

「あっ、ビンツじゃない！」

「うおっ、マリネ！？」

マリネとビンツは互いを指差し叫んだ。
驚いたビンツは、つい肩を担いでいたリーダーを放してしまった。

「っいてぇ！なにすんだてめっ！」

「わ、悪ぃ悪ぃ！」

ビンツが慌ててリーダーに謝る。
いつのまに仲良くなったのだろうか。
二人が交わすのはまるで友達との会話だ。

雲雀は冷ややかな目で二人を見ていた。

すると、マリネがビンツに近づいて話しかけた。

「ビンツも…気付いたの？」

ビンツは急に真剣な表情になってうなずく。

「ああ、確かに聞こえたぜ…あいつらの声がよぉ」

二人はふと双子に視線をやる。
どす黒いオーラを放ち、無表情のアロッチとスコッチ。
そんな双子を見てビンツが舌打ちをした。

「なんでこんなことになっちまったんだ…オレだって忘れてたのに…」

「…まさか、ビンツも？」

ビンツの言葉にマリネが目を見開く。
苦々しくビンツは答えた。

「忘れてたのに…記憶が蘇ってきやがった…。おそらく、あいつらもな」

「だから、あんな姿に…」

マリネがかたかたと震え出す。
それをなだめるようにビンツがマリネの頭をそっとなでた。

「…とすると、来るぜ。二人もな」

ビンツのその言葉と同時に、ゴウッと強風が吹き荒れた。
その強風をつくりだすのは、炎を纏った大きな鳥と、一人の少年。

「…十代目!!」

獄寺が目を見開いて名前を呼んだ。
大空にいるのは、自分の尊敬するボンゴレ次期後継者。
オレンジの炎を纏った沢田綱吉だった。

そしてツナの隣にいるトンノの背中には、リボーン、結加、ロンジとｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のシクロとシスイに、ありえない人物が一人。

「…あー!ニコール!!」

「なに悠々と乗ってんだお前!」

トンノの背中におとなしく乗っているニコールにマリネとビンツが怒鳴る。
ニコールは二人の声を聞いた途端、鬱陶しそうに耳を塞いだ。

「聞こえない、聞こえない、聞こえなーい」

「「ぅおらあああああ！！！ニコール！！！！！」」

マリネとビンツの罵声が重なる。
ニコールは仕方ない、と耳を塞ぐ手を放した。

「綱吉くんがこの焼鳥に乗れって言うから」

「…いつになったら僕を焼鳥呼ばわりするのをやめてくれるの？」

トンノが呆れんばかりに大きなため息をついた。
そして羽をばたつかせて地面へとおりた。

「…アロッチ、スコッチ」

ニコールが双子に呼び掛ける。
だが、双子からの返答はない。

「どうするよ、ニコール」

「…もちろん助けなきゃ」

ビンツに問われ、ニコールは真剣な表情で答える。
マリネもしっかりとうなずいて双子に向き合った。

「…どうすればいいのか、わかるのか？」

ツナがニコールたちに話しかけたが、ニコールは首を横に振った。

「方法はわからない。でも、助けなきゃいけない」

「…仲間だから？」

その言葉に、今度はニコールは首を縦に振った。
ビンツもマリネも同様に。

そんな三人を見ていたツナは、優しい笑みで「分かった」と言った。
そして、拳に炎を纏って告げた。

「…オレも手伝う」

強く、たくましく炎がゆらめく。

それを見ていた一人の家庭教師がにやりと笑った。

敵味方など関係ない。

仲間を思う気持ちは同じなのだ。

標的５２　敵と味方（後書き）

あああああ…一気に書く人物が増えた…！！

大変だけど、がんばります（´・ω・、）

ウライラの存在が消えつつあります。

ボスなのに（笑）

ファイト！、（・∀・）ノ

標的５３　信頼

「…？」

かすかに聞こえた声。
誰かが叫んでいるのだろうか。
…誰か、とは言ってもこの森にはウライラが連れて来たボンゴレ関係者とアッジョルナーレの七人しかいない。
だからあの声はどちら側かのものだろう。

ミノイは一人、湖のほとりにいた。
彼も綱吉とリングを探し、森を移動していた。
誰かと一緒に戦うはずだった。

だが、移動中に激しい吐き気と頭痛に襲われた。
頭の中に映し出される、かつての自分。
忘れていたはずの、辛い過去。

あなたなんていらないわ
なぜ生まれてきたの
なぜこんなかわいくない性格なの

なぜあなたがわたしの子供なの
あなたなんていらないわ

私を生んだのはあなたでしょう
なのになぜそんなことを言うのですか
私の、なにがいけないのですか
私は、必要ではないのですか
…いらないのですか

「…くっ」

ミノイは頭をおさえてうずくまる。
水面に映し出されるミノイの顔は、青白く汗がにじんでいた。

“…て”

また、聞こえた小さな声。
ミノイは耳をすました。
だが聞こえるのは爆発音。
誰かが戦っているらしい。

“…けて”

だんだんとはっきり聞こえてくる声。
それは外から得るものではなく、脳内に響いていた。

“…て、……て、……けて

……助けて”

「…この声！！」

はっきりと聞こえた助けを求める声。
この声は…。

「…アロッチとスコッチ…、まさか…っ！！」

ミノイは慌てて走り出した。
突然蘇った記憶。双子の声。

信じたくはない事実。

必死に双子の気配を探り当てて向かうが、またもや激しい頭痛に襲われる。

「…っ、こんなときに！」

ミノイは地面に膝をついて拳を握る。

早く行かなければいけないのに、頭痛が絶え間無くミノイを襲う。

痛みに耐えながら、ミノイは掌を広げ呪文を唱えた。

「…ｃｏｍｐｕｌｓａｒｅ（コンプルサーレ）、…ａｓｐｉｄｅ　ｃｏｌｏｓｓａｌｅ（アスピデ・コロッサーレ）！！！」

ミノイの声が響いた途端、掌から光が発せられる。

そして地響きと小さな揺れのあと、地面が割れ亀裂をつくった。

ドォオンッ

亀裂から、巨大な蛇が現れた。

その蛇は長身であるミノイの何倍もの身体をしていた。

ミノイは猛獣を武器とする。

だがレパートリーが限られており、最も召喚する猛獣はこの蛇だ。

「さぁ、急ぎますよ！」

ミノイの声に、蛇は細長い舌を動かして答えた。
そして頭にミノイを乗せ、ずるずると大きな身体をうねらせて双子のいる場所を目指す。

「…待っていなさい。アロッチ、スコッチ」

つぶやくようなミノイの声は、誰に聞こえるでもなく消えていった。

「手伝うって、正気なの綱吉くん！？」

「正気だ」

「敵の手伝いなんか普通しねぇぞ！？」

ニコールたちが目を見開いて驚いている。
双子を助けるのを、ツナが手伝うと言ったからだ。

そんなツナをボンゴレ側は黙って見つめていた。

「今は敵味方なんか関係ない。あの双子を止めるのが最優先だ」

「…でも、綱吉くん。僕たちはアッジョルナーレで君の敵。君を狙う人間なんだよ?もしアロッチとスコッチが元に戻ったら君を…」

「お前は、さっき言った。」

ニコールの言葉をツナがさえぎる。

「絶対にオレたちを襲わないって、約束しただろ?」

優しい笑みがニコールたちに向けられる。
その瞳はまるでニコールたちを信じているかのよう。
…いや、信じているのだ。
先程した約束を、ニコールたちを。

「…さすが、大空だ」

ニコールがぽつりと呟く。
そしてまっすぐツナの瞳を見て、微笑んだ。

「絶対約束は守る。ほんとに…手伝ってくれる?」

「ああ、…必ず、あの双子を救ってみせる」

なんと心強いのだろうか。
ツナが言うことは、何故か信じれる。
ニコールはいつのまにか、敵であるツナをとても信頼していた。
マリネとビンツもまた然り。

「…でもどうやって元に戻すの？こんなの…初めてじゃない」

心配そうにマリネがニコールに言う。
元に戻す方法は誰も知らない。

「…弱らせて…みたらどうだ？」

獄寺が苦し紛れに提案した。
だがそれにニコールたちはすぐに反対する。

「そんなことできるわけないじゃないか！」

「そうよ、アロッチとスコッチは私たちの仲間なのよ！？」

「仲間を仲間が傷つけろっつうのか！？」

パァァアンッ

三人が騒がしく反論していると、痺れを切らしたリボーンが銃を発砲した。

一瞬で三人は黙り込んだ。

「ごちゃごちゃうるせぇぞ。」

低い地を這うような声でリボーンが言う。

姿は赤ん坊だが、何故か迫力のあるリボーンに、三人は反抗できなかった。

「獄寺の言った方法は正しいっちゃあ正しいぞ。」

「…なぜ?」

「考えてみろニコール。双子は今暴走してんだ。暴走した奴に近寄ったりしたら、お前らが怪我するぞ。双子を救うどころじゃなくなるだろう」

説得力のあるリボーンの言葉に、三人は悔しそうに拳を握りしめた。

だが、次の瞬間にはリボーンは笑って三人に声をかけた。

「心配すんな。双子が怪我しても了平が助けてくれるぞ」

「そうだ！オレの匣兵器のコテで極限に治してやるぞ！」

了平は笑顔で匣を振りながら答えた。

ツナといい了平といい、なぜ敵である自分たちにここまでするのだろうか。

なんだかんだであの骸と雲雀も、ニコールたちを会わせてくれた。

ニコールたちはそれが不思議でたまらなかった。

（…不思議な人が多いな、ボンゴレって。……でも）

三人に自然と笑みがこぼれる。

同じことを、ニコールたちは思っていた。

（一緒にいて、安心できる。）

ツナを中心としたボンゴレファミリー。

個性的な人物ばかりでおかしなマフィアだとばかり思っていた。

だが、その愉快なところがツナたちボンゴレ十代目ファミリーのいいところなのだ。

だから今まであったいろんな辛い出来事も乗り越えられたのだろう。

「…いいね、ボンゴレって」

「なんかウライラ様の情報と違う…ね」

「ほんとに家族みてぇだな」

僕らも、こんな家族みたいなマフィアだったなら…

ニコールたちはそう思わずにはいられなかった。

早く、双子を元に戻してあげたい。

そして以前のように、笑ったり、喧嘩したり、楽しかった日々に戻りたい。

時間は戻せない。

時計の針は右にしかまわらない。

だが、双子は元に戻れるかもしれない。

もし、元に戻れたなら。

「…また、みんなで笑おうよ」

ニコールはマリネとビンツの手を握る。

一瞬二人は驚いていたが、強くニコールの手を握り返した。

「私たちは仲間よ」

「なんだかんだ言ってあいつらはオレの弟みたいなもんだしな」

「僕もそう思う。みんな、…僕の家族だ」

握りしめた手はとてもあたたかかった。
触れているだけで落ち着くぬくもり。

この気持ちは、何と言うのだろうか？

標的５３　信頼（後書き）

いつ、双子は元に戻るんでしょうか（笑）

今回から取り掛かろうと思ってたんですけど、ほのぼのして終わりました！

ほのぼの大好き（´ω`）
戦闘苦手（´ω`）あちゃー

ウライラかわいそう。
もう少し空気でいなさい！（笑）

標的５４　真偽（前書き）

短いです。

標的５４　真偽

人間は、みんなひどいものだと思ってた。
みんなみんな、自分だけが大切で、他人のことなんて気にしない。
だから僕は、僕らはあんな目にあってしまった。

それからは、他の人間を恨みつづけた。
どうせ、お前たちも同じなんだろって。
でも、それは間違いだったみたいだ。

僕らははじめて、人間の優しさに触れたんだ。
人間を信頼できたんだ。

この、小さくて、でも強くて、眩しいほどの美しい炎を燈した少年を。

僕らも、染めてしまった。
僕らも、飲み込まれてしまった。
僕らも、包容されてしまった。

このあたたかな大空に。

「手加減はする。だが攻撃をしてきた場合はやむを得ない。それでいいか？」

ツナが冷静な表情でニコールたちに確かめる。

「うん、あの二人を元に戻すためだ。仕方ないよね」

「大丈夫よ、アロッチとスコッチは強いんだから！」

マリネがニコールの服を掴んで言った。
そのとき、ニコールはわかってしまった。

（マリネ…自分に言い聞かせてるんだ）

兄弟のように常に一緒にいたニコールとマリネ。
離れることは少なかったため、お互いの性格などは全てと言っていいほど知っている。

服を掴んでひっぱり、伏し目がち。

それは、マリネが何かを我慢しているときや、自分に言い聞かせているときの癖だった。

ニコールは優しくマリネの頭をなでる。マリネは一瞬顔を赤くしながらも、妹のようなかわいい笑顔を見せた。

「…アロッチ、スコッチ、待ってて」

ニコールたちは双子を見据える。
心が飲み込まれつつある双子にその姿は生物としか認識されない。
だが、三人には双子は双子でしかない。
大切な仲間であることには間違いないのだ。

ヒュッ

オレンジの炎が鮮やかに飛ぶ。
先陣をきったのはツナだった。

相手の出方はわからない。
ならば自分が確かめるしかない、とツナらしい考えを出したのだ。

まっすぐ双子に向かって飛んでいく。
警戒していると、双子のまわりのどす黒いオーラがうごめきはじめた。

ビュンッッ

「!?」

なにかがツナに向かって放たれた。
ツナはとっさに身を翻して避ける。

「…あれは、二人の武器の槍…？」

マリネが地面に突き刺さった輝くものを見てつぶやいた。

ジャラジャラと音を立てて、双子を大量の槍が囲む。
獄寺と山本は再び見ることとなったその光景に拍動を乱れさせる。

あの双子は危ないと、本能が警報を鳴らす。
近づいてはならないと。

「十…代目、気をつけ…て、ください…！」

「その…槍は、いくらでも…出てきちまうか…らな！」

二人の呼びかけと槍の襲来は一瞬の間もあけなかった。
一斉に襲い掛かってきた槍を炎を使って次々と避ける。
ビッ　ビッ　ビッ

大量の絶え間無く襲ってくる槍を完全に避けるのには無理がある。
少しずつ、ツナの身体にかすり傷ができていた。

地味な痛みは地味に響く。

次々とうまれる傷の痛みに顔を歪めながらも、ツナは槍を避けつづけた。

「…綱吉くん」

ツナを見ていたニコールは汗を垂らした。
敵であるツナが敵である双子を助けようとして怪我をしている。
だが、仲間であるニコールは傷ひとつ作らず見ているだけ。

「…っ」

ぎゅっと拳を握ったニコールは、懐から武器の銃を取り出し、双子に向かっていった。

「「消えろ、消えろ、消えろ」」

「アロッチ、スコッチ、僕だよ！」

ニコールが双子に自分の存在を示すが、双子の表情は変わらない。
何度呼びかけても反応はない。

「やめろ、やめろ、やめろ」

「アロッチ…スコッチ……」

こんな双子ははじめて見た。
いつもは人をからかったりしてよく笑っている。
でも今は無表情、無感情。

ニコールは怖くなった。
自分の知らない二人は、こんなにも無なのかと思った。
いつも見ていた双子は偽りの姿だったのだろうか？

（…違う）

ニコールが独り言のように小さな声で言う。
不安な思いは消えた。
双子を信じるニコールの思いによって。

（あの二人は…あの二人こそ、偽りだ。
本物は、僕らがいつも見ていた二人だ）

笑っている双子こそが本物。
その本物を取り戻すために。

（…僕らはいくんだ！）

ニコールは銃を持ち直し、深呼吸をする。

マリネは手裏剣を、ビンツはハンマーを構える。

二人が元に戻りますように。
またみんなで笑い合えますように。

そう祈りを込めて、三人は走り出した。

標的５４　真偽（後書き）

閲覧数が７万を突破しました！
ユニークも７０００突破しました！

ありがとうございます！

標的55　合流

「…っ、おとなしくしていなさい…！」

己の胸倉を掴み、ウライラは荒い呼吸を繰り返していた。

彼は一人、アッジョルナーレのアジト内の自分の部屋にいた。

「…なかなか、しぶとい…ね！」

語尾が力強く発せられた。

ウライラが身体に力を込め、拳で自分の胸を殴ったからだ。

その途端、ウライラの身体から力が抜け、大きな身体がソファーにもたれかかった。

荒い呼吸をなだめながら、せせら笑いをする。

「最近はすぐに暴れだすようになったな…。綱吉くんと接触をはかったときからだ…」

身体はだんだんと平然を取り戻し、ウライラは足を組んで天井を仰いだ。

「これでは時間の問題がありますね…。早くしなければ」

机の上に置かれた資料を眺め、黙読する。
読み終わったあと、ウライラはにやりと笑った。

「しっかりと時間稼ぎをしてください。僕が手に入れるまで」

ぐしゃり、とウライラは紙を握り潰した。

場所は変わり森の中。

こちらでは敵同士であるボンゴレとアッジョルナーレのニコール、マリネ、ビンツが力を合わせ、二人の人間を助けようとしていた。

人数的には圧倒的に双子は不利だ。
だが、それは双子が普通であるならば、の話。

双子は今、普通ではない。

なにかに心を、神経や精神すべてを飲み込まれかけているのだ。
飲み込まれかけているからいいものの、完全に飲み込まれてしまったらどうなるかわからない。

一刻も早く双子を止めなければならない。

さて、今現在戦闘に参加できる者をまとめてみよう。

ツナ、了平、ランボ、雲雀、骸、リボーン、トンノ、ニコール、マリネ、ビンツ

そして参加できないのは、
負傷中の獄寺、山本、リーダー、結加の四人と、負傷者の手当てを行うロンジ。

このメンバーでどうなるのだろうか。

さあ、話を戻そう。

ニコール、マリネ、ビンツは意を決して双子に向かっていった。

見ていたって仕方ない。
仲間である自分たちが助けるべきなのだ。

傷だらけのツナを見て三人はそう思った。

「アロッチ、スコッチ！」

「痛いけど我慢してよね！」

「お前らのためなんだぞ！」

ニコールは双子を掠めるくらいの銃弾を、マリネも同様に掠るほどの手裏剣を放った。

ビンツは地面をハンマーで思いきり叩き、地割れを作り出す。

しかし。

バァンッ！！！

「…！？」

三人の攻撃はいともたやすくかわされた。

銃弾と手裏剣はどす黒いオーラに飲み込まれ、地割れは起きる前に場所を移動されてしまった。

地割れをかわすことならまだしも、銃弾と手裏剣を、しかも同時に止められるとなると、さすがにパニックに陥る。

「…あそこまで…力が使えるように……」

「あのオーラ、なんなの？」

「オレの攻撃って、かわしやすい上にださいのか？」

一人だけ問題がズレている人間がいるが、それは置いておくとしよう。

本人以外の全員は、あえてその疑問には答えなかった。

「二人にあんな力、なかったはずだ。」

「どういうことだ？」

ツナがニコールに問うと、ニコールは口をつぐんだが、答えなければならないという状況なので戸惑いつつも話しはじめた。

「二人は、僕らの中でも一番技の上達が遅かったり、力が弱かったんだ。一番歳が下だからまだ未熟なところもあって…。だからこんな力、二人には出せないはずなんだけど…」

「でもこんな力、ミノイくらいあるわよ!?あの一番歳が上で力も上級並の！」

マリネの言うとおりだとビンツが頷く。

双子の力の成長は奇妙だった。

例えるならば、成績が最下位に近い人間が突然上位にあがるような。

一言で言えば、ありえない、のである。

「もしかしたら、」

リボーンが難しい顔をしてつぶやいた。

全員がその言葉の先を待つ。

だが、言葉を続けたのはリボーンではなく…。

「…無理矢理、か？」

「そうだぞ、ツナ。」

同じことを考えていたツナに、リボーンは上出来だと笑った。

無理矢理、とはどういうことか。

意味のわからないニコールたちは二人に問いただした。

「どういうこと!?無理矢理って!」

「その言葉通りだ。

今はあの双子が出せる力の基準を上回ってるんだ。なにかによって、無理矢理にな。」

リボーンが双子を一瞥する。

ただならぬ殺気とオーラ。

いかにも危険な雰囲気を漂わせる。

未熟な彼らがここまで力を出せるはずがないのだ。

ニコールたちが黙り込んだ。

思考が狂いかけていた。

何がどうなっているのかもわからなくなってきた。

だがその混乱を不気味な音が突き破った。

…る、ずるずる、ずる、ずるずるずるずる

「…なんの音？」

マリネがニコールに寄り添って不安な表情を見せる。

どんどん近づいてくる音に、ツナは身構えた。

だが、そんな警戒は無駄なものとなる。

「…あ！」

ビンツが指をさして大きな声をあげた。
指差す方向には、ビンツたちのよく知る人物がいた。

「やっと…見つけました。」

「え、…ミノイ！？」

その場にいた全員が、大きな蛇の上に乗っている男を見て驚いた。
驚く理由は様々だろうが。

だがアロッチとスコッチの様子はまったく変わらなかった。

「ミノイ…なんでここに！？」

「アロッチとスコッチの声が聞こえたので、何かあったのだろうと思って探していたのですよ」

ニコールがミノイに駆け寄る。
巨大な蛇から飛び降りミノイは答えた。

「…まさか、ミノイも……」

「ええ、記憶のことでしょう？私も思い出しました」

顔をしかめたミノイの言葉を聞き、ニコールたち三人はまた黙り込んだ。

記憶、とはなんだろうか。
思い出した、とはどういうことだろうか。
ツナたちは疑問に思った。

だが、その疑問を解決させないかのように、いくつもの槍が飛んできた。

シュンッ　シュンッ　シュンッ

「…っ」

ツナがミノイたちの前に立ちはだかり、グローブの炎で槍を食い止める。
ジュゥウッという音をたてて槍は溶け、地面に溶けた鉄がぽたぽたと落ちた。

その行動を不可解に思ったミノイがニコールに問うた。

「なぜ綱吉くんは、私たちを庇ったのですか？」

「…綱吉くんが、アロッチとスコッチを元に戻してくれるのを手伝ってくれるんだ」

ミノイは目を見開いて驚く。
状況を把握していないミノイにニコールがすべて話した。

「まさか、それは、本当なのですか？」

「ああ。」

静かに、だがはっきりと答えたツナを見て、ミノイはしばらく言葉を失った。

ミノイもニコールたちと同様に信じられなかった。
ニコールたちが嘘を言っているはずはない。
それはわかる。
でもなぜ敵を救おうとするのか、それがいまいちわからなかった。

「…本当に、不思議な人ですね…綱吉くん」

「？」

ツナはその言葉の意味がわからず首をかしげる。
そんなツナに、ミノイはただ笑いかけた。

（まったく、考えていることがわからないですね…。）

敵を助けるなどどうかしている。
ましてや自分を狙う敵を。
正気なのだろうかと疑ってしまう。

だが、ニコールたちの話を聞き、ツナを見て、ミノイはなんとなくだが理解した。

ツナの優しさを。

なんて、気持ちがいいのだろう。
なんて、心強いのだろう。
なんて、優しいのだろう。

なんて、美しいのだろう。

小さな大空に、ミノイは笑いかけた。

標的５６　オーラの正体（前書き）

む、骸が沢山喋ってます！

標的５６　オーラの正体

無、とは何とも恐ろしいものだ。

無表情。
無感情。
無神経。
無気力。

例をあげればいくらでもでてくる。

無とは、何もないこと、存在しないことをあらわす。

それがどんなに恐ろしいことか。
わかる人は少ないだろう。

身の回りには有の方が多い、と人間は思い込んでいるからだ。
有るものばかりに目を向けて、無いものには気づかないのだ。
有るものと比べて、無いものに気付く。
無を認識するにはその方法しか知らない。

なんと愚かなものだろう。

無に慣れていない人間は無を恐れる。
有が当たり前となっているからだ。

無に意味は、あるのだろうか？
人間がその答えを見つけることができるのは、いつになるだろう。

人間が恐れる無。
それにツナたちは遭遇していた。

人間としての表情や感情を無くした双子。
その姿はなんとも不気味。
目を背けたくなるほどの。

だが、それは叶わない。

救わなければならない。
いや、救いたいのだ。

たとえ敵であろうとも、助けたい。

ツナはそう思っていた。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

操り人形の如く同じ言葉を繰り返す。
ホラー映画を思わせるような姿だった。

双子から発せられるどす黒いオーラがツナたちを襲う。
それを個々の技でかわしながら、全員戦っていた。
トンノは動けない獄寺たちをかばっている。

「なんでしょうか、このオーラは」

「極限に黒いぞ！一体なんなのだ!?」

骸は六道輪廻で、了平はフットワークで攻撃をかわしていた。
どす黒いオーラからは殺気が漂い、ぴりぴりと肌が痛む。

「この正体を突き止めてみましょうか。……そこの大きな鳥。」

「…もしかしなくても、僕のことだよね」

骸が“そこの大きな鳥”と呼んだのはトンノのこと。
トンノはため息をついた。
“焼鳥”といい、“そこの大きな鳥”といい、ろくな呼ばれ方をされない。

「僕をあのオーラから庇いなさい」

「…は？」

何を言っているのだろうかこいつ。とトンノは骸を見た。
攻撃をかわすのが疲れたのか、飽きたのか。
意外にも失礼なことを思うトンノである。

「…どういうこと？」

「そのままの意味です。」

「なぜ？」

「今からこれで正体を確かめるからです」

骸は小さな匣を取り出し、リングに炎を燈して注入した。
藍色の炎を纏って現れた霧フクロウのムクロウに骸は命令する。

「ムクロウ、形態変化（カンビオ・フォルマ）」

命令を受けたムクロウは光を放ち、魔レンズへと姿を変える。
それを持ち、骸は双子の放つオーラを見た。

その間にもオーラは殺気を纏って次々と襲ってくるが、トンノが炎でかわしていた。

「…あのマリネのいう女といい、このオーラといい……なんていうマフィアなんでしょうか」

レンズをのぞきながら骸が呟いた。
その顔は、呆れたような感じの表情だった。

（本当に…何があったのでしょうか。この人間…生き物たちに）

骸はムクロウを元に戻し、毒蛇で攻撃を食い止めているミノイに話しかけた。

「そこの長髪のあなた。ちょっといいですか？」

「…なんでしょうか？」

ミノイは毒蛇をさらに増やし、骸を見た。

「あなたたちは…何者なんですか？」

「…どういう意味ですか？」

「あなたたち、正体は…」

骸がそう言いかけた瞬間、骸を狙うようにいくつもの槍が飛んできた。

それを三叉槍でかわした骸は双子を見た。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

「おや、無表情で無感情なはずなのに、そんなに言われるのが嫌ですか？」

双子が集中的に骸へ攻撃を仕掛ける。

骸も負けじとスキルを発動させて対抗する。

「なんとも、執念深いと言うのでしょうか。正体を知られたくないという気持ちが魂自体にこびりついているのでしょうか？

…ああ、“魂”などあなたたちには合わない言葉でしょうね」

「…どういう、ことです？」

ミノイが眉をひそめて問う。

手が、腕が、唇が、少し震えていた。

「あなたたちの場合、“魂”ではなく“怨念”とでも言いましょうか」

「知って…いるのですね」

「ええ。あなたたちが何なのかも」

骸への攻撃がさらに激しくなる。
すでに他方への攻撃は薄れ、攻撃を受けているのは骸だけのようだ。

「…こんな強い力が出るとは、かなり怨念があるようです…ね」

骸が冷や汗を垂らした。
双子の攻撃はあまりにも強く、スキルを発動しても辛い。

「大きな鳥、なにをしているのです」

「僕だって精一杯…！」

トンノは言葉をつまらせながら答えた。
炎でオーラを弾くが、あまりにもオーラが強力すぎて対処できていなかった。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ゴォォオオォォォォオッ

どす黒いオーラに加え、爆風までもが骸を襲う。
骸は踏ん張って足を地面に固定する。
が。

「っ！」

一瞬の隙が生まれ、そこを狙ってオーラが放たれた。
間に合わない、と骸は歯を食いしばった。

ボゥウウッ

本当にそれは一瞬のこと。
目の前を、オレンジの炎が包み込む。
オーラから骸を庇うように。

「…沢田、綱吉」

「大丈夫か？」

ツナはまっすぐと骸を見つめて言った。
ああ、しまった。と骸は思った。
一瞬でも諦めてしまった自分が悔しい。
目の前の少年は、全く諦めなかったのに。

「…沢田綱吉」

「何だ？」

「あのオーラは、危険なものです。あれに触れたら…」

シュッ！　シュッ！　シュッ！

骸の言葉を、またもや双子が遮った。
無数の槍が骸を狙う。
三叉槍がキンキンと甲高い音を鳴らす。

「あの、オーラは…」

「…っ骸！」

目の前にはオレンジの炎…ではなく、少年が腕を広げていた。

骸は目を見開いた。

まさか、まさか。

ジュウウゥウッ!!

「…つっ!!!!」

少年が、黒に触れた。
黒が、少年に触れた。

ふらりと傾く小さな身体。

「っ沢田綱吉!!!」

骸は少年の名を呼んだ。
彼にしては珍しい大きな声で。

「…綱吉くん!?」

ミノイたちが慌ててツナに駆け寄る。
ツナは苦しそうに荒い呼吸を繰り返していた。
身体が小刻みに震えている。

「もろにあのオーラを喰らうとは…」

「どういうことだ、骸」

リボーンがツナの顔を見ながら聞いた。
その表情は深刻そのものだった。

「あのオーラは…双子の“怨念”、僕たちでいう“魂”です。双子のすべての恨みや怒りが含まれている。そんなものに触れたら…」

骸が言葉にするのを躊躇ったが、囁くように言い放った。

「…精神が、壊れてしまう」

その一言で、全員が言葉を失った。

誰もが、頭が真っ白になってしまった。

「…なんだこれは」

静寂の中にぽつりと呟かれた声。

リボーンはツナを見て絶句した。

首に、左の二の腕に、不吉な痣が浮かび上がっていた。

黒い、鎖の痣が。

閉じられたまぶた。

その奥に真っ暗闇な世界。

大空が閉じ込められた。

ミシリ　ミシリ　ミシリ　ミシリ

なにかが音をたて、崩れはじめた。

標的５６　オーラの正体（後書き）

骸ー、活躍しすぎ（´・ω・、）
ツナがあんま喋ってないよ！！

とうとう、謎が判明しはじめましたね！
わたしがわくわくしちゃってます！

読んでくださってありがとうございました！

標的57　移行

「ツナ、ツナ！」

「綱吉くん！」

何度も何度もツナに呼びかける。
しかし応答はない。

ツナは骸を庇い、双子のどす黒いオーラをまともに喰らってしまったのだ。

荒い息が薄れてきた。
顔色も悪い。
冷や汗がたらりと垂れる。

「呪いも進行してるな…なんでいきなり進行が早まったんだ？」

リボーンがツナの鎖のような痣を見て言う。
こんなにいきなり進行が早まるなんておかしいのだ。

「もしかして…」

「なんだ、骸」

「…おそらく、僕の推測ですが…あの双子のオーラの作用だと思います」

「…どういうことだ？」

リボーンが問いかけると、骸が深刻な表情で説明しはじめた。

「“呪い”には怨念が含まれているでしょう。それが双子のオーラ、つまり“怨念”と共鳴してしまったのかも知れません。それで進行が早まってしまったのでしょうね…。」

「…なるほどな。かなり危ないっていうことか」

リボーンは苦しむツナに目を見遣る。

（この苦しみ方は、呪いじゃねぇな…。だとすると、双子のオーラが原因か……）

帽子を深く被り、リボーンは表情を隠した。

今自分はとてもひどい顔をしていると思ったのだ。

不安と焦燥が滲み出た表情をしていると。

「…ツナ。」

かすれるほどの小さな声で名前を呼んだ。

（…ツナ。）

ツナ。

ツナ。

…ツナ。

「…う、うぅ……」

ぴくりと指先が動く。

小さなうめき声を上げて、ツナは目を覚ました。

だが、視界は真っ暗。

ここがどこなのかもわからない。

あたりを見回しても、なにも解決しなかった。

「えっと、オレ確か…骸を庇って……」

なんとか状況を把握しようと気を失う前までの記憶を探る。
いつのまにやら、ハイパーモードは解けていた。

「…双子のオーラが当たって……うう…それが原因…かな？」

ツナはなけなしの知能をフルに使い、今の自分がどんな状況かを理解した。

双子のオーラに当たった。
それはわかる。
そのせいで気を失った。
それもわかる。
だが、ここがどこなのかはわからなかった。

「……い…」

「え？」

静寂な黒の世界に小さな声。
確かに聞こえた。
聞き間違いではないだろう。

ツナは耳をすまし、声を待つ。
気のせいではないと、なぜか思ったのだ。

「…よ……ね……」

とぎれとぎれの声は、ツナの先方から聞こえる。

チカッ　チカッ

声のする方向を見ると、なにかが小さく輝いていた。
ツナを誘うように。
チカチカと瞬いている。

ツナはふらりと、自然とそちらへ向かっていた。

ためらいはない。
ただ、行かなければならないという気持ちになったのだ。

行かなければ、後悔する。

ツナの超直感がそう告げていた。

ゆっくりと瞬く光に近づいていく。

そして、ゆっくりとツナの姿が消えていった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

「うわあああぁ！！」

ガサガサガサガサガサガサッ

ツナは垣根に墜落した。

地面じゃなくてよかった、と思う。
打ち所が悪ければ死んでいたかも知れない。

だが背中から落ちたため、背中は痛むし枝がひっかかるせいで引っかき傷ができてしまった。

「いってて…。なんなんだよもう！」

垣根から退き、服についた葉っぱや汚れを手ではたいた。

瞬く光を追って歩いていたら、突然落ちたのだ。

最初に見えたのは、綺麗な大空だった。

「…誰かの庭？」

きょろきょろと周りを見渡すと、広い庭に大きな家、沢山の人が楽しそうに会話をしている。

ツナの姿は見えないのだろうか、誰もツナに気付かない。

「まあ、あなたたちが双子さん？」

ひときわ甲高い声がツナの耳に届く。

声の主は綺麗に着飾った貴婦人だった。

そして、その人の目の前にいる小さな子供は…。

「んなあぁぁぁ！？…まさか…嘘だろ！？」

先程の叫び声よりも大きな声。
姿が見えなくてよかっただろう。
もしも姿が見えていたならば、どうなっていたことか。

それはさておき。

ツナが驚愕した理由。
それは貴婦人と会話をしている子供たちだった。

「うそ…あれって…」

信じれないが、事実。

間違いなく、事実。

「…アロッチと…スコッチ……？」

ツナよりも幼い二人の子供。
姿は小さいが、確かにあの双子だ。
同じ身長、同じ顔。

なぜ幼い双子がいるのだろうか。

あの二人は先程までツナたちを襲っていたはずだ。
幼い姿ではなく、青年の姿で。

何が起きているのかさっぱりわからないが、ツナは双子の様子を見ていた。

すると、貴婦人がにっこりと笑って隣にいた夫であろう男に話しかけた。

「ほんとにかわいいわね、アロッチくんとスコッチくん」

「ああ、双子ってこんなにも似てるものなんだな。さて、どちらがどちらなのかな？」

男がふむ、と顎に手を当てて双子を見比べる。
「そういえばそうね」と貴婦人が双子に聞いた。

「あなたはどっち？
お兄ちゃん？弟さん？
同じ顔だからわからないわ。

…いいわよね！
ふたりで一人のようなものだものね！」

くすくす笑って貴婦人が言った。
双子はただ黙って貴婦人を見ているだけだった。

（…て、）

「え？」

聞こえた声は、幼いものだが確かに双子のものだった。
だがそれも他人には聞こえていないらしい。

（…まただね、アロッチ）

（…そうだね、スコッチ）

二人だけの会話、いわゆるテレパシーがツナにも伝わってきた。

（…そうやって、ごまかして、
いつだって僕を、僕を、僕らを
ひとまとめにして扱った。

みんな、みんな、みーんな。

誰だって、僕らを
一人として見ないんだ。）

ふと、双子の表情が変わる。
寂しそうな、憎んでいるような、複雑な表情だった。

「……。」

ツナはただ双子を見ているだけだった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

標的５８　幼い双子（前書き）

短いですが、結構重要な話です！

標的58　幼い双子

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

「十…代目…！」

「騒ぐな獄寺。お前はじっとしていろ」

「ですが…リボーンさん…！」

獄寺が身体中の痛みに顔をしかめながらも、ツナの元へ寄ろうとする。
傷が悪化してしまうだろうとロンジが慌てて獄寺を制止している。

負傷中の山本もリーダーも、そして結加もツナのことを心配してツナに近づこうとしている。

「ツナ…は、大丈夫なのか？」

「動いてんじゃねぇぞ山本。ツナは……まだわからねぇ」

大丈夫だ、と言いたいのだが言えなかった。
まったく大丈夫ではないのだ。

息はどんどん浅くなり、肌の色も悪い。
痙攣するような震えは止まらずに苦しさのため汗が垂れる。
そしてゆっくりと、ゆっくりと肌が冷たくなってきた。

これはかなり危険だ。
なんとかしなければならない。
しかし、どうすることもできない。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

双子の攻撃は衰えることはない。
次々とリボーンたちに攻撃を仕掛ける。

それを了平やニコールたちが食い止めていた。
ツナのことを心配しつつも。

「…負けんじゃねぇぞ、ツナ」

そっと小さなリボーンの手がツナに触れた。

その瞳は二人の小さな子供を捕らえていた。

ツナはぽつんと佇んでいた。

「今の…どういうこと?」

突然頭に響いた声に混乱する。
今の声はあの双子のものだ。
それは間違いない。

(…そうやって、ごまかして、
いつだって僕を、僕を、僕らを
ひとまとめにして扱った。
みんな、みんな、みーんな。
誰だって、僕らを
一人として見ないんだ。)

重なった声。
それは寂しげに、苦しげに。

（…さっきのおばさんが言ってたことと関係があるんだ）

おばさん、とは貴婦人のことだ。
ツナは先程貴婦人が言っていたことを思い出す。

（あなたはどっち？
お兄ちゃん？弟さん？
同じ顔だからわからないわ。
…いいわよね！
ふたりで一人のようなものだものね！）

「……」

無神経な貴婦人の言葉。
ツナはだんだん、双子の言葉の意味を理解する。

ガサッ

その音でツナは考えることをやめる。

見ると、双子がこちらへ歩いてくるのだ。
二人はうつむいている。

（わ、わ、わ！どうしようこっちにくるよ！）

わたわたとツナは慌てた。
だがすぐに「あ。」と間抜けな声を発した。

「…そういえば、オレの姿は誰にも見えてないんだった……」

ツナは苦笑いをしてため息をつく。

「焦ったー…。見つかったらどうしようかと思「「お兄ちゃん、誰？」」」

ぴたりとツナの動きが固まった。
まるで石になったかのように。

まさかそんなことはあるまい、とツナは視線を下にやる。
だが、その双子の瞳にはツナがしっかりとうつっていた。

「「お兄ちゃん、誰？」」

「んなあああぁぁぁぁあああぁ！！？」

ツナは驚愕した。
これ以上はないというほどの大声を出した。
双子は驚きもせず、首を傾げてツナを見ている。

「え、え、な、ど…どうして！？君たちオレのこと見えてるの！？」

「もちろんだよ」

「でも他の人には」

「「見えてないみたいだけどね」」

双子は気づいていたのだろうか。
ツナが他人に見えないことを。

「え…えっとー…」

「「お兄ちゃん」」

双子に呼ばれ、両手を小さな手に握られる。
そしてぐいぐいとひっぱられた。

「わっ！ど、どうしたの！？」

「「お兄ちゃん、遊ぼうよ」」

子供にしては強い力で引っ張られる。
ツナは逆らうこともせずに二人に連れられていく。
子供の相手は慣れているのだ。
こういうときは一緒に遊んであげたほうがいいということを知っている。

二人に連れられたのは人気のない建物の裏だった。
結構走ったため、少し息があがっている。

「ここはね」

「僕らの」

「二人だけの」

「秘密の場所なんだ」

ね、と二人は顔を見合わせる。

「なんで、オレをここに？」

二人だけの秘密の場所に、なぜ自分を連れて来るのだろうかとツナ

は不思議に思った。
すると二人はきょとんとしながら言った。

「なんかお兄ちゃん」

「他の人たちと」

「違う気が」

「したから」

「違う…気？」

双子はこくりと頷く。
違う気、とはどういう意味か。

（凡人だから…とか？あ、馬鹿っぽいからとか？）

なんてツナは考えていた。
もちろん双子はそんなつもりで言ったわけじゃない。

「お兄ちゃん、なんか」

「とても、あったかいんだ」

「ぽかぽかして、なんか」

「とても、落ち着くんだ」

満面の笑みがふたつ、ツナに向けられる。
その笑みはツナが以前見た双子の笑顔とは違った。

純粋で無垢で
汚れを知らない笑顔。

そんな二人の笑顔ははじめてだった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

そんな子供にしたのは、
大人たちだ。

標的５９　それぞれの存在

鳥が数羽、大空を飛ぶ。
小さな小さなその鳥は、
遠いどこかへ消えていった。

「ねぇ、お兄ちゃん」

「聞いてもいい？」

壁にもたれながら、両端を双子に挟まれて聞かれた。
覗き込む双子の瞳がツナをまっすぐ見ている。

（…あ。）

ツナがあることに気づいた。
とても小さなことなのだけれど。

「「…お兄ちゃん？」」

「…あ！ごめんね！何だった？」

双子に呼ばれ、慌ててツナは謝る。
「いいよ」と双子は笑ってツナに聞いた。

「お兄ちゃんは僕らの」
「名前は知ってるの？」

「うん。アロッチとスコッチでしょ？」
そう言うと双子はにっこりと笑う。
だが、先程の笑顔とは違った。
作ったような、偽りの笑顔だ。

「お兄ちゃんは僕らが」
「どっちがどっちか」

「「わかるのかな？」」

突然そう聞かれ、ツナは驚いた。
双子の態度も、笑顔もかわってしまったからだ。

「いきなりなんでそんなこと？」

「「ただ、なんとなくわかるかなって思ったんだよ」」

（…どうせ、今までの人たちとは違っても、このお兄ちゃんも同じなんだよ。…僕らを、）

きょとんとしているツナを見ながら、双子は思う。

（僕らを一人として見ないんだ。）

双子の哀しい声は、双子にしかわからない。
ツナは双子がそのようなことを考えているなんて知らない。

「「わかる？お兄ちゃん」」

「え…っとー」

双子はツナの答えを待つ。
ツナの顔をしっかりと見つめながら。

「えっと、左にいるのがアロッチで…右にいるのがスコッチ…だよね？」

しばらくの沈黙。

ただ風が吹くだけ。
ただ木々が揺れるだけ。
ただ雲が流れるだけ。

ただ、大空が広がるだけ。

「…あれ、ちがった？」

ツナは黙り込んでしまった双子を見て慌てた。
双子はうつむいて、なにもしゃべらないのだ。

「「…ぅ」」

「え？」

小さなくぐもった声。
次の瞬間、鼻をすする音が聞こえた。

双子が、泣いていた。

「え、え、えー！？」

泣き出した双子を見て、ツナがおろおろとする。

「え、間違ってた！？ごめん、ごめんね！」

「「…ちがっ、くて……」」

しゃくりあげながら双子は言う。
小さな手の甲で涙をぬぐう。

「…はじめ、て…だったんだ…」

「僕、らを…見分けられた…人は…」

とぎれとぎれに双子が言った。
だが次々と涙が流れる。

「…はじめて？なんで？」

不思議そうな顔をしてツナが続けて言う。

「二人は似てるけど…それぞれ違うじゃないか。“二人でひとつ”って言っても、それぞれが一人の人間でしょ？」

さも当たり前のように言うツナを見て、双子は呆気に取られた。

――今まで、誰も僕らを、一人として見なかった。

…見ようとしなかった。

“二人でひとつ”って言ってまとめて片付けたんだ。

僕らのそれぞれの存在を、認めてはくれなかったんだ。

…でも、この人は…このお兄ちゃんは、

……認めて、くれたんだね。

「お兄ちゃん、は」

「なんで、わかったの？」

「僕ら、が」

「どっちがどっちか、って」

たどたどしいしゃべり方で双子は問う。
その質問にもツナは当たり前のように答えた。

「二人の目、違うだろ？」

「「…え？」」

「だから、二人の目って色が違うんだよ」

意外な答えに双子が唖然とする。
口をぽかりと開いたまま、ツナを見ていた。

「アロッチが青、スコッチが少し薄い青…でしょ？」

二人のまぶたを指先で優しく撫でながらツナは笑った。
その動作はまるで……。

（お母さん、みたい、だ。）

双子は目を閉じて思い出す。
優しい優しい、母の記憶。

「アロッチの目は青で、スコッチの目は薄い青。お母さん、あなたたちの目の色が大好きなのよ」

「「でもお母さん、みんなそんなこと気づかないよ」」

「でも、お母さんは知ってるわ。あなたたちは似てるけど、アロッチとスコッチって言う一人ずつの男の子でしょ？

大丈夫、お母さんはわかってるわ。

それぞれのあなたたちが大好きなのよ……」

優しく笑う母。

優しく二人の頭を撫でる母。
…その人は、亡くなってしまった。

元来、身体が弱かったのだ。
父親はいなかった。
二人が生まれてまもなく病気で亡くなったらしい。

唯一二人を一人一人の人間として見てくれた母親。
その母親が亡くなってから、二人は二人でひとつと片付けられてきた。
誰も、双子をアロッチとスコッチとして見てくれなかったのだ。

だが、ツナは違った。
双子をアロッチとスコッチとして、見てくれた。
気づいてくれた。

はじめてだった。

「あと、もうひとつ」

「「…え？」」

まだあるのだろうかと双子はツナをまじまじと見つめた。

「アロッチは泣くときに声を出さないけど、スコッチは唸ってるんだよ」

にっこりとツナは笑う。

そんなこと、自分たちでも気付かなかったのに。

さっきから驚かされてばかりだ。

「お兄ちゃん」

「名前は？」

泣いた後特有の声で二人は尋ねる。

「…ツナ！沢田綱吉！」

ツナが大きな声で言うと、双子はにっこりと笑った。

「「……綱吉、くん」」

そう名前を呼ばれた瞬間、ツナは光に包まれた。
あまりの眩しさに目を開けることができない。

ふわり、と身体が優しく抱きしめられた。
両端にいた、アロッチとスコッチに。

「…ありがとう」

「綱吉くん…」

その声はぬくもりと共に消えていった。

標的５９　それぞれの存在（後書き）

明らかにされましたね！

お疲れ様です（、・ω・′）

標的６０　おかえり

黒が、闇が
溶けていく。
掻き消されていく。

大空を染め、
大空に飲み込まれ、
大空に包容されて。

「「…っ……う……」」
「…なんだ？」

全員が双子の異変に気付く。
ぴたりと、双子の動きがとまった。

同時に攻撃もとまった。

双子は唸り声をあげながらその場にうずくまる。
頭を抑え、苦しそうな顔をしている。

「ど、どうしたんだ？あいつら…」

「アロッチ、スコッチ！どうしたのよ！？」

ビンツとマリネが戸惑いを見せる。
それもそのはずだ。
先程の威勢はどこへやら。
双子から発せられるどす黒いオーラの勢いが衰えはじめていたのだ。

「どういうことだ？」

リボーンもこの事態には疑問を抱く。
何故突然双子の動きがとまったのか。
何故突然双子のオーラが勢いをなくしたのか。

何故だ？

「…うっ……」

「!?、ツナ!?」

全員の視線が双子からツナへとうつされる。
ツナの意識が戻ったのだ。

「ツナ、ツナ!?」

「綱吉くん!?」

身体をゆすって呼びかけると、ツナは咳き込んでゆっくりと目を覚ました。

「…あ、れ?…みんな…どうしたの?」

まるで寝ぼけているかのように問うツナ。
全員は呆気にとられた。

ツナはあくびをして大きく伸びをした。
仕舞いには「眠い~」と言うのだから開いた口はふさがらない。

「ツナ、おめぇ…」

「…あ！そうだ！」

ころころと変わるツナの態度。
もはや驚かずにはいられない。

ツナはＡＢ型なのだろうかと疑わずにはいられない。
これではツナの一人漫才ではないか。

そんなことを考えている仲間たちをよそに、ツナはうずくまっているアロッチとスコッチの元へと駆け寄る。

だが身体はふらつき、足元はおぼつかない。
何度も倒れそうになりながらも、ツナは双子の元へたどり着いた。

「アロッチ、スコッチ！！」

ツナは二人の肩を掴んで名前を呼ぶ。
だんだんと記憶が覚醒しはじめる。

（この二人は…苦しんでたんだ。）

ずっと、ずっとずっと。
長い間、存在を認めてもらえないという悩みを抱えながら。

誰にも気付いてもらえず、認めてもらえずに。

「…ずっと、苦しんでたんだ」

ぽつりとツナがつぶやく。
双子の肩を掴む手に力がはいる。

「ずっと、ずっと…辛かったんだ」

ツナの声がかすかに震えている。
リボーンたちは静かにツナを見ていた。

「長い間、二人だけで…辛かったんだよね？」

ふわりとツナの両手が双子を包み込む。
小さな身体が大きな身体をふたつ、優しく、優しく包み込む。
リボーンたちは唖然としていた。

「もう、大丈夫だから」

ツナが二人に優しく言った。

にっこりと、あの時と同じ笑顔を見せながら。

双子が、ゆっくりと顔をあげる。
その瞳は、

青と、薄い青。

「「…綱吉くん……」」

双子がツナの名前を呼ぶ。
青の瞳が揺れる。

そして。

笑みがこぼれた。

笑みが双子に戻った。

子供のような、優しい笑顔。

「「…ありがとう」」

二人の目から涙がこぼれ落ちる。
涙の流れ方までもが二人一緒だった。
それがおかしくて、ツナはぷっと吹き出してしまった。
笑い出すツナを見て、双子もつられて吹き出した。

「…どういう、こと？」
「アロッチとスコッチが…元に戻ってらあ…」
「うそ…なんで…」
「なぜでしょうか…？」

上からニコール、ビンツ、マリネ、ミノイ。
四人は立ち尽くしたままただじっと双子とツナを見ていた。

双子が元に戻った。
ツナも目が覚めた。
どちらも喜ばしいことなのだが。
頭が状況を把握しきれていなかった。

「「…あ。」」

双子が四人を見て声を発した。

四人はびくりと肩を動かした。

「ニコール、ビンツ…」

「マリネ、ミノイ……」

ツナが双子を支えながら立ち上がる。

そしてゆっくりとリボーンたちの元へと歩み寄る。

「…よかったね、みんな」

満面の笑みでツナが四人と双子に言う。

双子たちは思った。

大空とは、なんて…

…なんて、優しいのだろう。

優しいだけではない。
強いのだ。

「「…ありがとう、綱吉くん」」

再びツナに礼を言うと、双子は四人と向き合った。

「…あ、あのさ」

「…え、えっと」

「「……ただいま」」

双子は照れ臭そうに笑った。
いつもの、アロッチとスコッチだった。

ニコールも、ビンツもマリネもミノイも、いつもの笑顔で言った。

“おかえり。”

ぐらりと、黒がかたむいた。

標的６０　おかえり（後書き）

おかえり～～～～ゞ（＊´∀`＊）ノ

わたしも心底安心しました。
あんな姿の双子を書くのがつらくて…（；￣；）

はー、片付いた！

まだあるんですけどね！

あ、そう言えば、
今回の話で標的６０を迎えました！
６０話ですよ！
正確に言えば６１話目ですけど…。
そこは譲らずに（笑）

サイトに記念イラストでも飾っておきます（＾ｏ＾）／

読んでいただきありがとうございました！

標的６１　辛い過去と事実

もうすぐ　もうすぐだ
もうすぐで望みが叶う
しかし　邪魔なものがいくつかある
それを消さなければならない
…そうだ　その役を
譲ってあげようじゃないか
散っていく姿を共に見よう
さあ　手をとりなさい

「みんな…怪我大丈夫なの？」

「こいつら双子が随分と暴れちまったからな…大丈夫じゃねぇだろ」

リボーンが周りを見遣る。
全員が怪我をしていた。
かなりひどいもののようだ。
獄寺、山本、結加、リーダーは重傷。
了平や骸、雲雀も切り傷、かすり傷はもちろん、打撲やら捻挫などの怪我もしていた。
ニコールたちもまた然り。
双子は力を使いすぎて体調がよくない。
みんなボロボロだった。
「人の心配より、自分の心配したらどうだ?」
「え、だってオレなんかかすり傷とかばっかだし…」
「じゃあその伸びてる痣はなんだ」
リボーンに指摘され、ツナが自分の身体を見下ろす。
「んなっ!!!?痣が伸びてるー!?」

ツナは大声で叫んだ。
呪いが伸びていたのだ。

左のひじにまで痣が伸びている。
左手首にたどり着くまであと少しだった。

「どどどどうしよう！」

「さっさとウライラを見つけるしかねぇだろ」

ウライラ、という名前を聞いてニコールたちが反応する。
ウライラはニコールたち、アッジョルナーレのボスなのだ。
そしてウライラはツナとボンゴレリングを狙っている。
ニコールたちもその内の一人なのだ。

「「…僕ら、敵だったね……」」

双子が苦笑いをする。
だが、その目は伏せられて苦しげな声を出した。

「「…綱吉くんと戦いたくない！」」

「アロッチ、スコッチ……」

「「だって綱吉くんは僕らを救ってくれたんだ！敵なのに！…そんな綱吉くんを…裏切りたくなんかない……」」

ふたつの拳が地面へとたたき付けられる。
その拳はかすかに震えていた。

「…オレもいやだなあ」

「…あたしも、いや」

「…私もいやですよ」

ビンツも、マリネもミノイも小さな声で言う。

「…僕だって、いやだよ……」

ニコールは悔しそうに歯を食いしばる。
アッジョルナーレの六人はうつむいて黙り込んだ。

敵である自分たちを、救ってくれた。
受け入れてくれた。
敵である自分たちに、優しく笑いかけてくれた。

そんなツナを傷つけたくはない。
苦しませたくない。

ツナの仲間を消したくはない。
ツナが哀しむから。

ニコールたちはすっかり敵意をなくしていた。
戦いたくはなかった。

「…ウライラ様に言えば、どうなるかな……」

「そりゃあ、殺されるでしょ？」

笑いを含んだ声。
その声に全員が振り向いた。

黒髪の男がいた。
あやしい笑みを浮かべて。

その姿にニコールたちは驚愕する。

「…ウライラ…様……」

「ニコールくん、どういうことです？」

ウライラがニコールに問う。
ニコールはかたかたと震えているだけだった。

「綱吉くんを傷つけたくない？苦しませたくない？
敵意がなくなった？
戦いたくない？

……ふざけてるのかな、君達。」

一気にその場の空気が変わる。
ひんやりと冷たくなる。
鳥肌がたつほどに。

「毒気抜かれちゃって…なにしてるんですか。
せっかく怨霊としてさ迷っていた君達を救ってあげたのに、損したかな？」

「どういうことだ」

リボーンが睨むようにしてウライラに聞く。

するとウライラはリボーンにしっかりと視線をあわせて答えた。

「ニコールくんたちって、実は死んだ人間なんだよ」

「…うそだ!?」

ツナが目を見開いて叫ぶ。

(だって…ここにいるじゃないか!生きてるじゃないか!)

ニコールたちは現に今、ここに存在している。

魂を持っている。

死んだ人間が生まれ変わらずに再び魂を宿すなどありえない。

「かわいそうな最期を迎えたニコールくんたちを、僕が救ってあげたんですよ。僕の力で。

…まあ、ニコールくんたちの魂は、彼ら自身が持っていた“怨念”なんだけどね」

「…骸の言ってたとおりだな」

先程骸も、ニコールたちの魂は“怨念”だと言っていた。

彼らの力の根源も“怨念”だと。

「彼らはそれぞれ同時刻に不慮の事故で亡くなってしまった人間で、

あまりにも強い怨念を持ってたから怨霊となってしまってさ迷っていたんです。」

「…僕らは、持っていた怨念を根源にして、ウライラ様に再び魂を宿らせてもらったんだ。…条件つきでね」

「条件？」

ニコールの説明を聞き、ツナが疑問を問うた。

「…生き返らせてもらうかわり、ウライラ様の言うことを聞かなければならない。ウライラ様の計画を叶えるために動かなければならないって……」

「計画って、ツナとボンゴレリングを手に入れるやつか？」

「正解です、アルコバレーノのリボーンくん。よく説明できましたね、ニコールくん。」

そう言うとウライラはツナたちの元へと歩きだした。
唯一動けるツナが立ちはだかる。
みんなを守るように。

「ニコールくんたちってかわいそうだよね。ほんとにかわいそうな過去を持ってる」

だってさ、とウライラはおもしろそうに続けた。

「ニコールくんは母親の言いなりで自由なんて許されなかった子供。
ビンツくんは重い病気で普通の人間とは違う姿だったから隔離されてた子供。
マリネちゃんは親に捨てられた子供。
ミノイくんは望まれずに生まれてきて虐待を受けてた子供。
そして双子のアロッチくんとスコッチくんはそれぞれの存在をみとめてもらえなかった子供。
ね？かわいそうだよね？」

「…まさか、そんな……」

ツナはニコールたちの顔を見る。
ニコールたちは否定していなかった。
ただ悔しそうに、表情を歪ませているだけだった。
事実なのだ。
ウライラが言ったことすべてが。

「そんな彼らを哀れんで生き返らせてあげたのに、ひどいですよね。
恩人である僕を裏切ろうとしてる。…そんな、」

ぴたりとウライラの足が止まった。

「そんな人間、もういらないよ。」

低く、響く声はニコールたちを固まらせた。
石のように動けなくさせた。

「さようなら。」

そしてウライラは黒く長い杖をふりかざした。

ガキィィィンッ

なにかがぶつかる音。
その光景に全員が驚いていた。

「させない。」

ぐっ、と杖を掴む手に力がはいる。
またたくのはオレンジの炎。
見つめるのはオレンジの瞳。

「…綱吉くん」

ニコールがツナの名前を呼ぶ。
それにツナが小さく微笑んで答えた。

「綱吉くん、何故彼らをかばうのです?もういらない人間だよ?」

「それはお前の勝手な考えだ。生きるか死ぬかを決めるのはあいつらだ。…お前なんかに選ばせない。」

オレンジの炎がウライラの杖をはじく。

ウライラは一歩下がってツナを見つめた。

「…彼らを処分するのは、君を手に入れてからにしようか。」

「そんなことは、させやしない。」

一段とオレンジの炎が揺らめく。

ツナの瞳はまっすぐウライラを捕らえている。

「必ず手に入れてやります」

ウライラはにやりと笑った。

黒とオレンジ。

闇と大空。

勝つのは闇か、大空か。

それはまだ誰にもわからない。

標的６１　辛い過去と事実（後書き）

ぎゃあ！ウライラ来た！
空気化してたウライラが復活！

でもウライラ好き。
自分のつくったキャラですから。

そういえば、怪我を負っている人たちの中に、名前がでてこなかった人が数名いますよね。

お気づきですか？

それはただの入れ忘れじゃなくて、ちゃんと意味がありますから！

ちなみにロンジは枠外です。
あの人は治療係↑

読んでくださってありがとうございました！

標的６２　希望消失

「必ず手に入れやります」

不気味な笑みを浮かべるウライラ。
その存在自体が不気味だった。

全員が息をのんでツナとウライラを見つめる。

シュッ

先に動いたのは大空、ツナだった。
炎を使って高速で移動し、ウライラの背後へとまわる。

ガキィィンッ

「その炎の力はすばらしい。是非僕のために使わせていただきたい」

「断る。」

拳をウライラの杖によって止められる。
すぐにツナは空中へと移動した。

「では、次は僕から」

そう言うとウライラは杖をコツンと鳴らして地面に落とす。
すると、地面から大量の水が吹き出した。
その水はツナだけを狙って襲い掛かる。

「…あれは幻覚か？骸」

「……いいえアルコバレーノ。…あれは……」

「本物、だよ。リボーンくん、骸くん」

ウライラがリボーンと骸の方を向いて言う。

「骸くんたちが使う幻覚とか、有幻覚とかじゃないんです。…試してみますか？」

口許がくにゃりと歪む。
あの骸でさえもその笑みに怯んだ。

「よいしょっ」

ウライラは指先をリボーンと骸に向けた。

バシャァァンッ

「リボーン、骸！！」

ツナが慌てて二人の名前を呼ぶ。二人の元へ行こうとするが、ウライラの水が邪魔をして近寄れない。

「…まったく、何て言う人だ」

地を這うような骸の声。
その声と同時にウライラの水が弾かれた。
そして骸とリボーンを庇うように作られていた蔦のようなものがガラガラと崩れ落ちる。
骸の有幻覚だった。

「あなたみたいな人がいるから…この世の中はだめなんですよ…この、腐れマフィアが！」

骸の身体がふらりと傾く。
だが骸はなんとか自分で身体を支え、倒れずにすんだ。
しかし、息は荒く苦しそうだ。

「だめでしょう、骸くん。弱っているのに力を使っては。」

大丈夫？とさも心配しているかのように声をかけるウライラだが、態度は全く心配している気配はない。

「お前の相手はオレだろ！」

ツナが不意をついてウライラに蹴りを入れる。
蹴りはみねうちにヒットし、ウライラの身体がよろめいた。

「…そうでしたね。ほったらかしにしてすいません。…でも、綱吉くん」

ウライラの冷たい瞳がツナの姿を捕らえた。

「綱吉くん、実は疲れてるんでしょ？ニコールくんと戦って、アロッチくんとスコッチくんの相手までして…。
今、お腹の傷はかなり痛いはずなんだけど、平気なの？」

ツナはその問いに答えない。
否定できないからだ。

ニコールとの戦闘、双子との戦闘の疲労に加え、喰らった怨念の毒がまだ体内に残っている。
その上、完全に塞がっていない腹の刺し傷が先程からズキズキと痛みを増していた。しかも呪いも地味に痛みを発している。

この状態で戦うのはかなりきつい。
ツナの頬を汗が一滴垂れた。

「痛みを我慢して戦うのはあのお仲間のため？…やめなよ、そんな無断なこと。」

ウライラがあやしく目を細める。
逆にツナの目が大きく開かれた。

ズキン　ズキン　ズキン　ズキン

痣の痛みが増した。
地味なものから強烈なものへ。

特に、左腕。
ツナは左腕を抑えて痛みに耐える。

「あんなお仲間のためなんかじゃなくて、僕のためにその力を使ってくださいよ。」

「…っ誰が、お前…なんかのために……」

ツナはとぎれとぎれの言葉を発する。
その間にも痛みはどんどんツナを襲う。

「綱吉くんの力は僕のために生まれたものさ。それ以外のなんでもない。」

とうとうツナは地面に倒れ伏した。
息をつめて痛みに抵抗するが、それは意味のない行動だった。
ゆっくりとウライラがツナに歩み寄る。

「…来る…な」

「綱吉くんが素直に僕の言うことを聞いてくれればこんなことにはならなかったのに……」

ツナがオレンジの瞳でウライラを睨むが、ウライラにはまったく効いていない。
むしろおもしろそうに見下ろしている。

「もうニコールくんたちは必要ない。代わりに君を仲間に迎えいれます。」

「…断る！オレは、お前、の…仲間になんか…っ」

苦しませてもなお、拒否をするツナを見ていたウライラは、小さなため息をついて杖を構えた。

「…Ａ　ｃｏｎｔｒａｃｔ　ｓｔａｒｔ.」

ウライラが呪文を唱えはじめる。
杖は倒れているツナの頭の先に立たされた。

「Ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｏｕ　ｉｓ　Ｔｓｕｎａｙｏｓｈｉ　Ｓａｗａｄａ.」

「…この呪文、まさか！」

ニコールたちが慌てだした。
ウライラを止めるため、動けない身体を動かそうと必死にもがく。
だがその間にもウライラの呪文はつづく。

「Ｉ　ｇｅｔ　ａ　ｓｏｕｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｏｕ.
Ｔｈｅ　ｔｈｏｕ　ｇｉｖｅｓ　ｍｅ　ａ　ｓｏｕｌ.」

「…っ！！」

杖がビリリ、と震えはじめた。
ツナが苦しそうに顔をしかめる。

「Ｐｒｏｍｉｓｅ　ｔｈａｔ　ｙｏｕ　ｏｂｅｙ　ｍｅ.」

「ツナ、逃げろ！」

リボーンが叫ぶが、その声は届かなかった。

バァァアァンッ

杖から闇が放たれた。

「‥The spirit which is present in words completion.」

笑みを含んだ呪文が響き渡った。
放たれた闇が風で散っていく。

そこには、一人の少年が立っていた。

「ツナ!!」

「綱吉くん!」

リボーンたちがツナに呼びかける。
だが、ツナは反応をしめさない。

「…交わされて、しまったのか……」

ニコールが震える声で言った。

「そう。交わしちゃったんだよ。残念だったね。」

ウライラがツナの肩を抱いてにっこりと笑う。
ツナはぴくりとも動かず、顔を俯かせているだけだった。

「…そんな……交わされてしまった……」

ニコール、マリネ、ビンツ、ミノイ、アロッチとスコッチは希望を失ったかのような瞳でウライラとツナを見ていた。

「さあ、綱吉くん」

ウライラがツナに声をかける。
ゆっくりと、ツナのまぶたが持ち上げられる。

その瞳に…光はなかった。

ボゥッ！！！

ツナの額から勢いよく炎が燃え上がる。
だがその色は…。

「…黒。」

リボーンはただ唖然としてその姿を見ているだけだった。

交わされて、しまった。

消えて、しまった。

奪われて、しまった。

大空が、闇に。

「…言霊が、完了してしまった。」

大空は闇に支配された。

標的６２　希望消失（後書き）

わー！ツナー！（Д）
こらなにやってんだウライラ！
と自分でもつっこんでしまいました。

…おそろしい、ウライラめ。

ウライラとツナは言霊を交わしてしまいました。
途中で呪文が出てきましたね。
その解説をしてみます。

Ａ　ｃｏｎｔｒａｃｔ　ｓｔａｒｔ．
－契約開始。

Ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｏｕ　ｉｓ　Ｔｓｕｎａｙｏｓｈｉ　Ｓａｗａｄａ．
－汝の名は沢田綱吉。

Ｉ　ｇｅｔ　ａ　ｓｏｕｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｏｕ．
Ｔｈｅ　ｔｈｏｕ　ｇｉｖｅｓ　ｍｅ　ａ　ｓｏｕｌ．
－我は汝の魂を得る。
　汝は我に魂を与える。

Ｐｒｏｍｉｓｅ　ｔｈａｔ　ｙｏｕ　ｏｂｅｙ　ｍｅ．
－汝は我に服従することを誓え。

The spirit which is present in words completion.
一言霊完了。

てな感じです。
…文法が間違ってたらすいません。
「馬鹿じゃねーのこいつ！」とか言いながらスルーしてください（笑）

読んでくださってありがとうございました！

標的６３　絶望の大空

大空は無限だ。
限りなく広がっている。

地上から見上げたとき、その瞳に映るものが空。
時には青く、時には黒く、時には白く。
様々な色へと姿を変える。

無限を持っている大空はとても稀少なものだ。
それと同じように大空属性も稀少な人物。

大空を中心として人は動く。
大空がなければ人は動かない。

では、大空をなくせばどうなるのだろうか？

――消滅だよ。

「契約完了ー。どう？この綱吉くん。すごいでしょう？」

にこにこと笑いながらウライラがツナの肩を叩く。
ツナは何も言わずにリボーンたちを見ていた。
その瞳に光はなく、ただ黒く、感情はなかった。

「そんな…言霊が…！」

「言霊ってなんだ？」

焦るニコールにリボーンが問う。
ニコールは瞳を揺らしながらも説明しはじめた。

「言霊…っていうのは、ウライラ様の力で成り立つ術なんだ。
ウライラ様に服従させるために交わされる契約のことで…、僕らもその契約を交わしていたんだけど、ウライラ様がその契約を放棄したから、僕らはもうウライラ様に服従しなくても済むんだ。でも今は綱吉くんが契約を交わしたから…」

「…ツナはウライラの言いなりってわけか」

珍しくリボーンが冷や汗を垂らす。
ニコールは静かに頷いた。

「だから綱吉くんはもう君たちの知っている綱吉くんじゃない。僕のために力を使う綱吉くんになったんだよ」

「…綱吉くんがウライラ様のものとなってしまった今、僕らは……」

ごくり、と全員が息をのむ。

「…死ぬしかない。」

全員が絶望に立たされた。
全員が大空を失った。

…それは、死を意味する。

「残念でした。僕の言うことを聞いていればよかったのに…かわいそうに」

くすくすとウライラが肩を震わせて笑う。
リボーンたちはなにもすることができずに歯を食いしばっていた。

「さて、早速綱吉の力を試してみましょうか」

ウライラはツナの目線に合わせてツナに話しかける。

「では綱吉くん、あなたの力を見せてください」

「……。」

ツナは言葉を発することなく頷いた。
そしてリボーンたちに向けて掌をかざす。

ドオォォオンッ

ツナの掌から発せられた真っ黒な炎は、リボーンたちの後ろの巨樹にぶつかった。
メキメキと音を立てて巨樹は燃えながら崩れる。

「…こんなツナの攻撃、見たことねぇのな」

「十代目…どうして！」

山本と獄寺は驚くばかりだった。
守護者の中でも一番ツナと関わっている二人でも、こんなツナは見たことがなかった。

いつもは美しいオレンジの炎を纏って戦っていた姿は、今は別人のようだった。
瞳も炎も黒。ただの黒。
目をそらしたくなるほどの冷酷さだった。

「せっかくだから、綱吉くんに君たちの命をどうするかを任せよう。」

「…どういうことだ。」

「だから、綱吉くんに君たちを殺させてあげるっていうの。嬉しいでしょ？仲間に命を奪われて」

その言葉を聞いてリボーンたちが目を見開く。
仲間であるツナが自分たちの命を奪う。
仲間である自分たちの命がツナに奪われる。
今まで一度も考えたこともない事態に絶句した。

「そんなこと沢田がするはずないではないか！」

「そうだよ。その小動物にそんなことできるはずない。」

「馬鹿だね君たち。綱吉くんは僕に服従する者となったんだ。僕の言うことならなんでも聞くんだよ」

了平と雲雀の否定をウライラはあっさりと切り捨てた。
そして無言のツナに話しかける。

「綱吉くん。目の前にいるのは僕の敵なんだ。…だからやっつけちゃってよ」

無表情でこくりとツナは頷き、グローブから真っ黒な炎を出してリボーンたちに襲いかかった。

「やめろ、ツナ！」

リボーンの叫びも聞かず、ツナは炎を放った。

ジュウゥゥウッ

真っ黒な炎が青い炎に掻き消された。
煙を立ち込めらせて青い炎も消える。

「…今のすっげぇ効いたのな…っ」

山本の身体ががくんと崩れた。
握っていた刀はただの竹刀へと戻る。

「山本、おめぇ」

「まだ動けるかと思ったら、今の一撃でだめになっちまったぜ…はは
はっ、情けねぇな」

息を荒くさせて頬を伝う汗を拭う。
これで完全に山本は戦闘不能となってしまった。

そんなことも気にせずにツナは次の攻撃を仕掛ける。
だが、ここで意外な人物がいきり立った。

「こらーバカツナー!!ランボさんをいじめるなー!!!」

ランボがツナの攻撃に怒り、リングに炎を燈して匣を開匣させた。
それはあまりにも意外なことで、リボーンたちは唖然としてランボを見ていた。

そしてあれよあれよという間にランボの匣兵器、牛丼を形態変化（カンビオ・フォルマ）させてしまった。「…激しい一撃を秘めた雷電と謳われたランポウの盾か。」

「バカツナバカツナー！！ランボさんがやっつけちゃうもんね！！」

一人で騒ぐランボを見てもツナの無言、表情は変わらない。
再びリボーンたちに向けて黒い炎を放った。

「雷の角（コルナ・フールミネ）！！」

ピシャアァァアンッ

ランボの雷が盾となり、ツナの炎を抹消した。
その炎と雷がぶつかり合う様は凄まじいものだった。

炎と雷がおさまる頃、ランボがこてんと地面に転がった。

「あの雷で防いでもだめか…」

目をまわして気絶するランボを見てリボーンが呟いた。

なんて強力な炎なんだろうか。
ツナの秘められた力はこれほどのものなのか。

（…いや、まだだな）

リボーンは直感的にそう思った。
まだツナの力は未知だ。
そんな計り知れないツナの力を今、解き放たれてしまえば…。

（……死、か。）

死を目の前にするとこれほど冷静になれるものなのか。
それとも持ち前の性格からか。

リボーンはただツナを見ているだけだった。

闇の奥底で瞬く光。
助けて助けてとチカチカと輝く光。
それに気付くことができるのは、

青い青い、大空だけ。

標的６３　絶望の大空（後書き）

書いてて辛いです、ゆか空です。

ツナ～（´；ω；`）

あの優しいツナは何処…。

馬鹿馬鹿ウライラちゃんの馬鹿！↑

でもウライラ好ｋ（ｒｙ

てか、

５月１５日、この一日だけで閲覧数が３５００。

ユニーク数が２５０に達してました。

ヽ（・∀・）ノワオ！

びっくりしました。

夢かと思いました。

嬉しいです。

ありがとうございます！

読んでくださってありがとうございました！

標的６４　黒き大空の炎

絶望とはこんなにもおそろしいものなのか。

まるで崖に追い詰められたような、焦燥感もある。

望みは絶たれた。

希望は消えた。

光は失われた。

裏の世界で広く名を知られる人物。

最強とも謳われる凄腕のヒットマン、リボーン。

類い稀なる銃の腕を持ち、勝る者はいないと言われる。

これまで数々の体験をした。

恐ろしい経験は数え切れないほど。

だが彼は表情ひとつ変えずに、淡々と仕事をこなしていた。

しかし、流石のリボーンでも今回の出来事には表情を変えずにはいられない。

教え子が自分の、仲間の命を狙っているのだ。

いくつもの修羅場をくぐり抜けてきたリボーンもこれほどの窮地に追いやられるのは初めてのこと。
心臓はバクバクとせわしなく動き、次々と冷や汗が垂れる。
こんなときこそ、奇跡を願わずにはいられなかった。

「なんなら遺言でも残しておきましょうか？」
楽しそうに笑ってウライラがリボーンたちに話しかける。
本当に恐ろしい男だ。
仲間だった人間をも殺そうとしているのだから。

「さあ、綱吉くん。あのクズたちを消してしまいなさい」
その言葉を合図に、ツナは掌をかざす。
グローブからは真っ黒な炎が渦を巻いて放たれている。
時々ゴウゴウという風の音までもが聞こえる。
そしてその炎はツナの掌を根源にして大きな竜巻となった。
黒いそれは、見ているだけでもその威力がわかる。
触れたら身体は無事ではない。
巻き込まれたら即死だろうか。
その竜巻はどんどん威力を増して大きくなる。

すると、リボーンがあることに気付いた。

（あいつ…やべぇぞ）

リボーンが見つめるのはツナの腹。
ツナの服に血が滲んでいたのだ。
そして竜巻の風力でのぞける腹に貼ってあるガーゼは、ほとんどが血に染まっていた。
これではツナの命も危ない。

（…だがツナは止められねぇ。どうすりゃいいんだ……）

リボーンは止める術も知らない。
それに、生徒の危機には手出しができないのだ。
なにもできない自分に苛立つ。
なんて自分は愚かなのだろうとリボーンは小さな拳を握りしめた。

「さあ、消しなさい！」

ウライラの声が耳に響く。
そしてツナは言われるがままにその悍ましいほどの竜巻をリボーンたちに向けた。

ああ、もうだめなのか。

全員が死を覚悟して目を閉じた。

ボゥウウッ

まず感じたのは風。
そしてあたたかな温もり。
その温もりは、覚えのあるもの。
心地のいい、包み込むような。
…オレンジの、炎。

「ツナ、やめて！！」
「…トンノ、おめぇ……」

リボーンたちは目を見開いて驚く。
目の前に立ちはだかる大きな鳥。
そして自分たちを守るように燃えるオレンジの炎。

その姿は、まるでツナを思わせるものだった。

「……おや、大空属性の炎…。君は綱吉くんの力で実態化した鳥ですね」

「黙れ！ツナを返せ！」

トンノの声がウライラの声を掻き消す。
怒りを含んだ声。
今まで聞いたことのないものだ。

「ツナは道具なんかじゃない！お前のためのものでもない！」

「それは間違っていますよ。綱吉くんは僕の計画のために生まれてきたんです」

「違う！違う！それこそ間違ってる！！お前のすることすべてが間違ってるんだ！」

トンノが叫ぶたびに炎の勢いが増す。

ツナの真っ黒な炎に対抗しながら燃え盛るオレンジの炎は衰えることはない。

「ツナは一人の人間として、幸せになるために生まれてきた！そしてこれからも幸せになるために生きていくんだ！お前なんかに…お前なんかに、ツナの運命を決めさせない！！」

いよいよトンノの炎が怒涛のように燃え上がる。
かすかに、ツナの炎がおされていく。

（トンノの炎のが威力は上なのか…？……いや、違う）

リボーンが腕を組んでふたつの炎を見つめる。

（…ツナの炎が弱くなってるだけだ。）

無表情のツナの顔に、汗が伝う。
表情には出さないが、腹の傷が相当痛むのだろう。
それで力が弱まっているのだ。

「なにをしているのです、綱吉くん。さっさとあのクズを消しなさい！」

そのウライラの声で再びツナの炎の威力が戻る。
だがトンノの炎とは互角。
傷の痛みのせいでそれが限界らしい。

ツナの力はトンノよりも上なのだ。
トンノと互角になるのはおかしい。

それにトンノも気付いていた。

「…リボーン」

「なんだ、トンノ」

「……力を、かしてくれない？」

トンノが顔だけをこちらに向けて言う。
ずいぶん高いところにあるトンノの顔をリボーンは見上げた。

「力ってなんだ」

「…リボーンの、意識だよ」

「…どういうことか説明しろ」

「僕には、人の意識に入り込める能力があるだろ？だからそれを使って、ツナの意識にもぐりこもうと思う。
…リボーンも一緒に。」

トンノのオレンジの瞳には小さなリボーンがうつっている。

リボーンの瞳にもトンノがうつっていた。

「できるのか、そんなこと。」

「リボーンが強ければね。…大丈夫だよ。」

優しくトンノが答える。
しばらく俯いて黙り込んだあと、リボーンは覚悟を決めたように顔をあげた。

「…よし。連れてけ。」

「……わかった。」

そう言うとトンノは目を閉じて正面を向いた。

ふわりと、リボーンの意識が軽くなる。
浮遊感、とでも言えばいいのだろうか。

「行くよ。」
トンノの声の後、リボーンは意識を飛ばした。

その小さな身体は地面に静かに倒れ込んだ。

絶望とはこんなにもおそろしいものなのか。

まるで崖に追い詰められたような、焦燥感もある。

望みは絶たれた。

希望は消えた。

光は失われた。

…君は、幸せになるために生きるんだ。

標的６４　黒き大空の炎（後書き）

うわー、落ち着きません！

いつものかわいらしいツナが見たいです。

黒いツナ…も、かっこいいけど（笑）

書いてて思ったんですが、
ウライラが調子乗りすぎてました！
イライラしてる人すいません！↑

さて、テスト勉強してきます！

読んでくださってありがとうございました！

標的６５　能力救出

願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

大空と太陽が動き出した。
真の大空を取り戻すために。

まぶたをあげると、そこは闇だった。

「…なんだ、ここは」

リボーンがその闇にたじろぐ。
まるで深海のような、光の届かない闇。
すると、隣に小さな炎があらわれた。

「…流石リボーン。無事に潜り込めたみたいだね」

「トンノか。ここはどこだ?」

「ここは、…ツナの意識の中だよ。」

頭と尾の先にオレンジの炎を燈してトンノがつぶやく。
そんなまさか、とリボーンは疑った。

(ツナの意識は、こんなにも闇がひろがっているのか?)

その心情を読み取ったトンノはそれを否定する。

「違うよ。ツナの意識は大空なんだ。限りなく広がる、真っ青な。…こんなに闇が広がっているのは、ウライラに操られているからだ。」

「…ここにツナがいるのか?」

「うん。それに徳松もいるはずだよ。」

リボーンは辺りを見渡すが、トンノの炎以外には何も見えない。
自分が立っているのか浮いているのかもわからない。

「…とにかく、二人を探さなきゃ。僕の力も限界がある」

真剣な眼差しでトンノは言った。

時間はあまりない。
トンノはツナの意識の中に潜り込みつつも、外では全員をツナの攻撃から庇っているのだ。
それにはかなりの力を要する。

「…だが、こんな暗闇の中どうやって探すんだ?」

「まず、徳松を探す。徳松はツナの能力だから、徳松を見つければツナの攻撃を止めれるかも知れない。」

そう言うとトンノは目を閉じた。
ゆらゆらとオレンジの炎が揺れる。

「……徳松は、近くにいる」

はっきりとトンノは言った。
確かに、徳松の気配を闇の中に感じ取ったのだ。

「…とにかく、徳松の居場所に案内しろ」

「わかった」

先の見えない闇の中、リボーンとトンノは徳松を目指して駆け出し

た。

「アルコバレーノ、どうしたのです！？」

「リボーンさん、リボーンさん！」

隣にいた骸が呼びかけるがリボーンは倒れたまま返事をしない。
獄寺たちの怪我の治療をしていたロンジが慌ててリボーンに駆け寄る。

「……脈はあります。意識を失っているようです」

ロンジはリボーンの脈を確かめて安心したようなため息をついた。

「しかし、何故リボーンさんは……」

「……そういえばこの大きな鳥も正面を向いたまま動きませんね」

骸が大きな鳥…トンノを指差す。

トンノは瞬きもせず、身体もピクリとも動かずにいた。
だが炎だけは揺らめいており、ツナの攻撃を防いでいる。

何が、起きているのか。

何もわからないロンジたちは、ただリボーンが目を覚ましてくれることを願った。

「…おい、トンノ。ほんとに徳松はいんのか」

走っても走っても徳松の姿はない。
痺れを切らしたリボーンがトンノに問いかけた。

「それは確かだよ。徳松の気配はだんだん大きくなってる。……ただ、アロッチとスコッチの放ったオーラの毒がまだ残ってるみたい」

時々バサバサと羽ばたきながらトンノは答える。
闇からはかすかに双子が発していたどす黒いオーラが感じられた。
それが徳松の気配をくらましているらしい。

すると、トンノがぴたりと止まった。
それにつられてリボーンも走るのをやめる。

「…いる」
トンノは目の前を睨んでいる。
だがトンノの視線の先には変わらない闇があるだけだ。

「…ただの闇じゃねぇか」

「ううん。間違いなく徳松は目の前にいる。」

そう言うとトンノはリボーンに後ろに下がるように促した。
リボーンが自分から離れたのを確認すると、両方の翼を広げ、身体からオレンジの炎を出現させる。

そしてその炎を目の前の闇に向けて放った。

ピキ　ピキピキ　ピキピキピキ　ピキ

闇に亀裂が走る。
そしてその破片がぱらぱらと剥がれていく。

隙間から覗かせたのは、かすかな空と、オレンジの炎。

トンノはさらに力を込めて炎を放った。
まるでガラスが割れるような音を立てて闇が崩れた。
そこにいたのは。

「徳松!!」

ふらりと倒れそうになる徳松をトンノが支える。
徳松の現れた場所には、小さな空があった。

「徳松、徳松!!」

「……っ、…トン…ノ？」

うめき声を上げながら徳松が目を覚ます。
額の炎はマッチ棒に燈される炎のように小さかった。

「大丈夫か、徳松」

「…ツナ、が……一体、どうなって…」

徳松は咳込みながら問う。
どうやら状況がわかっていないようだ。

「ツナはウライラによって操られてるんだ。」

「…だから、こんなに真っ黒なのか……」

「ああ。だから今ツナが外で暴れてんだ。…徳松、止めることはできないか？」

「…やってみる」

徳松は目を閉じて炎に力を込める。

…しかし。

「……だめ、だ…。…力を抑えられない……」

本人にとっても驚くことなのだろう。
徳松は唖然としていた。

「…ツナが…オレを…ツナの能力を引き出してる…」

「ちっ。ウライラめ…そこまでツナを操ってんのか」

「徳松…なんとかして止められない？」

トンノの問いに徳松は首を横に振った。

「オレは、ツナの意思で動くから…オレにはどうしようもできない…。」

やるせなさに徳松が己の身体を殴る。

何度も、何度も。

「やめろ徳松。自分を責めたってなにも起きないだろ」

リボーンが徳松の拳をそっとおさえた。

徳松はかたかたと震えて顔を俯かせる。

徳松の悔しさが痛いほどに伝わってきた。

「…今は、ツナを探すぞ」

リボーンが徳松に言い聞かせる。

今はなんとしてもツナを見つけだして止めなければならない。

ツナを止められるのは、ツナしかいないのだ。

「行くぞ、徳松」

しばらく下を向いていた徳松は、ゆっくりと顔を上げて頷いた。

トンノは背中に徳松を乗せ、ツナを見つけるために翼を羽ばたかせた。

必ず、ツナを見つけだす。

必ず、ツナを救いだす。

必ず、ツナの笑顔をよみがえらせる。

そうかたく決心して、闇の中へと消えていった。

やめて　やめて
もう　やめて

僕はどうなってもいい
だから

人を、傷つけないで。

標的６５　能力救出（後書き）

ああ、話が暗い（，・ω・、）

テスト中だし話暗いし、なんちゅうこっちゃ！です。

標的６６　声と光と暗闇

君はどこにいるの
この暗闇の中、僕らは君を探す
ねえ、僕らには
君が必要なんだよ

仰いでもそこに空はなくて
それがあまりにも悲しくて

待ってて、今行くから
そこにいて、必ず見つけだすから
消えないで、お願いだから

あてもなくさ迷うように、リボーンたちは暗闇を駆け回る。

目的は、ただひとつ。

沢田綱吉という名の大空を、見つけだすため。

「おいトンノ、ツナの気配はねぇのか」

「…まったく、気配がない。徳松はわかる?」

「オレにもわからない。……まるで、何かに閉じ込められてるみたいだ」

ツナと一心同体である徳松にも、ツナの気配はまったくわからなかった。

一刻もはやく、ツナを救い出さなければならない。

刺し傷、呪い。

ふたつの不幸が重なり、さらにウライラに魂を奪われてしまった。

これならいつツナに何が起きても不思議ではない。

最悪の場合は、死んでしまうだろう。

それを阻止しなければならない。

…だが、ツナの居場所がわからない。

「…どうすりゃいいんだ」

悔しさの滲むリボーンの声は、暗闇に飲み込まれた。

「…その鳥、なんですか？まったく動きゃしないじゃないか」

トンノが身動きひとつしないことに気付いたウライラが首を傾げた。

先程からずっとツナとトンノの炎がぶつかり合っている。

その波動は弱まることはない。

「…綱吉くんも疲れましたか？…仕方ない、僕も少しお手伝いしましょう」

にやりと笑ったウライラは黒い杖の先をトンノに向ける。

だがトンノは依然として動かない。

（奇妙な鳥だ。大空属性だから少しくらいは役に立つと思ったけど、……邪魔なだけだったな。…残念だ。）

ウライラは杖を握る手に力を込め、攻撃を仕掛けた。

「綱吉くんの黒い炎と、僕の黒いオーラを受ければどうなるんでしょうね！」

その言葉の直後、杖からどす黒いオーラが放たれた。

双子が放っていたオーラとは比べものにならない、漆黒のオーラだった。

…しかし。

ジュゥゥゥゥウッ

「…！？」

一瞬、思考が滞った。

ウライラの放ったオーラが、トンノの炎に飲み込まれたのだ。

それはほんとに、一瞬の出来事。

「…少々侮っていたようですね」

少し動揺したような顔でウライラは笑った。
だが、反撃とばかりに次はトンノの炎がウライラに襲いかかった。

ジュワッ

腕をオレンジの炎がかすめた。
その炎はウライラにとっては、毒も同然であった。

身体にオレンジの炎が滲む。それはあまりにも強く、眩しく、

「…っ忌ま忌ましい！」

虫酸が走る。

黒い身体に輝く炎が触れた。
それだけで不快だった。

「僕の黒を、崩そうとするな。」

ぽつり。
小さく低い声がかすかに聞こえた。

…ああ。
今だ、今だ、今だ。
今なら、できるだろうか。

やめて　やめて。
もう、やめて。
僕はどうなってもいい。
だから、人を、傷つけないで。

“……ち…”

「？」

耳に届いたのは小さな声。
徳松は耳をすました。

「…どうした」

「今、なんか聞こえた……」

遠くを見つめながら徳松は答える。
リボーンもトンノも黙って耳をすます。

“…っち……”

「…なんだこの声は」

“こ……ち…”

「こ、ち？」

“……こっち。”

「こっち？……まさか」

突然聞こえた声に三人は警戒する。
「こっち」とは、なんだろうか。

「まさか、ツナの居場所…？」

「だがこの声はツナじゃねぇぞ」

その声は低く、だが優しいものだった。
しかしそれはツナの声ではない。
少年のものではなく、青年のものだ。

「こっち、って何が？」

トンノは声の主に尋ねた。
答えてくれるかはわからないが、自然と尋ねていた。

“……の…ろ”

声が、少しずつ小さくなっていく。
今にも消えてしまいそうだった。
だが三人は佇んでその答えを待った。

“……綱吉くんのところ”

「「「！！？」」」

三人は驚いた。
まさか本当に答えるとは思ってもいなかったのだから。

もしかしたら罠かも知れない。
ウライラが騙しているのかもしれない。
その可能性は十分にある。

「…行こう、か」

徳松は二人に言った。

この声を信じようと、信じなければならないと思ったのだ。

信じなければ、後悔すると。

「……わかった」

「行くしかねぇしな」

トンノとリボーンは頷いて答えた。

すると、遠くになにかが見えた。

チカチカと、弱々しい光がまたたく。

「…あそこか」

その光を見つめたあと、三人は光を目指して進み出した。

誘うように、光は不定期なまたたきをしていた。

“…けて。……助けて。…助けて。”

大空を、救い出せ。

標的６６　声と光と暗闇（後書き）

睡眠時間が一日2時間…

死んでしまう（´・ω・、）

高校生なのに青春しきれてないです。

くそっ、受験め！

話もあんま進みませんね…

自分でもじれったいと思います。

のっそりと進めようかな、とか思ったり…して…ます。

読んでくださってありがとうございました！

標的６７　誘導の果て（前書き）

最近短いですね。
ごめんなさい。

標的67　誘導の果て

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

リボーンたちを導くようにチカチカとまたたく光を追う。
先程聞こえた声は誰のものかわからない。

“こっち”

“綱吉くんのところ”

確かにその声はこう言った。
それは真実か否か、わからなかったがリボーンたちは信じた。
その声と光には、ひどく安心感を持てたのだ。

暗闇の中で輝く光は魅力的だった。

儚くて、今にも消えてしまいそうな光。
弱々しくも懸命にリボーンたちを誘っている。

「随分と広いな。どこまで続いてるんだ?」

真っ暗でなにも見えないが、どこまでもつづくツナの意識の広さに少々圧倒される。

「意識の広さって人それぞれなんだ。狭い人や広い人、いろんな意識があるんだよ」

トンノがリボーンに説明する。

人の意識は、その人の性格や考え方などが関わっている。

例えば、小さな子供は広い意識を持つ。
子供は純粋で無垢、まだ知らないことが多いからだ。
それに、どんな人間になるかという無限の選択肢がある。

しかし大人の意識は狭い。
世の中の辛さや苦しさなどを知ってしまうからだ。
正しいものは正しいと、答えはひとつだけだと思い込む傾向があるからだ。

子供の無限と大人の定義。
それはまったく異なる。

「だんだん大人になっていくと、意識は狭くなってしまうんだ。本当なら、ツナの意識も狭くなっているはずなんだけど……」

トンノは声色を変えた。
暗いものから明るいものへ。

「ツナはやっぱり大空だね。子供のように無限で、だけど大人のようにしっかりしてる。」

「…やっぱ変わった奴なんだな、ツナは」

リボーンはおかしそうに、だけどどこか嬉しそうに笑った。
その笑みは帽子に隠されて誰にも見えなかった。

ピタリと、光が止まった。
リボーンたちを待っているかのようにそこにとどまっている。

「…そこにいるのか？」

「……徳松のときと同じで姿は見えないね」

トンノがスピードをあげてその光の元へと羽ばたく。

近くで見ると、その光はとても小さかった。

遠くからでも見えたのは、この暗闇とチカチカとまたたいていたおかげだろう。

「…ここに、ツナが」

先程と同じように、何もないように見える。

トンノは再び炎を揺らめかせ、闇の破壊を試みた。

だが、その闇はまったくびくともしない。

ピキピキと小さなヒビがはいるだけだ。

「だめだ、壊せない。」

「…なにかに封されているのかも知れない」

徳松はそっとヒビに触れる。

そして手に力を集中させ、トンノと同じように炎を放った。

ピキ　ピキ　ピキ

それでもヒビはほんの少ししかはいらない。
やはりなにかで封されているのだろう。

すると、小さな光がトンノたちの周りをくるくると回りはじめた。
小さな光からはキラキラと輝くものが降ってくる。
そしてそれは徳松の腕を伝って手に集まった。
再び徳松が力を集中させる。

ピキ　ピキピキピキピキ　ピキピキ

小さな光が発する輝くものがヒビを伝って亀裂を広げさせていく。

そして徳松は歯を食いしばって思いきりヒビ目掛けて拳を突き出した。

パァァァアンッ

闇が弾け、あたりに散っていく。

ぱらぱらと闇が破壊される。

そして現れたのは、小さな少年。

「…っツナ！！」

徳松がツナを助け出そうとツナの腕を掴む。

ジャラッ

「…！！？」

全員が目を見開く。
ツナの腕には、おびただしいほどの鎖。
だがそれは腕だけではなかった。

「…全身に鎖が絡まってやがる」

リボーンが小さく舌打ちをする。

ツナの全身には、逃がさまいと鎖が巻き付けられていた。
それは固く、ジャラジャラと音をたてるだけ。

「…ウライラの呪いか」

「こんな、ところにまで…」

リボーンたちはただ唖然とするだけだった。

かたく閉ざされたまぶた。
その顔に生気はない。
まるで、人形のようだ。

「…ツナ……っ」

徳松が地面に座り込んでしまった。
握るツナの腕は、とても冷たかった。

「ツナ、ツナ、ツナ！！」

何度も何度も徳松はツナの名を呼ぶ。
しかしツナは反応を示さない。

徳松が腕を放すとツナの腕は力無く揺れた。

「…どうして、ツナだけ！！」

拳を握りしめて思いきり叫ぶ。

「どうして、どうして、どうして！！
どうしてツナだけなんだ！
どうしてツナだけこうなるんだ！

…どうして、オレじゃないんだ……」

ぽたり。
徳松の拳を涙が濡らす。

ふるふると震え、次々と涙は落ちる。

「…徳松」

「オレも、オレもツナなのに！ツナの能力なのに！
なぜツナだけなんだよ！
なぜオレだけなんだよ！
ツナは動けないのに、オレは動けるなんて……。

…なんで、なんだよ」

声が震え、それは涙に消えていった。

やるせなかった。
自分が、自分に、イライラした。

ツナの能力なのに、ツナ自身なのに。
ツナと一緒なのに。

リボーンも、トンノも、ただ徳松を見つめることしかできなかった。

小さな光は、哀しそうにかすかにまたたいた。

どうすれば。
どうすればいい。

この大空を救い出すには。

なにを。

なにをすればいい。

この大空を目覚めさせるには。

なにを、どうすれば、いい？

標的67　誘導の果て（後書き）

（（（；゜Д゜））））

ツナー！

ツナ発見、よかたよかた・・・

・・・な訳ないッスよね。

鎖とか…痛そう。
肌に食い込むんですよ！
ちみくられるんですよ！

痛ーい（´；ω；`）

でもツナは痩せ型だから…
骨が痛そうですよね。

しばらくそのままだよ、ツナ！
死ぬ気で耐えろ、ツナ！

わたしのテストがおわるまで待っててて、ツナ！

天才の底力、見せてやる。

読んでくださってありがとうございました！

標的６８　決意（前書き）

最近ほんとに短くて…読みごたえがないように思います。
ごめんなさい。

標的６８　決意

僕にこんな力がなかったら、
こんなことにはならなかったのかな。

ああ、普通に生まれていたならば、
僕は普通の人間だったのかな。

こんな力を持ってしまったから、僕は…

闇に侵されてしまったんだ。

ツナは発見された。
不思議な小さい光の導きによって。

リボーンたちはツナと再会することができた。

だが、それは最悪なかたちで。

痛々しいほどに身体に巻き付く鎖。
それはツナの肌に浮かび上がっている鎖の痣と酷似している。
いや、同じなのかも知れない。

黒く、おびただしく、目をそらしたくなるほどの、呪い。

「…徳松」

トンノが怖ず怖ずと徳松に話しかける。
徳松はただしゃがみ込み、うなだれて肩を震わせているだけだった。

「…徳松、自分を責めるんじゃねぇ」

「そうだよ。徳松のせいじゃないんだよ」

「……いや、オレがいけないんだ」

徳松は首を横にふって答える。

「……オレはツナの能力だ。
能力っていうのは、元は自身を守るためにあるもの。身体的だったり、潜在的だったり…。
その中でオレはツナの身体、潜在共々の能力として存在しているんだ。
…そんな奴が、主である者を守れないでどうするんだ……。
もう…だめだ……」

自嘲気味に徳松は言った。
徳松の言うことは正しい。
間違ってはいない。
あることを除いては。

「諦めんな。」

その言葉の直後、頭に痛みが生じた。
その痛みの原因は、目の前にいる赤ん坊だった。
リボーンが徳松の頭を叩いたのだ。
いつもツナにするように。

「おめぇが諦めてどうすんだ。ツナのことを救いたくはねぇのか?」

ただ唖然として徳松はリボーンの言うことを聞いている。
トンノも同じように黙って耳をかたむけていた。

「救いてぇなら、守りてぇなら最後まで諦めんな。まだ何もやっちゃいねぇだろ。

…それともおめぇは、ツナを救うのをやめるのか？投げ出すのか？

大丈夫だ。ツナは柔じゃねぇ。
…大切なもんは、信じるのが当たり前だろ？」

「…！！」

オレンジの瞳が揺れる。
オレンジの炎が揺れる。

ああ、なんて自分は馬鹿なんだ。
最初から諦めて、終わらせようとしていたのだ。

何もせず、考えようともせず。

「…そう、だよな」

小さく徳松が呟いた。

「…何もしてないのに、諦めるなんておかしいよな。
ツナの能力であるオレがツナを救わないで…守り切らないでどうするんだ」

徳松はゆっくりと立ち上がり、まぶたを閉じる。

その奥にうつるのは、大空とオレンジの炎。

「……まだ、終わりじゃない。」

額の炎が、輝かしく、美しく、強く燃え上がった。

オレンジの瞳に、迷いはない。

リボーンは口許をゆるめた。

チカッ　チカッ　チカッ　チカッ

突然、あの不思議な小さい光が激しく瞬きはじめた。
せわしなく輝くそれを、リボーンたちは好奇の目で見ていた。

次は、何が起こるのか。

また、しゃべるのだろうか。

なにかを導き出してくれるのだろうか。

リボーンたちはそう思った。

だが、予想は間違っていた。

パァンッ

チカチカと瞬いていた光が弾けた。

前触れもなく、いきなりだ。

弾けた光は粒子となりキラキラと輝きながら散っていく。

その様は美しく、一瞬心を奪われたほどだ。

“……て”

「「「！」」」

また、聞こえた。

低く、優しい青年の声だ。

リボーンたちをツナの元へと導いてくれた声だ。

“……えて……さ…えて……”

鼓膜を揺るがす声は、次第にはっきりしたものへと変わる。

“…支えて。……君たちを、待っている”

「…支え…る？」

「どういうことだ」

「なにが、待っているんだ？」

三人の問いかけにその声は答えない。

ただ、“支えて”という言葉を残して消えてしまった。

その言葉の意味もわからず、リボーンたちはその場に佇んでいた。

ああ、もうだめだ。
これ以上は、いられない。

早く、早くしないと。

気付いて。

お願いだから、気付いて。

その　大空で　僕を　助けて。

標的６８　決意（後書き）

テスト　が　終わった　あー！

ヽ（；∀；）ノ

いろんな意味で終わってしまった！↑

ひとまず寝ました。
小説を書こうと思ったけど睡魔には勝てませんでした。
何十時間も必要な睡眠時間を４時間におさめました。
無駄な節約。↑

いろいろ心配してくださってありがとうございます。
復活、リ・ボーンしますよ！

でもやっぱり話は短い。
もっと長めに書きたいんですが、区切りのいいところで切ってるんで短くなってしまうんです…。

空気化してるキャラも復活、リ・ボーンさせなくては（笑）

読んでくださってありがとうございました！

標的６９　鳥の限界（前書き）

いつもより読みにくい文になってます；

標的６９　鳥の限界

「……支える、って…なんのことだ…」

誰のものかわからない声の最後の言葉。

“ 支えて”

確かにそう言って言葉は消えた。
キラキラと光を散らせながら。

支えて、とはどういうことなのだろうか。

ただでさえ混乱している頭をさらに混乱させる。
思考回路がパンクするのではないかと思ってしまう。
頭のつくりがいいリボーンでさえもだ。

「…あの声、なんだったんだろうな」

「…トンノも徳松も、聞いたことねぇのか」

トンノと徳松は首を横に振った。
ツナの意識の状況を知っている二人だったが、あんな声は聞いたこ

とがないのだ。

そもそも、そんな簡単に意識の中に入り込めるものではない。

今考えられるとすれば。

「…ウライラが関係してるんだろうな」

ツナの声でもない。

当たり前だがトンノと徳松の声でもない。

意識の中に入り込めるのは特有な者のみ。

そうとなると、浮かび上がる人物はウライラしかいないだろう。

しかし、ウライラは敵だ。

今もツナの魂を奪い、操っている。

リボーンたちや、かつて仲間だったニコールたちまでもを消そうとしているのだ。

そんなウライラが、何故リボーンたちに話しかけるのか。

ツナの居場所を教えるのか。

まったく理解できないことだ。

「まさか…あのウライラが…？」

「考えられるのは、そんくらいしかねぇだろ」

きっぱりとリボーンは言い切る。
どう考えても、その答えにしかたどり着かないのだ。

簡単なようで難しい問題。
その答えはあまりにも意外で、信じがたくて、でもそれは少なくとも事実で。

リボーンたちは頭を悩ませた。

「……ツナ…」

…ジャラッ

「？」

沈黙の中に小さな音が響いた。

なにかが動いた音。
その音にはかすかだが聞き覚えがある。
そう、先程聞いた音だ。
それは、鎖の音。
それは、ツナに巻き付く鎖の音。
と、いうことは。
「……ツナが、動いた…？」
誰もツナに触れていない。
もちろん風も吹かない。
闇が広がるだけなのだから。
だとすると、原因はひとつ。
「…ツナが、……ツナが動いた！」
徳松は慌ててツナに駆け寄る。
そのあとをリボーンとトンノが追う。

「ツナ、ツナ!?」
必死で徳松がツナを呼びかける。
何度も、何度も。

……ジャラッ

「…!?…今、腕が動いた……」

「…まさか、そんな……ほんとに?」

トンノが問うと徳松は大きく頷いた。
オレンジの瞳が、キラキラと輝いている。

「…なんでだ?ツナはウライラに魂を奪われて操られて…動くことなんかできないはずだ」

確かに、と二人は思う。

ツナは魂を奪われてしまった。
意識もこの有様だ。

操られている今、たとえ意識の中でも動けないはず。

「…もしかしたら」

トンノはツナの正面に立ち、ツナの顔を見つめた。

「…ツナ？」

優しく、静かにトンノがツナに呼びかける。

…ジャラッ

「…そっか、そうなんだね」

「なにがだ？」

くるりとトンノはリボーンたちに振り返る。
そして力強く、はっきりと言い放った。

「ツナが、元に戻ろうとしてるんだよ」

「…っまさか!?」

「ほんとなのか、トンノ」

そうだよ、と言ってトンノは再びツナを見つめる。

「どうなってるかはわからない…けど、確かにツナは元に戻りたがっているんだ」

「……あ。」

徳松が掌で耳を覆って声を出した。
その掌は小さく震えている。

「……ツナ?」

徳松がツナの名を呼んだ。
それに連動するように、ジャラッという鎖の音が響く。

「……ツナの声が、……聞こえた…」

「!?」

「…ツナ……」

徳松のその言葉にリボーンは驚愕する。
トンノはやっぱり、と言って真剣な眼差しを向けた。

ガクンッ

「…！？」

闇が揺れる。
ガタガタと地震のように。

「…っ限界、か……っ」

トンノが悔しそうに顔をしかめた。
そして急いでリボーンと徳松を翼で包み込む。

「…どうしたんだ？」

「…あっちの僕が、限界…みたいだね」

「あっちの…って、オレたちの身体があるとこか？」

「うん……これでももった方…だけどね…」

力なくトンノは笑った。
意識の中では飛び回ったり、炎を使ったり。
向こうでは操られたツナの炎から全員を守っている。
それはかなりの体力を消費していた。
そして、もうトンノの体力は限界に近づいていた。

「あっちに戻るのか？」

「仕方ないけどね……徳松、君も行くんだよ」

「…え？」

突然名を呼ばれた徳松は間抜けな声を出した。

「だから、徳松もあっちに行くんだよ」

「…そんなこと、できるのか？」

徳松はトンノに問いかけた。

徳松はツナがハイパー化しているときは、外に出られなくなっている。
ツナの体内で能力として力を使うためだ。

ツナは今、操られているとしてもハイパー化していることにはかわりない。
だから徳松は出られないはずなのだ。

「僕の力で一時的に出られるようにはなるはずだよ」

「でも、トンノはもう限界なんじゃ…」

確かに先程トンノは限界だと言っていた。
それなのにさらに体力を消費させるようなことができるのだろうか。

そんな心配を消し去るようにトンノは言った。

「大丈夫だよ、僕の力は少ししか使わない。重要なのは徳松の心だ」

「…心？」

「そうだよ。リボーンをツナの意識の中に連れてきたのと同じ原理

なんだ。」

何を言っているのかまったくわからないという様子で徳松はその話を聞いていた。

「えっと、要は心の強さ、かな。
リボーンは心が強いから簡単にこっちにこれたんだよ。」

「だからおめぇ、強ければって言ったんだな」

「うん。……徳松、君なら大丈夫なはずだよ。怖じけづかないで。」

トンノが優しく徳松に話しかける。

大空が大空をなだめていく。

「……オレは大丈夫だ。」

徳松がトンノに微笑みかけた。

大空が大空になだめられていく。

ガタガタガタガタ
闇の揺れが激しくなっていく。
もはや焦点があわないほどだ。

「…しっかり僕につかまってね」

トンノが全身に力を込める。
リボーンと徳松を翼で包み込んで目を閉じた。

そして再び意識が軽くなる。
あの浮遊感がやってくる。

するりと三人は消えた。

残り火と金色の羽だけがその場に残っていた。

標的６９　鳥の限界（後書き）

（（（；。Д。））））あ。

なんて読みにくいんだ！

ごめんなさい。

今回はいつもより何倍も読みにくいと思います。

何故か文にできませんでした。

もうすぐ標的７０になるのに！

この小説を書いて二ヶ月が経ちました。

相変わらずへたっぴょな文章ですがよろしくおねがいします！

読んでくださってありがとうございました！

標的７０　帰来

待っている　待っているんだ
君が来ることを待っているんだ

ずっと、君が来てくれると
信じていたんだ

それが、もうすぐ叶う

お願いだから、

僕を見つけだしてくれないか

僕はここにいるから

その広い心で包み込んでくれないか

大空のような君を

僕は、ずっとずっと

待っているんだ。

「いつまで無駄な抵抗をしているつもりですか?さっさと降参すればいいのに!」

耳障りな笑い声が鼓膜を振動させる。

目の前にいる男、ウライラはツナに加勢するように攻撃を仕掛けてくる。

ツナの黒い炎とウライラの黒いオーラが勢いよくトンノの放つ炎にぶつかる。

二対一ではあきらかにトンノの方が不利だ。
しかも相手はトンノより能力が上のツナとウライラである。
負けるとするならば、誰もがトンノだと思うだろう。

だんだんトンノの炎がおされていく。
オレンジの炎が黒い炎に飲み込まれていく。

もうすぐでトンノの炎が撃ち破られようとしていたその時。

「…っつ！！」

突然、ウライラが己の胸倉を掴んで苦しみだした。

それと同時にウライラの攻撃も止む。

ニコールたちはなにが起きているのかわからなかった。

「…ウライラ…様？」

「ちょっと…どうしたのよあの人」

「持病でも持ってたっけなぁ？」

「「え、そうなの！？」」

「そんなこと、聞いたことありませんよ」

ニコールたちもウライラの苦しむ姿は初めて見たようだ。

突然の事態に驚きを隠せないでいる。

「どうなっているんでしょうかね…ウライラといい、このアルコバレーノといい…」

骸が隣に倒れている小さな赤ん坊に目を向ける。
黒服に身を包んだ赤ん坊は、先程倒れてからまったく動かない。

どうしたものか、と骸が考えていると、その赤ん坊の小さな指がぴくりと動いた。

「…アルコバレーノ!?」

それに気付いた骸がリボーンに呼びかける。
するとリボーンは骸の声にこたえるようにゆっくりとまぶたをあげた。

「……戻ってきた、のか」

「なんのことです?」

覚醒してからの第一声は謎の一言だった。

意味がわからなかった。

すぐにリボーンは起き上がってトンノの元へと駆け寄る。
骸やニコールたちはただ唖然としているだけだ。

「おい、トンノ！トンノ！」

「…聞こえてるよ！なに！」

トンノが声を荒げて返事をした。
穏和なあのトンノが声を荒げる。
めずらしいこともあるものだとリボーンは思った。
（目覚めてすぐにこんなことを考えられるのもめずらしいとは思うが。）

「徳松の姿が見当たらねぇんだが」

「…徳松なら、ここにいるよ」

トンノの視線の先を見ると、小さな人間が一人、金色の羽の中に埋もれていた。

「…僕、も…そろそろやばいんだけど……！」

ズルル、とトンノの足が後ろに引き下がる。
ツナの黒い炎の出力はかわっていない。
トンノの力が弱まってきているのだ。

「……あ、リボーン…」

徳松が目を覚まし、むくりと起き上がった。

「徳松、なんともねぇのか」

「…ツナがこんなに力を使ってるから、あまり動けそうにない……けど」

視線をツナへとうつし、徳松は言う。

「…わかるんだ。」

「なにがだ?」

「……ツナは、本当に戻ろうとしてる。…ここに。」

徳松はふわりと浮き上がり、リボーンの額に小さな掌を当てる。

ドクン、と血が騒ぐ。

頭になにかが流れ込んでくる。

ああ、これは。

この、あたたかな、ぬくもりは。

「…ツナだよ」

「……ああ、これはツナだな」

リボーンはにやりと笑った。

徳松の掌から伝わるのは、かすかなぬくもり。

大空のような、少年のぬくもり。

（……ダメツナが。）

確かに、ツナは戻ろうとしている。

気付いているのだろうか。

今の、この現状を。

かわってしまった、あの黒い瞳には何が映し出されているのだろうか。

それは、ツナには見えているのだろうか。それを見て、ツナはなにを思うのだろうか。

「…ツナは頑張ってるんだ」

「ああ、そうだな」

「さっきの…あの言葉の意味、わかっただろ？」

「当たり前だぞ」

「……だから、リボーン」

「…わかってる」

徳松は掌をそっと放し、ツナを見遣る。

ゆらゆらゆら、とオレンジが揺れる。

「……オレたちが、…“支える”んだ」

ツナを。

大空を。

標的７０　帰来（後書き）

はい、標的７０まできました！
意外と続きます…。
そしてまだ終わらない…。
いや、終わらせない。

記念すべき標的７０は…
ウライラが苦しめられたまま放置されてます。
これはわたしの嫌がらせ。↑

トンノがイライラしてます。
更年期ではありません。
必死なんです、ツナの黒い炎からみんなを守ることに！

そして徳松さん。
トンノの羽の中で寝てた…気絶してました。
絶対トンノの羽は気持ちいいと思います。
もふっもふっもふっもふっ！↑
一緒に寝たい、（・∀・）ノ

いろんな方から、キャラの空気化を指摘されるんですが…、
わたしとしては…一番空気化してるのは…、

っ、Д,）っシクロとシスイですよ！

…え、そんな奴らいた！？と思われた方、いますよね……

いましたよ…結構重要なポジションの……

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の…

ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）の…

シクロとシスイ……

忘れないでいてあげてください（笑）

近々出します！

忘れないで！（笑）

今回も読んでくださってありがとうございました！

追記

おかげさまでもうすぐアクセス数が１０万を越えます。
ありがとうございます！（先取り）

標的７１　大空への思い（前書き）

なんとかいつもより長めです！

標的７１　大空への思い

「……オレたちが、…“支える”んだ」

しっかりと、清明とした声で徳松が言う。
その視線の先には、大切な仲間であり、兄弟のような存在であり、分身であるツナがいる。

その姿は普段のツナとは真逆と言っていいほどに異なる。
瞳や炎は黒、闇のような黒だ。
さらに黒の瞳は光を失い、生気を感じられない。
感情も認識することができない。
あまりにも無だからだ。

長時間、炎を放出し続けているため、腹部の刺し傷からは血が少しずつ流れている。
それはツナの服を紅く染めた。

操られているから、魂を奪われたから、痛みは感じないのだろう。
だが身体は痛みに素直だ。

魂を失ったツナの心は痛みを感じない。しかしその身体は痛みを感じている。

そのため、ツナの頬を汗が伝うのだ。
とっくに、身体は悲鳴をあげていた。

このままではツナは死んでしまう。

魂をなくした上に、死ぬ気の炎を放出し続け、あんな傷を負ってしまっていれば、どのようにして生きながらえることができるだろうか。

一刻も早く、ツナを止めなければ。
ウライラからツナの魂を奪い返さなくては。

大空は

ありのままでこそ

大空なのだ。

「…ツナ」

優しく徳松はツナの名を呼ぶ。
黒の瞳を見つめ、話しかける。

「ツナは、ありのままでいてこそツナなんだ。戻ってきてよ。…ツナがいなくなってしまったら、オレはどうすればいいんだ?」

だんだんと徳松の声が震えてくる。
しまいには、そのオレンジの瞳から涙が一滴流れた。

「…ツナがいないと……哀しいよ、辛いよ、苦しいよ!」

「…徳松……」

トンノは胸に込み上げる哀しさという感情をぐっとこらえ、徳松のあとにつづく。

「ツナ!…僕は、ツナがいたからこうして今、生きているんだ。……ツナがいなくなったら……僕は、僕らはどうすればいいの?」

すると、自然とトンノの目からも熱いなにかが流れ落ちた。
それは金色の羽を伝って地面へと吸い込まれる。
涙の通った跡はキラキラと輝いていた。

「…っそうですよ十代目!オレは…オレのボスは十代目だけなんスよ!あなただけについていくと決めたんです!」

「なぁ、ツナ。…オレの親友はツナなんだぜ?親友がいなくなっちまったら…哀しいに決まってんじゃねーか!早く戻ってこいよ!」

「沢田ー!極限に戻ってこい!!
共にボクシングをしようではないか!!」

「……小動物が…らしくないよ。」

「ツナー!ランボさんと遊ぶんだもんね!!」

「あなたの身体は僕が乗っ取る予定なんですよ。早く戻りなさい」

守護者たちの言うことはばらばらだった。
一人一人が言っていることが異なっている。
だがひとつだけ共通するものは。

“君が、必要なんだ。”

「…綱吉くん、僕まだ…君に言いたいことが沢山あるんだよ」

「ニコールの言うとおりよ！あたしだって、まだ綱吉くんとお話したい！」

「「僕ら、綱吉くんに沢山沢山、お礼を言いたいんだよ！」」

「アロッチとスコッチが世話になったしなぁ、ゆっくりおめぇと話してみてぇんだがよ」

「…綱吉くん。私たちを救ってくれたあなたに、何もしてあげられないなんて…私はいやですよ」

自然と、ニコールたちもツナに話しかけていた。

君に、感謝してるんだ。本物を、見つけられる気がするんだ。

僕らは、知ってしまったんだよ。
優しく包み込んでくれる、大空を僕らは、
知ってしまったんだよ。

“君に、ありがとうを言いたいんだ。”

「綱吉様、私はあなたがボンゴレ十代目に最も相応しい方と思っています。
このロンジ、いつかはあなたの側で働きたいと…思うのですよ。」

「「ツナ、ツナは我らの封印を唯一解くことができる人間なんです。
ツナが消えてしまっては、我らは…光を、なくしてしまう、希望を失ってしまうんです。」」

「おい、坊主！オレはおめぇのおかげで今生きてんだぜ？オレは、

おめぇに従うって決めたんだぞ！」

「…綱吉…くん！綱吉くんが…ボスになるの、私…楽しみにしてるんだよ！」

ロンジも、シクロもシスイも、つられてツナに話しかける。
リーダーと結加は傷の痛みに耐えながらも言葉をかけた。

君は、選ばれたんだ。
相応しい者として。

“君は、選ばれし人間なんだ。”

「おい、ツナ。おめぇはここで野垂れ死ぬつもりなのか？
オレが教えてきたのは、そんなんじゃねぇぞ。そんなみじめな生き方をしろだなんて教えたことはねぇ。

オレはおめぇの成長を間近で見てきた。だがおめぇの努力は一番おめぇがわかってるはずだ。
なのに、ここでそれを全部無駄にしちまうのか？おめぇはそんな愚か者だったのか？

違うだろ。
おめぇは愚か者じゃねぇ。馬鹿で、阿呆で、ダメダメなダメツナだが、愚か者じゃねぇ。
……仲間を大切にできる、そんな奴だっただろ。」

リボーンがまっすぐツナの顔を見た。
その黒い瞳に、本物を探す。
オレンジの光を。

今、ここで諦めるのか？
ここですべてを投げ捨てるのか？
君はそんな人間じゃないだろう？

“君は、生きるんだ。”

生きるんだよ。

…あれ、ここはどこだろう。

真っ暗でなにも見えないな……。

前も、こんなことがあった気がするけど…まぁいいや。

ああ、なんか眠いや。
うとうとしてきた。
一眠りしようかな。

“……”

…あれ、なんか聞こえる。誰の声だろう。

いろんな人がしゃべってるな。

“……ナ、……ツナ…”

あ、オレを呼んでる。
でも誰が？

“君が、必要なんだ。”

“君に、ありがとうを言いたいんだ。”

“君は選ばれし人間なんだ。”

みんなの声が聞こえる。

……オレを、呼んでる。

なんでだろう。
起きなきゃいけない気がする。
はやく、みんなのところに行かないと…。

…でも、身体が動かないや。

ああ、寝てしまいそうだ。

“…ツナ、……ダメツナ”

わ、リボーンだ…。
リボーンまで…どうしたんだよ。

“君は、生きるんだ。”

…何を言ってんの？
よくわからないや。

ほんとに……寝そう…。

“……綱吉くん”

…聞かない声だなあ。
誰だろう。

“早く、起きて。待ってるよ”

待ってるって…みんなが？

…でも、身体が動かないんだ。

“諦めないで。みんなが、君を待ってるんだよ。”

……そうだよね。

諦めちゃだめだよね。

よくわからないけど、みんなが待ってるなら、早く起きなきゃいけないよね。

早く、早くしないと。

みんなが待ってる。

早く、行かなくちゃ……

「…ふ、ははは！何みんなで呼びかけてるの！？無駄だよ！綱吉くんはもう元には戻らないんだよ！」

少しだけ苦しそうに呼吸をするウライラが笑って言う。
リボーンたちを嘲笑うように、醜く。

「さあ、綱吉くん。そんなあまっちょろい炎を止めて、一撃で仕留めてしまいなさい！」

ウライラがリボーンたちを指差しツナに命令すると、ツナは黙って頷いて一旦炎を止める。

そして次は片手ではなく両手をリボーンたちに向けた。

…もう、だめなのか。
誰もが一瞬諦めて死を覚悟した。

「……っ…」

「…綱吉くん？」

ツナが突然頭を抱えてうつむいた。
思わずウライラはツナに話しかける。

「なにをしてるのですか。さっさとしなさい！」

ウライラに怒鳴られ、ツナは再び掌をリボーンたちに向ける。

だが、その掌から炎が放たれる様子はない。

ツナが、攻撃を躊躇っていたのだ。

（……ダメツナが。さっさと戻ってきやがれ。）

宙に浮かぶツナをリボーンが黙って見つめる。

そして、ふとツナとリボーンの視線がぶつかった。

「……リ、……ボー……ン」

「…なんだ、ツナ。」

かすかにツナがリボーンの名を呼んだ。

小さな声だったが、確かにリボーンには聞こえていた。
そして、もう一度、その名を呼んだ。

「……ツナ。」

パキリ

なにかが壊れた。
小さな音をたてて、静かに。

「…っもういいです！僕が一思いに逝かせてあげましょう！」

とうとう堪忍袋の緒が切れたウライラが怒り口調で言いながら杖をリボーンたちに向ける。

「さようなら！」

そして、最後のあいさつをしてウライラは黒いオーラを放った。

ジュゥゥウウッ

「……！？」

消えた。飲み込まれた。

あの黒いオーラが。

ウライラは目を見開いて驚いている。

なぜなら、ありえないからだ。

ありえないことが、目の前で起こっているからだ。

「……な、ぜ…」

小さく声は震えていた。

揺らめくのは、オレンジの炎。

見つめられるのは、オレンジの瞳。

そこに浮かぶのは、一人の少年。

「…ツナ、おせぇぞ」

リボーンはぽつりと独り言のように呟いた。

「オレの仲間に手出しはさせない。」

凛とした声が、響いた。

現れた。

戻ってきた。

大空が、よみがえった。

大空は

ありのままでこそ

大空なのだ。

標的７１　大空への思い（後書き）

ヽ（・∀・）ノ１０万アクセス越え！

ユニーク数１００００越え！

あああああありがとうございます！

（・∀・　）三（　・∀・）オドオド

今回は一応全員…出したつもりです！

誰か忘れてないか心配…。

皆様に忘れられていたシクロとシスイも出しました！

空気化してる結加もリーダーも出しました！

疲れました（´・ω・、）↑

とうとうツナが復活、リ・ボーン！

ウライラをこらしめろ！っ、Д´）っ・∴∴

でもウライラがかわいそうなのでほどほどに（笑）

読んでくださってありがとうございました！

標的７２“支える”意味

視界が広がった
すべてが輝いて見えた
思わず涙を流しそうになった
でも声は出なかった

この奇跡に、声はいらないと思った
この奇跡を、言葉で表すにはどうすればいい？

ああ、やっぱり

君は、大空なんだ。

誰もがこの事態に驚いていた。
誰も動くことができなかった。
ただ、唖然として目の前の少年を見ているだけだった。

オレンジが、視界を、彩る。

「…ツナ！！」

徳松がツナの元へ飛んでいく。
待ち望んでいたことが、やっと今起きたのだ。

ツナが戻ってきた。

それがどうしようもないほど嬉しくて。

ただ、ただ嬉しくて。

「ツナ！」

「…徳松」

優しい笑顔でツナが徳松の名を呼んだ。

その声を聞いた瞬間、徳松の心の黒いものがすぐに消えてしまった。

不安、恐怖、さまざまな“負”が消滅した。

そして、ひどく安堵感を覚えた。

「……ツナ、ごめん。オレはツナの能力なのに…ツナを守れなかった…」

「…徳松……」

ツナは首を横に振った。

目をふせて、違うんだよ、と。

「徳松は何も悪くない。オレが…多分油断してたから…。

痛みに気をとられてたから、オレが悪いんだ。」

「…でも、前オレは言った。」

伏し目がちに徳松が小さな声で言う。

ツナの痛みを軽くすることができるように自分が頑張ると。呪いの痛みを感じさせないように自分がツナを支えると。

そう言った。

なのに。

「…なのに、オレは…ツナを……あんな目にあわせてしまったんだ……」

悔しさをどこにぶつけていいのかわからず、徳松はただその小さな拳を握りしめているだけだった。

悔しい。

悔しい悔しい悔しい。

自分が、やるせない。

「…徳松。今、こうしてオレはここにいる。ちゃんと戻ってこれた。

…だから、いいんだ。

……ありがとう、徳松。」

ツナが小さな徳松の頭を撫でる。
栗色の髪の毛がふわふわと揺れる。

（…ああ。）

徳松はかたまった。
動くことを忘れてしまったかのように。

ただ、目の前の大空だけが見えた。

なんて、なんて人なんだろう。

なんて、なんて少年なんだろう。

なんて、なんて。

（……大空だ。）

己の能力をも包み込んでしまうその包容力。
その温かなぬくもりに誰もが飲み込まれる。

それが、大空。

それが、沢田綱吉。

「……ツナが、いてくれてよかった」

心からそう思った。
自然とその言葉が出てきた。

徳松はそっと目を閉じた。

「……っ綱吉…くん…」

その場の空気が一気にかわった。
現実へと引き戻されたような感覚。

ツナはその声の主のいるところを見た。

「…なぜ……戻ってこれたのですか？」

ウライラは疑問を投げかけた。

不思議でならなかったのだ。

ツナの魂を奪って言霊を完了させたはずなのに。
言霊を完了させればその者は一生自分の言いなりなのに。
言霊はかけた本人以外は解くことができないはずなのに。

なぜ、ツナは魂を取り戻したのか。
なぜ、ツナは言霊を解除することができたのか。

「なぜ、ですか？」

「……。」

ウライラが問いかけると、ツナは黙りこんだ。

その問いは、リボーンたちも気になっていた。

だから全員がその問いの答えを待った。

「……聞こえたんだ」

小さな声が沈黙を破った。

「…聞こえたって、なにがだ？」

「…声。」

ツナの意外な答えに全員は絶句した。
だがリボーン、トンノ、徳松だけはその答えに心当たりがあった。

リボーンたちはツナに呼びかけたのだ。
ツナの意識の中で、確かに。

やはり、それが伝わっていたのだろうか。
届いていたのだろうか。

「…最初はリボーンとトンノ、徳松の声が聞こえたんだ。オレはそれに応えようとしたんだけど、できなくて。
…そうしたら、」

ツナの視線がウライラからリボーンたちに向けられる。

「…みんなの声も聞こえたんだ。ニコールたちの声も。」

「…僕たちのも?」

ツナは静かに頷いた。

リボーン、トンノ、徳松ははっとした。

やっと、ひとつの謎が解けた。
先程から、ひそかに心に引っ掛かっていた謎。
“支える”意味を今理解した。

ツナは戻ろうと必死だった。
でも無理だった。
戻れなかった。
一人では。
一人、では。

しかし、リボーンたちの声が聞こえた瞬間、ツナは力がみなぎるような、そんな感覚がかすかにした。
そして今、ここにいる。

人は支えられて生きている。
支えなしではなにもできないのだ。
それに気付かない人間は多い。
自分は一人で生きていると思い込んでいる者もいる。

だから、“支え”とは、かけがえのないものであり、儚いものなのだ。

「でも」と、ツナが思考を遮る。

「…でも、一人だけ…知らない声が聞こえた。…低くて優しい声だった。」

その言葉にリボーンは反応した。
低くて、優しい声。
聞こえたのはツナの意識の中であるとすれば。

間違いなく、リボーンたち三人も聞いたあの声だろう。

「…誰の声だ？」

しかしリボーンたちには聞き覚えのない声だ。
ツナも知らないと言う。

リボーンがその疑問を追究しようとした時、ザワリと嫌な気配が身体を震わせた。

ザワリ　ザワリ　ザワリ　ザワリ

にじり寄るような、黒い気配。
その気配を醸し出していたのは。

「…そうか、そこまで来てしまっているのか。もう、時間がないと言うことですね。」

ぶつぶつと独り言を言うのは黒髪の長身の男。
その男がツナたちにザワリザワリと嫌な気配を感じさせていた。

「早くしなければ、いけない。」

ヒュッ、と空気が揺れた。
目の前からウライラが消えた。

「ツナ、後ろだ！」

「っ！」

とっさにツナは後ろを振り返り、攻撃を受け止めた。
グローブに長い杖がギリギリと押し当てられている。

「時間がないんだ。綱吉くん、観念しなさい」

「無理だ。お前が諦めろ。」

杖を思いきり突き飛ばしてツナは後退する。
攻撃を受け止めた左手がヒリヒリする。
ツナは腕を振ってその痛みを紛らわせた。

「綱吉くんの力さえ手に入れれば、ボンゴレリングなどたやすく手に入る」

「そんなことさせない」

黒とオレンジの瞳がぶつかり合う。

殺気があたりに漂う。

リボーンたちはそれを見ていることしかできなかった。

ズキリ

かすかな痛みが動いた。

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

標的７２　“支える”意味（後書き）

どうでしたでしょうか。
“支える”の意味…お分かりいただけたでしょうか。
…説明が下手なので伝わったか不安です！！
伝わることを祈りましょう↑

さて、これからの流れをどう上手く文にするか。
…難題です！（´・ω・`）

がんばります！

読んでくださってありがとうございました！

標的73　強化オペレーション

Hurry up.
Before a dream is over in a dream.
Let's build it together.
The splendid world that I wish.

急ぎなさい。
夢が夢で終わってしまう前に。
共に築き上げよう。
僕の望む見事な世界を。

ザワリ　ザワリ　ザワリ　ザワリ　ザワリ
ずっと肌を突き刺すような痛い気配。

ボウ　ボウ　ボウ　ボウ　ボウ
それに対抗するのはオレンジの燃え盛る炎。

黒とオレンジが睨み合う。
静かな戦い。漂う殺気。
見ている誰もがごくりと喉を鳴らす。

「覚悟しなさい」

「お前を倒す覚悟はすでに出来てる」

普段よりも少し低いツナの声が響く。
ウライラの表情がぐにゃりと歪んだ。

その表情を見て、ツナは不快感を覚えた。
欲望が滲む、黒く汚れた表情だったからだ。

「…ツナ。オレがなるべく痛みをカバーする。でも傷がひどいから完全に痛みは消せないかも知れない。

……いける？」

「……ああ、頼む。」

了解、と言うと徳松の姿がさらりと消えた。
意識の中に戻ったのだ。

外界よりも意識の中での方が能力としての力を発揮できるらしい。
徳松が消えた直後、意識がふわりとあたたかくなった。
そして少し、腹部の痛みが引いた。

（……ありがとう、徳松）

意識の中にいる徳松に礼を言った。
すると、額の炎が応えるようにニ、三度瞬いた。
徳松の仕業だ。

能力として精一杯に働いているのだろう。
言葉で答えることができないまでに。

それほど、傷の痛みをカバーすることに力を要しているようだ。

ツナは拳に力を込め、目の前の敵を睨む。

ズキリ　ズキリ　ズキリ

全身を痛みが駆け抜ける。
腹部の痛みか、呪いの痛みか。
すでにわからなくなっていた。

徳松が頑張っている。
意識の中で。
戦闘能力を上げながらも、痛みをカバーするように。

楽にしてあげたい、徳松を。

もはや徳松は兄弟のようなものだった。
能力という名の命を持って生まれた家族のようなものだった。

それに。

（…リボーンたちを、助けたい）

怪我をしている獄寺たちや、疲労でもう戦うことができない骸たちを助けたい。

ボスに裏切られたニコールたちもまた然り。

ただ単純に、守りたかった。

「…なんですか、その目は」

ツナの目を見てウライラが鼻で笑う。

（……嘘偽りのない、まっすぐな目だ…）

そんな目、僕には必要ない。

僕は、欲しいものだけが欲しい。

いらないものは捨てるか消すだけ。

僕は君の能力が欲しい。

でも君のその目はいらない。

ならば、

欲望に染めるまでだ。

「ひざまづかせてあげますよ！」

ビュンッッ

杖が空気を切り裂いた。
そこから黒い世界が広がる。
それはあまりにも奇妙で、足がすくんでしまうほどの黒だった。

「…見ているだけで吐き気がしますね」

「……あれが、ウライラ様の…」

「…心の闇、なんだ……」

思わずニコールがミノイの袖を掴む。
それほど、その黒は恐ろしかった。

「綱吉くん、気をつけてください！その黒はウライラ様の心の闇、触れればどうなるかわかりません！」

「…なぜだ？」

「それはアロッチとスコッチのあのオーラと同じようなもの。心の闇とは恐怖や不安、憎しみなどが凝縮されているのです。それに触れたりしたら……っ！？」

バシュッ

ミノイは慌てて地面を転がった。
今までミノイのいた場所には、黒く焦げた跡。

「ミノイくん、親切に説明なんかしなくていいんだよ。
もう僕と君は敵同士。無駄なことをすれば消しちゃうよ。

…いずれ消えるんだけどもね。」

楽しそうにウライラは笑う。
ミノイは背中に悪寒が走るのを感じた。

これが、ウライラ。
残酷で悍ましい、すべてが黒。
そして、今まで自分たちのボスだった人間。

仮にも、命を救ってくれた恩人。

「君たちに強化オペレーションを実行させたのは無駄だった、とい

うことですね」

「強化…オペレーション？」

聞いたことのない言葉にツナは首をかしげる。
だがミノイたちは顔を歪ませて黙っていた。

「強化オペレーションというのは、僕が考えたものなんです。
力を引き出すために用いるんですよ。
でもそれはとても過酷なんです。」

黒いオーラを纏いながらウライラは説明しはじめた。

強化オペレーションには、ふたつの段階がある。

まず、体力面を強くする。
その方法は主に実戦スタイルだ。
それぞれの武器や技を用いて対戦する。
だが対戦するのは人間ではなく猛獣だった。

勝てばそのままで終われるが、負ければ猛獣に襲われる。
死と隣り合わせの練習だった。

次に精神面を強くする。

精神を痛め付けて追い詰め、それに耐えられるような精神を作り上げなければならなかった。

たとえば、彼らの辛い過去を思い出させ、苦しめさせる。
だがあまりのショックに全員が終えたあとには忘れてしまっていた。
辛いものは消してしまえばいいと頭が勝手に認識してしまっていたのだ。

さまざまな苦難を乗り越え、体力と精神が強化されれば終了となる。

すべて、ウライラが考えたことだ。

「完了するのが遅くて失敗かと思いましたけどね。何せあれはまだ完全なオペレーションではなかったのですから。」

「……どういう意味だ？」

「実は、この強化オペレーションは未完成だったんです。
試したのは動物だけ、人間になど試したことはなかったんですよ。」

それを聞いたミノイたちは目を見開いた。
そして言葉を失った。
身体がカタカタと震え出した。

「…まさかお前……」

「そう。彼らにはモルモットになってもらったんです。おかげでいい実験結果がとれました。感謝しますよ。」

「そんな…ウライラ様！」

ミノイたちは思考を停止させた。

まさか、自分たちが実験のモルモットだったとは思っていなかったのだ。

確かにあの強化オペレーションは過酷だった。
マリネは重傷を負ったのだから。

それは当たり前だと思った。
強くなるためだから。

しかし、違ったのだ。
まだ未完成だったからだ。
人間には試したことがなかったからだ。

もしかしたら、誰かが死んでいたかも知れないのだ。
なにが怒っても不思議ではなかったのだ。

「お前…仲間になんてことを……」

「仲間？確かにあれは仲間と言ったのだろうけど、僕は少なくとも人形、としか思ってなかったよ。
僕が命を救ってあげたんだから、当たり前でしょ？」

平然と口に出すウライラに、全員が呆気にとられた。
なんて男だろう。

ミノイたちはショックで何も言えなかった。

「……ふざけんな。」

拳を震わせてツナが言う。

「ふざけんな!!仲間を人形扱いして!命の恩人だからって、人を好き勝手にしていいってもんじゃない!!
そもそも人を人形扱いすることが間違ってる!」

「なに言ってるんですか。みんな僕のために働く人形なんだよ。」

「違う!お前のすべてが違う!
お前はボスだろ、ボスなら部下の心配は絶対するだろ!仲間を思いやるだろ!それが当たり前じゃないのか!

…それもできないお前は、ボスでもなんでもない。

……自己中心的なただの人間だ!」

ウライラの笑顔がぴくりと引き攣る。
オーラがぐにゃりと歪む。

ツナの瞳が、ウライラの黒を貫く。

（……まったく）

小さな嘲笑い。
見下すような目。

ウライラは目の前の少年を見た。

（……ほんとうに、）

消してしまおうか、その瞳の光を。

標的７３　強化オペレーション（後書き）

やっと強化オペレーションの内容が出せました！

…わかりにくいですね、ごめんなさいｏｒｚ

とにかくすごいキツイんです。

猛獣とミノイの召喚する猛獣が戦ったらどうなるんでしょう？

…想像におまかせします（＾ｏ＾）／↑逃げた

さて、次回も秘密を明かせたらなあ…と思います。

確かまだ明かしてなかったはず…です。

ぐだぐだでごめんなさい！

読んでくださってありがとうございました！

標的７４　闇の企み（前書き）

あ…タイトル…あんま関係ない気がします（笑）
深く捉えずに…！

標的７４　闇の企み

世の中にはさまざまなものが溢れてる。
人間や、動物や、機械、ほかにもいろいろ。

それらがすべて静止することはない。
必ずなにかが動くんだ。

なぜだと思う？

……命が、あるからさ。

命は止まらない。
もしも止まるときがあるのならば、それは死を意味するのさ。

命があるかぎり、なにかが生まれる。

いつまでも、いつまでも。

そんな単調な世界、いやだと思わないかい？
生まれて、消えて、生まれて、消えて。
そんなの、すぐに飽きてしまうだろう？

考えたのさ。
どうすればそんなくだらない世界を終わらせることができるのかって。

そしてある日、思いついたんだ。

あまりにも簡単なことだったから、おかしくなってしまったよ。

馬鹿らしい世界を終わらせる方法。
僕の望む新たな素晴らしい世界を作り出す方法。

すべてを
闇で
消し去ってしまえばいいのさ。

「……ふっ」

歪んだ表情、歪んだ声、歪んだ思考回路、

歪んだ闇。

すべてが歪んで見えた。

「僕を自己中心的な人間と呼ぶなんて……」

クスクスと響くのはウライラの笑う音。

だが笑っているのは声だけだった。

「君がはじめてですよ、綱吉くん……」

その顔は憎しみが滲んでいた。

動く力を奪われてしまうほどの憎悪が。

「……ただじゃ済みませんからね。」

ぴたりと笑いが止まった。

すべてが止まったかのようだった。

ざわざわと闇が揺れる。

「……大空は黒くていいんだ。」

ビュンッッ

ウライラが弧を描くように杖をひと振りすると、そこから再び闇が広がった。

じわり　じわり　じわり　じわり

それは森を、空を侵食する。
ゆっくりと、だが衰えを知らず。

「…これじゃオレたちも闇に呑まれちまうぞ」

リボーンが小さく舌打ちをした。
どうすればいいのだ、と先程から考えてはいるのだが、まったく解決策が浮かばない。
簡単に太刀打ちできる相手ではないとわかっているからだ。

「……できるだけ、みんな僕に寄ってくれない？」

不意に、トンノが全員に話しかける。

「…なんでだ、トンノ」

「いいから、早く！」

訳も分からぬまま、リボーンたちはトンノの傍に寄った。
負傷している獄寺たちはロンジやミノイたちが運んだ。
もうかつては敵だったということも忘れていた。

だが、全員の息があがっている。
少し動いただけでも疲労をこんなにも感じる。
体力は限界に近かった。

「…集まったぞ、トンノ」

「わかった……」

そう一言告げると、トンノはバサリと翼を広げた。

ボゥッッ

トンノの身体から炎が放たれる。
それは広げられた翼を伝い、リボーンたちを包み込むように炎の壁となった。

「…おい、トンノ。おめぇ大丈夫なのか」

「……僕なんかより、…ツナの方が辛いんだ…これくらい、どうってことないよ」

トンノは目を細めた。

この鳥は何を思い、何を願うのか。

金色の羽をきらめかせて。

「…おめぇも伊達に大空じゃねぇってことか」

「…なにそれ、どういうこと」

「気にすんな、こっちの話だ」

かすかに笑ってリボーンはトンノから視線をそらした。

（…ツナといい、トンノといい…似てるもんだな）

すぐに他人を守ろうとする。

単純な感情で守ろうとする。

他人を犠牲にすることができない。

だから自分を傷つける。

それでも、笑顔は忘れない。
人を思いやる気持ちは失わない。

（…ツナの炎を吸ったからこうなったんだろうな）

おそらく、ツナの性格や思考がうつったのだろう。
その瞳も雰囲気もツナそっくりだ。

「……辛くなったら、言うんだぞ」

「うん、わかった」

優しい口調でトンノは答えた。

リボーンはひとつ、小さくため息をつく。

（どうせ、辛いなんて言わねぇんだろ）

いろんなものを背負うんだ。
大空ってのは。

ひとりで。

標的７４　闇の企み（後書き）

秘密を明かすのやめました。
もう少し時間を置いて明かそうかなと。

今回は戦ってません。
ウライラの一人芝居みたいなものでした。
哀れ、ウライラ（´・ω・`）すまん

重要な話はいつ書けるのか…！

読んでくださってありがとうございました！

標的７５　信念と仲間

君が頑張ってるから
僕も頑張らなきゃって思うんだ

君が強いから
僕も強くならなきゃって思うんだ

でもね、

頑張りすぎても
強くなりすぎても

優しさを忘れてしまったら、
意味がないんだよ。

君には言う必要はないんだろうけどね。

揺らめく炎の壁の内側から全員がツナを見守る。
バチンバチンとウライラのオーラをオレンジの炎が弾く。

「…あなた、そんな力が残ってたのですか?」

炎を一瞥して骸がトンノに尋ねた。
トンノは少し間を置いて答える。

「……火事場の馬鹿力かもね」

「なに、これは火事なのか!?」

「うるせぇ黙ってろ芝生!」

了平の勘違いに獄寺が声を荒げた。
だが傷に響いたのか、うめき声を上げてうなだれてしまった。

「…綱吉くん、大丈夫なのかな」

「ツナは…強いのな。…だから大丈夫だって!」

心配するニコールに山本が苦痛に顔を歪ませながらも答えた。

「ツナを信じろニコール。あいつなら…絶対大丈夫だ。」

「リボーンの言うとおりだよ。ツナを信じて。

…僕らは今ツナを信じることしか出来ないんだから。」

リボーンとトンノに真剣な眼差しで見られたニコールはしばらく固まってしまった。

（…二人の目……なんて、）

なんて強いのだろう。

目力？

……違う。

信念だ。

「……綱吉くんなら、大丈夫…だよね」

小さく微笑んでニコールは頭上の少年を見つめた。

「…君を、信じてるよ」

その眼差しから、不安なものは消え去っていた。

「おや、君のペットが炎でなにかしてますよ」

「トンノはペットじゃない。仲間だ」

「はっ、冗談を。仲間だなんて…気持ち悪い」

空中で二人の人間が対立する。

オレンジと黒。

炎と闇。

相反する二人だ。

「仲間なんて、重苦しいと思わない？」

「思わない。」

「綱吉くんはまだ中学生の子供だからそんなことが言えるんだよ。仲間なんて、邪魔なだけだ。足手まといなだけだ。そんな繋がりがあるだけで、どれだけのことが限られるか分かる？

自分以外のものも守らなきゃいけないだなんて、力を無駄にしてしまうだけじゃない？」

すらすらと巧みに言葉を並べるウライラを、ツナはただじっと睨んでいる。

それに構わずウライラは話を続けた。

「結局、みんな自分が一番大切なんだよ。
自分か一番かわいいんだよ。

窮地に追いやられたとき、人はどうすると思う？
…自分を優先に助けようとするんだ。
誰よりも先に。仲間を裏切って。
そして修羅場が生まれる。

……ね、仲間なんていらないでしょ？」

同意を求めるようにウライラがツナを見つめた。

だがツナは冷静な目をウライラに向ける。

オレンジの、まっすぐな意志を持つ目。

その目は否定していた。

「お前の考えにオレは賛同しない。
…確かに、人はすぐ裏切る。簡単に大切な人を見捨てるときもある。
でもそういう人間もいれば、そうでもない人間もいる。

仲間を思い、仲間を守ろうとする。
自分のことよりも仲間のことを最優先する。
そういう人だっているんだ。

……少なくとも、オレの仲間はそうだ。」

獄寺だって、山本だって、了平だって。
小さい子供のランボだって。
あの骸だって。
なんだかんだ言って雲雀だって。

トンノも結加もロンジも。

リボーンも。

他人を思いやる気持ちを持っている。
それがどんな形であっても。

「人は己が一番大切だと言うが、確かにそうかも知れない。

でもそれは…
仲間を大切にできる自分が一番大切なんだという意味じゃないのか？」

「きれいごとを！」

ウライラが杖を振りかざしてツナに襲い掛かる。
それをグローブで受け止めてツナはウライラに言い放った。

「お前はなにもわかってない！
自分の考えだけが正しいと思ってるだけだ！」

「当たり前じゃないですか！
自分だけしか信じれないんですよ、この世の中は！
十四歳のお子様が偉そうに！」

「お前は全てが間違っている！
他人の考えを信じようともしない、聞く耳を持たない！
だからオレはお前を自己中心的な人間だと言ったんだ！」

その瞬間、ぴきりとなにかが割れる音がした。

ウライラの表情が固まった。

空気が凍った。

しかしツナは怯まずにウライラを睨みつづける。

「……ふ、まだ言いますかその言葉」

ウライラの口許が吊り上がる。

不気味なほどに目が細められる。

カタカタとウライラの持つ杖が震えはじめた。

カタカタとウライラの肩が震えはじめた。

「僕を本気で怒らせてしまいましたね、綱吉くん！」

黒の瞳が怒りを帯びて見開かれた。

殺気がビリビリと肌に伝わる。

先程よりも痛いほどに。

「その発言をしたことを後悔するがいい！！」

ピシャァァアンッ

杖の先端から黒い雷が走った。
それはツナに一直線に向かってくる。

ボウッッ

「…くっ」

ツナはとっさに炎を放出して雷を受け止めたが、その凄まじい威力におされる。
手が、腕がビリビリと痺れる。
衝撃が全身を駆け巡る。

「降参しますか？」

「…っしない！」

「強がるのも、今のうちですよ！」

パァァアンッ

黒い雷が弾けた。
その風圧にツナは炎を噴射して耐える。
それをウライラは楽しそうに見ていた。

「…君が僕に従うまで時間の問題だ」

ゆっくり　ゆっくりと
絶望を見せてあげましょう。

ゆっくり　ゆっくりと
闇を見せてあげましょう。

ゆっくり　ゆっくりと。

大空は黒であるべきだ。

そう思いませんか？

標的７５　信念と仲間（後書き）

その先には。１１万アクセス突破しました、（・∀・）ノ

毎度ありがとうございます！

しかも週間アクセス数、図々しくもＲＥＢＯＲＮの小説の中で一位をいただいてます。

…図々しくてごめんなさい（´・ω・、）↑

こんなダメダメ小説でもこんなに見てくださってるとは、嬉しい限りです。

さて、ウライラさんが最近狂ってきました。

私の手にはおえません↑

彼を止められるのはツナしかいないんですから！（これが言いたかっただけ）

今回はちょっと空気化しつつある人たちの一部を出しました。

やっぱ全員は出せませんでしたけど…（´・ω・、）

やはり結加ちゃんは重傷にするべきじゃなかった！

唯一喋れる女の子がマリネだけ！

しかもそのマリネは今回喋ってない！

…あーあ。↑

ツナに輝いてもらうしかない（笑）

ぐだぐだ文章でごめんなさい！

読んでくださってありがとうございました！

標的７６　最終段階突入

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

ごめんなさい　ごめんなさい
僕が弱かったから
こうなってしまった

もう取り返しはつかない？

いや　取り返しはつく

君なら止められる
君なら出来る

だから　お願いだ

闇を、大空で、包み込んで。

「無駄な抵抗、だとは思わないのですか？」

「…思わない。」

「はっ、強がりを。」

攻撃をかわすツナをウライラは鼻で笑う。

「本当は怖いのでしょう？いいんですよ、怖くても。
君はまだ子供なんだから、泣いたっていい。
逃げ出したっていいんですよ？
仲間を捨ててね。」

「オレはそんなことしない。オレは仲間を守り通すだけだ。」

「馬鹿なことを言うんですね。
そんなこと無理に決まっているじゃないか。
仲間を守り通すには、僕を倒さなきゃいけないんだよ？

君に仲間を守り通すことは出来ないんだ、絶対に。

……現実を見な！！」

バシュンッ、とウライラのオーラがツナを弾いた。
ツナはオーラが肌に触れる寸前で炎を噴射させてそれを避けた。

「君が僕に平伏すのも時間の問題。
せいぜい足掻くがいい！」

「お前になんか平伏さない！」

負けてたまるかとツナもウライラに反撃をする。
グローブに剛の炎を燈してウライラに殴りかかった。

「スピードが遅いですよ！」
ウライラはツナの拳をするりとかわした。
にやりと笑ってツナの表情を伺おうとすると、見えたのは炎を燈した拳だった。

バキッッ！！

ツナの拳をもろに顔面に喰らったウライラは後方へ飛ばされた。
頬にとてつもない痛みが走る。

身体中に衝撃が伝わる。
熱く、やけに輝かしい。

（…っ綱吉くんの炎が身体にまわったか……っ）

身体を貫くのはオレンジの炎。
それはウライラにとっては気色の悪い、耐え難いものだった。

「…フェイク…だったとは……。ずる賢い子供ですね…綱吉くん」

「余裕をかましてるお前の不注意だろ。」

頬を手でおさえてウライラはツナを睨むが、ツナは構わず攻撃を仕掛ける。

だが先程の二の舞は踏むまいとウライラはツナの拳を掴んだ。

「っ！」

「同じ罠には引っ掛かるほど僕は馬鹿じゃないんですよ！」

ウライラはツナの拳を掴む手に力を込めた。
その掌からは黒い煙がジュゥゥゥウ、と音を立てて揺れる。

「…っっ！！」

拳に痛みが走る。
ツナは腕を引こうとするが、ウライラは拳を掴む手の力を緩めない。
やがて、痛みは腕にまで浸透してきた。

ズキンッ　ズキンッ　ズキンッ

不規則に走る衝撃。
それは以前感じたことのある衝撃だった。

あの悍ましい、ツナの命を蝕む黒。
あの恐ろしい、ツナの肌を這う鎖。

「…まさか、」

「そうだよ。その痛みは綱吉くんのよく知る…」

ぞわりと背筋に悪寒が走る。
ズキリと全身に痛みが染みる。

「鎖の呪縛さ。」

ズキンッ！！

脳天を貫く痛みがツナを襲う。
ツナは炎を噴射させてウライラの手から逃れた。

「どうですか？痛いでしょう、直に呪いを受けるのは」

苦痛に顔を歪ませるツナにウライラは話しかける。
そんなウライラをツナは荒い息継ぎを繰り返しながら睨みつけた。

ぽた、と一滴の汗が伝う。
呪いは地味な痛みを帯びる。

（…っ鎖が……伸びた……）

ツナの左腕を覆う鎖。

それは着々と左手首の鎖に近づいていた。

鎖が繋がったとき、ツナは、

大空は、

消える。

「……ウライラめ」

「綱…吉くん……」

リボーンは舌打ちをして低い声でウライラの名を呼ぶ。

全員は受け止め難い現実を見せられた。

鎖が繋がるときに、待ち受けているものを思い知らされた。

「さあ、最終段階だ。」

小さく笑ってウライラはつぶやいた。

「大空が消える瞬間を、とくとご覧あれ。」

標的７６　最終段階突入（後書き）

少しだけバトルしてくれました！
苦手ですなあ（´・ω・、）バトル…

ウライラさんの呪いも最終段階へ突入したことですし、物語のほうも最終段階へ……

……いきませんヽ（・∀・）ノ↑

キリはつけます。
ウライラをこらしめないと。
最近狂っちゃってるので！↑

挿絵をしている方いますよね。
すごいですよね！

わたしもやってみようと…思ったのですが…
…どの場面を書けばいいのかわからなくて（笑）

やったほうが楽しいですかね？
しばらく悩んでみます。

次回はウライラがボンゴレにはいります。

……嘘です（オイコラこの野郎

読んでくださってありがとうございました！

標的77　欲望の核

増えゆくは闇
消えゆくは大空

それらが対立したとき、
人々は絶望を味わう。

勝るのは闇か大空か。

消えゆく大空に
奇跡は起こるのだろうか。

はたして。

腕を這う不気味な痣。

それから発せられる痛みはツナの体力を少しずつ奪っていく。

少しずつ、少しずつ。

ツナの命を擦り減らしていく。

「痛い？痛いでしょ？怖いでしょ？
それでも、降参はしないんですか？」

「……するわけ、ない…だろ。」

「その強情っ張り、やめたほうがいいですよ。」

わざとらしく肩をすくめながらウライラはため息をつく。

「まあ、君に死なれては僕も困るんですけどね。
僕の計画が台なしになってしまう。」

「…計画って、なんだ。」

「あれ、言ってなかったかな？」

ウライラはきょとんとした表情をした。
だがその表情には欲望が滲んでいる。
力を欲する、黒い黒い欲望。

「僕は世界を変えようと思ったんだよ」

「世…界……？」

その言葉にツナは眉をひそめる。

「そう、ほら、この世界って単調すぎてつまらないだろ？
生まれたり、消えたり、それを繰り返すだけじゃないか。
そんな変化のない流れ、なんとも感じないでしょ。
だから、そんな世界を変えてしまおうと思ったんだ」

当たり前とでも言うかのようなウライラを、ツナは呪いの痛みに耐えながら黙って見ていた。
ウライラは続ける。

「僕みたいなすごい力を持った人間ってさ、なんでもできるわけ。だからこの世界にありふれてる日常生活って退屈で仕方ないんだよ。なんの変化もない人生。ただ死んでいくだけ。

それがあまりにもつまらないから、僕が世界を変えてあげようと思ったのさ。

納得できましたか？」

「するわけ、ないだろ！」

「ツナの言うとおりだ。それが答えとして成り立ってると思ってんのか。」

ウライラの発言に反抗するツナに加え、リボーンも納得できないと歯向かう。

そんな二人をウライラは冷めた目で見ていた。

「聞き分けの悪い人達ですね。」

「第一、世界を手に入れてぇんなら、ボンゴレリングとマーレリング、それにアルコバレーノのおしゃぶりで成り立つトゥリニセッテを集めればいいじゃねぇか。」

リボーンの言うとおりだ、とツナたちは思った。

以前、世界を我が物にしようと企んでいた白蘭は、ボンゴレリング・マーレリング・アルコバレーノのおしゃぶりの全て、トゥリニセッテを集めていた。

トゥリニセッテは世界の礎だと言うのだから、ボンゴレリングとツナの力だけを欲するのはおかしいのだ。

だが、ウライラはおかしそうに笑いはじめた。

「ははははっ！僕は別に世界が欲しいわけじゃない。まあ、その三つが揃えば強大な力を手に入れることが出来るんだろうけど、僕の計画には必要ない。

僕は、地球が欲しいわけじゃない。」

「どういう意味だ？」

ウライラの意味深な言葉に全員が首を傾げる。

世界を欲しているわけではない、地球を欲しているわけではない。
そうとなると、考えられることは。

「僕は宇宙が欲しいんだ。」

「…宇宙、だと?」

まさかの答えにツナたちは驚きを隠せないでいた。
宇宙という計り知れない規模のものを欲しているとは、どういう神経をしているのだろうと思ってしまった。

「だって、地球だけでは僕の力を使うのはもったいないだろ?
宇宙でこそ僕の力を使うべきだ。」

「…宇宙を手に入れて…どうするんだ?」

「馬鹿だな綱吉くん。
自分の思い通りの世界をつくるに決まってるじゃないか。

万物の始まりは宇宙。
宇宙からすべてが始まった。

…でも、宇宙を手に入れるには、必要なものがあったんだ。」

限界を知らない宇宙。
今も広がり続ける宇宙。
謎に包まれている宇宙。

ほら、宇宙って真っ暗だろう？

僕にぴったりだろう？

でも、それを手に入れるには……

「綱吉くん、君が要となるんだ」

標的77　欲望の核（後書き）

ウライラの欲しがっているもの、宇宙なんですよ。
馬鹿だなあ（笑）

規模がでかい。
馬鹿だなあ（笑）

わたしはウライラを馬鹿にしたかっただけなんでしょうか（´・ω・`）

宇宙を欲しがる馬鹿なウライラがかわいくて仕方がないです↑

今回は一段とつまらないお話でした。
ごめんなさい！

次回から…なにかが動きはじめるはず…！

今週は忙しすぎました。
ご了承ください（´・ω・`）

読んでくださってありがとうございました！

標的78　熟知する闇

「宇宙だなんて、随分スケールの馬鹿でかい計画だな」

「褒め言葉ですか？リボーンくん。
ありがとうございます」

「褒めてねぇ、罵ってんだ馬鹿野郎」

わざとウライラに聞こえるようにリボーンが舌打ちをする。
どうもウライラのペースにはいらいらしてたまらない。
喋り方も敬語を使うのか使わないのかはっきりしてほしい。
リボーンはウライラのすべてが気に入らなかった。

「君は黙ってて。今からは僕の革命がはじまるんだから」

「革命、だと？」

そうだよ、とウライラは満面の笑みをツナに向ける。

「そもそも“アッジョルナーレ”って言うのは、“更新する、改定する”っていう意味なんだ。イタリア人のリボーンくんなら分かると思ったんだけど…わからなかったかな？」

「おめぇのくだらねぇ組織に興味がねぇだけだ」

ふん、と鼻を鳴らしてリボーンが踏ん反り返るように言った。
いらいらを増すリボーンに対し、ウライラはとても楽しそうである。
それがまたリボーンのいらいらを増させるのだが。

「こんな世界をつくった神様なんて、いらないだろ？
だから僕が完全に葬って、世界を、…宇宙を変えてあげようと思いまして」

「「…っもしかして、スペランツァのこと！？」」

シクロとシスイが目を見開いて問うと、ウライラは大きく頷いた。

「その人、今は何処かで眠っているんでしょう？
スペランツァの居場所の手がかりを掴んでいるのが、君たちｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）。

そして、それらの鍵を握っているのが、綱吉くん。

ちなみに、スペランツァのいるところに綱吉くんの能力である徳松くんのｃｕｏｒｅ（クオーレ）がある。

でしょ？」

ツナは言葉を失った。

あらゆることをウライラが知っていたからだ。

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のことはともかく、ツナの能力である徳松の核、ｃｕｏｒｅ（クオーレ）の在り此までもを熟知している。

それが信じられなかった。

「…なぜ、知っている」

「内緒です。君が大人しく言うことを聞くなら教えてあげますよ」

卑劣な提案を持ちかけるウライラにツナは嫌悪感を抱いてばかりだった。

ウライラの傍にいると、

ウライラの姿を見ていると、

ウライラの声を聞いていると、

身体の寒気が止まらない。

「早く降参しないと、綱吉くん、君死んじゃうよ？」

ツナの左腕を指差してウライラが笑う。

痣の位置は腕の中間地点。

あと少しで左手首の痣と繋がってしまうところだ。

だが、ツナには降参する気は更々ない。

「オレは、降参なんか絶対にしない」

ボゥ、と額の炎が一段と燃えだした。

拳を握りしめ、決意するかのように言葉を放つ。

「オレは仲間を守る」

「その言葉、聞き飽きました」

はぁ、とひとつため息をつき、ウライラは呆れた視線をツナに向ける。

「死に近づく恐怖を、」

ゾワリ、と殺気が強まる。

「とことん味わいなさい。」

ビュッ

杖をかまえ、ウライラがツナに襲い掛かる。
どうやら近距離戦で決着をつけるらしい。

ツナはとっさに構えてウライラの杖をガキンという音を立ててはじいた。

それを見透かしていたかのように、ウライラは長い足を振り上げた。

「…ぐっ！」

それはツナの鳩尾に見事ヒットし、ツナはむせたように咳を繰り返す。
だがウライラは容赦なくツナに攻撃を仕掛けた。

ガスッッ

「…おや、鳩尾って急所でしたよね？」

「…確か、に…そうだ……が、」

「侮るなよウライラ」

リボーンがぽつりと言葉を発する。

二度目のウライラの蹴りをツナは片手で受け止めた。
ツナの手とウライラの足が押し合ってブルブルと震える。

「オレは、」

「ツナは、」

「「お前になんか負けない。」」

バキッッ

今度はツナの蹴りがウライラの脇腹にはいった。
その小さい身体には似つかないほどの力の強さに、ウライラは顔を歪ませた。

「…肋骨を折る気ですか、綱吉くん」

「お前こそ、オレを殺すつもりか」

「まさか、君には生きていてもらわないと。
でも多少の怪我はご愛顧、でしょう？」

ウライラがにやりと笑い、再び攻撃を仕掛ける。

攻撃、防御、攻撃、防御

その繰り返しの戦いに、リボーンたちは息をのむ。

時々見える、ツナの腹部の傷。
先程のウライラの鳩尾への攻撃のせいで、さらに傷が開いてしまったのだろう。
かなり血が滲んでいるのがわかる。

だが、その痛みを感じさせないようにと徳松が頑張っている。
と言ってもツナは痛みを感じていないだけであって怪我をしているのには間違いない。
痛みはなくとも、ツナの命は十分に危ういのだ。

「十、代目……徳松さん……」

獄寺が戦うツナを見て、悔しそうに歯をくいしばる。
守護者である自分が、右腕である自分が、ツナを守ることができない。
それが情けなくて仕方がなかった。
握りしめた拳には、爪の跡がくっきりとつけられている。
少し血の滲むそれが、獄寺の心情を物語っていた。
そんな獄寺を、リボーンは黙って見つめていた。
（……何もできなくて悔しいと思ってるのはお前だけじゃねぇ。

この場にいる全員がそう思ってんだ。）

上空へ視線をうつすと、炎を纏って仲間を守るために戦うツナの姿。

（…今は踏ん張るしかねぇ。耐えろ、ツナ。）

大きな漆黒の瞳を揺らし、リボーンは心の中でツナに言った。

近い　近い　近い

とても、近くにいる

ああ、ああ、ああ、

やめてくれ。
闇よ。
鎮まってくれ。

大空よ。
どうか、

包み込んでくれ。

標的７８　熟知する闇（後書き）

さっさとウライラ倒れやがれ！！
と思ってる方もいるでしょう…（笑）

まさかこんなダラダラするとは、わたしも思ってませんでした！

今回は設定のひとつである、
ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ　ナスコスト）のことを出しました。

みなさん、忘れていらっしゃるかと思いまして…（´・ω・、）

スペランツァ、眠り姫状態です。
男の人なんですけどね！

ツナの傷が痛々しくてヲヲヲヲってなります。
かわいそう、ツナ！↑

でも主人公が負傷しながらも立ち向かう話、好きです。
惚れます。

中学生に惚れる高校生、てか受験生。

なんだこれ、（・∀・）ノ

強制終了します！（笑）

読んでくださってありがとうございました！

標的７９　腐食のオーラ

ぶわり　ぶわり　ぶわり　ぶわり

闇があたりを包み込む

それはただ黒くて、黒くて、
迷い込んだら、二度と出られないような黒で。

ゆらり　ゆらり　ゆらり　ゆらり

炎が瞬き揺れている

それはただ綺麗で、綺麗で、
触れてしまいたくなるほどの綺麗さで。

そのふたつは、それぞれの存在を大きくあらわしていた。

ガキンッ　ガキンッ　ガキンッ　ガキンッ

「よくもまあそんな体力が残っていますね」

「徳松が頑張ってくれているからな」

「ああ、綱吉くんの能力の…。」

響き渡るのはウライラの杖とツナのグローブがぶつかり合う音。
それは不定期なリズムで繰り返されていた。

「実際、徳松くんを奪ってしまえば早く済む話なんだけどね…。
どうせこういうのは、媒体から離れると力を発揮しなくなるパターンなんだろうね。

使えないおもちゃだな、徳松くん」

「徳松を馬鹿にするな！」

ガキィィィイインッ！

ツナの拳が杖を掠め、ウライラの頬を殴った。

パラパラと黒い破片が落ちていく。
ウライラの杖にひびが入り、一部がかけてしまったのだ。

それに頬までもを殴られた。
口の中に鉄の味が広がる。
ピリリッとしみて地味に痛い。

「からかっただけなのに、真に受けるとは……。
最近の子供は冗談が通じないんですか？」

「お前のは冗談に聞こえなかった。
それに、世の中には言っていいことと悪いことがある。」

「おやおや、良く言いますね。
誰だって他人の悪口は言いますよ。
言わない人なんて存在するのですか？
ははっ、そんな人がいるなら見てみたいですね！」

見下すような笑いをウライラはツナに向けた。

「所詮、人間などそういうものなんだよ！」

バシュンッ！！

ウライラのオーラが槍のような鋭いものとなってツナに襲い掛かった。

「お前の価値観は哀しいものだな！」

ゴウゥウッ！

黒いオーラがオレンジの炎に掻き消された。

「何…？」

「そうやって生きてきたお前が可哀相だってことだ！

そういう考えしかできない、可哀相な人間だってことだ！

人と触れ合う楽しさも幸せも知らない、そんなお前が可哀相っていうことだ！」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！！！！！！」

ズバァァアアンッ！

凄まじい音をたててウライラのオーラが爆発した。

それはあたりに飛び散り、木や草を次々と枯れさせていく。

ジュワッ　ジュワッ　ジュワッ

「土までもを腐らせるのか…」

「なんて恐ろしい力なんだ……」

ウライラのオーラによって腐っていく地面を見てリボーンは冷や汗を垂らす。

トンノはさらに炎の出力をあげてそれを弾きとばした。

「…このままでは森は全壊しますよ。」

「だが、今のオレたちにはどうすることもできねぇ……ただ、」

リボーンは上を見上げた。

「これが…ツナに当たったら……」

ジュワジュワと腐る土と同じ現象になるのだろうか。

それとも……。

バシュッ　バシュッ　バシュッ　バシュッ

「ほら、ほらほら！ちゃんと避けないと！」

癪に障る笑い声が鼓膜に響く。
ツナは次々と襲ってくるオーラを炎でかわしていた。
だが止まないそれは、だんだんツナの体力を奪っていく。

（…キリがない。…だが、これ以上徳松に負担は……）

息がはずむ。汗がたれる。
筋肉が強張る。

ツナも、徳松も限界に近かった。

くらりと、目眩がした。

それをウライラは見逃さなかった。

バシュンッ!!

「…っ!!?」

全員が思考を停止した。

全員が目を見開いた。

肌色に、黒色。

「っぐ…！！！」

「ツナ！！」

ツナの腕にウライラのオーラがあたった。
それはあまりにも突然のことで。

絶望が襲う。

「ああ、とうとう当たってしまいましたか！」

ウライラの笑い声はとても楽しそうで、嬉しそうで、でもリボーンたちには届かなかった。

「…っつ…！」

全身に響く激痛。
それはさらに呪いの痛みを増させる。

じわりじわりじわりじわり

森が朽ち果てていく。

大空が朽ち果てていく。

人々は絶望を目の当たりにする。

やめて　やめて
もう　やめて

僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

標的８０　衝撃の真実（前書き）

展開が早いです！

標的８０　衝撃の真実

制裁する者
制裁される者

君はどちらになるだろうか？

もちろん、
制裁される者だろう？

だって、

僕に歯向かうんだから。

「ツナ！！」

「十代目！」

「綱吉くん！」

地上からリボーンたちがツナの名を呼ぶ。

だがツナは答えない。

激痛に顔をしかめるだけだ。

「…くっ」

「直に触れてしまいましたね、綱吉くん。痛いでしょう？」

くつくつと肩を震わせながらウライラは言う。

「おや、炎が弱まっていますよ。」

「…っお前……！」

ウライラはツナに触れようと手を近づけた。

だがそれをパシンと音をたててツナは弾く。

吸い込む空気は淀んでいる。

視界は歪んでいる。

ふらふらと身体が傾く。

「君って子は、本当に馬鹿ですね。
他人を守るためにこんなにボロボロになって…。
後悔しますよ。
あの時、仲間を見捨てればよかったと。」

「っそんなこと、絶対に…思わない！」

「まだ言うか！」

バシュンッッ！

再びウライラがツナにオーラを放った。
二度目のそれはさらにツナを苦しめる。

「…っっ！！！」

……く……

突然、なにかが痛みと共に伝わってきた。
それは一瞬の出来事で何なのか考えることもできなかった。

（…？なんだ、今の……）

「ぼーっとしてると死んじゃいますよ！！」

バシュンッッ！

……な……

また、伝わってきた。
それは全身を駆け巡って脳内に響き渡る。

（なんだ、これ……）

得体の知れないそれにツナは混乱した。
だが激痛に追い撃ちをかけるようにウライラの攻撃がツナを襲う。

バシュンッ　バシュンッ　バシュンッ

…て……た……

オーラに当たるたびにそれはだんだん強くなっていく。

「諦めたのですか！？」

バシュウゥゥウンッ！

一際大きなオーラが放たれた。

黒いそれはツナに覆いかぶさった。

「ツナ！」

リボーンがツナの名を叫ぶ。

目の前からオレンジの炎が消えた。

大空が消えた。

広がるのは、黒。

ただの、黒。

闇に漂うひとつの炎
それはただ弱々しく
今にも消えそうな
希望

「…ううっ」

闇に小さなうめき声。
その声の主である少年はゆっくりとまぶたをあげた。

「……ここ、どこだろう…」

視界はただの真っ暗闇だ。
なにも見えない、なにも聞こえない。

最近、目を覚ませば見知らぬところというシチュエーションの多い
ツナはさほど驚きはしなかった。
だが、自分たちが置かれている状況を思い出し、一気に慌て出した。

「っそうだ、オレ…！」

（ウライラのオーラが当たって…呪いが進行して……）

ツナは立ち上がって辺りを見渡す。
出口らしきものはどこにもない。

走り出そうとすると、すぐになにかにぶつかった。

ガツンッ

「いって！」

ツナは額を押さえてしゃがみ込む。
思い切りぶつかったのでヒリヒリとして痛かった。

“……あ……”

額をさすっていると、耳になにかの音が入り込んできた。

なんだろう、と耳をすますとそれは聞き覚えのあるものだった。

“君たちにはもうなにも残されてませんよ！”

「…この声…まさか、ウライラ！？」

聞こえた声にツナは驚く。
小さい声だが、それは確かにあのウライラの声だった。

“ツナに何をした！そのオーラを今すぐどかせ！”

「っトンノ！」

次に聞こえたのはトンノの声。
その瞬間、ツナは理解した。

（これは…ウライラの放ったオーラの中だ！）

ツナは自分がウライラの黒いオーラに閉じ込められていることに気付いた。
しかし、なぜだかそれに触れてもなにも起きない。
ただ全身に変わらない痛みが続くだけだった。

ドンッ　ドンッ　ドンッ

ツナは早く抜け出そうと固まったオーラを拳で殴るが、まったくびくともしない。

気付けば、ツナはハイパーモードがとけていた。
額の炎は消え、グローブは手袋に戻っている。

「徳松、徳松！！」

ツナは慌てて意識の中にいるであろう徳松の名を読んだ。

「徳松っ、徳松！」

（……ツナ？）

脳内に弱々しい徳松の声が響いた。
徳松も気を失っていたらしい。

「徳松、大丈夫！？」

（…ごめん、ツナ。ちゃんと役目…果たしてない……）

徳松は申し訳なさそうにツナに話しかける。

「そんなことないよ！徳松が頑張ってくれてるから…今も、少ししか痛みは感じないし…」

そっとツナは自分の腹部をさする。
先程よりは痛みは増しているが、それは本来感じるはずの痛みではないとわかる。

徳松が、まだ今も頑張ってくれていることがわかる。

（…でも、もう……力を使えそうにない）

「……そっか」

さらなる窮地に追いやられ、ツナは冷や汗をたらす。

どうすれば、どうすればいいのだろう。

何をすればいいのかもわからず、ツナはやるせなさに拳を強く握りしめた。

……くん……

「!?」

再び聞こえた声。

ウライラのオーラを受けたときに聞いた声。

誰のものかわからない声。

……綱吉くん……

「っ誰…!?」

自分の名を呼ばれ、驚いたツナはその声の主に話しかける。

……助けて、綱吉くん……

「…助け、て…って……」

今助けてほしいのは自分の方なのに、見知らぬ誰かに助けを求められ、ツナは混乱した。

……君に、力を…貸すから…僕を助けて……

「力を、貸す?」

…君になら…できるから……僕を助けてくれるかい?……

ツナはたじろいだ。

誰かもわからない者に、力を貸すから助けてくれと言われたのだから当たり前だろう。

…君にしか、僕を助けることはできない……大丈夫、僕は君の味方だから……

どうすればいいのだろう、とツナは考える。
果たして、承諾していいものか。

だが、この声からは悪意はまったく感じられない。
この声の主は、悪い人物ではない。
そうツナの超直感が告げていた。

そして、この声を信じなければいけないとも。

「……あなたが誰だかはわからないけど…わかりました。
オレに…力を貸してくれますか？」

ツナがそう言うと、声の主が安堵しているのを感じた。

……ありがとう、綱吉くん……

その声の主は嬉しそうにお礼を言った。

「…あの、……あなたの名前は…？
あなたは一体、誰なんですか…？」

……僕は…僕の名は…

……

それは、受け止め難いことだった。
ツナは目を見開いてその話を聞いていた。

……信じられないかも知れないけれど…これが本当なんだ……

「まさか、本当に!?」

ツナは身体が震えているのがわかった。
信じがたい事実に恐怖を覚えた。

（…すぐに助けないと!）

早く助けないといけないとツナは思った。
今すぐ、今すぐに。

「お願いです!あなたの力を…貸してください!」

……頼んだよ、綱吉くん……

その瞬間、ふわりと空気があたたかくなった。
それと同時に、ツナの意識もぬくもりを取り戻す。

「…徳松、大丈夫?」

（ああ、大丈夫だ。
……いくぞ、ツナ！）

ボゥウッ！！！

額から炎があらわれた。
手袋は再びグローブへと姿を変え、炎を燈す。

（……待ってろ！）

覚悟を決め、ツナは拳を振りかざした。

希望をたずさえ現るは炎
絶望を消し去り現るは炎

闇を打ち破りし大空よ

その力を解き放て

標的８０　衝撃の真実（後書き）

ああ…展開が早過ぎました…。
文が読みにくいです…ね。
ごめんなさい（、・ω・、）

ああ、でもこれで謎が解けそうですね！
もうわかってしまったかも知れませんけど…

ああ、やっぱりね

と心の中で思っててください！

標的８０いきましたね。
まだ二ヶ月ですが…標的８０（笑）
衝動的に書きすぎましたねはい。

まだまだおわりませんから！↑
覚悟しといてください！（えー）

読んでくださってありがとうございました！

標的８１　大空再起

強くなりたい
強くなりたい
強くなりたい

みんなを守れるように　強く

最初は逃げ出してばかりだった
逃げてしまえば済むだろうと
ずっとそう思ってばかりだった

でも、突然
そんな生活ががらりとかわった

小さな赤ん坊が現れて
銀髪のイタリア人が襲ってきて
野球少年を救って
ボクシング部の部長に入部を迫られて
もじゃもじゃアフロの子供が家に来て
風紀委員長に咬み殺されて
変な髪型の他校生に狙われて

生活が変わったんだ
変わりすぎたんだ

でも、楽しかったんだ

リングを巡って戦ったり、
未来に行って白髪の男の人と戦ったり、

いろんなことがあったけど、
辛かったけど、苦しかったけど、

その度に支えてくれたのは、
大切な仲間たちで

だから、オレはそんな仲間たちを
守ろうと思ったんだ

守りたいから
強くなろうと決めたんだ

たくさんの笑顔が消えないように
オレは
戦うんだ

オレンジ色の炎を纏って

“その拳はなんのためにある?”

“この拳は……”

「ツナを解放しろ！」

「無理に決まってるでしょう。

綱吉くんが抵抗するから、閉じ込めたんです。
悪いのは綱吉くんでしょう？」

子供のような言い訳をするウライラをリボーンたちは睨む。

目の前には、黒い塊。
その中にはツナがいる。
ツナが閉じ込められている。

呪いが、鎖がもうすぐ繋がってしまう。

死んでしまう。

そんな状況で、誰が焦らずにいられるだろうか。

「…なにもできない、だなんて……」

トンノは悔しさに目を細める。
出来ることならば、今すぐツナを助けてあげたい。
だが、それは叶わない。

トンノも限界だったのだ。
リボーンたちを守るために身体から最大限の炎を放出しているのだ。

もうボロボロだった。

気を抜けば、炎は今にも消えてしまいそうで。

（…ツナ……！）

祈るしかなかった。
ただ今は、祈るしかなかった。

「…ツナ」

リボーンはぽつりとツナの名を呼んだ。

ツナの返事を待った。

いつものように、ツナが答えてくれるのを。

ツナ　ツナ　ツナ

お前は、そんなに弱くはないだろう？

強くもなく、弱くもない。

まだお前は可能性を持ってるからだ。

なあ、可能性を持ってるお前は、

こんなことで消えたりはしないだろう？

なくなったりはしないだろう？

これからまだまだオレがお前の家庭教師をしてやるんだ。

さっさと出てこいよ。

なあ、ツナ。

ツナ。

……ピキリ

小さな音が聞こえた。
全員がその音に反応した。

確かに、確かに聞こえた。

ああ、これは、

これは。

ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ

「……まさか、」

ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ

「…ほんとに……、」

ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ
ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ　ピキリ

パアァァァアアンッ！！

黒が弾けた。
闇が弾けた。
光が見えた。

炎が見えた。
影が見えた。
人が見えた。

その立ちはだかる姿に、誰もが視線を奪われる。

「……なぜ、」

ウライラが表情を強張らせた。
カタカタと身体が震える。

にやり、と黒服の赤ん坊が笑った。

「…ウライラ」

透き通った声が響く。

炎はゆらめき、その瞳には陰りはない。

「…お前を、オレは許さない。」

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

お願いだ。

“この拳はなんのためにある?”

“この拳は……

仲間を守るために、ある”

標的８１　大空再起（後書き）

よっしゃ！
ツナのターン宣言！↑

ピキリがうざすぎましたね。
ごめんなさい。（´・ω・`）

さて、ここからが大事なところ！

読んでくださってありがとうございました！

標的８２　恨むのならば（前書き）

タイトルおかしいですが気にしないでください。

標的８２　恨むのならば

この拳はなんのためにある？

この拳は……

人を傷つけるためにあるんじゃない。

この拳はなんのためにある？

この拳は……

人をむやみやたらに殴るためにあるんじゃない。

この拳はなんのためにある？

この拳は、

仲間を守るためにある。

だから、この拳を振るうときは、
オレは仲間を守るために全てをかける。

ただ、単純に、
守りたいから。

「……綱吉くん、…なぜ…出てこられたのです…？」

「さあな。」

ツナは答えを濁らせる。
それにウライラは焦りを滲ませた。

「なぜ、なぜです！
僕のオーラを簡単に壊すなど…有り得ないはずなのに！！」

予想外の出来事に頭を混乱させながらウライラは叫んだ。
そんなウライラをツナは黙って見つめているだけだった。

「どんな手を、どんな手を使って出てきたのです！
君の能力、体力共々はもう限界のはずなのに！」

「……オレは、」

ツナは一瞬黙り込んだ。
静寂が朽ち果てかけた森に訪れる。

「…オレは、支えられている。
ただそれだけだ。」

「…っふざけているのですか！！！」

ウライラが鬼の形相でツナに襲い掛かった。
だがツナは冷静に、ウライラの攻撃を防ぐ。

ガキンッ

「!?」

（…先程より、力が増している!?）

弾かれた杖から振動がビリビリと伝わってくる。
それはウライラの腕までもを痺れさせた。

「…本当に、何をしたのです!」

「……教えてやる。…だが、」

ゴゥッ!と炎が燃え盛る。

「それは、お前を倒すことになるから覚悟しろ。」

ビュンッ!!

目の前からツナが消えた。
ウライラは慌ててツナの姿を探す。

「…っどこに行った！」

「ここだ。」

ガスッッ！

ウライラの背中に衝撃が走った。
振り返れば、探していた少年が無表情でウライラを睨んでいた。

景色がスローモーションで動く。
だが痛みは衰えない。

ゆっくりと、ゆっくりと身体が落下していく。

ガゥンッ！

ウライラは地面にたたき付けられた。
一瞬、息が止まる。
一瞬、視界がブラックアウトする。

（…な、ぜ…っ！）

信じられない。

この僕が、この僕が。

誰よりも強い、宇宙を統べるべきこの僕が。

ただの少年に、地面にたたき付けられるとは。

（…いや、）

ただの少年ではない。

（こいつは……）

忌ま忌ましい

大空。

「……っこの餓鬼が！！」

ウライラが地面を蹴って一気にツナに詰め寄る。
そして杖を大きく振りかざした。

ガキンッ

「っ！？」

また、杖から破片が飛び散る。
ヒビが再びはいる。

（…力が、はいらない！？）

ウライラは焦った。
先程より、力が出ないのだ。

体力も、能力も。

（……なぜだ？）

疑問が多い。多すぎる。

ツナの回復といい、自分の力の減り加減といい。

突然のことにウライラは冷静を失った。

「……まさか、」

また、あいつか。

大空よりも忌ま忌ましい、

消したはずの。

「…まだ残っていたのか！」

「やっと気付いたのか？」

ふと、頭上から声がした。

見上げれば、炎。

「綱吉くん、知っていたのか！？」

「ああ。」

「オーラを壊せたのも、力が増したのも……」
「お前が思っているとおりだ。」
ゴゥウッ、と拳の炎が一段と強く燃え盛った。
ぷつり、と闇が壊れた。
「……おのれえぇぇぇぇぇ！！」
いよいよウライラは完全に我を失った。
目は正気を失い、怒りだけがウライラを支配しているようだった。
バシュッ　バシュッ　バシュッ　バシュッ
再びウライラがオーラを放つ。
二の舞を踏むまいと、ツナは四角い匣を取り出した。
「ナッツ！」
リングに炎を燈し、匣に注入する。
そして、匣からは一匹のライオンが姿を現した。

「ガオッ！」

ナッツはしっぽをひとふりしてツナの肩に降り立った。

「ナッツ、形態変化（カンビオ・フォルマ）、防衛モード（モード・ディフェーザ）！！」

「ガオオッ！」

ツナの呼びかけに、ナッツは直ぐさま形態を変える。

バスンッ　バスンッ　バスンッ　バスンッ

「…っなんだ、それは」

低い声でウライラが尋ねる。

「一世のマント、マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモだ。」

ツナはバサリとマントを翻し、石化したオーラを振り払った。

マントは再び小さなライオンへと姿を変える。

「ふざけた真似を…」

ウライラは舌打ちをした。
マント一枚で自分の攻撃を防がれたのが悔しかったのだ。

「…ウライラ」

ツナがウライラの名を呼ぶ。
だがウライラは答えない。
ただツナを睨むだけだ。

「オレは、お前が今までどんな悪いことをしてきたかを知っている。」

その声には、怒りが込められていた。

「罪のない者たちばかりを犠牲にして、己の欲望を満たすためだけに、我が儘に力を使ってきた」

ビリビリと空気が揺れる。
力強い、押さえ込まれそうな力を感じる。

「…そんなお前を、オレは許さない。
……だから、」

オレンジの瞳が闇を捕らえた。
闇はぴくりとも動けなかった。

「過去の自分を恨め。」

過ちを犯した自分を、
恨め。

大空が　闇を

捕らえた。

標的８２　恨むのならば（後書き）

ああ、初期のウライラはどこへ。
毛並みのよさそうなウライラはどこへ。

なに今の問題児ウライラ。
扱いやすいですけれども。ね。

さ、謎が…明かされていきます。
最初のフィナーレへ、皆様をお連れしましょう。

未知なる世界をこじ開けましょう。

紳士ぶるの疲れた。
（その前にわたしは女！）

読んでくださってありがとうございました！

標的８３　恨み骨髄に徹す

気付いたときにはすでに時遅し
取り返しのつかないものへとなった

いつから　いつから　いつから
この世は汚れてしまったの？

なぜ　なぜ　なぜ
この世は汚れてしまったの？

その汚れにつけこんで
支配を目論んだ者は

愚かなものに見えるかい？

「過去の自分を恨めだと！？
はっ、笑わせてくれる！
過去の僕は素晴らしい行いをしていただけさ！」

「何もかもを犠牲にしてきたことが素晴らしいとでも言うのか！？」

「そうさそうさ当たり前じゃないか！
人を思いやるだなんて生温いこと、誰しもがするわけないだろう！
そんなこともわからないのかい、綱吉くん！」

本心剥き出しのウライラの言葉は重く頭にのしかかる。
呆れか、悔しさか、絶望か。
それらがウライラの言葉には含まれている。

完全に本性をあらわしたウライラは次々とオーラを放つ。
だがそれは己の力を出しきれていないものだった。

攻撃力は増した。
だが命中率は低い。

こんなにも力を出しているのに、これは本来の力ではない。
いつもの自分ではない。

それがさらにウライラを苛立たせた。

「綱吉くん、君はこの世に何を期待しているのです！
こんなくだらない意味のない世界に！」

「オレは、…まだわからない。

そんなこと、わからない。」

「でしょうね！１４年しか生きていない君にそんなことが、」

「でも。」

ツナのその二文字がウライラを止めた。
攻撃、表情、すべての動きを。

「この世界をつくったのは、スペランツァだ。
スペランツァは最初からこの世界がどうなるかを知っていた。
すべてを、知っていたんだ。

人が人を殺(あや)めることも、罪を犯すことも、自分のために何かを犠牲にすることも。

…だが、スペランツァは信じていたんだ。愛していたんだ。
この世界を、このありふれた世界を！」

ボゥッ！

ツナの額の炎がさらに大きく燃えだした。
そしてその姿からは痛いほどに伝わる。

殺気ではない、覇気。
ウライラにはない覇気が。

「その減らず口、どうにかしてしまおうか！！！」

ぎり、と歯を食いしばらせ、ウライラは再びツナに襲い掛かろうとした。
地面を蹴ろうとした。
ツナに詰め寄ろうとした。

……やめて。…

「っ！？」

ぴたりと、身体が硬直した。

……やめて　やめて　もう　やめて……

「…ま、まさか……」

ウライラが目を見開いたまま呟く。カタカタと身体が震え出す。

……やめて　やめて　やめて……

「っくそ、くそ！！」

身体を動かそうとするが、身体に力がはいらない。
まるで何かに捕われたかのように。

だんだんと焦りが滲む。

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

……返せ。……

「、お前…！！」

言いかけた途端、なにかを感じた。

凄みのある、威圧感。

それを発するのは。

「！？」

「返せ！すべてを、返せ！！」

右手を後ろへ、左手を前へとかざす。

掌からは炎。

右手はやわらかな、左手は剛(つよ)い炎。

その姿に、ウライラは抵抗を忘れた。

『ゲージシンメトリー、発射スタンバイ!!』

ピーーーーーーッ

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

「X　BURNER！！！！」

オレンジが広がった。
美しく、したたかな炎。

すべてに染まりつつ
すべてを飲み込み包容する
大空の力。

「ぐ…っ、あぁぁぁあ！！！！！」

男の叫び声が響く。
男が炎に包まれる。

その光景に誰もが釘付けになった。

「お、のれ…、おのれ…！！！」

ジュゥウ、とウライラの身体から黒いオーラが放出される。
それと共にウライラの表情が険しくなる。

「せっかくの…努力を、お前になど……無駄にされて、たまる…か……！！！」

一際大きな声でウライラは言い放った。

「…忌ま忌ましい、……大空が！！！！」

ジュウゥゥゥウッ

闇が　消えた。

黒が　消えた。

大空が、ひろがった。

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

標的８３　恨み骨髄に徹す（後書き）

ウライラー！！！！（（（；゜Д゜））））

フラグ立ちました。無念！

いや、そんな簡単にやられる奴じゃないはずだ、ウライラ！

わたしの中ではウライラはすごいかわいい子なんですから！

そういえば、今日（６月９日）は骸さんの誕生日。

おめでとう！

読んでくださってありがとうございました！

標的８４　失せた大空

黒が晴れた。
闇が晴れた。

空気はさらりと澄んでいる。
風が森を通り抜ける。

朽ち果てた木々
腐った土

見上げれば、大空。

見上げれば、少年。

Ｘ　ＢＵＲＮＥＲがウライラを包み込んだ。

命中した。確かに。

「…っやった、のか……」

「ほんとうに……！？」

「……いや、待て。」

リボーンが制止する。
その目はまだ警戒していた。

「あれを見ろ。」

小さな指先がさす方向を全員が見つめる。
そこには。

「…うそ！？」

「まさか、まだ…！」

そこにいたのは、黒髪の男。

確かに、その姿は。

「…あれはウライラですかね」

「どう、なってんだ……」

予想しなかった展開に全員が驚愕する。

ウライラは消えていなかった。

まだ残っていた。

目を伏せたまま地面に倒れている。

（どういうことだ…）

リボーンが頭上を見上げる。

そしてツナに真相を聞こうと口を開きかけた。

しかし。

ジュゥウ

「！？」

「っツナ！！」

慌ててトンノが翼を広げて飛び出した。

どさり、とトンノの背中にツナが落下する。

「ツナ！？」

トンノはツナに呼びかけるが、ツナの応答はない。

どうしたのだろう、とツナを見つめると。

「…！！！！？」

その鳥は言葉を失った。

肌に浮かぶ黒い痣。

鎖が、繋がっていた。

呪いが、完了してしまった。

死んで、しまった。

「ツナ！ツナ、ツナ！！」

「綱吉くん！？」

「十代目！！」

ツナの元へ全員が駆け寄る。

傷の痛みさえも忘れて。

誰もが言葉を失った。

言葉を発しようとも、発することができなかった。

「…綱、吉くん……」

ニコールがふるふると身体を震わせながらツナに触れた。

「っ！」

だがすぐに手を離してしまった。

（…つ、冷たい……）

ツナにぬくもりはなく、ひんやりとしていた。
その冷たさで受け止めたくはない現実を見せられる。

少年の、死。

「…あたしたちのせい、で……」

「……オレたちが…」

「「ウライラ様、を……」」

「裏切ったから…ですか……」

マリネたちは顔を青くしてその場に座り込んでしまった。
絶望感と後悔が襲う。

ああ、あの時。
ツナに助けを求めなければ。
自分たちでなんとかしていれば。
ツナは、こんなことにはならなかったのだろうか？

「……う、」

放心状態のリボーンたちをうめき声が現実に引きずり戻す。
全員が声のした方向を見る。

そして、絶句した。

「……っなぜ!?」

「さっき、あいつは…」

「…ツナが倒したはずだが……」

次々と襲い掛かる信じがたい現実。

なぜ、なぜ?

「……ウライラが、生きている…」

漆黒の瞳がゆっくりと、ゆっくりと開かれる。

漆黒の髪がさらりと、さらりと揺れる。

それは確かに。

アッジョルナーレのボス、ウライラ。

「てめぇ、なんで生きてやがる!!」

「お前はさっき沢田に倒されたはずだ!」

ふらりと立ち上がるウライラに獄寺たちが言葉を投げつける。

全員が思っている疑問を問いただす。

（……なにか、おかしい…）

リボーンがなにかに気付く。
じっと歯向かう獄寺たちを見つめるウライラがおかしいことに。

違う、違う、違う。

なにかが違う。

……ああ、こいつは。

「……お前…本当にウライラか？」

リボーンがウライラに問うた。
それに全員が驚く。

「リボーンさん、何言ってんスか！」

「そうですよアルコバレーノ。あいつはたしかにウライラですよ。」

「…そうだ、あいつはウライラだ。
だが……」

リボーンはウライラを見つめて黙り込む。
真実を見つけるために、ただ見つめる。

「……僕は、」

ウライラが口を開いた。
たがその声は低く、どこか優しい。

リボーンはその声に聞き覚えがあった。
…リボーンだけでなく、トンノも。

「……この声、」

「…ツナの意識の中で聞いた声だ」

そう、リボーンたちをツナの元へと導いたあの声。
間違いなく、それは。

「……僕は、ウライラです。」

優しい微笑みがリボーン達に向けられる。
それは先程のウライラとは違う、自然な笑顔。

「僕は、今まで…今まで……

操られて、いました。」

操られて、いました。

操られて、いました。

沈黙が訪れた。

真相が今、明かされる。

標的８４　失せた大空（後書き）

ぐだぐだでごめんなさい。

ちょっと今回書くの…難しかったです。

標的８５　ウライラの過去

思わぬ事態が起こるのはよくあることだ。
予想もしなかった事が起こるのはよくあることだ。

人間は万事を知るわけでも、為せるわけでもないのだから。

たいていの準備はできても、完全な準備はできやしない。
必ずなにかが欠けるのだ。

それが当たり前。
ただの人間には、ただの生物には全てを見透かせる力は与えられなかったのだから。

この世界に完全なものはない。
あるはずがない。

見たことはないだろう。
感じたこともないだろう。

だから生きていく上に驚きというものが生まれるのだ。

リボーンたちはその驚きというものを体感していた。

倒されたと思っていた人間が倒されていなかったのだから。
そしてその人間の言葉が信じ難いものだったのだから。

“操られて、いました”

「操られて…いただと？」

ウライラは真剣な表情で頷いた。
その目は嘘をついていなかった。
だが、そうたやすく信じることはできない。

「嘘言ってるんじゃないの？」

「命乞いに嘘をつくとは…哀れな。」

「もっとましな嘘をついてみなよ。」

次々とウライラに捧げられる言葉は、すべて「嘘だ」とウライラの言ったことを否定するものだった。

「…そう簡単に信じてもらえないことは…わかっていました。」

ウライラは悲しそうな表情をしている。
落胆したような、諦めていたような、そんな表情だ。

「でも、……綱吉くんは、信じてくれました」

「…ツナが？」

「はい。彼は疑いもせず、僕のことを受け入れてくれました。」

少し表情が和らいだウライラをリボーンはまばたきもせずに見つめた。

（…本当に悪い気が感じられねぇ）

やはりウライラからは、先程のような悪い気は感じられない。

殺気もすっぱりと無くなっている。

「…よし、今までおめぇに何があったかを話してみろ。」

信じるのはそれからだ、とリボーンはウライラに話すように促す。

「……話せば、長くなるのですが、」

ウライラはゆっくりと、だがはっきりと話しはじめた。

僕は、生まれたときから何もかもを知っていました。
言葉も、様々な知識も、人間が知るもの全てを。

ですが、いくつか普通の人間が知らないようなことまでもを知っていました。

……自分には、不思議な能力があったのです。

そんな僕を恐れて、周りの人間は僕に近寄ろうともしませんでした。
でも、父と母だけは僕を受け入れてくれました。

首も座っていないような赤子が普通に言葉を綴るのです。
歯も生えていないのに。
ですがそれは、僕が脳内で思っていたことを実際の声ではなく、テレパシーのようなもので周りの人間に話しかけているのだと知りました。

父と母は優しかった。
僕をかわいがってくれました。
僕は父と母が大好きでした。

それから数年、僕は普通の子供と同じように成長しました。
学校というものにも行きました。
僕は能力のことを隠していたので、沢山友達ができました。

それからまた数年して、僕は大人になりました。

僕の家は農家でしたので、父と母の手伝いをしていました。
僕は一度、父と母に僕の能力で仕事をしてみようかと提案しました。
ですが二人は首を横に振りました。

「手間隙かけて育ててこそいいものが出来るんだ」

それから僕は能力を使わなくなりました。
僕の能力は、一本の杖を使って発揮するものでしたので、僕は杖を封印しました。
これからは能力に頼らず、普通の人間のように生きていこうとしたのです。

…しかし、その矢先。
父と母は伝染病にかかってしまいました。
でも何故か僕には伝染しなかった。
それが能力のおかげだと気付いたのは二人が助からないと知ったときです。

やつれていく二人を見て、僕は何度も涙を流しました。
何度も能力を使って二人を助けようとしました。
でもそれは手遅れで、手の施しようもない所まできていたのです。

そして二人は死にました。
僕に「ありがとう」と言って、ゆっくりと息を引き取ったのです。

僕は自分を責めました。
助けられなかった自分を責めました。
涙は止まりませんでした。
何日も何日も僕は泣いていました。

そして僕は放心状態のまま日々を過ごしました。
二人の身を整え、墓に葬りました。
僕は墓の前でただ座っているだけでした。

涙は枯れ、声も出ませんでした。

それがいけなかったのでしょう。

突然、目の前に黒い靄（もや）のようなものが現れました。
僕はそれが何かもわからなかったので、ただそれを見つめていました。
何故あの時逃げなかったのでしょう。
今でもあの時の自分を責めたくなります。

「お前をわたしの器にしてやろう」

黒い靄は僕にそう言いました。
やっと身の危険を感じた僕は逃げました。
能力を使い、必死に逃げました。

しかし僕はたやすく捕まりました。
心の弱さに漬け込まれたのです。

黒い靄は僕の脳を蝕み、あっさりと僕の身体を手に入れてしまいました。

僕は意識の片隅で叫びました。
助けてくれと、出してくれと。
しかし僕の身体を奪った黒い靄は、僕を意識の中に封印しました。
かすかに能力を使えた僕は、気付かれないように、消えたふりをしてなんとか残りました。
ですが身体を取り返すことができませんでした。

それから、黒い靄は僕の能力を使い沢山ひどいことをしました。

…さ迷っていたニコールくんたちの魂を拾い、生き返らせたのもそのときです。

人を殺(あや)め、罪なきものを滅ぼしていきました。
そして組織をつくりました。
それがアッジョルナーレです。
黒い靄はとうとう、本当の目的を実行しようとしたのです。

「ボンゴレリングと沢田綱吉を手に入れ、すべてを変えよう」

それを知った僕は、意識の中で止めようともがきました。
何度も抵抗しました。
でもそのたび、意識の中に押し込められてしまいました。

綱吉くんに呪いをかけ、それが進行していくのを黒い靄は楽しみにしていました。

そして綱吉くんたちをこの森へと誘(いざな)い、最終段階へと乗り出しました。

綱吉くんを操ったとき、僕は綱吉くんの意識の中に入り込むことに

成功しました。
そして綱吉くんの意識の中に同じように入り込んだリボーンくんとトンノくんを導きました。

意識を取り戻した綱吉くんに放たれるオーラを用いて、僕は綱吉くんに話しかけました。
何度も何度も諦めずに。

そして、綱吉くんは僕に気付いてくれた。
最初は驚いていました。
でもすぐに僕のことを信じてくれました。

黒い靄が操っている僕の身体が綱吉くんの炎に触れたとき、僕を押さえ付ける力が弱まりました。
それを利用して僕は僕自身の能力を綱吉くんに与えました。

…綱吉くんが放った攻撃、…あれは僕を操る黒い靄を浄化するものでした。
僕は消してくれてもいいと言ったのに、綱吉くんは僕が助かる方法を選んだのです。

無事僕から黒い靄は離れました。
僕はやっと、自分の身体を取り戻しました。

……しかし、綱吉くんの呪いが完了してしまったのです。

僕が身体を取り戻すかわりに、綱吉くんが死んでしまった。

僕の、せいで。

「……まじ、かよ…」

「本当、みたいですね」

「これが、事実なんです」

涙を流しながらウライラは言った。
ごめんなさい、と謝ってツナに近づく。

「……綱、吉くん？」

冷たいツナの身体に触れ、ウライラは名を呼んだ。
すると、ウライラの表情が変わった。

「…どうしたの？」

思わずトンノがウライラに話しかける。

「…もしかしたら、」

漆黒の瞳が揺れる。

「……綱吉くんを、生き返らせることができるかも知れない」

一筋の希望の光が差し込んだ。

標的８５　ウライラの過去（後書き）

か、書きたかったことがやっと書けました！
少しすっきり。

ツナさんには申し訳なかったけど…。

いかがでしたでしょうか。
予想はついていたと思いますが…。

ウライラさんはかわいそうな人だったんです。
だからウライラさんを嫌いにならないでください！
かわいそうだｙ（もう黙れ）

もう少しわからやすく、上手く綴ることができたなら…。

今回のウライラさんの語り、夏目漱石の「こころ」みたいですね。
あれは傑作です。
一度読んでみてください。
（話がズレた／そんなの気にしない／日常茶飯事だから）

さて、イラストでも描いてきます。

読んでくださってありがとうございました！

標的８６　黒から白へ

もしも願いが叶うのなら、
僕はあの時に戻って、自分を叱ってしまいたい。
何もできなかった自分を、殴ってしまいたい。

能力を有しながら、無力な自分は、
なにを、どうすればいい？

人は無力だ。
ただ無力だ。

一人ではね。

「…生き返らせることができる、だと？」

ウライラはしっかりと頷く。
悍ましい黒い痣が浮き出る腕をそっと掴み、真剣な表情をする。

「どういうことなんだ?」

「根拠はあるの!?」

「ええ、あります。
かすかに、ですが…綱吉くんの気を感じるんです。……それに、」

一瞬黙り込み、ウライラは目を伏せる。

「……この呪いは、呪いをかけられた人間の命を、一時的に所持する…つまり、自分のものにできるんです」

「…じゃあ、まさか、」

「はい。呪いをかけたのは操られていた僕。
意識は違えど、僕に変わりはないのですから…おそらく、僕は今綱吉くんの命を所持している。」

ウライラは己の掌を見る。
かすかに、ぬくもりのある何ががウライラの身体を包んでいることに気付いた。

（……この暖かさ、は…）

間違いなく、大空の少年。

「…じゃあ、十代目はまだここにいるってことなんだな！？」

「本当に生き返らせることができるの？」

「……確率は、五分五分ですが…成功すれば生き返ります。」

ゆっくりと立ち上がり、ウライラは拳を握り締め、天を仰ぐ。

髪が風で揺れる。

その隙間から見える瞳は、強く、何かを願うものだ。

ウライラは地面に転がっている杖を拾い上げた。

空気を切るように杖をひと振りすると、黒だったものが白へと色を変えた。

「それが、本当の杖の姿なのか」

「はい。……少し欠けてしまっていますが大丈夫ですね。」

ウライラは真の姿へと変えた杖につけられた傷を撫でながら呟く。
それはツナがつけた傷なのだが、致し方ない。

「……その前に、」
くるりとウライラがニコールたちの方に振り向いた。
ニコールたちはびくりと肩を震わせる。

「…ニコール…くんたち……ですよね……」

ぎこちない笑みを浮かべ、ウライラは名を呼んだ。

ニコールたちは身体を強張らせたままだ。
自分たちに話しかけているのは、意識は異なるが、確かに外見はあのウライラなのだ。

今までひどいことをしてきた、残酷な男。

恐ろしいと思うのは自然だろう。

「…君達には、たくさん…謝っても謝りきれないですね」

申し訳なさそうにウライラはうなだれる。

「……綱吉くんを、生き返らせることが出来たなら…成功したなら、……君達とゆっくり話をしたいです」

ニコールは目を見開いてウライラを見つめている。
マリネが不安そうにミノイの表情を伺い、そんなマリネの頭をミノイは優しく撫でた。
唖然としている双子のアロッチとスコッチをビンツがぱしんと軽く叩く。

「「痛いよジジイ！」」と罵声を浴びせられるがビンツは素知らぬ顔をする。

そして口を開いた。

「オレはよお…、お前を見ると色んなこと思い出すんだが…、……でも、それが全部嫌なことって訳じゃねぇんだ」

頭をポリポリとかきながらビンツは目を逸らす。

「「…僕らも、ジジイの言うとおりだよ」」

「ジジイっつうな、ビンツ様と呼べこのクソガキ共め」
もう一回ビンツが双子を叩いた。
それを横目で見ながらマリネがウライラに話しかける。

「あ、あたしは…あんたを操っていた奴に怪我させられたも同然、なんだけど……でも、あんたの能力があたしの怪我を治してくれたんだ、よ……」

そう言うとマリネはミノイの背中に隠れた。

「ふふ、素直じゃないんですからマリネは。
…確かにあなたはひどいことを繰り返してきましたが、それはあなた自身ではないのでしょう」

「そうだよ。…あなたを見ると、ちょっと怖くなるけど……でも…あなたを受け入れたいと、思うんだ。」

ニコールがまっすぐな瞳をウライラに向ける。

「…あなたと、向き合いたい。」

優しい笑顔が六つ、ウライラの視界を彩った。
それは自分が意識の中でかすかに感じたことのある、ぬくもりのあ

る笑顔。

歪んではいたけれど、みんなで笑い合っていたあの頃。

…ああ、あれが本当の僕であったならば。

…君達と、楽しく生きていられたのかな？

「……必ず、綱吉くんを生き返らせる。」

ふわり

ウライラの杖にオーラが燈った。

黒ではない、美しいほどの、白。

純粋で、無垢で、汚れのない白。

「僕は、またみんなで笑い合いたい。」

心に優しい願いが宿った。

標的８６　黒から白へ（後書き）

ほ、ほのぼのを目指したはずが…（´・ω・`）

ツナさんがいないと書く気がしない。↑

……予告しておきますと、展開はおそらくシリアスっぽくなります！

まだわかりませんが…多分。

一応覚悟しておいてください↑

読んでくださってありがとうございました！

標的87　気付かない理由（前書き）

タイトルに関連性があるのだろうかと疑ってしまう…。

標的87　気付かない理由

人ってさ、なんで生きていると思う？

理由はそれぞれだけど、よく考えれば答えはひとつなのさ。

わかるかい？

これは難しくも簡単、簡単で難しい問題なのさ。

ある人は、運命の人と巡り会うため。

ある人は、お金持ちになるため。

ある人は、……言っても言い切れない。

でも、それに気付けるのはほんの一部の人間なんだ。

ほとんどの人間はそれに気付かずに人生をまっとうするのさ。

なぜ、人は生きるの？

なぜ、君は生きるの？
なぜ、僕は生きるの？

“目標”を達成するだけだよ。

「僕は、またみんなで笑い合いたい。」

歪んだものではなく、ちゃんとした、…日常の幸せを噛み締めたい。
そう思うのはおかしいだろうか？
そう思う僕を君達は笑うだろうか？

「……ウライラ様、」

びくりとウライラの身体が震える。
顔をあげると、ニコールたちが優しい笑みを浮かべていた。

「……信じています、あなたを。」

だから、

綱吉くんを、助けてください。

口に出さなくても、ニコールたちの思いが伝わってきた。
なぜだろう。もう契約はきれているはずなのに。
なぜ、こんなにも彼らの気持ちがわかるのだろうか。

「…約束します。」

ぐっ、と拳に力が篭る。

幼い頃の気持ちがよみがえる。

彼らを守りたい。

ひたり、とウライラは地面に掌をおく。
すると、掌を根源にウライラを白い陣が覆った。

“Answer my voice”

低く優しい声が響く。

“I return life of the thou with my power”

ウライラは掌をツナにかざした。

“The name of the thou is Tsuna yoshi Sawada”

すると、ツナの身体がふわりと浮き、トンノの元から離れた。

“Light up the light. Erase darkness.”

陣の中心にツナは横たわったまま降り立ち、呪いの痣である鎖が輝きはじめた。

“・・・Ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｆａｄｅｓ　ａｗａｙ”

パァァン、と光が弾けた。
リボーンたちは目を開けていられなくなり、腕で己の目を庇う。
隙間からのぞくと、陣からは凄まじい風が吹き荒れていた。
だがウライラは服や髪をたなびかせるだけでそこに立っている。
白い杖がかざされた。
そしてそれはこつりと軽い音をたてて地面を叩く。

…ずるり、

リボーンたちは目を疑った。

ツナの身体から、黒いもの……鎖が、次々と離れていくのだ。

ずるり　ずるり　ずるり　ずるり

腕から、首から、脚から、全身から鎖が離れていく。

長々と続く鎖は、ウライラの胸へと吸収されていった。

ずるり　ずるり　ずるり

まがまがしい黒が白に覆われていく。
しかし。

パァァァアンッ

また、光が弾けた。
その衝撃でウライラの身体が吹き飛ばされた。

（……ああ、）

ウライラは目を細めながら心の中で呟いた。

（……失敗、してしまった…）

成功させると言ったのに。
失敗してしまった。

自分の力が足りなかったのだろうか。

方法を間違えたのだろうか。
……それとも…。

浮遊感を味わいながらウライラは後悔した。
また守れなかった。
また…失ってしまうのだろうか。

…ああ、なんて僕は無力なんだろう。

“……一人ではね。”

突然聞こえた声にウライラは目を開ける。
すると、浮遊感は消えて誰かに支えられていた。

「……ウライラ様。」

「！！！？」

ウライラは目を見開いた。
まさか、と後ろを振り返る。
そこにいたのは。

「……ビンツ、くん？」

「大丈夫ッスか、ウライラ様？」

優しい笑みをしたビンツがウライラを支えていた。

なんで、とウライラは言いたいが言葉を発することができなかった。

「…オレだけじゃありませんぜ」

その言葉の直後、掌をなにかに、沢山のあたたかなものに包まれた。

「……ウライラ様」

「ウライラ様！」

右手をミノイとマリネが。

「ウライラ様、」

「「ウライラ様っ」」

左手をニコールと双子のアロッチとスコッチが握っていた。

「……どうして、」

「ウライラ様の力になりたくて。」

驚きを隠せないウライラの顔を見て、ニコールたちは笑い出す。

「ははっ、ウライラ様すごい驚いてる！」

「…だって、……君達がここにいるから……」

「ウライラ様一人だけではお辛いでしょう？」

すとん、と足が地面につく。
ウライラはまだ驚いたままだ。

「…ウライラ様、知ってますか？」

不意に、ニコールがウライラに尋ねた。

「人間って、どんなに強くても、どんな能力を持っていても、結局は無力なんですよ。」

「……。」

ウライラは黙ってその話を聞いている。
「でもね、」とニコールが言う。

「傍に誰かがいれば…人間は誰でも強くなれるんですよ。能力も発揮できるんですよ。
…結局、人間一人では何も出来やしないんです。誰かがいないと、何も出来ないんです。」

「……だから、あたしたちウライラ様の力になりたくて。」

「遠慮とかしても無駄ッスからね！」

「「オレたちでも力になれるんですからね！」」

「みんなの言うとおりです。わたしたちのなけなしの力でも合わせれば使い物になるはず。」

ウライラは何も言えなかった。
ただ瞳があつくなるのを感じるだけだった。

握られる手が、あたたかい。
見つめられる瞳が、あたたかい。

人は無力だ。
一人ではね。

「…君達の言うとおりですね」

ウライラは痛感した。
自分一人では何もできない。
だが、ニコールたちがいれば、…仲間がいれば、

「人は強くなれる。」

ぶわり、と風が吹き抜ける。

ウライラは自然と力がみなぎるのを感じた。

人ってさ、なんで生きていると思う?

“目標”を達成するためなんだ。

でも、その目標を達成すると……。

“僕の目標、それは君たちと笑い合うこと。”

標的８７　気付かない理由（後書き）

ああ、わたしの好きな展開です。
絆とか、仲間とかが大好物なんです。

よかったね、ウライラさん！

書いててこっちが幸せになりました。
早く元気なツナが見たい。

一応話のストックはありますよ。
標的９０まで書いてます。↑

…進むの早いですね……。

意味深な言葉を出させていただきました。
どういう意味でしょうね！↑

推理してみてくださいね。

読んでいただきありがとうございました！

標的８８　繋いだ手

昔、ある魔術師がいました。

その魔術師は強い力を持っていました。

誰も持っていない、誰も勝ることができない力。

そんな力を余していた魔術師は、いろんな術を生み出しました。

そしてそれを書き留めました。

…でも、どんなものにも危険はつきもの。

魔術師はある術を生み出すとその術の毒に侵されてしまいました。

苦しみの中、魔術師は思いました。

ああ、死ぬのだなと。

どんなに力を有しても、死ぬものは死ぬのだと。

死ぬのは怖くはありませんでした。

でも、心に引っ掛かることがひとつ。

それは自分の生み出した術をまとめた本でした。

せっかく自分がまとめた多くの術を、このまま誰にも知られずに無駄になってしまうのだろうかと不安になりました。

魔術師は最後の力を振り絞り、その本に刻まれた術を解き放ちました。

誰かの記憶に刻まれるようにと、自分の生み出した術がいつまでも絶えないようにと。

そして魔術師は深い眠りにつきました。

いくつかの問題を残して。

自分の死の原因となった、最後に生み出した術までもを解き放ってしまったのです。

もう取り返しはつきません。

誰にも止められません。

いつまでも、語り継がれる様々な術。

その中で、最も危険なもの。

魔術師を死に追いやったもの。

それは、

“鎖の呪縛”

陣の中心には一人の少年。

それを囲むのは七人の人間。

七人を繋ぐのは、それぞれの掌。

“人は無力だ。一人ではね。”

「……本当に、いいのですか？」

「今更なにを…僕らはもう決めたんですよ。」

確認するウライラにミノイはため息をついた。

「もとはあなたが助けてくれた命。
あなたがいなかったらわたしたちはここにいないのですよ。
だからわたしたちはあなたの力になりたいのです。」

「……そう、ですか」

心がぽかぽかとあたたかくなる。
心地のいいぬくもり。

「……ひとつ、いいですか。」

ウライラの言葉に、ニコールたちは頷いた。

「…もし、綱吉くんを生き返らせることができて、日常の生活というものを送ることができるようになったら……」

ザァァアッ、と風がウライラの言葉を掻き消した。
だがニコールたちは笑っていた。

「…もちろん。」

また、約束ができました。
それはどうしても叶えたい約束。
それを叶えるために。

「……いきますよ。」

手を握る力が強まった。
掴んだこの手を、手に入れた居場所を、離すものか。
大切なものを、手放すものか。
だって、僕らは……。

「…ウライラたち、何をする気だ？」

「さっぱりわからない、けど……」

光に包まれたウライラたちをリボーンたちは見つめる。
トンノはぽつりと呟いた。

「……嫌な予感、が…する……」

気のせいであってほしい。
この嫌な予感は、勘違いだ。

そう願わずにはいられなかった。

朝焼け色の炎が、不安に揺らめいた。

“Answer my voice”

再びウライラが呪文を唱えはじめる。

“I return life of the thou with my power.

The name of the thou.

Light up the light.

Erase darkness.

Even if my life fades away...”

ウライラが更に手を握る力を込めた。

“...Even if We abuse our power”

ずくん、と動悸が一際大きく跳ねた。

掌から掌へ。

あつい何かが伝わっていく。

痛みのような、衝撃。

その恐怖からウライラたちは互いの掌をさらに強く握り締めた。

大丈夫、大丈夫。
みんながいるから、怖くない。

大丈夫、大丈夫。
みんながいるから、平気なんだ。

大丈夫。

パアァァァァァァァァアンッ！！！

森を光が包み込む。
爆風が吹き荒れる。

だが繋いだ手は離さなかった。

だって、だって、
僕らは本物になるんだ。

だろう？

標的８９　つかの間の喜び

僕らは道を間違えていた。
方法を間違えていた。
歪んでいた。

でも、今はもう違う。
正しいと思う。

本物になりたいと願うこの気持ちは、否定できないものだ。
否定するものなど、ない。

この人たちと、君たちと、

“本物になりたいんだよ。”

ウライラ様、ねぇウライラ様。
僕たち、あなたを見て思い出すことは沢山あるけれど、
その中でキラキラと輝くものがあるんだ。

確かにおかしかった。
確かに歪んでいた。

でも、あの思い出は、
僕らのすべてなんだと思う。

辛いことも、苦しいことも、
全部あわせて“思い出”と呼ぶのならば。

双子がビンツをからかって、
それにビンツが怒って、
マリネが馬鹿にして、
ミノイがなだめて、
僕がそれを見て和んで、

振り返れば、

笑顔のあなたがいたんだ。

そんな思い出を、
はじめから、本物のあなたと、
作りたいんだ。

僕たちとあなたは、
本物になれるんだ。

ねぇ、ウライラ様。

僕らは、“本物”になれますよね。

ねぇ、ウライラ様。

ジュゥゥゥゥゥゥゥウウ…

陣が煙を出して消えていく。
光もおさまり、平常の太陽の光が差し込む。

少年を囲んで立つのは七人の人間。
彼らはただ立ち尽くしていた。
目を閉じて、動かずに。

「……終わった、のか？」

「…わからない」

リボーンとトンノが汗を浮かべてウライラたちを眺める。
風が頬をかすめた。
ひんやりと冷たい。

静寂が訪れる。
聞こえるのは自然のざわめき。
人工的な音は、しない。

ぴくり、

小さな指が動いた。

「っ！？」

「まさか！」

誰もが息をつめる。
訪れた瞬間。

この時を、待っていた。

「……っうう……」

まぶたがふるりと震えた。
そして、琥珀色の瞳があらわれる。

「っツナ！！」

ああ、やっと、

やっとやっとやっとやっと、

大空が目覚めた。

「ツナっ！！」

「十代目ぇ！」

「沢田ぁぁぁ！！」

「綱吉くん！！！」

途端、胸があつくなった。
なにかが溢れてきそうだった。
こらえきれない、無性にあついもの。

これを、人は何と呼ぶのだろう。

「……みん、な…？」

ツナはゆっくりと身体を起こす。
何が起こっているのかわからないようだ。

「ったく、ダメツナが。」

リボーンがぺしんとツナの額を叩いた。

「いてっ」とツナは額を押さえると、目の前の赤ん坊は笑っていた。

「オレの教え子に生き返った奴なんかいねえぞ」

「……オレ、死んでたの？」

「なんだおめぇ、自分が死んだことに気付いてなかったのか」

「……普通気付く？」

ツナは正しいことを言ったと思う。

だがこの家庭教師様の前では常識は通じやしないのだ。

「みんな心配してたんだぞ」

「えっ、」

ツナは顔を上げた。

そこには、笑顔やら泣き顔やら。

もちろん無表情もいた。

「心配したんスよ十代目！」

「おかえりなのな、ツナ！」

「極限に頑張ったな、沢田！」

泣き顔の獄寺、笑顔の山本、了平。

「ツナ～っ！」

「小動物が何してるの」

「クフフ、帰ってきましたか」

泣き顔のランボ、無表情の雲雀、にたり顔の骸。

「綱吉様…」

「綱、吉くん…」

「おー、坊主っ」

「「ツナ！」」

今にも泣きそうなロンジ、泣き顔の結加、満面の笑みのリーダー、シクロとシスイ。

そして。

「ツナ、おかえりなさい！」

「おめぇはやっぱいろんな可能性を持ってんな。……おかえり、ツナ。」

トンノと、リボーン。

かけがえのない、仲間。

大切な、仲間。

それは、自分の、居場所で。

「…よく、わからないけど……、……ただいま。」

ただいま、ただいま、ただいま。

今まで、これほどこの言葉が心に響いたことはあるだろうか。

“みんな、ただいま。”

“おかえりなさい。”

「……綱吉くん、」

優しい声が名を呼んだ。
振り返ると、黒髪の男が微笑んでいた。
そして、六人の青年たちも。

「……ウライラが、助けてくれたの？」

「…僕だけではなく、彼らもです。」

両隣を見遣ると、ニコールたちも優しい笑みを浮かべた。

「……そっ…か、……ありがとう！」

ツナは心から感謝した。
今だに状況は把握しきれていないが、ウライラたちが自分を救ってくれたのは間違いないのだとわかっていた。

「……感謝するのは、こちらの方ですよ。」

ツナは言葉の意味がわからず首を傾げる。

「…まずニコールくんたちを、助けてくれた。操られていた僕の攻撃から守ってくれた。
そして、僕を操っていた黒い靄（もや）を浄化してくれた。

……十分感謝するべきことですよ。だから、」

ありがとう。

感謝しきれないだろうが、今は君に感謝の言葉を述べたい。
君のおかげで僕らは今笑っていられるのだから。

「本当に…ありが……」

ふらりと、身体が傾いた。
それはまるでスローモーションのようだった。
七人の人間が、地面に倒れ伏した。

「っウライラ、みんな！！！」

ツナがウライラたちに触れようと手を伸ばした。
だが、その手はするりと身体を通り抜けた。

「……え？」

今、身体を、通り抜けた？
ツナは掌を見つめた。
かたかたと震える。

それは恐怖。
でも何の？

消える、恐怖。

無くなる、恐怖。

ねぇ、みんな。

ねぇ、ウライラ様。

“僕らは、本物になるんだよ。”

標的８９　つかの間の喜び（後書き）

…早いですかね、進むの。
もう標的９０にいきますよ。

一日一話はきついですね！
ストックしまくらなければ。

ツナが起きたと思ったらウライラたちが…！

本当につかの間でしたね。
短すぎた！少し後悔。

さて、これからの展開に重要なことが出てきますので、お楽しみに！

読んでいただきありがとうございました！

標的９０　首謀の正体

身体が、動かなくなったんだ。

思考が、止まってしまったんだ。

どうすればいいのかわからなかった。

目の前に、人がいる。

目の前に、人が、倒れている。

目の前に、

人が、

倒れて、いる。

そして、その人たちは、

透けて、いる。

「っウライラ！！？」

声が震えていた。

全身が震えていた。

特に、ウライラに触れようとした右手が。

ツナはウライラに触れようと手をのばしたのに、それは叶わなかった。

手が、するりとウライラの身体を通り抜けたから。

何が、起こっているのだろうか。

「ウライラ、ウライラ！！！」

「……つ、なよし…くん？」

ウライラのまぶたが開かれた。

だがその瞳はうつろだ。

「どうしたんだ、ウライラ」

リボーンがウライラに問うと、ウライラはうっすらと笑みを浮かべた。

「……どうやら、…限界……みたいですね…」

「…限、界？」

その意味がわからず、ツナは言葉を繰り返した。

「……力を、使い尽くしてしまったのです。僕も、彼らも。」

ウライラが視線をやると、同じように倒れていたニコールたちも力無く笑っていた。

やはり、身体は透明になりつつある。

「……もしかして、オレのせい？」

（オレを助けたから？オレを生き返らせたから？）

ツナはそう思わずにはいられなかった。

だが、ウライラは首を横に振る。

「いいえ、綱吉くんのせいではないですよ。……僕らの精神、体力、能力共々が悲鳴を上げていたのでしょう。

…それに、“鎖の呪縛”は操られていた僕がかけた。それを、僕…僕らが吸収したのが追い撃ちをかけたのでしょう。

あれはとてつもない怨念や恨みを含んでいます。そんなものを吸収すれば、こうなるのも同然です。」

ウライラは申し訳なさそうな表情をした。

「…そんなものを、君一人に背負わせてしまって、申し訳ないと思っています。」

「なんでおめぇ等七人が倒れるほどの呪いをツナ一人がかけられてもこんな風に倒れなかったんだ?」

それこそツナはすぐに死んでしまうだろう、とリボーンはウライラに言った。

ツナは痛みに苦しむも、すぐには倒れたりはしなかったからだ。

「…おそらく、綱吉くんの力でしょう。」

「力、って?」

「綱吉くんは大空属性。大空属性は“調和”でしょう。…だから、わずかにでも呪いを綱吉くんが調和させたのだと思います。」

「…確かに、その可能性はあるな。」

ウライラの考えにリボーンが頷いた。

大空属性の“調和”なら、そういうこともできるかも知れない。

「……だから、綱吉くんは悪くはないのです。」

「…でも、」

ツナの視界がぼやける。
そして、手の甲に涙がぽたりと落ちた。

「……僕がいけないんだ。
あの時、僕が弱かったから…」

黒い靄(もや)に身体を乗っ取られたあの時の自分をウライラは責めた。
あれがなければ、こんなことにはならなかったと。

『お前が弱いから悪いんだ、ウライラ』

森に声が響いた。
地を這うような、低い声。
その声を聞いた途端、悪寒を感じた。

「……誰…」

「この声、まさか……」

ウライラが汗をたらりと垂らす。
その顔には焦燥がにじみでていた。

『お前が弱いからだ。そのせいでそんな子供に私は負けた。
お前のせいでな。』

しゅるしゅると黒い靄(もや)が姿を現した。
先程のどす黒いオーラのような、漆黒の靄(もや)。

「なんだあの気持ち悪いやつは」

「……あれが、僕を操っていた…正体です。」

ウライラが黒い靄(もや)を睨みつけながら言う。
するとその黒い靄(もや)は愉快そうに笑い出した。

気色の悪い笑い声が耳をつんざく。

『はっ、ははははは！無様だなあウライラよ！私の言うことを聞いていればよかったものを！』

「お前誰だ！」

ツナは黒い靄を睨みつける。

『この姿で会うのは初めてだからな。沢田綱吉。』

くすくすと笑いを含みながら黒い靄は言った。

『私の名はＳｅｂａｓｔｉａｎｏ　Ａｌｆｏｎｓｏ　Ｃａｓｔｉｇｌｉｏｎｉ（セバスティアーノ・アルフォンソ・カスティリオーニ）。』

「イタリア人、なのか？」

『私は何人でもない。まず人ではないからな。』

黒い靄…セバスティアーノは嘲笑うかのように言い放った。

その態度が気に入らず、リボーンの表情が厳しくなる。

『私は地球が出来る前から生きているのだ。お前たち、スペランツァを知っているだろう。』

「「っスペランツァ様を知っているのか！？」」

シクロとシスイが身を乗り出すように反応した。
二人が待ち焦がれる人物、スペランツァを知っているとはどういうことなのだろうか。

『知ってるもなにも、私はあいつに封印されたからな』

「封印って……」

『私は宇宙が誕生したのと同時に生まれた。しばらく宇宙を漂い、己の力を用いて様々なことをしていた。
だがスペランツァに見つかり私は奴に封印されたのだ。
私の持つ力が悪いものだと言うことを知ってな。
私は封印される寸前、奴の作り出しているという星に逃げ込んだ。
それが地球だ。』

セバスティアーノの話を聞いているうちに、ツナはだんだんわかってきた。
奴がなにをしようとしているのかを。

「……スペランツァと関係のあるオレを使ってスペランツァを目覚めさせて、……スペランツァを消すつもりなのか！？」

『よく分かったじゃないか沢田綱吉。まあ、それだけではないがな。』

今だ黒い靄（もや）状態のセバスティアーノの表情はわからない。
だが声色からすべてが伝わってきた。
奴は、おもしろがっているのだ。

『お前の未知なる可能性を持つ能力さえあれば、スペランツァを消すだけでなく、宇宙までもを統べることができる。
こんなつまらない世界を、変えることができるのだ。
言っただろう？』

こんな単調で面白みのない世界など、
闇で消し去ってしまえばいいと。

標的９０　首謀の正体（後書き）

わぁ！
きました、新キャラ。

Ｓｅｂａｓｔｉａｎｏ　Ａｌｆｏｎｓｏ　Ｃａｓｔｉｇｌｉｏｎｉ
（セバスティアーノ・アルフォンソ・カスティリオーニ）。

なっが！名前なっが！
……いちいち、セバスティアーノセバスティアーノ言うの面倒ですね。

…通り名、考えておきますね。

さあ、標的９０突破しました。
早いです。書き始めてから三ヶ月も経っていないのに。

これからも図太く続けていきますよ。↑

読んでいただきありがとうございました！

標的９１　力の元始

とうとう姿を現した。

ウライラを操っていたものが。

ツナたちを傷つけたものが。

様々なものを犠牲にしたものが。

諸悪の根源が。

「消し去ってしまえばいい、だと？」

リボーンがセバスティアーノに問うた。

表情の見えない、黒い靄（もや）に。

『そうだ。よく考えてごらんよ。

例えば人間は、字を書く。

そして書く字を間違えたとき、消しゴムで消すだろう。

それと同じさ。

この世界は間違ってしまったんだ。
在り方を、在るべき姿を。

だからそれを消すのさ。
なかったことにしてしまえばいい。
忘れてしまえばいいだけのこと。』

「ただの字と地球や宇宙は違うだろ」

『同じさ。“いらなくなってしまったもの”としてひとまとめに出来る。
仕方ない。誰だって間違いはするものだ。』

なんて屁理屈だろう、とツナたちは思った。
字と地球、宇宙ではスケールが違う。それを無理矢理つなげるのだ。
そんなものただの屁理屈にしか聞こえない。

「…お前、本来の姿がそれなのか？」

『まさか、これは力を保存しておくための仮の姿だ。』

ずるり

黒い靄（もや）がおかしな動きをし始めた。
壊れた時計のような、水のような、言い表し難い動き。
一言で言うと、“気色悪い”。

ずるり　ずるり　ずるり

「気持ち悪いな」

「……なんだよこれ、」

姿を変えていく黒い靄（もや）を見て、誰もが顔を歪めた。
すると、黒い靄（もや）はだんだん人の姿へと変化していった。

ずるりずるりずるりずるり

手が、足が、胴体が、
顔が、現れた。

「…人の姿、だ」

「失礼だな、君」

ツナが思わず本音をこぼす。
現れた姿が人だったことに正直驚いていた。
化け物のようなものに姿を変えるかと思っていたのだ。

セバスティアーノの姿は本当に人間だった。

おそらく１９０ｃｍはあるであろう身長。
ウライラと同じような漆黒の髪の毛。
吊り目の色は青。

バサッ、と黒いコートを翻したその男はにやりと笑みを浮かべていた。

「…本当にただの人間だな」

「君たちは失礼という言葉を知らないのか。」

はあ、と嫌みったらしくセバスティアーノはため息をつく。
お前が言えることか、とリボーンは内心思った。
だが直接口に出すのは面倒だと思い黙って聞き過ごした。

「私は、スペランツァに封印されたときに力を消されてしまった。
地球に逃げ込み、封印されて何もできない私はさ迷った。
ただふらりと、なにをする訳でもなく。
封印されても意識は自由に動けたのだ。
しばらく経ったある日、少しだけだが力を使えるようになったのだ。
意識だけで。」

セバスティアーノが突然語りはじめた。
ツナたちは黙ってそれを聞いている。
だが警戒は緩めない。

「何故だろうと私は思った。
時が経つにつれて私の力は強くなったのだ。」

でも、そんな疑問はすぐに解決した。
私を強くするもの、それは、
“人間の醜い悪の心”

「人、間の……」

「醜い悪の心だと？」

「そうだ。
人のむごさ、ひどさ……ははっ、言い切れないな。
人間は進化するにつれて汚れていったのさ。

その心が私を強くした。
逆にその心がスペランツァを弱くした。

長い年月をかけ、私は人を操れるほどの力を手に入れた。
丁度いいことに、ある能力を持つ人間を見つけた。そして私は思いついたのだ。」

ぐにゃりとセバスティアーノの顔が歪んだ。

「その人間を、…ウライラを器にしようとな」

「っそんな！」

「ひでぇ奴だ」

「どうとでも言えばいい！！
もはや私はそいつに用はないのだ。
もう何もかもからっぽじゃないか。
そんなものいらないさ！」

セバスティアーノの高笑いが鼓膜を響かせる。

なんてひどい男なのだろうか。
ウライラを操っていた時同様、発言は自己中心的でひどいものだった。

「まだそいつを利用することはできたのだが、そいつが禁断の呪文を唱えたからもう助かりやしないのさ。
自殺も同然だろう。」

「禁断の、呪文？」

「…セバスティアーノ、余計なことを……！」

ウライラが歯を食いしばりながらセバスティアーノを睨む。

言うな、と漆黒の目で訴える。
だがそんなことセバスティアーノは気にもとめない。

「さっきこいつが唱えたのは、“滅びの呪文”だったんだ！」

滅びの呪文。

それはツナたちの動きを封じるのに十分だった。

ひやりと、風がなぶるようにすり抜けた。

標的９２　呪文の意義

やめて　やめて
もう　やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

ああ、なぜこの世界は
多くのものが犠牲になるの。

ああ、なぜこの世界は
善人が命を落とすの。

ああ、なぜこの世界は
悪人が生き延びるの。

なぜ、ねえ、なぜだい？

なぜこんなにも矛盾した世界を、
僕らは生きなければいけないの。

絡み合った糸のような人生を僕らは生きなければいけないの。

ああ、また

罪なき人が犠牲となる。

「滅びの呪文って、どういうこと!?」

「セバスティアーノ、貴様……それを言うな!」

ツナが真相を伺おうとウライラを見ると、ウライラは苦痛に顔を歪めながらもセバスティアーノに訴えていた。

それ以上言うなと。

余計なことを言うなと。

だがセバスティアーノがそんなことで黙る奴ではないことは確かだ。

むしろツナやウライラの反応を楽しんでいた。

「沢田綱吉、お前は知らないだろう。
死んでいたのだからな。」

「ウライラが唱えていた、あの呪文のことだろ」

リボーンが言うと、セバスティアーノはこくりと頷く。

楽しそうな、人間らしさが見られない人間の顔で。

ウライラがツナを生き返らせようとしていた時のことを思い出していただきたい。

ウライラは陣をつくり、その中心にツナを横たえらせた。そして杖を用いて、光と風の中、ニコールたちと手を繋いでこう唱えた。

Answer my voice.

I return life of the thou with my power.

The name of the thou Tsunayoshi Sawada.

Ｌｉｇｈｔ ｕｐ ｔｈｅ ｌｉｇｈｔ.
Ｅｒａｓｅ ｄａｒｋｎｅｓｓ.
Ｅｖｅｎ ｉｆ ｍｙ ｌｉｆｅ ｆａｄｅｓ ａｗａｙ.
Ｅｖｅｎ ｉｆ Ｉ ａｂｕｓｅ ｏｕｒ ｐｏｗｅｒ.

「…それがなんで滅びの呪文なんだよ？」

セバスティアーノは首を傾げるツナを嘲笑った。

頭の出来が平均以下とされるツナに突然英文の意味をとらえろというのは難しい話だ。
イタリア語じゃないだけましなのだが。

「アルコバレーノのリボーン、お前はわかるだろ？」

「当たりめぇだろ。」

ふん、と鼻をならしてリボーンは答えた。

滅びの呪文。
己を滅ぼす呪文。

Answer my voice.
I return life of the thou with
my power.

The name of the thou Tsunayosh
i Sawada.

Light up the light.

Erase darkness.

Even if my life fades away.

Even if I abuse our power.

それは禁断の呪文。
恐ろしく、はかない呪文。

我の声に答えよ。
我の力を用いて汝の命を戻す。
汝の名は沢田綱吉。
光を照らせ。
闇を消し去れ。
例え我の命がしおれても。
例え我らの命を酷使しても。

それは禁断の呪文。
恐ろしく、はかない呪文。

身代わりの　呪文。

「……そ、んな、」

へたりとツナは地面に座り込んだ。
やはり、自分のせいではないか、と。
自分のせいでウライラたちが身代わりになってしまったではないかと、自分を責めずにはいられなかった。

「体力精神能力、全部が限界に達していたのにあの恐ろしい呪いを被るなんて馬鹿としか言いようがない。
まだ休息を与えれば器として利用できただろうに。」

「っ、ウライラたちを物扱いするな！」

「自分より力の弱い奴は所詮駒にすぎない。利用できるものは利用しないと。
…お前は本当に甘いな。それは同情なのか？」

馬鹿にするような言い方がさらにツナたちの怒りを増させる。
つくづくこいつの態度、言動全てが癪に触るのだ。

「っ滅びの呪文、は、己の意思だ！ニコールくんたちも同意してくれた！
決して無理矢理ではない、自分が望んだことなんだ！」

だから、君は何も悪くはないんだよ、綱吉くん。

なおも自分を責めるツナにウライラは手を伸ばした。

するりと細い腕をすり抜ける。
指先が、見えない。
身体が、色を失いつつある。

身体が、存在を、すべてを失いつつある。

ウライラたちを待つものは、

「愚か者に待つものは、」

“無”だ。

標的９２　呪文の意義（後書き）

先日、質問をいただいたのでここでも解説しておこうと思います。

魔術師は自分が死ぬ前に自分で考えた術を解き放った、と書きましたが、それが伝わったのはウライラです。

それはウライラのお母さんのお腹にいたころ、つまり生まれる前から刻み込まれていたという設定になってます。
その頃からはウライラにはちゃんと能力もありました。

魔術師はだいたい１６世紀頃のイタリアにいた人です。その時代はイタリアは戦争が勃発し、経済力も危うくなり人々が苦しんでいたので、力を持て余していた魔術師はそれを救おうと術を編み出していた途中で亡くなってしまうという哀れな人だったのです。

そして魔術師の術は後世の類い稀なる人間に継承されるようになったのです。

でも魔術師の全ての術を継承したのはウライラだけで、使用することができたのも能力をもつウライラだけでした。
そんなウライラに目をつけたのがセバスティアーノ、というわけなのです。

…そんな感じです。

まだわからないことがあれば、ネタバレにならない程度にお答えいたします。

セバスティアーノが人気ない！（笑）
それは、まあ仕方ない！↑

読んでいただきありがとうございました！

標的９３　去る敵と味方

……ああ、意識がだんだん遠退いていく。

腕に広がる痣が命を蝕んでいく。

遠くで聞こえるのは人間の叫び声、銃声、爆発音。

私は、愛する罪なき人々を救えないのだろうか。
この力で守ることができないのだろうか。

ああ、なんて哀しいことだ。

私の編み出した術も無駄になる。
それよりも多くの命が無駄になる。

もうこんなことが起きないように、私のような後悔をしないように、

私の術を継承する者よ。

どうか、同じような過ちはしないでくれ。

私の最後の術。
“鎖の呪縛”を解く唯一の術。

これを使うことは、己の死を意味する。

だが、己の命にかえても誰かを救いたいとき、これを唱えるのだ。
私の最後の術、“滅びの呪文”

どうか、どうか術を継承する人間が、
幸せであるように。

己の欲ではなく、他人のために使えるように。

私のすべての力で、解き放つ。

どうか、私のようにはならないでくれ。

「なあ、愚か者たちよ。」

見下すその声は低く、やけに耳に響く。

「無が、怖いか？」

「……、怖くは、ない。」

「強がりを。誰でも無になるのは怖いと思うだろう。死に際くらい素直になればよいのだ。」

「、怖くないと言っているでしょう！」

ものすごい剣幕でウライラが叫んだ。
それにセバスティアーノは少し怯む。

「…怖くはない。何も怖くはない。……でも、」

ずきん、と身体に痛みが走る。
息が上がる。汗が滲む。
だんだん苦しさが増す。
透明度が増す。

「……哀しい。」

寂しそうな笑顔をウライラは浮かべた。
ツナは心が痛むのがわかった。

せっかく、セバスティアーノから解放されたのに、自由になれたのに、ニコールたちと、ツナたちと向き合えたのに。
そんな幸せも充分に感じることができないまま消えるのだ。

それはニコールたちも同じだった。

「…ふっ、哀しいか。
まあ私にとってはどうでもいいことだがな。」

「お前に干渉させるつもりなど毛頭ないですよ。」

負けじとウライラはセバスティアーノに歯向かう。
皮肉な笑顔のセバスティアーノは鼻であしらった。

「もうお前には用はない。私は沢田綱吉の能力に興味がある。お前などいらぬ。」

「っそんな言い方！」

ないだろう、とツナが続けようとすると、その言葉は喉につっかかって出てこなかった。

セバスティアーノが視線をツナにうつした。
悪寒がツナの身体を支配する。
どくん、と血が騒いだ。

危険だと、
こいつは危険だと警報が鳴る。

じゃり、

セバスティアーノがゆっくりとツナに近寄る。
ツナは身動きができなかった。
ぴくりとも、指も動かなかった。

…じゃり、

セバスティアーノの手が差し延べられる。

ボウゥゥウッ！

「っ！」

突然目の前に炎があらわれた。
手を伸ばしていたセバスティアーノは咄嗟に腕をひく。

指先が焦げて、ズキズキと痛む。

「…なんだこれは、沢田綱吉」

「気安くツナに触れるな」

凛とした声がセバスティアーノの鼓膜を振動させる。

射抜くような瞳がセバスティアーノの姿をとらえる。

「…お前、」

「徳松!!」

ツナを庇うように立ちはだかるのはツナの能力、徳松。

だが姿はいつものような小さい姿ではなく、ツナと全く同じ姿だった。

瓜ふたつのツナと徳松を見比べ、セバスティアーノはにやりと笑う。

「おお、直接会うのははじめてか、沢田綱吉の能力。

……私の力となるもの。」

「オレには徳松という名がある。

それに、オレはお前の力になんかならない。オレはツナの能力だ。」

朝焼け色の美しい炎が威嚇するように揺らめいた。

（……ふん、）

セバスティアーノは目を細めてツナと徳松を見下ろす。

（……こいつらが大空か、）

まったく、
私には合わない。
大空なんていう、
忌ま忌ましいものは。

「…強気でいられるのも今のうちだぞ。
いずれお前たちは私にひざまずく。」

「ほざくな。」

ガスッ！

徳松が拳を振り上げてセバスティアーノに狙いを定めた。
だがセバスティアーノはコートを翻してそれを避ける。

ジュゥウゥ、

「っ！何……」

徳松の炎が触れたのはセバスティアーノの髪。
そこから靄がたちこめる。

同様に、セバスティアーノの足先から、指先から、頭から靄がたちこめ、みるみるうちにセバスティアーノの姿が消えていく。

「…っち、大空の炎は厄介なものだ」

（悪の私には、その炎は毒でしかない。）

どんどん消えていくセバスティアーノは、不気味な笑みをツナと徳松に向けた。

「またいずれ。お前たちとボンゴレリングを迎えに来る。」

“覚悟、していろ。”

そう言い残し、セバスティアーノは姿を消した。
黒い靄は風に流されて散った。

「……あいつがウライラを操っていたのか。」

「うん…って、徳松！大丈夫なの！？」

「オレは問題ない。それよりツナの傷のが心配だ。」

徳松がツナの腹部を見つめる。
そこには紅い血がにじんでいた。
ズキリ、と痛みが走る。

「…そんなことより！」

ツナは慌てて倒れているウライラたちの元へと駆け寄る。
先程よりも身体が透けていた。

「…どうしよう、なんとか助かる方法は！」

「……ない、ですよ。滅びの呪文を解く方法は、僕の記憶には刻み込まれていない。」

ウライラはうっすらと笑う。
そんなウライラを見ていたツナは知らぬ間に涙を流していた。

「…オレ、には…何も……っ出来ないの…？」

「…綱吉くん」

一瞬、ウライラは目を見開き、ツナの名を呼んだ。
そして、優しい笑みを浮かべた。

「……いいのです。これでいいのですよ、綱吉くん。」

「…だっ、て！！」

「君が、こうして僕らが消えることを哀しんでくれること、……嬉しいんですよ。」

君を狙い、君の仲間を傷つけた僕らのために涙を流してくれる。
それだけで、嬉しいんだ。

本当に、

生きていて、よかったなあ

って思えるんだ。

「…僕らも、だよ」

「あたしも嬉しい！」

ニコールとマリネが微笑む。

「「僕らを救ってくれて、僕らのために涙を流してくれて……」」

「オレたちは幸せもんだなあ！」

「本当、いい人に出会いました。」

アロッチとスコッチも、ビンツもミノイも満面の笑みをツナたちに向けた。

「敵だった僕らを受け入れ、救ってくれた。

……本当に、うれしかったんです。

君のおかげで今、僕らはこうして笑っていられるのですよ。」

ツナは涙を止められなかった。

込み上げてくるなにかを、せき止めることはできなかった。

「…本当に、君に出会えてよかった。」

「！！」

ウライラたちの身体から眩しいほどの光が発せられる。
あたたかく、優しい光。

「ウライラ、…みんな！」

「……ねえ、綱吉くん」

“ありがとう。”

ビュゥウウウッ

強い風が森を通り抜ける。
光は風にさらわれていった。

あたたかい、温もりがツナの涙を拭う。

広がるのは、美しい大空だった。

……ねえ、綱吉くん。

君に出会えて、本当によかった。

伝えきれないほどの“ありがとう”を君に。

君と君の仲間に。

ありがとう。

“ねえ、みんな。”

“ねえ、ウライラ様。”

やっと。やっとだね。

やっと目標に辿り着けた。

やっと、願いが叶うんだ。

“ねえ、みんな。”

“ねえ、ウライラ様。”

“僕らは、家族になれたんだね。”

標的９３　去る敵と味方（後書き）

あーーーーー！！！！！

ウライラ！ニコール！マリネ！ビンツ！アロッチ！スコッチ！ミノイ！

自分で書いたのに哀しいです！（´；ω；`）

彼らは本物の家族になりたかったのです。
なんてかわいそうなんだ…。

許せませんねセバスティアーノ。

そういえば彼の通り名決まりました。
近日小説内で出すつもりですので！

小説ストックが標的９８まで出来ました。
テスト週間にはいるので土日までのしのぎができれば！

では、本日漢字検定なのでがんばってまいります！（関係ない）

読んでいただきありがとうございました！

標的９４　辛さをバネに

失ったものはなに？
失われたものはなに？

それは、

七つの命と、笑顔と幸せ。

「……そ、んな…」

ツナの身体がかたかたと震える。
徳松はツナの傍に寄り添った。

リボーンは帽子を深く被り表情を隠す。

トンノはツナと同じように涙を流していた。

獄寺も、山本も了平もランボも、雲雀も骸も言葉を発しない。

ロンジやリーダーは顔を俯かせ、結加は両手で顔を覆って泣いた。

シクロもシスイも静かに泣いた。

誰もが辛い現実を目の当たりにしていた。

ウライラたちが、消えた。

「っウライラ…みんな！！」

「…ツナ……」

ツナはもういない人間の名を呼ぶ。
だがそれに返事をする者はいない。

返事のない呼びかけ。
声が聞きたいのに、笑顔を見たいのに、その姿はどこにもいない。

「……泣くなよ、ツナ。」

小さくなった徳松がツナの肩に乗る。

「…頼む、泣かないでくれ。」

（ツナが泣いていると、オレも泣いてしまいそうになる。）

徳松はまぶたがあつくなるのを感じた。
分身であるツナが泣いているから、それにつられて泣くのを我慢できなくなってしまいそうになる。

「……泣くな、ツナ。」

しんと静まり返っている森にはっきりとした声が響く。

「…リ、ボーン」

「もう泣くんじゃねぇ。それ以上泣いたらウライラたちは哀しむんじゃねぇのか？」

涙を拭うこともせず、ツナは黙ってリボーンの言葉を聞き入れる。

ぽたり、ぽたりと涙は地面に吸い寄せられる。

「…それに、お前がするべきことは泣くことじゃねぇ。」

まっすぐな瞳でリボーンは言い放った。

「お前がするべきことは、セバスティアーノを止めることだろ。」

「っ！！！」

我に返ったようにツナはリボーンを見つめた。
リボーンはにやり、と笑ってツナに近寄る。

「ウライラたちの仇をとるためにも、セバスティアーノを倒さなきゃなんねぇんだぞ。」

「…仇……」

ツナは俯いて、ためらいがちに口を開く。

「…でもオレ、そんなこと、」

「“殺せ”なんて言ってねぇ。“倒せ”と言ったんだぞ。」

ツナの思考を見透かしているかのようにリボーンは言った。
口にも出していないのに返事が返ってきてツナは少し驚いた。

(“殺せ”じゃなくて“倒せ”……)

人を殺すだなんてこと、ツナには出来るはずがない。
そんな残虐な行為をツナはしないということは誰もが知っている。

殺さなくてもいい。
倒せばいい。

仇のうち方など、沢山あるのだ。

「……うん、」

ごし、とツナは手の甲で涙を拭い、まっすぐリボーンを見つめた。

「…オレ、やるよ。」

清音な声でツナは言葉を放った。

「セバスティアーノを、倒す。」

殺すんじゃない。
仇をとるんだ。

止めるんだ。
奴の陰謀を。
汚れた欲望を。

守るんだ。
大切な仲間を。

「…狙いがオレの能力だとしても。」

「ツナ……」

徳松は優しく微笑んだ。

「やりましょう、十代目！」

「オレらも頑張るのな！」

「坊主、オレも手伝うぜ！」

「ツナ、僕らがついてるから。」

獄寺たちの言葉に、ツナは一瞬驚いたが、また笑顔に戻って頷いた。

（……大丈夫。）

みんながいるから、大丈夫。
オレには仲間がいる。
一緒に戦ってくれる仲間がいるから、
大丈夫。

「……ツナ、」

耳元で徳松がツナを呼んだ。
なんだか徳松の様子がおかしかった。

「…どうしたの？」

「……ごめん、…力使いすぎた……」

ぐらりと小さな身体が傾く。
慌ててツナは徳松を受け止めた。

「…ありがとう徳松。もう休んでいいよ。」

「……でも、ツナの傷…」

「いいよ。オレの傷よりも徳松の方を心配してよ。
……ゆっくり休んで、徳松。」

うつろな目で徳松はツナを見つめ、小さく「ごめん。」と呟いてから姿を消した。

徳松が意識の中に戻った途端、激痛が身体中に走った。

かすり傷や切り傷などの地味な痛みや、腹部の痛みなどが一気にツナを襲う。

「ばかか。そんな重傷だってのに。」

「…思った、より……痛い……」

痛みに耐えながらツナは呟く。
これほどの痛みを、徳松はカバーしてくれていたのだ。

（…ありがとう、徳松）

意識の中にかすかに感じる、小さなぬくもりに礼を言って、ツナはゆっくりと目を閉じた。

リボーンが何かを言っていたり、獄寺たちが叫んでいたが、それはツナの耳に届くことはなかった。

……オレは、ウライラたちのために、
なにかをしてあげられたのかな。

……みんなで、笑い合ってるといいな。

“ありがとう、ありがとう。

ありがとう、綱吉くん。

僕らを導いてくれた、大空の少年。

…また、会いましょう。

おやすみ、綱吉くん。”

標的９４　辛さをバネに（後書き）

うお……

今回はぐだぐだしてしまいました。

もうウライラさんたちを書けないのか、と思うと悲しくなります。

…番外編でも、つくってしまいましょうか。

ご要望があれば、出来る範囲でお答えしたいと思います。

次話でひとくぎりつきます。
小説自体は終わりませんけど。

これからの展開のプロットを作らなければなりませんね。
無計画で更にぐだぐだだと失礼ですし！

読んでいただきありがとうございました！

標的９５　第一章、閉幕

アッジョルナーレファミリーと名乗る敵に次々と襲われたツナたち。敵の狙いはボンゴレリングとツナの能力だった。

アッジョルナーレのボスであるウライラに呪い、“鎖の呪縛”をかけられたツナは、修行を積み重ねて呪いの進行を遅くすることに成功した。

その中でツナは逃走弾であったトンノを実態化させたり、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）であるシクロとシスイを目覚めさせたりと不思議な力を見せてきた。

だが、ツナや守護者たちは見知らぬ森に飛ばされ、そこで戦闘を繰り広げる。

アッジョルナーレの一員である双子のアロッチとスコッチを、敵であるにもかかわらず助けようとするツナを見てニコールたちはツナたちを襲うことに否定的になる。

しかしそこにウライラが現れ、ツナを操りリボーンたちを襲わせようとする。

リボーン、トンノはツナの意識の中に潜り込み、徳松を見つけだしてツナを取り戻そうと努力した。

突然謎の光と声に導かれ、ツナを発見して全員のおかげでツナを取り戻すことに成功する。

ツナはウライラを倒そうとするが一筋縄にはいかず、窮地に追いやられるが、あの謎の光と声の助けによってウライラを倒すことができた。

しかしツナにかけられた呪いが完了してしまい、ツナは死んでしまった。

そんな中、目を覚ましたのは今まで操られていたウライラだった。

衝撃の事実を知り、リボーンたちは動揺してしまう。

ウライラはツナを救いたいと、己のすべての力、さらにウライラを受け入れたいと言ったニコールたちの力を用いて“鎖の呪縛”を解く唯一の方法、“滅びの呪文”を唱えてツナを生き返らせることに成功する。

だがすべての力を使い果たしたウライラたちは倒れ、消えてしまうと言う。

するとそこに今までウライラを操っていた諸悪の根源、Ｓｅｂａｓｔｉａｎｏ　Ａｌｆｏｎｓｏ　Ｃａｓｔｉｇｌｉｏｎｉ（セバスティアーノ・アルフォンソ・カスティリオーニ）が現れる。

様々な事実を知り、ツナたちはセバスティアーノに怒りを覚える。

セバスティアーノが去ったあと、助ける術もなく、ウライラたちは消えてしまった。

哀しむツナたちだったが、リボーンの言葉でセバスティアーノを倒

すことを決意する。

絶対に、あいつの好きにさせやしない。

絶対に、能力は渡さない。

絶対に、ボンゴレリングは渡さない。

必ず、セバスティアーノを倒す。

必ず、仲間を守る。

ウライラたちの仇をとる。

ゆるぎない覚悟。

それはゆらゆらと炎のように燃え盛る。

朝焼け色の、美しい炎。

それに集うは六つの炎。

橙　赤　青　黄　緑　紫　藍

調和　分解　鎮静　活性　硬化　増殖　構築

大空　嵐　雨　晴　雷　雲　霧

その七つをもってして、

挑むのはリングを持つ人間。

沢田綱吉
獄寺隼人
山本武
笹川了平
ランボ
雲雀恭弥
六道骸／クローム髑髏

それに加わるは最強の赤ん坊リボーン
光玉を武器とする結加
ボンゴレに所属するロンジ
実態化したトンノ

ツナの能力である徳松

元アルヴィーコラのリーダー

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のシクロとシスイ

そして新たな仲間

目指すべきものは、

地球を作り出したスペランツァ

討つべきものは、

宇宙支配を目論むセバスティアーノ

戦いの先に待つものは、幸か否か。

その先には。

第一章、閉幕

標的９５　第一章、閉幕（後書き）

はい。

第一章が無事におわりました！
お疲れ様です。

しばらくは日常的なものが続くと思われます。

お付き合いくださいませ！

読んでいただきありがとうございました！

標的９６　第二章、開幕（前書き）

非常に短いです。

標的９６　第二章、開幕

昔から、闇は恐れられてきた。

不吉なものだと言われてきた。

そうさ、その通りさ。

私はお前たちにとって不吉なものなのだ。

お前たちが私にとって不吉なものであると同じように。

目障りなものは消してしまえばいい。

いらないものは捨ててしまえばいい。

欲しいものは、どんな手を使っても手に入れる。

私は欲に素直なのさ。

こんな世界、ただ気持ち悪いだけ。

だから私が、宇宙ごと変えてしまえばいいのだよ。

だがそれは私の力では実行することができない。

必要なのは、

沢田綱吉

ボンゴレリング

必ずや、このふたつを手に入れてみせよう

そして、新たな世界を作り出そう

闇に包もう
光を遮ろう

私の名はSebastiano Alfonso Castiglioni（セバスティアーノ・アルフォンソ・カスティリオーニ）

またの名を、

Disperare（ディスペラーレ）

さあ、その大空を、

絶望で染めよう。

いつ、いつだろうか。

いつ目を覚ませるだろうか。

ここには恐ろしい未来が待っている。

この星を、造ってはいけなかったのかも知れない。

今すぐ壊すべきなのかも知れない。

ああ、でも。

この多くの命を、私は消すことが出来ない。

愛しい、生き物たちを消すことは出来ない。

私が目覚めるその時まで、

どうか、あいつが現れないように。

待っているよ。

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）に導かれし少年、

沢田綱吉。

私の名はｓｐｅｒａｎｚａ（スペランツァ）

さあ、その大空を、

希望で照らそう。

光と闇

希望と絶望

大空を染めるのは
希望か絶望か。

少年の力を目覚めさせるものはなにか。

少年を導くものはなにか。

少年をつきうごかすものはなにか。

“必ず、セバスティアーノを倒す。”

（なぜあなたは、）
（なんであんたは、）
（なぜお前は、）
（なんであなたは、）
（なんで君は、）
（なぜ君は、）

（なんでおめぇは、）

幸せそうに笑うの？

（オレは、）

みんながいるからだよ。

（君たちを、）

守りたいんだ。

琥珀の瞳に宿るは炎。

揺らめく姿は心を奪う。

凛としたその姿を、
あなたは目にするのだ。

現実を受け止め、
それでも前に進もうとする、
少年たちの物語。

その先には。

第二章、開幕。

予想もできない未来、
変えられない過去、
ただ過ぎるだけの現在。

ひとつの物語を、
とくとご覧あれ。

標的９６　第二章、開幕（後書き）

“その先には。”第二章突入！

今回は紹介的な感じで。

次回からはしばらくはまったりと進ませていただきます。

いろいろアドバイスやら質問やらをいただいて嬉しいです。

第二章も、よろしくお願いします！

読んでいただきありがとうございました！

標的９７　空白の五日間

ズキリ　ズキリ　ズキリ　ズキリ　ズキリ

ああ、痛いよ。

お腹も、腕も、足も頭も。

ズキリ　ズキリ　ズキリ　ズキリ　ズキリ

“……”

あ、誰かの声だ。

ぼそぼそ言ってるんじゃ何もわからないよ。

“……ナ、……ツナ…”

え、オレを呼んでるの？

でもオレまだ眠いんだよね。

“ツナ、…おい、起きろツナ”

うるさいなあ、もう少し寝かせてよ。
身体中痛いしだるいし辛いんだ。

おやすみ……

「起きろっつってんだろがこのダメツナが！」

「ぅぐっ！！！！」

突然の衝撃にツナは目を覚ました。
いや、無理矢理目を覚めさせられた。

頬に走った痛み。

（…あ、口切れた。）

口の中に広がる鉄の味で、ツナは呑気に頭の中で言葉を発した。

「…もう一発食らわせねぇと起きねぇみてぇだな」

「いういいういいいい！！起きてます起きてます起きてます！」

小さな拳にぐっ、と力が込められたのを見て、ツナは慌てて身体を起こした。

ズキンッ！

「いっ……たぁぁぁああ！！」

再び身体に激痛が走り、ツナは布団へ逆戻りした。

（……え、布団？）

「てめぇ、何日も寝こきやがって。」

（……え、何日も？）

「広がった傷を治療する手術だってしたっつうのに。」

（……え、手術？）

「それに、」

「ちょっと待ったーーー！！！」

ツナは無理矢理リボーンの話を中断させる。

「ダメツナのくせに生意気だぞ。」と何か弾のようなものを放たれたがそれは置いといて。

「ここ何処！！何日も寝てたってなに！！手術ってどういうこと！！」

ツナは寝起きにしては物凄い剣幕でリボーンに問いただす。

「…ちっ」

（し、舌打ち！！？）

「おめぇはな、」

「ちょ、今の舌打ちなんだよ！」

「…舌打ちなんてしたか？」

「したした！絶対した！」

わざとらしく首を傾げるリボーンをツナは恐ろしいと思った。
まったく侮れない赤ん坊だ。

「……」

「……」

「あのあとな、」

（舌打ちの意味なにー！！！！）

心の中でツナが思いきりツッコミをいれているのも知らず（知らないふりをしているのかもしれないが）、リボーンはここ数日間のこ

とを説明しだした。

ツナが倒れたのは五日前。

ぷつりと糸が切れたように意識をなくしたらしい。

リボーンたちは急いで重傷者であるツナ、結加、獄寺、山本、リーダーを巨大化したトンノの背に乗せ、病院に運んだ。

（残った骸たちはもう一度トンノが背に乗せていったとか。）

どうやら一番怪我がひどかったのがツナのようで、ツナだけが手術をしたのだ。

手術は無事成功したが、ツナは意識が戻らないまま何日も病院のベッドに寝かされていたのだという。

「大変だったんだぞ。毎日毎日いろんな奴がおしかけてきて、ツナは大丈夫か、とか同じようなこと聞いてきたんだぞ。」

「…そんな大騒動になってたんだ」

何も知らずに眠っていたツナは申し訳なくなった。

そして、あることに気付いた。

「……ということは、もしかして五日間、リボーンはずっとここにいてくれたの？」

「……」

「……ねぇ、」

「一応おめぇはオレの生徒だからな。」

その瞬間、ツナはリボーンが神々しく見えた。

そして謝りたくなった。

さっきの無礼を許してくれ、とあの爆弾野郎の得意技である土下座をしたくなった。

「っリボーン、ありが」

「お礼はラ・ナミモリーヌのケーキでいいぞ。」

ぐしゃり、とその神々しさは消えた。

一瞬にしてリボーンが悪魔に見えた。

「……ですよねー。」

はは、とかわいた笑いをツナは口から漏らした。

そうだ、この超俺様な赤ん坊が見返りを求めないわけがない。

先程の感動を返してくれ、と言いたかったが言葉にできなかった。

（……意地汚いなぁ）

「なんか言ったか？」

「いえ何も！！！」

結局、この家庭教師様には頭が上がらないのだ。

標的９７　空白の五日間（後書き）

日常的なものは書いてて楽です。
あまりバトらないでいただきたいです。

しばらくはこんな、のほほんとした感じですね。

骸と雲雀が出演するかが危険です。
だって二人ともお見舞いとか来ないし！
骸はクロームが行くから来る、という感じになるんだろうけど…。

結加は！？とか、
獄寺、山本は！？とか、
リーダーは！？とか、
いろいろ気になる方もいるかと思いますが、安心してください。
ちゃんと出ますから！
無理矢理にでも出させますから！

もうすぐ標的１００になります。
記念にイラストでも、と思い今描いてます。
リーダーやロンジも描きました。
ウライラさんたちも描きたい！

サイト運営が楽しいです（＾ｏ＾）

読んでいただきありがとうございました！

標的９８　憂鬱

じめじめとした空気に機嫌は急降下する。
日本の美しい季節の中で最も億劫になる梅雨。
雨は止まず、空気は湿り、無駄に暑く感じる。
病室は温度調整が完璧なはずなのに、なぜか嫌なじめじめ感があった。

「……だるい」

「…何もしたくないよね…」

もさもさとうさぎの形に切られた林檎を食べながら、ツナとトンノは呟いた。

可愛らしい林檎のうさぎは次々と二人の胃の中へと入っていく。
特別お腹が空いているわけでもない。
だが何故か自然と林檎に手をつける。
無意識で二人は林檎を口に運んでいた。

「…おめぇら、ちんたらしてんじゃねぇぞ」

そんな二人を見ていたリボーンが注意する。
先程からツナとトンノを観察していたが、二人はただつまらない会話をしながら林檎を貪っているだけだった。

「ひゃっへ、ひははんはほん。」

「はへはっははひ、はんははふひひ。」

「口に林檎詰め込みすぎだ。何言ってんのかわかんねぇよ。」

ハムスターのように頬に林檎を一杯詰め込んで喋る二人に、リボーンは静かに銃を向けた。

一瞬ツナとトンノはびくっと飛び上がり、必死に林檎を飲み込もうともがいた。

ごっくん。

「だって、暇なんだもん。」

「雨ばっかだし、なんかだるいし。」

「これが日本の季節なんだから仕方ねぇだろ。

暇だとかほざいてんじゃねぇぞ。」

リボーンは懐に銃をしまってひょいっとベッドの上に飛び乗った。
少しだけベッドのスプリングが軋む。

「怪我するおめぇが悪いんだろ。」

「それこそ仕方ないじゃん！怪我しないようにする余裕なんてなかったんだよ！」

思いきり叫ぶと、腹の傷に響いた。
「ふげぇ」と不気味な声を出してツナは腹をおさえてうずくまる。

「ああっ、また傷が開いちゃうよ！」

バサバサと羽をばたつかせてトンノが慌てる。
トンノの翼によって起こる風が気持ちいいと痛みに耐えながらもツナは思った。

「…トンノ、そのままバサバサしてて」

「え！！？」

「甘ったれんな、ダメツナが。」

バチンッ！！！

「いってぇ！！」

リボーンの掌がツナの頭を叩いた。
どうすればその小さな掌からそんな強い力が出るのか。
常に疑問で仕方ないが、この最強の赤ん坊様には当たり前なのだろう。

叩かれたところをさすりながらツナはリボーンを睨んだ。

「はっ、おめぇの睨みなんか痛くも痒くもないぞ。
それでもボンゴレ十代目か。」

「うっ、うるさいなあ！！」

ツナの睨みを軽く鼻であしらわれたのが無性に腹立たしく、ツナはまた傷のことを忘れて叫んだ。

そしてつい「ボンゴレ十代目」という言葉をあっさりと聞き流していた。

「普段のおめぇは迫力もないしな。
超死ぬ気モードの時の方が幾分かは迫力があるぞ。」

これからもみっちり修行だな、と目を輝かせたリボーンを見て、ツナは何も言えなくなった。

（…絶対人をおちょくって楽しんでるよ！）

はあ、と大きなため息をついてツナはベッドに横たわった。

「…学校、もう始まってるんだよね」

「ああ、休校も解いちまったしな」

一定の速さで進む時計の秒針を見つめながらツナは呟いた。

修行があるとかでリボーンが無理矢理学校を休校にしてから結構日が経っていた。

そろそろ再開しなければ学生の本業が忘れ去られてしまうだろうと休校を取り消したのだった。

「まあ、毎日一日中ここに獄寺や山本がいても喧嘩するだけだしな。了平も加わるとめんどくささが倍になる。」

「あ、はは……」

あとから聞かされた話なのだが、ツナが意識を取り戻すまでの数日は大変だったらしい。

重傷と思われていた獄寺と山本は、どうやら日ごろの鍛えのおかげで打撲やかすり傷程度だったらしい。
一応、一日だけ入院をし、次の日にはすっかり元気だったらしく、今は普通に学校に通っているようだ。

今だ入院しているツナのそばには、常に獄寺と山本がいて、一方的に獄寺が山本にかみつき、そこに見舞いに訪れる了平が加わって騒ぎがさらにでかくなるのだ。
（ただし山本は獄寺と了平のやりとりを見て笑っているだけなのだが。）

それがかなり耳障りで、リボーンが休校を解除した理由のひとつだと言う。

「……お前、どんだけ権力すごいの。」

「……秘密だ。」

意味深な沈黙のあと、にやりとリボーンは笑った。

（……聞かないでおこう。）

ツナは超直感で何かを感じ、聞くのをやめた。

「そういえば、結加ちゃんやリーダーは？」

「ああ、おめぇの意識がない間に退院しちまったぞ。」

獄寺や山本と同様に負傷していた二人を思い出し安否を聞き、無事だということでツナはひどく安堵した。

「結加は自宅で大人しくしてないといけないらしいが、リーダーはすっかり完治してるみてぇだ」

「よかった」

全員無事なようで、ツナの顔が安心に緩む。

それを「マヌケな顔だな」とリボーンが笑った。

そんな日常を、望んでいた。
こんな幸せを、望んでいた。

（みんなが無事で、よかった）

ツナはそう思わずにはいられなかった。

いずれ訪れるであろう戦い。
せめてそれまでは。

涙が出るほどの笑顔と幸せを。

標的９８　憂鬱（後書き）

林檎が食べたくて林檎を出しました。↑

ひ、標的１００が近づいてきてます！

なぜか緊張します（´・ω・、）

何かお祝いをしなければ。

なにがいいんでしょうか。

読んでいただきありがとうございました！

標的９９　忘れかけていた事

「よっ、坊主！」

「綱吉様、お体の調子はいかがですか？」

勢いよく病室のドアが開き、赤い髪の毛の男と礼儀正しい男が入ってきた。

「リーダー、ロンジさん！」

ベッドの上でリボーンから出された課題（暇だ暇だと愚痴っていたらいきなりやれと言われた）を片付けていたツナの顔が一気に明るくなった。

「傷の方はどうだ？」

「…んー、まだ大声出すと痛いけど…大丈夫だよ」

そうか、と言い、リーダーはゴトリとビニール袋を備え付けの机の上に置いた。

「…なにこれ？」

「メロンだ。歩いてたら知らねぇおばさんがくれてよぉ！」

にっこりとリーダーは笑って袋から立派なメロンを取り出した。

「うっわ、高そう……」

「どうもおばさんが育ててるらしくてな、余ったから貰ってくれって言われたんだ」

片手でサッカーボールほどの大きなのメロンを持ち上げてリーダーは言った。

するとリーダーは、「ほらよっ」とメロンをツナの方に投げた。

「わあぁぁあっ！！！」

思わず両手でメロンを受け取るが、その重さに驚いた。

片手で持っていたリーダーが信じられない。

「お、重い……」

「そうか？おめぇが貧弱なだけだろ！」

「リーダーさん、あなたが怪力なだけだと思うのですが……」

ロンジが「すみません」とツナに謝ってからメロンを受け取った。
なんだかんだ言ってロンジもメロンを軽そうに持ち上げている。

「…テンションがた落ち。」

「ん？なんだ、嫌なことでもあったのか？」

（あんたのせいだよ、あんたの！！）

なんて言うことは出来ないのでツナは曖昧に返事をしておいた。

「綱吉様、ご退院はいつ頃なのですか？」

「それがまだわかんないんだよね。」

ツナは口を尖らせて不満そうな顔をする。

「重傷だったはずの獄寺くんや山本は普通に学校に行ってるのにさ」

「あ？なんだ坊主。そんなに勉強がしたいのか？」

「違うよ。…ただ、暇なだけだよ。だってみんながいないんだもん」

曇り空を見つめてツナが呟く。

いつも獄寺たちが学校帰りに病室に来てくれるのだが、二人の話を聞くたびに寂しさを募らせていた。

こうして誰かが見舞いに来てくれることが今一番の救いだった。

「ゲームも出来ないし、リボーンの課題は多いし」

「それはあれだ、あいつなりの愛情表現なんだ。ありがたく受けとっとけよ」

にやにやとしながらリーダーは机の上の課題を手にとって見ていた。少し形の悪い文字が並べてある。それなりに課題はこなしているらしい。

「お、意外とちゃんとやってんじゃねえか！」

「失礼だな！なんだよ意外って！ちゃんとやらないとリボーンが何するか分からないしさ…頭パンクしそうだよ」

大きくため息をつくツナに、ロンジは微笑みかけた。

「でもちゃんと課題をこなそうとする綱吉様は立派ですよ。努力をした後には必ずいいことがありますから。頑張ってくださいね。」

どうぞ、と綺麗に切られたメロンを差し出され、ツナは礼を言って受け取った。

「ほんとにロンジさんってすごいよね。面倒見がいいって言うか…気が利くって言うか。」

「そりゃあ、ボンゴレ九代目についてたってんだから当たり前だろ。」

大きな口を広げてメロンを貪るリーダーにロンジは「メロンの果汁が垂れてますよ」とティッシュを差し出した。

「頭もいいよね。どうしてそんなにすごいの?」

「そんなことはありません。いつも兄には負けてしまうので。」

「あ、兄?」

「おや、言ってませんでしたか?」

聞き返したツナにロンジは少し驚いた顔をした。

「私には兄がいまして、二人で幼い頃からボンゴレにいたんです。兄は頭もよく、運動も出来た人でした。そんな兄が羨ましくて、私は兄に追いつこうと勉強をしたり運動をしたりしてました。」

ツナとリーダーは興味津々にロンジの話を聞いていた。
ふと、リーダーがロンジに質問をした。

「そういやぁ、お前さん本名は？」

「それも言ってませんでしたか。」

またまたロンジは少し驚いた顔をした。

「私の名前はＬｏｎｇｉ　Ｃｏｒｎｅｌｉｏ　Ｇｅｎｅｒａｌｉ（ロンジ・コルネリオ・ジェネラーリ）です」

「車みてぇな名字だな。」

ふーん、と相槌をうつリーダーに、次はロンジが質問をした。

「あなたのお名前は？」

「ん？あぁ、オレは、Ｌｅａｄｅｒ　Ｂａｒｔｏｌｏｍｅｉ　Ｐａｃｉｎｉ（リーダー・バルトロメイ・パチーニ）だが。」

「二人ともかっこいい名前だね」

いいなあ、とツナは二人の名前を羨ましがる。
外国人の名前はやけにかっこよく聞こえるのだ。

「んだよ、坊主の名前だってかっこいいじゃねぇか」

「“綱吉”。将軍徳川の五代目で、“生類憐れみの令”を出した人の名前ですね。」

さらりと日本の歴史の人物を簡単に説明しまったロンジ。
リーダーは知らなかったらしく、「へぇー」とロンジを尊敬する目で見ていた。

「そんなたいそうな名前つけられても、こんなダメツナって呼ばれてるんじゃ、申し訳なくなるよ」

苦笑いをして言うツナに、ロンジは笑いかけた。

「綱吉様の何処がダメなんですか。

例え頭の要領が悪くても、運動神経が優れていなくても、他人を思いやる優しい心を持っていればダメなはずないですよ。
周りの人達は綱吉様の魅力に気付けていないのでしょうね。」

「そうだぞ坊主。オレみてぇな奴を受け入れてくれたお前さんはダメなんかじゃねぇぞ！」

ばしっ、とリーダーに思いきり背中を叩かれツナはむせてしまったが、とても嬉しかった。

自分のことをこんな風に言ってくれるんだ、と心が熱くなるのを感じた。

「お、そういやぁ、お前さんの兄貴って今もボンゴレで働いてんのか？」

「兄ですか？兄は今、九代目の命令で世界を飛び回っているそうですよ。」

突然ふられた質問に、ロンジは戸惑うこともなく答えた。

「お兄さん、なんで世界を飛び回ってるの？」

「兄は、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）を探しているらしいですよ。」

「へぇー、そうなん……」

ぴたりとツナが固まった。
ロンジとリーダーはどうしたのだろうとツナの顔を覗き込む。

汗がたらりと頬を伝う。

「……わ、」

（忘れてたあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）

心の中で大声で叫んだのと同時に、汗がぽたりと下に落ちた。

標的９９　忘れかけていた事（後書き）

先日質問をいただきました。

“ロンジとリーダーの名前は何か”

そういえば公開してなかったなあと（笑）

ロンジさんは、
Ｌｏｎｇｉ　Ｃｏｒｎｅｌｉｏ　Ｇｅｎｅｒａｌｉ（ロンジ・コルネリオ・ジェネラーリ）。

イタリアにはロンジっていう町っぽいのがあるみたいです。

リーダーさんは、
Ｌｅａｄｅｒ　Ｂａｒｔｏｌｏｍｅｉ　Ｐａｃｉｎｉ（リーダー・バルトロメイ・パチーニ）。

そもそもイタリアでは、ミドルネームはあまりないみたいです。
でもなんとなくつけました。

名前考えるの楽しかった！

次回で標的１００になりますよ！
意外と早かった！道のり！

読んでいただきありがとうございました！

標的１００　手がかり

最近いろいろな事が起こりすぎて、ツナはすっかり忘れてしまっていた。

スペランツァを見つけ出すのに重要なもの。

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）。

七つの役割をもつ者たちの中で、現在見つかっているのはｓｅｒｖａｇｇｉｏ（セッ　ラッジョ）であるシクロとシスイのみ。

以前二人はｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）について説明をしてくれていた。

ＮＯ．７　ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）

名前：セブラーノ

ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）は同盟という意味を持ち、印判を守る。

NO.6　serraggio（セッラッジョ）
名前：シクロ（兄）、シスイ（弟）
serraggioは鍵をかけることで、錠と鍵を守る。

NO.5　atlante（アトゥランテ）
名前：ファイアス
atlanteは地図帳という意味で地図を守る。

NO.4　binocolo（ビノーコロ）
名前：フォア
binocoloは双眼鏡という意味で双眼鏡を守る。

NO.3　veicolo（ヴェイーコロ）
名前：スリノキ
veicoloは乗り物という意味でほうきを守る。

NO.2　arma（アルマ）
名前：ツイ
armaは武器という意味で盾と矛を守る。

NO.1　genuino（ジェヌイーノ）
名前：ワンゴラ
genuinoは真実のことで水晶を守る。

これら全員が揃わないと、スペランツァの居場所はわからないらしい。
だがその前に誰が何処に眠っているのかわからない。

ロンジの話では、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）を見つけ出すためにロンジの兄が世界中を飛び回っているのだと言う。

「……手がかりとかは、あるの？」

「一応、あるらしいのですがどれも曖昧みたいで…。」

ロンジは困ったような顔をする。

シクロとシスイは偶然ボンゴレが所有していたのですぐに発見されたのだが、残りは世界中にばらまかれているのだ。

探すことは難しいに決まっている。
しかも確証のない手がかりを元にしてだ。
どれだけ時間がかかるかわからない。

「…なんか、大変だね。」

「ちゃんとした手がかりもねぇのかよ」

「ずいぶんと昔のことで、何より、ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のお二人の話を聞くまでほぼ謎の伝説のようなものでしたから……。」

食べ終わったメロンの処理をしながらロンジは苦笑いをした。

「……でも、」

ロンジがぴたりと動くのをやめる。

「……ある、諸説によると、」

ロンジの異変に気付き、ツナたちに緊張が走る。

ゆっくりと、ロンジは言葉を発した。

「ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の在りかは、……ボンゴレの大空属性、…つまり、歴代ボスの記憶に刻まれている、らしいのです。」

「…え？」

言葉の意味がわからず、ツナは目を丸くする。
リーダーもツナと同じように理解していないらしいが、リボーンは真剣な表情になった。

「……ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の在りかが刻まれているのですよ。…ボンゴレ十代目、沢田綱吉様の記憶に。」

「…っんなあぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁあ！！！？」

「あぁぁぁぁぁああぁぁぁぁあ！！！？」

病室内にツナとリーダーの叫びが響いた。

「うるせぇっ」とリボーンが二人の頭を殴った。
痛い。だがそれよりも驚きの方が勝っていた。

「ま、まままままま待って！
オレの記憶に刻まれているって……ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の在りかが！？
そんなのオレ知らないよ！小さい時の記憶だって曖昧なのに！！」

「これはあくまで諸説ですから、事実とは限りません。
…しかし、ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃｏｓｔｏ（ナスコスト）と大空属性が関係しているということは間違いがないそうです。」

備え付けの椅子に腰掛け、ロンジが話を続ける。

「…ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のお二人がまだ封印を解かれていない状態で発見されたとき、九代目だけでなく、守護者の皆様も封印を解こうとしたのですが、できなかったのです。」

「だから、封印を解くことが出来たおめぇが、おそらくスペランツァに深く関係しているってことだ。
現に、徳松のｃｕｏｒｅ（クオーレ）はスペランツァの元にあると言っていただろ。」

今だ信じられなかったが、リボーンの言葉に何も言えなくなった。
説得力があったのだ。

「…じゃあ、九代目の記憶に残ってるんじゃ……！」

「残念ながら、九代目の記憶にもないそうです。
歴代ボスの記憶にもそれらしきものはなかったらしいのです。」

「シクロとシスイが言ってただろ。」

“悪は人を汚し、世界をも汚した。その力に耐えるため我らは己を封印し、目覚めのときを待った”

“我らは、いずれ訪れるであろう世界の波乱をなるべく抑えるため、このような姿となり世界に散らばった”

“我らを目覚めさせたのは、あなたがはじめて。あなたの力であれば、近づく悪を止められる”

二人は確かにこう言っていた。

「悪っつうのは、Ｄｉｓｐｅｒａｒｅ（ディスペラーレ）のことだろう。」

「Ｄｉｓｐｅｒａｒｅ（ディスペラーレ）って、セバスティアーノのこと？」

「そうだ。そいつを止められるのはツナ、おめぇだってことなんだぞ。」

ツナは頭が混乱していた。

自分にそんなことが出来るのだろうかと思わずにはいられないのだ。

本当なのだろうか。
憶測ではないのだろうか。
ただの諸説ではないのだろうか。

ツナの口は言葉を紡ぐことを忘れてしまった。

標的１００　手がかり（後書き）

無事、標的１００を迎えることができました！

長かったです。
でもあっという間な感じもします。

わたしが運営しているサイトでコメントさせていただきましたので、
お暇なときにご覧いただけると嬉しいです。

実質的には１０１話目なんですけどね！（笑）

これからもよろしくお願いします！

読んでいただきありがとうございました！

標的１０１　闇夜の思考

静まり返った病院。
ちらほらと灯る明かりは、夜勤の看護師や医者のいるところだ。
ある個室、一人の少年は眠れずにベッドに横たわっていた。
真っ暗な部屋は暗順応の働きによってうっすらと何があるかはわかる。
ぽつりと空に浮かぶ月の光が差し込んでいる。
その中で、ツナは今日あった出来事を思い出していた。

「…いまいち、わからないんだけど。」

「今言ったことが事実だ。」

きっぱりと言い放ち、納得しているらしいリボーンとは逆に、ツナは納得していなかった。

リボーンの言うことは説得力はあるのだが、ツナがそれを納得できないのだ。

「ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）は、マフィアに伝わるもんだって言ったことは覚えてるか？」

ツナはその言葉に聞き覚えがあったのでこくりと頷いた。

「さっきロンジが言ってた諸説っつうのは、長年、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）を研究していたマフィアに属する学者の言ってたことだ。
おめぇが封印を解いたことで、ずいぶんと研究が進んだらしい。」

その学者はマフィアの中でも名が高く、評判もいい学者だった。
意見は明確で、かつ根拠もしっかりしており、説得力がある。

そんな学者が言ったのだ。

“ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の在りかは、ボンゴレの大空属性、つまり、歴代ボスの記憶に刻まれている。”

マフィア界は混乱に揺らいだ。

マフィアの最高位であるボンゴレがｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）に関連している。

ようやくｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のひとつであるｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）の封印が解けた。

しかもその封印を解いたのはまだ幼いボンゴレ十代目。

多くのマフィアは驚愕し、多くのマフィアは疑った。

ボンゴレ九代目でさえも解けなかった封印を、子供が解いたのだ。

ざわめくマフィアたちを黙らせたのは、その学者の言葉だった。

“わたしは今まで一度も間違ったことは伝えていない。

真実しか公表していない。
そんなに信じられないのならば、わたしが証明してみせよう。
ボンゴレ十代目、沢田綱吉の力を。”

「…で、近々日本に来るそうだ。」

「……は？」

「だから、そいつがおめぇの力を研究しに来るらしい。」

「…っんなあぁぁぁあああぁぁぁあ！！？」

本日二回目のツナの叫び。
本日二回目のリボーンの拳。

ロンジとリーダーはただ苦笑いをしているだけだった。

「なんでまた殴るんだよ！！」

「おめぇがうるせぇからだろ。」

ふん、と鼻をならしてリボーンは購入しておいたコーヒーをすする。
安物のそれはリボーンの口に合わないのか、リボーンは眉をひそめた。

「なんでその学者って人がオレを研究するんだよ！」

「自分の意見を否定されたのが悔しかったんだろ。
あいつは自分の考えを絶対に曲げたりはしない。自分を納得させるような証拠がなければな。」

にやりと小さな赤ん坊は笑った。

「……なんでオレなんかを…」

はあ、とため息をついて窓の外を見つめる。
珍しく雨は降っておらず、星は輝きその存在をあらわしている。
ざわざわと木々は揺れ、静かな音を立てていた。

リボーンの話からツナは上の空になりがちだった。
見舞いに来てくれた獄寺と山本が話しているときも、ツナは考え事をして二人に心配された。

（あんな話をするリボーンが悪いんだ。）

ツナは隣の部屋で眠っているであろうリボーンを怨んだ。

なぜかリボーンは病室をひとつ借り、そこで眠っているのだ。

ロンジも「私もいいですか」と今日からリボーンと共に病室に泊まることになった。
なんでもツナの世話をしたいらしい。

リボーンは奈々にはちゃんと言っているらしく、承諾も得たと言う。

「……そろそろ寝よう」

時計の針は一を指している。

ツナは眠るために目を閉じた。

だが、何かがそれを遮った。

再びツナは目を開き、起き上がる。

（……何か、いる？）

ドアを見つめながら、ツナは思った。

超直感が伝えている。

“廊下になにかがいる”と。

もしかしたら、ディスペラーレかも知れない。それか他のマフィアか。

ツナはXグローブをつけ、死ぬ気丸を服用した。

額からオレンジ色の炎があらわれる。
鋭い眼差しにかわったツナの瞳もオレンジ色に輝いた。

（……徳松？）

ツナは意識の中にいる徳松に話しかけたが応答はない。
意識を失ったあの日から、一度も徳松は目覚めていない。

痛み止めのおかげで腹の傷に痛みはない。
点滴をはがし、ツナは静かにドアに近づく。

気配がだんだん強くなる。

緊張がだんだん大きくなる。

ガラッ

ドアが開かれると同時に、ツナは炎を燈した拳を振り上げた。

標的１０２　真夜中の訪問者

廊下から感じた気配。

なにかがいると超直感が告げる。

炎を燈したツナは、慎重にドアへと近づく。

確かにいる。おそらくは人だ。

ツナは警戒を高め、相手の出方を待った。

……ガラッ

ドアがひかれた瞬間、炎を燈した拳で攻撃を仕掛けた。

ボウウッ！！

「っわあぁぁぁ！？」

「っ！？」

聞こえたのは予想外な叫び声。
声の主はどすんと尻餅をついた。

「ま、待て待て待て待て!!!私は敵ではない!!」

目の前には少し裏返った声で必死にツナを止める人間がいた。
炎で顔を伺うと、少し年老いた男が怯えた表情をしていた。

「……お前、誰だ?」

「綱吉様!!いかがされましたか!?」

隣の部屋のドアが勢いよく開かれ、ロンジが慌てて出てきた。

「…な、なぜ……!?」

ロンジはツナと男を見て、目を見開く。
その後ろから、パジャマ姿のリボーンが現れた。

「なんだ、もう来たのか。」

「あ、ああ…リボーンもいたのか……」

廊下に腰を抜かしている男は、リボーンの顔を見るとほっとしたような表情になった。

「…リボーン、こいつは……」

「こいつが、昼間言っていた学者だぞ」

リボーンの言葉に、ツナは唖然としてしまった。
オレンジ色の瞳に動揺が伺える。

「こいつがお前の力を研究したいと申し出た、Ｏｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）だ。」

「……は？」

流石は超死ぬ気モード。
普段のツナとは打って変わって冷静に驚いた。
いつもなら「んなあぁぁぁぁあ！？」とか奇妙な叫び声をあげるだろう。

ツナはちらりと学者である男を見た。

「……わたしが、Ｏｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）だ。
……よ、よろしく…な。」

力無く手を振り、へらへらとオスカルは笑った。

「…しかし、驚いたものだ。」

オスカルはベッドの上にいるツナを見つめながら呟いた。

今だツナの額には炎が揺らめいている。

先程、超死ぬ気モードを解こうとしたらオスカルに止められた。
そのあまりの必死さにツナは正直引いた。

「噂はもちろん、姿は写真で見たことはあるが…本当に子供だとは。」

「……。」

痛いほどの視線に、ツナはどうしていいのかわからなかった。
戸惑ってはいるのだが、そのポーカーフェイスに感情は隠されてしまっている。
心の中では、どうしようどうしようと慌てているのだ。

「本当に、こんな小さな身体に力があるのか？」

「……小さいって言うな。」

「すまない。だが、実に興味深いね。
炎の純度も綺麗だ。
なにより、大空のボンゴレリングが君を選んだことに関心がある。」

ツナの右手をとり、指輪を見つめながらオスカルは笑う。
研究しがいがありそうだ、ととても楽しそうだ。

「どうだね。今から少し研究を……」

「馬鹿言うなオスカル。もう夜中だ。
それにツナは怪我もあるし、ゆっくり休ませねぇと治りも遅くなる。
」

夜中だと言うのに研究をしようとするオスカルをリボーンは止めた。
オスカルは不満そうな顔をしたが、リボーンの凄みに何も言えなかった。

「昼、ここに来ればいい。
それなら研究してもいいぞ。」

「…おい、リボーン、」

「わかった。ならば昼に再び来るとしよう。」

どっこいしょ、とオスカルは椅子から立ち上がり、ドアに向かっていった。

「では、また。」

オスカルはあっさりと挨拶をして病室から出ていった。

「……なん、だったんだ…あいつは。」

「だから、マフィアに属する学者のＯｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）だって言っただろ。」

「あの方は、夢中になると周りも何も見えなくなってしまいますからね…」

ロンジは苦笑いをして、ツナの点滴を直した。

ちくり、と肌に痛みが走る。

「おめぇも寝ろ。明日起きれなくなるぞ。」

「…ああ。」

じゅう、と額の炎が消え、グローブは手袋の姿に戻った。

瞳はオレンジから琥珀へと色を変える。

「…おやすみ。」

「チャオ」

「おやすみなさいませ。」

リボーンとロンジはゆっくりと病室から出ていった。

病室に残されたツナは、しばらくドアを見つめていたが、眠らなければならないとベッドに横たわった。

（…厄介なことになったなぁ）

ため息をひとつついて、ツナはゆっくりと目を閉じた。

標的１０２　真夜中の訪問者（後書き）

し、新キャラ登場！

マフィアであり学者さんでもあるオスカルさん。

本名はＯｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）。
今回はロンジたちみたいなミドルネームはつけないことにしました。
元々ミドルネームなんてあまりつけませんし…ね。

オスカルさんをどうやって動かしていこうか楽しみです。

読んでいただきありがとうございました！

標的１０３　おかしな学者

ツナは眠かった。
まぶたが重く感じた。

眠たいせいか気分は優れない。
さらにそれに梅雨のじめじめ感が加わってひどい状況だ。

昨夜、謎の男が訪問してきた。
正確に言えば病院に侵入してきたということになるが。

その気配に気付いたツナはハイパー化し、敵かと思いその男を攻撃しようとしたが、そいつは敵ではなかった。

それほど会話はしなかったが、また昼に来る、と言って帰っていった。

どうやって忍び込んだのだろう、とツナは思ったが、何故か聞いてはいけないような気がして聞くのをやめた。
ツナの超直感が聞かないほうがいいと、そう告げたのだ。
（つまりは不法侵入ということになるのだが。）

とにかくその男のせいでツナは寝不足だった。
課題を進めるスピードが遅くなっているのがわかる。

時々、意識が飛びそうになる。

「……っ、あー！ダメだ！寝よう、よし、寝よう！」

耐えるに耐えれなくなったツナはついに課題を放棄した。
枕に顔をうずめ、就寝体制にはいる。

（一眠りすれば頭も働くようになるよね。それに今はリボーンたちも買い物で出払っているし、誰も見舞いに来ない時間帯だし。
いいや、寝ちゃおう！）

頭の中で勝手に納得し、ツナは夢の中へ旅立った。

どれくらいの時間が経ったのだろう。

外は相変わらずの雨で、じめじめ感は変わらずにあった。
先程寝たのは十時くらいであったから、一時間くらいは経ったのだろう。

ツナは何かに起こされている気がした。
なにかがツナの名を呼んでいる。
それは耳からはいるものではなく、頭の中からのものであった。

それに導かれるまま、ツナはゆっくりと目を覚ました。

「……え？」

「…あ。」

何かと目があった。
寝起きで視界はぼんやりとしていたが、確かに何かと目があった。

金色が見える。
水色の丸いものが二つ。
肌色、白色……

「っんなあぁぁぁぁぁあ！！！！？」

ツナは完全に覚醒した。
叫び声をあげて身体を勢いよく起こした。

目の前にいるのは、昨夜ここを訪れたあの男。

「…な、……な、なんで！」

「え、約束の時間は昼だっただろう？
ほら、今は十二時十五分。」

腕時計を見せられれば、確かに針は十二を過ぎている。

ああ、そうか、と納得してしまいそうになったツナは、そんな約束はしていないことに気付いた。

「でも、オレ約束なんかしてませんよ！」

「したじゃないか。昼に来れば研究させてくれるって。」

「それはリボーンが勝手に言ったことでしょう！
オレは約束なんかしてませんから！」

確かにツナは約束はしていない。
勝手に約束をしたのはリボーンだからだ。
確かにツナは承諾もしていない。
勝手に話を進めたのはリボーンだからだ。

「って、なんですかそのカルテ！」

「病院からちょっと拝借したんだよ。
君が本当に人間かどうか確かめたくて。」

「わかるでしょう、普通に人間ですよ！ていうか勝手に人の個人情報を拝借しないでください！」

ツナはカルテを奪おうと手を伸ばしたが、ひょいとかわされてしまった。
それればかりか額を大きな掌で押さえ付けられて動けなかった。

「身長…１５７ｃｍ、小さいね～。
体重は４６．５ｋｇって、君何食べてるの。痩せすぎだよ痩せすぎ。
筋肉ついてる？今が成長期なんだから規則正しい生活と運動をしないといけないよ。それと…」

「言わないでください！気にしてるんですから！！」

大声を張り上げてツナは話を遮った。
何故か息が荒い。そして疲れた。

「……余計な、お世話ですよ！
…えっと、名前は……」

「昨日聞いてなかったの？
わたしはＯｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）。
４５歳の学者だよ。」

よろしく、と差し出された手をツナは戸惑いながらも握った。
その手は大きいだけでなく握力も強かった。
ポキ、とツナの手の関節が小さな悲鳴を上げた。

「…で、いつ帰ってくれるんですか。」

「まさか！まだ帰らないよ！
君のことまだ何も研究してないんだからね！」

オスカルは束ねた長い金髪を指でくるくると巻きながら微笑んだ。
水色の瞳が綺麗だ、とツナは思ったが、まだ帰らないというオスカルの言葉に焦った。

「え、帰ってください！オレは普通の人間なんですから！宇宙人でも何でもないただの人間ですってば！」

「普通の人間が額から炎を出すわけないだろう。まず、マフィアのボスという時点で普通の人間じゃないよ。…ということで、」

オスカルがにやりと笑った。
まるでリボーンが悪巧みをしているような顔だった。

「ボンゴレ十代目の沢田綱吉くんへの１００の質問、いきまーす！」

「なんでだあぁぁぁぁぁあ！！！！」

そのあとツナは全ての質問にふらふらになりながら答えた。
答えおわった頃にやっとリボーンたちが帰宅した。

標的１０４　学者の欠点

ああ、疲れた。
精神的に疲れた。

くらりと目眩がする中、ツナは疲労を感じていた。

少し昼寝をしようと思い、しばらく眠っていたのだが、目覚めたら目の前にはマフィアの中の学者だとかいう男がいた。

ツナが起きるなりその男、オスカルはツナに質問をし続けた。

どれもくだらないものばかりだったが（最初は誕生日やら血液型やら。さらには好きなタイプまで聞いてきた。）、後半はそれなりに真剣な質問になった。

何故かオスカルは骸と戦った時のことや、ヴァリアーとリング争奪戦をした時のこと、しまいには未来で白蘭と戦った時のことまでもを聞いてきた。

オスカルが何故そのようなことを知っているのかはわからなかったが、ツナは質問に答えつづけた。

「…ふぅん、Ｄｉｓｐｅｒａｒｅ（ディスペラーレ）ね……」

今はウライラたちとのことを話していた。
マフィアだから情報が早いのだろうか。
結構詳しいことも知っていた。

「そいつが宇宙を支配って…お子様みたいな考えだね」

「それ、是非本人に言ってくださいよ……」

実際それを本人に言えば殺されるだろうが、そもそも今ディスペラーレがどこにいるのかもわからないが、疲れきっていたツナはそんなことにも気付かなかった。

「…うん、質問はおわりだ。
答えてくれてありがとう！」

にっこりと笑って礼を言うオスカルは輝いているように見えた。
逆にツナはげっそりとしているが。

すると、病室のドアが開き、ツナのよく知る人物たちが入ってきた。

「おや、オスカル様。本当にいらっしゃったのですか？」

「よっ、オスカル。研究は進んでるか？」

「リボーン。それに、ロンジさんだったかな。
まだ研究はしてないよ。
今は質問に答えてもらってたんだ」

「……それにしては、綱吉様が痩せこけていらっしゃいますが…」

ロンジは手に持っていたビニール袋を降ろし、ツナの元へと駆け寄った。

「ご飯も食べていらっしゃらないのですか？
それに、熱があるように思いますが……」

「だって、この人が昼ごはんを食べようとすると次々と質問してくるし、具合が悪いって言ってもお構いなしに話を続けるんだもん……」

ふらふらとしながらツナは答えた。
ロンジは急いでツナを寝かせ、額に濡らしたタオルを置いてやった。

「ちょっと、オスカル様！

綱吉様に無理はさせないでください！」

「すまないすまない。夢中になりすぎてしまったんだよ。」

「そのおめぇの悪い癖は昔から相変わらずだな」

リボーンはベッドの上に飛び乗り、ツナの頬をぺちぺちと叩いた。

「今こいつは普段より弱ってんだ。
無理はさせんじゃねぇ。これでも一応将来はボスなんだからな。」

「いてっ、いてっ！リボーン、ちょっと叩かないでよ！」

ツナは頬を叩くリボーンの手を払い、叩かれたそこをさする。
どこまで容赦のないやつなのだろうか。
少しは優しくできないのだろうかとツナは思った。

「そうだ、ツナ。学校から手紙が来てたぞ。」

ほら、とリボーンから手紙にしては大きな封筒を手渡され、ツナは不審に思いながらも封を開けた。

中には、何枚かのプリントが入っていた。
その内容は……

「……き、期末テスト…？」

そろそろ六月下旬。
世の中の学生たちが勉強に力をいれる時期だ。
最近は色々なことがありすぎて、ツナはテストという存在をすっかり忘れていた。

「…これ、受けるの？」

「受けなきゃ成績はねぇぞ」

「でも、それまでに退院出来ないんじゃあ……」

すると、リボーンはにやりと笑って口を開いた。

「安心しろ、おめぇは三日後には退院できるぞ。
それならテストには間に合うだろ。
よかったな、ツナ。」

なんていう絶妙なタイミングだろうか。

ツナは一瞬頭が真っ白になった。

「退院、ということは…研究ができるな！」

「無理はさせないでくださいよ！」

「テストも受けれるし研究も出来る。
よかったじゃねえか。なあ、ツナ。」

喜ぶオスカル。
注意をするロンジ。
楽しそうに笑うリボーン。

ふらりと意識が遠退いた。
額の上のタオルがずるりとずれた。

今回ばかりは、入院が長引いてほしいとツナは願わずにはいられなかった。

標的１０４　学者の欠点（後書き）

最近タイトルが思い付きません…。
だからまったく無関係なものになったりしますよ！

オスカルさんが意外と人気でした。
お茶目なオッサンですよ、オスカルさんは！（笑）

リクエストもありましたので、
近日中に（おそらく今日中）オスカルさんの絵をサイトにアップしたいと思います。

学校はやっとクーラーがつきはじめました！
テスト中は快適ですね（´ω`）

読んでいただきありがとうございました！

標的１０５　勉強好きと賭け

二日後には退院をする。
それは普通喜ばしいことなのだろうが、ツナは億劫でたまらなかった。

学生が嫌うもの。
期末テストという難関がツナの目の前に立ちはだかった。

頭の弱いツナは常にテストの順位は最下位に近い。
それゆえに周りからダメツナと罵られる。

それが悔しいなら一生懸命勉強をすればいいのに、と思うだろうが、テストをしなければならない、と思うと途端に勉強に手をつけれなくなる。

そんな好き好んでテスト勉強をする者は滅多にいないだろう。
ツナなんかはその逆なのだ。

「まだ時間はあるじゃねぇか。
考えてみろ。一週間以上も先のことだぞ。」

「わかってはいるんだけど…テストって意識しちゃうと勉強したく

なくなるんだよね」

ベッドに突っ伏しながらツナはため息をついた。
リボーンから出された課題は先程終わった。
今はその余韻に浸っているところである。

やだなあ、とツナが小さく呟くと、病室のドアが控えめに音をたてた。

「……あのー…、綱吉くんいますか？」

「ツナ、いる？」

顔を覗かせるのは、結加とその頭に乗ったトンノだった。

「結加ちゃん、トンノ！」

「なんだ結加、もう怪我はいいのか」

「おかげさまで歩けるようになりました。」

えへへ、と顔を綻ばせながら結加は病室に入る。
トンノは結加の頭から離れ、ツナの元へと飛んでいった。

「ツナ、調子はどう？痛くない？」

「もう大丈夫だよ。」

「でも、それにしては元気がないよ？」

首を傾げながら聞くトンノに、ツナは苦笑いをした。

「いやぁ…昨日、学校からテストのことで手紙をもらって…やだなあって思ってたんだ……」

「あ、それ私ももらったよ」

結加もツナと同じように学校を休んでいたらしく、持っていた鞄の中からツナが持つものとまったく同じ封筒を取り出した。

「テストなんて嫌になっちゃうよね…」

「そうかな？私はテスト好きだけどな」

共感を求めようとしたツナの表情が一気に強張った。

はじめて見た。
テストを嫌がっていない人間を。
稀少ではないだろうか。
もはや天然記念物ではないだろうか。

「……え、テスト好きなの!?」

「うん、楽しみ!だからさっき、本屋さんで参考書買っちゃったんだ!」

うきうきしながら結加は鞄から何冊かの参考書を取り出した。
ツナはそんなもの自分とは無縁だろうと思っていたので、見るのは初めてだった。

「結加は勉強が得意だからな。
ツナも見習ったらどうだ。」

「綱吉くん、勉強嫌いなの?」

「嫌いだし、苦手だし……まず勉強って何をすればいいのか…わからないし……」

後半は吃りながら目を横にそらすツナを見て、リボーンは呆れたと

言わんばかりにため息をついた。
トンノは勉強というものをあまり知らない（鳥だから当たり前だろうが）ので何も言わない。

「私も昔は嫌いだったけど…自分なりの勉強方法とか見つけて、頑張った自分にご褒美をあげてたらいつの間にか勉強が好きになってたんだよね」

「ご褒美？」

「うん。お菓子とか、自分の好きなものをご褒美にするの。もちろん、勉強が終わるまではそれを我慢しなきゃいけないんだけどね」

今まで勉強にそれほど関心のなかったツナはすごい、と思った。
自分なりの方法で苦手なものを克服しているのだ。

「…いいな、その方法。」

「え？」

リボーンがぽつりと独り言のように呟いた。
その直後、嫌な予感がツナを襲う。

「よし、ツナ。今度のテストで平均点以下だったら罰ゲームだぞ。」

「なっ、なんでだよ！いやだよそんなの！！」

突然の提案にツナはもちろん反対した。
リボーンの考える罰ゲームなんてものは酷いに決まっている。
そんなこと、わかりきっているから尚更やりたくなかった。

「そこまでしねぇと、おめぇ勉強しねぇだろ」

痛いところをつかれ、ツナは何も言えなくなった。
それを承諾として受け止めたのか、リボーンは話を進めた。

「おめぇ、オスカルに研究されるの嫌がってたよな」

「そりゃあ、自分を研究されるのは嫌に決まって……、…まさか、」

頭の中で警報がけたたましく鳴った。
だがもうすでに遅い。

「全教科平均点以下、ひとつでも落としたら何が何でもオスカルの

研究に付き合え！」

「そんなあぁぁあぁぁあ！！！」

リボーンのほくそ笑む顔に、ツナは胃がキリキリと痛むのを感じた。

テストは一週間後。

それまでにツナは一般的な頭脳に追いつけるのだろうか？

はたして。

「是非平均点以下を取ってわたしの研究に付き合ってくれ！」

「いつからいたんですかオスカルさん！」

標的１０５　勉強好きと賭け（後書き）

最近ツナがかわいそうです！（笑）

次回からはやっと獄寺くんたちが出れそう…でしょうか？

入院生活はおさらばです。

わたしも今日、テスト最終日なので頑張ってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的１０６　久々の登校（前書き）

昨日は更新できなくてごめんなさい（、・ω・、）

標的１０６　久々の登校

太陽が眩しい。
空は青々と広がっている。
はるか向こうには、大きないくつかの入道雲。

梅雨の間の晴れ。
じめじめとした空気が一気に変わる。

アスファルトから照り返される熱。
まるで肌に突き刺さるようだ。

「……あつい」

玄関から出たらこの天気。
久々の登校には迷惑きわまりない。

ツナは夏服の襟でぱたぱたと風をつくり、独り言のように呟いていた。

先日、ツナは無事退院した。
しかしそんなすぐに怪我が完治するわけがないので、今は運動を禁じられている。

苦手な体育を休めることは嬉しいのだが、少し走るだけでも腹部に痛みが走るのは辛い。

「学校まで歩いていけるかなぁ……」

「無駄な心配すんじゃねぇ。
何かあったらナッツでも使って助けを求めろ。」

見送りなのか、ただ喝をいれにきただけなのかはわからないが、中からリボーンがツナに話しかけた。

「無責任な！」

「自分の身体のことは自分で責任を持て。
ほら、さっさとしねぇと遅刻するぞ。」

にやりと笑って追い払うようなしぐさをするリボーンを睨み、ツナは歩きだした。

「っ、いってきます！」

「じゃあな」

足を進めた途端、生ぬるい風が頬をなぶる。

何故こんなにあついのか。

異常気象か、地球温暖化か。

ニュースで手に入れた情報を頭の中に思い浮かべながら、ツナは学校を目指した。

「おはようございます、十代目！」

「よっ、ツナ！！」

教室の扉を開けると、獄寺と山本が笑顔でツナに近寄ってきた。

久しぶりな朝の風景に少し感動しながらも、ツナは笑顔で挨拶を返した。

「ほんとに大丈夫なのか？その怪我。」

「歩くくらいなら大丈夫だって。

流石に走ったりはできないけど…」

「無理しないでくださいね、十代目！」

ツナは心配してくれる友人たちに感謝をし、自分の席へとついた。

その後も何人かの生徒に話し掛けられ、もちろん京子にも大丈夫かと言われた。

（その時ツナはとても幸せそうな笑顔だったとか。）

そのまま話しているうちに担任が教室に入って来て授業が始まった。

以前はわからないからと半ば諦めていたが、今回はそういうわけにもいかない。

自分の身柄がかかっているのだ。（大袈裟に聞こえるがツナにとってはそれほど大きなこととらしい）

ツナはわからないながらも必死に黒板を見つめ、教師の説明を聞いていた。

運が良かったのか、偶然なのか、習ったところは入院中にリボーンに出された課題の範囲だった。

「ツナー、今日は随分必死に授業受けてたのな」

「…うん、ちょっとね、」

「なにかあったんスか？」

昼休み、屋上で昼食をとっていた中、山本がツナの授業態度の変化に気付き問いかけてきた。
その理由を教えてもいいのかと一瞬迷ったが、ツナは二人に打ち明けることにした。

「…実はさ、イタリアからへんな学者の人が来て、今度のテストで全教科平均点以上じゃないとその人の研究に付き合わないといけなくなっちゃってさ」

「研究…ってどんなだ？」

「まだわかんないけど、なんとなく嫌じゃない？研究って…。だから、なんとか平均点以上取らないといけなくて……」

「…そういうことだったんスか」

獄寺と山本は唖然としながらも、納得したような素振りを見せる。

「では、十代目が変な奴の研究に付き合わされないように、オレが十代目の勉強を手伝わせていただきます！」

「っ、ほんとに！？」

「それなら、オレもやるぜ！」

獄寺は拳を握って意気込み、山本は満面の笑みで言った。

本当に、自分はいい友人をもったと思う。

ツナはにっこりと笑った。

「二人とも、ありがとう！」

遠くから蝉の鳴き声が聞こえる。

日差しは容赦なく照り付ける。

梅雨があけようとしている。

ツナは穏やかな夏休みを迎えることができるのだろうか。

それは、全てテストが終わってから。

標的１０６　久々の登校（後書き）

先日、テストがやっと終わって帰宅し、疲れて寝てしまい、更新ができませんでした。

テスト週間で小説のストックがなくなってしまったので…。
５話分が一気に消えた！わあぁ！

本当にごめんなさい。
しかも今回はつまらなすぎた！
すみませんでした（´・ω・、）

でも絵はどんどん生まれていくという（笑）

でもサイトに載せていないという（笑）

ホラー小説を書けるほどの文才をください。
（唐突！）

読んでいただきありがとうございました！

標的１０７　本番

何かに没頭するとこんなにも時間が早く過ぎるように感じるのかとツナは思った。

気付けばテスト当日。

カレンダーで日付を確認するが間違いない。

この一週間、本当によく自分は勉強したとツナは自身を褒めた。

はりきる獄寺が、「まずは今の勉強をどれくらい理解していらっしゃるかテストをしましょう。」とお手製のテストを持ってきた。

そのテストの結果は全教科が三割程度しか解けない散々なものだった。

テストの結果を見た獄寺は、わざわざツナの得意な所や苦手とする所を分析し、ツナ特製の問題集を作り上げた。

山本の教え方は独自の解釈なのでツナにはまったく理解できなかったが、山本の優しさが伝わってきた。

どうやら今回山本はいつもより余裕らしく、基礎問題は普通に解けるようになっていた。

そんな勉強会を毎日開き、土日は復習だとかでまた獄寺お手製のテストをやった。

結果は五割から六割ぐらいしか点数がとれなかったが、獄寺と山本は褒めてくれた。

ツナはそれが嬉しくて、教えてくれた二人のためにも頑張らなければ、と自分の心を鬼にして勉強に励んだ。

そんなツナを見てリボーンがにやりと笑っていたのをツナは知らない。

だが普段しない勉強を一週間も続けると流石にだれてしまう。

ツナの頭は容量がいっぱいになってしまったのか、それ以上に勉強をすることを否定するかのように覚えれなくなってしまった。

しかし時間は止まりはしない。

焦りを覚える中、とうとうテストの日を迎えてしまったのだ。

「…っ、落ち着かないー！」

「うるせぇぞ。」

起床してからの第一声が落ち着かない。
昨日から同じ言葉を繰り返す生徒に、家庭教師はいらついていた。
ガチャリ、とわざと音をたてて銃を向けると、ツナは「ひいっ！」と甲高い悲鳴をあげ、両腕を目一杯高くあげて命乞いをした。

「昨日からうだうだうるせぇんだおめぇは。」

「だ、だって、もう全く何も覚えれなくなっちゃって…！」

「おめぇの頭が限界ってことじゃねぇのか」

他人事のようにかわすリボーンをツナは睨む。
そんなツナを知っているのか知らないのか、リボーンは小さな声で言い放った。

「ま、それほどおめぇは頑張ったってことだ。
この一週間の努力を思いきりぶつけてこい。」

にやり、と笑ってリボーンは部屋からでていった。
ツナは呆然としてリボーンがいた場所を見つめていた。

（……もしかして、励ましてくれた？）

スパルタの家庭教師が。
鬼の家庭教師が。
悪魔の家庭教師が。
最強のヒットマンとして恐れられている、あの家庭教師が。

「…ははっ」

（わかりにくいのがリボーンらしいや）

小さく笑ったあと、ツナの表情は優しくゆるんだ。

「ありがと、リボーン。」

姿の見えない赤ん坊にツナは礼を言った。

登校中、獄寺に問題を出してもらい最終確認をしていた。
だがそれでもわからないものはわからないままで、教室に入り席についてからツナは何度も学んだところを見直した。

「どうしたんだー、沢田！何真面目に勉強してんだ？」

「……」

「おーい、沢田、」

「うるせぇ！黙ってろ！十代目は今勉強してらっしゃるんだよ！！」

こんなやりとりが何度も繰り返される。

普段勉強もろくにしないツナが真面目に勉強をしていることに疑問を持ったり、からかう奴らがいるのだ。

それを「十代目の邪魔をする奴は果たす！」と右腕の獄寺が追い払っている。

だがその騒動の原因であるツナは勉強に必死で気付いていなかった。

中学のテストは意地の悪いものだ。

教科は五つだけだが、それを一日で終わらせようとする。

それが生徒たちをさらに苦しませるのだ。

そうこうしているうちに、教師が現れ連絡をしたり注意事項を言ったりしていた。

ツナは慌てて勉強道具を鞄の中にしまい込み、しっかりとチャックをしめた。

「用紙が余ったらそこらへんに置いておけー。
いいか、絶対カンニングなどの不正行為はするなよ！」

ぶつぶつとしつこく注意しながらテスト用紙が配られる。

ツナの頭の中は一週間叩き込んだことがぐるぐるとめぐっていた。

（平均点以上取らないと…またおかしなことに巻き込まれる！）

平和を望むツナにとっては、これは一大事なのだ。
普通に生きて、なるべく何気ない日常を送りたい。
そう願わずにはいられなかった。

「はじめ！」

教師の合図と共に教室に紙のめくれる音が、次にカリカリと何かを

綴る音が響いた。

はあ。

ひとつ、深呼吸。

（落ち着け、オレ！）

心の中で己をなだめ、ツナはシャーペンを走らせた。

標的１０７　本番（後書き）

なかなか更新できなくてごめんなさい。
土日は午前午後部活で忙しくて（´－ω－；）

最近のお話はつまらないですね！
自分でも驚いてます。

さっさとテストおわらせよう（笑）

読んでいただきありがとうございました！

標的１０８　開放感

開放感。

今はそれを楽しんでいる。

ツナはやり切った。
頭をフル回転させて期末テストに挑み、やっとそれを終わらせた。
今は帰宅し、ベッドの上に寝転んでいるところだ。

（あぁ～、疲れた～…。やっと終わったよ…疲れた疲れた…。）

まぶたが重い。
視界が定まらない。
意識が遠退いていく。

「お、ツナ、帰ったのか。」

ひょっこりと、黒服の赤ん坊がドアの向こうから現れた。

だがツナは返事をすることも億劫で、ぼやけた瞳でその姿をとらえた。

「おい、寝るんじゃねえ。メシが食えなくなるぞ。」

リボーンに寝るなと注意されるが、ツナは睡魔には勝てない。

ゆっくりと、まぶたが閉じる。

意識は夢の中へと流れ込む。

「……ぐぅー…」

「…ちっ、オレの言うことを無視するとは、いい度胸じゃねぇか。」

小さく舌打ちをして、リボーンはツナを起こそうとベッドに飛び乗る。

頬を叩いてやろうか、と企んでいると、ツナの目元に隈(くま)がくっきりと出来ているのに気付いた。

寝る間を惜しんで勉強に励んだ証だ。

「……仕方ねぇな」

独り言のように言ったあと、リボーンはくるりと引き返し、部屋からでていった。

「…起きるまでは寝かせといてやるか」

レオンがリボーンの顔を覗き込む。
それを軽くあしらい、リボーンは階段をおりていった。

一面に広がるのは、ただ蒼い、蒼い大空。

ツナはそこにふわりと浮いていた。

ここはツナの意識の中。

大空属性であるツナの意識は、澄んだ大空なのだ。

「…どこにいるんだろう」

ツナはあたりを見回す。

もう何週間も、ツナは徳松を見ていない。

ディスペラーレが去ってから、つまりツナが気を失う前から、徳松は眠り続けている。

入院中もテストの勉強をしているときも、一度も目を覚まさない徳松をツナは心配していた。

「……あっ」

琥珀の瞳になにかをとらえた。

大空に浮かぶ、朝焼け色の炎。

脱色した茶色の髪の毛。

それは間違いなく、徳松だった。

ツナはすぐさま徳松のところへ駆け付けた。
だが徳松は眠っていた。
まぶたをかたく閉じて、目を覚ます気配はない。

「…そんなに、力を使わせちゃったかな」

ごめんね、とツナは眠っている徳松に謝った。

自分の能力なのに、自分自身なのに、ツナは徳松が本物の兄弟、家族に思えて仕方なかった。

「早く起きてよね、徳松。」

君がいないと、つまらないよ。

大空に小さく、寂しそうな声が響いた。

「……あ、れ？」

視界は真っ暗。
少し蒸し暑い。

汗をかいていたのだろうか、風が頬をなぶるとひんやりと冷たさを感じる。

何時だろうと時計を見ると、針は一を指していた。

（…どれくらい寝てたんだろう）

ゆっくりと身体を起こし、ひとつ欠伸をする。

眠気はまったく取れていない。
どれだけ自分は疲れているのだろうか。

どうせ今日から二日間はテスト休暇だ。

いくら寝ても大丈夫だろう。

ツナは一先ず風呂に入るために部屋の明かりをつけた。

だが何気なく見た方向にあるものを発見し、絶句することとなった。

「…っなあぁあぁぁぁあ！！？」

「っ、何、どうしたのツナ！？」

ツナの悲鳴に驚き、寝ていたトンノも目を覚ました。

だがリボーンはすやすやと眠っている。

するとドアが開き、赤髪の男がはいってきた。

「……んだよ坊主ー、ゴキブリでも出たのかー？」

今日はツナの家に泊まっていたリーダーが眠たそうに欠伸をして問い掛けた。

「なんで、なんで、なんで!?」

「なにがだ……って、うぉおおお!!?」

ツナがわなわなと震えながら床を指差す。
その方向を見たリーダーは一気に眠気が吹っ飛んだのか目を見開いて驚愕した。

「…なんだ、うるせぇな」

流石に今の騒ぎで起きたのか、リボーンが機嫌の悪そうな声色で問うた。

「リボーン、どういうことだよ!!」

「なにがだ?」

「なにが、じゃなくて！これ！！」

リボーンがツナの指差す方向を辿る。
その先にいたのは、あの風変わりな男。

「……またか。」

ひとつ、大きくため息をついた。

リボーンの思考に気付いたレオンが手中に銃としておさまる。

「おい、不法侵入だぞ。」

ガゥンッ！！！

弾が勢いよく放たれた。

標的にされた男…オスカルは、目を見開いてかたまっていた。

標的１０９　不法侵入

世の中では無断で他人の家に乗り込むことは犯罪とされる。

いわゆる“不法侵入”だ。

法定刑では３年以下の懲役または１０万円以下の罰金で、未遂も処罰される。

ツナたちの目の前には、そんな犯罪を犯してしまった愚かな学者がいた。

「てめぇ、そのすぐに周りが見えなくなる癖直せ。いつか捕まるぞ。」

リボーンが呆れたようにため息をつく。

床に寝転んでいる愚かな学者、オスカルは苦笑いをした。

「それとも今、通報してやってもいいんだぞ。それかボンゴレが独自にお前を……」

「す、すまないすまない！！どうしてもこの癖は直らないんだ！謝るから通報しないでくれ！ボンゴレを敵にまわしたら私はどうな

るか…」

「わかってるじゃねぇか。」

にやりと笑いリボーンはツナの隣に降り立った。
ツナとトンノとリーダーは唖然とした表情だ。

「…ねぇ、この人なんなの?変人さんなの?」

「トンノの言うとおりだ。こいつ学者じゃなくてただの変人じゃねぇか。」

リーダーの肩に乗っているトンノが本音をこぼし、リーダーもそれに頷いた。
確かに、今オスカルは学者ではなくただの変人にしか見えない。

「私は変人ではない!ちょっと風変わりなお茶目学者だ!」

「つまりはふざけた変人学者ってわけだな。」

うんうんと納得したようにリーダーとトンノは頷く。

何か否定のような叫び声が聞こえるが二人は気にしない。

「…どうしたんですか、オスカルさん。こんな夜中に……。」

やけに冷静なツナがオスカルに用件を尋ねる。
するとオスカルは思い出したようにツナの方に振り向いた。

「そうだそうだ!!君に言わなくてはいけないことがあるんだ!」

途端にきらきらとオスカルの表情が輝いた。
だがツナはそのオスカルの表情に嫌な予感しかしない。

「そういえば、君にまだ質問してないことがあったなって思って。」

「…は?」

ツナはオスカルの言葉の意味がわからなかった。

いや、わかってはいたがその意味を受け止めたくなかった。

「ま、まさか……」

「あの時すっかり忘れてたんだよね」

オスカルが持ってきた鞄をさばくり、笑顔でぺらぺらと言葉を綴る。

するとバサリ、と音をたてて鞄の中から何かを取り出した。

見覚えのあるそれに、ツナは青ざめる。

「ボンゴレ十代目の沢田綱吉くんへの１００の質問第二弾、いきまーす！」

「またかあぁぁぁぁぁぁぁああ！！！」

ツナの嫌な予感は、見事的中した。

うきうきと楽しそうなオスカル、まさかの予感的中に唖然とするツ

ナ。

相反する二人をトンノとリーダーは言葉もなく見つめていた。

そんな微妙な空気を、唯一冷静なリボーンが壊した。

相棒の銃で。

パアァァァァァァアンッ

「ぎゃっ！！」

「ひいっ！！」

「わあっ！！」

「うおっ！！」

上からオスカル、ツナ、トンノ、リーダーのおかしな声が部屋に響いた。

しばらく部屋に静寂が訪れる。

一番最初に我にかえったのはツナだった。

「なっ、なにしてんだよ!!こんな夜中に銃を撃つなんて!母さんたちが起きちゃうじゃん!」

「おめぇらが呆けてるからだろ。」

ふん、とリボーンは鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

ツナは耳をすましたが、外は騒いでいる気配はないし、奈々たちも起きてはこない。

はあ、とツナは安心のため息をついた。

「おい、オスカル。おめぇは来るタイミングが悪すぎるんだ。テストの結果が返ってくるまで来るな。どうせ二日後に結果は分かるんだ。それくらい我慢しろ。」

「……う…、わ、わかったよ…」

少し不満そうにオスカルは頷き、手に持っていた質問事項が書かれた紙を鞄の中にしまう。

それを見てツナは安堵した。

「わかったならさっさと帰れ。
ツナ、おめぇは風呂に入って寝ろ。
今日くらいならゆっくりしてもいいぞ。」

オスカルに帰るように言ったあと、リボーンは振り返ってツナに告げた。

少し帰ることを躊躇うオスカルをリボーンが蹴りを入れて追い出してしまった。

まったく容赦のない赤ん坊である。

そう心の中で呟くとリボーンがぎろりとツナを睨みつけた。

その睨みに一瞬怯え、ツナは逃げるように風呂場に向かった。

（ほんとに自分勝手だよなぁ、リボーンって）

「文句あんのか、ダメツナ」

「勝手に心を読むなよ！」

標的１０９　不法侵入（後書き）

だんだんオスカルさんがあほになっていきます。
そんなはずではなかったのに…。

わたしはクールな人を書けないみたいです（笑）

ツナたちにとっての夏休み…長くなりそうです！
どうしましょう！

わたしの夏休みと共に終わることができるだろうか…。

ちなみに、ツナたちの夏休みは早めに始まりそうです。

読んでいただきありがとうございました！

標的１１０　テスト結果

（…っあ～～～。おさまれ動悸！！）

バクバクと外にまで漏れてしまっているのではないかと思うほど、ツナの心臓は音をたてていた。

ツナは緊張しているのだ。

本日返される、テストの結果に。

（平均点以上なかったら、オレ…どうなるんだろう）

もしかしたら、研究の一環だとか言われて解剖でもされてしまうのではないだろうか。

そんな有り得ないことをツナは心配していた。

食欲もなく、そこそこに食事を済ませ、重い足どりで家を出た。

玄関では、リボーンが何か面白そうににやりと笑う姿を見てしまった。

あの顔は絶対今の自分を面白がっている、とツナは思った。
伊達に家庭教師と生徒をやってきたわけではないのだ。
それくらい、ツナにはわかる。

玄関のドアを開けると、いつものように獄寺がツナを待ち構えていた。

「おはようございます、十代目！」

「…あ、おはよ……」

力なく微笑むツナを見て、獄寺はツナの体調が悪いのかと心配をしてきた。

「傷に響くんでお荷物、お持ちします！」と言い、普段より重いツナの鞄（リボーンが「おめぇは勉強道具を持って行かねぇで、どう勉強するつもりだ。」と鞄に勉強道具を詰め込んだのだ）をツナから奪い取るように抱えた。

「え、いいよ大丈夫だよ獄寺くん！」

「いえ！十代目はまだ傷が癒えていらっしゃらないし、なんだか体調も悪そうなのでオレがお持ちします！」

どんなに鞄を取り返そうとしても頑なに鞄を返そうとしない獄寺を見て、ツナはため息をついて諦めた。
と言うか諦めざるを得なかった。

獄寺の一方的な会話のおかげでツナはあまり話さずにすんだ。
適当なところに相槌をうつだけでいいのだ。
気分の晴れない今、あまり会話ができないツナにとって、それはとてもありがたかった。

「ツナ、おはよっ」

「あ、山本おはよう」

後ろから肩を叩かれ、振り返ると朝から爽やかな笑顔の山本がいた。
山本は獄寺にも挨拶をしたが、
獄寺は「朝からやかましいんだよ、野球馬鹿！」と文句を言うだけ

だった。

「ん？そういや、ツナ元気ないな。
具合でも悪いのか？」

「十代目は今体調が優れていらっしゃらねぇんだよ！お前は黙ってろ！」

「ぐ、具合が悪いわけじゃないよ！体調も良いし、どこも痛くないし！」

ツナは笑顔をつくり、獄寺から鞄を取り返して元気さを繕った。

「それならいいけど、無理するなよ？」

「うん、ありがとう山本」

心配をしてくれた山本にツナは礼を言い、遅刻してはいけないからと足をはやめた。

自分の席についても猶も心は落ち着かない。

早くテストの結果を見たいという好奇心と、もしかしたら平均点がないかも知れないから見たくないという恐怖心とが葛藤していた。

そんな心の休まない時間を過ごし、とうとう教師が教室内に入ってきた。

その手には、大量の用紙。

どうやら一人の教師が五教科すべてのテストを返すらしい。

各時間にそれぞれの教科のテストを返すと思っていた生徒たちは驚きでざわついた。

ツナもまた然り。

驚愕で声も出ない。

そんな生徒たちをよそに、教師は連絡やら何やらを伝えていく。

その時間はツナにとってはとても長く感じた。

「…よし、じゃあテストを返すぞ。
今回は先生が全教科のテストを返すことになった。覚悟しとけよ。」

バサバサと教師が解答用紙を揺らす。
その顔はとても楽しそうだ。

「ちなみに平均点は、全教科が同じ点ってことはいつものことだから分かってるよな。
今回は６５点だ。その半分以下は赤点だからなー。」

（ろ、６５点！？）

意外にも高い点数にツナはさらに驚愕した。
全教科がその点数なのだ。
今までそのような点を取ったことのないツナにとっては難関でしかない。

「名簿順だからさっさと来いよー」

呑気に教師は解答用紙を返却し始める。

それとは真逆でツナは失神してしまうのではないかというくらい緊張していた。

次々と解答用紙が生徒の手に渡る。

生徒たちはそれぞれ喜びや哀しみの表情を浮かべている。

獄寺にも解答用紙が返された。
教師がなにやら「全教科９５点以上はお前だけだぞ」と言っていたが獄寺はそんなことは気にすることなく席へと戻っていった。

「おい、沢田！」

「っ！！」

とうとう来た。
運命の時がやって来た。

高鳴る心臓をおさえ、ツナはふらふらとしながら教師のもとへと行く。

その様子を獄寺と山本が心配そうに伺っている。

「沢田、今回どうした？」

「…なんですか、いつも通り赤点ばっかですよね……」

半ば諦めた表情でツナが呟いた。
だが教師は笑顔でツナの肩を叩いた。

「違うぞ。今回はよく頑張ったな！
赤点なんてひとつもないぞ！」

ほら、とツナの手に五枚の解答用紙が渡される。

ツナは教師の言葉が信じられず紙に穴が空くほど点数を凝視した。

国語　６７点

英語　６８点

社会　７１点

理科　６９点

ぺらり、と最後の解答用紙がめくられる。

数学　６４点

平均点は、６５点。

「っそんなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ツナはその場に座り込んだ。
数学の点数が頭から離れない。
忘れたい。見なかったことにしたい。

ああ、確か点数は。

平均、以下。

「じゅ、十代目……」

「惜しかったな…ツナ……」

しゃがみ込むツナに獄寺と山本が駆け寄る。
ツナの肩はかすかながらに震えていた。

（そんな、そんなそんなそんな！！！
数学だけが…数学だけが平均以下なんて！！）

もはやツナの瞳には涙がにじんでいた。

何も知らない教師や生徒たちは唖然としてツナを見つめているだけだった。

研究、その言葉がツナの頭をよぎった。

ツナの夏休みは、平和にはならないらしい。

標的１１０　テスト結果（後書き）

かわいそう、ツナ！

でもこうしないと話が進まないので…。

平均点６５点は難しいですよね。

今思いました（笑）

わたしでさえも７０点以上ほどなので…。

獄寺くんは満点たくさんとりそうですよね。

ちなみに山本さんは全教科５０点以上あったみたいです。よかった！↑

ツナには悪いですが…研究に付き合ってもらわなければ！

読んでいただきありがとうございました！

標的１１１　諦念

絶望感、

落胆、

後悔。

空を見上げながら、ツナは様々な不の感情を巡らせていた。

バサバサと、鳥が空へと羽ばたいていく。

（…いいなあ、オレも自由になりたいなぁ……）

ぽろりと、本音がこぼれた。

小さな悲しさを帯びる背中を、獄寺と山本は気まずそうに見つめていた。

「十代目……」

「そうとうショックだったみたいなのな…」

今は昼休み。
三人は屋上で昼食をすませているところだ。

だが先程からツナはあの調子で、二人はどう接していいのかわからず、フェンスに顎を乗せてうなだれるツナを見守ることしかできないでいる。

ツナのテストの結果は、凄まじい成長を遂げたものだった。
赤点なんていう話ではない。
今までそんな点数取ったことがあるのかというほど素晴らしい点数であった。

通りすがる教師たちにツナは褒められた。
だがツナは喜ぶことができない。

“全教科平均点以上じゃねぇと、オスカルの研究に付き合わされるぞ”

テスト勉強中、何度も聞いた言葉がよみがえる。

全教科、でないといけないのだ。
ひとつでも平均以下があればだめなのだ。

「……はぁ。」

腕に顔をうずめて、ツナはため息をつく。
苦手なものは苦手なんだ、と心の中でその言葉をくりかえした。

ツナをこんな状態にさせたのは、数学である。
唯一、数学だけが平均以下であった。
一点、たかが一点、されど一点だ。

だがあの家庭教師が一点を見逃してくれるはずなどない。

例え一点足りなくても、平均以下には変わりないのだと言うはずだ。

空腹感はない。
ただ諦念（ていねん）の気持ちがツナを支配していた。

ガチャリ、と屋上の扉が開かれた。
獄寺と山本が「あ。」と声を揃えたのと、ツナの背中に衝撃が走ったのは同時だった。

「っいってぇぇぇえ!!」

ガシャガシャとフェンスの網が鳴る。
ツナは衝撃の走った背中をさすって後ろを振り返った。
こんなことをする奴は、あいつしかいない。

「リボーン!!!」

「チャオッス」

黒服の赤ん坊が呑気に挨拶をした。
何もなかったかのような態度がとてもむかつく。

「なんなんだよ一体!学校に何か用なのかよ!」

「…おめぇ、テストが返却されたんだろ？」

ぎくり。

ツナの肩が動揺に揺れた。

おそるおそる、ツナはリボーンの顔を伺う。

にたりとした笑顔。

その表情は。

（…絶対結果知ってる！！！）

たらりと汗が頬を伝う。

逃げてしまいたいのに逃げることができない。

もし逃げることができたとしても、この赤ん坊には勝てない。

「おめぇ、そんなにオスカルの研究に付き合いたかったのか？」

「っそんなわけないだろ！逆だよ、逆！
研究なんかされたくないよ！」

「じゃあなんで平均以下の点数を取るんだ」

「わざと取ったわけじゃないよ！
オレだって平均以上取ろうと頑張ったんだよ！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐうちに、ツナは本気で泣きたくなっていた。
普通に生きたいのに。
今の生活でもう十分すぎるのに。
平凡が、どんどん離れている気がする。
いや、それは事実だが。

「マフィアのボスに選ばれた時点で平凡なんて関係ねぇだろ」

「オレはボスになんかなりたくない！
ってか勝手に心を読むなよ！」

騒ぎすぎたのか、腹部に痛みが生じる。
チクリチクリと地味なそれは、今のツナには十分なものだった。

ずるずると地面にへたりこんだツナを、獄寺と山本が心配して駆け寄ってきた。

「さっき結加の点数を教師に聞いたらな、獄寺には及ばねぇが、全教科９０点はあったぞ」

「嘘！ってかリボーン先生に聞いたのかよ！」

結加は今、一時的にイタリアに帰国している。
テスト明けの休みから一週間あちらに滞在するらしい。
だからテストの結果をかわりにリボーンが受け取ったのだという。

「…赤ん坊を保護者同然に扱うなんて……」

「世も末、だな！」

山本が笑ってツナの言葉を紡ぐ。

確かにこれほど小さな赤ん坊が喋る時点でおかしいのだ。
ましてや銃を操るなど、まさしく世も末だ。

「というこった、今週末から研究に付き合ってやれ」

「なっ！！？今週末って…明日！？」

あまりにも急すぎる、とツナはそれに抵抗の意を見せた。
だがそれに素直に従うリボーンではないのは百も承知だ。

「おめぇの今の力を知れるチャンスだろ。
一応おかしなことをさせるんなら止めてやる。
だが心配するな。あいつはおめぇの心配する解剖とか危ねぇことはしねぇぞ。」

ツナの今の力を知る、それがリボーンの目的だったらしい。
だからオスカルの願いを聞いたのかと今さら気付かされた。

「もしかしたら新しいことも発見できるかも知れねぇからな。
本格的な研究は夏休みだから安心しろ。」

じゃあな、と言ってリボーンは去っていった。

残されたのはツナと獄寺と山本の三人。

木々が風でざわざわと揺れた。

予鈴が寂しく、ツナの鼓膜に響いた。

標的１１２　出迎え

……ああ、真っ暗だ
これは真っ暗闇だ

…オレは前までここにいたのか
こんな、寒くて哀しくて寂しいところに
こんなところで、ひとりで眠っていたのか

…いや、ちがう

ひとりではなかった

だって、傍には誰かがいたんだ

何も見えないけれど、何も聞こえないけれど、たしかに誰かがいた

んだ

朝焼け色と、大空色と、白色と。

それに導かれるまま、

オレは、

まぶたを上げた。

導かれし魂よ

今封印を解かれ

あるべき所へ帰還する

その魂は炎となりて
世の悪を祓い清める

「……ツナ、ツナ」

「……ん、なに…どうしたの、トンノ」

「ツナ、起きて。朝だよ。」

トンノがくちばしでツナの頭をツンツンとつつく。
くすぐったいのか、ツナはすぐにうめき声をあげながら目を覚ました。

太陽の光が目にしみる。

「…なんで。今日は土曜日……」

「ツナ、オスカルさんとの約束があるだろ?」

そこでツナははっとした。
がばりと勢いよく起き上がり、トンノが驚いてベッドに転がった。

時計を見れば、朝の八時。

昨日、リボーンから聞いた話ではオスカルは朝の九時に迎えに来るとのことだった。

「よかった、まだ余裕あるじゃん。」

これなら遅刻せずにすむだろう、とツナは安心した。

バサバサッとトンノが羽をばたつかせて起き上がった。

「起こしてくれてありがと、トンノ」

「えへへ、どういたしまして」

ツナが礼を言ってトンノの頭を撫でると、トンノは気持ち良さそうに目を閉じた。

「あ、そういえば奈々さんが朝ごはんがもうすぐできるよって。」

「じゃあ着替えてから行くから先に食べてていいよ」

腕にトンノを乗せて言うと、トンノは「わかった」と言って一階へ降下していった。

ぽすん、とツナはベッドに倒れ込む。

（……、変な夢を見た気がする）

でもそれがどんな夢だったかは覚えてない。

そんなことはよくあることだから、ツナは気にしなかった。

だが、なにかが引っ掛かるのだ。

（なにか、大切なことな気がするのになあ）

もそもそと、ツナは着替えをするべく立ち上がった。

朝食を終えたツナは、憂鬱で仕方なかった。

テストでノルマの結果（と言ってもリボーンが勝手に決めたのだからツナの意思はどこにもない）を出せなかったからと言っても、オスカルの研究に快い感じはしない。

まだ何をされるかもわからないのだ。

解剖だけはされないらしいので一安心だが。

「……お、来たぞ」

隣でコーヒーを飲んでくつろいでいたリボーンが顔をあげた。

リボーンの言葉のあと、すぐにチャイムが鳴り響いた。

「じゃあ母さん、行ってきます」

「遅くなったりする場合は連絡するから心配いらねぇぞ、ママン」

「いってらっしゃい、しっかり勉強してくるのよ」

奈々には「ツナの能力の研究をしてくる」などとは言えないので、知人の家で勉強をしてくる、と言っておいた。

「あら？」と奈々は首を傾げ、閉じた扉を見つめた。

出ていったのはツナとリボーン、トンノにリーダー。
トンノならともかくリーダーまでもがツナについて行ったのだ。

だが流石は奈々。
そんな小さなことは気にしない、と朝食の片付けをしに台所へと向かった。

「…なんでついて来るんですか、リーダーさん」

「暇だし、気になっちまってよ！」

気にするな、とリーダーがツナの背中を叩く。

一瞬むせそうになったが、そこはなんとかたえた。

「あ、こっちこっち！！」

門を出ると、電柱にもたれている金髪の外人が目に入った。

「おはよう、綱吉くん」

「おはようございます」

「おいオスカル。どこに行くんだ？」

リボーンがツナの頭の上からオスカルに問いただす。

「この先の、ずっと向こうの森の地下に研究所をかまえてるんだ。そこに行くんだよ。」

「並盛…じゃないんですか？」

ツナが首を傾げて問うとオスカルは笑顔で頷いた。

まさか並盛ではないが近くに研究所をかまえているとは、思ってもいなかった。

それはリボーンも知らなかったらしい。
ふん、と鼻を鳴らして連れていくように促す。

「なあ、どれくらい時間かかるんだ?」

「えっと、歩いて5時間くらいかな」

「ごっ…!?そんなに離れてるんですか!?」

「うん、5時間。交通機関はないよ、研究に差し支えがあるからね。歩いてもらうよ。」

まさかの数字にツナたちは驚いた。
まさかの歩きという手段にさらに驚いた。

ツナたちを迎えに来たオスカルは、5時間かけてここまできたのだろうか。

だとすると早朝の四時には出発していたこととなる。

そろそろいい年だというのに、まだまだ元気らしい。

「そういえば、あのロンジさんとか言う人は今日は不在で？」

「ちょっと用があってイタリアに行ってんだ。」

「へえ、綱吉くんの執事かと思ってたから常に傍にいるもんかと……」

「あの、オレ執事さんとかいませんから」

ロンジは結加と共にイタリアに帰国している。
どうやら結加の付き添いらしいのだが、詳しいことは知らない。

「沢山お土産を買ってきますね」と笑顔でロンジと結加は出かけていった。

おそらくはボンゴレに関することなのだろう。

「ほんとに5時間も歩くのか。」

「うん、ほんとに。」

「…それじゃあ疲れるし、ツナの病み上がりの身体には負担がかかるよね」

人の気配がない川沿いにさしかかると、トンノがため息をついて乗っていたリーダーの肩から羽ばたいた。

トンノの身体からまばゆい光が発せられたかと思うと、それはすぐ一瞬でおさまり、目の前には大きな姿へと変わったトンノがいた。

「…っ、君さっきの鳥さんかい！？」

「正真正銘、こいつはさっきまでオレの肩に乗ってた鳥さんだ」

突然の出来事に興奮するオスカルを、リーダーがなだめるように静かに言った。

「ほら、僕に乗ってください。

歩いて5時間なら、僕が飛べば数十分でつく。」

「…ごめんね、トンノ」

ツナが謝ると、トンノは気にしないでと言うように優しい表情を向けた。

バサッ、と金と白の美しい翼が動く。

トンノはオスカルに指示された方向を目指し、羽ばたいた。

「お、そうだ。トンノ、獄寺と山本を拾っていけ」

「えっ!?二人もくるの!?」

「それを先に言ってよ!」

標的１１２　出迎え（後書き）

やっと物語が動きそうです。
まさかの研究所が森の中。
しかも地下。

並盛の地下はツナたちがアジトを建てますしね！

あ、その森は、あのウライラさんたちと戦ったりした森ではありません。

結加ちゃんとロンジがイタリアに行ってしまったので少し寂しいですが…それにもちゃんと理由があるので！

おいおい物語に加えますからご安心ください。

最近毎日更新ができなくなってます。
ストックが切れたのもありますが、忙しさが増したのも理由のひとつです。

なるべく、更新を滞らないようにします。

…ですが、今新たな物語を考え中です（笑）

浮気をしそうです、わあ！

…ホラーを目指して、頑張ります。

読んでいただきありがとうございました！

標的１１３　到着

あなたは誰？

“私は君の味方だよ”

なぜこんなところにいるんだ？

“今から眠りにつくからね”

ひとりで、寂しくないのか？

“寂しいよ。…でも、信じてるんだ”

なにを？

“いずれ、訪れるであろう、少年をね。
その子が訪れれば、私は目覚めることができるんだ。”

それまで、ずっとここで？

“待っているんだ。私一人では今はどうしようもないからね。”

なら、オレが傍にいてやる。

“駄目だよ。君は少年の一部となるんだよ。”

少年がいつかここに来るならば、それまで待てばいいだけだ。
ひとりでは、寂しいだろう？

“優しいね、君は。あの少年も、優しい子なんだろうなあ。”

大丈夫だ。いつか訪れるから。
今は不完全だが、少年が訪れればオレも本物になれるから。
心配するな。朝は、光は必ず訪れる。

“そうだね。さあ、眠ろうか。
おやすみ、まだ名もない小さな炎、ｃｕｏｒｅ（クオーレ）。”

導かれし魂よ
今封印を解かれ
あるべき所へ帰還する
その魂は炎となりて
世の悪を祓い清める

ザアァァアッ

一際強い風が森を通り抜ける。
葉に紛れて舞うのは、美しい金と白の羽。
ひらひらと散るそれを、風が何処かへと運んでいった。

「…ほんとに森なんですね」

きょろきょろと辺りを見回してツナは独り言のように呟いた。

元の姿に戻ったトンノは、疑うようにオスカルを一瞥し、ツナの肩へと飛び乗る。

「さあ、こっちだよ」

「ほんとにこんなところに研究所があんのかよ」

「ははっ、未来のオレたちのアジトみたいだな！」

獄寺が警戒するように森を見渡すが、それに対して山本はいつもと変わらずお気楽な様子だ。

リボーンは黙ってリーダーの肩に乗っており、リーダーは眠たいのか欠伸をしていた。

「一応私は何処にも属してはいないがマフィアの中の学者だからね、

あまり公(おおやけ)に研究所をかまえられないのさ」

がさがさと草をかきわけ、オスカルがある一本の木の前で立ち止まった。

それと同時に、ツナは何かを感じ取った。

（…この木……）

「あの、オスカルさん」

「なんだい？」

「…その木、本物……ですか？」

控えめにツナが問うと、オスカルは少し驚いたような顔をした。

しかし、すぐに笑顔になり問いに答えた。

「すごいね、よくわかったね！

君の言うとおり、この木は本物ではない。中にはいろんな機械が詰め込まれている、カモフラージュみたいなものなんだ。

これを見破れるとは…侮れないね、超直感は。」

オスカルはそっと木に手をかざし、何かを唱えた。

すると、ガチャン、という音が鳴り、目の前の木が横に退いた。

地響きのような音と共にあらわれたのは、鉄の扉だった。

「…すごい」

「ここから地下の研究所に行くんだ。私について来てね。」

そう言うとオスカルは人一人が通れるくらいの階段を、小さなペンライトで明かりを燈して下っていった。

見失わないようにと、ツナたちは急いで彼の後について行った。

カツン、カツンと足音がこだまする。

研究所へと続く階段はひんやりとしており、夏にしては涼しすぎた。

しばらくすると、大きな頑丈そうな扉の前でオスカルが立ち止まった。

「いきなり眩しいところにでるから、目に気をつけて。」

そしてオスカルは、小さな鍵穴に鍵を差し込み、ガチャリとまわした。

ギィィィイ

「っ！？」

「わ…」

眩しさに目を細めながらも、ツナは思わず声を漏らした。

数十メートル上には広い天井。

壁は硬そうな素材で出来ており、シンプルな白でコーティングされ

ている。

部屋はだいたい百メートルは距離があるだろうか。
だがその先にも扉はあるから、まだ部屋があるらしい。

一角には研究の機材やらが置かれ、それ以外には何もない。

「…広い」

「だろう？まだ部屋はあるんだけど…まあ、ここがメインとなる部屋だね」

オスカルは機材の置いてあるところへ来るように促し、ツナたちは素直にそれに従う。

何台ものパソコンが並ぶ机の椅子に腰掛け、オスカルが何やらキーボードをせわしなく打ちはじめた。

「おい、何するつもりなんだオスカル」

「まずは綱吉くんの健康チェックかな。脈はかったり…採血とか？」

「さ、採血！？」

ツナは顔を青ざめさせて後ろへと下がる。
まさか、オスカルが採血を行うのだろうかと怯えた。

「したほうがいいんだけど…まあ、健康そうだしいいかな。
身長とか体重はもう聞いたし、健康チェックはいいや。」

カタカタとキーボードを打ちながらオスカルは言い、ツナは安心のため息をついた。

「じゃあ、綱吉くんの炎をとらせてくれるかな」

「炎？」

「炎の性質や精密さを調べてみたいんだ」

回転式の椅子をぐるりとまわし、オスカルは微笑みながら言った。
炎を調べる、ということは超死ぬ気モードにならなければならない。

ツナはズボンのポケットの中にある死ぬ気丸を取り出そうと手を入れた。

だが、それはある声に遮られた。

“お前、ツナに何をする気だ”

「、？」

「っこの声……」

ボウゥゥゥウッ

声が聞こえたあと、オレンジ色の炎がツナとオスカルの間にあらわ

れた。

まばゆいほどの炎は、だんだん形を変え、小さな人間の姿になった。

「と、徳松！！」

「！！？」

オスカルは突然あらわれた小さな人間を見て、動揺を隠せないでいた。

ふわりと浮いて徳松はツナの前に立ちはだかるようにオスカルを睨んだ。

「つ、綱吉くん…これは一体……」

オスカルがふるふると震える指先を徳松に向ける。

徳松の炎は警戒するように燃え盛っていた。

オスカルと同じように、ツナも徳松の出現に驚いていた。

標的１１４　追憶？

ゆら　ゆら　ゆら　ゆら

揺らめく炎は勇ましく、美しい火の粉を散らせて燃えていた。

オスカルは驚きのあまりかたまってしまっている。

ツナも突然の出来事に動揺してしまっていた。

「…と、徳松!!」

「ツナ、平気か?」

ツナが徳松の名を呼ぶと、徳松は心配そうな顔で振り返る。

だがオスカルへの警戒心はゆるめず、ツナの前からどこうとはしない。

「ツナ、こいつは敵か?敵なら…」

「ま、まままま待って！敵じゃない！敵じゃないから！！」

徳松の炎が一気に燃え盛ったのを見て、ツナは慌てて徳松を止めた。

今だ驚いているオスカルを、徳松はじっと見つめている。

「あの、この人はオスカルさんって言って、……なんかオレのことを研究するとか…なんとか……」

後半どもり口調なツナの言葉を聞き、徳松の眉間がぴくりと動いた。

「研究とは失礼な！ツナは人間だぞ！くそっ、お前なんか今すぐ…」

「なあぁぁぁああ！！！！徳松ストップストップストップー！！」

今にもオスカルに襲い掛かりそうな勢いの徳松をツナは必死になだめた。

小さな徳松は意外と力が強く、ツナの手からすぐに離れてしまいそうでツナは一瞬だけ背筋が冷えた。

「落ち着け徳松。ツナの言うとおりこいつは敵じゃねぇ。研究っつっても酷いことはさせねぇから安心しろ。」

リボーンが落ち着いた声で徳松に言い聞かせる。
やっと正気に戻った徳松は、ツナの手の中で大人しくなった。

「…あの、綱吉くん、その子は……」

恐る恐るオスカルがツナに問う。

ツナはどう説明していいかわからなかったが、ゆっくりと徳松について話しはじめた。

「あの、徳松は…オレの能力なんです」

「能、力?」

「ああ。オレはツナの能力としてツナの心の中にいたが、ツナの能力があまりにも強すぎたから、オレは自らを封印し、目覚めるべき時を待ってたんだ。」

ツナの肩の上で徳松はすらすらと言葉を並べた。
オスカルは興味津々にツナと徳松の話を聞き、キーボードを打つ。

「だが、オレの核…ｃｕｏｒｅ（クオーレ）、人間でいう心臓みたいなものだ。
それはツナの元にもオレの元にもないんだ」

「、どういうことかな？」

「…お前、スペランツァを知っているか？」

スペランツァという単語を聞いた途端、オスカルのキーボードを打つ指がぴたりと止まった。

「…スペランツァって、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の伝説に出てくる神のことかい？」

少し小さな声のオスカルの問いに、ツナと徳松は頷いた。

「オレの核、ｃｕｏｒｅ（クオーレ）は…スペランツァの元にあるらしいんだ。」

「っ！！？」

オスカルは目を見開いた。
指がかすかに震えている。

「…それは、本当かい？」

「ああ、事実だ。それに、オレがずっと眠っていた間、かすかに思い出したんだ。」

「、思い出したって何を？」

しばらく徳松は黙っていたが、小さく、だがはっきりと言葉を発した。

「…オレが、スペランツァと会話した時のことだ。」

「っ、な！？」

予想外の答えに、ツナも驚愕した。
リボーンたちも驚いたのか、言葉を発しない。

「…ずっとずっと昔、スペランツァが深い眠りにつく前、オレはツナよりも先に生まれた。能力として。」

まぶたを上げると、優しそうな男の人が横たわっていた。
オレはその男の人に話しかけた。

…それが、スペランツァだったんだ。

これから深い眠りにつくと言うスペランツァは、どこか寂しそうで、でも嬉しそうだった。

一人でいることは寂しいと思ったオレは、スペランツァの傍にいてやると言った。

すると、彼はとても嬉しそうに笑ったんだ。

なぜオレがツナよりも数億年も前に生まれたかはわからない。

思い出せないんだ。
どうしても。

だが、そのときからスペランツァは知っていたんだ。

オレがツナの能力であるｃｕｏｒｅ（クオーレ）であること。

…ツナが生まれてくることも。

だが、なぜツナが生まれたときにオレがｃｕｏｒｅ（クオーレ）ごとツナの心に生まれなかったのかはわからない。

こうしてｃｕｏｒｅ（クオーレ）がないのにツナの元で能力として生きているのかも答えが曖昧なんだ。

…でも、わかることがある。

スペランツァは、信じていたんだ。

……いや、信じているんだ。

「ツナが、必ず目覚めさせてくれることを、今でも。」

導かれし魂よ
今封印を解かれ
あるべき所へ帰還する
その魂は炎となりて
世の悪を祓い清める

核は主の元になく
はるか遠くに眠っている
それが繋ぐものは
神と主の強い絆

標的１１４　追憶？（後書き）

更新が遅くなって申し訳ないです（´・ω・、）

ただいまいろいろ大変でして…全身が筋肉痛です。

小説は、やっとこの話の中心に近づいたかんじです。

やっと徳松さんが起きたのでわたしも一安心です。

読んでいただきありがとうございました！

標的１１５　追憶？

“スペランツァは信じているんだ。
ツナが、必ず目覚めさせてくれることを、今でも。”

広い部屋に静寂が訪れる。
誰も口を開かない。
時々、コンピュータや機械の音がするだけだ。

どれだけ時間が経ったのだろうか。
最初に言葉を発したのはリボーンだった。

「…それは本当か、徳松。」

「……スペランツァは今深い眠りについているから、オレがあの日からずっと眠っていた間に直接話したわけではないけど…わかるんだ。」

強く確信を持った瞳で徳松は頷いた。

「多分、オレのｃｕｏｒｅ（クオーレ）がスペランツァと共にあるからだと思う。
でも、その在りかまではわからないんだ。」

まるで、深い深い靄で覆われているように、スペランツァと徳松のｃｕｏｒｅ（クオーレ）のある場所は隠されている。

その場所へ行く鍵となるのが、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）とツナ自身なのだ。

今、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）はｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）のシクロとシスイだけでしかいない。

スペランツァと徳松のｃｕｏｒｅ（クオーレ）の居場所は到底不明であるだろう。

たどり着くまで道のりは長そうだ。

「スペランツァとは少ししか話してねぇのか」

「……いや…、なにか言ってた」

しばらく思い出すような素振りを見せ、小さな声で何か呟きはじめた。

「……導かれし魂よ
今封印を解かれ
あるべき所へ帰還する
その魂は炎となりて
世の悪を祓い清める
核は主の元になく
はるか遠くに眠っている
それが繋ぐものは
神と主の強い絆……」

「…なにそれ？」

徳松が唱えた謎の言葉にツナは首を傾げた。

「スペランツァが唱えていたんだ。

…思い出した。他にも……あった気がする。」

「よし、言ってみろ」

リボーンに促され、徳松は記憶を辿ってスペランツァが言っていた言葉を綴りはじめた。

願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界
混沌とする人々の心
しかし、それをなだめ
清め、澄ませるものは
ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心
それを唯一動かすものは
覚悟と意思と希望と仲間

「それって確か、シクロとシスイが封印から解かれたときに聞こえた……」

「おそらく、この呪文がｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）に纏(まつ)わる呪文ってことだろう。……そういえば、シクロとシスイは？」

「ああ、二人なら家に……」

家にいる、と言おうと口を開いた途端、部屋の空気がぶれた。

ブオン、と音がした方向を見ると、一点の空気が歪(ひず)みを起こしていた。

ブオン　ブオン　ブオン　ブオン

だんだん大きくなる不気味な音と歪みに、ツナたちは警戒をする。
だが、次の瞬間にその警戒は無駄だったことを思い知らされることとなる。

ブオォンッ

「っ！？」

「え！？」

ツナは目を丸くした。
歪みから現れたのは。

「「あ、ツナ」」

「っ、シクロとシスイ！？」

空中には、小さな人間が二人浮いていた。
その二人こそが、たった今会話に出てきたｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）、シクロとシスイである。

「どうしたの、二人とも！
家で寝てたはずじゃ……」

「「瞬間移動をしました」」

「なんで…、まさか、なにかあった！？」

まさかツナたちが外出している間に、家でなにかあったのだろうかとツナは顔を青くしたが、二人は首を横に振った。

「…じゃあ、どうしたの？」

「「…感じたんです。」」

シクロとシスイは互いの顔を見て頷きあい、言葉を放った。

「「…我ら以外の、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）の気配を。」」

標的１１６　宝物

ねえ、また僕ら、会えるときが来るよね？

ああ、また会えるさ。

本当かい？

本当だとも。

約束だよ、みんな。

これは僕らの合言葉さ。

そして、始まりの言葉だ。

さあ、誓いをたてよう。

願う祈りは光となり
主を守る力となる
帯びる炎の力は
主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界
混沌とする人々の心
しかし、それをなだめ
清め、澄ませるものは
ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心
それを唯一動かすものは
覚悟と意思と希望と仲間

さようなら、みんな。

いつか、いつか。

目覚めの時まで。

さらば。

「……どういう、こと？」

ツナがシクロとシスイに問う。

二人は迷いのない表情で、再び言った。

「「我ら以外の、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の気配を、ツナ、あなたの近くで感じたんです。」」

「オレの近く！？」

ツナは辺りを見回すが、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）らしきものは見つからない。

あるのはコンピュータと複雑な機械、それだけだ。

「確かに、ツナの近くにｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）がいます。間違いない。」

「我らは強い絆で結ばれています。
それゆえ、近くに仲間がいると自然とわかるんです。」

珍しく二人が別々に説明をする。

二人はいつものようなかわいらしいシクロとシスイではなく、真剣な眼差しの、ｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）という役目を背負った人間にしか見えなかった。

すると、今まで黙り込んでいたオスカルが口を開いた。

「…君たちが、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のｓｅｒｒａｇｇｉｏ（セッラッジョ）…かい？」

「「いかにも。」」

くるりとオスカルの方を振り返り、二人は頷く。

オスカルは静かに立ち上がり、二人に近づいた。

「…小さいんだね。」

「「これは完全な姿ではありません。
我らｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ　ナスコスト）
が全員揃った時、本来の姿に戻ることができるのです。」」

シクロとシスイの淡々とした説明を、オスカルは真剣に聞いている。

オスカルは本来、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ
ナスコスト）を主として研究をしているのだ。
目的のものが今、目の前に存在しているので必死であるらしい。

一通り話を聞き終えると、今度はそれをコンピュータに記録しはじめた。

カタカタとキーボードを打ちながら、オスカルは口を開く。

「…私は、若いころからマフィアに伝わるｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ　ナスコスト）に興味があって、ずっと文書で調べたりしていたんだ。…でもどれも曖昧で、明確なものはなか

った。
だが、今本物のｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ　（テゾーロ　ナスコスト）に出会い、本当の話を聞いた。
私は、実に感動したよ。」

カタン、とキーボードを打つのをやめ、オスカルは椅子から立ち上がった。

「…私の宝物を、君たちにあげよう」

「た、宝物？」

オスカルは頷き、ひとつの鍵を取り出した。
それを床の小さな穴に差し込み、右にまわす。

すると、タイル状の床がカタリ、と音をたて、オスカルがそれをどかした。
そこには小さな穴があり、中には小さな箱があった。
それを大事そうに手に抱え、オスカルはツナたちに向き合う。

小さな箱は、古そうだがとても頑丈そうで、少し薄汚れていた。

「…それは？」

ツナが小さな箱を指差す。

オスカルはそれをひとなでし、箱の鍵穴に錆び付いた鍵を差し込んだ。

がちゃり、と箱のふたがゆっくりとあけられる。

「「っ！？」」

「、それは…」

シクロとシスイが目を見開き、リボーンが少し焦った表情になった。

ツナたちはわけがわからず、箱の中身をのぞいている。

「…オスカルさん、これは？」

「……これはね、」

錆びたそれを手に取り、オスカルは微笑みながら言った。

「ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）のひとつ、

ＮＯ．７　ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）だ。」

小さな物体…印鑑が、ツナたちの視線と思考を奪った。

標的１１７　Ｎｏ．７　ａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）

目の前の箱の中に入っている小さな印鑑。

それはツナをはじめとする研究所にいる全員を釘付けにさせている。

はたからみればそれはただの印鑑にしか見えないだろう。

しかしそれは、マフィアに伝わる伝説の中に出てくるものだ。

これを巡って時々争いが起きるほどである。

「「…なぜ、あなたがこれを……」」

同じ顔で同じ声、髪型のみ異なるシクロとシスイがオスカルに問うた。

「私の父も学者で、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）について研究をしていたんだ。私はそんな父の手伝いをしていた。

…父が死ぬ間際、これを私に預けたんだ。

“時が来るまで、持っていなさい”とね。」

「時…？」

「おそらく封印が解かれる時のことだろうね。
…ああ、やっぱり。」

印鑑を手にとり、オスカルがつぶやく。

「これは、綱吉くんに反応してる。」

「オレに！？」

「ああ。以前、この印鑑は錆びだらけで、模様も色もわからなかったんだけど…」

確認するように印鑑を見ると、錆びなどはついておらず、美しい模様をしていた。

ふちは金色、側面には大空と炎が描かれている。

シクロとシスイの時と同じである。

「綱吉くん、持ってみて。」

はい、とオスカルがツナに印鑑を渡す。
ツナは戸惑いながらもそれを受け取り、落とさないように両手に乗せた。

途端、印鑑が熱を帯びはじめた。

「っ！？」

「「印鑑が反応した！」」

シクロとシスイがツナの両手の傍に寄り、印鑑を見つめる。
次第に印鑑からは、トクントクンと小さな鼓動が伝わってきた。

「「ツナ、炎だ。炎をイメージして。」」

「ほ、炎？」

「ツナ。」

ツナが戸惑っていると、肩から徳松が降り立ち、ツナと同化するように身体の中へと吸い込まれていった。

すると、両手があたたかくなり、ボウ、と印鑑にオレンジ色の炎が燈った。

「わあ！？」

“ツナ、心配するな。オレが印鑑に炎を燈しただけだ。”

驚くツナを宥める徳松の声が、ツナの脳内に響く。

ハイパー化もしていないし、グローブもしていないのに炎が燈ったのは徳松の仕業のようだ。

ドクン　ドクン　ドクン　ドクン

鼓動が強まり、ツナたちに緊張がはしる。

ボウゥウッ

ひときわ強く炎が燃え、それと同時にツナたちの耳がなにかの音をとらえた。

“……、”

「…え？」

小さなそれを聞き取ろうと耳をすます。

謎の音…声は、だんだん大きくなっていった。

“願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界
混沌とする人々の心
しかし、それをなだめ
清め、澄ませるものは
ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心
それを唯一動かすものは
覚悟と意思と希望と仲間”

パアァァアンッ

炎が弾け、きらきらと輝いた。

一瞬閉じた目を、ゆっくりと開ける。

ツナの両手にいたのは、小さな人間だった。

「うわっ！」

「はじめまして、こんにちは、若き我らの主。」

ぺこりと小さなお辞儀をする小さな人間。

黄色の髪の毛、瞳はオレンジ。
顔つきからして、どうやら男の子のようだ。

「僕はセブラーノ。ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）のａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）で印判を守る者。
よろしくお願いします。」

「あ、オレは綱吉…。ツナって呼んで。

シクロとシスイにもそう呼んでもらってるし……」

「シクロとシスイ…？」

「「セブラーノ！！！！！」」

こてん、と首をかしげるセブラーノに、ふたつの小さな人間が突進していった。

一瞬、セブラーノが顔を苦痛に歪めたのをツナたちは見逃さなかった。

「「セブラーノ！」」

「…え、ええ！？シクロとシスイ…なんで！」

二人の顔を見合わせ、セブラーノはあわてふためく。
それに反してシクロとシスイは満面の笑みだ。

「まさか、君たちも封印を…」

「「一番最初に解いてもらったんだ。」」

ふわりとシクロとシスイが両手に降り立つ。
小人のようなものが三人、何ともファンシーな光景だろう。

「「ツナ、我らが瞬間移動できたのは、仲間が近くにいたからです。」」

「仲間が？」

「「我らは仲間が近くにいるとひかれあい、巡り会おうとして引き寄せたり引き寄せられたりするのです。
だから今回の瞬間移動は、セブラーノの気配を感じたからなんです」」

「そうだったんだ……」

「……綱吉くん」

オスカルに呼ばれ顔をあげると、視線の先にはきらきらと輝いているオスカルの顔が見えた。

（……嫌な予感…！）

嫌な予感を感じ、ツナが一歩後ろに下がろうとすると、
オスカルに両手首を掴まれた。
その反動でシクロとシスイ、セブラーノが両手から転がり落ちる。

「やっぱり君は不思議な力を持っている！ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）に深く関係しているんだね！」

「え、いや、あの……」

「これからもっと忙しくなりそうだ！
さあ、一緒に研究を進めよう！」

「…は、ははは……」

有無を言わせようとしないオスカル。
ただ苦笑いをするしかないツナ。
そんな二人を見ているだけのリボーンたち。

そして床で何やらぎゃんぎゃんと叫ぶ小人たち。

ツナの日常がまたおかしな方向へと動いた。

標的１１８　本題

ツナの仲間が増えた。

それはとても小さな小さな人間で、掌サイズである。

見た目は子供であるが、冷静に考えれば地球が出来る前から生きていたというから、年齢は恐ろしいものだろう。

小さな彼…セブラーノは、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の一人で、シクロとシスイの仲間でもある。

これでまた一歩、スペランツァに近づいたというわけだ。

「……。」

「「……。」」

「……そんなに怒らないでよ…。
わざとじゃなかったんだから…。」

じとり、といやな視線がオスカルの頬をチクチクと刺す。
その視線の正体は小さな人間、ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の三人である。

オスカルは興奮のあまり、ツナの両手首を掴んだ。
その拍子に、ツナの両手に乗っていたシクロとシスイ、セブラーノが転がり落ちてしまったのだ。

それに気付かず、オスカルはつらつらとしばらく一方的に話し、三人をこのように怒らせてしまったというわけである。

何度オスカルが三人に謝っても、まったく許してはもらえず今に至る。

そんな三人は、ツナの頭の上で静かに怒っていた。

「……。」

「「……。」」

「…だからね、ごめんねってば。
いつ許してくれるんだい、君たちは。」

困り果てた顔のオスカルが、なんだかかわいそうになったツナは、頭の上の三人に話しかけた。

「…ねえ、そろそろ許してあげなよ。こんなに謝ってるしさ……そりゃあ、オスカルさんも悪いけど、ごめんねって謝ってるじゃん。」

「…。」

「「…。」」

もそり、と三人が動いた。
どうやらあの痛々しい視線をやめてくれたようだ。

「今、君たちは“無視”をしてることになるんだよ。
それって、意地悪でしょ。
オスカルさんは…まあ、悪気があったわけじゃないんだし。
でも君たちは“意図的に無視”をしているんだよ。…わかるかな？」

ツナが言い聞かせると、三人はふわりと頭から退き、オスカルと対面した。

先程とは違い、その視線は痛々しいものではない。

「…許してあげる。」

「「我らも、無視をしてごめんなさい。」」

素直に謝った三人を見てオスカルは少し驚いたが、すぐに優しい笑顔になった。

「うん、私もすまなかったね。すぐ周りが見えなくなる私の悪い癖なんだ。」

オスカルの笑顔を見て、三人も笑顔になった。

それを見ていたツナはよかった、とひとつため息をついた。

「すげぇのな、ツナ！ツナが説得したらすぐに解決しちまった。」

「流石です、十代目！」

「よくチビたちの喧嘩の仲裁をするから、なれてるんだ。」

「ああ、あいつらうるせぇからな」

「リーダーさん、そんなこと言っちゃいけないよ！」

ぽつりと何気なく呟いたリーダーを、トンノが慌てて注意する。

何億年も生きていたｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）の三人を、あのランボとイーピン、フゥ太たちと同じようには考えられなかったが、先程の三人は本当に子供らしかった。

本当にマフィアに伝わる伝説に出てくるものだろうかと疑うほどである。

「おい、オスカル。研究はどうすんだ。」

すっかり仲直り（？）をした四人の間に入るように、リボーンが話しかけた。

オスカルは我に返ったように肩を強張らせ、くるりと振り返った。

「そうだそうだ！すっかり忘れていた！」

慌ててオスカルはコンピュータの前に戻り、カタカタとキーボードを打ちはじめた。

どうやら先程のシクロとシスイに聞いたｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）についてのデータをまとめているらしい。

「…まず、綱吉くん。君の戦闘力はどのくらい？」

「……は？」

薮から棒にオスカルが問う。

ツナは間抜けな声で返事をしてしまった。

「だから、君の戦闘力。戦う力だよ。」

「いきなり言われても…自分の戦闘力なんて…」

自分自身の戦闘力を把握していないツナは、質問に答えられずに苦笑いをしながらオスカルから目をそらす。

そんなツナに、助け船を出したのはリボーンだった。

「一応戦闘力はあるぞ。いろんな奴と戦ってきたからな。…ま、弱点もあるけどな。」

「…ふむ。そういえば幻術を使う人間や、ボンゴレ九代目の息子、世界征服を目論んだ白髪青年や、すべてを手に入れようとしている悪の塊と戦ったんだよね。」

他はいいとして、最後の“悪の塊”とはおそらくディスペラーレに操られていたウライラのことだろう。

そうかそうか、と独り言を呟きながらオスカルは何か考え事をしはじめる。

すると、何かを思い立ったように勢いよく立ち上がった。

「よし、お手並み拝見だ！」

「は！？」

がしっ、と手首を掴まれ、ツナは引きずられるようにオスカルに連れられていった。

オスカルの力は思ったよりも強く、引きはがそうとしてもびくともしない。

無駄な抵抗をしているうちに、ツナはある扉の前に連れてこられた。

「…ここは？」

ツナが首をかしげると、オスカルは扉をゆっくりと開けた。

「ここは、…まあ危険な実験をするときに使う部屋だよ。なかなか広いだろう？」

先程いた部屋よりは少しばかりは狭いが、それでも広いと感じるほどの部屋だ。

不安がるツナをよそに、
オスカルはある機械の目の前に腰を下ろした。

追いついたリボーンたちも訳がわからずオスカルを見つめている。

「これはね、幻覚を利用した実験ができる機械なんだ。
幻覚と言っても、匂いや感触はもちろん、声とかも実態化できるんだけどね。
ほら、ボンゴレに“逃走弾”ってあるだろう？トンノ君が元々そうだったでしょ。あれと一緒さ。
一時的に命を宿すことができるんだよ。」

機械の電源を入れ、オスカルが振り向いた。
その瞳は真剣だった。

「君を、試させてもらうよ。綱吉くん。」

標的１１９　期待と不安（前書き）

いつもよりぐだぐだな文章です。

標的１１９　期待と不安

「君を、試させてもらうよ。綱吉くん。」

まっすぐな言葉。

真剣な眼差し。

「…綱吉くん？」

「っは、はい！」

オスカルに名前を呼ばれ、ツナは慌てて返事をする。

オスカルのあまりの真剣さに、ツナは唖然としてしまっていた。

「今から注意事項を言うから、よく聞いていてね」

「わ、わかりました」

オスカルは機械に手をそえながら口を開く。

「先程言ったように、これは幻覚を利用した実験用の機械だ。幻覚と言っても、一時的に命を宿すことができるから、感触や匂いはもちろん、すべてが生き物と同じようになる。

いいかい、これはただの実験ではない。危険を伴う戦いだ。面白半分でいてはいけない。」

「なんでそんな危険なものを、ツナに試させるんだ」

リボーンが少し低い声でオスカルに問うと、オスカルはわずかに顔を緩ませて答えた。

「これでくたばったら、ボンゴレ十代目はつとまらないよ。マフィアなんてもっと危険な目にあうんだ。ここで命を落とせば、それまでだってことさ。」

「…“試す”ってそういう意味でもあるのか」

戦闘力を試す。
だがそれだけではない。
“ボンゴレ十代目として相応しいかどうかを試す”のだ。

(伊達にマフィアの学者じゃねぇってことだな)

にやり、とリボーンが表情を変えた。
それにオスカルが少しだけ驚く。

「なめんなよ、オスカル。こんなチビでもツナは無限の可能性を持ったやつだぞ。
おめぇが思っているほど、こいつは弱くはねぇ。
なにより、」

リボーンがツナの肩に降り立ち、ツナの頬をぺしんと軽く叩いた。

「こいつはオレの生徒だからな。」

強く、しっかりとした声でリボーンは言った。

オスカルは目を見開き、ツナはぽかんと口を開ける。

（……あの最強のヒットマンと謳われるリボーンが、こんなに信用するとは……）

薄ら笑いをして、オスカルはツナを見つめた。

（…おもしろいじゃないか。）

これは、試す価値がかなりありそうだ。

そんなことを考えているオスカルをよそに、リボーンはツナの肩を蹴って床に降りると、くるりと振り返った。

「ほら、さっさと始めろ。
ツナもぼけっとしてねぇで死ぬ気丸飲め。」

唖然としたままのツナに軽く（リボーンにとっては軽いがツナにとっては軽くはない）蹴りを入れ、リボーンは実験を開始するよう促した。

突然足に痛みが走り、その場にしゃがみ込むツナに獄寺と山本が心配して駆け寄る。

「容赦ないね、リボーン…」

「ああいう奴なんだよ、素直じゃねぇんだ。」

少し離れたところから様子を伺っていたトンノとリーダーは苦笑いをしていた。

だが、トンノのその笑みの中にわずかな不安がにじんでいた。

（…なにか、嫌な予感がするんだけど）

ザワザワと揺らぐ不安をトンノは感じていた。

ただ、その予感が当たらないことを願うだけだった。

「…さて、はじめようか」

「は、はい！お願いします！」

「……お願いしますって私が言う言葉だよ。研究させてもらうんだからね。」

ふふ、と笑ってオスカルは機械の電源を入れた。
ウイィィィイン…と機械音が聞こえ、オスカルが何やら操作をしはじめる。

「ほら、おめぇも準備しろ」

「あ、うん…」

ツナはグローブをはめ、死ぬ気丸を飲み込む。
瞬時にグローブは姿を変え、額にはオレンジの炎が燈る。

ゆっくりと開かれたまぶたからは、吸い込まれそうな瞳がのぞく。

「準備はいい？綱吉くん。」

「ああ。」

冷静なツナの返事を合図に、オスカルはカチリとスイッチを押した。

ひやりと部屋の空気が変わる。

誰もが息をのむ。

（…君は、どんな力を見せてくれるのだろうか）

楽しみで、仕方がない。

期待と不安が入り混じる中、実験は開始された。

標的１１９　期待と不安（後書き）

最近、文章が書けません。
スランプでしょうか…。

それとも忙しくて頭が混乱してるとか…。

とにかくいつもよりぐだぐだな文章になってしまいます。

見苦しくてごめんなさい！

今日は世に言う海の日らしいですね。
わたしは一日部活ですが（´－ω－；）

読んでいただきありがとうございました！

標的１２０　実験開始

「お父さん、それ何？」

お父さんの宝物だよ。綺麗だろう？
マフィアに伝わる伝説に出てくるｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の中のひとつのａｌｌｅａｎｚａ（アッレアンツァ）だよ。

「ふうん、よくわからないや。でもすごく綺麗だね。」

だろう？お父さんはね、この研究をしているんだ。ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の謎を解き明かすのが夢なんだ。

「お父さん、僕もその研究がしたい！」

ほう、ならばお父さんと一緒に研究するかい？お前は賢いからお父さんのいい助手になるだろうね。

お前は好奇心が旺盛で、素直ないい子だ。将来はいい学者になるだろう。

…だが、どんなに優れた学者でも忘れてはいけないことがある。わ

かるかい？

「わからないや、お父さん。なに？」

“自分”だよ。

自分を見失ったら元も子もないだろう。好奇心があることはいいことだが、強すぎてはいけない。

学者に必要なのは、“欲に負けない我慢”さ。そのためには自分を忘れてはいけない。

自分を忘れ、欲に負けて命を落とした学者は沢山いるんだ。

お前のおじいさんもそうだったんだよ。

研究熱心なために、危険を省みずにｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の研究を進め…事故で亡くなったんだ。

お前にそんな最期を迎えてほしくない。

…なあ、お父さんと約束してくれないか？

「なに？」

“自分”を忘れず、“欲に負けない我慢”をすることができるなら、

研究をさせてやろう。
もしそれが守れないのなら、研究には参加させてやれないな。

「僕守る！僕、お父さんとの約束守るよ！」

そうかそうか。じゃあお父さんと一緒に、ｔｅｓｏｒｏ（テゾーロ）　ｎａｓｃ
ｏｓｔｏ（コスト）の謎を解明しよう。

約束だよ、絶対に。

“自分”を忘れるな。
“欲に負けない我慢”を持て。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「…オスカル、この機械で何するんだ？」

突然声をかけられ、オスカルは驚いて肩をびくつかせた。
機械の操作が途中であったことに気付き、慌てて操作を再開させる。

「幻覚で綱吉くんの戦闘力を試す、って言っただろう？」

「それはわかってる。幻覚で何を出すのかってことだ。
次期マフィアのボスでも、あいつはまだ中学生だ。今まで危険な目にあってきたのは仕方ないことだが、今回のは実験だろ。
あぶねぇもん出すんじゃねぇだろうな。」

ぎろりとリボーンの大きな瞳がオスカルを睨む。

（…綱吉くんの親になったつもりかい、あのアルコバレーノが）

オスカルは肩をすくませて、ひとつをため息をついた。

「…中学生でも次期マフィアのボス、だろう？しかもマフィア界の最高峰のボンゴレだ。
これくらいのことはかわしてもらわないと。」

「……誰かに頼まれてやってんじゃねぇだろうな？」

「…綱吉くんの暗殺を？
ははっ、やめてよ。私は学者だよ。暗殺なんか君の仕事だろう、ヒットマンのリボーン。
これは私が独自で行うものだよ。綱吉くんを殺すつもりはないさ。
まだ調べたいことが沢山あるしね。
…ただ、あんな小さな少年がマフィアになれるかも試したい。」

「……。」

リボーンは無言でオスカルを見つめたあと、くるりと足をかえした。

「……たいがいにしておけよ、オスカル。」

背中を向けたままリボーンがオスカルに忠告をして、そのままリーダー達の元へと歩いていった。

オスカルはその言葉を気にも止めず、機械の操作を急いだ。

「綱吉くん、いくよ」

「ああ。」

（…口調と態度は随分冷静沈着になったな）

ツナの様子を伺いながらオスカルはキーボードを打つ。

オスカルは実験をする場合、まず対象となるものを観察してから実験を行う。

先程実験を開始すると言ったが、今は観察の時間であるのだ。

一見何もしてないように見えても、すでに実験は始まっているのだ。

「…じゃあ、幻覚を出すよ」

せわしなくオスカルが機械の操作をしはじめた。

すると、機械にある開口部から白い煙りが放たれ、だんだんと形をつくりだしていく。

（…君たちは、これを見てどう思うだろうか）

オスカルが無表情でツナたちを見つめた。

「…あいつ……」

「リボーンさん、これは…」

「見たことねぇのな……」

はっきりと形を成してきた幻覚を見て、リボーンはオスカルを睨みつけ、獄寺と山本は呆気にとられていた。

「…なんだこれ」

「……ツナ…」

リーダーは顔を歪ませ、ツナは心配そうにツナを見つめた。

「…グルルルルル」

ぎろり、と赤い瞳がのぞく。

足元を見ると、鋭い爪。

「ガアァァアア！！」

ものすごい雄叫びで煙が一気に辺りに散っていく。

目の前に立ちはだかるのは。

「……動物、か？」

ツナは思わず目を疑う。

全身が真っ黒の毛に覆われ、頭には二つの犬のような耳、額には一本の角。

長い尾をゆらゆらと動かし、その生き物はツナを睨みつける。

「綱吉くん、そいつを倒すんだ。そいつに容赦はないよ。ただの猛獣、怪物だからね。」

「…でも、」

「ガルルルッ」

身の危険を感じ、ツナは咄嗟にグローブから炎を噴射させて飛び上がる。

目の前を鋭い爪が横切った。

「…本当に容赦ないな」

背筋がひやりと冷えるのを感じ、猛獣を見下ろす。

赤い瞳はなおもツナを睨む。

（……なにか、ひっかかる）

でも、なにが？

心にひっかかるそれが何なのかもわからず、ツナはしばらくその猛獣を見つめていた。

忘れては、いけないよ。

“自分”を見失ってはいけないよ。

“欲”に負けてはいけないよ。

同じ過ちを繰り返すな。

君は、君だけは。

正シイ道ヲ行ケ。

標的１２１　異体

朝焼けと赤がぶつかり合う。
聞こえるのは炎の燃える音と低い唸り声だけ。
黒い塊…猛獣からは痛いほどの殺気が放たれている。
チクチクと突き刺すような痛みを持ったそれは、ツナだけではなく部屋の隅に避難したリボーンたちにもわかった。

「…すげぇ殺気だな」

「十代目…」

「あの動物、幻覚…だよな？」

あまりの猛獣のリアルさに、思わず幻覚かどうかを疑ってしまう。
オスカルが先程言っていたが、この機械は幻覚に一時的な命を宿すことができるらしい。
目の前にいるこの猛獣は、ただの幻覚だが今は命を持っている。

その分殺気も足されるし、迫力も増すのであろう。

「おい、トンノよ。お前が言ってた嫌な予感ってこいつのことか？」

「…なんか、違う。この動物なのかも知れないけど…なにか、」

（この動物の出現についての嫌な予感だった？…でも、ますます嫌な予感がする。）

原因不明の嫌な予感に怯え、トンノは猛獣を見据えた。

「…なにかが、ひっかかるんだ」

心のざわつきがトンノを襲う。
いつでもツナを助けることができるよう、緊張の糸をゆるめない。

（ツナになにかしたら、許さない）

丸いオレンジの瞳に、黒い猛獣と金髪の学者が映された。

「グルルルルッ」

白い牙を剥き出しにして猛獣が唸る。
赤い目は吊り上がり、全身を毛立たせている。
額にある鋭い角はどんな硬いものも貫いてしまいそうなほどである。

「……空想動物か？」

角がある赤い瞳の犬など、見たこともないし聞いたこともない。
だとすると、空想動物に因んだ幻覚だろうか。
ＵＭＡなど不思議な生物に詳しい獄寺なら知っているかも知れないが、あいにく彼は今離れたところにいる。
声も届くかどうかわからないし、直接獄寺たちの元へ行けば猛獣が襲い掛かり巻き込んでしまうかも知れない。

「……徳松？」

（…ツナ、どうした？）

徳松に話しかければ、すぐに返事がきた。

「徳松、あいつが何かわかるか？」

（…ごめんツナ。オレもあいつの正体はわからない。）

申し訳なさそうに徳松は言った。

徳松が知らないのは当たり前なのかも知れない。
最近目覚めたのだから、生まれたばかりの赤ん坊も同然だろう。

（…でも、何か感じないか？）

今度は徳松がツナに問う。
ツナは徳松が何を言っているのかわからなかった。

「…何かって？」

（よくわからないけど、殺気の他に何かを感じるんだ。
ツナは何も感じないのか？）

「……そういえば、」

神経を集中させると、殺気の他に何かを感じた。
だがツナにもそれが何なのかはわからない。

「なんか、」

（なんか、）

やけに肌に馴染む何かを感じる。

「ツナ！！」

突然名を呼ばれ我に返る。

気付けば目の前に巨大な鋭い爪が迫っていた。

「ガゥゥウッ！」

ガシュッ！

「…っ！！」

間一髪のところで炎を噴射して攻撃を避けた。

だが完璧に避けることはできず、爪が右腕をかすり、そこから痛みが生じる。

痛みに顔を歪めながら目をやると、爪がかすったところからは血が流れていた。

（ツナ！）

「…油断した。たいしたことはない。」

ズキズキと痛む傷から意識をそらし、なおも唸りながらこちらを睨みつける猛獣を見つめる。

「グルルルルッ」

「…これだけ身体が大きいと、攻撃が効くかどうか……」

（とにかく、一度攻撃を仕掛けよう）

徳松に促され、ツナは拳に力をこめる。

「グアァアッ！」

大口を開けて襲い掛かる猛獣の脇を通り抜け、ツナは横っ腹に炎を燈らせた拳を放った。

猛獣の顔が歪み、攻撃が効いたかと思えば、黒く長い尾がツナの背中を勢いよく打ち付けた。

「っぐ！！！」

壁に吹き飛ばされ、ぶつかるすれすれのところでツナは炎を噴射させて激突を免れた。

背中が言い表せない痛みを帯びている。
それは腹部の傷にも伝わり、痛みがさらに増した。

「ツナ！」

トンノがツナの元へ向かおうとすると、後ろから伸ばされた腕に遮られる。

「待て、トンノ！」

「リーダーさん離して！ツナが危ないんだ！！」

掴まれる手から逃れようとトンノは翼をばたつかせて抵抗するが、リーダーはトンノを離そうとしない。

「なんで、なんで！リーダーさんはツナがどうなってもいいの！？」

「んなわけねぇだろ！オレだって坊主が心配だ！」

「じゃあ、なんで！」

「これはあいつを試す実験だからだろ！」

ひときわ大きくリーダーが叫ぶと、トンノの動きがぴたりと止まった。

「…今ここで坊主を助けたら、実験は中止になっちまうかも知れねぇ。

そうなったら、坊主はまた同じような実験をしなきゃならなくなるかも知れねぇ。…また傷を負わないといけなくなるかも知れねぇ。そんなこと、坊主にさせたくねぇだろ。」

「…でも、」

「大丈夫だ。あいつ、今までいろんな危機にあってきたが無事だったじゃねぇか。
…あいつを信じろ、トンノ。
みんな、心配だが我慢してんだよ。」

「……。」

トンノは頭上のツナを見つめる。

リーダーの手の力が緩み、腕に乗せられ頭を撫でられる。

「…すまねぇな、トンノ。だがこれは坊主の問題なんだ。」

「……ううん、気付かせてくれてありがとう。
そうだよね、ツナが簡単にやられるわけないもんね。」

トンノは首を横に振ってリーダーに謝る。

「ツナなら、大丈夫だよね。」

今まで、例え傷を負っても、ツナは大丈夫だったじゃないか。

乗り越えたじゃないか、苦難を。

だから、今回も大丈夫だ。

絶対、絶対に。

そうだよね、ツナ。

苦難を乗り越えたら、

君なら、笑顔で抱きしめてくれるよね。

そうだろう？

標的１２１　異体（後書き）

台風の勢力は凄まじいものですね。
皆さまは被害にあわれていないでしょうか…心配です。

わたしは自転車で風に吹き飛ばされそうになっただけです。

皆さま、風にはお気をつけて…！

さて、トンノがじっとしてられないようです。
ツナの元へ行きたいと駄々をこねてしまいました（違う）。
我慢だよ、トンノ！

読んでいただきありがとうございました！

標的122　変異

To a thing to watch for the first time, everybody is confused.

Besides, we feel fear if it has strong power.

we am frightened by it and am cautious and am going to protect oneself.

みんな、生きとし生けるすべての者は、そうであろう。

如何なる勇気を持っていても、必ずそうであろう。

だから、だから。

これは……。

「グルルルルッ」

止むことのない唸り声。
赤い瞳がさらに猛獣の恐ろしさを引き出たせている。

その大きな身体は今にもツナに襲い掛かってきそうである。

（攻撃が…効かなかった……？）

「確かにあの巨体では、攻撃の威力は軽減してしまう。
…しかし、なによりこの殺気が……」

先程から、思わず怯みそうになる殺気が放たれている。

少しでも猛獣に近づけば、殺気がたちまち身体中を襲うのだ。

その殺気を感じると、鋭い痛みが走り、途端に吐き気や頭痛をもよおす。

さらに殺気によって攻撃の力が弾かれてしまうのだ。

巨体によって、さらに殺気のせいで攻撃の威力が減らされてしまう。

いくら攻撃力が強くてもそれでは痛くも痒くもないものになってしまうだろう。

「…なんて強い殺気だ」

くらり、とめまいによって視界が歪む。

攻撃を受けた背中も右腕も、痛みを帯びてツナの体力を奪う。

（……ツナ、平気か？）

「心配ない。…徳松は？」

（オレなら平気だ。…すまない、ツナ。オレは平気なのに……）

ツナの受けた攻撃や傷の痛みは、どうやら徳松には伝わらないらしい。

それがやるせなく、徳松が声を震わせる。

「…気にしなくていい。徳松が平気で良かった。」

痛みを感じながらツナは優しく言葉をかける。

それはツナの本心だ。

決して嘘ではない。

そんなことはわかりきっている徳松は、ツナの言葉に嬉しくなって、同時に哀しくなった。

（……すまない、ありがとう、ツナ。

なるべく、ツナの負担を今だけでも軽くできるようにするから。

だからさ、ツナ、）

がんばろう、一緒に。

ふわり、と心があたたかくなるのがわかる。

「…ああ。」

拳を握りしめ、ツナは猛獣を見据える。

ゆらり、ゆらりと炎がたくましく燃える。

自然と力がみなぎってくる。

「グルルルルルッ」

「…いくぞ、徳松」

（了解）

不意に、身体中の痛みが軽くなった。
腕をかざすと、かすかに炎が身体を覆っているのが見えた。

「……よし、」

シュッ

視界からツナが消えた。

「！！」

「グルルッ」

オスカルも、猛獣も驚く。
猛獣は辺りを見回してツナを探す。

「ここだ。」

「ガルッ」

背後から声が聞こえ、猛獣は振り返ろうと身体を翻す。

その赤い瞳にうつったのは、オレンジに包まれた少年。

「…ガルルルルッ！」

突然ツナが現れたことに驚いた猛獣は、ツナに牙を向けて襲い掛かった。

ひらり、と軽い動きでツナはそれをかわす。
その隙に攻撃を仕掛けようと、ツナは拳に力を込めた。

“……”

「！！？」

赤い瞳と、視線がぶつかった。

その間、時間はスローモーションのように流れていく。

“……よ……”

視線がはずされる。

時間が元の流れに戻る。

ツナは目を見開き、猛獣を見つめる。

「グルルルッ」

「…なんだ、今の……」

ゆらり、

オレンジが揺れる。
赤が揺れる。

ふらり、

オレンジが動く。
赤が動く。

それは動揺か、怨みか、

それとも。

標的１２２　変異（後書き）

今回は短めです。ごめんなさい。
しかも昨日は更新が出来ず…さらにごめんなさい。

夏休みに入りました。
補習と部活で一日が終わりましたが。

なんてつまらない夏休み一日目。

さて。
次回くらいから話を進めそうですね。

どんな流れになるか…勘のよろしい方はお分かりになってしまうかと！
ひやひやしております。はい。

最初の英文は、できれば訳さないでいただきたいです。
少しネタバレになってしまうかも知れないので。
あと、文法とかいろいろ間違ってると思うので！

読んでいただきありがとうございました！

標的１２３　必要なもの

「……なんだ、今の…」

不意に聞こえた何か。

か細く、小さく、弱々しく。

直接耳に届いたのではない。

頭の中に響いたのだ。

（ツナ、今……）

「徳松も、聞こえたか？」

意識の中の徳松にも今の現象がわかったらしい。

二人は何が起こったのか理解できないでいる。

「…あいつと目があったとき、何かが聞こえたんだ」

猛獣とすれ違いさまに視線がぶつかった。
その瞬間、脳に何かが聞こえてきたのだ。

「…どういうことだ？」

眉をひそめ、ツナは猛獣を見た。
全身の毛を逆立たせて猛獣はツナに向けて唸っている。

“……よ……っ…”

「っ、まただ！」

再び、脳内に不思議な声が響いた。

「グルルルルッ」

“…い……よ……”

猛獣が動くたびにきらりと光る白い角と爪と牙。

それとは裏腹な、小さな小さな声。

それは何なのか、何を意味しているのか。

ツナと徳松はまったくわからなかった。

「…少し、気付きはじめたのかな」

オスカルはせわしなくキーボードを打ち、パソコンにデータを記入していた。

ふう、とひとつため息をつき、回転式の椅子を回してツナと猛獣のいる方に身体を向けた。

「この実験は、綱吉くんの戦闘力だけでなく、ボスとして相応しいかどうかを調べるって言ったけど……」

オスカルは手元の資料を見て、苦笑いをする。

「…実際、ボスに相応しいかなんて、まずこれだけで十分わかるもんだよね。」

金色の髪の毛を指でくるくると巻きながら、オスカルはつぶやいた。

「見抜く力、それが君には備わっているのか。…それがなければ、ボスになってもすぐ殺されてしまうからね、綱吉くん。」

「ツナのやつ、なにしてんだ?」

「まさか、さっきの攻撃で……」

「落ち着けよ獄寺。攻撃のダメージがでかいんだったら、ツナはあんなふうに飛んでないんじゃねえか?」

先程から猛獣と睨み合うように動かないツナに疑問を感じ、リボーンが首をかしげる。

獄寺がツナの身を按ずるが、山本がそれをなだめた。

（……たしかに、さっきの右腕と背中へのダメージはでかいだろう。…だが、ツナはああして飛んでいる。おそらく徳松のおかげだろうが……なぜ動かないんだ？）

リボーンたちはツナから少し離れたところにいる。

ツナの表情がうっすらとわかるくらいの距離であるが、リボーンには今のツナは驚いているように見える。

（…なにか、感じたのか）

「そうみたいだよ、リボーン」

背後から声をかけられ、リボーンは振り返る。

声の主は、リーダーの肩に乗っておとなしくしているトンノだった。

「…お前、」

「あいにく、僕にはリボーンの心は読めないよ。でも、なんとなく考えてることはわかるから。」

まさか心を読まれたのではないか、とリボーンは一瞬焦りを感じたが、それはどうやら違うようだ。

ヒットマンが心を読まれてしまったら命取りになることがある。だから気安く他人に心を読まれてはいけないのだ。

「…トンノ、ツナは何してんだと思う？」

リボーンはトンノに問う。トンノにならわかるのではないかと思ったからだ。

「……なにかに気付いたんだよ。多分、猛獣のなにかに。」

とても、大事なことに。
なにかを見出だしたのであろう。

「…そうか。」

にやり、と笑いリボーンはツナの方向を振り返る。

「…なんだ、リボーン。そんなに笑っちまってよ」

「気にすんな」

リーダーが怪しがるような表情でリボーンを見る。
顔をそらしてリボーンはリーダーに顔が見えないようにしてしまった。

「……変わったなあ」

昔のお前とは違う。
変わったんだ、性格が。

それは、多分。

「…坊主、お前どんな力を使ったんだ。」

あの最強のヒットマンをここまでに変えるなんて。

複雑な、でも嬉しそうにリーダーはツナに笑顔を向けた。

「ガウゥゥウッ！」

鋭い牙を剥き出しにして猛獣が襲い掛かる。
ツナはそれをかわし、拳に力をいれ勢いよく放った。

ドシュッ

「グルルッ」

「…っ、」

くるりと宙を舞い猛獣と距離をとる。

先程から拳に燈す炎圧を高くしているはずなのに、それはまったく意味がなく効かない。

「…殺気で炎圧が軽減されてしまう」

（少なくとも、１０万ＦＶは殺気によって軽減されているな……）

息切れをしながら、ツナは腕で頬に伝う汗を拭う。
まったく猛獣に攻撃が効かない。
纏う殺気が強すぎるのだ。
時折、吐き気もするし頭痛はずっと止まらない。

“……よ……”

「……この声といい、この殺気といい…わからないことばかりだな」

どうすればいいのだろう。
なにをすればいいのだろう。

それがまったくわからず、ツナは途方に暮れた。

わかるはずなのに。

目の前のことに捕われ、わかるはずなものがわからなくなってしまうのだ。

こうして人は、大事なものを失っていく。

大事な大事な、尊いものを。

君は、気付いているはずだ。

標的１２４　理解

灯台下暗し、という言葉を知っているかい？

自分の身近なものは気付きにくい、ということさ。

人間なんて、遠くのことに、未来のことに気をとられて、足元にある、手元にある大事なことに、気付かないものだ。

本当はもう、わかっているのに。

本当はもう、気付いているのに。

…本当はもう、見えているのに。

君は、知っているんだよ。

少年よ、君はもう、見つけているはずさ。

求めている、答えを。

バシュッ　バシュッ　バシュッ

「ガルルルルッ！！」

“……っ……”

オレンジ色の炎が猛獣に向けて放たれる。

だが、それは届くことはなく空気中に散っていく。

「ガルルッ！」

ザシュッ

「っ、！！」

間一髪のところで、ツナは猛獣の攻撃を避けるが、色素の薄い前髪がはらりと舞った。

「…っう……」

何度目かの吐き気をツナはなんとかやり過ごす。
猛獣から放たれる殺気がツナをどんどん弱らせているのだ。

くらりくらり、視界が歪む。

「ガルルルゥ！」

ガシッ

「しまっ…」

一瞬の油断、それはあらゆる後悔を生む。

吐き気と目眩に気をとられていたツナは、猛獣の大きな前足で地面へとたたき落とされた。

そのまま、ものすごい力で押さえ付けられる。

「っぐ！！」

（ツナ！！）

「ガルルルルッ」

ツナはなんとか逃れようと力を振り絞るが、猛獣の前足はびくともしない。

「十代目！！」

「ツナ！」

「坊主！！」

「っ、ツナ！！」

獄寺たちがツナの元へと駆け寄ろうとするが、横から伸ばされた腕により阻まれた。

「だめだよ。」

「…オスカル。」

「実験、中止になってしまうよ。それでもいいの？」

「脅迫か。」

リボーンが低い声で問うが、オスカルはふるふると首を横に振る。

「…今、戦っているのは綱吉くんと猛獣だ。
僕らは手出ししてはならない。
…マフィアの世界は、生温いもんじゃない。
それを一番わかっているのは、君じゃないか、リボーン。」

今までヒットマンとしてマフィアの世界に名を知られていたリボーン。
マフィアの争いを何度も見てきたし、何度も経験してきた。
それくらい、わかっている。
わかってはいる。

「…大丈夫、綱吉くんはもうわかっているんだ」

「何をだ?」

意味のわからないことを言うオスカルにリボーンたちは眉をひそめ

る。

目元にしわをよせ、オスカルは微笑んだ。

「…見ていれば、わかるよ。
…信じていれば、わかるよ。」

「グルルルルル…」

「ぐ…っ、」

（ツナ、ツナ、ツナ！！）

みしみしと骨がきしむ。
呼吸もままならない。

さらに殺気がツナを襲う。

（ツナ、痛みをオレにわけろ！）

「…っ、だめだ！そんなことできない！」

ただでさえ、ツナの傷の痛みをカバーさせているのだ。
これ以上徳松に負担をかけさせるわけにはいかない。

ツナの身体を覆うオレンジの炎が、少しずつ薄くなっている。
おそらく、徳松は目覚めたばかりであまり力が使えないのだろう。

「グルルルッ」

“……だ……っ…”

ぼやけた視界に、赤い瞳が見える。
同時にあの不思議な声も聞こえた。

“…だ……っ…よ……”

だんだんと身体に力が入らなくなる。
前足を押し退けようとしていた両腕も、ただそえるだけの形になっている。

「……？」

あることにツナは気付いた。

「…震えてる？」

両腕からかすかに伝わる震え。
猛獣の前足がカタカタと震えていたのだ。

ツナは少し驚いて猛獣の顔を見る。

「…！」

猛獣の瞳が、揺れていた。
前足だけでなく、全身が揺れていた。

“…だよ……い……”

“……怖いよ…”

「っ！！」

ツナは目を見開いた。

まさか、まさか、まさか。

赤い瞳が、ツナをとらえる。

その瞳は、まるで、

ツナと同じ、瞳。

……ああ、そうか、

ツナは、やっと、気付いた。

この猛獣の殺気、攻撃、あの不思議な声の意味を。

「……そう、だったのか…」

ツナはゆっくりと、震える前足を撫でた。

「グルル…」

猛獣がびくりと動く。

それでもツナは猛獣の前足を優しく撫でた。

「…そうか、そうだったんだな」

突然抵抗をやめて猛獣を撫ではじめたツナを、リボーンたちは唖然として見つめていた。

だが、オスカルだけはにっこりと笑っている。

「…ずっと気付かなくて、ごめんな。
お前、ずっと、ずっと……怖かったんだよな。」

「グル……」

「いきなり目の前に知らない奴が現れて、驚いたんだよな。
驚いて、怖くて、何がどうなってるのかわからなくて……、…オレに、殺させるとでも思ったんだろう?」

ツナは目を細め、優しい笑顔で猛獣の頬を腕を伸ばして撫でた。

「…警戒して、攻撃をしていたんだよな。ずっと、怯えてたんだよな。

……全部、自分で、自分を守るためだったんだよな。」

ぴたり、と猛獣の唸り声が止んだ。
少しずつツナを抑える前足の力が弱まっていく。

「大丈夫だ。オレはお前を殺そうだなんて思っていない。
攻撃したのは、すまなかった。
…でも、もうしない。」

しゅううう、と額の炎が消え、瞳はオレンジから琥珀へと色を変える。

「オレは、お前の味方だよ。」

だから、警戒しなくていい。

怯えなくていい。

怖がらなくていい。

お前の、本物を、見つけたよ。

気付けなくて、ごめんね。

しばらくして、身体から重みが消えた。
猛獣がツナから前足をどけたのだ。

ぺろり、

「わあ！」

猛獣がツナの頬を舐めた。
見上げると、先程の殺気は消えており、吊り上がっていた瞳も穏や

かになっている。

「くぅん、」

「…わかってくれたんだね」

ゆっくりと起き上がり、ツナは猛獣の頭をぽんぽんと軽く叩いた。

見ると、猛獣は長い尻尾をゆらゆらと振っている。

「…オレもお前も、同じだったんだね」

それが何故かおかしく思え、ツナは「馬鹿だよなあ、オレ」と苦笑いをした。

馬鹿だよなあ、

恐怖に支配されて、
力任せに相手を襲ってしまうんだ。

本当、馬鹿だよなあ、
人は。

はじめてのものを見ると、
恐怖と、好奇心が揺れ動く。

馬鹿だよなあ、
生き物は。

よく見ようとしないから、
わかろうとしないから、
早く安心したいから、

目の前のはじめてのものを、消し去ろうとするんだ。

馬鹿だよなあ、

みんな、みんな。

だからこそ、

愛しいと思えるのかも知れないな。

標的１２４　理解（後書き）

は、はー（´－д－；）

なぜか疲れました。ううん。

猛獣さん、実はこんな感じだったのですが、どうでしたか？

…予想はついていたよ！という方もいらっしゃると思います。

ああ、ハラハラドキドキがこの小説には足りませんね！自覚してます！

さてさて、いつかのお話に、

To a thing to watch for the first time, everybody is confused.

Besides, we feel fear if it has strong power.

We am frightened by it and am cautious and am going to protect oneself.

という文法や単語がぐっちょんぐっちょんな英文がありましたね。

その訳なのですが…

初めて見るものに、みんながうろたえる。

ましてやそれが強い力を持っていれば、恐怖を感じる。

それに怯えて、警戒して、自分を守ろうとする。

です。

話の中で出すつもりはないのでここで訳を言わせてもらいました。

ぶ、文法とか単語とかぐっちょんぐっちょんすぎて泣けます！

えっと、感想でも聞かれたのですが…

シクロとシスイ、セブラーノはどこにいったの？

と疑問に思っていらっしゃる方々…

ご安心ください。

わたしは、忘れてませんよ！

ちゃんと話には出します。
ですが今は出すべきではないなと判断したので…ごめんなさい。
ちゃんと理由もありますが、それは話の中で…。

長くなりました、申し訳ございません！

今日（７／２４）は部活（吹奏楽）の大会なので、更新できるかわかりませんが…なるべく更新できるようにします。

読んでいただきありがとうございました！

標的１２５　種明かし？

リボーンたちは呆気にとられていた。

獄寺と山本はあんぐりと口を開け、リーダーは眉間にしわをよせており、トンノは鳥が驚いたときのように身体を細長くしてしまっている。

あのリボーンでさえも驚きを隠せないのだ。

ポーカーフェイスは相変わらずであるが、驚いているのは確かである。

実験を計画したオスカルも多少は驚いているようだが、なぜだか満足げな、安心したような笑顔を見せている。

「…オスカル、」

「なんだい、リボーン？」

「お前は、この結果を望んでいたんだな？」

リボーンの問いに、一瞬きょとんとしたオスカルだが、すぐにまたあの笑顔に戻って頷いた。

「まあ、ね。…でも正直、言葉だけで事をおさめてしまうとは思ってなかったよ」

「どういうことだ？」

「…綱吉くんの炎には、浄化作用があるだろう？
てっきりそれで解決させるんじゃないかと予想してたんだ。」

予想外のことが起きたからであろうか、オスカルは苦笑いを浮かべる。

「…そもそも、オレの求めてる答えを聞いてねぇんだが」

「……ああ、あの猛獣のことだろう？」

わかってるよ、と言い、オスカルはリボーンたちについて来るように促した。

「お前、犬なの？」

「グルルッ」

首を横に振り、猛獣は否定する。

ちゃんと言葉が理解できるらしい。

ツナは今、猛獣と正座で向き合っている。

猛獣は“ふせ”の姿勢でツナに鼻を撫でられて、気持ち良さそうに目を閉じている。

先程の凶暴さがまるで嘘のようだ。

「犬…じゃないんだ。じゃあお前……」

「その猛獣は“猛獣”でしかないよ。」

突然聞こえた声に驚き、ツナが振り返ると、オスカルやリボーンたちが勢揃いで立っていた。

しばらく黙っていたツナだが、琥珀の瞳をまっすぐオスカルに向け、そして問うた。

「…本当に猛獣、なの？」

「……なんでそう思うんだい？」

「…え、っと……」

逆にオスカルに問われ、ツナは少し戸惑ってしまった。

「おめぇが思ったことを、ありのままで答えてみろ。難しいことじゃねぇだろ。」

リボーンに言われ、ツナはこくりと頷き、隣にいる猛獣を見ながら答えた。

「…こいつ、怯えてたんだ。見知らぬところでオレを見て、突然のことだったから何もわからなくて。
オレを敵だと思って、自分を守ろうとして攻撃してきたんだ。
」

警戒して、恐怖に支配されて。

ただ、自分を守るためだった。

怖くて、不安で、…心細くて。
ただ、安心したかった。

「オレも、こいつと同じだったんだ。
いつも、怖くて不安で、怯えて警戒して。
そんなことを思いながら、…実は戦ってるんだ。
こいつは悪いやつじゃないよ。
ほら、こんなにおとなしいし。」

微笑みながらツナは猛獣を撫でる。
猛獣は「グルル」と鳴きながらツナに擦り寄った。

「……そうか。」

こつ、と音を鳴らしてオスカルはツナに近づき、しゃがみこんだ。

ツナとオスカルの視線が合う。

しばしの沈黙がつづく。

ただ機械の音が聞こえるだけの、静かな空間。

「……ふふ。」

不意に、オスカルが笑い出した。

「…ふふ、綱吉くんはすごいね」

「な、なにがですか？」

なんのことかまったく分からず、ツナは首を傾げた。

まだ「ふふ」と笑いながら、オスカルは突然拍手をしはじめた。

「ブラボー綱吉くん！合格だよ！」

「…は？」

「どういうことだオスカル」

リボーンがツナの隣に降り立ちオスカルを睨む。

「猛獣への攻撃でだいたい綱吉くんの力はわかったよ」

「あれだけでわかったんですか！？」

拳や蹴りだけの攻撃で戦闘力がわかってしまったことにツナは驚いた。

「私は一目置かれる学者だよ。私の開発した機械でしっかり分析してあるんだからね！」

胸を張り、オスカルはいわゆる「どや顔」で主張する。

もっと大袈裟な技をしないといけないとばかり思っていたので、正直拍子抜けだ。

「今回は、戦闘力も調べたかったんだけど、個人的に綱吉くんのボスとして相応しいかどうかも知りたくて、見抜く力を調べさせてもらったよ」

「…見抜く力？」

「うん。…その猛獣の心理…まあ、考えてる事って言うのかな？それを当ててほしかったんだ。」

「なんで猛獣の心理を見抜かせたんだ？」

全員が知りたいであろう問題を、リボーンがオスカルに問う。

オスカルはおとなしくしている猛獣に近づき、つぶやくように静かに答えた。

「猛獣は…動物は、普通は言葉を喋らない。そんな動物たちの心理を見抜けれるかを知りたかった。

…変わっているだろう、私の考え方は。よく言われるんだ。

もちろん自分でもわかってる。……やり方も、他人とは違うんだよ。」

またオスカルが「ふふ」と笑う。

だが、その笑顔は先程のものとは違った。

何故か、寂しそうな、悲しそうな、複雑な笑顔だった。

標的１２５　種明かし？（後書き）

久しぶりの更新でこのような雑文…ごめんなさい！

先日、大会がありまして、無事に県大会出場を果たしました。
安心して疲れてしまい…小説を書けず（笑）

疲れもとれないまま二日間更新なしでした。

そしてやっと更新できたと思ったらこのような…このような意味のわからない文！

自分の伝えたいことを伝え切れませんでした…。

…次回こそは！

更新が遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

読んでいただきありがとうございました！

標的１２６　種明かし？

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持て。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

ねえ、父さん。

あなたがいなくなってから、幾度かの季節が過ぎました。

すっかり私も歳をとりました。

長年、父さんや祖父さん、アッカルド家が全てを捧げてきたｔｅｓ

ｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）について、
やっと謎が解明されてきました。

それがとても嬉しくて、私は…ある実験を行いました。

…まだ中学生の少年を試したのです。

信じていました。
彼が必ず実験を成功させてくれると。

彼は、見事成し遂げてくれました。

私は嬉しくて、…安心しました。

彼が無事でよかった、死なないでよかったと思っていたのです。

……その時、やっと気付きました。

彼を危険なめにあわせてしまった。
彼の仲間に心配をさせてしまった。

“自分”を忘れるな。
“欲に負けない我慢”を持て。

ああ、父さん。
あなたとの約束を、私は守れなかった。

“自分”を忘れてしまった。
“欲に負けない我慢”ができなかった。

自分のために他人を犠牲にしてしまったのかも知れない。

ああ、そんなことにも気付かなかったのか、私は。

ねえ、父さん。

私は、学者としてあるべき姿をしているのでしょうか。

ねえ、綱吉くん。

君は、私をどう思ったのでしょうか。

……。

…ん……。

……さ……。

「…さん、オスカルさん、オスカルさん！！」

「、！」

鼓膜に己の名を呼ぶ声が響き、オスカルは我にかえる。

「どうしたオスカル、ぼーっとして」

リボーンにまで名を呼ばれ、オスカルは少し焦ってしまった。

気付けば、全員がオスカルをどうしたのだろうとでもいうような目で見ていた。

「ずっとぼーっとしてるから…どうかしたのかなと思って。…大丈夫ですか？」

「…あ、ああ……大丈夫だよ。ありがとう。」

平然を装おうとすると、棒読みな上に声が震えていた。

しまった、とオスカルの顔が歪む。

「…本当に、大丈夫なんですか？何かあったんじゃないんですか？」

ツナが心配そうにオスカルの顔をうかがう。

“大丈夫だよ。何もないよ。”

そう言いたいのに、言葉が喉に引っ掛かって出てこない。

ただ、二酸化炭素が吐き出されるだけ。

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持て。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「……すまなかった」

やっと出た声は、小さく絞り出したようなもので。

身体がかたかたと震え出す。

恐怖で、鼓動が早くなる。

「…すまなかった、綱吉くん。

君を、危険なめに合わせてしまった。…わかっていたのに。これがどんなに危険な実験だったかを。死んでしまうかも知れなかった。

……自分の欲に、好奇心に負けて自分を忘れ、君を犠牲にしてしまった。

…怪我までをもさせてしまった。」

先程とは打って変わって、次々と言葉が出てくる。

心の底から込み上げてくる。

謝罪。

やるせなさ。

後悔。

自分への怒り。

「…自分のために、他人を傷つけるなんて……私は学者として…人間として失格だよ。」

父親との約束も守れず、他人を犠牲にして自分には害もない。

そんなの、騙したも同然だろう？

「…オスカルさん、」

びくり、とオスカルの方が揺れる。

「……オスカルさん、大丈夫ですよ。」

優しい声色でツナはオスカルに言う。
オスカルは、俯かせていた顔を恐る恐る上げる。

ぴたり。

ツナの顔を見たとたん、オスカルの身体の震えが止まった。

「…謝らなくて、いいです。確かに、危ない実験だったけど…でもそれは、オレのためだったんですよね？」

「……綱、吉くん…」

「変わった方法でしたけど、…オレも大切なことに気付けた気がします」

「…大切な、こと？」

オスカルが問うと、ツナは笑顔で頷く。

その笑顔を見た瞬間、オスカルは時が止まるような感覚を覚えた。

落ち着くような、癒されるような、まるでゆりかごに揺られる感覚。

（…包容、されているみたいだ）

じわりと、瞳の奥が熱くなった。

標的１２６　種明かし？（後書き）

タイトルの関連性がゼロに等しいと今思ったゆか空です。

オスカルさん、気付くの遅いよ！

と内心ツッコミを入れてしまう方もいることでしょう。

仕方ないことです。
オスカルさんなのですから（答えになってない）

次回はツナさんのお言葉の続きからですね。

やっとｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の三人を出せそうな…喋ってくれるかわかりませんが（笑）

読んでいただきありがとうございました！

標的１２７　種明かし？（前書き）

もうタイトルとの関連性は追求しません（笑）

標的１２７　種明かし？

「オレも大切なことに気付けた気がします」

「…大切な、こと？」

オスカルが首を傾げて聞くと、ゆっくりとツナは頷く。

ふわり、

（…なんだろう、）

とても暖かい。

落ち着く。

なにかが、剥がれ落ちていく。

重かった背中が、軽くなる。

ふわり、

「…オスカルさん、」

ツナに名を呼ばれ、オスカルは目線を合わせるためにツナの前にしゃがみ込んだ。

「……えっと、オスカルさん」

控えめな、ツナの声が部屋に響く。

「オレ、…今まで沢山の人達と出会って、……中には危険な人もいて、」

その度に、戦わなければいけなくなって。

その度に、せっかく出会った仲間たちが傷ついて。

それが、怖くて。

傷つくのが、消えるのが、

…いなくなってしまうのが、怖くて。

その恐怖は消えることなく、永遠と続いて。

「見知らぬものに怯えて、恐怖を抱いて、…それは当たり前で。」

オレだって怖かった。

見知らぬ猛獣があらわれて。

大きな足に生えた爪は鋭くて、頭についてる角はぎらりと存在を示してて、時々見える牙は噛まれたらひとたまりもなさそうで。

赤い瞳は射抜くように強くて。

大きな身体はさらに恐怖を増させたんだ。

攻撃をされたとき、一瞬でも死を想像してしまった。

もしかしたら、と考えたくもないことを考えてしまったんだ。

腕からは血が流れてて、打たれた背中はぎしぎしと痛くて。

…怖くて。

目の前の現実が、怖かった。

「でも、怖いのはオレだけじゃないってわかったんだ」

鼻を撫でれば、猛獣は「グルル」と甘えた声を出す。

先程までツナに襲い掛かっていたあの猛獣が。

「こいつだって、怖くて怖くて、震えてたんだ。」

怯えて、怖くて、

逃げ出したかった。

ツナと同じように猛獣も。

だが猛獣はツナに攻撃を仕掛けた。

逃げるのではなく、立ち向かった。

恐怖を感じながらも、自分を守るために。

生物誰しもは、自分で自分を守らないといけない。

他人に守ってもらってばかりではいけない。

自分で、困難を、乗り越えなければいけない。

「…えっと、オレ馬鹿だから上手く言葉に出来ないんですけど、
……この実験で沢山の大切なことに気付けたんです。本当に。…そ
の、だから、」

ありがとうございました。

照れ臭そうに、ツナは頬を指先でかきながら笑う。

「……っ、」

ああ、

暖かい。

これが、マフィアのボスになる少年。

これが、ボンゴレ十代目、沢田綱吉。

これが、大空。

“すべてに染まりつつ、すべてを飲み込み包容する。”

広く、澄んだ、

大空。

「オスカル。」

視線をおろすと、リボーンがオスカルを見上げていた。

「どうだ、ボンゴレ十代目は。」

リボーンの問いに、オスカルは一瞬驚いたような顔をする。

だが、その顔はすぐに柔らかな優しいものへと変わった。

「……誰よりもボスに相応しい、そう思ったよ。」

何にも変えがたい、この包容力は君しか持ってないんだよ。

その優しさで、どれだけの人間…生き物たちが救われたのだろうか。

その秘めたる力で、この世界はかわるのだろうか。

「…これからのボンゴレが、楽しみだよ」

うす汚れた世界を、君はどうやって変えていくのだろうか。

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持て。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

ねえ、父さん。

約束は守れなかったけど、またもう一度、あなたと約束します。

“自分”を忘れない。

“欲に負けない我慢”を持つ。

父さんたちが大切にしてきたものを、私が守っていく。

彼が、仲間を守ろうとするように。

恐怖に立ち向かうのは何故？

戦うのは何故？

何故、君は

君は強くなりたいの？

“そのすべてが、大切なものだからだよ”

標的１２７　種明かし？（後書き）

最近さらに文のぐだぐださに磨きがかかっています。

夏バテでしょうか。（関係ない）

…というか！

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）出せなかった（（（；。Д。）））

…出してはいけない空気でした。

でも次回は出せます！
わたしの超直感が告げています。（どや顔↑）

どうでもいい話ですが、最近持病が悪化してます（、ー ω ー；）

いいいい痛いいいいい
と補習中に呻き笑われてます。

た、他人事だと思いやがって…！

なんでしょう、
あれですか、

四面楚歌。（違う）

では、今日も四面楚歌な状況を楽しんできます！（だから違う）

読んでいただきありがとうございました！

標的１２８　猛獣の行く先

「いてて……」

「だ、大丈夫かい、綱吉くん」

痛みに顔を歪めるツナを心配し、オスカルがオロオロと落ち着かない様子だ。

右腕の傷は猛獣の爪による引っ掻き傷で、さほど深くはないがそれでも痛みはある。

猛獣の尾で打たれた背中は、打撲か捻挫だろうとリボーンは言った。

先程よりも痛みは強い。

「…そういえば、綱吉くん。
君の身体を包むそのオレンジの炎はなんだい？」

「あ、」

ツナは自分を包み込む炎の存在を思い出した。

実験のとき、徳松がツナの傷の痛みを軽くするようにと纏わせた炎だ。

「…っ、そういえば徳松……っ」

「どうした、ツナ」

徳松がやけに静かなことに不安を感じたツナだったが、それはすぐに聞こえた声によって消えた。

しゅるりと炎が目の前に現れる。

そしてそれは小さな人間へと姿を変えた。

「徳松！」

「っ！？」

突然現れた小さな人間に、オスカルは目を見開く。

徳松を見るのは二回目だが、どうも驚いてしまうようだ。

「ツナ、傷が痛むのか？」

「うん…この炎のおかげで痛みは抑えられてるみたいなんだけど…」

やはり完全に痛みを封じることが今は難しいらしい。
ツナの疲労と徳松の力は比例する。
だから傷を負い、いつもより弱っている今、徳松はあまり能力として動けないのだ。

「…徳松、くん。その炎はなんだい？」

「これは大空属性の“調和”を利用した…まあ、バリアみたいなものだ」

「…バ、バリア？」

「身体を炎で包むことで、衝撃を和らげたり、痛みを少なくすることができる。
まあ、炎が衝撃や痛みを吸収して調和させてしまうんだ。」

徳松の説明を、オスカルは興味津々で聞いている。
きらきらと目を輝かせるその姿は幼い子供のようである。

「す、すごい！大空って便利だね！」

「いや…便利とかそういうことじゃないと思いますけど」

思わずツナがツッコミを入れた。

確かに“調和”は便利だ。

例えばボンゴレ匣では、属性に構わず全ての匣を開けることができる。

（ただしその匣の力を生かし切ることはできないが。）

こうして衝撃や痛みをも和らげたり出来るのだから便利なことにはかわりない。

だが大空属性を「便利」と言うのには何が違和感があった。

「……使える。」

「は？」

ぽつりと呟かれた言葉を聞き取れず、ツナは首を傾げる。

すると、さらに輝きを増したオスカルの瞳がツナに向けられた。

そのあまりの輝きに、思わずツナは「ひっ！」と小さな悲鳴をあげてしまった。

「実は、今回の実験の結果を分析して綱吉くんの新技を作りたいなって思ってたんだよね！」

「し、新技！？」

「ほら、“死ぬ気の零地点突破”シリーズとか“ＸＢＵＲＮＥＲ”とか！あるじゃないか、技が！大空属性なら色んな技が生み出せそうだし、綱吉くんの力ならすごいものができそうじゃないか！」

早口で熱く語るオスカルからつい一歩後ろへと引いてしまう。

生き生きとしたその姿は本当に無垢な子供さながらだ。

「よし、今から結果を分析するから怪我の治療して待ってて！救急箱とかはそこの棚にあるから！」

オスカルはうきうきしながらパソコンの前に腰掛け、忙しなくキーボードで作業をし始めてしまった。

ぽかんと口を開けていたツナたちだったが、リボーンが「あいつはああいう奴だ。慣れろ。」という言葉に苦笑いするしかなかった。

「そ、そういえばｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロナスコスト）の三人は？」

姿が見えない、と辺りを見渡すツナに、獄寺と山本が両手を差し出す。

獄寺の両手の上には、緑色の髪の毛をした小人が二人、山本の両手の上には黄色の髪の毛をした小人がすやすやと寝息を立てて眠っていた。

「どうやら、疲れて眠ってしまったみたいです」

「ツナの実験のときも、全然起きなかったんだぜ?」

あの騒ぎの中、三人はずっと眠り込んでいたと言うのだから驚きだ。

試しにほっぺを突いたり頭を撫でたりするが全く起きる気配はない。

「シクロとシスイは瞬間移動で力を使い、セブラーノは長い封印からやっと解かれて疲れたんだろ」

リボーンの説明にツナたちは納得する。

安らかに眠る三人の小人を見つめ、「おやすみ」と優しくツナは微笑んだ。

「ツナ、ツナ！」

背後から名を呼ばれ、振り向くとトンノとリーダーがあの猛獣の目の前にいた。

「この子、僕みたいに“本物の生き物”にできないかな！？」

「トンノみたいに…あ！」

ツナはこの猛獣が以前のトンノのように一時的に命を宿していることを思い出す。

トンノはツナの炎の力によって“本物の生き物”となったのだ。

それならば猛獣もトンノと同じく“本物の生き物”になれるかも知れない。

「もうすぐ、こいつ消えるみてぇだ。坊主ならこいつを本物にできるんだろ？」

「ツナ、この子は“生きたい”みたいだよ。“本物”として。」

ツナが猛獣を見つめると、猛獣は「グルル」と鳴いた。

“……生きたい、……”

視線が交差したとき、再びあの声が聞こえた。
確かに、猛獣は生きたいと願っている。
消えるのではなく、生きたいと。

「…でも、トンノと同じようにできるかな」

「やってみろ。おめぇならできるぞ。」

リボーンが隣でにやりと笑う。
その笑みになぜだかツナは安心感を覚えた。

「…やって、みる」

ツナは頷き、猛獣に側に来るように手招きをする。

どすどすと微かに地面を揺らしながら猛獣はツナの目の前へとやって来て、座り込んだ。

グローブをはめて死ぬ気丸を服用し、額とグローブに炎を燈らせると、ツナは猛獣に優しく触れる。

そして大空の“調和”の炎を流し込むイメージをつくりだす。

ブワッッ！

ツナの掌を中心に風が生まれ、リボーンたちをなびかせる。

きらきらと、輝かしく舞う炎。

それに誰もが、目を奪われた。

パソコンを見つめていたオスカルでさえも。

バシュンッ！！

炎が弾け、煙が辺りを包む。

何も見えず、身動きもとれない。

失敗か、と思いリボーンたちは煙が晴れるのを待つ。

だが、それはいらぬ不安であったことを知る。

「…こら、くすぐったいだろ?」

晴れた煙の向こう、そこにいたのは。

「…い、犬?」

「なんか小さくなってるのな…」

獄寺たちは間抜けな顔でツナと猛獣を見つめた。

猛獣は小型犬ほどの大きさで、赤だった瞳はオレンジへと色を変えていた。

角は消え、変わりにオレンジの炎が燈されている。

「クゥン」

まるで子犬のような鳴き声は、先程の猛獣だった姿を忘れさせてしまいそうだ。

甘えるように膝の上で尻尾を振る猛獣…小型犬を、ツナは優しい表情で見つめていた。

猛獣が小型犬へと姿を変え、実態化したことに感動してオスカルが再び目を輝かせたのは数十秒後のこと。

標的１２８　猛獣の行く先（後書き）

猛獣…実態化してしまいました。

最初は消えてしまう予定だったのですが、愛着がわくと駄目ですね…消すのがかわいそうに思えて（笑）

トンノみたいに実態化させちゃえ！と路線変更してしまいました！！

そして、やっとｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）を出せました…。

しかし彼らは寝ている（笑）

何よりも楽しみなのが、新技を出せることです！

読者様にもご協力いただき、新技の案ができました。

大切に、ゆっくりと出していきたいと思います。

読んでいただきありがとうございました！

標的１２９　和解

ツナの膝の上で、真っ黒な小型犬がぷるぷると震えている。

「キュウゥン」と頼りなさげな声をだす小型犬を、ツナは優しく宥める。

小型犬が怯えている理由。

それは一人の学者にあった。

「つつつつつつつ綱吉くん!?
今何したんだい!!?」

思わずツナも怯むほどの形相でオスカルは駆け寄って来る。

かつて猛獣だった小型犬はさらに恐怖に怯え、ツナの背に隠れてしまった。

「オスカル、落ち着け。小型犬が怖がってるだろ。」

「す、すまないね。でも、本当に綱吉くん、君何をしたんだい？」

リボーンに呆れられ、苦笑いで謝りながらオスカルは再びツナに問う。

その手にはノートパソコン。

ちゃっかりとデータを記入するつもりらしい。

「…トンノにしたのと同じように、こいつにも大空属性の炎を流し込んで、“調和”の力で実態化させた。」

「…実態、化……」

オスカルがツナの背後に隠れた小型犬をのぞきみる。

すると小型犬はびくっと小さな身体を跳ねさせ、さらに隠れてしまった。

「…この、頭の炎はなんだい？

瞳の色も変化しているし…」

小型犬の頭に燈る炎とオレンジ色の瞳を交互に指差し、オスカルは問う。

「おそらく、ツナの炎の作用だろう。トンノもツナの炎で大空属性になったからな。そいつもトンノと同じように大空属性になったんだろうな。」

ツナが説明をする前に、リボーンが簡潔に答えをまとめてしまった。

しばらく考えるしぐさをしたあと、「ああ」と何かを思い出したようにオスカルは声を出した。

「そういえば、前に…質問したときに言ってたね」

「忘れてたのか」

「歳かな」

あはは、と一人笑う学者。

四十代で歳と言うのはおかしい気もするが、昔に比べれば歳老いたことを実感できるのだろう。

「キュウゥ…」

「…お前が騒ぐから、さらに怯えてしまったじゃないか」

震える小型犬を抱き抱え、ツナはため息をついてオスカルを睨む。

小型犬はもそもそとツナの腕の中で、なるべくオスカルを見ないようにと顔を服に埋め込んでいた。

「…あー、かなり私を怖がってるね」

「今さら気付いたのな」

「おっせぇんだよ、学者馬鹿！」

「ちょ、学者馬鹿って…獄寺君、」

「…ぶっ」

「リーダー！笑わないの！」

リーダーの肩の上で笑うオヤジを叱るトンノ。

足元ではリボーンまでもがにやりと面白そうに笑うのだから、トンノは困り果ててしまった。

「獄寺の坊主、おめぇは“〇〇馬鹿”ってあだ名をつけるのか？
ほら、山本の坊主にだって“野球馬鹿”ってよく言うじゃねえか」

「なんとなくだ！ってか坊主って呼ぶんじゃねえ！！」

「ああ、もうリーダー！！獄寺君もっ！！」

ついにリーダーの肩から離れ、トンノは二人のまわりを飛び回る。
ぎゃあぎゃあと騒ぐ獄寺とリーダー、注意をするトンノのやり取りを見て山本はただ笑っていた。

どれだけ騒いでもシクロとシスイ、セブラーノは眠りから覚めることはなかった。

「…あの子たち、なにしてるの」

「お前の呼び方から口論に発展しただけだ。まあ、気にするな」

「…いや、そこは気にするだろう」

静かにツナはリボーンにツッコミを入れた。

だがそれをリボーンは「ふん」と鼻であしらってしまった。

「…あの、小型犬さん」

おかしな呼び方でオスカルは小型犬に話しかける。
びくりと大きく震え、恐る恐る小型犬はオスカルをうかがう。

「お、驚かせちゃってごめんね。…つい、君を見て学者の血っていうものが騒いでしまって…。まさかこんなに怖がってしまうとは思ってなかったんだ」

小型犬から視線を離さず、オスカルは慌てながら言葉を綴る。

その間、小型犬はオレンジの瞳を揺らしながらオスカルを見つめていた。

「…えっとー、私は君の敵なんかじゃなくて……その、…き、君と、と、…友達、…に、なりたいな…なんて……」

不慣れな言葉を並べ、オスカルは優しい笑みを向ける。

ツナは少し驚いたような、リボーンは相変わらずのニヒルな表情であった。

しばらくの沈黙。

雑音に口喧嘩が聞こえる。

もそり、と小型犬が動いた。

小型犬はツナの腕から飛び降り、オスカルの元へと向かう。

そして、座り込むオスカルの目の前で立ち止まり、じっとオスカルを見つめた。

“…あなた、いい人なのかい?”

「…っ！」

それは瞳から伝わる言葉。
直接耳に流れ込む声ではなく、脳内に響く声だ。

“…あなた、優しい匂いがする”

「…え？」

ぽすり、と腕の中に飛び込んできたのは、小さな小さな黒い犬。
突然のことにオスカルは動揺を隠せない。

「…え、……えっ！？」

「よかったな、オスカル。わかってくれたみたいだな。」

ツナは微笑みながらオスカルと小型犬を眺めた。

戸惑うオスカルと甘える小型犬。

正反対な一人と一匹がほほえましい。

目の前では和む雰囲気、背後では騒がしい口論。

真逆なふたつの光景に、ツナとリボーンは二人で笑った。

標的１２９　和解（後書き）

早くツナさんの傷の手当てをしてあげたいゆか空です↑
次回に絶対手当てしてあげます！絶対！
それまで徳松さん頑張ってください↑

今日は久々の休日です。
夜更かしはせず、しかし寝坊はしてやります。
イラストを描きたいですが…何を描けばいいのかわからないので（笑）

今日は小型犬さんのラフを描いただけなので。
近日中に小型犬さんの正式な姿を発表したいなとは思ってます。

いつのまにか、感想が１００件を越えていました！
嬉しいです。嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい！

いつも感想をくださる方々、ありがとうございます！

もはやわたしの支え。

感想をいただけるので小説も書けるのだと思います。

読んでいただきありがとうございました！

標的１３０　命名

「…いってー……」

「大丈夫かい、綱吉くん？」

「あ、はい…すいません、怪我の手当てなんかさせてしまって…」

ツナが申し訳なさそうに言うと、オスカルは「かまわないよ」と笑顔で答えた。

無事、和解したオスカルと小型犬を見て安心したツナだったが、そろそろ疲労の限界なのか、ずっと黙っていた徳松がよろめいた。

「…すまん、ツナ。そろそろ傷の痛みを…カバーすることができない」

その言葉を残し、徳松は消えた。
ツナの意識の中へと戻ったのだ。

病み上がりも同然だったから早く疲労の限界がきたのだろう。

徳松が消えたと同時に身体を覆っていた炎が消え、切り傷と打撲の

痛みが一気に襲ってきた。

それに驚き、ツナの額の炎までもが消えてしまい、グローブもただのミトンの手袋に戻ってしまった。

そして今、痛みを訴えだしたツナの手当てをオスカルがしているというわけである。

「…よかったね、まだ浅くて。傷が深かったら縫うことになってたよ。」

「え、縁起でもないこと言わないでくださいよ…オレそういうの苦手なんですから！」

脱脂綿に消毒を浸し、傷口に当てれば地味な痛みが生まれる。

治療をするオスカルと痛がるツナのまわりを小型犬がおろおろと動き回る。

「…キュウゥン」

小型犬は心配そうに前足でツナの足をひっかく。

「ツナのことが心配で落ち着いてらんねぇみてぇだな」

小型犬の隣に立って頭に手を置きリボーンが笑う。

ツナが小型犬を見つめると、小型犬はぱたぱたと長い尻尾を振る。

“大丈夫?”

オレンジの瞳が揺れる。

「大丈夫だよ」

ツナは左手で小型犬を撫でる。
頭で揺らめく炎が暖かくて心地好い。

「ありがとう、……えっと…、」

「、どうした」

「いや、あのさ…」

吃り出したツナにリボーンが問うと、ツナは困ったような苦笑いをした。

「……名前、決めてないなって……」

「…あ。」

包帯を巻いていたオスカルが手を止めて小型犬を見遣る。

「そういえば、決めてなかったな。」

リボーンも名前がないことを忘れていたようだ。

すると、リボーンはツナを見つめ、にやりと怪しい笑みを浮かべた。

「よし、またお前が名前をつけろ、ツナ」

「ま、また!?」

「いいじゃねぇか、今までお前がつけた名前は…ぷっ、……なかなか良かっただろ」

「トンノの時は笑ったくせに!?
あれすごい落ち込んだんだからな!!てか今笑っただろ!思い出し笑いだろ!!」

リボーンの笑みは嘲笑いにしか見えず、ツナは恥ずかしさで顔を赤らめる。

オスカルと小型犬は何のことだかわからず、同じように首を傾げていた。

「とにかく、オレは名前をつけない!
……オスカルさん、オスカルさんがこいつの名前をつけてください!」

「わ、私かい!?」

突然ご指名を受けたオスカルは驚愕する。
己の顔に指先を向けて確認すると、ツナは何度も頷く。

「…え、ええー……」

戸惑いながらオスカルは小型犬を見る。
小型犬は名前をつけてくれることを期待しているのだろうか、目をきらきらと輝かせてオスカルを見上げている。

ああ、引き返せない。

心の中でオスカルはそう思った。

オスカルは小型犬と向き合うように正座をする。
小型犬も綺麗に座って“待て”の状態を保つ。

“自分”を忘れるな。
“欲に負けない我慢”を持て。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「……決めた、よ」

両手で優しく小型犬を抱き上げ、視線を合わせて告げた。

「君の名前は、プロメッサだ」

「…プロメッサ？」

ふふ、と笑いながらオスカルは頷く。

外国人の名前だろうか、とツナは首を傾げた。

「“ｐｒｏｍｅｓｓａ”…イタリア語で“約束”という意味だな」

「え、イタリア語！？」

「そうだよ。…私は、かつて父親と約束をしていたことがあった。……だが、それを私は破ってしまったんだ。」

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持て。

それは父さんが何度も言っていた言葉。

父さんと私が、遠い昔にした約束。

「それをもう一度交わすように、もう二度と破らないように、父さんに代わってこの子に誓う、という意味だよ」

「…そう、なんだ……」

「ふふ、……どうかな？」

オスカルは目の前の真っ黒な犬に問う。

すると、真っ黒な犬は尻尾を大きく振り、「ワンッ」とひとつ鳴いた。

それは、肯定の合図であった。

「そうか、良かった。」

安心したように、オスカルは小型犬…プロメッサを抱きしめた。

喜ぶように、プロメッサの炎がきらきらと輝いていた。

そんな感動の場面のような光景のうしろでは、今だに口喧嘩が続いていた。

「…獄寺くんたち、まだやってるよ……」

「めんどくせぇからほっとけ」

標的１３０　命名（後書き）

やっと、小型犬さんの名前が決まりましたね。

プロメッサさんです。

少しかっこいい感じがしませんか？↑

またもや新技の案をいただいてしまいました！

あああああああああありがとうございます！

こんなに沢山…感謝です。

全部出してしまいたい。

でもひとつずつ出さないと…。

そういえば、

アクセス数が２３万、

ユニーク数が２万５千になりました。

いつもいつもありがとうございます！

たまに報告するようにします。

読んでいただきありがとうございました！

標的１３１　子犬の進化

こんにちは、はじめまして。

ねえ、早くお話がしたいよ。

ねえ、君たちと遊びたいよ。

この気持ち、伝わってるかな？

ねえ、この世界を、教えてよ。

期待に炎が揺らめいた。

「はい、できた！」

「ありがとうございました」

オスカルがにっこりと笑って湿布やら包帯やらのゴミを片付けはじめる。

右腕と背中の手当ては、すべてオスカルがしてくれた。

右腕は包帯がしっかりと巻かれており、背中には湿布が何枚か貼ってある。

手際の良さも、出来もなかなかのものだった。

「クゥ」

今までおとなしくしていたプロメッサが、ちょこまかと動き出した。

クゥクゥと鳴いてツナやオスカルのまわりをぐるぐると回っている。

「ど、どうしたんだよ」

「クゥクゥ！」

ツナのズボンの裾をくわえて引っ張り出したプロメッサをツナは抱き上げた。

「お腹でも空いたのかな」

プロメッサの行動に首を傾げていると、ツナとプロメッサの視線が合った。

“……とめなくていいの？”

「…へ？」

頭に流れ込んだ声。

それは今日何度も聞いたものだった。

「…とめるって、何を?」

聞こえる、正確に言えば脳内に響く声は、プロメッサのものだとツナはわかっていた。

だから戸惑うこともなく、視線をそらさないプロメッサに問うた。

“…喧嘩、してるよ。とめなくていいの?”

「クゥ」と鳴いてプロメッサがツナの背後を見遣る。

つられてツナもプロメッサの視線の先を追った。

すると、三人の人間と一羽の鳥が何やら言い合っているのが見えた。

「坊主は坊主だろうが。何が悪いんだ？」

「全部だ！何度言えばわかるんだ！オレは坊主なんかじゃねぇってんだろうが！」

「オレから見ればお前らなんか坊主だろ。」

「てめぇまだ二十代だろ！」

言い合うリーダーと獄寺。
そのまわりを飛んで何やら叫んでいるのはトンノだった。

「二人とも！いい加減にしてよ！坊主でもなんでもいいでしょ！」

そろそろトンノの仲介も雑になってきた。
口喧嘩をとめるのに疲れてしまったのだ。

「ははっ、飽きねぇなあ、みんな。そんなに騒いだらこいつらが起きちまうだろ？」

口喧嘩を外野から見学している山本はただ笑っているだけ。
両手に乗っているのは三人の小人だった。

獄寺が今にもダイナマイトを出してしまいそうだったのでトンノが慌てて避難させたのである。

「や、山本…手伝ってよ…！」

「いや、こいつらとめらんねぇのな。」

すっぱりと諦めた山本にトンノは呆れてしまった。
確かに、この二人の口喧嘩は今はとめられない。
何を言っても無駄なのかも知れない。

「トンノ！」

名を呼ばれ、振り返ればこちらへ走ってくるツナの姿が見えた。

「…っ、ツナー！」

トンノは真っ先にツナの元へ向かい、差し出された左腕に降り立った。

「…トンノ、なんかやつれた？」

心なしか、トンノがげっそりとやせ細ってしまったように見えた。

トンノはため息をついて、後方の言い合う二人を見遣った。

「あの二人、何言っても無駄なんだ。聞く耳なんか貸さないんだよ。…僕もう、疲れちゃった。」

トンノのオレンジ色の丸い瞳がにじむ。

相当二人をとめるのに苦労していたようだ。

そんなトンノを慰め、二人をとめるべくツナは間に入ろうと走り出そうとした。

だが、それは隣に見えた真っ黒いものに遮られてしまった。

「ガウゥゥゥウ！！！」

凄まじい雄叫びが部屋に響き、空気を揺らした。

「…え、」

「…な、」

ツナとトンノは固まってしまった。

隣で吠えた、真っ黒い生き物。

ゆらりと揺れる、頭の炎。

優しげなオレンジの瞳がツナとトンノをとらえた。

「…プ、プロメッサ!?」

咆哮の正体はプロメッサだった。

だが、その姿は先程までの小さくかわいらしいものではなく、あの猛獣の姿であった。

それを見て、口喧嘩をしていた獄寺とリーダーも、笑っていた山本も、ゴミの片付けをしていたオスカルも唖然としている。

リボーンだけはにやりと笑っていた。

「…あ、あの……プロメッサ?」

おそるおそるツナが名を呼ぶと、プロメッサは大きな身体を擦り寄せてきた。

思わずツナはよろめいてしまうが、それをプロメッサの長い尻尾が防いだ。

そして目を細め、ひくひくとヒゲを動かした。

「大丈夫、綱吉？」

呆気。

「しゃべったあぁぁぁぁぁあ！！！！！！」

プロメッサが喋った。言葉を発した。

それは脳内に響くものではなく、直接耳に届くもの。

全員が驚きで目を見開いていた。

プロメッサだけは、嬉しそうに尻尾を揺らした。

こんにちは、はじめまして。

ねえ、早くお話がしたいよ。

ねえ、君たちと遊びたいよ。

この気持ち、伝わってるかな?

ねえ、この世界を、教えてよ。

期待に炎が揺らめいた。

標的１３２　同様

ぱたぱたと音をたてて揺れる長い尻尾。

燃え盛る炎は切れた瞳と同じ朝焼けの色。

真っ黒な毛並みはつやつやとして美しい。

だが、それは大きな身体の猛獣だった。

「…プ、プ、プロメッサ！？」

先程まで小さな子犬だったものが猛獣へと変化した。

変化しただけならまだ良かったのだが。

「綱吉、どうかした？」

喋ったのだ。

猛獣が。

澄んだ声を響かせたのだ。

「な、な、なななななんで！？
なんでプロメッサが喋ってんの！？」

「…え、わ！本当だ！喋ってる！」

プロメッサ自身は、自分が口から声として言葉を発していることに気付かなかったらしい。

何度も「わー、わー、」と声を出して事実を確かめている。

「…な、なんで、」

「おめぇの炎の力だろ、ダメツナが」

その言葉のすぐ後、ツナの背中に痛みが走った。

ツナは突然の衝撃に声も出せずにそのまま倒れそうになったが、それをプロメッサの尻尾が防いだ。

本日プロメッサの尻尾に助けられたのは二度目だ。

ずきずきと痛む背中をさすり、ツナは背後を見た。

リボーンが蹴ったのだ。打撲している状態の背中を。

「な、に、するんだよリボーン！
怪我人の背中を蹴り飛ばすなんて！」

「おめぇが馬鹿だからだろ」

「理由になってないだろ！」

蹴るには理不尽な理由にツナは怒鳴った。
だがリボーンは表情も変えず、ただ笑って口を開いた。

「トンノが実態化したとき、しばらくしたら喋るようになっただろ。
」

「……あ、そういえば……」

「それと同じだ。おめぇの炎の力によって、トンノと同じようにプロメッサも言葉を発することができるようになったんだろ。」

「そうか」とツナは納得する。

プロメッサには、トンノの時と同様にツナの炎を流し込み、実態化させた。

だからプロメッサにもトンノと似たような兆しが訪れるのだろう。

「それぐらい自分で気付け」

「だって…すっかり忘れてたし……」

今ではトンノは普通に仲間として共にいるし、かつてボンゴレの特殊弾であったことを忘れてしまうくらいなのだ。

「綱吉、綱吉」

「ん、ああ、何？」

くいくいと服の裾を引っ張られ、顔をあげるとプロメッサが嬉しそうな表情をしていた。

「見て見て」

プロメッサが鼻先で何かを示す。
その方向に目をやり、「あ。」とツナは声をあげた。

視線の先にいたのは、三人の人間。

先程までくだらない口喧嘩を繰り広げていた獄寺とリーダーと、それをただ見ていた山本だ。

うるさいほどだった口喧嘩は止まり、ぽかんと口を開けて三人はこちらを見ていた。

おそらくプロメッサに驚いているのだろう。
突然猛獣へと姿を変え、自分たちに向かって咆哮し、言葉を発したのだから。

「…あ、あの、三人共……」

「静かになっていいじゃねぇか、しばらくほっとけ」

「ひどくない、それ！」

リボーンは固まる三人を放置し、その小さな手をプロメッサの真っ黒い大きな身体にぴたりとひっつけた。

「つやっつやだな」

「えへへ、女の子だからね」

「へえ、女の……」

「……女の子？」

「うん、女の子」

聞き間違いだろうか、とツナは何度も聞き返す。
そのたびにかえってくる返事は、肯定するものばかりだった。

「…ほ、んとに女の子？」

「うん。リボーンは気付いてたでしょ？」

「勇ましかったが雌の気配だったからな」

この小さな赤ん坊はなんでもお見通しなのだろうか。
さも当たり前とでも言うかのようににやりと笑った。

「さて、プロメッサ」

リボーンが名を呼び、プロメッサは答えるかわりに顔を前足の上に

置き、「伏せ」の状態になる。

「おめぇ、オスカルとこれから一緒にいてやれ」

「なっ、」

「オスカルと？」

クゥ、と鳴いてプロメッサは首を傾げる。
間抜けな声をあげて驚いたのはオスカルだった。

「一緒にいる、って…」

「オスカルの傍にずっといるってこと？」

リボーンはこくりと軽く頷き、オスカルを指差した。

「こいつは、研究に夢中になると我慢がきかなくなることがしばしばある。それを監視していてほしい。」

「なんか明かに私を変人扱いしてないか、リボーン…」

「心配すんな。人間なんか誰しもが変人だ。お前はその上を行く変人の中の変人だ。」

「…。」

オスカルは哀しくなった。同時に虚しくもなった。
自然と苦笑いがこぼれる。
それをツナが慌てて宥めはじめた。

そんなことはお構いなしに、リボーンは再びプロメッサに問う。

「…いやか、プロメッサ」

「……。」

プロメッサは答えることもなく、まっすぐリボーンと視線をかわす。

ゆらり、

炎の動きが変化した。

「…私が、オスカルの面倒を見てあげる」

優しい声で、嬉しそうにプロメッサは言った。
表情のないはずの顔に、笑顔が見えた。

「…そうか。」

頑張れよ、とリボーンは言葉をかけた。

「えへへ」とかわいらしい笑い声でプロメッサは頷いた。

「…人はみんな、変人なんだってさ……」

「またリボーンに何か言われたんですか?…オスカルさんって意外と心が弱いんですね」

「…意外、は失礼だよ、綱吉くん。」

もう笑うしかない。

そうオスカルは思った。

標的１３２　同様（後書き）

途中から獄寺くんたちが固まり続けてます。
プロメッサの姿、咆哮、言葉を発したことに驚きすぎてしまったのですよ。

わたしなら失神します（どや顔）

あ。お気づきになられた方もいらっしゃるかもしれませんが、「その先には。」のあらすじをやっと変更することができました！

ずっと、一ヶ月前くらいから変えなきゃ、変えなきゃと思ってましたが、いい文が思いつかず…。

昨日不意に変えてみたら納得のいくあらすじになったので変更しました！

さて、今日で補習は一旦お休みです。
がんばってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的１３３　三つの会話

「まじで驚いた…」

「心臓に悪いのな……」

「めっちゃ驚いてたもんなぁ、オレたち…」

プロメッサが猛獣へと変化してから少しの時間が経った。

驚愕で唖然としていた状態からなんとか正気に戻った三人は、ぽつりぽつりと言葉を発しはじめていた。

三人の視界には、楽しそうに会話をしているプロメッサとリボーンがうつっている。

端っこでは何故か体操座りをしているオスカルを慰めるツナとトンノの姿があった。

「驚いている間に何かあったみてぇだな」

「…てかなんでオレたち驚いてたんだっけ?」

「あの犬さんが巨大化して吠えたからだろ、山本の坊主…」

首を傾げながら笑う山本を、リーダーは「大丈夫か、こいつ」とでも言うような目で見ていた。

「こいつはそういう奴なんだよ、ジジイ」

「そうか…、一瞬認知症じゃねぇのかと疑っちまったぜ」

掌の上で眠る三人の小人を見つめながら「ちっせーなー、軽いなー」と何やら独り言を言っている山本を、二人は呆れたような感じで見た。

「…ジジイ」

「なんだ、獄寺の坊主」

呼び方は結局これでいいのだろう。

「ジジイ」と呼ばれても、「坊主」と呼ばれても二人は呼び方について何も言わなかった。

「…なんで十代目が落ち込んでる四十代のオッサンを慰めていらっしゃるんだろうか」

リーダーは獄寺の視線の先を追う。
そこには今だ体操座りでうずくまるオスカルを慌てたように慰めているツナの姿があった。

「……さぁなー」

リーダーはその場にどっかりと座り込み、「腹減ったなー」と一人呟いた。

「…人は弱い生き物だ」

「ごめんなさい」

「…精神は脆いんだ」

「すいません」

「…ガラスのハートを持っているんだ」

「も、申し訳ございませんでした」

オスカルのいちいちの言葉にツナは謝る。

体操座りをして膝に顔が埋もれているせいか、オスカルの声はくぐもっていた。

先程からずっとこの調子で、もうツナはお手上げである。

「ほ、本当にごめんなさいオスカルさん。顔をあげてくださいよ…」

「…私のことは気にしなくていいよ、綱吉くん。」

「いや、気にするなと言われても……」

オスカルがこうなってしまったのは少なくともツナのせいだし、放っておくこともできなかった。

「どうしよう、トンノ…」

「僕に言われても……」

肩の上の鳥も困った様子だ。

一人と一羽の大空は目の前で落ち込む学者をとにかく慰めるのだった。

「……ふむ、」

顎に手をそえて、リボーンは頷いた。

「おめぇも特別な力は使えるんだな」

「そうみたい。」

小型犬へと姿を戻したプロメッサはちょこまかと動き回る。

だがその全身にはオレンジの炎を纏っていた。

「なんかこの炎ってあたたかいね。癒されるっていうか…」

「大空だからな。大空属性は貴重なんだぞ。」

「へぇー！」

ぴょんぴょんと跳ねてプロメッサは声を上げた。

舞い散る火の粉が輝いて美しい。

「貴重なのになんで綱吉は私を大空属性にすることができたの？」

「それはオレにもわからねぇんだ」

リボーンは腕を組んで少し離れたところで困り果てているツナを見た。

「あいつの力は、よくわからねぇ。だが、無限の可能性を秘めていることだけはわかる。」

“調和”とは不思議なものだ。

本物の炎としても活用できる。

石化させたり、浄化させたりもできる。

ツナの場合は、トンノやプロメッサを実態化させてしまった。

使い方次第で、どんなこともできるのではないかと思うくらい、“調和”はすごい力を持つ。

さらに、ツナには誰も知らない謎の力があるのだ。

「実際、オレはあいつの力を把握しきれていねぇ。普段は勉強も運動も何をやってもダメダメな奴だが、驚かされるほどの成長を見せるんだ。」

プロメッサはおとなしくリボーンの隣で興味津々に話を聞いている。

そんなプロメッサをリボーンは小さな手で頭を撫でながら笑った。

「育てがいのある生徒だな」

その大きな真っ黒い瞳は、満足げに、楽しそうであった。

標的１３３　三つの会話（後書き）

８月４・５日は、更新できるかわかりません。

ちょっと家族で遠出をしてきます。

更新できたらいいんですが、多分疲れてしまうだろうし…。

読んでいただきありがとうございました！

標的１３４　一休み

オスカルの研究所に到着したのは午前の十時頃。
それから実験やら何やらをして、今は午後二時をまわっている。
昼食をとっていないので、それぞれの空腹感はピークに達していた。

「お腹空いた……」

ぐうぐうと鳴る腹をさすり、ツナは呟いた。
完治していない腹の傷が先程の実験の際に痛みだし、腹が鳴るたびに振動でかすかな痛みを帯びるようになった。

痛いし、お腹は空いた。

まだ落ち込んでいるオスカルも空腹のようで、鈍い音を腹から鳴らせてやっと顔をあげた。

「オ、オスカルさん…」

「落ち込んでたら空腹感がさらに増したよ…。いつまでも落ち込ん

でたら意味がないね。すまなかった、綱吉くん。」

どっこらせ、と言ってオスカルは立ち上がり、大きくのびをした。

「ごはん食べようか！みんなお腹が空いてるだろう？」

「オスカルさん、料理できるんですか？」

「手先は器用だし、イタリア料理なら得意だよ。」

まさか料理もできるとは。
ツナはオスカルの意外な一面に驚いていた。

（…研究だけしかできないと思ってた。）

口に出せばまた落ち込んでしまいそうなことを、ツナはひっそりと心の中で思っていた。

それを読心術で読み取った赤ん坊がいたことは言うまでもない。

「ここにはキッチンも装備されてるんだ。パスタでも作ろうか。」

「こっちだよ」とオスカルに促されるまま、ツナたちは実験室をあとにした。

ツナは左肩にトンノを乗せ、オスカルの後をついていく。

「綱吉っ」

「うわっ」

右肩にプロメッサが跳びうつり、ツナは思わずよろけた。

だがすぐに体制を直し、転ぶことは避けることができた。

プロメッサはすっかりツナに懐いてしまったようだ。

「ダメツナッ」

「いてっ」

次は頭に何かが乗った。

容赦のないリボーンは思いっきりツナの頭に跳び乗ったのでツナは前屈みになる。

「い、痛いだろリボーン！」

「気にするな」

「意味わかんないよ！」

はあ、とため息をついてツナは再び歩きだした。

今のやりとりを、後ろにいた獄寺たちは黙って見ていた。

ツナが何度か転びそうになっていたが、本人がなんとか耐えていたので手を貸す必要はなかったのだ。

「なんか面白い光景なのな！」

山本が笑いながら言うと、獄寺とリーダーは素直に頷く。

右肩にプロメッサ、左肩にトンノ、頭にリボーンを乗せたツナの姿はおかしかった。

重くはないのだろうかと思うほどである。

「おもしれぇなあ、坊主は。」

「十代目は信頼されてんだよ」

ふふん、と自分のことのように誇らしげに獄寺は鼻をならした。

ツナが多くのものに信頼されているのは右腕（自称）として嬉しいことなのだ。

すっかりご機嫌になった獄寺の横顔を見て、「単純だなあ」とリーダーは噴き出した。

「ごちそうさまでした！」

ぱん、と両手を合わせてツナは言った。

「美味しかったかい？」

「はい！オスカルさん、本当に料理上手だったんですね。」

「材料がなかったから適当に作ったんだけど…よかった。」

オスカルが立ち上がって片付けの準備をし始めたのでツナは食器を運ぶのを手伝う。

適当に作った、と言ってもオスカルの作ったパスタは美味だった。

最近は和風パスタにハマっているとかで、作ってくれたのも和風パスタだ。

さっぱりとした味で、ツナはおかわりまでしてしまったほどである。

「日本の醤油や味噌は素晴らしいよ。私は味噌汁が大好きなんだ。」

食器を洗いながら語るオスカルは、とても楽しそうだった。
隣で食器を拭くツナも好きな料理などの話でつい盛り上がってしまう。

まさか、学者とこんな話をするとは思ってもいなかった。

オスカルとの出会いはおかしかったのだ。（なにせ入院している病室に深夜に訪れたのだから）

だが今はこうして笑い合っている。

（…不思議だなぁ）

しみじみと人との交流の深さを感じつつ、ツナは食器を片していった。

「……。」

「……。」

「……。」

「……クゥ…。」

「…やめなよ三人とも。プロメッサが困ってるよ。」

見兼ねたトンノが言葉を発した。

机の真ん中には全身真っ黒の、頭に瞳と同じオレンジ色の炎を燈した子犬がぷるぷると震えていた。

それを獄寺、山本、リーダーの三人は凝視し続けている。

そのあまりの視線にプロメッサは怯えてしまっていたのだ。

「…プロメッサがかわいそうだよ……」

注意しても観察をやめようとしない三人に、トンノが痺れを切らして翼で思いっきり叩(はた)いたのを、エスプレッソコーヒーを飲んでのんびりしていたリボーンとレオンは愉快そうに見ていた。

標的１３４　一休み（後書き）

なんとか更新できましたね！

今は大阪にいます。
ログハウスに泊まってます。

虫がたくさんいます（笑）

大阪は怖いです…てか都会が怖いです（（ ゜Д ゜ l l））

愛知県の田舎生まれ田舎育ちのわたしには都会が恐ろしくて恐ろしくて！

田舎が恋しいです。

オスカルさんが作ったパスタを食べてみたいです。
ボンゴレパスタを作ってほしいですね！

もう後書きでも何でもない（笑）

読んでいただきありがとうございました！

標的１３５　プロメッサの能力

遅めの昼食をすまし、ツナたちは談話室でくつろいでいた。

オスカルの研究所は、どうやら様々な部屋が多々あるらしい。

実験室は三つ、台所や談話室、さらには個室がいくつかある。

オスカル曰く、彼の部下に研究を手伝わせるときに使用するらしいのだが、滅多に使わないと言う。

「ほんとにアジトみたい…」

「参考にしておけよ」

ソファーに腰掛け、ツナはオスカルから渡された研究所の見取り図を見ていた。

使用している面積は広いが、階はそれほどない。

あまり日本には来ないので、この研究所を使うことは数年に一回ほどだと言う。

「ここはオスカルの父親がつくったらしい。あいつの家系…アッカルド家は相当な金持ちだからな。」

「オスカルさんってお坊ちゃんなの？」

「トンノ、お坊ちゃんって…」

ツナの膝の上にいたトンノがこてん、と首を傾げた。

隣ではプロメッサが丸くなって寝ている。

一羽と一匹はいつのまにか仲良くなったようだ。

「…あれ、そういえばオスカルさんは？」

食事の後片付けをしてからオスカルの姿が見えないので、ツナは談話室を見渡すが、オスカルはいなかった。

「オスカルなら、さっきの実験の結果を分析するとかでパソコン片手に自室にこもったぞ。…そういえば、結果について話があるとか言ってたな。」

「は、話って？」

「オレが知るか。」

リボーンはそっぽを向いてコーヒーカップに口をつける。
その素っ気なさにツナはため息をついた。

「……む、」

ぴょこ、と眠っているプロメッサの耳が動き、すぐにまぶたをあげた。

勢いよく起き上がり、きょろきょろと辺りを見渡して長い尻尾をゆらゆら揺らした。

「…ど、どうしたのプロメッサ？」

「綱吉、オスカルが呼んでるよ」

オレンジの瞳を前足でこすりながらプロメッサは告げた。

それにツナは目を丸くする。

「…今、なんて？」

「だから、オスカルが綱吉のこと呼んでるよって。」

ツナは言葉を失った。
トンノも言葉を失った。

リボーンは相変わらずの無表情で顔をこちらに向けた。

「な、なんでオスカルさんが呼んでるってわかるの！？」

「犬に人の思考が分かる能力なんてあったの！？」

「あるわけねぇだろ。」

リボーンが間を開けずに混乱するトンノにツッコミをいれた。
それを見てプロメッサは微笑み、口を開く。

「私にもよく分からないんだけど、オスカルと意思疎通ができるみたい。さっき気付いたの！」

姿勢良く座り、嬉しそうにプロメッサは尻尾を振る。

意思疎通、つまりテレパシーだ。

おそらく、実態化して大空属性になってからその力が生まれたのだろう。

「プロメッサ、それは誰にでもできるのか？」

「多分ね！」

リボーンの問いに、プロメッサは嬉しそうに答えた。

（…予測がつかねぇな。大空属性とツナの持つ能力が合わさると、）

一体何が生まれるのか。

一体何が出来上がるのか。

一体何が起こるのか。

それは予測不可能な掛け合わせ。
不思議な能力が作り上げる奇跡とも言えるだろう。

「…夢中になるはずだ。」

「何が？」

突然怪しく笑い出したリボーンを見て、ツナは不審なものを見るような目を向けた。

それが癪に障り、リボーンはひとまずツナの頭を殴っておいた。

（未知の可能性を持つ能力だなんて…誰もが興味を持つだろうな）

目の前で頭をおさえ痛がる少年を、赤ん坊はオスカル同様に好奇を抱いた。

「あ、綱吉くん！」

プロメッサに連れられ、ツナたちはオスカルの自室にやって来た。

自室と言っても、複雑な機械が多く置いてあり、片隅にベッドがぽつりと置かれているだけだ。

実験室とさほど変わりはないように見える。

「オスカル、分析は終わったのか？」

「ああ、終わったよ。」

回転式の椅子をまわし、満面の笑みでオスカルは頷いた。

手元にある紐をひくと、目の前に大きなスクリーンがあらわれた。

「ほら、そこに座って！」

柔らかそうなソファーに促されると、ソファーの前には会議室にあるような長い机があり、その上には何やら資料のようなものがあった。

全員が席についたのを確認すると、オスカルはプロメッサを肩に乗せ、パソコンを操作しはじめる。

「…さて、はじめるよ！」

部屋の電灯が消され、スクリーンに画面が浮かび上がる。

午後三時、能力分析についての会議がはじまった。

標的１３５　プロメッサの能力（後書き）

久しぶりの更新となりました。
遅くなって申し訳ございません…！

忙しすぎて、寝不足で小説がまったく書けませんでした。
まだ県大会もあるので、更新できない日があるかもしれません。

暇が欲しいです（´－ω－；）

いつにも増してぐだぐだな文章でごめんなさい！

早く技を出したい……

読んでいただきありがとうございました！

標的１３６　会議

一言で言うなら、驚いた。

それしか言葉が出てこない。

しばらく、画面に見入ってしまった。

全身に鳥肌がたったよ。

ほら、よくあるじゃない。

感動すると鳥肌がたつあれだよ。

とにかく私は感動したんだ。

身体が震えて、しばらくパソコンをまともに操作できなかった。

ｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）同様に、興味をもてる。

さて、この結果から何が生まれるだろうか。

薄暗い部屋に映し出されるスクリーン。

ツナたちは浮かび上がる画面を見入る。

スクリーンの傍でオスカルがパソコンを操作し、プロメッサが手元の資料をオスカルの操作に合わせるようにめくる。

もはやプロメッサはオスカルの助手ではないだろうかと思うほど、プロメッサの作業はオスカルの動きに合っていた。

「なんだあの犬…」

「ただの犬じゃないのなー」

獄寺がプロメッサの動きの俊敏さに呆気にとられ、山本は驚きながらも感心している。

「すげぇなあ、あの犬っころ！」

「リーダー、君まともに名前呼べないの？」

大口を開けて拍手を送るリーダーの呼び方に、トンノが指摘するが、リーダーは「気にするな、気にするな」とトンノの背中をぽんぽん叩いた。

「ちょ、そんなに騒いだらｔｅｓｏｒｏ　ｎａｓｃｏｓｔｏ（テゾーロ　ナスコスト）の三人が起きちゃうよ！」

トンノが翼でリーダーの頭をぺしんと叩く。

疲労で眠っているシクロとシスイ、セブラーノは机に置いたクッションの上ですやすやと寝息をたてていた。

「すまねぇな」と叩かれた頭をさすりながらリーダーは笑顔で謝罪した。

それをよそに、ツナは資料に釘付けになっている。

自分の戦闘力やら能力やらがまとまっているのだ。

見入ってしまうのは当たり前だ。

そんなツナに気付き、リボーンがにやりと笑った。

「なんだ、そのかたい表情は」

「な、なんか…複雑じゃない？自分のデータが資料としてまとまってるなんてさー…」

少し分厚い資料を指差しながら、ツナは苦笑いをする。

「まあ、確かにな。」

戸惑いを見せるのも仕方ない、とリボーンも資料を見る。

一枚めくれば、今回の実験の用途についての説明が紙いっぱいに書かれてあった。

おそらく、そのページを見ればツナは「うげぇ」とか言って嫌な顔をするだろう。

だが、このページは読まずにとばしたのだろうか、ツナは「うげぇ」とも言わないし嫌な顔もしていなかった。

「えーっと、まずは今回の実験結果を見てもらうね」

オスカルが目配せをして、スクリーンをかえる。

映し出されたのは、オレンジの炎と数字だった。

「実験中、綱吉くんの炎を検出させてもらったんだけど、純度は申し分ないね。八割は高純度だよ。」

「それと、」とオスカルがキーボードのエンターキーを押すと、オレンジの炎が勢いよく燃えだした。

「オスカル、それはなんだ。燃える勢いがすごいが。」

「これは綱吉くんの炎の最大ＦＶ（フィアンマボルテージ）を圧縮させてあらわしたものだ。今回の実験での最大ＦＶは３６万ＦＶ。でも、おそらく綱吉くんの炎の最大ＦＶはこんなものじゃない。」

真剣な面持ちで、オスカルが資料をめくった。

「これは私の推測だが、…ディスペラーレに操られていたウライラを浄化させたときの炎は…おそらく、６７万ＦＶだ。」

「ろく…！？」

ありえない数字にツナがあんぐりと口を開けた。

まさか、そんなことはないだろう。

そう思ってツナはオスカルを見るが、オスカルは事実に満ちた表情をしていた。

「なんでそんなことがわかるんだ？」

「あくまでも予想だから、絶対とは限らない。もしかしたらもっと数値が高いかも知れないんだ。だが、私のパソコンで分析した結果はこの数値だ。確かな数値はこれから出していくんだよ。」

「じゃあ、なんで今回数値を出したんですか？」

これから確実な数値を出していくのだから、今のこの数値はいらないのではないだろうか、とツナは思った。

だがそんなツナの腕をリボーンの小さな手が捻る。

「いてっ、いててててて！！！」

「馬鹿かおめぇ。ある程度の数値を出しておかねぇと目標も何も考えられねぇだろ。」

右腕だけでなく、左腕までも負傷させる気か。
容赦のないリボーンの力にツナはそんなことを考えた。

「今回はちゃんと目的があるんだよ、綱吉くん。」

「も、目的…？」

捻られた腕をさすりながらツナは首を傾げる。
オスカルは頷き、リボーンはにやりと笑った。

「今回、新しい技を生み出すためにこの数値を出したんだよ、綱吉くん。」

より、強くなるために。

新たな技を作り上げるんだ。

標的１３６　会議（後書き）

やっと…やっとだ！

やっと新技について触れることができました！

楽しみで仕方ないです（＾ｏ＾）

てか、未来編終了時のツナさんの炎の最大ＦＶってどれくらいなんでしょう？

メローネ基地では２５万ＦＶ、チョイスのときは３０万ＦＶくらいあった気がしますが…。

今回小説に出した数値が、何故か少ないように思えました。

今日は県大会です。がんばってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的１３７　新技企画

「新…技……？」

「そうだよ、綱吉くん」

ぽかんと口を開けるツナにオスカルは笑顔で頷く。

「君、今どんな技が出来る？」

「…えっとー、」

ツナは首を傾げて考えるしぐさをする。

ツナが今使える技は、

死ぬ気の零地点突破（だがこれはダメージが大きいので使うことはないだろう）

死ぬ気の零地点突破・改（応用として白刃取りがある）

死ぬ気の零地点突破・初代（ファースト）エディション

X　BURNER

X　BURNER　AIR

X　BURNER　超爆発（ハイパーイクスプロージョン）

Xストリーム

あとはボンゴレ匣のナッツの形態変化によるビッグバンアクセルやバーニングアクセルなどがある。

「…これくらい、かな」

だいたいの名前はあげただろう。

ナッツの形態変化によるマントは武器であるだろうからツナは技には入れなかった。

他に忘れているものはないか、とツナが再び考えようとするとオスカルが「ううーん」と唸りだした。

「…ど、どうかしたんですかオスカルさん」

眉間にしわを寄せてうなるオスカルに、何かまずいことを言ったのではないかとツナは心配になる。

すると顎に手をあてて、オスカルはパソコンを操作しはじめる。

すぐに画面が変わり、スクリーンにツナが今言った技の名前がずらりと並べられていた。

「前綱吉くんに質問したときの技についてのデータなんだけどね、なにか…こう、ぱっとしないんだ」

「ぱ、ぱっとしない？」

ぱっとしない、とはどの意味だろうか。

冴えない、ということだろうか。

隣では獄寺が「十代目の素晴らしい技がぱっとしねぇとはどういうことだ！」と叫び立ち上がったので、ツナはますます心配になる。

「…なにかさ、ほとんどのものが体力を大量に消費したりするじゃ

ない？」

「……そういえば…」

「確かにオスカルの言うとおりだな」

オスカルの言葉にツナもリボーンも頷く。

「体力の消費が激しいと、長時間の戦闘も無理だし、身体に負担がかかって危ない。だから今綱吉くんが使える技を…すべて連続で使ったら、間違いなく綱吉くんは倒れるよ。いくら戦闘の経験があったとしてもね。」

「……まぁな。体力の消費が少ない攻撃方法は肉弾戦くらいしかねぇしな。」

オスカルの意見を肯定するように、リボーンが補足をする。

「だから、体力の消費が少ない、かつ使える技を編み出したいと私は考えたんだよ」

ちらりとオスカルがプロメッサに目配せをすると、プロメッサはオスカルに代わってパソコンの操作をしはじめる。

それに欠伸をしていたリーダーが驚いて、欠伸をしたままぴたりと固まってしまった。

「ははっ、おっさん顎はずれたのか?」と山本がリーダーの肩を叩きながら笑う。

そんな二人はさておき。

画面が変わり、あらわれたのはまたしても大空属性の死ぬ気の炎だった。

「綱吉くん。大空属性の炎は“調和”の力があったね。」

「は、はい…。」

質問をされ、ツナは怖ず怖ずと返事をする。

「“調和”は、ばらばらなものをひとつに纏める。それを少しひねれば、自分に合わせることができるってことだと考えることができる。
だから上手くいけば敵の力を封じたりすることができるってわけだ。」

あまりオスカルの言うことがわからずツナは首を傾げるが、リボーンは理解したようでにやりと笑う。

解(げ)せないツナ達（特にツナと山本とリーダー）を見て、オスカルは苦笑いをして説明を加える。

「だからね、敵の力・攻撃を封じる…防衛しながら攻撃も出来るようになると思うんだ。」

「おお、なるほどな！」

山本とリーダーの声が見事合わさった。

だがツナは納得しないような顔をする。

「どうした、ツナ」

「…あのさ、」

腑に落ちない表情のツナは戸惑いながらも話しはじめる。

「防衛しながら攻撃する…っていうのは、わざわざ新技を作らなくてもできるんじゃないかなって…」

「どうして？」

「オレの匣兵器の…ナッツに、防衛モード（モード・ディフェーザ）があるし…大丈夫だと思うんですけど……」

ツナは自らの指に嵌められたライオンの形をした指輪を見せる。

すると指輪…ナッツが「ガォッ」と鳴き、まばゆいほどの光を放ち指輪から小さなライオンへと姿を変えて現れた。

「おおっ！」

突然現れたライオンにオスカルが驚いて声をあげる。

机の上でびくりと怯えたナッツをツナが抱き抱えた。

「あの…こいつがナッツで……オスカルさん見るの初めてでしたっ

け？」

「声を聞くのは初めてだよ！」

オスカルは目を輝かせてナッツを凝視する。
びくびくと震えるナッツはオスカルに背を向けて恐る恐るオスカルの顔を見ていた。

「…この子についてはおいおい調べさせてもらうことにして、」

こほん、とひとつ咳ばらいをしてオスカルは再び話をする。

「この子の…防衛モード（モード・ディフェーザ）があるから防衛の技は大丈夫って言ったよね？…でも、もしこの子が怪我をしたりしたらどうなる？君は体力の消費が激しい技でかわすか、肉弾戦で身体に衝撃を受けて流すか…逃げるなんてできないだろう？」

「…そっか……」

「だから、ちゃんとした防衛の技もあったほうがいいと思うんだ」

オスカルの意見を聞き、ツナは確かにそうだと納得した。

頷いたツナを見て、オスカルは真剣な表情から柔らかい表情へと変えた。

「…では、聞かせてくれないか？」

スクリーンを消し、オスカルは腰掛ける。

「綱吉くんの、意見をね。」

標的１３７　新技企画（後書き）

県大会、無事奨励賞をいただきました。
安心して帰宅したらすぐ寝ました。なので更新ができませんでした。
…ごめんなさい！

今回…終わりかたがわからず中途半端におわらせてしまいました。
最近前よりさらに上手く文が打てなくなりました。
スランプでしょうか！？

…ひとまず書き続けましょうか。

新技、と考えるだけでわくわくしますよ！

読んでいただきありがとうございました！

標的１３８　意識内の会議

ざわざわと木々が揺れる。

真っ暗な部屋の中、「すぴぴぴぴー」という寝息が聞こえる。

少し寝苦しさを感じつつ、ツナは真っ直ぐ天井を見つめていた。

そしてひとつ、ため息をつく。

「……新技、かぁ…」

「綱吉くん、君の意見を聞きたい」

「…意見？」

「そう。新技についての、君の意見だよ」

そんなこと言われても、とツナは戸惑ってしまう。

今まで新技だなんてこれっぽっちも考えてなかったのだ。

それも、防衛の技など。

今のままで充分だと考えていたのだ。

「……えっ…と……」

ツナが吃っているのを見て、オスカルは「ふっ」と微笑んだ。

「…急に話をふってごめんね。」

……明日、もう一度聞くから。

それまでに、考えてくれないかな。

「…はぁー」

寝返りをうち、壁と真っ正面になる。

「わかんないよ……」

そんな、何も考えていなかったのに。

オスカルは「また明日おいで」と言った。
だから、明日オスカルの場所に行くまでに考えなければならないのだ。

…けれど。

「…眠くて、考えてられな、」

ツナは睡魔に導かれるまま、ゆっくりと目を閉じた。

「…ナ、……ツナ…」

「…んー……」

「ツナ、起きて…」

自分を呼ぶ声に誘(いざな)われるまま、ツナは目を覚ます。

広がるのは、視界いっぱいの大空。

そう、ツナの意識の中である。

「ツナ、起きた?」

「…徳松」

ツナの寝転ぶ隣には、徳松が座っていた。
額に炎を燈らせ、ツナが徳松の名を呼ぶとにっこりと微笑んだ。

「徳松、もう大丈夫なの？」

「ああ、しばらく休んだら少しは良くなった。まだ実態化はできないがな。」

昼間、病み上がり同然である徳松は力を使いすぎてしまった。
だから意識の中で深い眠りについていたのだ。

まだ完全に回復したわけではないが、意識の中だけでは動けるようになったのだろう。

「…ツナ、お前新技のことで悩んでるんだろ？」

「えっ!?なんで寝てたはずの徳松が知ってるの!?」

「オレはツナの能力、つまりツナの一部だからな。ツナの考えてることは自然とわかるんだよ」

へえ、とツナは思わず声を上げる。

徳松はあぐらをかいてツナに悩みを口に出すことを促した。

「戸惑ってるんだろ?」

「……うん。突然、新技だなんて…今までそんなこと考えてもなかったしさ…」

ツナは体操座りをして、腕の中に顔を埋(うず)める。

「確かに今まで防衛の技って言ったらナッツの形態変化(カンビオ・フォルマ)くらいしかなかったし…避ければ大丈夫だと思ってたからさ」

死ぬ気の炎であれば凍らせることもできる。

それにＸ　ＢＵＲＮＥＲで攻撃を掻き消すこともできるはずだ。

だがそれは体力の消費が激しい。
確かにオスカルの言うとおりなのだ。

「どんなのがいいのかわからないよー…」

腕に顔が埋まっているのでツナの声がくぐもっている。
「うーうー」と唸っているツナを見遣り、徳松は口を開いた。

「…ツナはさ、実験でプロメッサと戦ってたとき、どうだった?」

「どうだったって?」

「プロメッサの攻撃を受けて、傷を負った。…それで充分わかってるんじゃないのか?」

“どんな防衛技が必要であるかを。”

「……徳松は、なんでそう言えるの？オレがわかってるか、なんて。」

自信ありげに悟る徳松にツナは問う。

またも徳松は当たり前のように答えた。

「言っただろ？オレはツナの一部だから、ツナの考えてることはわかるって。」

徳松はツナの能力、つまりはツナの一部。

先程徳松はそう言った。

ツナの一部であるから、ツナの考えていることは自然とわかると。

「冷静に考えてみれば、答えが出てくるよ。…オレも、一緒に考えるからさ。」

ぽん、と徳松の手がツナの背中を軽く叩いた。
ツナは目を丸くしたが、徳松の笑顔を見て表情が綻(ほころ)んだ。

「そういえば、明日もオスカルの所に行くのか？」

「…うん。実験とか会議とかしてたらあっという間に夕方になっちゃって、もう遅いから明日にしようってことになったんだ。」

会議が終わったのは、夕方の5時。
このまま会議を続けたら真夜中になってしまうだろうということで一時帰宅ということになったのだ。

「それと…リボーンの提案で、夏休みはオスカルさんの研究所で新技の開発とかするみたい」

「…やる気だな、リボーンのやつ」

はあ、と二人同時にため息をつく。

夏休みまであと数日。

せっかくの長期の休みまでもリボーンに振り回されるのかと思うと、憂鬱で仕方がなかった。

標的１３８　意識内の会議（後書き）

思うように更新ができません。

時間がない、文章を書く力がさらに劣ったのが理由です。

書きたいのに書けない…辛いです。

読んでいただきありがとうございました！

標的１３９　悩み解決

意識の中、ツナは徳松と沢山会話をした。
それはほとんど新技についての話題だった。

夢と同じように、意識内では時間の感覚はない。
一瞬のように思えたり、とても長い時のように感じる。

今回は後方で、どれくらい時間が経ったのかわからないほど徳松と話していたのだ。

だから、起きるべき時を教えてくれたのは徳松だった。

「ツナ、そろそろ起きる時間だ」

「えっ、今何時!?」

「朝の七時半。オスカルの所へは九時に行くとさっき言ってただろ？」

ツナは思わずあたりを見渡す。
だがまわりは変わらずの大空。
ここは朝も昼も夜も関係ないのだろう。

確かにツナが眠ったあと、自然と意識の中へ誘(いざな)われるが、いつも大空は明るい。
意識内の大空が暗かったことはない。（過去に一度真っ暗闇になったことはあるが。）

「じゃあ起きようかな」

「ああ。オレはもう少し休んだら実態化できるだろうから、オスカルの研究所で」

「うん。ありがとう徳松」

ツナは笑顔で徳松に礼を述べた。

すると、ふわりと身体が軽くなり、ツナは目を閉じた。

浮遊感がなくなり目を開けると、そこはいつもの自分の部屋だった。

ちらりと目を向けると、ハンモックはもぬけの殻。
どうやらすでにリボーンは起きているらしい。

ベッドから抜け出し、机の上を見ると三人の小人がすやすやと眠っていた。

シクロとシスイ、セブラーノは全く起きる気配がない。

（そういえばオスカルさんが数日は起きないだろうって言ってたな…）

セブラーノの気配を感じ、シクロとシスイは瞬間移動をし、セブラーノは長い封印から目覚めた。

シクロとシスイが瞬間移動のため、セブラーノが封印から目覚めたばかりのため、疲労で眠っているのだという。

試しにツナが三人の小さな頭をつつくが、まったくびくともしない。

しばらく三人にちょっかいをだしていたツナだが、下から奈々に名を呼ばれたため一階へと降りていった。

「ツッ君、夏休みに合宿するんですって？リボーン君から聞いたわよ」

ご飯をよそいながら奈々はツナに問う。

突然の問いに戸惑いながらも、ツナは適当な相槌をうつ。

「獄寺くんたちも一緒の勉強合宿なんでしょ？この前のテストの結果もいつもより良かったし、最近ツッ君頑張ってるわね！」

「ま、まあね……」

嬉しそうな奈々の言葉から、嫌な出来事を思い出す。

ツナがオスカルの研究所へと出向くのは期末テストの結果がノルマに達していなかったからである。（精一杯の努力をしたつもりだった。）

だがセブラーノを見つけることができたり、怪我を負ったがプロメ

ッサに出会えたりと、嬉しいこともあった。

だから今回、テストのノルマを達することができなかったのも良かったのかも知れないと思いはじめているツナであった。

朝食を食べ終え、ツナは自室に戻り準備にとりかかる。

あとからトンノがついてきて、机の上の小人たちを見下ろしていた。

「この三人はどうするの？」

「オスカルさんが数日は目覚めないって言ってたから、このままゆっくり休ませてあげようかなって」

トンノは「ふぅん」と言いツナの準備が出来るまで三人の小人の傍に座っていた。

まったく目を覚まさないので心配になっているのだろう。

まるで親鳥のようなトンノを微笑ましく見ていると、ピンポーンとチャイムが鳴った。

すぐに奈々が玄関の扉を開けたのだろう、獄寺と山本の声が元気よく聞こえた。

急いで階段をおりると、朝から元気な二人と「おはよう」と挨拶をかわす。

「準備はできたか」

リボーンがツナの頭に飛び乗り、バサバサと羽ばたく音をたててトンノもやって来た。

ツナは頷いて奈々に「いってきます」と声をかけて家を出た。

誰にも見られないように人気（ひとけ）のない並盛神社でトンノは巨大化し、ツナたちを乗せてオスカルの研究所へと向かう。

大きな翼が風を切り、美しい毛並みがキラキラと輝く。

ふわふわなトンノの背中で到着を待っていると、ふいにリボーンがツナに話しかけた。

「ツナ、新技はどうなったんだ」

「…徳松と話をして、なんとか考えてはみたんだけど、オスカルさんがどう思うかなって」

ツナの答えにリボーンがふん、と鼻を鳴らす。

そしてぺちんと軽く頭を叩かれた。

「オスカルがどう思うかは置いとけ。おめぇの考えがまず大切なんだ。」

「そうですよ十代目！オスカルの野郎が十代目の案を否定したらオレが果たしてやりますから！」

「大丈夫だって。ツナと徳松が一生懸命考えたんだから誰も否定なんかしねぇのな！」

獄寺の「果たす」に危険を感じたツナだったが、三人の言葉で安堵した。

（…多分、大丈夫だよな。徳松も一緒に考えてくれたんだし。）

少し不安を抱えつつも、ツナたちはオスカルの研究所に向かった。

標的１３９　悩み解決（後書き）

タイトルは無視で！（笑）

昨日更新しようとしたら寝てしまいました。
気付けば朝の８時。ガーン。

しかも書き途中でした。ガーン。
どちみち更新できなかったですね。

わたしの頭の中は新技コールが！
わくわくわくわくわくわくです！

だがしかし、文才がないのでせっかく考えていただいた素敵な技を披露しきれないのでしょうね。

残念すぎて泣けます。

シクロ、シスイ、セブラーノを早く起こしたい。
結加ちゃんとロンジさんを帰国させたい。

だが小説の進みが遅い！（泣）

もう終業式とかすっ飛ばしてやります。
一気に夏休みにしてやります。

テストの終わった時期が一緒だったのに小説内ではまだ夏休みに入っていないとか！

時間の狂いですね。

では、毎日更新復活を目指してがんばります！

読んでいただきありがとうございました！

標的１４０　Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェリ）

「あっ、いらっしゃい！」

長い長い地下へと続く階段を下り、扉を開けるとオスカルとプロメッサが出迎えてくれた。

「お、おはようございます」

「おはよう。疲れただろう？」

「オレは疲れてませんけど、トンノが少し…」

ツナは腕の中でへばっているトンノを見遣る。

長い距離を、朝にもかかわらず炎天下の中何人も背中に乗せて飛んだのだ。

へばるのも仕方がない。

「トンノ大丈夫？」

「…大、丈夫…かなあ……」

トンノは途切れ途切れに答えるが、その様子は「大丈夫」とは言い難い。

翼はだらりと広げられ、頭と尻尾の炎は弱々しく燃えている。

瞳は虚ろで、如何にも具合が悪そうだ。

「暑さにやられたんだね…。プロメッサ。」

トンノの様子をうかがい、オスカルはプロメッサに声をかける。

するとプロメッサは了解したように動きだし、炎をひときわ大きく燃え盛らせた。

燃える炎に呼応するようにプロメッサの身体が大きくなっていく。

だが、実験のときの大きさではなく、大型犬ほどの大きさに変化した。

「お、大型犬？」

「まさにただの犬だな」

ツナとリボーンの言葉に苦笑いしながらも、プロメッサはトンノを背中に乗せて部屋をあとにした。

「プロメッサはどこへ…」

「治療室だよ。あの子は優秀だから看病もしてくれるよ。…さて、」

オスカルの声がかすかに変わる。
その変化を感じ取って自然とツナは息を呑んだ。

「…新技は、どうなったのかな？」

本題に乗り出し、オスカルは問う。
その場にいた誰もがツナに視線を向けた。

「どうなんだ、ツナ」

「…え、っと……」

リボーンにも問われ、ツナは思わず吃(ども)ってしまう。

どう説明していいのかわからず、ツナは急いで話そうとするが上手く言葉を紡ぐことができない。

おろおろしていると、突然ツナの心がふわりとあたたかくなった。

“慌てるな、ツナ”

声のした瞬間、ツナの目の前にオレンジ色の炎があらわれた。

それはすぐに小さな人の形となり、そして額に炎を燈す人間となった。

「あ、徳松…」

意識内で言ったとおり、徳松が姿をあらわす。

徳松はツナの肩に降り立ち、「おはよう」と言った。

「…なんで徳松くんが？」

「オレもツナと一緒に新技を考えた。そしてオレはツナの能力だか

らな。」

「そうだね。じゃあ、どんなのか聞かせてくれる？」

オスカルは納得し、ツナたちにうながす。

ツナが徳松の顔をうかがうと、徳松がふわりと浮いた。

「ツナ、ハイパー化して」

「う、うん…」

徳松に言われ、ツナはミトンの手袋をはめて死ぬ気丸をふたつ服用する。

するとツナの額に炎が燈り、手袋はグローブへと変化する。

まぶたを上げれば瞳は琥珀色から朝焼け色へと変わった。

「あ、実際にやってくれるのかい？」

「…説明するよりも見せた方がいい」

簡潔にツナが答えると、徳松に目配せをする。
それに徳松が頷くと、徳松は両手をかざして炎を放出した。

ボウゥウッ

燃え盛る音をたてながら、その炎は姿を変えていく。

「な、なんだあれは…」

「形が変わってくのな…」

獄寺と山本が唖然としながら姿を変えていく炎を見つめる。

リボーンは何も言わず、オスカルは興味津々でまばたきもしていない。

誰もが注目する中、炎は揺らめき変化する。

そして、徳松の放った炎は鳥の形となった。

「徳松、それはなんだ」

「炎を鳥の形にしただけだ。所詮は炎。だがオレの意思で動かすことができる。」

徳松の言うことに従うように、炎の鳥は火の粉を落としながら飛び回る。

その速度はどんどん上がり、目で追うのも難しいほど速いものになった。

「…どうするんだい？」

「…見てればわかる」

徳松はツナから離れてオスカルの肩に座る。

炎の鳥は広い部屋を素早く飛び、まるでツナを挑発するようだ。

ツナは、ひとつ息を吐き、グローブから炎を噴射させて飛び立った。

（…追いつくか？）

試しにツナは炎の鳥を追う。

だが炎の噴射を強くさせても、炎の鳥には追いつけなかった。

「…さすが、徳松だ」

ふ、と笑みを浮かべツナは徳松を見遣る。

炎の鳥の飛ぶ速度は徳松が操っている。
これほど速度が速いということは、例えオスカルたちに見せるだけのことであっても本気でやれと言うことだろう。

ぐっ、とツナは右手に力を込める。
昨日負った傷が痛むが、利き腕である右の方が使いやすいし炎をコントロールしやすいので痛みに耐えるしかない。

ツナは目を閉じ、耳を澄ます。

周りを羽ばたく音と、炎の燃える音だけが耳に届く。

そして炎の鳥の気配だけに集中する。

目で追うから、惑わされる。
それならば、視界をなくせばいい。

目に見えるものと、耳に届くものがさらに己を混乱させる。

それならば、どちらか片方を遮ればいい。

耳を澄まし、気配を感じ取る。
心を落ち着かせ、空気を吸う。

パチンッ

「！」

気配をとらえた。

超直感が働き、完全に炎の鳥の気配をとらえた。

ツナは右手を前にかざし、さらに気配に集中する。

気配を真っ正面に感じ取った瞬間、掌から炎を放った。

バシュンッ

「ギャギャッ！」

ツナの放った炎はとぐろを巻くように炎の鳥を捕らえる。

それはあまりにも一瞬のことでリボーンたちは唖然としていた。

「ギャギャギャッ！」

炎の鳥が逃げだそうと暴れだした。

その暴れる様を見て、炎の鳥を縛り付ける炎が解かれてしまうのではないかと誰もが危惧する。

だが、それは無駄な心配であった。

…パキ、

「ギャギャッ！」

パキパキパキパキ

「炎が…」

「…石になってく……」

パキパキパキパキパキパキパキパキパキ

パキン！

とぐろを巻いていた炎は石へと化した。

炎の鳥の身体にしっかりと巻き付き、身動きもできないようだ。

石化した炎に巻かれ、炎の鳥は逃げることを諦めてうなだれていた。

炎の鳥を捕らえる石化した炎はロープのようにツナの手中に収まっている。

ツナは炎を引いて地面に降り立ち、オスカルたちに向き直った。

「…こういう技、なんだが……オスカル？」

なおも唖然とし続けるオスカルにツナが声をかけ、掌をオスカルの目の前でひらひらと振る。

はっ、と我に返ったオスカルはたちまち目を輝かせ、ツナに問うた。

「つっ、つつつつ綱吉くん！いい今のはなんだい！？」

オスカルの勢いにツナは思わず後ずさる。
だが流石はハイパーモード。
冷静さは保ったままである。

「…大空属性の“調和”による石化で相手の動きを封じるんだ。一応、防衛だと思うんだが……」

「“調和”による石化か…いい案だね。」

オスカルは何度も笑顔で頷く。
そしてツナの言葉をパソコンではなく紙にまとめていく。

ふと、オスカルの手が止まった。

「そういえば、技の名前はあるの？」

「…あるが……」

ツナも忘れていたようで一瞬黙ってしまった。

少しの沈黙のあと、ツナは口を開いた。

「…Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）」

Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）。

日本語で、「大空の拘束」。

「Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ…かぁ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）……」

「ツナにしては考えたな」

「徳松が一緒だったから…」

ツナが微笑むと、徳松は頷きツナの肩に飛び降りた。

そして徳松が指をパチンと鳴らすと、ツナの石化した炎で拘束されていた炎の鳥は火の粉を散らして消えた。

「相手を拘束し、そこで更に技を加えることもできる。ただしこれは応用だがな。」

ふう、とため息をついて徳松は伸びをする。

「…それと、」

思い出したように、徳松が付け足す。

「一応まだ、もうひとつある」

標的１４０　Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェリ）

機嫌がとてもいいゆか空です。

やっと、やっとやっとやっと！
新技を出せました！

いつも感想を書いてくださる方が考えてくださったものです。
名前はわたしが考えさせていただきました。

わたしにはない素敵な発想で大変助かりました。
本当にありがとうございました！

さて、最後に徳松さんが「もうひとつある」と言ってましたが…これはわたしが考えたもので、過去にひっそり（？）出てきてます。
もうお気づきの方もいらっしゃるのではないでしょうか。

そうだ、ここで付け足しを。

今回の話を読んで、

「あれ…リーダーいない…」

と思った方…いますか？いないような気が（笑）

残念ながら…彼は来てません。
理由はくだらないので…後に本編で書きますが、本当にくだらないのです。

今回はいつもより長くなりました…疲れた。↑

毎日更新…するぞ！

読んでいただきありがとうございました！

標的141　Baluardo　di　cieli（バルアルド・ディ・チェーリ）

「一応まだ、もうひとつある。」

「もう、ひとつ？」

見事オスカルたちに新技を披露することができたツナと徳松。

相手の動きを封じることができるBarbazzale　di　cielli（バルバツツアーレ・ディ・チェーリ）を見て満足したオスカルだったが、徳松の言葉に「まさか」と疑ってしまう。

「もうひとつって…防衛技が？」

「ああ。…まあ、たいしたものではないと思うが。」

ツナの肩に乗っている徳松が腕を組んで言う。

「たいしたものじゃないわけないだろ。」

徳松の言葉をツナが否定する。

もうひとつの防衛技がどのようなものかも分からないリボーンたちは肯定も否定も出来ない。

「とにかく、見せて…くれる？」

「あ、…ああ。」

「…わかった。」

静かに言い争いをするツナと徳松をオスカルが制止した。

ツナと徳松は我に返り返事をする。

「…徳松。」

ツナが名を呼ぶと徳松は目を閉じ、火の粉を散らして消えた。

「え！？喧嘩してどっか行っちゃったの！？」

「…違う。意識内に戻っただけだ。そもそも喧嘩なんかしてない。」

徳松が消えたことを喧嘩のせいだと勘違いしてオスカルは焦るが、喧嘩でなくただの言い争いをしていただけのツナは冷静ながらも訂正をした。

意識内でも徳松が「喧嘩などしてないのにな」とくすくす笑っている。

「いいからさっさとやってみろ、ツナ。」

リボーンが急かし、ツナは短く返事をしてまぶたを閉じる。

「…頼む、徳松」

“了解”

徳松の答えの後、再び心があたたかくなる。

胸の奥から、なにかが込み上げるような、沸き上がるような感覚に襲われる。

襲われるという言い方はおかしいかもしれないが、その言葉が一番当てはまるとツナは思った。

頭や指の先や、身体の隅々までがあたたかくなっていく。

額の炎が、せわしなく揺らめきはじめた。

ブワァァアッ

「ぅおっ！？」

突然の熱風にオスカルがおかしな声をあげる。

あまりの風の強さにリボーンたちは腕で顔を庇い、足を持っていかれまいと耐えた。

ヒュゥゥウウ……

すぐに熱風は弱くなり、そっとまぶたを上げる。

「…お。」

「……え、あれって…」

ぱちくり。まさにその音が合うだろう。
オスカルは大きくまばたきをする。

獄寺も山本もぱちぱちと目をまばたかせる。

リボーンはにやりと笑って満足そうに鼻を鳴らした。

かすかに風が吹く中、ツナは佇んでいた。

そしてそっと、まぶたをあげる。

「…成功、したみたいだな」

ツナは安堵したような、それでいて嬉しそうな表情になった。

“なんとかな。効力も大丈夫だと思うが。”

ふぅ、と安心したようなため息をついて徳松は言う。

何が起きたか、もうお分かりであるだろう。

ツナの身体は、炎に包まれていた。

そう、実験のときと同じだ。

「技の名前は、Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）。日本語で“大空の防壁”これは徳松が考えた。」

「…これは、どういう効力があるんだい？」

「これも、大空属性の“調和”を利用したものだ。身体を炎で覆い、“調和”で攻撃や痛みを和らげることができるんだ。…だが、これには弱点がある。」

「……弱点？」

まゆをひそめ、ツナは小さく頷く。

「…これは、徳松に負担がかかるからあまり長くはできないんだ。頑張ったとしても、今は五分ほどだと徳松は言っていた。それに、成功するのはごく稀らしい。」

「まだ使いこなせはしないってことか…」

オスカルは顎に手をそえ、唸りながら何やら考え出す。

「どうしたオスカル」

「ん…いや、使える技だが弱点があるとなると……うーん、負担があるし失敗することもあるのか…」

ぶつぶつと独り言をつぶやき、しばらくしてオスカルは顔をあげた。

「…綱吉くん、徳松くん」

名を呼ばれ、ツナはまっすぐオスカルを見つめる。
徳松も意識内を出て実態化して現れた。

そして、オスカルは真剣な声で二人に告げた。

「少しでも弱点を克服して、いつでも成功できるように、その時間をのばせるようにしないかい？」

標的141　Baluardo di cieli（バルアルド・ディ・チェーリ）

今回はわたしが考えさせていただいた技です。
技と言えるかわかりませんが。
しかも一度小説に出てきていた（笑）
利用してしまいましたよ。ごめんなさい。

Baluardo di cieli（バルアルド・ディ・チェーリ）

と

Barbazzale di cieli（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）

…似てる（笑）

ややこしいですね…ごめんなさい。

今日から補習が再開します。
めんどくさいです。

でも頑張ります。

毎日更新完全復活したいです。

読んでいただきありがとうございました！

標的１４２　弱点

「少しでも弱点を克服して、いつでも成功できるように、その時間をのばせるようにしないかい？」

「…克服？」

オスカルの提案にツナと徳松は首を傾げる。

弱点を克服する。だがしかし、どのようにして？

「今聞かされたから、まだ方法なんかは考えてないんだけど…その技は使える。だから少しでも弱点を克服できれば、それは大きな力となると思うんだ。」

「まあ、何がどうであれ弱点を克服するに越したことはねぇだろうしな。」

オスカルの言葉を肯定するようにリボーンが続く。

確かにそうだろう。

Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）は敵の攻撃を弾いたり、傷の痛みを和らげる効果を持つ。

それを使いこなせればお構いなく敵を攻めることができるのだ。

ある意味、無敵になれると言うことだろう。

「君たち、成功するか失敗するかって言ってたけど、なんでそんなことわかるの？」

「…夜、意識内で試してみたんだ。だが五回中ニ回しか成功できなかった。」

「オレだけに負担がかかるんじゃない。ツナの身体にかなり負担がかかる。」

ツナと徳松は無表情であるが疲れた様子で言った。

ツナが眠ったあと、ツナは意識内で徳松と新技について話し合った。

そのとき、徳松が実験中に生まれたＢａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）ｅｌｉを技にしてみたらどうだと提案したのだ。

その技の効力は使えると思いツナも賛成したのだが、いざ意識内で

Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）を試そうとすると上手く使いこなすことができなかった。

一回目は失敗。二回目はなんとか成功したのだが思いのほか負担が大きくわずか一分しか保てなかった。

意識内でも夢とは違って痛みはあるらしい。身体中がぎしぎしと軋み、傷を負っている右腕、背中、腹部に痛みが走った。

三回目、四回目も失敗。

五回目はやっと成功し、出来るかぎり時間を延ばそうと耐えた。だが五分で効力は切れ、そのあと何度か試したが成功することはなかった。

「難易度が高いのか…。」

また考えるしぐさをしてオスカルは唸る。

唸るのが癖なのだろうか、「うぅぅう」とくぐもった声が聞こえた。

唸りはじめて数十秒、オスカルはやっと顔をあげた。

「…ひとまず、Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）とＢａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）のデータをとらせてもらおうかな。」

「データ？」

「二つの技の効力を数値で出したほうが何かと役立つしね。いいかい？」

「ああ。」

データをとる分には構わないのでツナと徳松は頷いた。

「プロメッサー？」

オスカルが呼ぶと、しばらくしてプロメッサが扉の向こうから現れた。

今までずっとトンノの看病をしていたのだろう。

「プロメッサ、綱吉くんと徳松くんを実験室に案内して、データを取るから準備をしてくれないかな」

「わかった！」

明るく返事をし、プロメッサはツナの服を引っ張ってついて来るように促す。

ツナと徳松はプロメッサのあとについて行く。

獄寺と山本もあとに続こうとすると、リボーンが目の前に立ちはだかった。

「うおっ、なんだよ小僧！」

「どうしたんですかリボーンさん！」

「おめぇらはここで別のことをしてもらうぞ」

行く手を阻まれた上、意味のわからないことを言われ獄寺と山本は首を傾げる。

「おめぇらにも、新しい技をつくらせる。そのためにここにいるんだからな。」

珍しくも、リボーンは笑いを浮かべず真剣な表情だった。

標的１４３　別行動

「オレたちも…十代目のように新しい技をつくるんスか！？」

「おいおい、聞いてないぜ小僧！」

新たな技のデータをとるため別室へ移動したツナ。

当たり前のようにその後をついて行こうとした獄寺と山本をリボーンが止め、二人も新たな技を作り出すんだと言ったのだ。

まさかそんなことを言われると思ってなかった獄寺と山本は驚いて口をあんぐりと開けている。

「なんだおめぇら、不満か？」

「ふ、不満じゃないですが…そんないきなり……」

「予告なしにそんなこと言われたら驚くのな！」

睨みをきかしたリボーンに脅され、獄寺は慌てて否定をするが山本は相変わらずであった。

リボーンに頭のあがらない獄寺は、怖ず怖ずとリボーンに問う。

「ですがリボーンさん、今はリングも原形に戻り力が上がったうえ、ボンゴレ匣もあるんですよ。」

「そうだぜ小僧。原形のリングと匣があれば大丈夫じゃねぇか？」

確かにボンゴレリングは原形に戻り、それによりリングの力も上がった。その上ボンゴレ匣もある。

この二つがあれば新たな技などいらないのではないかと言う二人の意見も分からないことはない。むしろ頷ける。

だが、リボーンは違った。

「なら聞くが…おめぇら、今のままで満足なのか？」

リボーンの問いに獄寺と山本はびくりと肩を動かす。

不意に胸の奥に蟠り（わだかま）が出来たような錯覚に陥った。

「オレから見ると、お前たちはまだ未熟だ。ボンゴレの跡を継ぐ者の守護者として…部下としてな。まだガキっぽいところもあるし、喧嘩っ早いところもある。それじゃ、ただのやんちゃ坊主だ。」

リボーンの言葉がぐさりと突き刺さる。
身体が鉛のように重たく、否定しようにも言葉が出てこない。
…つまりは、尤(もっと)もなことを言われているというわけだ。

それが悔しくて、二人は拳を握りしめる。
爪のあとがくっきりと残るほど、力の加わるところが白く変色してしまうほど。
唇を噛み締めて、二人は俯(うつむ)いて黙っていた。

そんな二人を見て、リボーンは笑んだ。

「ま、未熟っつうことはまだまだ可能性を持っている、という意味でもあるしな。ガキっぽい、喧嘩っ早いのは、戦う意欲を持っているからだとも思える。」

先程より幾分柔らかくなったリボーンの声を聞き、二人は顔を上げる。

「どうだ、悔しかったか？」

少しの沈黙のあと、やっと二人の口から言葉が出た。

「……、悔し…かったです。」

「オレも、悔しかったのな。」

二人の素直な返事を聞き、リボーンは鼻を鳴らした。

「それなら満足してねぇも同然だな。…新たな技、必要だと思えるようになっただろ？」

「はい！十代目の右腕として、もっと強くならなければならないと改めて実感しました！」

「オレはツナの親友として、助太刀できるくらいの実力が欲しくなったのな！」

握りしめていた拳を胸の前へ持って行き決意をあらわす。
先程の曇った表情ではない。
新たな目標を見つけ、いきいきと輝いた表情だ。

「よし。んじゃ、早速案を出してみろ。おめぇらの属性、得意不得意などを考えてな。」

ばらばらではあるが意気込みのある返事が聞こえ、リボーンは内心満足であった。…だが。

(…こいつらはいいとして、まだ問題がいくつかあるんだがな)

思考の読めない表情をした赤ん坊は目の前の少年たちを眺めていた。

瓜ふたつの顔をした二人、ツナと徳松は言葉もなく一匹の子犬を観

察していた。

プロメッサに実験室に案内され、椅子に座るよう促されたのでそれに従うと、プロメッサは何やら機械をいじりだした。

パソコンや、プリンターのようなもの、何やらスイッチやコードが沢山ついているものを器用に使いこなしている。

本当に子犬であるのだろうかと目を疑うほどの手捌き(てさばき)であった。

しばらくそれを観察していると、実験室の扉が開き、オスカルが入室した。

「やあ、待たせたね。…プロメッサ、準備は済んだ?」

「あとはシールとパソコンを繋げるだけだよ。」

「うん、ありがとう。」

二人の会話の内容に思わずツナは首を傾げてしまう。

ちらりと徳松を見ると、徳松も訳がわからないようで同じように首を傾げていた。

普段のツナなら表情に少しでも不安が滲むはずだが今は額に炎が燈

っている。
その表情は相変わらずの冷静さを保っていた。

「じゃあ、早速データをとらせてもらおうかな」

プロメッサと共に機械を操作していたオスカルが顔をあげ、声をかけた。

「データって…どんな方法でとるんだ?」

「まあ、実践っていうことは確かだけど…このシールをつけてもらうよ。」

差し出された手を見ると、正方形の、シールと言うには随分厚めのなにかが乗っていた。
よく見ると、ランプのようなものがピカピカと光っている。

「…これがシールなのか?」

「シールと言っても、“付着式データ採取装置”って言って、データをとりたい対象に引っ付けてデータをとる装置なんだ。だからシールって呼んでるんだよ。」

オスカルから小さな装置を受け取り、ツナはそれをかざしてみたり凝視してみたりした。

だがそれは何の変哲もないただの黒い箱に見えた。
重さもないし、例えるならばチロルチョコが半分以上薄くなったようなものだ。

「これをどうするんだ?」

「そうだな…利き手はどっち?」

「…右だが。」

「じゃあ右腕につけて。本当はお腹につけるのが一番安定するんだけどお腹だと傷に障るだろう?右腕の包帯の巻いてないところに貼っておいて。」

ツナは言われたようにシールを右腕につける。
それは自然と馴染み、違和感は感じられなかった。

「じゃあ、データをとらせてもらうね。」

オスカルの確認に、ツナと徳松は短く返事をした。

こうして、ツナと徳松は新技のデータ採取、獄寺と山本は新技考案をはじめた。

標的１４３　別行動（後書き）

なんか今回はすらすらと書けました。不思議です。

プロメッサさんが天才すぎて怖いです。機械をいじる子犬とか、もはやホラーです。

最近悩んでます。

「その先には。」ばかり書いてると疲れてしまう（オイオイオイオイ）ので、他に小説を書いてみようかなと、６月くらいからずっと考えてて、…あれ、二ヶ月たってる。↑

その小説を、ここ（小説家になろう）か自分のサイトで書こうか悩んでます。

多分リボーン関係だと思いますが…少し、オリジナルも書いてみたいなと。

受験が終われば何作か書きたいんですがね、難しいです受験（´－ω－；）

もうしばらく悩んでみます。

明日も更新がんばるぞ！

読んでいただきありがとうございました！

標的１４４　データ採取開始

機械の音が止まない中、二人の人間と一人の小人、一匹の子犬がいた。

一人はパソコンを片手に、もう一人と小人は部屋の真ん中に佇んでいる。

子犬はパソコンを持つ人間の肩に乗って口にはコードをくわえていた。

「綱吉くん、今なにもしてないよね？」

「見てのとおり、なにもしてないが…」

奇妙な質問をされ、ツナは眉をひそめる。

ただ地面に足をつけているだけなのにおかしな事を聞く奴だと思った。

「いや、変な質問してごめんね。今炎圧の数値を見たんだけど…」

興味津々に、オスカルはパソコンの画面を見つめている。

ツナは気になってオスカルの傍に寄り、パソコンを覗き込んだ。

「今なにもしていない状態で、綱吉くんの炎圧は１万５２３０ＦＶ。おそらくその額のものなんだろうけど…ちなみにそのグローブから炎を出すとどうなるの？」

オスカルに問われ、ツナは何も言わずに両手を上げ、意識を集中させると、たちまち両手から炎が燃え上がった。

その瞬間、パソコンの数値が大幅に変化した。

「お！また上がった！」

「…３万３５２７ＦＶ？」

予想外な数値にツナはオレンジの瞳を丸くする。

それに気付いたプロメッサがオスカルの肩からツナの肩へと移動した。

「どうしたの、綱吉？」

「…もっと、数値が低いかと思ってた。」

己の掌を見つめ、ツナは呟く。

するとツナの頭の上でパソコンを覗き込んでいた徳松が「あ。」と声を発した。

「オレが…封印から解かれたからか？」

「徳松が…？」

「ああ。オレはツナの能力だ。ツナが幼いころ、オレはツナの能力である自分を自ら封印し、力を制限させた。だがオレの封印が解かれたことで、力の制限がなくなった。だから本来の力が次第に引き出されるようになっているんだ。たとえ能力、オレの核（クオーレ）ｃｕｏｒｅがここになくてもな。」

難しいようで簡単な説明。

何も知らない人が聞けば必ず首を傾げるだろう。

だがオスカルはツナから徳松のことを聞いているので理解したようだ。

「じゃあ、これからもまだ数値は上がるってことだね？」

「ああ、そうなるな。ｃｕｏｒｅ（クオーレ）が元に戻れば、凄まじい数値になるだろうしな。」

「へぇー！是非知りたいね！」

徳松の話をオスカルは目を輝かせて聞いている。

前のめりになるオスカルをプロメッサがなだめ、落ち着かせていた。

「オスカル…そろそろデータとらないと…綱吉も疲れちゃうでしょ？」

「…あ、そうだったね。ごめんね！」

オスカルは慌てて謝り、ツナと距離をとった。

「…じゃあ、まずはＢａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）のデータからとらせてもらうよ？」

「わかった。…徳松、また標的を頼めるか。」

「了解。」

返事をすると、徳松は先程と同じように炎の鳥を作り出した。

だが、炎の鳥は飛び回らず、ツナから三十メートル離れたところで

大人しくこちらを見ている。

「今回は飛び回る必要もないからな。だがついでに速度もはかっといたほうがいいだろ。」

「…気が利くな、ありがとう徳松。」

ツナが礼を言うと、徳松は微笑んで炎を小さく揺らした。

それに呼応するように、炎の鳥もゆらゆらと炎を動かした。

「……やるぞ。」

拳に力を込めて、自分に言い聞かせるように小さく呟く。

ふう、とひとつ息を吐き、炎の鳥を見据える。

静かに片手をかざし、脳内にイメージをつくり、神経を集中させる。

バシュンッ！！

「！？」

「…速、い！」

炎は長い渦となって放たれ、目に見えぬ速さで炎の鳥に巻き付く。

その瞬間、逃げる間も与えないかのように炎はパキパキと音をたてて石化した。

「……完了。」

右手をおろし、ツナはオスカルの方を振り向く。

だがオスカルは何の反応も示さず、ぽかんと口を開けて言葉を発しない。

「…オスカル、オスカル？」

「…あ！」

ツナに名を呼ばれ我に返ったオスカルは、思わずパソコンを落としそうになる。

「…大丈夫か？」

「うん大丈夫！ごめんね！…あ、ちゃんとデータもとれたみたいだ。」

パソコンの画面を見遣り、キーボードを操作してデータを引き出す。

「えっと、…１５万ＦＶか。速度は…っと……」

画面がかわり、映し出された速度を見た瞬間、オスカルは再び言葉を失った。

「…またか。」

ツナと徳松は顔を見合わせ、やれやれと肩をすくませながら先程と同じように画面を覗き込む。

そして二人も、オスカルと同様言葉を失った。

画面に映し出された速度は。

「…６２１ｋｍ／ｓ……？」

「…は？」

普段冷静さを保っている表情が、動揺で歪んだ。

有り得ない数字に、誰もが驚いた。

広い実験室という空間に、静寂が訪れた。

標的１４５　赤ん坊の助言

ツナと徳松、オスカルにプロメッサがＢａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）の予想外なデータ結果に驚いていた頃。

異なる部屋では獄寺と山本が椅子に腰を下ろして新技を考案していた。

だがその様子は順調とは言い難い、むしろ滞っているようだ。

「…んー」

「新しい技…って言ってもな……」

リボーンに諭され新技考案に踏み出した二人であるが、全く自分の新技のことなどこれっぽっちも頭になかったので何も思いつかない。

先程リボーンに用紙とペンを手渡され、「それにいくつか案を書いておけ」と言われリボーンは部屋から出て行った。

しかしせっかくもらった用紙は黒い線が行き交い、文字が書けるところなどない。

「この紙、もう使えねぇ…」

「裏返せば使えるのな。…はは、全く何も思いつかないのな。」

ぺらり、とほぼ黒に染められた用紙を裏返す。

するとまっさらな白があらわれ、二人の口からは重いため息がこぼれた。

「…っくそ、まじで何も浮かばねぇ！」

とうとう獄寺が音を上げ、椅子の背もたれがぎしりと軋んだ。

それにつられて山本もペンをぽいっと投げ出し、苦笑いをして後頭部で腕を組む。

「どんなのがいいんだろうな…」

「おめぇは勿論、時雨金時を使うんだろ？」

「そうなんだけど、なんつーの？土台みたいな、種類みたいな？そ

れがわかんねぇんだ。」

「…ああ、主題か。」

机に肘をつき、手の甲に顎を乗せて獄寺はまたため息をついた。

「どうだ、何か思いついたか」

後ろから声をかけられ、振り向くと黒服の赤ん坊が片手にコーヒーを持ってこちらに歩いてくる。
勝手にキッチンでも借りたのだろう。

「…その様子じゃ、まだ何も考えついてねぇな。」

獄寺と山本の微妙な表情を見て、感づいたリボーンはひとつ息を吐いた。

コーヒーの入ったカップを持ちながらも、器用に机の上に飛び乗る。

「ったく、のろのろしてるとツナとの差が増すぞ。」

「ツナは新技二つも考えてデータまでとってるしな…」

「さ、流石です十代目…オレたちなんか、何も……」

リボーンの言葉に二人はうなだれる。

今別室では新技を考えたツナがデータをとっている。

そう思うと、出遅れている感じがしてたまらないのだ。

「…焦ってんだろ。」

二人の心情を読み取り、リボーンはにやりと笑う。

核心をつかれた獄寺と山本はびくりと肩を大きく揺らし、言葉もなく頷いた。

「焦ったって仕方ねぇだろ。何もしないんじゃどうにもならねぇんだ。……その焦りは無駄だ。焦る時間が無駄なんだ。そんな暇があったら、技の一つや二つ考えれるだろ。」

「…はい。」

「…だよな。」

喝を入れられた二人は、小さく返事をする。

やれやれ、とリボーンは肩をすくませと二人の前に座り込んだ。

「…そんなに、深く考えなくていいんだぞ。」

リボーンの声にうつむいていた獄寺と山本は顔をあげる。

「おめぇらは考えすぎなんだ。簡単でいい。単純でいい。ただ、今のおめぇらに必要なものを、欲しいと思ったものを作り出せばいいんだ。問題にぶち当たったら、その都度直せばいい。だから今は難しいことは考えずにシンプルに考えてみろ。」

「…簡単に、単純に、ですか。」

「…確かにそうなのな。」

納得したような、何かに気付いたような表情と声色。

リボーンは鼻を鳴らして二人に再び諭す。

「おめぇらにはそれぞれに武器がある。ダイナマイト、時雨金時、そしてボンゴレ匣。おめぇらにしか出来ない、特別な技を作れ。」

「は、はい！ありがとうございますリボーンさん！」

「だな！サンキューな、小僧！」

獄寺と山本はリボーンに礼を述べ、獄寺はダイナマイトと匣を、山本は時雨金時と匣を取り出し、用紙に何かを次々と記していく。

（……世話のかかる奴らだな）

小さくため息をつき、リボーンは冷めたコーヒーを口に含む。

目の前では夢中になりながらペンを持つ手を動かし、それぞれの武器と匣を見比べたりしている。

（これで技は出来そうだな）

やれやれ。

リボーンは再び肩をすくませる。

そして空になったカップを持ち、二杯目のコーヒーを作ろうと机から飛び降りてキッチンに向かった。

標的１４５　赤ん坊の助言（後書き）

この小説を書いて五ヶ月が経ちました。

五ヶ月で１４５話（正確には１４６話）書いたんだなぁとしみじみしています。

最近は思うように更新できなかったりして、いらいらしてました（笑）

まったく文章を書くのが上手くならず、一時期は諦めてしまいそうになりました。小説を強制終了しようとも思いました。

ですが、評価をしてくださったり毎日感想を書いてくださる優しい方々のために、自分のためにも諦めてはいけないなと己を奮い立たせてなんとかここまできました。

まったく成長の見られない小説ではありますが、まだ見えない終わりまでお付き合いしてくださると嬉しいです。

…本当に、いつ終わるんだろうか（笑）

終わりがわかりません。どうしよう……！

そろそろトンノを復活させたいです（＾ｏ＾）／

読んでいただきありがとうございました！

標的１４６　様々な問題点

「…６２１ｋｍ／ｓ……」

「……う、そ…」

Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）のデータ結果が映し出されているパソコンの画面を覗き込み、オスカルとプロメッサが言葉を漏らす。

ツナと徳松はその数値を聞いて驚いているが黙ったままである。

「…ま、まさかね…目に見えない速さではあったけど、ここまで速度があるとは……」

「ツナと徳松が驚きすぎて黙り込んでるよ…」

オスカルは苦笑いしながらパソコンから目を逸らし、驚きで固まっているツナと徳松に話しかけた。

「おーい、綱吉くん、徳松くん！」

「……あ、ああ、なんだ」

肩を小さく動かし、ツナと徳松が振り向く。
冷静ながらも驚きはかくせないものなのか、とオスカルは少し微笑んだ。

「次はＢａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）なんだけど…できるかな？」

「…失敗はするかも知れないが。」

「じゃあ、やってみて。」

再びオスカルとプロメッサはツナと徳松から距離をとる。

二人が立ち止まったところを見て、ツナと徳松は同時に深呼吸をした。

「徳松、頼む」

「了解」

先程と同じように、徳松が意識内に戻っていく。
その瞬間、また何かが込み上げる感覚を覚える。

ゆらゆらと、炎の揺らめきが強くなる。
しかし。

シュウゥゥウ……

「…ん？」
「どうしたの？」

何か空気の抜けるような小さな音がした。
オスカルとプロメッサは離れていながらもその音に気付く。

「…失敗した」

“ごめん、ツナ。さっきより疲れてるみたいだ…”

「気にしなくていいよ。」

意識内で謝る徳松をツナはなだめる。

Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）はツナと徳松、身体と精神共に負担がかかる。
体力も使うので、なかなか成功はしないのだと言う。

“もう一度、やってみてくれ。”

「わかった。」

返事をすると、再びあの不思議な感覚がくる。
炎も先程よりも大きく揺れはじめる。

身体全体があたたかさに包まれ、ツナは目を閉じた。

ブワアァアッ

また足元を風にすくわれ、思わずオスカルはよろめいてしまう。
それになんとか耐え、オスカルとプロメッサは目を細めながらもツナと徳松を見た。

「成功したな。ありがとう徳松。」

“ツナこそ、ありがとう。”

ふう、と息を吐いて顔を伝う汗を拭う。
身体が少し重く感じ、目眩で小さくふらついてしまう。

「大丈夫かい、綱吉くん」

「少し身体が重いだけだ…心配ない。」

小走りで駆け寄ってきたオスカルはふらつくツナの背中を支える。
するとオスカルの手がぴくりと引き攣った。

「…熱い。」

「炎で全身が包まれているからな…熱いのも当たり前だ。」

ツナの全身は淡いオレンジ色の炎で包み込まれている。
この炎が敵からの攻撃を遮ったり、傷の痛みを和らげるのだ。

「……ちょっとごめんね」

そう言うとオスカルはポケットにしまってあったボールペンを取り

出し、軽くそれをツナに投げた。

バチンッ！

「ぉおっ！？」

炎に触れた途端、ボールペンは勢いよく弾き返されオスカルの足元に転がった。

見るとボールペンは黒くこげ、割れてしまっている。

「うわぁ…おっかない……」

そっとボールペンに触れると、まだ熱が残っておりすぐに指を引っ込める。

「オスカル大丈夫か？」

「ん？うん、大丈夫だよ。」

「ボールペンなんて投げるからだよ！」

ぶつぶつと文句を言いながらプロメッサが黒い尻尾で使い物にならなくなったボールペンをまとめる。
そんなプロメッサに「ごめん」と苦笑いをして謝り、オスカルはパソコンを見た。

「…炎圧が、５１万ＦＶ。Ｂａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）ｉよりもかなり多いね。そんな炎圧を保つのは難しいか。」

「だから、そんな長くは続けられないのか…」

身体のだるさに思わずため息が出る。
本来、大空属性の“調和”で身体の痛みなどを和らげる作用があるはずなのだが、今は上手く使いこなせていないので身体のだるさは残っている。

「今の時点で５１万ＦＶか…弱点をなくせばもっと炎圧はあがるんだね」

「…多分。」

ぐらり、と一瞬視界が歪んだかと思うと、身体の熱が一気に引いていく。

すると徳松が意識内から再びあらわれ、ツナの肩の上でうなだれていた。

「大丈夫か、徳松…」

「…きついな、かなり。」

「疲れたら意識内で休んでいい。無理に出てくることはないから。」

ツナが優しく声をかけると、一瞬黙り込んだ徳松だったが、か細い声で「すまない」と言い、意識内へ戻って行った。

その瞬間、ツナの体力も限界だったのか額の炎は消え、グローブもただの手袋に戻ってしまった。

「つ、疲れた……」

「Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）を保ってた時間は５分２４秒。お疲れ様、綱吉くん。」

床に倒れ伏すツナにオスカルは笑顔で言う。

ツナは緩んだ表情でそれに答え、はぁ、と大きく息をついた。

標的147　Freccia di cinque fiamma（フレッチャ

「あ。」

「お。」

二人が声を出したのは同時だった。

リボーンから助言をもらい、新たな技を考案していた獄寺と山本。

先程の悩んでいた表情とは打って変わって、今はいきいきとした表情である。

そんな二人の手はペンを止めることなく走らせていたが、二人同時に声を出した途端、ペンはぴたりと動くことを止めた。

「…そうか、これか！」

「…よし、これでいくぜ！」

ガタンッ、と音をたてて二人は椅子から立ち上がり、そして互いに顔を見合わせる。

「…んだよ、お前も出来たのか」

「そっちこそ、出来たみてぇだな」

どちらの顔も、晴々とした感情が伺(うかが)える、口元を得意げにあげる笑顔だった。

二人は椅子から離れ、広い部屋のど真ん中に佇(たたず)む。

「まず、これを実際に出来るかが問題だな…」

「獄寺のはどんな技なんだ?」

山本が獄寺の持つ用紙を覗き込む。

一瞬顔を歪ませた獄寺だったが、小さく舌打ちをして山本に用紙を手渡した。

代わりに獄寺は山本の用紙を奪う。

「「…なんだこれ」」

二人は呆気にとられた。

獄寺の用紙は、ずっしりと文字が並べられており、ちらほらとイタリア語が書かれている。

一方山本の用紙には、何やら擬音が多く意味のわからない文章であった。

共通しているのは、それぞれの武器のダイナマイトと時雨金時、ボンゴレ匣がイラストとして描かれているところだけである。

「こんなん一般人に伝わるわけねぇだろ野球馬鹿！！」

「別に人に見せるわけじゃないからいいじゃねぇか。獄寺のだって何が書いてあるかわからねぇのな！」

外野から見ればどっちもどっちであるだろう。
だが二人はそれぞれの考え方をしての結果である。
自分の考えを否定されては黙ってはいられない。

しかし、今するべきことは言い合いではない。
早く新たな技を完成させ、ツナに追いつくのが二人の目標でもあったから、ここで無駄なことをしている場合ではないのだ。

「…っ、お前と言い争いなんかしてる暇はねぇんだよ！」

獄寺はまた舌打ちをして山本に背を向ける。

ぽかんと山本は口を開けていたが、すぐに「ははっ」といつものように笑った。

後ろで笑う山本に苛立ちを覚える獄寺だが、文句を言うのをぐっと我慢してボンゴレ匣を取り出す。

そしてリングに赤い炎を燈し、炎を匣の穴に注入した。

ゴウッ！

「にょおんっ」

ベルトにつけられた十五個の匣。指には五つのリング。
そして肩には嵐猫ｖｅｒ．Ｖ（ガット・テンペスタ　バージョンボンゴレ）の瓜が乗っている。

「瓜、形態変化（カンビオ・フォルマ）！」

「にょおんっ！」

獄寺の声に応えるように瓜が一声鳴いて輝きを放つ。

小さな猫だった瓜は赤い炎を散らしながら姿を変えていく。
輝きがおさまると、獄寺の手には形態変化（カンビオ・フォルマ）した瓜、Gの弓矢（アーチェリー）がおさまっていた。

「…さっき、オスカルが標的を使うなら何とかって言ってなかったか？」

「ん？ああ、これか？」

獄寺に問われ、山本はポケットから小型の機械のようなものを取り出す。

先程、オスカルがツナの新技のデータを採取しに行く前、山本にまとめて手渡したものだ。

“もし新技を試す際に標的が欲しければ、これを使ってね。”

「なんかスイッチがあるって言ってたな…あ、これか？」

丸いスイッチのようなものを発見し、山本は人差し指で軽く押す。

すると小さな機械からヘリコプターのプロペラのようなものがあらわれ、すぐにパラパラと小さな音をたて山本の手から離れた。

どうやら小型のヘリコプターらしい。
それはぐるぐるとゆったりとしたスピードで天井近くを飛んでいる。

「獄寺ー、それでどうすんだ?」

「まあ、見てろ。」

得意げに笑うと、獄寺は手に矢ではなくダイナマイトを構えた。

山本は首を傾げつつも獄寺に注目する。

ギリリッと弓がしなり、獄寺は天井近くの小型ヘリコプター目掛けてダイナマイトを放った。

バシュンッ！

獄寺の手から離れた途端、ダイナマイトは黄色の炎を纏わせた。

ぐんっ、と一気にダイナマイトのスピードが上がったかと思うと、次は紫色の炎を纏った。

その瞬間、山本は思わず己の目を疑うことになる。

バシュッ　バシュッ　バシュッ

「ダイナマイトが増えた！？」

山本の驚いた声が部屋に響き、次に複数に増えたダイナマイトは緑

色の炎を纏う。

すると増えたダイナマイトからピキピキピキピキと小さな音が聞こえた。

「……。」

もはや山本は言葉を無くす。

まばたきもしない。いや、出来ない。

ダイナマイトの変化のスピードが早いのだ。

一瞬目を逸らしてしまえば、ダイナマイトは変化を遂げてしまう。

それを見逃さないようにと、山本はじっと視線をダイナマイトにだけ向けていた。

次々と変化するダイナマイトはスピードを劣らせることなく小型のヘリコプターに向かう。

当たるか、と山本は一瞬思ったがそれは無駄な心配であった。

ぐんっ

左に逸れたヘリコプターを追うように複数のダイナマイトも左に逸れた。

すると一瞬で、ダイナマイトの炎が赤と青の二色に変化した。

ドカァァアンッ！！

全てのダイナマイトは見事ヘリコプターに当たり、衝突音を響かせた。

ヘリコプターからは黒い煙りが立ち込める。

だが山本はヘリコプターは壊れないだろうと考えていた。

なぜなら、先程小型ヘリコプターを渡されたときにオスカルに言われたからだ。

「これは簡単には壊れないからね。何せ地雷でも壊せないものなんだから。」と。

だからいくらダイナマイトの攻撃を受けても、黒い煙りを立ち込めさせても、ヘリコプターは動き続けるだろうと思った。

だが。

「なっ!?」

嘘だろう。

そう思わずにはいられなかった。

地雷でも壊せなかったという機械が。

ぐしゃり、と音をたてて落ちたのだ。

黒い煙りを纏い、黒焦げになって。

山本は原形をとどめていないヘリコプターであった機械に駆け寄った。

見ただけでもわかるように、完全に壊れている。

「…すっげ、まじかよ……」

「どうだ、オレの新技は。」

振り向くと、獄寺がにやりと笑って立っていた。

驚きを隠せない山本は、呆気にとられながらも獄寺に問うた。

「…どういう、仕組みなんだ?」

「お前には理解できるかわからねぇが、一応教えてやるよ。」

なぜか上から目線口調な獄寺は、手に先程と同じ大きさのダイナマイトを持ち、説明を始めた。

「まず、このダイナマイトにオレが持つ、五つの属性の炎を流し込む。そして、Gの弓矢(アーチェリー)で放つ。」

獄寺は山本に理解しやすいようにダイナマイトを放つ真似をする。

「んでまずは晴の属性“活性”でダイナマイトのスピードを上げる。次に雲の属性“増殖”でダイナマイトの数を増やす。そしてそのダイナマイトを雷の属性“硬化”で硬さを強化する。」

説明通りに、獄寺の指に嵌められているリングから次々と炎が燃え上がる。

「そして、嵐の属性“分解”で標的を破壊し、雨の属性“鎮静”で標的の動きを無くすんだ。本当は本物の矢でやりたかったんだが、矢なんか持ってねぇからダイナマイトを代用にしたんだ。」

「…すっげぇのな……」

どうやら山本は獄寺の説明を理解できたらしく、ぽかんと口を開けている。

ふふん、と得意げに獄寺は笑い、それに呼応するようにリングの炎がそれぞれ勢いを増した。

「…その技の名前、何て言うんだ?」

山本がそう口を開くと、獄寺は誇らしげにそれに答えた。

「“Freccia di cinque fiamma（フレッチャ ディ チンクエ フィアンマ）”、“五炎の矢”だ。」

標的147　Ｆｒｅｃｃｉａ　ｄｉ　ｃｉｎｑｕｅ　ｆｉａｍｍａ（フレッチャ　ディ　チンクエ　フィアンマ）

だ、出せた…！
無理矢理だが出せた…！

今回は長くなってしまいました。こ、こんなはずではなかった…。

この技は、毎回感想をくださる、？？？様が考えてくださったものです。

ですが少し変えてしまいました。ごめんなさい！

矢なんて…獄寺くんにすぐに用意できないだろうなと思い、本物の矢だったところをダイナマイトにしてみました。

あと炎の属性の順番も変えさせていただきました。

ご、ごめんなさい…！

ちなみにＦｒｅｃｃｉａ　ｄｉ　ｃｉｎｑｕｅ　ｆｉａｍｍａ（フレッチャ　ディ　チンクエ　フィアンマ）、五炎の矢というのも？？？様が考えてくださった名前です。

すばらしい技の名前をありがとうございました！

次は山本か…う、難しい。

でも楽しいです。すごく！

今日は夏休み最後の補習なので頑張ってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的１４８　風雨

「ふ…ふぃれ……？」

「Ｆｒｅｃｃｉａ　ｄｉ　ｃｉｎｑｕｅ　ｆｉａｍｍａ（フレッチャ　ディ　チンクエ　フィアンマ）だ。」

聞き慣れないイタリア語を頭の中で整理しきれない山本は、噛みながらも技の名前を言おうとするが、言えずに獄寺に訂正されてしまう。

日本語で“五炎の矢”という意味のこの技は、その名のとおり獄寺の持つ五つの属性の炎を、矢に装ったダイナマイトに流し込んでそれぞれの炎の属性を生かす技だ。

五つの属性を持つ獄寺にしか出来ない難しいものである。

「すっげぇな獄寺！オレびっくりしちまったぜ！」

山本の褒め言葉に獄寺は踏ん反り返り得意げに鼻を鳴らす。

「まあ、まさか一発で出来るとは思ってなかったけどな。だがまだコントロールがなってねぇ。練習して完璧にしなきゃなんねぇな。」

本音を口に出し、銀色の髪の毛をがしがしと掻き分けながら獄寺はため息をつく。

肩にはいつ元に戻ったのだろうか、瓜が眠たそうにあくびをしていた。

「おい、おめぇも出来たんだろ、新技。今ここでやってみせろよ。」

「オレも成功するかわからないけどな…」

山本にしては珍しい苦笑いで返事をする。

だが「よしっ」と一度伸びをして山本はいつもの笑顔に戻った。

「一応やってみっか！失敗してもまた試せばいいしな！」

そう言うと山本は肩にかけていた竹刀を取り出す。

それを一振りすると、竹刀はたちまち本物の刀、時雨金時へと姿を変えた。

そして右手の指にはめられているリングに青色の炎を燈し、炎と同じ色のボンゴレ匣を取り出してそれに注入する。

バシュッ

青色の炎を纏い宙を舞うのは雨燕Ｖｅｒ．Ｖ（ローンディネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）の小次郎。

甲高い鳴き声をあげると、小次郎は差し出された山本の指にふわりととまった。

「そいつを使うのか？」

「小次郎にも手伝ってもらわねぇとな。ここの部屋、濡らしても大丈夫だと思うか？」

「機械に当たらなけりゃいいんじゃねぇのか？」

山本は「そっか」と返事をして、先程獄寺が使ったのと同じ小型のヘリコプターを取り出し起動させる。

ヘリコプターは羽音をたてて飛び立ち、ぐるぐると部屋を飛び回る。

「よし、小次郎。雨を降らせてくれ。」

山本がそう言うと小次郎は一声鳴き、山本の手から離れて天井に向

かって飛んで行った。
そして円を描(えが)くようにぐるぐると徘徊しながら飛び回る。

次第に空気が湿っぽくなり、獄寺が顔をあげると、頬にぽたりと雫が落ちてきた。

見ると、山本たちの頭上からのみ雨が降り出している。

ザアァァァアッ！

「ぅおっ！？」

途端に激しく降り出した雨に獄寺は驚き、慌てて雨が降っていないところへ避難する。

肩の上の瓜は全身についた水を身体を震わせて飛び散らせた。
小次郎の降らせる雨のせいで、山本の足元には水溜まりがいくつか出来ている。

「よし、もういいぜ小次郎！」

山本の声に答えるように雨はすぐに止み、一仕事終えた小次郎は何故か獄寺の頭に降り立った。

「なっ！なんだよおめぇ！」

「小次郎、そこで休んでてな！」

「休んでてな、じゃねぇよ！！」

文句を言う獄寺にくるりと背を向け、山本は一息つく。

頭上にはせわしなく飛びつづける小型のヘリコプター。

時雨金時を力強く握り、山本は走り出した。

バシャ　バシャ　バシャ　バシャ

山本は水溜まりを踏み付けるように走り、ヘリコプターを睨みつける。

「小次郎！！」

大声で山本が名を呼ぶと、小次郎は大きく羽ばたき山本の元へと向かう。

ブワッ！

翼をばたつかせると、小次郎が青色の炎を纏わせ、飛ぶスピードを上げた。

そして小次郎が山本の目の前を横切り、纏う青色の炎がカーテンのように視界を覆った。

「っ！」

バシャアッ！

時雨金時で水溜まりの水が掬い上げられ、炎のカーテンと重なった。

「…時雨蒼燕流、攻式十二の型、」

ブンッ、と空気を切る音。

高く振りかざされた刀が一気に振り下ろされた。

「風雨！！！」

バシャアァァアンッ！！

掬い上げられた水と、死ぬ気の炎が時雨金時で斬られた。

水と炎は斬られた衝撃により、凄まじいスピードで小型のヘリコプターに襲い掛かる。

自動で動くヘリコプターは、センサーで危険を察知して山本の攻撃を避けようと横に逃げた。

だが、それは無駄な行為だった。

「っ、範囲がでけぇ！」

あんぐりと獄寺が口を開ける。

斬られた水と炎は広範囲に飛び散ったのだ。
それを避けるのは誰もが無理と言うほど不可能なことであった。

ビシャァァンッ！

水と炎が作り出した衝撃波がヘリコプターに的中した。
衝撃波に加え、炎の属性“鎮静”により、ヘリコプターは飛ぶ力を失い、バチバチと電気を発しながら落下した。

「…なんとか出来たのな！」

先程の真剣な態度とは打って変わって、いつもの山本に戻る。
唖然としている獄寺の頭に、再び小次郎が飛び降りた。
それに気付かないのか、獄寺は何も言葉を発しない。

「はじめてにしちゃ上出来だな。まだ小次郎に力の加減とかいろいろやってもらわねぇとな…」

山本は時雨金時を素振りしながらぶつぶつ独り言を言う。

そしてくるりと振り向いて獄寺の頭に乗っている小次郎に笑顔で告げた。

「小次郎、この技を使いこなすためにオレと一緒にがんばろうな！」

それに答えるように、小次郎は大きく鳴いた。

標的１４８　風雨（後書き）

き、昨日は更新できずすいません…でした！

最近体調がよろしくなくて、補習に行くのもやっとで…薬が手放せません。

今回…ぐ、ぐだぐだですネ！

驚いた、水の表現ってこんなに難しいんだ！

次回はツナさん出れるかな…まだ山本の技の説明とか終わってないからな…。

ん、迷います。どうしよう。

読んでいただきありがとうございました！

標的１４９　治癒の雨

「綱吉くん、調子はどう？」

「少し…だるいです。あと傷が痛みます……。」

床に座り込むツナを心配し、オスカルが声をかける。
ツナは右腕の包帯をさすり、背中と腹に視線をやる。

Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）の副作用と言うべきだろう。
大量に体力を消費する上にこの傷の痛み。
やはり改善すべきところは沢山あるようだ。

「ひとまず、研究室に戻ろうか。獄寺くんと山本くんの様子も気になるし。」

「あ、はい。二人とも、新技を考えてるんですよね。」

ツナは足に力を入れて立ち上がる。
ふらつく身体をなんとか堪えさせて、一息ついた。

足元をおぼつかせながらも入り口に向かい、扉を開ける。

「あ、十代目！」

「おっ、ツナーお疲れ！」

ツナに気付いた獄寺と山本は笑顔で駆け寄って来る。

「二人とも、新技はできたの？」

「もちろんです！まだ修正しないといけねぇところがありますけどね。」

「オレも出来たぜ！一応一つはやってみた…」

そう言いかけた山本の表情が笑顔から真顔へと変わる。

上がっていた口元は下がり、瞳は真剣なものとなる。

「…ツナ、どうかした？」

「え、な、何？」

突然問われ、ツナは戸惑ってしまった。
山本は顎に手をあて、「んー」と唸りながらツナのまわりをぐるりと一周する。

「…もしかしてさ、ツナ、傷が痛むのか？」

「え！？」

「あとさ、それと疲れのせいで立ってるのも精一杯なんじゃね？」

「えぇ！？」

ツナは大声をあげて驚いてしまった。
それにより、足の力が一気に抜けて座り込んでしまう。

「な、なななななんで、なんでわかったの！？」

「んー、なんとなく具合が悪いってか、調子悪そうだったからな。」

「ほんとに！？」

はぁー、とツナは大きくため息をついてうなだれた。

扉を開ける前、ツナは二人に心配をさせまいと、傷の痛みや疲労を隠すために全神経を集中させていた。

だがそんなことに慣れていないツナの演技力では隠しきれなかったらしい。

「顔色が悪いように見えたが…気のせいじゃなかったのか。」

「獄寺くんもわかってたんだ…。」

山本どころか、獄寺にもわかりきっていたらしく、ツナは苦笑いをするしかなかった。

もう一度立ち上がろうとするが、上手く力が入らず無駄に終わる。

「やっぱり大丈夫じゃないんだね、綱吉くん。」

「無理なさらないでください十代目!」

オスカルと獄寺がツナを気遣う中、山本は先程と同じように考える仕種をしていた。

眉間にしわが寄っており、怒っているようにも見えたのでツナは少し驚いて山本に控えめに話しかける。

「や、山本…？何か怒ってる……？」

「…いや、別に怒ってないぜ！それよりツナ、もしかしたらその傷の痛みとだるさ…抑えられるかも知れねぇぜ？」

「え！？ほんとに！？」

まさかの言葉にツナはもちろん、獄寺とオスカルも唖然としてしまう。

何を言い出すかと思えば、ツナの傷の痛みや疲労感を抑えられるかも知れないとのこと。

獄寺は疑いの眼差しで山本を見た。

「…まじかよ。」

「多分な！ちょっと、獄寺とオスカルさんは部屋の隅に寄ってくれねぇか？」

「あ、あぁ。わかったよ。」

山本が何をする気かはわからないが、獄寺とオスカルは言われたとおりに部屋の隅に寄った。

部屋の真ん中には座ったままのツナと立っている山本のみだ。

「よし、始めるぜ！」

「う、うん…。」

ツナは戸惑いながらも頷く。

いくら親友だからと言っても、何をされるかわからないので不安は隠せない。

山本はリングに炎を燈し、ボンゴレ匣を取り出して炎を注入する。

匣から勢いよく山本の匣兵器の小次郎が飛び出した。

「小次郎、形態変化（カンビオ・フォルマ）！」

山本の声に答えるように小次郎は鳴き、炎を纏って時雨金時と合体して長刀へと姿を変えた。

青色の炎を纏うそれを両手で持ち、山本は構えをとる。

「よっしゃ、行くぜツナ！」

「えっ！ちょっ、や、山本！？」

刀を向けられても、とツナは焦る。
だが山本はそんなことを気にもとめず、刀を構えたままツナに向かって走り出した。

「んなあぁぁあ！？山本おぉぉお！！？」

「なっ、何してんだよ野球馬鹿ぁぁあ！！」

「どうしたんだい山本くん！！」

山本の突然の行動に誰もが焦燥を浮かべる。
仲間に刀を向けて走り出したのだ。
どうかしてしまったのだろうかと思うのも仕方ないことだ。

「山本！山本！ストップストップー！！！」

ツナが必死で制止するが山本は止まらない。
むしろ刀を包む炎は人を包んでしまえるほど巨大化していた。

山本が刀を上にかかげるとガチャ、と音が鳴る。

恐怖と驚きと焦燥で声の出なくなってしまったツナは、身体を動かすことも出来ず、まぶたを固く閉じた。

ダンッ、と力強い音をたてて山本は地面を蹴り宙に浮く。

「時雨蒼燕流、守式十三の型……」

巨大化した炎を振り払うように、山本は刀を振り下ろした。

「治癒の雨!!!」

バシャァァァアンッ

刀が振り下ろされたことにより、死ぬ気の炎が瞬時に小さな幾つかのかたまりとなってツナに向かう。

バシャンッ　バシャンッ　バシャンッ

ツナは全身に炎を浴び、思いもよらない出来事にまぶたを上げた。

「な、何!?なんだこれ!?」

「ツナー、どうだ、身体の調子は?」

「身体の調子って……あれ……」

ツナは自分の身体を見て、腕を振ったり足を動かしたりする。

ぽかんと口を開けたまま、ツナは山本を見上げた。

「……傷も痛くない、それに身体もだるくない…」

「へへっ、だろ?」

「どういうことだ野球馬鹿!」

部屋の隅にいた獄寺とオスカルが駆け寄り、山本に問う。

山本は「まぁまぁ」と凄い剣幕の獄寺をなだめ、説明をし始めた。

「これは、オレの炎の属性“鎮静”の作用でツナの傷の痛みやだる

さを抑えたんだ。ま、麻酔みたいなもんだろ！」

「…もしかしてこれも新技？」

ツナが問うと山本は笑顔で頷き、言葉を付け足す。

「自分にやるときは刀に炎を伝らせて傷口とかに炎を送り込むんだ。でも、炎を当てすぎたら身体の機能までもが抑えられちまうから調整が必要だけどな！」

「へぇ、便利だけど難しい技だね…。」

オスカルが感心したように頷き、ポケットから取り出したメモ帳に何やら書き足していく。

「立てるか、ツナ」

「うん、立てるか…も……あれ？」

ツナは足に力を入れるが足はびくともしない。
なぜだろう、と首を傾げていると山本が苦笑いをしてツナに謝った。

「ごめんな、ツナ！さっきツナに炎を沢山浴びせちまったみてぇだ！」

「えっ！？」

「てめぇ！この野球馬鹿が！！」

獄寺が山本に殴り掛かろうとするので、ツナはそれを立てないながらも止める。

二人を近づけまいと獄寺の足を引っ張り距離を持たせている。

そんな光景を見て、オスカルは楽しそうに笑った。

「…あいつらも、技はだいたい出来たってわけか」

片手にコーヒーのカップを持ったリボーンが、扉の陰からツナたちの様子を見ている。

「そろそろ他の奴らにも伝えるべきだな。」

にやりと笑った赤ん坊は、あたたかいコーヒーを口に含んだ。

標的１４９　治癒の雨（後書き）

おかしな山本の新技登場となりました。

どう二つ目の技を出させようか迷い、この出し方が一番しっくり来たのですが…ツナさんがかわいそう（笑）

次回はどんな感じにしようかまだ決めてません。

そろそろほんとにトンノを出したいです。

読んでいただきありがとうございました！

標的１５０　効果覿面

ツナは新技のデータ採取、獄寺と山本は新技を作り上げた。

一段落ついた三人は、オスカルに料理をごちそうになり、やわらかいソファの上でくつろいでいた。

「ツナー、調子どうだ？」

「まだ上手く身体は動かないけど…傷も痛まないしだるくもないよ。」

先程山本の新たな技、「治癒の雨」を受けたツナは、傷の痛みや身体の疲労を今は感じていない。

だが、山本が完全に調整できないままの炎を浴びてしまったせいで身体の自由がきかなかった。

「腕は動くんだけどなぁ。なんで足は動かないんだろ…」

「多分、腕は怪我を負っているからそこに効果が集中したんだよ。でも足は怪我をしていないから効果が足全体に広がって動かなくなってしまったんじゃないかな？」

力の入らないツナの足を持っては放し、持っては放しを何度も繰り

返しながらオスカルは推測する。

足の動かなくなってしまったツナは、実験室の整理を終えて現れたプロメッサにより運ばれた。

どうして動けないのかとプロメッサはオロオロしながらツナに問いただしていた。

その様子は子を心配する親さながらだったと言う。

「プロメッサがすごい心配してたよね。涙目だったし。」

「あはは……あれ、そういえばプロメッサは？」

苦笑いをしたあと、ツナはプロメッサの姿が見えないことに気付く。

きょろきょろとあたりを見渡すが、プロメッサはどこにも見当たらない。

すると、思い出したようにオスカルがツナの疑問の答えをくれた。

「あ、プロメッサなら…確か治療室にいるトンノの元へ向かったはずだよ。」

「え、トンノの所ですか？」

そういえば体調不良を訴えていたな、とツナは心配になる。

トンノの様子を見に行こうと思いツナは立ち上がろうとするが、足に力が入らないことをすっかり忘れており身体を支えていた腕を滑らせて転んでしまった。

ビタンッ！

「へぶっ！」

「うわっ！？つ、綱吉くん！！？」

見事顔から転んだツナにオスカルが驚愕する。

慌ててツナを起こすと、ツナの鼻が赤くなっていた。

「だ、大丈夫かい！？」

「いてて…な、なんとか……」

ツナは痛々しく赤くなった鼻をおさえる。

顔面を思いきり床にぶつけていたようだが、どうやら鼻血は出てい

ないようで、オスカルは「よかった」と安心のため息をついた。

「無理しちゃだめだよ。そのうち来るから。」

「はい…すみませんでした…」

じんじんとした痛みが鼻を支配し、思わず涙目になってしまう。

情けないと言われてしまうかも知れないが、痛いものは痛いのだ。

ツナがソファへ這いながら座りなおすと、部屋の扉が開いた。

ひょっこりと顔を出したのは、真っ黒な小型犬。

その後ろから金色と白色の毛並みをした鳥があらわれた。

「トンノ！」

「あ、ツナ！」

ツナを見るやいなや、トンノは翼を羽ばたかせてツナの元へ飛んでいく。

「ツナ、新技は出来たの？」

「まだ色々調節は必要だけど、一応できたよ。トンノは、体調の方は大丈夫？」

「プロメッサのおかげで良くなったよ！」

はしゃぐ子供のようにトンノは落ち着かない様子で話す。

ツナに会えたのがそれほど嬉しかったのだろう。

「よし、休憩もとったことだし、次は獄寺くんたちのデータでもとらせてもらおうかな！」

思いきり伸びをしてオスカルは立ち上がる。

そして獄寺と山本にデータ採取を持ち掛けようと後ろを振り向くと、いつのまにか二人の姿は消えていた。

「え…あれ…二人は？」

「オレが転ぶ前に…何か言い合いながら部屋を出ていきましたけど……」

知らぬ間に獄寺と山本は部屋を出ていたらしい。

それにまったく気付かなかったオスカルは「うそ！？」と大声をあげた。

「二人ならさっき研究室に入ってったよ？」

「本当かい？ありがとうプロメッサ！」

プロメッサに礼を言うと、オスカルは慌てて部屋を出て行った。

部屋に残されたツナとプロメッサとトンノはしばし無言になった。

「…オレ、どうすればいいんだろ。」

「効果が切れるまで休んでなよ。そしたら綱吉の傷も診てあげるから。」

「そっか。ありがとう。」

プロメッサの優しさに思わず笑みがこぼれ、漆黒の美しい毛並みをなでた。

炎の効果が切れるのはいつだろうか。

いつ訪れるかわからないその時を、ただ気ままに待つしかなかった。

何もすることのないツナはソファに突っ伏してため息をつく。

感覚のない足が一刻も早く元に戻ることを願い、目を閉じた。

標的１５０　効果覿面（後書き）

タイトルは、「こうかてきめん」と読みます。

な、なんか内容の薄いものになりました。

すいません。

もう少し濃く書けるはずだったのですが、模試を控えているので時間がなくて…。

が、がんばってきます…！

読んでいただきありがとうございました！

標的１５１　頭の中の水

そこは、他人が滅多に立ち入ることができない不思議な場所。

しかし、誰もが持っている不思議な場所。

見上げれば澄んだ大空が広がっている。

真っ青な、限りを知らない大空。

だが、見下げれば水が宙を漂っている。

知らぬ間に意識の中へ入り込んでいたツナは、まぶたをあげた途端驚きの声をあげた。

「んなっ！み、水…！？」

思わず足を動かせば、ぱしゃりと水がはねた。

すると水しぶきと共に、小さな揺らめく炎が目に映った。

青色の、炎。

「青色って…山本の炎!?」

ツナはもう一度足元に漂う水を蹴り上げるように足ですくう。

水滴と共に舞うのは、たしかに山本の雨属性の炎であった。

何故、ツナの意識の中に山本の炎があるのだろうか。

今まではこんなことはなかったのだが。

「おーい、とく……」

ツナは徳松に問いただそうと名を呼びかけたが、声は途中で出なくなった。

「…そういえば、徳松は疲れて寝てるんだった……」

先程の実験とデータ採取により、徳松は疲れてしまいこの広い大空の何処かで眠っている。

それを探して起こすのはかわいそうだと思い、ツナは自分で考えることにした。

「なんだろ…冠水…じゃないよなぁ……、水が浮いてるなんて…まさかここ宇宙!?」

有り得もしない答えばかりが出てくるので、まったく正解に辿り着けない。

…サ……バサ……

しばらく唸り続けていると、どこからか音が聞こえた。

何だろうとツナはあたりを見回し、音の根源を探す。

「…ナー……ツ……ー……」

「ん?」

次は声のようなものを耳がとらえた。

耳をすますと、次第に声と音は大きくなっていく。

意識の中には他人は滅多に立ち入ることができない。

だとすれば。

「…もしかして！」

思い当たるふしが見つかり、ツナは声と音のする方向を見た。

するときらきらと輝いたなにかがこちらへ飛んできている。

黄色、白色、そしてオレンジ色。

その三色が大空に混じり合い美しく存在をあらわしていた。

「ツナ、ツナー！」

「やっぱりトンノだ！」

バサバサと音をたてて、トンノがツナの元へと飛んできた。

左腕にトンノをとまらせると、ツナはトンノに問うた。

「どうかした？何かあったの？」

「いつのまにかツナが寝ちゃって、治療をしようと思ったんだけど泥のように眠ってたから…様子見に来た。」

「そ、そっか…ごめん。」

ツナは苦笑いをして謝ると、トンノは「気にしないで」と言った。

「…あれ、徳松は？」

トンノが徳松のいないことに気付き、首をのばして周囲を見渡す。

「多分、疲れてどこかで寝てるんだと思う。オレも徳松を探そうと思ったんだけど……あ。」

「どうしたの？」

「……トンノなら…わかるかな。」

「何が？」

トンノが首を傾げると、ツナはこれ、と指をさす。

その方向を見ると、水が宙に浮かび漂っていた。

「…これ、水だね。」

「なんか山本のっぽいんだよね…。なんで大空に水が漂ってるかわかるかなー…って思ったんだけど……どう？」

トンノが空中に漂う水を凝視し、「んー」と唸る。

試しに羽の先で突いてみると、水滴と共に青い炎がはねた。

「間違いなく山本の雨属性の水だね……あ！」

「なに、わかったの！？」

「うん、多分！」

もう一度、ぱしゃりと水をはねさせてトンノは頷く。

「ツナ、山本の炎を被ったよね？」

「え、ああ…うん。」

「それだよ。」

確信したように、トンノは強い口調で言う。

「ツナが山本の炎を被って、ツナの身体に炎の力の効果があらわれたよね。それがここにも、意識の中にもあらわれたんだよ。身体も意識も、ツナだからね。ただそれだけのことだと思うよ。」

「…そ、それだけ？」

「うん。それだけ。」

山本の炎が意識の中にも影響した。
ただ、それだけであった。

もっと、何か重大なことでも起きているのではないかと思っていたツナは安堵のため息をつく。

つまり、目の前で漂う水は“鎮静”の効果が無くなれば自然と消える。

心配しなくても勝手になくなるものであると言うことだ。

「心配して損したかも…」

「へへっ、大事じゃなくてよかったね。」

よく見れば、水は先程よりも少なくなっている。
だんだん効果が薄れているということだろう。

「早く消えないかなー。」

「んー……そうだねぇ…」

再び漂う水を凝視し、二人はどうにかできないものかと首を傾げる。
すると、トンノが思い立ったように「そうだ！」と声を上げ、ばさりと羽を動かした。
なにをするのだろうとツナは何も言わずトンノを見つめる。

「よ…いしょっ！！」

おかしな掛け声のあと、トンノの身体から炎が発せられる。
ゆらゆらとオレンジの炎が揺れ、一回り大きくなったそれを纏いトンノが羽ばたく。

ブワッ！！

翼から風が起こされ、それに乗り炎が流れる。
すると炎が漂う水に覆いかぶさり、ジュワッと音をたてて煙を立ち込めらせる。

シュウゥゥウ……

「み、水が……」

みるみるうちに水が蒸発してなくなっていく。
そしてすぐに水は消え、それと共にトンノの炎も消えた。

「き、消えた！」

「よかったー消えた！」

ツナは驚きの、トンノは歓喜の声をあげる。
宙を漂っていた水は見事綺麗に消え、跡形もない。

「え、どうやったの？」

「普通に炎で蒸発させただけだよ。山本の炎だから出来るか心配だ

ったけどね。」

「へ、へぇ……」

トンノが訪れてから問題がさくさくと解決していくので、ツナは状況にあまりついていけない。

つまり、呆気にとられていた。

「これでちゃんと怪我の治療もできるね！」

「う、うん。ありがとね、トンノ。」

戸惑いながらもツナは礼を述べる。

トンノは嬉しそうに「どういたしまして」と言って照れ臭そうに羽を震わせた。

「…あ、プロメッサが呼んでるよ。」

「へ？」

「起きろって言ってる。」

頭上を見上げながら何気なくトンノが言う。

耳をすませば、なんとなくであるがプロメッサの声が聞こえる。

プロメッサの声に気付かなかったということは、ツナは眠りが深かったらしい。

「そっか、じゃあ起きようか。」

ツナは起き上がり、まぶたを閉じる。

次第にプロメッサの声が大きくなっていく。

再びまぶたを上げると、蛍光灯の眩しさに思わず目を細めた。

少し顔を動かすと、プロメッサがこちらを見ている。

「おはよう、綱吉！」

「ごめん…いつの間にか寝てたみたい。」

「構わないよ、疲れてるんだもん。それより、身体は動く？辛くない？大丈夫？」

プロメッサの態度がまるで母親のようで、ツナは思わず笑ってしまう。

なぜ突然ツナが笑い出したのかわからず、プロメッサは首をかわいらしく傾げた。

「…あれ、トンノは？」

「今起きてすぐに…救急箱持ってくるって飛んでったよ。」

「す、すごいな……」

自分のまわりはすごい動物ばかりだ、とツナはまた笑う。

すごいだけでなく、優しい。

それでいて、強い。

「…すごいなぁ。」

ぽつりと呟いて、ツナはプロメッサの頭をなでる。

プロメッサは目をとじて子犬らしい声をだした。

標的１５１　頭の中の水（後書き）

昨日、寝過ごして更新ができませんでした。
ね、寝過ごして…寝過ごして…（笑）

次回から獄寺くんと山本のデータ採取をさせたいなと思ってます。

…更新できるかわからないけど↑

読んでいただきありがとうございました！

標的１５２　不明な点

「あれ…腕の傷、もうこんなに治ったの？」

包帯をとき、ガーゼを外すと見えたのは鋭い切り傷。

その傷を負ったのはつい昨日のこと。

傷を負った直後は、傷は意外にも深かったし、広範囲であった。

だが、今は傷は半分ほどが塞がっていた。

「綱吉、なにかした？」

「…え、なにかした…かなぁ？」

手当てをしていたプロメッサに問われ、ツナは心当たりがないかと考える。

すると、はた、と何かを思い出した。

「…Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）と、山本の…炎……？」

心当たりは、それしかない。
特別なことと言えば、それだけだ。

「……もしかしたら、Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）と山本の炎の力かも…」

「Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）って、身体を炎で覆って傷の痛みを和らげたり、敵の攻撃を無効化する技、だよね？……まさか、それが傷に…？」

オレンジの瞳がきょろきょろと驚きで揺れる。

「…でも、オレはそのふたつのせいじゃないと思うんだ。」

ツナはおずおずと、だが瞳には確証を持って否定した。

山本の死ぬ気の炎には雨属性の“鎮静”の力がある。
それを活用した技でツナの傷の痛みや疲労感を和らげた。
だが、いくらまだ技においての炎を調節できなくて必要以上に炎を浴びせてしまっても、山本の炎だけではこれほど傷の治りを早くすることができない。

なぜだろうか。

それは簡単だ。

山本の炎は“鎮静”。つまりは鎮まり落ち着かせる効力を持つ。

だから例え山本の炎が働いているとしても、傷の痛みや進行を鎮ませることしかできないのだ。

だがしかし、ツナの傷は治りつつある。

一般人の傷の治りは一日で、深い切り傷を半分も塞ぐことは不可能だ。

さらに、ツナの防衛技、Ｂａｌｕａｒｄｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルアルド・ディ・チェーリ）は傷に関しては痛みを和らげるのみ。治療の効力は多少はあるが、これほどに治りを早めるほど強くはない。

そう考えると。

「……綱吉の、力……？」

黒い前足から、包帯がゆっくりと落ちた。

ふるり、と身体が震えた。

それは、恐怖に似たもの。

ツナは己の腕を見つめ、震える声でつぶやいた。

「…オレ、に……」

一体、

何が起こっている?

ズドン　ズドン　ズドン

聞こえるのは爆発音。
見えるのは煙と人影。

そして、赤と青のふたつの炎。

「なかなかやるな、獄寺！」

「けっ！オレを見くびんなよ！」

獄寺と山本は、先程完成した技で標的を撃ち落としていた。

赤の炎はさまざまな色に変わり、突き刺すように放たれる。

青の炎は小さなかたまりにわかれ、飛び散るように放たれる。

そんなせわしない状況の中、オスカルはパソコンの画面とにらめっこをしていた。

「…ふむ。」

画面には赤と青の炎。それに数値。

今は、獄寺と山本のデータ採取をしているところである。

「獄寺くんの炎圧…８００２ＦＶで、７４．３ＦＶ／ｓか。瞬間的な炎圧が低いんだね。山本くんのは…４２０ＦＶと、５００１ＦＶ／ｓ…。逆に山本くんは持続的な炎圧が低い…と。……へぇ。」

興味津々にオスカルは口をゆるめる。

これは、なかなかおもしろいデータだ。

「二人が協力しあったら…綱吉くんまでには及ばないが力は相当上がるってわけだね。」

ちらり、とオスカルは獄寺と山本を見遣る。

技を発しながらも、二人は何やら言い合いをしている。（しかしそれはいつもの獄寺が勝手に山本に文句を言っているだけの言い合いだ。）

一見、ちぐはぐのように見える二人だが。

「実は、いいパートナーになれるんじゃないかな。」

愉快そうに笑い、オスカルはパソコンを操作する。

次に出てきたのは、二人の新たな技のデータだった。

「獄寺くんのＦｒｅｃｃｉａ　ｄｉ　ｃｉｎｑｕｅ　ｆｉａｍｍａ（フレッチャ　ディ　チンクエ　フィアンマ）が…１万４２３０ＦＶと、９３５ＦＶ／ｓ。山本くんの風雨が６３４ＦＶで、８６３８ＦＶ／ｓね。通常のときよりかは炎圧は高いんだ。」

データからすると、やはり獄寺の炎は持続的、山本の炎は瞬間的に力が強いらしい。

逆に、獄寺の炎は瞬間的、山本の炎は持続的な力が弱い。

「相手にないものを補い、協力する。それが戦いにおいて大切なんだけど……二人にはまだ無理かもね。」

やれやれ、とオスカルは肩をすくませた。

標的１５３　異常

だんだん、だんだんと
大きくなっていく力。

目覚めたばかりで、あどけないような小さな力は、だんだんと大きくなっていく。

無邪気な子供が冷静な大人になるように。

それを我が物にできるのは、いつだろうか。

もはや強大な力は抑えられない。

その力と連動するように、彼も、彼も覚醒していく。

時が満ちるのは、そう遠くはない。

何が、起こっている？

この少年に、この身体に。

顔をのぞけば、琥珀色の瞳が動揺で揺れていた。

「……つ、綱吉…？」

一言も喋らないツナを心配してプロメッサが控えめに声をかける。

だが、ツナは己の掌を見てただ震えているだけだ。

ただの人間とは思えないほどの治癒力。

それを目の当たりにし、ツナは動揺しているのだ。

ああ、どうしよう。
どうすればいいのだろう。

こういうとき、何て声をかければいいのだろう。

プロメッサは自分のやるせなさに苛立ちを覚えた。

かつり、と背後から靴の音。

何だろうとプロメッサが後ろを振り返るのと、ツナの叫び声が聞こえたのは同じだった。

「ぎゃっ！！」

「え！？」

驚いて見遣ると、床に俯(うつぶ)せで倒れているツナと、その背中に乗っかっているリボーンが目に映った。

「チャオ、プロメッサ。」

「リボーン…！綱吉からおりて！」

のんきに挨拶をしてくるリボーンに慌ててツナの背中からおりるように注意する。

ツナは背中を打撲しているのだ。
そんな打撲中のところに乗れば痛くないはずがない。

リボーンは身軽にツナの背中からおりて、ソファに座り込む。
すると、ツナが唸りながら左腕を支えにして起き上がった。

「綱吉、大丈夫？」

「いてて…右腕はなんとか無事だけど……」

ツナの額が赤く変色している。
どうやら擦りむいてしまったらしい。
だがそれ以外に怪我はなく、右腕も腹部も無事だと言う。

「…背中はどう？」

「せ、背中…なんで？」

「綱吉、背中を打撲してたでしょ？」

プロメッサに言われ、ツナは思い出したようにはっとする。
その反応を見て、プロメッサだけでなくリボーンまでもが唖然としてしまう。

「…え、忘れてた…の？」

「わ、忘れてた…痛みがなかったから…」

ツナは背中をさすりながら苦笑いをする。
まさか、とプロメッサは再び唖然とした。

不審に思ったリボーンはツナの背後にまわり、背中を何度か叩いたり押したりしてみる。
だがツナは「痛くないなー」と言うだけだ。確かに痛がっていない。

右腕の切り傷といい、背中の打撲といい、やはり治癒が早過ぎる。
先程のツナの動揺を見たこともあり、プロメッサはそれについて話題を切り出せない。

言おうか言わまいか迷っていると、そんなことお構いなしにリボーンがツナに問うた。

「ツナ、おめぇこんなに怪我が治るの早くなかったよな。」

「えっ……」

びくり。

ツナの肩が大きく揺れた。

恐る恐るツナは振り返る。

すると、一人の赤ん坊と目があった。

「…リ、ボーン……」

「おめぇ、傷の治りが早くなったのか。」

率直に聞かれ、ツナは戸惑いながらも小さく頷く。

そうか、と一言発し、リボーンは黙り込んでしまった。

しばらく沈黙が続く。

カチ、カチ、と時計の針が時を刻む。

それが何秒か、何分か何時間か。
どれだけ時間が経ったのかわからない。
頭が動揺や不安に支配されている。
沈黙に耐え切れず、ツナが震える声でぽつりとつぶやいた。
「……オレ、おかしいのかな…」
思わぬ言葉にリボーンとプロメッサはツナの顔を見遣る。
そこには、恐怖に怯えるただの少年の顔があった。

標的１５４　普通

おかしい。

おかしい。

あの日から、あの時から。

少年の中で何かが動き出した。

それが何なのかも、わからない。

誰も、少年でさえも。

「……オレ、おかしいのかな…」

「な…！！」

「……。」

ツナの思いがけない発言に、プロメッサは瞳を揺るがす。
リボーンも身体を強張らせ、小さく眉をひそめた。

「そ、んな…ツナはおかしくないよ！どこもおかしくなんかない、ツナは普通の人間だって！！」

俯(うつむ)くツナの膝の上に乗り、プロメッサは必死に否定する。
だが、ツナはプロメッサに目を合わせずに拳を握りしめた。

「…普通の人間が、こんなに怪我の治りが早いわけないし、……徳松みたいな能力があるわけないだろ…？」

その言葉に、プロメッサは何も言えなくなってしまった。
絞り出される声は小さく、震えている。
口元は歪み、自らを嘲笑うかのような笑みをしていた。

その時、プロメッサは「ああ、こんな表情をするんだ」とただ思った。

自分を受け入れてくれた、生を与えてくれた優しい少年。

昨日出会ったばかりだったが、プロメッサはツナが大切な存在であると思っていた。

自分を救ってくれたかわりに、自分はツナを守るんだと。

自然とそう思っていたのだ。

それは仲間意識であると言うことを、プロメッサは知っていた。

今、目の前で大切な仲間が苦しんでいる。

なのに、自分はなにもできない。

なにもしてやれない。

その悔しさに、プロメッサは黙り込んで自分を責めた。

しかし。

「おい、ツナ。」

重い空気を撃ち破るように、リボーンがツナに話しかけた。
ツナは返事もなく、ただ俯いているだけだ。
それでもおかまいなしに、リボーンは言葉を発しはじめる。

「おめぇ、自分が普通じゃねぇって言ったよな。」

リボーンが問うが、またもツナは答えない。
耳が聞こえているのだろうか、と疑ってしまう。
だがリボーンは問いを続けた。

「おめぇの思う“普通”って何だ?怪我の治りがこんなに早くなくて、徳松みたいな能力が存在しないことか?」

数秒、リボーンは待つがツナの応答はない。
リボーンはひとつため息をついた。

「…おめぇの普通、ってのは、毎日寝坊して、学校に行って勉強して、獄寺や山本たちと話して、帰宅して漫画読んだり、ゲームしたり、ママンの作る食事を食ったり……そんなんじゃねぇのか?」

ぴくり、とツナの指が動く。
それはただの震えでなく、ひとつの動作。

「それをしてるってんなら、おめぇは普通だ。普通の人間だ。だいたい、普通だなんて人によって違うだろ。金持ちは沢山の金を持ってるのが普通だし、…オレの場合、傍らにレオンがいるのが普通だ。そう考えると、普通なんてのは人それぞれだって言うことがわかるだろ？」

琥珀色の瞳が、揺れた。
ゆらゆらと、動きを持った。

プロメッサはリボーンに顔を向け黙って話を聞いている。

「……おめぇは、選ばれてんだ。特別な能力を持って生まれた、選ばれた人間だ。それのどこがおかしいんだ？どこもおかしくないだろ。すげぇことだろ。…それをおめぇは否定して、それでも“おかしい”と嘆くのか？」

ツナの肩が、大きく揺れた。
そしておそるおそる、首を動かしてリボーンと目が合う。

その表情は、自らを嘲笑うような笑みでなく、目を見開いた驚くものであった。

「…ツナ、おめぇはそれでも自分を“おかしい”と言うのか？」

「……言わ、ない…」

小さな声が否定をする。

その答えに満足し、リボーンはにやりと笑んだ。

「じゃ、そういうことだ。おめぇはおかしくなんかない。」

「…うん。」

リボーンの言葉が、深く心に響いた。

先程までの不安や恐怖はすっかり消えた。

身体の震えはなくなり、強張りもおさまっている。

リボーンが落ち着かせてくれたのだ。

ツナの非を、否定してくれたのだ。

おかしくなんかないと。
ツナは選ばれた人間なんだと。

「…リボーン、」

いつも理不尽なことを言い、意地悪や無茶をおしつけてくる赤ん坊。
だが、いざという時はこうして力になってくれる。支えてくれる。

「…リボーン、ありがとう。」

ツナが礼を言うと、リボーンは「ふん」と鼻を鳴らして笑った。

その姿はなぜかあたたかい存在に見えた。

（心配するな、ツナ。）

おめぇはおかしくなんかねぇ。

例え今のおめぇがおかしいとしても、おめぇの仲間は離れたりはしねぇからな。

Ti accetto per quello che sei.

…あるがままの君を受け入れる。

「まあ、いずれおめぇはマフィアのボスになってそれが普通になるんだがな。」

「感動を返してよ。」

標的１５５　一段落

「十代目！」

「ツーナ！」

「あ、獄寺くん、山本！」

ツナがプロメッサに右腕の包帯をかえてもらっている途中、部屋の扉が開き、少し汚れている二人が顔を覗き込ませた。

何やら二人は疲れている様子で、力無い笑顔をしていた。

どうしたのだろう、と思いツナは二人に問うた。

「二人とも、何してきたの？」

「え、ああ、少し新技のデータ採取を…」

「そしたらなんか獄寺と勝負みたいな感じになっちゃってさー！」

あはは、といつものように笑い、山本は服についた汚れを手で払う。

獄寺は小さく舌打ちをして、ソファに腰掛けた。

すると、また扉が開きパソコンを手に持つオスカルが現れた。

「あ、お疲れみんなー」

「オスカルもお疲れ様」

ツナの怪我の手当てを終えたプロメッサが笑顔で答えた。
救急箱のふたを閉め、いそいそとオスカルの肩に飛び乗る。

オスカルがため息をついて首をならすと、ポキポキと骨が鳴った。
そのままどっかりと椅子に座り、パソコンを開く。

「二人のデータも取れたのか」

リボーンがオスカルのパソコンを覗き込む。
「ああ」とやけに疲れたような声で返事をし、オスカルはキーボードを打つ。

「どうしたの、そんなに疲れたの…？」

「ん、ああ…なんだかね、いつもより疲れてしまったみたいだ」

プロメッサが四本の足でオスカルの肩をほぐす。
目頭をおさえてまたため息をつき、オスカルはうなだれた。

だがパソコンを操作する手は止まらず、カタカタとキーボードの音が続いていた。

「…はい、これがみんなのデータ結果だよ」

パソコンの画面がかわり、それをリボーンに見せる。
リボーンはじっと画面を見つめた。

「……あいつらの力はまだ伸びそうか？」

「え、まあ…伸びるんじゃないかな、若いし。」

「若けりゃなんでも出来るわけじゃないんだよ、オスカル……」

曖昧な返事をしたオスカルにプロメッサは苦笑いをする。
だがリボーンはそれを肯定するような言葉を発した。

「確かにな。若いってのは力になるしな。あいつらも若さでここまできたのかも知れねぇ。」

「え…そんなもんなの…？」

「若いときにいろんなことをしたくなるじゃねぇか。窓ガラス割ったりする時期があるだろ。」

「それはごく一部の人達だよねー」

オスカルが笑い、リボーンは言うだけ言って再び画面を見つめる。

もうプロメッサは黙るしかなかった。

何が正しいのかわからなかった。

二人の言うことは冗談か本気か判断することができなかった。

そんなプロメッサをよそに、リボーンは食いつくようにパソコンの画面を見ている。

（……思ったより、数値が高いな…）

少し感心したようにリボーンは一人頷く。

だが、彼は凄腕のヒットマン。

知力、能力などはかなり優れているからなのだろう、この数値では満足しないらしい。

（現時点でこれくらいなら、まだ伸びるはずだ。あいつらの可能性はまだわかんねぇからな。…それに、）

ちら、とソファに座って会話をしているツナたちを見遣る。
また獄寺が山本に何か文句を言っているらしく、それをツナが苦笑いで止めていた。

（…まあ、若いしな。）

ふっ、と口元を緩め、一人笑んだリボーンは再び画面に視線をうつした。

……ズズズ

ある森の奥、深い洞窟の中で何かが這う音が響く。
忌ま忌ましいほどの邪気を放つそれは、暗くて姿は見えないが、音からしてかなりの大きさである。

「……グルル…」

低い唸り声をあげたそれは、ぎらりと細い目を光らせた。

それは偶然か否か。

誰も知らないその暗闇で、奴は静かに目を覚ました。

誰にも気付かれず。

ゆっくりと、運命が軋みだした。

標的１５５　一段落（後書き）

き、昨日更新できず…ごめんなさい！
気付いたら寝てました。え！なぜ！

今回はだらだらとしつつ、重要なことを出しました。
いつ出せるかわかりませんが…それまでお待ちください。
今月中には出ますよ（長い）

ひとまず彼らに夏休みを与えたい…です！

読んでいただきありがとうございました！

標的１５６　終業式

「学生の本業は勉学であり、本来であるならば夏休みという……」

マイクが声をひろい、スピーカーから大音量で流される。

その長々としたつまらない話は、学生たちの耳には届いていない。

学生だったら誰もが体験したであろう、学校長の長い話。

それを真剣に聞く者はちらほらといるだけで、ほとんどの者は早く終わることを願っている。

たとえ、この暑さの中であってもだ。

体育館というものは、風通しがよくないといけないものだが全校生徒や教師が集まると風などまったく吹かない。

蒸し器状態の空間で、長く、どうでもいい話を聞かされる。

それは一種の拷問ではないかと思ってしまうほどだ。

もちろん、その蒸し暑さの中では熱中症などで倒れてしまう人は少なくはない。

だがたとえ生徒が倒れても学校長は話をやめようとはしないのだ。

それを「鬼だ」と呟いて手で作られる微風を感じていたツナは、も

しかしたらこのまま溶けて消えてしまうのではないかと思っていた。

ちら、とあたりを見渡せば獄寺は時折舌打ちをして学校長を睨みつけており、山本はバットを持つ構えをしていた。

他にも俯(うつむ)いている生徒や、コソコソと友達と話をする生徒など、好き勝手にしている生徒はなかなか多い。

「…早く終わらないかなー」

ため息をついて天井を仰(あお)ぐ。

ふらりと一瞬目眩がするが、頭の中に響いた声で我に返った。

（……ツナ、平気か？）

「あ、徳松起きたんだ。」

新技のデータ採取の後、疲労がたまり眠りについたままだった徳松が目を覚ましたらしい。

目覚めたばかりであるというのにツナのことを気にかけている。

どうやらこの暑さやだるさが徳松にも伝わっているようだ。

「暑くて長くて…きついけどね。徳松は大丈夫？」

（ああ、心配ない。ただツナのだるさが伝わってきたから気になっただけだ。）

ツナは声には出さず、頭の中で言葉を並べて会話をする。

時折、こういうことが出来るのは便利だと思う。

授業中でも徳松と会話ができたりするのだ。

「もうすぐで終わりそうだから、心配してくれてありがとう。」

（礼には及ばんだろ。）

楽しい時間は早く過ぎる、というのはなんとなくわかる。

徳松と会話をしていると、あっという間に学校長の話は終わった。

終業式を終え、教室に帰ればすぐに成績表が返された。

喜んだり落胆したりと、生徒たちが様々な表情を見せる中、ツナは何やら微妙な表情をしている。

（…どうした、ツナ。不満か？）

「不満っていうか…何とも言えないなぁって……」

ツナは苦笑いをして、成績表を見つめる。
期末テストをいつもより頑張ったので、そのおかげで通常よりは成績は良かった。

だがやはり、どうリアクションをしていいのかわからないものだった。

すぐにそれをかばんにしまい、ツナは窓の外を見た。

空は遠く、蝉がけたたましく鳴いている。
吹く風は生温いが、それがさらに夏を実感させた。

「沢田」

頭上から声が聞こえ、見上げると担任の教師がツナを見下ろしていた。

「は、はい…」

「すまないが、この封筒を日向井に渡してくれないか？」

「日向井……あ、結加ちゃんにですか？」

手渡されたのは茶色のＡ４サイズの封筒。なにやら分厚い。

「あいつ、今故郷に帰ってるだろ。成績表とかいろんな書類を入れといたから、渡してほしいんだ。お前の家に居候してるんだろ？」

「あ、はい。わかりました。」

ツナが素直にそれを受け取ると、「頼んだぞ。」と一言残して教団に戻っていく。

終業式とは打って変わってＨＲはすぐに終わった。

ツナがかばんに配られた宿題などをしまっていると、獄寺と山本が荷物を抱えて現れた。

「十代目、帰りましょう！」

「あ、うん。」

ツナもかばんを肩にかけ、二人と一緒に教室から出ていく。

外に出ると、強い日差しが肌につきささった。

「疲れたのなー、成績も微妙だったしさっさと帰って昼寝でもすっかなー！」

「ばか、昼寝してる暇なんかねぇだろ！帰ったら荷物をまとめねぇといけねえんだよ！」

「あ、そっか。」

山本は大きく伸びをしながら笑い、獄寺は山本を睨みつけて舌打ちをする。

ツナたちが新技のデータ採取をした日、リボーンが三人を集めてこう言った。

「夏休み初日から、ここ、オスカルの研究所で合宿をするぞ。」

リボーンの説明だとこうだ。

新技を強化させるため、また新たな強力な技を作り出すために設備の整ったオスカルの研究所に寝泊まりをするのだ。

期間はどれくらいになるかわからないらしい。
もちろん夏休みの課題などはしっかりとやらなければいけないと言う。
聞けば、オスカルが部屋を用意してくれるとのこと。
まるで未来のボンゴレアジトだなとツナは思った。

今日は終業式。
そして明日は夏休み初日。
だから今日のうちに荷物をまとめなければならないのだ。

まあ、それはいいとして。

「びっくりしたのが…お兄さんやランボたちも参加させるってことだよね……」

ツナが苦笑いをすると、獄寺と山本も同感して頷く。

「クロームや雲雀にまでも新技を作らせるんスよね？」

「それはオレも驚いたのな。てかクロームはともかく雲雀は無理だと思うぜ。」

「だよねー……リボーンの奴、何考えてんだろ。」

ツナはため息をついて、肩をすくませた。

遠く離れた空には大きな入道雲。

真上にある太陽の光が遠慮なく照り付けている。

何やら騒がしい夏休みが始まりそうだな、とツナは苦笑いをした。

標的１５６　終業式（後書き）

やっと…終業式…です……。

これで心置きなくみんなを動かせますね。よかったです。

なぜ学校長の話はあんなに長いのでしょう。
わたしの学校では、今年赴任した方なのですが話が一分もないので楽です。

しかし立ったままなので倒れてしまう人がいます。

あれは地獄だと思います。

台風、今回はなかなか被害が大きかったですが、皆様は大丈夫でしたか？

わたしは雨に打たれ、石みたいな雨粒が目に当たってしばらく視力を失いましたが大丈夫です。
今ではばっちり見えます。
強風で自転車が煽られ転びそうになりましたが大丈夫です。

が、学生って大変…！

読んでいただきありがとうございました！

標的１５７　夏休み初日（前書き）

お久しぶりです、ゆか空です。

更新停止につきましては、多大なるご迷惑をおかけしてしまい、まことに申し訳ございませんでした。

標的157　夏休み初日

これは、数日前の出来事。

ツナたちの知らない出来事。

……イタリアにて。

「ああ、帰ってきたね。おかえり、ロンジと結加(ゆいか)。」

「ただいま帰りました、九代目。」

「お久しぶりです九代目！」

ボンゴレ本部のある部屋…ボスである九代目の部屋に、ロンジと結加(ゆいか)は訪れていた。

先日、突然九代目から一時帰国するようにとの命(めい)が下ったのだ。

二人は何かあったのだろうか、とも思ったが、問題が起こったというような内容は一切聞かされていない。

理由もわからぬまま、二人はイタリアに帰国したのだ。

「疲れただろう。そこにくつろいでくれ。」

二人を気遣い、九代目はソファに座るようにと促す。

一言礼を言い、腰掛けた二人の向かい側に九代目が座った。

「…それで、あの、用件は何でしょう？」

結加が不安そうに問うと、九代目は微笑んだ。

「そんな心配しなくていいんだよ。ただ君に渡したいものがあってね。ロンジは付き添いで来てもらったんだ。」

「わたしに？」

「ああ。ちょっと待っててね。」

九代目が席をたち、扉を開け部屋をあとにする。

ロンジと結加はお互いの顔を見合わせ、首を傾げた。

しばらくすると、扉が開き九代目が戻ってきた。

だが九代目は両手を背中にまわし、にこにこ笑っている。

「きゅ、九代目…いかがなさいました？」

ロンジが不審に思いたじろぎながら問う。
すると「ふふ」と笑い、九代目が両手を前にまわした。

その途端。

「…え……！？」

結加（ゆいか）が驚きの声をあげた。

これは、数日前の出来事。

ツナたちの知らない出来事。

……イタリアにて。

「つ、ついたぁー…」

頭の炎を弱々しく燈らせ、トンノはうなだれた。

翼はだらしなく広げられ、倒れ込むように地面に寝転がる。

「お疲れトンノ…ごめん、病み上がりに沢山働かせちゃって。」

ツナが優しくトンノを抱き上げ、苦笑いをして詫びる。

それにトンノは唸り声で答えた。

今日は夏休み初日。

しばらくオスカルの研究所で生活するため、ツナたちは荷物をまとめてトンノに運んでもらっていた。

ツナ、リボーン、獄寺、山本と、その四人分の荷物を一度で運ぶのには無理があった。

だからトンノは並盛と研究所の長い距離を何度も往復したのだ。

病み上がりから時間が経っていない小さな身体にはそれはかなり負担がかかった。

「とにかく…中に入ろう。」

ツナはトンノを抱え、沢山の荷物を持ち階段を降りていく。

時々その重さにふらつくが、なんとか耐えて一歩一歩慎重に下る。

「大丈夫ッスか、十代目。オレが荷物をお持ちしましょうか?」

「い、いいよ獄寺くん。君も荷物重いだろうし…。ほら、もうすぐだから大丈夫だよ。」

心配そうに声をかける獄寺に振り返り、ツナは笑ってみせた。

獄寺は「はい…」と返事をする。

だがそれでも心配らしく獄寺はいつでもツナの手助けができるように後ろからツナを見守っていた。

「いらっしゃい、みんな。」

重い扉が開かれ、オスカルが笑顔で出迎える。

オスカルの肩には頭部にオレンジの炎を燈し、真っ黒な毛並みの子犬のプロメッサが尻尾をせわしなく揺らしていた。

「オスカルさん、あの…またトンノが体調を崩してしまったんですけど……」

「おやおや……」

ツナの腕の中でうなだれているトンノを見て、オスカルは少し慌てたように駆け寄った。

「…オスカル、トンノの治療引き受けるよ」

ひょいっと肩から飛び降りたプロメッサは、大型犬の大きさになりトンノを背中に乗せる。

ぐったりしているトンノは「ううぅぅううう」と小さな唸りながらプロメッサに運ばれていった。

「…あの子も少し、体力つけたいいんじゃないかな」

「そ、そうですね……」

「最近平和ボケしてるからな。あいつにも課題を出すか。」

去っていくプロメッサとトンノを見送りながら、オスカルとツナは苦笑いをする。

リボーンは「ひとまず体力を戻さねぇとな」とため息をついた。

標的１５７　夏休み初日（後書き）

お、覚えていらっしゃいますか…ゆか空です。

この度は、「その先には。」更新停止につきまして、多大なるご迷惑をおかけしてしまったことを、心よりお詫び申し上げます。

新学期に入りまして、いよいよ受験を目の前に控え、さらにはテストや予習復習、小テストや文化祭体育祭の準備で小説を更新する時間がありませんでした。

本当にごめんなさい。

一週間が、とても長く感じました。
毎日更新を目指すと言ったのに一週間も更新出来ず…。

ですが更新を停止している間も、多くの方からお言葉をいただきました。
ほんとに、うれしかったです！

今週は金曜までは毎日更新出来るはずです。
土日は…部屋のもようがえが↑

こうして更新出来たことがとてもうれしいです。

こんなぐだぐだなわたしですが、今後ともよろしくお願いします。

標的158　Alea　jacta　est（アーレア・ヤクタ・エスト）

すでに始まっていた。

誰も知らないところで、ひっそりと。

黒い欲望が重々しく、禍禍(まがまが)しくあたりの空気を、光を、すべてを呑(の)む。

終わりの始まり。

それは何をもたらすのか。

そのまま、終わるのか。

それとも、新たな始まりか。

誰にも止められない。

今は。

誰も、気付いてはいないのだから。

Ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ｅｓｔ（アーレア・ヤクタ・エスト）

……賽は投げられた。

「……？」

ぴくり、小さく肩が震えた。

その途端に、ぞわぞわと悪寒が走る。

それは、恐怖にも似た感覚。

「どうした、ツナ。」

「んぎゃあぁぁあっ！！」

長く続く廊下に断末魔のような叫び声が響き渡る。

あまりにも大きいそれは、空気をびりびりと揺らした。

「うっせぇな。」

ちっ、と舌打ちをしてリボーンが迷惑そうに顔をしかめる。

我に返ったツナの顔が一気に青ざめ、「ひいぃぃ！ご、ごめんなさいいぃぃ！！」と必死に謝る。

（リリリリボーンから黒いオーラが見える……！）

幻か、それとも現実か。
少なくともツナにはリボーンがとても怒っていることが見え見えであった。

「……。」

「……。」

「……。」

「……ご、ごめんってば！」

重い空気と沈黙に耐えられなくなりツナは謝りつづける。

そんなツナを見て、リボーンはひとつため息をつく。

「……何かあったか？」

「へ？」

「…だから、今何かあったのかって聞いてんだ。」

リボーンの問いに阿呆な声を出し、ツナは目を丸くする。

「な、何か、って……」

「とぼけんな。おめぇ、確かに今何かを感じ取っただろうが。」

「なん……！」

なんで知っているんだ。

そう言葉にしたかったが、それは叶わなかった。

動揺によって声が出なくなった。

吐き出されるのは言葉ではなく二酸化炭素だけであった。

「気付かないわけねぇだろ。凄腕のヒットマンなめんじゃねぇ。」

ふん、と鼻を鳴らしリボーンは腕を組んだ。

しばらく動揺していたツナは落ち着きを取り戻し、口を開いた。

「い、いや……ちょっと、嫌な感じがしたんだ…」

「嫌な感じ？」

ツナは小さく頷き、続ける。

「なんか、悪寒…みたいな。とにかく嫌な感じだった。」

「どこからかわかるか。」

「…どこから……？」

悪寒によりたった鳥肌をなくすように腕をさすりながら、ツナは先程の感覚を思い出す。

「えーーっと……」

たしか、悪寒を感じたのは。

「……こっち？」

ツナは首を傾げながら左を指差す。

その方向を一度見て、リボーンは「左……北か」と呟いた。

その言葉にツナは疑問を感じる。

言葉の意味を説明するべく、リボーンは口を開いた。

「様々な国などでは、左は不吉な方向と考えるところが多い。北は…日本では北枕は駄目だとか言うがあんなん問題ねぇ。問題なのはおめぇが指差したのが左ってことだ。」

「北枕は駄目だって聞くけど…え、問題ないの？」

ツナの疑問にリボーンは無言で頷く。

ある説では、釈迦が入滅する（亡くなる）際に、頭を北にしていたことから死者も頭を北にして寝かせるようになったと言われている。

だが、いつからかそれは「北枕＝不吉な方向」という考えになってしまった。

今では科学的に北枕は分析されており、それは健康的な寝方であると言われている。

人間の体内には鉄分があり磁界というものが存在している。

頭を北にして寝ると、地磁気に逆らうことのない自然的な向きになるために、血液の流れがスムーズになるのだと言う。

さらに、風水でも北枕は金運がアップすると言われており、他にも運気の上がる向きと言われているのだ。

「だから北枕は別に悪いことじゃねぇ。個々の意見はあるがな。北枕にしたら金縛りにあって幽霊を見ただとか。」

「へ、へぇ…そうなんだ…。」

「だが左っていうのが気になるな。確か左は山だ。山に何かあるの

かも知れねぇな。」

もし悪寒を感じたのが右、つまり街であるならば悪意を持つ人間の思念が伝わってきたのかも知れないとも考えることができる。

だがツナが悪意を感じたのは左、つまり山だ。
山に人は滅多にいない。
いるのは、動物や昆虫ほどだ。

「…何かあるのか？」

リボーンは眉をひそめて左を見た。
そこには壁しかない。

だがその向こうには山のある土地がある。

そこで、何かが起きているのだろうか。

何の悪寒なのか。

すべてが、謎であった。

すでに始まっていた。

誰も知らないところで、ひっそりと。

黒い欲望が重々しく、禍禍(まがまが)しくあたりの空気を、光を、すべてを呑(の)む。

終わりの始まり。

それは何をもたらすのか。

そのまま、終わるのか。

それとも、新たな始まりか。

誰にも止められない。

今は。

誰も、気付いてはいないのだから。

Alea jacta est（アーレア・ヤクタ・エスト）

……賽は投げられた。

標的158　Ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ｅｓｔ（アーレア・ヤクタ・エスト）（後）

Ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ｅｓｔ（アーレア・ヤクタ・エスト）は、確か古典ラテン語で、「賽は投げられた」と言う意味です。

これは共和政ローマ時の軍人及び政治家のカエサルの言葉です。

彼は第一回三頭政治を行った人で、元老院に逆らい軍を率いていたとき、ある川に行く手を阻まれてしまったのですが、その時に冒頭の「Ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ｅｓｔ（アーレア・ヤクタ・エスト）」と言って見事川を渡ったらしいのです。

昔と今では解釈はことなるようで、「運命の歯車はもう廻ってしまった」という解釈が今は一般的です。

世界史の授業で習ったので多分あってますが…間違ってたらごめんなさい。

その前に話が難しくてごめんなさい！

学校の先生に詳しいことを聞いてみましょう。ここで説明すると長くなるので…。

読んでいただきありがとうございました！

標的159　北

「え、北？」

「ああ、北だ。」

「なんだい、薮から棒に。」

突然問われたオスカルは目をぱちくりと瞬(まばた)かせた。

だがそんなオスカルの反応をよそに、リボーンは答えを促(うなが)す。

「理由は話すが、今は質問に答えろ。北の山には何かあるのかって聞いてんだ。」

「相変わらず勝手だなぁ…。北の山……何かあったかな。」

オスカルは考えるしぐさをして、机に並べられたファイルを取り出しぱらぱらとめくる。

先程、廊下でリボーンはふとツナの顔を見た。

すると、ツナは怯えたような、恐怖を感じているような表情をしており、顔色は悪かった。

身体は小刻みに震えていたし、腕には鳥肌が立っていた。

何かと問えば、左…北の方向から悪寒を感じたのだと言う。

その原因を探るべく、リボーンはこうしてオスカルの自室を訪れていた。

しばらくすると、「あ。」とオスカルが声をあげ、手を止めた。

「ん、なんだそれは。」

「この地域一帯の地図や資料さ。」

「見せてみろ。」

「はいはい。」

オスカルはソファに座るリボーンにファイルを手渡す。

リボーンがそれに見入っている間、喉の渇(かわ)きを潤(うるお)そうとオスカルは自室の隣にある給湯室へと入っていった。

（……山ばっかだな。）

地図と資料を照らし合わせて、見比べてみる。
だが、それはやはり山しかない。

（ツナが感じた悪寒は……なんだったんだ？）

おそらく、超直感が働いて感じ取ったのだろう。

超直感に間違いはない。
ボンゴレのボスが持つに相応しい、優れた直感なのだ。

そう簡単に使えるものではないし、ましてやそう簡単に授かるものではない。

だから、ツナの感じ取った悪寒は間違いではないだろう。

（何か、何かあるはずだ。）

リボーンは目を凝らし、地図と資料を見つめた。

だが、やはりなにもない。

悪寒の原因は山ではないのだろうか。

リボーンはそう思いはじめ、ページをめくった。

「！！」

そのページを見た途端、リボーンの表情が一気に強張る。

そして紙に穴が開いてしまいそうなほど、リボーンはそのページを見つめた。

「……匂うな。」

怪しい。

リボーンはそう思った。

長年の、勘で。

「北の山……ねぇ。」

イタリア人らしくなく、やかんでお湯を沸かしながら、オスカルはぽつりと呟いた。

妙なことを聞くものだ、と思ったが、リボーンのことだから何かあったのだろう。

そんなことを考えつつ、オスカルは紅茶の葉を取り出した。

「…あ、そういえば。」

こんなことを聞いたことがある。

星に守られしある村に
魔物が現れ不幸を招く

それに悩み歎く村人は
怯えながら生きていた

村に現れし旅人は
不思議な力を用(もち)い
魔物を山の奥深く
真っ暗な洞窟(どうくつ)へと
封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ
村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救ったある旅人

その旅人が誰なのか
それは誰も知らない

「確か、その村は街に移って村のあったところは手のつけられない荒れ地になったみたいだけど……」

トレイにカップなどを乗せ、オスカルはまた独り言を呟いた。

「……ああ、その方向がここから北だったなぁ。」

標的１５９　北（後書き）

す、すみません！
昨日は眠ってて更新できないという恥ずかしい理由で……あの、ごめんなさい（笑）

さてさて、小説の展開がかわってきましたが…いかがでしょう。
わたしの考えはわかりやすいので、展開がわかってしまうんじゃないかと不安ですが……。

昨日は体育祭だったのですが、見事足を負傷して不思議な痣が沢山できました。
若い子はいいなぁと思いました。
青春もしました。楽しかったです。

明日も更新できるようにがんばります！

読んでいただきありがとうございました！

標的１６０　北の山の昔話

むかしむかし、まだこの地が未開だったころ。

山の中のある洞窟（どうくつ）に魔物が住むと言われていました。

その近く、山のふもとに小さな村があり、村人たちはいつも魔物に怯えていました。

魔物は、たまに村を干渉しに下りてくるのです。

その度に家畜や穀物、さらには人間までもを奪われ、村人たちはいつも怯えていました。

いつ、いつ奴が来るのだろうか。

今日か、明日か、ああ…それとも、今？

常に怯えていなければならない生活に、村人たちは毎日涙を流していました。

ある日、村に一人の人間が迷い込んできました。

彼は遠くの寺の僧らしく、修行のために旅をしているのだそうです。

しばらく、ここにおいてください。

僧はそう言い、頭をさげました。

優しい村人たちはその僧を快く迎え入れました。

ですが、魔物のことは話しておかなければと思い、彼にすべてのことを話しました。

話を終えると、僧は無表情で、無言でした。

ですが、それはすぐに笑顔へとかわり、明るい声で言いました。

私が、その魔物を封印してみせましょう。

その日の夜、僧と村人たちは村の入り口で魔物を待ちました。

星の見えない、くすんだ夜空の日。

そういう日に魔物はあらわれやすいのです。

松明（たいまつ）に炎を燈し、彼らは山をじっと見つめていました。

すると、地響きのような音が村に、山に鳴り響きました。

きたぞ、奴がきたぞと村人は叫び逃げ回ります。

ですが、僧だけは動かずに山の方向を見つめていました。

どすん、どすん、と重い音が近づいてきます。

光はなく、地面で燃えている松明（たいまつ）とほんの少しの月明かりで周りが見えるくらいです。

ふと、前が真っ暗になりました。

僧が上を見上げるのと、村人が叫ぶのは同時でした。

魔物だ、と。

その瞬間、僧は顔をしかめました。

魔物の放つ邪気がとても酷いものだったからです。

ぞわぞわと、ずっと感じていた悪寒。

ああ、なんて気持ち悪いんだ。

早く、鎮めなければ。

もはやそこには僧と魔物のみ。

ひとつ、風が吹き松明の炎を吹き消してしまいました。

ぎらり、と魔物の目が輝きました。

僧はひとつ深呼吸をし、地面を蹴りました。

太陽が顔を覗かせ、村に光が戻ってきます。

逃げ隠れていた村人たちが恐る恐る、村へと戻ってきました。

すると、村人たちは言葉を失いました。

村が、乱れていないのです。

何も、壊されていないのです。

家畜も穀物も全部、何一つ欠けてはいなかったのです。

すると、壁に一枚の紙を見つけました。

それには、こう書かれていました。

魔物は無事に、封印しました。

この先の洞窟の奥深くに眠らせています。

封印が解かれないかぎり、この村に魔物は現れないでしょう。

辺りを見回しても、僧の姿は見えません。

名前も、何も聞いていなかったので、彼が寺の僧だということ以外、何もわかりませんでした。

こうして、村に平和が訪れたのです。

星に守られしある村に
魔物が現れ不幸を招く
それに悩み歎く村人は
怯えながら生きていた

村に現れし旅人は
不思議な力を用(もち)い
魔物を山の奥深く
真っ暗な洞窟(どうくつ)へと
封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ
村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救ったある旅人
その旅人が誰なのか
それは誰も知らない

標的１６０　北の山の昔話（後書き）

また…同じ過ちを繰り返してしまった…！
すみません昨日も寝てしまい更新ができませんでした！

本当にごめんなさい…！

標的１６１　星守石（せいしゅせき）

「リボーン、どうだい？満足のいくものは見つかった？」

給湯室からオスカルが紅茶の用意を持ちあらわれる。

カチャカチャとカップがかわいらしい音を鳴らし、机の上に置かれた。

「…なにか、匂うな。」

「匂うって、どこが？」

「ここだ。」

リボーンの小さな指が地図を指差す。

それを覗き込んだオスカルは、目を見開き絶句した。

「……一応聞くけど…君には、超直感は備わってないよね？」

「あたりめぇだろ。オレはボンゴレの血はひいてねぇ。」

「…じゃあ、ただの勘か……」

リボーンの向かい側に座ったオスカルは、紅茶の用意をしながら語りだした。

「星に守られしある村に
魔物が現れ不幸を招く
それに悩み歎く村人は
怯えながら生きていた

村に現れし旅人は
不思議な力を用(もち)い
魔物を山の奥深く
真っ暗な洞窟(どうくつ)へと
封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ
村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救ったある旅人

その旅人が誰なのか
それは誰も知らない」

「……なんだ、それは。」

「ここ周辺の言い伝えだよ。」

貸して、とオスカルはリボーンの持つ資料と地図に手をのばす。

リボーンは今の言い伝えを疑問に思いながらも、オスカルにそれを渡した。

そしてオスカルは何かを探すように資料のページを次々とめくっていく。

「……あ、あった。」

オスカルがリボーンに見やすいように資料を逆にして見せる。

そこに綴られているものにリボーンは釘付けになった。

星に守られし村。

その「星」とは、宇宙にある星ではなく、村に伝わる秘宝である。

秘宝とは、円盤の真ん中に石が埋め込まれているもので、その石が美しく光を発することから「星」と呼ばれるようになった。

だがそれは普段光を発することはなく、月の出る夜のみ輝くのだという。

不思議なそれは、昔からその村を災害などから守るものとして崇(あが)められていたのだ。

村の人々は、それを「星守石(せいしゅせき)」と呼んだ。

だが、それがある日突然消えたのだ。

謎の僧が現れ、彼が魔物を封印した後に。

一時は、その僧が星守石（せいしゅせき）を盗んでいったのではないかと囁（ささや）かれた。

だが、そんな盗っ人（ぬすっと）が命の危険を顧（かえり）みず魔物に立ち向かうわけがない。

しかし、星守石（せいしゅせき）はどこへ？

探せど探せどそれは見つからず、時が経つにつれて星守石（せいしゅせき）は幻として語り継がれるようになった。

もちろんのこと、星守石（せいしゅせき）が存在していた時に生きていた人などもうこの世にはいない。

だから星守石（せいしゅせき）の有無は誰にもわからないのだ。

いつしか、村は山を離れ街へと移った。

そして星守石（せいしゅせき）は忘れ去られてしまったのだった。

「…ということは、その星守石（せいしゅせき）は今はここにはないんだな。」

「資料によるとね。でも、わたしが気になっているのはそれだけじゃないんだ。」

そう言うとオスカルは資料を退かして地図を手に持った。

そして、ある場所、リボーンが怪しいと感じた場所を指差した。

「さっきさ、君ここが気になるって言っただろう?」

「ああ。それがなんだ。」

「……ここなんだよね。」

苦笑いをして、オスカルは静かに言った。

「……魔物が封印されているという洞口だよ。」

標的１６２　悪寒の震源地

「ったく…なんだよいきなり呼び出してー……」

ぶつぶつと文句をこぼしながらツナは長い廊下を歩いていた。

その顔は不満そうで、口から文句が絶えることはない。

「プロメッサはなにか聞いてる？」

「わたしはなにも聞いてないけど。ただオスカルの部屋に寄ったら綱吉を呼ぶように言われただけだもん。」

ツナの肩に乗っているプロメッサは困ったような表情をして言った。

先程、リボーンと別れ用意された個室に着いたツナは、部屋を見回したあと、ベッドに潜り込んで昼寝をしていた。

するとそこにプロメッサが現れ、リボーンが呼んでいると眠っているツナを起こし連れ立たせたのだ。

「あー…眠いなー……」

何度目かのあくびをしながらも、ツナはオスカルの自室へと赴(おもむ)いた。

「あ、綱吉くんいらっしゃーい！」

扉を開けると、にこにこと満面の笑みでオスカルが出迎える。

その隣には、優雅に紅茶を飲むリボーンの姿があった。

「なんだよリボーン、いきなり呼び出したりして！……って、あれ、みんなは？」

ツナはあたりを見回すが、部屋にはオスカルとリボーン以外誰もいない。

てっきり獄寺と山本も呼ばれたかと思っていたのだ。

「おめぇだけに用がある。二人は呼んでねぇぞ。」

「え、オレだけ？なんで？」

「それを今から話す。まぁ、座れ。」

リボーンに促され、ツナは首を傾げながらも腰掛けた。

すると、突然目の前に見たこともない地図が出された。

授業で見る日本や世界の地図ではない。

「……なに、これ。」

「ここ周辺の地図だ。」

「それがなんだって言うんだよ……」

またひとつ、大きなあくびをするとリボーンが「あほか。」と言ってツナの頭を叩いた。

「いっ、痛いな！なんで叩くんだよ！」

「てめぇがあほだからだろ。」

ふんっ、と鼻を鳴らし、さも自分は悪くないと言うかのような態度

をとる。

そんなリボーンに少しいらつきを覚えながらも、ツナは再び地図を見た。

地図には山ばかりで、所々に川などがあるのみだ。

（…この地図がなんだって言うんだよ本当に……）

あくびを噛み殺して、ツナは地図の下の方を見た。

……ゾワリ

「、！！」

突然身体中を走った悪寒に、ツナは身体を強張らせる。

おそるおそる地図の下部分を見つめる。
そして、地図上を指先をたどらせてみる。

……ゾワッ！

「っ、わぁ！！？」

ツナは声を上げて地図を落としてしまった。
その過剰な反応を見てリボーンとオスカルが眉をひそめる。
オスカルが床に落ちた地図を拾い上げ、ツナに問うた。

「どうかしたのかい？顔色が悪いけど……」

「…いや、あの……」

ツナが戸惑いながら地図を見る。
すると、頬を冷や汗がつたった。

（今の感じって……）

驚きと戸惑い、緊張や焦りなどの感情が次々とツナを襲う。

今でも、かすかに残る悪寒。

それは確かに、

（さっき感じた……嫌な感じだ…）

先程廊下で感じた悪寒。

それを今、地図に触れて感じたのだ。

「…どこに触れて、悪寒を感じたんだ?」

今だ顔が青ざめているツナに、リボーンが静かに問う。

ツナは震える手をゆっくりと動かし、ある場所を指差した。

その瞬間、リボーンとオスカルは驚愕した。

ツナが指差したのは、先程リボーンが何か匂うと言った場所、つまり洞口だった。

しかもただの洞口ではない。

魔物が封印されているという、あの洞口だった。

標的１６３　帰国

「ここから悪寒がするんだな」

「う、うん……」

リボーンに問われ、怖ず怖ずとツナは頷く。

まだ身体に残る悪寒。
それは神経をも麻痺させるような、忌ま忌ましいものだった。

わけもわからないツナは、二人に問うた。

「あの……ここにはなにかあるんですか…？」

すると、リボーンとオスカルは押し黙った。
なにやら複雑な表情をしている。

ツナは二人が話すのをじっと待ち続けた。
せかすわけでも、促(うなが)すわけでもなく。

そして間もなくしてオスカルの口が開いた。

「…これは、まだ確かめていないから…確証はないんだけど、ね…」

オスカルは何やら苦笑いをして、カップに紅茶を注いでいく。

そしてそれをツナに差し出し、資料と地図を取り出した。

「……昔、」

静かに、淡々とオスカルは語りだした。

ところかわって並盛。

ぎらぎらと照り付ける日差しの下、一人の男と一人の少女は歩いていた。

「…あ、あつい……」

「日本はあついですね…イタリアの方がまだ涼しかったですね……」

蜃気楼の見える道路の上で、イタリアから帰国した結加（ゆいか）とロンジは暑い暑いと言いながらも足を進める。

つい先程、帰国した二人は居候（いそうろう）している沢田家に戻った。

だが、そこにはツナ、リボーン、トンノはいなかった。

居間でくつろいでいたリーダーに問うと、

「あ?あぁ、あいつらな、オスカルの研究所に合宿しに行ったぞー」

とだらしなく答えながら二人に一枚の紙を手渡した。

その紙には、こんなことが書かれていた。

チャオっす！二人ともイタリアから帰国したみてぇだな。

お前ら二人が何で呼び出されたかは知らねぇが、とにかくこの紙を見たら指示通りの場所に来てくれ。
オレたちは今、あのＯｓｃａｒ　Ａｃｃａｒｄｏ（オスカル・アッカルド）の研究所にいる。
理由はあとで話すが、ひとまず来い。
数日分の荷物も持ってこい。

地図を書いておいたが、それは誰にも見せるなよ。

リボーン

「オスカルって…あのマフィアの間で有名な学者さんだよね？綱吉くん、結局研究に付き合うことになったんだね…」

「そうですね…それにしてもまとまりのない手紙ですね……」

手紙をたたみ、ロンジは苦笑いをした。
そしてリボーンの言うとおりにオスカルの研究所に向かうために、まずは荷物をまとめようと立ち上がる。

「……あなたは行かないのですか、リーダーさん。」

「んあ、あーオレはまだ呼ばれちゃいねぇからな。リボーンが呼んだら来いって言ってたからまだ行かなくていいんだろ。」

大きくあくびをしながらそう答えると、「喉渇いたなー」とだるそうに起き上がり台所へと向かった。

すると、そのときはじめて家にリーダーしかいないことに気付く。

耳をすませるが、子供の声も何も聞こえない。

おそらく買い物にでも出かけているのだろう。

「結加(ゆいか)さん、荷物をまとめ次第、すぐに向かいましょうか」

「うん、わかった！」

結加(ゆいか)は笑顔で答え、２階へと駆け上がっていった。

あらかじめホテルに戻り偶然にも荷物をまとめていたロンジはソファで一休みしようとシャツをくつろがせた。

そんなこんなで、結加（ゆいか）とロンジは荷物を持ち炎天下の中足どり重く歩いているのである。

（ホテルに戻って荷物をまとめておいてよかった…こんな暑さの中無駄な距離は歩きたくないですからね……）

額の汗をぬぐい、ロンジはため息をつく。

目線を落とすと、結加（ゆいか）は暑そうではあるが元気に鼻歌を歌いながら歩いている。

若さってすごいなあ、と呟き年寄りにでもなったような気分になり、ロンジは空を見上げた。

そして、ふとあることを思い出した。

（……そういえば、）

「結加（ゆいか）さん、九代目から渡された……あれはどうしたのです？」

「…あ、あれ？」

鼻歌をやめ、結加（ゆいか）は暑さにも負けない笑顔で問いに答えた。

「ちゃんと持ってきたよ！」

「そうですか。はじめて見たときわたしも驚きましたが…綱吉様たちも驚いてしまうかもしれませんね。」

「えへへ、綱吉くんたちびっくりしてくれるかな！」

楽しそうに笑む結加（ゆいか）を、微笑ましく思いながらもロンジはもう一度空を見る。

照り付ける太陽はひたすら眩しく、けたたましいのは蝉の声。

ロンジは深呼吸をして、笑みを残しながら足を進めた。

これから起こる恐ろしいことなど、知るよしもなく。

標的１６３　帰国（後書き）

台風がきてますが…みなさま大丈夫でしょうか。

わたしの住む愛知県は朝からやばいらしいですが…みなさまお気をつけてくださいね！

読んでいただきありがとうございました！

標的１６４　体験談

君は知っているかい？
迫っている危機を。

君はわかっているかい？
その身に起こることを。

君は、なにがあっても、
自分を保っていられるかい？

さあ、これからだ。

悪夢の予兆を、楽しむがいい。

「……と、言うわけなんだけど。」

パタン、と資料が閉じられオスカルがツナの顔をうかがう。

今までツナは、悪寒の原因の可能性があるとされる洞口についてや、この地域に伝わる物語などをオスカルから聞いていた。

聞き終わった今、ツナは頭の中で内容を整理しようと必死だった。

魔物、星守石（せいしゅせき）、僧……

様々なことが頭の中をぐるぐるとまわり、さらにツナを混乱させた。

そんなツナを見て、オスカルは苦笑いをし、リボーンは呆れたと言うかのようにため息をついた。

「…難しかった、かな？」

「あっ！いえ…そういうわけじゃ……なくもない…です。」

「結局難しかったんじゃねぇか。」

やれやれ、とわざとらしく肩をすくませるリボーンに多少の反抗を覚えながらも、ツナは再び内容を整理しようと頭の中で連想させる。

理解しようと必死なツナを見てオスカルは思わず吹き出し、それにツナは恥ずかしさを覚えた。

「資料と地図を見たほうがわかりやすいと思うよ。これ、好きに見ていいから。」

「あ、ありがとうございます…。」

オスカルに資料と地図を手渡されたツナは苦笑いをして礼を述べる。

ぺらり、と資料をめくれば思いのほか字数は少なく、ところどころにイラストや写真が掲載されており、読みやすい。

これなら大丈夫そうだ、とツナは資料に目を通していった。

「……なぁ、オスカル。」

「なんだい、リボーン。」

ツナが資料に没頭しているあいだ、リボーンがオスカルに話しかけた。

「おめぇは、その洞口に行ったことはねぇのか?」

「うーん…行ったことはないなぁ……」

眉をひそめて、オスカルは答えた。
だが、すぐに「でもね、」と言葉を付け足す。

「その周辺に行ったことのある人の話は聞いたことあるよ。」

「…聞かせろ。」

静かにリボーンはその話の先を促(うなが)した。

この近くの街に住むある年老いた男は、登山家でよくこの先の山を登っていた。

一人では物寂しいもので、いつも愛犬を連れて山に行っていた。

ある日、いつものようにその山を登っている途中、愛犬が騒がしく吠えはじめたのだ。

一体何事かとその男は思った。

どうやら愛犬はある方向を向いて吠えている。
ただ、その方向を見つめて。

不思議に思ったその男は、愛犬が吠える方向に歩きだした。

歩けど歩けど愛犬の吠える声は止まない。
逆にそれはけたたましさを増している。

しばらく歩くと、突然愛犬が吠えるのをやめた。

どうしたのだろうと愛犬を見ると、愛犬は身体を震わせ、何かに怯えているように見える。

その先に進もうとしても、愛犬が頑(かたく)なに拒むのだ。

仕方ない、と男は愛犬を繋ぐリードを近くの木に巻き付け、一人で先へと進んだ。

次第に薄暗くなる道。
ただ風が吹くだけで、鳥の囀(さえず)りなどはまったく聞こえない。

不気味に思いつつも男は足を止めない。
恐怖よりも好奇心の方が勝(まさ)っていたのだ。

すると、ぞわりと背中をなぶるような寒気を感じた。

それを疑問に思いながらも、男は前に進もうと足を踏み出そうとする。

だが、それは叶わなかった。

足が、まるで金縛りにあってしまったかのように動かないのだ。

どれだけ足を動かそうとしても、足はぴくりとも動かない。

それに焦りを感じた男は必死に金縛りをとこうともがいた。

突然、金縛りがとけて不意をつかれた男は地面に倒れ伏してしまった。

痛みに顔を歪めながらも目線をあげると、目の前には大きな洞口があった。

それを見た瞬間、男は言い表せないような恐怖に襲われたという。

何を見たわけでもない、何をされたわけでもない。

ただ、視界に洞口が入っただけなのに。

頭の中でサイレンが鳴り響く。

本能が男に告げる。

“逃げろ。”と。

男は必死に逃げた。

足の動く限り、遠くへ。

途中、男はあることに気付く。

よく見れば、道には動物が倒れ伏していたのだ。
それはぴくりとも動かない。
そう、死んでいるのだ。

さらに恐怖を覚えた男は速度をあげた。
来た道をひたすらに戻った。
ただ、あの洞口から離れたくて。
一心不乱に走りつづけた。

息も絶え絶えになってきた頃、聞き慣れた鳴き声が耳にはいってきた。
見ると、愛犬が尻尾を振ってこちらを見ていたのだ。

その姿を見て安堵した男は、無意識に泣いていた。
ぽろぽろと涙が溢れてきた。
それを止めることはできなかった。
しばらくの間、男は愛犬を抱きしめてその場にうずくまっていた。

それから男は、その洞口の方向には近づかなくなった。

いや、近づけなかった。

もう二度と、あのような恐ろしい体験はしたくない。

生きた心地のしない、あんな体験など。

それから何日か経って、男は足に違和感を感じはじめた。

最初は気のせいかと思っていたが、日に日に足が重くなっていく。

なんだろう、と男が足を見ると。

その足には、大きな痣ができていた。

まるで、何かが掴まっているような。

1975

標的１６５　連行

オスカルが語ったのはある男の体験談。

それはあの洞口を実際に見たというもので。

話を聞き終わったリボーンの第一声は、

「ホラーか。」

という冷めたものだった。

「足に掴まれたような痣だなんて、ただのホラーじゃねぇか。」

「確かにホラーみたいだけど…もっと他に言うことないの？」

苦笑いをして聞くオスカルに、リボーンはきっぱりと「ない。」と答えた。

ひとつため息をつき、オスカルはツナの方を見る。

するとどうやらツナも今の話を聞いていたらしく、こちらを見て少

々青ざめていた。

顔色が良くないのが気になったが、オスカルはツナに問うた。

「綱吉くんは、今の話を聞いて何か思ったことはある？」

すると、ツナは小さく頷いてこう答えた。

「…ホラーみたいですね。」

オスカルはついに苦笑いから無表情にかわってしまった。

表情をつくることもできなくなった。

この話を聞いて、もっと他に思うことはあるだろうに。

何故二人そろって「ホラーみたいだ。」などと言うのだろうか。

そんなオスカルを、プロメッサだけが理解できた。

ああ、呆れているんだな。

そう思いつつもプロメッサはオスカルを見つめていた。

そして次第にオスカルが憐れに見えてきたので、プロメッサは慌ててオスカルに質問をした。

「あ、あのさっ、途中で動物が死んでたって言ったよね？それってどういうことなの？」

「…え、ああ、えっとね……」

無表情だったオスカルが少しだけ微笑んだ。

質問をされ、表情が柔らかくなったオスカルを見てプロメッサは安堵のため息をつく。

「わたしもそれを疑問に思って聞いたんだけどね、わからないって言うんだ。多分逃げるのに必死だったから原因を突き止めようとも思えなかったんだろうね。」

「オスカルはその原因について何も調べてないの？」

「残念ながらね。でもそろそろ調べようかなと思っていたところなんだ。」

オスカルはソファから立ち上がり、服のしわを直す。
そして壁に掛けてあった重たそうなかばんを背負った。

「…え、まさか今から調べに？」

「そうだけど……」

そんな唐突な。とプロメッサは唖然としてしまう。
たった今話を聞いたばかりなのに、それはあまりにも突然すぎるのではないか。

だがオスカルにしてみればその話は随分前に聞いたことであり、調べに行くのには期間が空きすぎていると思っているのだろう。
そう考えるとオスカルの行動はまったくおかしくない、とプロメッサは納得した。

「すぐに帰ってくるのか。」

ずっと黙っていたリボーンが口を開く。

オスカルは考えるしぐさをして、首を傾げながら答えた。

「時間はかかるかもなぁ…何せ山の洞口だしね。荷物は重いし。」

背負っているかばんを揺らしてみせると、かばんがガチャン、と音をたてた。

リボーンは「ふん」と鼻を鳴らし、にやりと怪しい笑みを浮かべる。

そしてリボーンは床に飛び降り、ツナの方を振り返った。

「じゃあ、オレたちも行くぞ、ツナ。」

「は!?なんで!」

「その洞口がどんなものか気になるだろ。それに動物の変死についても原因を知りてぇじゃねぇか。」

「オレは気にならないし知りたくない!」

ツナは必死に行くことを拒む。

洞口から結構距離があるこの場所でも、地図を見るだけでも悪寒を感じるのだ。

現場に行けばどうなることか。

それを恐れてツナはひたすらに拒んだ。

だがこの赤ん坊はかなり強引だ。

ツナの言葉には耳を貸さなかった。

「よし、行くぞ。」

リボーンは赤ん坊とは思えぬほどの力でツナの足を引っ張る。

そのあまりの力にツナは敵わず、転びそうになりながらも連行されてしまった。

「本当にいいのかい？」

オスカルが心配そうに聞くが、リボーンは「問題ねぇぞ。」ときっぱりと答えた。

それにツナが否定の言葉を投げつけるがやはりリボーンは無視をしたままツナの足を引っ張りつづけた。

「…行きたくない……」

ぽつりと呟かれた言葉は、虚(むな)しくも森に消えていった。

オスカルの研究所から無理矢理連れ出されたツナは研究所の入り口で大きくため息をつく。

だがそんなツナにお構い無しにリボーンは洞口へ行く道を確認していた。

「綱吉くん、大丈夫かい？」

「本当に行ってもいいの？」

オスカルとプロメッサがツナを心配して声をかける。

ツナは「もういいです。」と落胆しながらも答えた。

どうせ今抵抗したってあの赤ん坊に連れていかれるのだ。

だからツナはすでに諦めていた。

はあ、と何度目かのため息。

その直後、ツナは何かを感じた。

ピクリ、

後ろから視線を感じたツナは振り返って辺りを見回す。

だがなにもない。

ただ森が広がっているだけだ。

気のせいだろうか、とツナは首を傾げる。

だが、それは気のせいではなかった。

ガサガサッ！

「っ、何…！？」

茂みが音をたてて揺れた。
風など吹いていないのに。

ツナはその茂みをただ見つめる。
その方向は視線を感じたところであった。

ガサガサガサガサ

不気味に動く茂み。
ツナは身構え、瞬(まばた)きもせず茂みを凝視した。

ガササッ！！

「っ！？」

茂みから何かが現れた。

ツナの目が大きく見開かれた。

叫び声が聞こえたのは、すぐあとのことであった。

標的１６６　謎の物体現る（前書き）

我ながらタイトルのダサさに吹きました。（どうでもいいですね。）

標的１６６　謎の物体現る

「うわあぁぁぁあああ！！？」

森に叫び声が響き渡る。

リボーンとオスカル、プロメッサはその叫び声のした方向を見た。

そこには、仰向けに倒れたツナがじたばたと手足を暴れさせていた。

「どうしたの綱吉くん！」

オスカルが慌ててツナに駆け寄ろうとする。

だが、それより早くオスカルの足元をなにかがすり抜けた。
それは真っ黒な毛並みの子犬の姿をしたプロメッサだった。

「綱吉っ！」

プロメッサが素早い動きでツナの元へと向かう。

もしかしたら、敵に襲われたのかもしれない。
それを警戒してプロメッサは牙を剥き出しにし、鋭い睨みをきかせてツナの傍に駆け寄った。

だが、その警戒は虚(むな)しくも無駄なものとなった。

「……え？」

プロメッサのオレンジの目が丸くなる。

牙を剥き出しにしていた口は間抜けなほどにぽかんと開けられてしまった。

その異変に気付いたオスカルとリボーンもツナの傍に寄る。

そして二人もまた、プロメッサと同じように呆気にとられてしまった。

「……なんだこいつは。」

リボーンがぽつりと言葉をこぼす。

地面には倒れているツナ。

その顔は唖然としている。

そしてツナの上には、何やら白いものが。

顔、四本の足、胴体、尻尾。

その見た目は、いかにも。

「……い、犬……？」

倒れたままのツナがそう言うと、白い犬（のような動物）は「ワンッ！」とけたたましく吠えた。

なぜこんな森に白い犬（のような動物）がいるのだろうか。

迷い込んだ飼い犬か。

それとも捨てられたのか。

ツナたちは白い犬（のような動物）の出現に驚いていた。

すると、ガサガサ、と茂みが揺れた。

ツナは倒れながらも身構え、リボーンたちも同じように警戒する。

ガサガサガサガサッ

ガサガサガサガサガサッ！！

ガササッ！

「っ！」

ひときわ茂みが大きく揺れたあと、茂みから何者かが姿を現した。

空気がさらに張り詰める。

…と思われた。

「……は？」

「……あ？」

「……え？」

「……お？」

上からツナ、プロメッサ、オスカル、リボーンの声だ。

敵の出現と思っていたツナたちは拍子抜けしてしまった。

なぜなら、茂みから現れたのは。

「……あれっ、綱吉くんにリボーンさん！」

毛先に少しくせのある茶髪の少女、結加（ゆいか）だったからだ。

「んなっ、ゆ、ゆい、結加（ゆいか）ちゃん!?なんで!!?」

「つ、綱吉くんこそなんで地面にねっころがって…あ!!」

ツナを見てぽかんと口を開けていた結加（ゆいか）は、次にツナの上に乗っている白い犬（のような動物）を見て目を見開いた。

そして慌ててツナに駆け寄り、尻尾を振る白い犬（のような動物）を抱き上げた。

「こんなとこにいたの!?だめじゃない、勝手に一人でどこかに行って!あなたすぐ迷子になるんだからっ」

白い犬（のような動物）を抱き上げた途端、結加（ゆいか）は白い犬（のような動物）を叱り付けはじめた。

それにツナたちは再び呆気にとられた。

突然ツナに白い犬（のような動物）が飛びつき、茂みから結加（ゆいか）が現れ、その白い犬（のような動物）に説教を始めてしまったのだ。

状況に追いつけない。

今、何が起きている?

そんなことは、誰もわからなかった。

「あなたはいつも一人でお散歩してすぐ迷子になってるでしょ？なのになんでそれを繰り返しても懲りないの！寂しくて怖くて情けない声出して助けを求めるくせに！心配するこっちの身にもなってよね！まだ理解できないようなら今度から首輪を、」

「あのっ、結加（ゆいか）ちゃん！！」

止まない結加（ゆいか）の説教をツナが止める。

きょとんとする結加（ゆいか）と叱られて耳を垂らす白い犬（のような動物）。

説教が止まったのを見てツナは結加（ゆいか）に問うた。

「…あのさ、その動物、何？」

ツナが白い犬（のような動物）を指差す。

すると先程とは打って変わって結加（ゆいか）は笑顔でツナの質問に答えた。

「えーっと、この子はｐｒｅｃｅ（プレーチェ）。ホワイトオオカミの子供でーす！」

そう言って結加（ゆいか）は白い犬（ではなくホワイトオオカミの子供）をツナたちに見せるように抱き上げた。

垂れていた耳はぴんっと立ち上がり、「ワン！」と元気良く一声鳴いた。

「……お、おおかみ？」

ツナたちはますます状況がわからなくなり首を傾げるしかなかった。

突然のホワイトオオカミの登場。

それはさらにツナたちを混乱させるものとなった。

標的１６７　所以（ゆえん）

「……お、おおかみ？」

「そう。でもただのおおかみじゃなくてホワイトオオカミ！」

ツナたちの目の前には、尻尾を揺らしてこちらを見つめるホワイトオオカミと、それを抱きかかえている笑顔の結加（ゆいか）が。

突然の動物と人間の登場にツナたちは驚いていた。

「…えーっと、」

苦笑いをしながらツナは状況を整理しようと結加（ゆいか）に問うた。

「な、なんで結加（ゆいか）ちゃんがここにいるのかな…？あとこの、ホワイトオオカミって…何者？」

「あー、わたしがここに来たのはリボーンさんに呼ばれたからで…あ、呼ばれたのはわたしだけじゃないの。もう一人いるの。」

「は？」

状況を整理するために質問をしたのに、さらにツナの頭は混乱してしまう。

結加（ゆいか）がここにいるのは、リボーンに呼ばれたから。

だが呼ばれたのは結加（ゆいか）だけではないのだと言う。

他に誰が呼ばれたのだろうか。

それに、なぜリボーンはここに結加（ゆいか）を呼んだのだろうか。

ますますわけがわからなくなり、ツナが首を傾げていると、背後から「あ。」という誰かの声が耳に入った。

後ろを振り返ると、真夏なのに真っ黒なスーツをしっかりと着こなしている青年、ロンジが茂みから現れた。

「ロ、ロンジさん！！」

「お久しぶりです綱吉様。お元気でしたか？」

涼しげな笑顔でロンジはツナに挨拶をする。

ロンジの格好は見ているこっちが暑く感じてしまうほどであったが本人は平然としている。

暑さを感じないのだろうか、と誰もが思ったがあえて誰も口には出さなかった。

「なんでロンジさんまで…あ、結加(ゆいか)ちゃんが言ってたもう一人ってロンジさんのことか！」

やっと謎がひとつ解けた。

リボーンが呼んだのは結加(ゆいか)とロンジの二人だったのだ。

だがしかし、まだいくつか謎は残っている。

「じゃあ、なんで二人はここに呼ばれたんですか？」

「それがわたしたちにもわからなくて…リボーン様に一言“ここにこい”とのご指示が書かれたメモを渡されただけですので。」

ロンジはすみません、と苦笑いをして謝る。
結加（ゆいか）とロンジがここに呼ばれた理由は、二人も聞かされていないらしい。
ということは。
「リボーン、なんで二人をここに呼んだんだよ！」
ツナは小さな赤ん坊に視線を落として問う。
するとリボーンは表情を変えずにこう言った。
「まあ、こんなところで話すのもあれだ。一回中に入るぞ。」
そしてリボーンはさっさと階段をおりていく。
ツナたちはその後ろ姿をぽかんとしながら見つめていた。
「……洞窟は、見に行かなくていいのかな？」
「さあ……」

洞窟を見に行くつもりで外に出たのに、とんだ無駄骨だ。

オスカルとプロメッサは本来の目的を果たせず少々不満ではあったがリボーンの後についていった。

結加（ゆいか）とロンジは例の洞窟のことなど知るよしもないので、二人がなんのことを言っていたのかわからなかった。

そんな中、ツナは洞窟に行かなくて済んだという安心でひとつため息をついていた。

「はい、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「わざわざすみません。」

オスカルに紅茶を入れてもらい、結加（ゆいか）とロンジは礼を述べる。

おかしな対面を果たした三人ではあったが、それぞれ自己紹介をしていた。

少しずつではあるが三人は打ち解けてきたらしい。

「リボーン、なんで結加(ゆいか)ちゃんたちを呼んだんだよ。」

ツナが再びリボーンに問う。

一人だけコーヒーを口にしていたリボーンは、カップを置いて質問に答えた。

「二人に今のオレたちの状況を説明するためと、結加(ゆいか)には技の上達、ロンジにはまわりの世話をしてもらいたいからだ。」

「技の上達と、まわりの世話？」

その意味があまりわからず、ツナは言葉を繰り返す。

リボーンはそれに頷くと話を続けた。

「結加(ゆいか)には“光玉(こうぎょく)”というものが使えるが、あまり使いこなせてないだろう。だからここで実践を加えて修行してもらう。

ロンジには、ツナたちのサポートも兼ねて今まで通り世話をしてもらいたい。」

リボーンが視線を結加とロンジにうつすと、二人は笑顔で「はい。」としっかり答えた。

そのために二人は大荷物を抱えていたのか、とツナも納得した。

そして、ツナはもうひとつの疑問を思い出し、次は結加に問う。

「それで、あの…そのホワイトオオカミって結加ちゃんのペットなの？」

ツナは結加の膝の上で大人しくしているホワイトオオカミを指差す。

ホワイトオオカミは首を傾げてツナをじっと見つめていた。

「うん、この子はわたしの家族みたいなものかな。日向井家には、昔からホワイトオオカミを飼う習慣があってね、この子は6代目なんだよ。」

日向井、とは結加の名字である。

結加の話によると、先祖代々ホワイトオオカミを使役していたという。

その発端は謎に包まれているらしいのだが、結加(ゆいか)が生まれた時にはもうこのホワイトオオカミのｐｒｅｃｅ(プレーチェ)はいたらしい。

それから十四年間、結加(ゆいか)の傍にはプレーチェが常にいたのだ。

「生まれた時からいたのに、なんでこんな小さいままなんだ?」

「それはわたしもわからなくて…お母さんの残してくれた手紙に理由が書かれてるんだけど、文字が色あせてしまっているのか読みにくくて……」

結加(ゆいか)は困ったような表情をして真っ白な封筒を取り出す。

封筒にははっきりと“結加(ゆいか)へ”と書かれているのだが、中を見ると確かにうっすらと文字が綴(つづ)られていた。

リボーンがそれを受け取り、目を凝らしてみるがやはり読めないらしい。

「……おそらく、他人に知られてはいけないことなのかもな。」

「そうかも知れない…。昔お母さんが言ってたの。このホワイトオオカミは珍しいものだから気をつけるようにって。」

結加（ゆいか）がプレーチェを抱えて見つめる。

プレーチェは「ワンッ」と一声鳴いて尻尾を大きく揺らした。

すると、不意にプレーチェがツナの方を見る。

ツナはわけもわからずプレーチェと目があったまま固まってしまった。

「プレーチェ、綱吉くんと遊びたいの？」

プレーチェの視線がずっとツナに向けられていることに気付き微笑んだ。

ツナを見つめ尻尾を振りつづけるプレーチェ。

それはただツナと戯（たわむ）れたいという意思表示なだけだろう。

その場にいた誰もがそう思った。

しかし、ツナだけは違った。

その青く光る瞳が、何かを訴えているように見えた。

2006

標的168　脱走

God who protects my family.
A white, beautiful coat of fur.
Blue, clear eyes.

The state to hangs wind seems
to be totally God.

A white wolf.

Eternally with us.

気付くのは、いつ?

「ここが、結加ちゃんとプレーチェの部屋だよ。」

「わざわざありがとうございます、オスカルさん！」

結加が笑顔で礼を述べ、部屋の扉を開ける。

それと同時にプレーチェが結加の腕の中から飛び降り、シンプルな部屋のつくりと家具をぐるりと見回す。

白くふさふさとした尻尾が大きくせわしなく揺れている。

早くもこの部屋が気に入ったらしい。

「しばらくここにお世話になるからね、プレーチェ。」

そう言うとプレーチェは「ワンッ」と一声鳴き、また尻尾を揺らした。

長旅で疲れた結加（ゆいか）は、ベッドに寝転がりひとつため息をつく。

不意に襲ってきた睡魔に抵抗することもなく、結加（ゆいか）は重くなったまぶたをゆっくりと閉じた。

それをプレーチェはおとなしく見ていた。

小走りでベッドに寄り、結加（ゆいか）の顔をそっと疑う。

結加（ゆいか）は寝息をたてて寝てしまっていた。

すると、プレーチェはベッドから離れて部屋の扉の隙間から廊下に飛び出す。

あたりをきょろきょろと見回し、鼻をすんすん鳴らしながらプレーチェは走り出した。

ガウンッ　ガウンッ　ガウンッ

バシュッ　バシュッ　バシュッ

広い部屋の中には、オレンジの炎が素早く動き回っていた。

火の粉が舞い散り、頬をなぶるのは己の炎から発せられる熱。

その熱さと激しい動作により、汗がぽたりと床に落ちた。

「ラストスパートだぞ。」

そう言ってにやりと笑んだリボーンは銃口を宙を舞うツナに向け引き金を引いた。

ガウンッ　ガウンッ　ガウンッ

目に見えぬ速さで放たれた弾は全てツナの姿をとらえている。

凡人であれば撃たれてしまうだろう。

しかし、ツナは凡人ではない。

（……いけるか。）

ツナは掌（てのひら）を前にかざし、力を込めた。

バシュンッ！

グローブからオレンジの炎が放たれた。

それはすぐにいくつかにわかれ、きらきらと輝いて銃弾を包み込んだ。

…ピキ、

その瞬間、銃弾を包み込んだ炎が音をたてて色を変えていく。

ピキピキピキピキ！

炎は石へと姿を変え、銃弾のスピードをなくしてしまった。

そしてそれは銃弾としての力を失い、カツンと床に転がり落ちた。

「……まあ、いいだろう。」

にやり、と赤ん坊が笑う。
手に持っていた銃をおろし、それはすぐにカメレオンの姿へと戻った。

ツナは肩を上下させ、汗をぬぐう。

放たれた銃弾を炎で捕らえて、それをＢａｒｂａｚｚａｌｅ　ｄｉ　ｃｉｅｌｉ（バルバッツァーレ・ディ・チェーリ）で無効化する。

そんなことを先程から何度か繰り返していた。

リボーンによると、瞬発力と物事を見極める力を鍛えるためなのだとか。

だが、これには集中力をかなり酷使してしまったようだ。

「……疲れた。」

はあ、とため息をついてツナは床に足をつく。

2012

いつも凛としている超死ぬ気モードの表情には疲労が滲んでいた。

「しばらく休憩していいぞ。」

「…ああ。」

短く返事をして、ツナはかたい床に腰をおろす。

途端に疲れが身体を遅い、力を抜けば超死ぬ気モードがとけてしまいそうなほどだった。

「…疲れた。」

ぽつりと呟き、ツナはまたため息をつく。

すると、なにやら背後に何かの気配を感じた。

この部屋にはツナとリボーンしかいない。

獄寺と山本は個室で寝ているし、結加(ゆいか)ももちろんいない。

オスカルとプロメッサは自室で作業をしており、トンノは治療室にいる。

だとすると、侵入者か。

ツナはゆっくりと背後をふりむく。

しかし、そこにいたのは。

「ワンッ！！」

「…プレーチェ？」

そこにいたのは、侵入者ではなく、白い毛並みのオオカミのプレーチェだった。

プレーチェは尻尾を振り、きらきらと青い瞳を輝かせている。

「…どうしたお前。何かあったのか？」

ツナはプレーチェを抱え、顔を覗き込む。

だがプレーチェはオオカミであり、人間の言葉は話せない。

もちろん、ツナはプレーチェの考えていることなど解せるはずもないのだ。

「…オオカミの言葉がわかったらな。」

苦笑いをしてツナはプレーチェの頭を撫でる。

すると、プレーチェがすんすんと鼻を鳴らしはじめた。

その行動をツナは黙って見ている。

何か匂いでもするのだろうか。

試しに腕の匂いを嗅いでみるが匂いはまったくしない。

嗅覚のすぐれている生き物にしかわからないのだろうか。

ツナが首を傾げていると、プレーチェはツナの額に燈る炎に鼻を近づけた。

「…っ、危な、」

火傷をしたらどうするんだ、とツナはプレーチェを炎から離そうとするが、プレーチェは抵抗をする。

そしてプレーチェは、ツナの阻止を振り払いその勢いで真っ白な額

と炎をくっつけてしまった。

「っ！」

やばい、とツナは焦り目を見開く。

だがプレーチェは悲鳴も出さず、動かない。

ジュワ……！

その瞬間、プレーチェから光が放たれた。

あまりの眩しさにツナとリボーンは目を閉じた。

God who protects my family

A white, beautiful coat of fur

Blue, clear eyes

The state to hangs wind seems

to be totally God

A white wolf

Eternally with us

気付くのは、いつ？

2017

それは、すぐ間近に。

2018

標的１６８　脱走（後書き）

しばらく放置してしてごめんなさい！

更新しようとは思ってたのですが、学校から帰ってきたら勉強したりしてそのまま寝てしまったりと…タイミングを逃してました。

ほんとにごめんなさい！

今は考査期間中なのでまた更新がとまると思います。

二週間後には推薦入試を控えているので、満足に更新はできないかと。

ほんとにすみません！

読んでいただきありがとうございました！

2019

標的１６９　狼の異変

契約を交わそう。
それはずっと続く契約。
わたしがお前を守るから、
お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。
お前の子孫をわたしの子孫が守るから、
お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。

2020

「っ、プレーチェ！？」

目を腕で覆いながらツナはプレーチェを呼ぶ。

だが光は止まず、応答もない。

プレーチェがツナの額に燈る炎に触れた途端、プレーチェからまばゆいほどの光が発せられた。

その原因はわからない。

なぜ、プレーチェから光が発せられているのかツナにもリボーンにもわからなかった。

「、プレーチェ、プレーチェ！」

「ツナ、どうなってんだ。」

リボーンが冷静に問うが、何も知らないツナにはどう答えればいいのかわからない。

「わ、わからない…プレーチェが、オレの炎、に、触れたら……」

ツナはとぎれとぎれに答え、まだおさまらない光に目を細める。

“……La guarnizione e、stata risolta”

「、なん…だ……？」

突然聞こえた声。

それは今までにまったく聞いたことのないもの。

だが、とても優しい声色。

「……な、にが…」

どうなっているんだ。

その言葉を紡ぐこともできず、ツナとリボーンは光にのまれた。

我が家系を守る神

白く美しい毛並み

青く澄んだ瞳

風にたなびくその様子は、まるで神のようである

ホワイトオオカミ

永遠に我らと共に

“契約を交わそう。”

“契約？”

“そうだ。

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

2024

さあ、契約を交わそう。”

“わかったわ。

だから、約束よ。

ずっとそばにいて。”

それは昔に交わされた。

幸せな、哀しい契約。

それは昔に交わされた。

嬉しくも、はかない約束。

2025

「……うっ……」

重たいまぶたがあがり、オレンジの瞳がのぞく。

どうやら気を失っていたらしい。

ゆっくりと重たい身体を起こし、あたりを見回す。

先程の光はおさまっている。

隣にはリボーンが倒れているが、帽子の影で表情をうかがうことはできない。

大丈夫か、とツナがリボーンに声をかけようとすると、反対側から何かに服を軽く引っ張られた。

そちらに視線をうつすと、ツナの目が大きく開かれた。

白い毛並みをした子犬ほどの大きさのオオカミ。

その青い瞳はまっすぐとツナの姿をとらえている。

だが、先程とはまったく異なるところがあった。

「……なぜ、額に模様が…？」

ツナの視線の先。

プレーチェの真っ白な額に、不思議な模様が浮き出ていた。

筆で綴（つづ）ったような、見たことのない模様。

何が、起きているんだ。

超死ぬ気モードのツナの頭でも冷静に考えることができないでいた。

しかし、混乱に支配されているツナをさらに混乱させることが起きた。

“……封印は解かれた”

「、この声…っ」

耳に届いた声、それは光にのまれる前に聞いたものだった。

標的１６９　狼の異変（後書き）

お久しぶりですゆか空です。

やっと考査がおわりました！

これで更新ができるー！と舞い上がりかけましたが、来週推薦入試ってことを思い出してテンション下がりました。

まだ…毎日更新できない…ｏｒｚ

てことでまた消えます。どろん！↑

こんな更新もできない小説でごめんなさい…！

読んでいただきありがとうございました！

標的１７０　封印は解かれた

“……封印は解かれた”

何処からともなく聞こえたのは優しい声。

先程聞いた、誰かの声。

“封印は、解かれた。”

“……La guarnizione è stata isolta”

「……なんだ…」

何が起きているんだ。

ツナは少し目を見開いて、隣で倒れているリボーンと目の前にいるプレーチェを交互に見遣る。

普段のツナならおかしな叫び声を出してパニックに陥っているはずだろう。

「…おいリボーン、大丈夫か?」

ツナがリボーンの身体を小さく揺らして呼びかける。

だがリボーンは起きる気配がない。

そして次にツナは目の前にいるオオカミ、プレーチェを見た。

さっきまではなかった、額の不思議な模様。

よく見れば、それは太陽にも似ている。

なぜいきなり額に模様があらわれたのだろうか。

ツナが神妙に驚いていると、プレーチェが顔をツナの手に押し付け

てきた。

「…どうした？」

少し声を揺らしてツナはプレーチェを見る。

プレーチェの青く澄んだ瞳が、きらりと輝いた。

“……沢田綱吉様”

「…！？」

聞こえたのは、先程も聞いた優しい声。

その声は、確かに今ツナの名前を呼んだ。

ツナはその声の主を探し、辺りを見渡す。

だが、誰もいない。

“…綱吉様、わたしです。こちらですよ。”

優しい声はすぐ近くから聞こえる。

後ろではなく、横でもなく、上でもなく。

ツナは声のする方を、前を、下をゆっくりと見た。

「……プレーチェ？」

“はい。わたしです綱吉様。”

プレーチェはふさふさと尻尾を揺らして答えた。

「……へっくしょい！」

静まり返った部屋に突然おかしなくしゃみが響いた。

お世辞にもかわいらしいとは言えないくしゃみの主は、己のくしゃみに驚いて目を覚ました。

「…あれ、寝ちゃったのかなわたし……」

ひとつあくびをして、結加（ゆいか）は辺りを見渡して呟く。

しばらく寝ぼけたままほうけていると、ある姿がないことに気付いた。

「……プレーチェ？」

結加（ゆいか）はプレーチェの名を呼ぶが、応答はなく部屋は静まり返っている。

いつもなら名前を呼べば一声鳴いて、尻尾を振って駆け寄ってくるはずなのだが。

「プレーチェ？おーい、プレーチェ！」

ベッドから降り、机や椅子の下、クローゼットの中など部屋の隅々を探したがプレーチェの姿はない。

ふと、部屋の入口を見るとしっかりと閉めたはずの扉がかすかに開いていた。

まさか、と結加（ゆいか）は嫌な予感を感じる。

「まさか、また勝手に外に……？」

いくら身体が小さく子犬のように見えても、プレーチェは結加（ゆいか）が生まれた頃から傍にいるオオカミだ。

歳もかなり上だろうし、元気そうに見えるが実は弱ってきているのかも知れない。

それがさらに結加（ゆいか）の不安を煽（あお）った。

顔を青くした結加（ゆいか）は、部屋を飛び出した。

「……プレーチェ…！」

「プレーチェ…お前、話せるのか？」

“いえ、これはテレパシーのようなもので、実際に話しているわけではないのです。”

だんだんと落ち着いてきたツナはプレーチェと向き合い、いくつか質問をしてみることにした。

確かにプレーチェの口は動いておらず、声も自然と脳内に響いている。

「どうしてオレはお前のテレパシーが伝わるんだ？」

“それは、あなたがボンゴレボスになるお方だからです。”

「…ボンゴレボスに？」

プレーチェの言うことの意味がよくわからず、ツナは眉をひそめる。

するとプレーチェは頷き、言葉を付け足していった。

“日向井家が代々、ホワイトオオカミを使役してきたことはご存じでしょう。わたしはその六代目にあたります。日向井家の先祖とわたしの先祖が契約を交わしたのは、今から何百年も前…ボンゴレが

出来た頃とそう変わりません。”

「ボンゴレが…ってことは、ボンゴレプリーモと日向井家の先祖、お前の先祖は何か関係しているということか？」

“そのとおりです。話せば長くなりますが……これはずっと語り継がれてきた、ボンゴレと日向井家、それに使役するわたしたちホワイトオオカミの起源のお話です。”

落ち着いた声で、プレーチェは静かに語りだした。

時々光の反射で輝く青い瞳と白い毛並みがとても美しかった。

ツナはそれに引き付けられるように、プレーチェの語りに耳を傾けた。

標的１７０　封印は解かれた（後書き）

お久しぶりです、ゆか空です。

数日ぶりの更新になりました。
しばらくはこの状態が続きそうです。

感想の返信もろくにできなくて申し訳ございません。

読んでいただきありがとうございました！

標的１７１　記憶？

それは、何百年も前の話。

ある日本人の女性は、イタリアの森に住んでいた。

静かに、ひっそりと。
街から遠く離れた森の中に住んでいた。

生活は貧しくなく、だが裕福でもなく。
つまりは一般的な家庭であった。

その女性には、夫がいた。
同じ日本人で、優しくいつもその女性のことを気にかけている夫であった。

二人は幸せに暮らしていた。
時給自足の生活は苦ではなく、むしろ楽しかった。

女性は夫がいれば、夫は女性がいればそれだけで幸せだったのだ。

ある日、その地域を大雨が襲った。

雨や風は激しく、森は荒れた。

女性は家が壊れないかと心配し、一度外に出て家を確認してみることにした。

扉を開ければ雨と風が女性を襲う。

女性は雨と風に負けまいと踏ん張りながら外に出た。

片手にライトを持ち、あたりを見回す。

すると、女性は木々の間に何かがいるのを見つけた。

何だろう、と女性は恐る恐るそれに近づいていく。

それを見て、女性は驚きで言葉を失った。

それは、真っ白な毛並みのオオカミだった。

しかし、オオカミはぴくりとも動かない。
死んでしまったのだろうかと女性はオオカミにそっと触れる。
とくんとくん、と鼓動が伝わってくる。
どうやら生きているらしい。
それに女性は安堵した。

しかし、よく見るとオオカミの足が倒れてきたであろう木に挟まれている。
女性は急いでその木を退かし、オオカミを抱き上げた。

オオカミは重く、大きい身体であったが女性は諦めずにオオカミを家まで運んだ。

家の扉を開ければ、夫が目を見開いてオオカミを見た。

そして急いでタオルやお湯を用意し、オオカミの身体を綺麗に拭いて温めた。

二人は一晩中オオカミを看病した。
暖をとり、ミルクを与え、手厚く看病し続けた。

そして夜が明けるころ、雨と風は止み雲の隙間から光がこぼれた。

その光でオオカミの毛並みはきらきらと輝き、美しく二人の目に映る。

まぶたを開ければ、その瞳は青く澄んでいた。

しばらく二人は、そのオオカミに魅了され言葉を失った。

なんて、美しいのだろう。

ぽつりと、女性はつぶやいた。

そのオオカミは神々しく、ただのオオカミではないと二人はわかった。

なにかあると、なにかをもっていると、二人はそう思った。

オオカミは前足で身体を起こし、二人に目線を合わせた。

後ろ足は痛々しく包帯が巻かれている。
だが尻尾は動くらしく、ぱたぱたと揺れている。

きらり、と青い瞳が輝いた。

“感謝する、人の子よ。”

突然聞こえた声。
それは美しく優しい声。

“あのままであればわたしは間違いなく死んでいた。助けてくれたことに、心から感謝する。”

深々と、オオカミはお辞儀をする。

二人はぽかんと口を開け、オオカミを見つめているだけだ。

“わたしは、この森の奥にあった千年樹の精霊。昔からずっとこの森を見守ってきた。だが、昨夜の雨と風、そして雷で樹が破壊されてしまったのだ。母体であった樹がなくなってしまう前、わたしは危惧してこの姿となり樹から逃げ出したのだ。母体なくしては、わたしは生きていくことができない。そこでわたしは、倒れた木に挟まれている瀕死状態であったこのオオカミに宿ったのだ。…だが、オオカミは息絶えた。まだこの身体に馴染んでいなかったわたしは、

力を使うこともできずに苦しんでいた。そこに、お前が現れたのだ。
”

オオカミの話を、二人は黙って聞いている。

混乱していた心も落ち着きを取り戻した。

だがその視線はオオカミから一切離れない。

オオカミは続ける。

“あのとき、お前が助けてくれて本当によかった。わたしはお前に礼をしたい。……そうだな。”

オオカミは考えるように首を傾げる。

そして、耳をぴくりと動かし瞳を揺らした。

“……お前、おかしな小僧と知り合いか？”

おかしな小僧?と二人は顔を見合わせ首を傾げる。

人里から離れた森に住んでいる二人には、知り合いはあまりいない。

いるとすれば親戚か昔からの友人だけである。

おかしな小僧と言われるほどの知り合いはいただろうか…と考え込むと、女性が声を上げた。

おかしな小僧。

そう呼ばれてもおかしくない知り合いが、そういえばいた。

“…おかしな小僧って、もしかして……”

数年前、まだ二人が街に住んでいたころ、ある少年たちに出会った。

治安の悪い街で、日々絶えない喧嘩が起こっていたとき。

二人は偶然それに巻き込まれてしまったのだ。

金を請求され、ないと言えば暴力を振るわれ。

夫は女性を守り、庇っていた。

だが夫は傷だらけで、足元は覚束ない。

ついに、夫は地面に倒れてしまった。
そこに、容赦なく暴力が振るわれる。

もうだめだ、と二人は目をつむった。

だが、突然暴力は止まった。

恐る恐るまぶたをあげると、暴力を振るっていた男たちはある方向を見つめ、身体を震わせていた。

その方向にいたのは。

“やめないか。やめないと言うのなら、力付くでやめさせるぞ。”

額と拳にオレンジの炎を燈らせた少年が、男たちにそう言った。

それが、“おかしな小僧”こと、後に巨大な組織をつくることとなる“ボンゴレプリーモ”との出会いであった。

標的１７１　記憶？（後書き）

お久しぶりですみなさま…！

お元気でしたでしょうか…ゆか空はただいま風邪を引いております。

今回は実に久々の更新となってしまいました…申し訳ございません…ｏｒｚ

無事推薦入試も終わり、今は結果待ちです。

最近毎日が忙しすぎて…やっと小説のストックがたまってきたところです。

出来れば明日も更新をしたいと思います（＾＾）

読んでいただきありがとうございました！

標的１７２　記憶？

二人は、いや二人だけでなくその場にいた誰もが言葉を失った。

突然目の前に現れた、額と拳に炎を燈らせた一人の少年。

“やめないか。やめないと言うのなら、力付くでやめさせるぞ。”

透き通った声で、全員がはっと我に返る。

すると、喧嘩をしていた全員がその場から立ち去って行った。

あいつが例の奴か。

奴から早く逃れなければ。

口々に男たちはそう言い、そそくさと消えていった。

その場には、女性と夫、そして謎の少年だけが残された。

しばらくの沈黙が続く。

閑静な住宅街に、冷たい風が吹き抜ける。

ジャリ、と音を鳴らし少年の足が動いた。

それに二人はびくりと身体を震わせる。

“大丈夫か。”

少年は二人にそう声をかけ、目の前にしゃがみ込む。

夫の傷の具合を見て、しばらく考えるようなしぐさをする。

そのあいだ、二人はその少年の顔をずっと見つめていた。

この少年は一体誰なのだろう。

なぜ額に炎を燈らせているのだろう。

さまざまな疑問が二人の頭の中をぐるぐるとまわっている。

その混乱が表情に出ていたらしく、少年は二人の顔を見て笑んだ。

“心配するな。オレは先程のような悪い奴ではない。”

そう言うと少年は夫を支え、立ち上がらせる。

家はどこだ、と問われ女性は慌てて少年を案内した。

そのときは、知らなかったのだ。

二人を助けてくれたこの少年が、今発展を遂げているマフィアのボスであることを。

“……ありがとう、ございます。”

家路につき、女性は少年に礼を述べ深々とお辞儀をした。

少年は二人の家まで夫を担いでくれたのだ。

細身な身体ではあるが、見た目よりも力があるようだ。

少年は優しく笑み、構わないと述べた。

女性は夫の手当てをしながら、まだゆらゆらと燃え続けている少年の額の炎をちらりと見た。

普通であるならば額に炎が燈ることはないはずだが。

これは言うべきか黙っておくべきか。

二人は顔を見合わせた。

“…日本人か。”

ぽつりと少年がつぶやいた。

それに女性が慌てて肯定をする。

“イタリア語が流暢であるな。声だけであればイタリア人と間違えてしまいそうだ。”

少年は感心したように言い、二人に向き直る。

今だ燃える炎に二人は視線を奪われてしまった。

そんな二人の反応に気付き、少年があ、と声をもらす。
すると瞬時に炎は消え、何事もなかったかのように少年は会話を続けた。

“オレは昔から日本に興味があってな、日本についてさまざまなことを知りたいと思っているのだが、生憎(あいにく)まわりに日本に詳しい人間がおらず、一応日本の知り合いがいるのだがあまり会えなくてな…、文(ふみ)を交わしてはいるのだが質問ばかりではつまらぬし限りがあるからな。”

それでだな、と少年はまっすぐ二人を見つめる。
吸い込まれてしまいそうなその瞳に、二人は息をのんだ。

“オレに、日本のことを教えてくれないか?”

真剣な表情にしては、その言葉はおかしなもので。

気付けば二人は笑ってしまっていた。

少年は瞬(まばた)きをして首を傾げている。

それを見て、二人はさらに笑ってしまった。

標的１７３　記憶？

謎の少年はジョットと名乗った。

彼は地域住民を守る自警団を立ち上げたらしいのだが、最近はその組織が大きくなりマフィアとなってしまったのだという。

それは霧の守護者の仕業らしい。

彼の立ち上げた組織はボンゴレと言い、その中心はジョット、そして彼を囲む六人の守護者と呼ばれる者がいるという。

守護者はそれぞれ属性を持ち、それ相応のリングを持っている。

雨、嵐、雷、晴、雲、霧。

そしてジョットは大空。

そんなことを一般人であるわたしたちに話してもよいのかと女性は問うたが、ジョットは微笑んでこう言った。

“かまわない。お前たちを信じているからな。”

初対面も同然である彼のその自信はどこからくるのだろうかと二人は首を傾げた。

だが彼の言うことは当たっていた。

二人は誰かに言うつもりもなく、マフィアと聞いても驚きも怖がったりもしなかった。

目の前の彼、マフィアのボスは凶悪には見えず、優しい笑みを浮かべているからだ。

それからジョットと夫婦は何度も交流をした。

ジョットが夫婦の家に出向くこともあったし、夫婦がジョットの家…つまりボンゴレのアジトに出向くこともあった。

夫婦がボンゴレに出向くときは、他の守護者と会話することもあった。

唯一日本人である雨の守護者には数えるほどしか会わなかったが、相手の気さくな性格ですぐに打ち解けたものだ。

ある日、いつものように二人がジョットの元を訪れたとき、ジョットは突然ぽつりと語りだした。

“オレの額に燈るこの炎について、お前たちになら話してもいい。”

静かに、額に炎を燈してジョットは全てを語った。

それは死ぬ気の炎と言い、その炎でものを燃やしたり空を飛べたりするらしい。

二人はその炎に見とれた。

美しく輝くオレンジに、

心を奪われた。

“…そうか、おかしな小僧とそんな出会いを。”

真っ白な毛並みのオオカミは頷いた。

二人はなぜジョットのことを小僧と呼ぶのかオオカミに問うた。

すると、オオカミは青い瞳を細めて語った。

“わたしは、稀にではあるが母体である千年樹から少しの時間離れ、街におりることがあった。ある日、いつもと同じように街におりると、ある方向から不思議な力を感じたのだ。そこに向かうと、あの小僧がいた。額に炎を燈らせて。”

オオカミは懐かしむように、二人に話す。

心地のいい声はなおも続ける。

“わたしは精霊であるから、小僧にはわたしの姿は見えていなかった。しばらくわたしは小僧の炎を観察した。…どうやら、あの炎には秘めたる力があるようだ。小僧はそれを上手く使いこなしている。わたしはとても感心した。”

ぱたり、と尻尾を一振りし、オオカミはひとつ息を吐く。

そしてまぶたを上げ、青い瞳を二人に向けた。

どきり、と二人の鼓動が高鳴る。

それはあまりにも美しい眼差しだったからだ。

“……こうして話を出来るのも、お前たちがわたしを助けてくれたおかげだ。とても感謝している。”

深々とオオカミはまたお辞儀をする。
それにつられて二人もお辞儀をし返した。

再び顔を上げたオオカミが、何かを決意したようにこくりと頷いた。
そして口を開く。

“…お前たちに、わたしを助けてくれた礼をする。”

標的１７３　記憶？（後書き）

風邪がなかなか治らないゆか空です。

しつこい風邪だ…彼氏さんにもうつしてしまいました（´・ω・、）

早く治らないかな…。

本日１１月１１日はポッキーの日ですね！
わたしはスーパーに寄ってポッキーを買いました。
学校でポッキーパーティーします（＾ｏ＾）
高校最後のポッキーの日なので楽しみたいです。

そして１１月１２日はわたしの誕生日でもあります。
とうとう１８歳…パチンコができますね（笑）
まだまだ若いままでいたいのですが時間を止めることはできないので悔しいです。
高校を卒業するのも嫌ですし。

どうすることもできないので、今を思いきり楽しんでやろうと思います。

明日も更新できると思いますので、よろしくお願いします。

読んでいただきありがとうございました！

標的１７４　記憶？

“…お前たちに、わたしを助けてくれた礼をする。”

ぱちぱちと暖炉から薪の燃える音。

あたたかな部屋の真ん中で、二人の人間と一匹のオオカミ…もとい精霊は見つめ合っていた。

“…お礼？”

“そうだ。さっきも言っただろう？”

表情は変わらないが、声からしてオオカミは苦笑いをしているようだった。

“わたしはあのままであったら死んでいた。精霊は滅多に死ぬことはないが、力を使い果たしたときや、母体を持つものは母体を失うと死んでしまう。わたしもお前たちが助けてくれなかったらあのま

ま死んでいたのだ。母体を失い、新たな母体は命尽きたからな。”

だから、礼をする。

そう言ってオオカミは身体を動かした。

後ろ足は動かないものの、前足のみでその白い身体を少しずつ動かす。

ふう、とひとつため息をつき、オオカミは女性を見つめた。

“契約を交わそう。”

“契約？”

“そうだ。

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。”

唄うように、オオカミは呟いた。

契約、とは。

それはどうやらオオカミが二人を守ってくれるらしい。

所謂、守護霊ということだろう。

しかも二人の子孫までもを。

“…そんなこと、できるの？”

“わたしの力を持ってすれば、たやすいこと。だが条件がある。”

“…条件？”

“ああ。お前たちが死ぬとき、わたしも死ぬ。それは子孫たちにも共通する。わたしたち精霊の死は、お前たちの死と共にする。そういう、条件だ。”

それはあまりにも驚愕的な、言葉もでないほどの条件だった。

精霊は最悪な場合がないかぎり、命が尽きることはないというのに。

簡単に言えば、命は永遠に続くことができるのに。

契約によって、永遠を捨てて人間の寿命と同じほどしか生きられなくなる。

“…でも、いいの？永遠を捨てて、人間と同じ寿命を辿るなんて…”

女性は不安そうにオオカミに問う。

だがオオカミは目を細め、首を横に振った。

“…お前になら、お前たちになら、わたしの命、力、全てを使ってもいい。……それに、”

オオカミは一瞬だけ黙り、再び言葉を紡いだ。

“永遠が、良いわけではない。”

人は、誰もが一度は永遠を夢見る。

死を恐れて、生を望む。

それは虚しく消える願い。

叶うことのない、願い。

もし仮に、永遠を手に入れたのであっても、

今ある命を、大切にしようだなんて思わないだろう。

大切な人を、愛そうとはしないだろう。

永遠という終わりない時間に甘え、惰眠を貪るように、時間を無駄にする。

そんなことがないように、

一瞬一瞬を精一杯生きることができるように、

人には、動物には植物には、永遠は与えられなかった。

全てのものに、終わりはくる。

例え、精霊であっても。

“だから、良いのだ。”

永遠などいらない。

何かのために、命を、力を使うのであれば、

永遠など、いらない。

“……そう。”

女性は、目を伏せた。

その瞳に涙を浮かばせて。

ふるふると、長い睫毛を震わせて。

（…ああ、なんて、）

永遠など、馬鹿らしいことだろうか。

溢れる涙を拭い、女性は笑みを浮かべる。
そしてその震える声で、オオカミに言った。

“わかったわ。
だから、約束よ。
ずっとそばにいて。”

命尽きる、そのときまで。

共に、生(せい)を唄おう。

標的１７４　記憶？（後書き）

お久しぶりです。

やっと更新ができました…。ふう。

なかなか毎日更新復活はできません。
来週から考査期間に突入するので…！

短いですがまた！

読んでいただきありがとうございました！

標的１７５　追憶Ｖ（前書き）

お久しぶりです。

標的１７５　追憶Ｖ

“……これが、わたしの先祖と日向井（ひむかい）家の出会いです。”

一通り語り終えたプレーチェは、ゆっくりと息を吐いた。

聞く側であったツナもふう、とひとつため息をつく。

オレンジ色の瞳が、驚きとわずかな動揺でゆらりと動いた。

「…まさか、プレーチェの先祖が精霊だったなんて……」

“驚くのも無理ないです。こんなことを聞いて驚かないなんてことはまずないでしょうね…”

プレーチェは苦笑いをして答える。

それにつられてツナも苦笑いをした。

すると、ふと気になる疑問が浮かび上がる。

「…ということは、プレーチェも精霊か？」

“その通りです。日向井家の守護霊となった初代から五代までの精霊の力をわたしは受け継いでいます。わたしたちは守る対象が生きているかぎり、共に生きていますが…守る対象が命尽きたとき、わたしたちも共に命尽き、その力は次の代へと受け継がれるのです。”

簡単なようで難しい。

それをツナは素直に受け止め、冷静に対処する。

超死ぬ気モードでこそ成せることだ。

そして、次に浮かび上がった疑問をツナはプレーチェに問いかけた。

「…この契約とボンゴレボスと…どんな関係があるんだ？」

するとプレーチェの耳がぴくりと動いた。

同時に首を傾げ、何やら考えるしぐさをする。

“……確か……”

“この契約を、小僧にも手伝ってもらおう”

“小僧って…ジョットさんにも？”

オオカミはこくりと頷き、言葉を続ける。

“わたしは長い間を生きてきた精霊。その分力も相当強いらしい。こうしてオオカミに宿っていても、ただのオオカミには見えず、不思議な力が発せられてしまっているのだ。それを抑えるために、あの小僧の炎の力を用いたい。…どうやらあの炎にはそういう作用もあるようだからな。”

そう言うと、オオカミはじっと二人を見つめる。

しばらくの沈黙のあと、やっとオオカミが口を開いた。

“…やはり。お前たち、あの小僧の元で働く気でいるだろう。”

“……どうして、それを…”

オオカミの言うことは事実だった。

二人は、ジョットに仲間にならないかと勧誘をされていた。

共に戦わなくていい。

ジョットの話相手になってくれればいいと言われていたのだ。

それを二人は快く受け入れた。

だが話相手だけではなぜだか気が引けた。

だから二人は話相手をしつつ、護身術などを習うつもりでいた。

そして、いつかはジョットの役に立ちたいと。

そう思っていたのだ。

“それならばちょうどいい。…もし、わたしの子孫が本来の力を必要とするとき、ボンゴレボスに封印を解いてもらうようにする。今、わたしは本来の力は必要ではないから、小僧に封印をしてもらう。それが一番いい方法だろう。”

オオカミは尻尾を揺らし、一人頷いた。

女性と夫もオオカミの言うことを理解して顔を見合わせ頷く。

それを見てオオカミは満足そうにため息をついた。

「…このことは、結加は知ってるのか？」

“いえ、結加は何も知りません。彼女はわたしを老犬と思い込んでいます。一応、彼女の母親がこの事実を手紙に書き留めたのですが、他人の耳に入ってはまずいので特殊な加工をしたのです。”

「特殊な加工？」

“はい。死ぬ気の炎…ただし、ボンゴレボスの炎のみで文字を浮かび上がらせるような、とても特殊な加工です。”

そんな加工もできるのか、とツナは内心驚いた。

プレーチェたちの封印といい、手紙の特殊な加工といい、死ぬ気の炎はなんとも不思議なものだ。（そう思うのは今さらではあるが）

「…だったら、お前の封印が解かれた今、結加(ゆいか)に言うべきじゃないか？何も知らないんだったら何かと困ることがあるだろ。」

“そうですね、動揺はするとは思いますが…彼女なら大丈夫……あ。”

ぴたりとプレーチェは話すことを止める。

すると耳を小刻みに動かし、鼻をすんすんと鳴らした。

“…ちょうどいい。結加(ゆいか)がこちらに向かっていますね”

ぱたりと尻尾を動かしプレーチェは言った。

しばらくすると、プレーチェの言うとおり廊下からぱたぱたと足音が聞こえてきた。

何か叫んでいるようだが、ぜいぜいという息切れしている音のほうが大きかった。

「…相当お前を見つけるために走り回っているようだが」

“…そうみたいですね”

二人は顔を見合わせ、小さく笑みを浮かべた。

標的１７５　追憶Ｖ（後書き）

みなさま、覚えていらっしゃいますでしょうか…。ゆか空です。

最近思うように更新が出来ず、間をあけてしまいました。

まことに申し訳ございません。

これからは復帰できるよう、少なくとも週一更新をしたいと思います。

読んでいただきありがとうございました！

標的１７６　話すべき時（前書き）

お久しぶりです！

標的１７６　話すべき時

ぱたぱた、というよりはばたばた、という音だろうか。

その音は止まることなく、常に少女の耳に届く。

耳をすませど、聞こえるのは自分の足音と呼吸音、あとはばくばくと鼓動する心臓の音。

（…どこに行っちゃったんだろう……！）

きょろきょろと辺りを見回し、真っ白なオオカミの姿を探す。

少女…結加（ゆいか）は、昼寝をしてしまった自分を、部屋の扉をしっかりと閉めなかった自分を責めた。

あの時昼寝をしなければ、あの時扉をしっかりと閉めていれば…と後悔が渦巻く。

（プレーチェに何かあったらどうしよう…大切な子なのに……）

ホワイトオオカミは日向井家に代々伝わる家宝同様。

元々は珍しい品種でもあって、売買されればかなりの高値がつく。

そんなことのないように、結加は幼いころから注意されてきたのだ。

プレーチェを見失ってはならないと。

（もう１４年も生きてるんだから、年だし……いつ何が起きてもわからない…！）

焦りは募り、結加の走るスピードをさらに上げた。

どうか、無事でいて。

そう願わずにはいられなかった。

茶色の瞳から、一粒の涙がこぼれ落ちる。

泣いていても何も変わらないのに、と慌てて結加（ゆいか）は涙を拭った。

鼻をすすり、ある部屋の前を通り過ぎる。

すると、聞き慣れた声…鳴き声を結加（ゆいか）の耳がとらえた。

「ワンッ！！」

「…っ、今のって……！」

ぴたりと足を止め、結加（ゆいか）は耳をすます。

すると、次ははっきりと「ワンッ！」とプレーチェの鳴き声であろう声が耳に入った。

「プレーチェ！」

結加（ゆいか）は鳴き声のした部屋の扉を開ける。

すると、そこにいたのは。

「……綱吉くん…？」

結加（ゆいか）ははあ、と息を切らす。

視線の先には、超死ぬ気モードのツナと行儀良くお座りをしているプレーチェ、その少し離れたところにはリボーンが倒れていた。

どんな状況か。

結加（ゆいか）は一瞬思い止まったが、プレーチェの姿を再び視界に入れて駆け寄った。

「もう…プレーチェ！心配したんだからね！」

そっと抱き上げたかと思うと、次の瞬間にはプレーチェを思いきり抱きしめた。

かすかに「ぐえっ」という潰れたような痛々しい声をツナはその耳でとらえた。

「すぐあなたは何処かに行っちゃうんだから！あなたももう１４歳のご老体なのよ！いつ何が起きてもおかしくないんだから！わたしはお母さんたちにあなたを大切にするようにと小さい頃から言われているの！まったく、いつまでもやんちゃなんだから……」

くどくどと続く結加（ゆいか）のお叱りを、プレーチェはきょとんとした表情で聞いている。

ツナはそんな二人を真顔で見つめていた。

ふと、抱きしめられているプレーチェと目が合う。

（……どうしましょう、綱吉様…）

ツナの超直感がプレーチェの心情を感じとった。

プレーチェは今にも情けない鳴き声が出てしまいそうな表情をしている。

どうするべきか。

そうツナは考え、首を傾げる。

話すべきか。

話さないべきか。

だがこれはいつかは知ること。

早く知っていたほうがいいだろう。

そう思い、ツナは口を開いた。

「……結加（ゆいか）、」

「ん、何？」

ツナが結加（ゆいか）に声をかけたおかげで、プレーチェの身体の圧迫はなくなった。

結加（ゆいか）がプレーチェを抱きしめる力を緩めると同時に、「はふっ」という開放されたような鳴き声を出した。

そんなプレーチェを憐（あわ）れに思いながらも、ツナは再び口を開く。

「…プレーチェのことだが……」

途中まで言いかけるが、なんとなく気が引ける。

自分が言っても良いものだろうか。

そう考えて踏み止まり、ツナは黙り込んだ。

「…どうしたの？」

「……これはオレから言うべきではない。」

ぽつりと呟き、ツナはプレーチェを抱き上げる。

「……やはりお前が言うべきだ、プレーチェ」

まっすぐプレーチェを見つめ、ツナは力強く言った。

結加（ゆいか）は何のことかわからず、首を傾げている。

プレーチェはしばらくツナを見つめていたが、首を動かして結加（ゆいか）を見た。

青い瞳がきらりと輝く。

どきり。

結加（ゆいか）の鼓動が高鳴った。

“……恐れ多いこととは存じますが、わたしが真相を…日向井家に代々伝わるホワイトオオカミの事実を、述べさせていただきます。”

標的１７６　話すべき時（後書き）

お久しぶりです、約一週間ぶりの更新となりました…。

センターに向け日々勉学に励んでいますゆか空です。

思うように更新ができなくて申し訳ありません！

冬休みには…多分毎日更新できるはず…です……。

短いですがこれで。

読んでいただきありがとうございました！

標的１７７　手紙の解封（前書き）

冬休み毎日更新はじめます。

標的177　手紙の解封

結加（ゆいか）は驚愕していた。

目を丸くさせ、口をあんぐりと開けたまま。

それも当然のこと。

今まで大切に育ててきた家族同然のホワイトオオカミのプレーチェが、人間の言葉を発したからだ。

“……恐れ多いこととは存じますが、わたしが真相を…日向井（ひむかい）家に

代々伝わるホワイトオオカミの事実を、述べさせていただきます。”

低くもなく、かと言って高くもない声は巧みに言葉を紡ぎ結加に秘密を語っていく。

結加は最初こそは驚きを隠せないでいたが、そのオオカミの優しい声を聞き、また姿を見てだんだんと落ち着きを取り戻していく。

そんな二人をツナは黙って見つめていた。
額の炎はゆらゆらと燃える。
オレンジの瞳はまっすぐな光を帯びている。

さらにそんな三人を、違う視点から見つめる者がいた。

契約を交わそう。

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。

“……以上です”

静かに、プレーチェはそう言って目を閉じた。

ツナに話したことを全て同じように結加（ゆいか）に話した。

結加（ゆいか）に混乱させないようにするため、プレーチェはゆっくりと優しく語った。

その時間、およそ1時間。

話を聞き終えた結加（ゆいか）は、ただ黙ったままだった。

表情に混乱の色は見えないが、ぴくりとも動かない。

試しに結加（ゆいか）の目の前でツナが手をひらひらと振ってみる。

だがしかし反応はない。

「…結加（ゆいか）？」

次にツナが声をかける。
だがしかしまたもや反応はない。

どうしたものか、とツナは困ってしまう。
眉間を歪ませ、無言で結加（ゆいか）を見て、プレーチェを見遣った。

“…相当驚いたのでしょうか。”

プレーチェも困ったように首を傾げる。

目の前で固まる少女に二人はお手上げだった。

すると、プレーチェが何かを発見する。

“…おや、これは……”

プレーチェは結加（ゆいか）の服のポケットに入っている封筒を取り出す。
それは、結加（ゆいか）の母が結加（ゆいか）に宛てた手紙だった。
だが手紙は真っ白で、何かが書いてあるようだが文字はうっすらとしていて読めない。
たしか、プレーチェの話では死ぬ気の炎を使えば読めるようになるらしい。
それを思い出したツナは、指先に小さく炎を燈して真っ白な手紙に近づける。
すると、
ボォオオッ！
「！？」
“ちゃんと作用しましたね”

真っ白な手紙はオレンジの炎に包まれ燃え上がった。
だが紙であるはずのそれは塵にはならず、原形をとどめたままである。

ぱちぱちと音をたてて手紙の炎は燃えつづける。
すると、真っ白だった手紙に文字があらわれはじめた。

「…文字が……」

だんだんと文字は姿をあらわしていく。
その文字は小さいが丁寧だった。

紙一面に文字があらわれると、炎は消えて手紙はゆっくりと床に落ちた。

ツナはそれを広いあげ、視線を結加（ゆいか）にうつす。

今だに結加（ゆいか）は放心状態で、少しも動かない。

「…結加（ゆいか）、これを見ろ」

手紙を差し出し、ツナは結加（ゆいか）の肩を揺する。

しかし結加（ゆいか）には何の反応もない。

仕方ない、とツナはため息をついて再び指先に炎を燈す。

それを見てプレーチェはまさか、と目を見開いた。

“つ、綱吉様…まさか……！”

「……大丈夫だ。」

心配するプレーチェをなだめ、ツナは指先を結加（ゆいか）に近づける。

そして指先に力を込めた。

ボゥウウッ！

「っ、きゃあ！」

結加（ゆいか）の身体がオレンジの炎に包まれると、瞬間に結加（ゆいか）は悲鳴を上げた。

それにプレーチェも驚き、びくりと身体を震わせる。

結加（ゆいか）が我を取り戻したのを見て、ツナは炎を消し去った。

「…やっと我に返ったか。」

「つ、綱吉くん……」

苦笑いをするツナを見て、結加（ゆいか）は何が起きたのかわからず慌てる。

その様子にプレーチェは驚いた。

“…あの炎は熱くなかったのですか？”

「…熱くないように調節した。あれは形だけの炎だ。なんの力もない。」

「そういえば熱くなかった…」

結加（ゆいか）は身体中を見渡して火傷がないか確認するが、それらしきものは見つからない。

それを見てプレーチェは安堵のため息をもらした。

「…結加（ゆいか）、お前の母さんからの手紙だ」

「……あ！」

ツナが手紙を手渡すと、結加（ゆいか）はそれを驚きながらも受け取る。

真っ白だった手紙には文字が綴られており、それは確かに…

「…お母さんの、字だ……」

手紙の文字を懐かしむように、結加（ゆいか）は声をもらす。

長年、真っ白だった手紙に文字がうつしだされた。

それは自分のよく知る、懐かしい文字。

自分の大好きな、母親のもの。

しばらく手紙に手をそえていた結加（ゆいか）は、ゆっくりと手紙に目を通しはじめた。

ずっと、知りたかった事実を知るために。

標的177　手紙の解封（後書き）

みなさまお久しぶりです。

やっと2学期もおわり一段落…！

ですので今まで更新できなかった分、冬休みに更新してしまいたいと思いまして、

冬休みは毎日更新をしたいと思います。

滞らないようにがんばります！

読んでいただきありがとうございました！

標的１７８　手紙（前書き）

毎日更新二日目！

標的178　手紙

結加（ゆいか）へ

この手紙を読んでいるということは、プレーチェから話を聞いたのでしょうね。

そして、ボンゴレボスから封印を解いてもらったのでしょう。

…結加（ゆいか）、お母さんは昔からあなたに言っていましたね。

ホワイトオオカミは日向井（ひむかい）家の宝同然。

決して失ってはならない。

それを守り通し、ここまできたのですね。

ということは、あなたも立派な日向井家の当主となれるのですね。

…プレーチェから日向井家とホワイトオオカミ、そしてボンゴレの始まりを聞いたことでしょう。

相当、驚いたことと思います。

あなたには、日向井家はボンゴレの代々の使いと話してきましたがそれは上辺だけのこと。

本当はホワイトオオカミが大きく関係しているのです。

日向井家のホワイトオオカミはただのオオカミではなく、精霊の宿った特別な力を持つオオカミ。

その力ゆえ、他人に知られては必ず狙われてしまいます。

わたしたちはマフィアという危険な世界に関わっています。

命の保証もできません。

それを知って、初代のホワイトオオカミはボンゴレボスに協力を依頼したのかも知れませんね。

ホワイトオオカミは、わたしたち日向井家の当主を守ってくれるという契約をいつまでも交わしてくれると言います。

わたしが死んでも、あなたが死んでも、ずっとずっと…。

それは、もしかしたらあなたにとって辛いかも知れません。

彼らの永遠を、わたしたち人間が奪ってしまうことを、あなたは哀しむかも知れません。

でも、これは彼らが決めたこと。

初代のオオカミ…もとい精霊と初代の日向井家の当主が同意のもとで決められたことなのです。

先程も言いましたが、彼らは特別な力を持っています。

その力をもってすればこの契約は解除できるはずです。

彼らがこの契約を嫌だと思っているなら、すぐに解除しているはず。

でも、今もなお契約は続いています。

…どういうことか、わかりますね。

力を持つ彼らが契約を解除しない理由は、この契約を快く思ってい

るからです。

彼らは嫌がってなどいません。
実際、わたしは聞きました。

この契約は嫌でないのかと。

すると、オオカミはこう言ったのです。

嫌だと思ったことは、一度もありません。
もし、あなたの先祖がわたしの先祖を救っていなかったら、わたしの先祖はこの世に存在していなかった。
そして、この契約がなかったらわたしはあなたと出会っていなかった。
わたしは、あなたに出会えてよかったと思っています。
あなたのために生きることが、わたしの喜び。
あなたとともに生きることが、わたしの幸せ。
…だから、嫌などと思ったことはありません。

あなたのオオカミ…プレーチェも、おそらくそう思っているでしょう。

だから、あなたが辛く感じたり哀しむ必要はないんです。

直接、プレーチェに聞いてみて。
プレーチェは必ず、いい答えをくれるから。

そういえば、昔あなたは何故日向井家の当主は女性ばかりなのかと聞いてきたことがありましたね。

それは、日向井家は女性しか生まれないからです。

その仕組みはわかりません。
今だに謎に包まれているのです。

お父さんは婿養子だということは知っていますか。
お父さんはボンゴレに仕える部下でお母さんと出会ったのです。

おおかたのことは、プレーチェから聞いたことでしょう。
だから、お母さんから話すことはなにもないはず。

…これは、お母さんのただの勘だから、気にしないでほしいのだけれども。

この手紙を読んでいるときには、お母さんはもうあなたの傍にいない気がするのです。

距離的なことではなく…生きていないかも知れないということ。

もし、そうだったら…あなたには辛い思いをさせたと思います。

…ただ今は、お母さんの勘が当たらないことを願うばかりです。

……ねえ、結加（ゆいか）。

あなたがこれを読んでいるとき、ボンゴレがどうなっているかはわからないけど、もしボンゴレのボスに危険なことが起きたら、あなたがボスを守るのよ。

女性に何ができる、と思われてしまうかも知れないけど、あなたはあなたのできることをすればいいの。

また、お母さんの勘だけど…ボンゴレの十代目はとてもいい方だと思うの。

そして、今後のボンゴレに重要な方になると思う。

その方を、失ってはならない。

あなたには、光玉（こうぎょく）があります。
これは日向井（ひむかい）家に伝わる技。
これを使いこなせば、大きな力となります。

まだ、大人ではないあなたには重くのしかかる事実かもしれない。
無理に理解はしなくてもいい。

あなたに無理はしてほしくないのです。

ゆっくりと、時間をかけてもいいのです。

ただ、逃げないでほしい。
目の前のことから逃げないでほしいのです。

いつかあなたにもわかる日がくるでしょう。

長い文章で申し訳なく思います。

でも、あなたに伝えたいことが多かったのです。

これが、少しでもあなたの力になれば幸いです。

日向井家五代目当主　日向井結那（ひむかいゆいな）

標的１７８　手紙（後書き）

毎日更新二日目です。

さて、本日はクリスマスイブですね。
みなさまは何をされる予定でしょうか？

わたしは一応お出かけしてきます。
特別な日とイヴが重なったので、せっかくだからお出かけしようということになったので＾＾

２３日に補習を受けたので、しばらくはありません。
時間がとれる…！

ざかざかと小説を書き進めたいと思います。

読んでいただきありがとうございました！

標的１７９　残された子（前書き）

毎日更新三日目！

標的１７９　残された子

今まで真っ白だった手紙。

何が書いてあるかもわからず、謎だらけだった手紙。

それには特殊な加工がしてあり、ボンゴレボスの死ぬ気の炎の作用で紙に文字が浮かび上がる仕組みだった。

小さいが丁寧に綴られた文字。

優しい言葉が並べられているそれを、ツナたちは読み終わってもなお黙って見つめていた。

広い室内に沈黙が続く。

かすかに機械音がするが、それ以外は無音と言っていいほどに静かだった。

だがそんな長い沈黙を破ったのは、誰かの鼻をすする音だった。

「……ぐすっ…」

手紙を持つ手がかたかたと震え出す。

ふと、ツナが手紙から視線をはずし顔を上げる。

すると、結加(ゆいか)が涙をぽろぽろと流して泣いていた。

“っ、ゆ、結加(ゆいか)?どうかしたの?”

プレーチェが焦って結加(ゆいか)に問いただす。

だが結加(ゆいか)はただ涙をこぼすだけだ。

ぱさ、と手紙は結加(ゆいか)の手から離れてゆっくりと舞い落ちた。

「…結加(ゆいか)、どうしたんだ?」

ツナが優しく問いかけると、ただ泣いているだけだった結加(ゆいか)は小さく口を開いた。

「……お母さん、の勘が…当たってる、から……」

「勘…？」

一瞬、結加（ゆいか）が何を言っているのかわからなかったが、床に落ちた手紙に視線を落とすとすぐにわかった。

結加（ゆいか）の母、結那（ゆいな）が手紙に綴っていたこと。

……結那（ゆいな）の命は、そう長くはないということ。

「…お前の母さん……もしかして……」

「……亡くなったの。わたしが小さい頃、病気で…」

か細い声で結加（ゆいか）は答えた。

それを聞き、ツナは目を見開く。

プレーチェの方を見ると、プレーチェは黙って頷いた。

“…結加（ゆいか）が幼い頃、病で結那（ゆいな）は死んでしまったんです。父親も、任務の途中で命を落としてしまい……”

…ということは。

「…両親が、いないのか……？」

思いもしなかった事実に、ツナは言葉を失った。

結加（ゆいか）は普段は明るく、前向きな性格を持つ子だった。

笑顔を絶やさず、何事にも一生懸命に取り組む真面目な中学生、のはずだった。

しかし、事実は両親を失った一人ぼっちの女の子。

辛い過去を背負って生きてきた…一人の人間であった。

「…じゃあ、お前は今まで……」

「九代目がわたしのことを面倒見てくれてたの。日向井(ひむかい)家の当主であるわたしを。いろんな技やマフィアについてのことを教えてくれた。…九代目には本当に感謝してるの。わたしが日本に渡るときも、プレーチェのことを保護してくれていたし……両親をなくしたわたしにとても優しくしてくれたの。」

目に涙をためながら、結加はぽつりぽつりと言葉を発する。

手紙をそっと拾い上げ、大切そうにそれを見つめる。

ぽろり、と一粒の涙がまた結加(ゆいか)の目からこぼれ落ちた。

「…昔は、確かに辛かった。夜中に一人で泣いてしまうときもあったし、どうしてわたしだけこんなめにあうの、とか思ったけど…今

は大丈夫なんだよ。」

「……なぜ？」

ツナが問うと、結加（ゆいか）は顔を上げて言った。

「綱吉くんやプレーチェ、みんながいるもの。」

きらり、と何かが輝いた。

それはいつもの明るい少女の笑顔だった。

…ねえ、真っ白なオオカミさん。

“なんだい、結那（ゆいな）”

どうやら、わたし…そう長くは生きられないみたい。

“…どういうことだい？”

……病気がね、進行していたの。治療しても無駄なくらい。

“…それは、みんなには話したのかい？”

まだ話してないわ。話すのが怖くて。

“…わたしに話したのは、お前が死んでしまえばわたしも死ぬからだね？”

…そう。ごめんね、短い命で。もう少しあなたに長く生きさせてあげたかったのだけれど、無理みたい。

“そんなこと、気にしないで。お前は残りの命をどう使うかを考えなければ。結加（ゆいか）をどうするかもね。”

…あの子には、沢山辛い思いをさせてしまうわね。少しでもいいから、…あの子と一緒に、生きたかった。

“……ならば、今からでも一緒に過ごせばいい。限られた時間の中で、お前ができることをすればいい。”

…そうね。ありがとう、真っ白なオオカミさん。

“……Ｄｉ（ディ）　ｎｉｅｎｔｅ（ニエンテ）”

限られた時間の中で、人は何ができるのだろうか。

叶えたいことは沢山あるし、やり残したことも沢山ある。

だが、短期間でそれらすべてをやり通すことはできない。

その中で、大切なことをするべきだ。

いつか、終わりがくるその日まで。

大切なものを、守り抜こう。

標的１７９　残された子（後書き）

メリークリスマス！

みなさまいかがお過ごしでしょうか？

わたしの地方では雪が降るらしいです…！

それほど寒いということですので、みなさま体調にはお気をつけて…っ

読んでいただきありがとうございました！

標的１８０　当主とヒットマンの約束（前書き）

毎日更新四日目！

標的１８０　当主とヒットマンの約束

「封印を解いてくれてありがとう、綱吉くん」

“わたしからも、本当にありがとうございます”

結加（ゆいか）とプレーチェは深々とお辞儀をしてツナに礼を言う。

何だかこっ恥ずかしくなってしまったツナは、二人に顔を上げるように言った。（超死ぬ気化しているので表情に変化はあまり見られないが）

「…オレは、そんなたいしたことはしていない……」

「え、封印を解くことってたいしたことだよ！だって…」

“ボンゴレボスにしかできないことなんですよ！”

「…そうなのか……？」

結加（ゆいか）とプレーチェの凄みにツナは若干引いてしまう。

二人はしっかりと頷き、ツナの否定を認めようとはしない。

確かに、プレーチェと手紙の封印を解いたのはツナだ。
プレーチェに関しては半ば強引にプレーチェが解かせたも同然ではあるが。

とにかく、ツナなしでは事は進まなかったということである。

それに二人は感謝していたのだ。

「…ほんとに、ありがとう綱吉くん。」

満面の笑みで再び礼を述べる。

それを見て、ツナはぱちくりと目を瞬(まばた)かせたが、すぐに口元を緩め笑顔を作った。

「…ああ。」

その笑顔を見て、結加(ゆいか)とプレーチェは照れ臭そうに顔を見合わせた。

場の空気が和んでいるところに、突然三人以外の声が響いた。

「そんな話はオレも初めて聞いたぞ。」

それにツナたちは驚き、何者かと警戒する。

…が、声の主を見たとたんにその警戒はすぐにとけた。

「なに警戒してんだおめぇら。」

「…リボーン。」

いつ目を覚ましたのだろうか、気絶していたままだったリボーンがこちらを見てにやりと笑っていた。

「…いつ起きたんだ?」

「随分さっきだぞ。プレーチェのテレパシーが近くにいたオレにも伝わり、その声で起きたんだ。」

驚いたままのツナの質問に、リボーンは平然と答える。

「まったく、起きた気配にも気付かないなんてな…まだまだだな。」

「……仕方がないだろう。プレーチェのことで動揺していたんだ。」

リボーンの厭味ったらしい言葉にツナは静かに反抗する。
するとリボーンは再び嫌な笑みを浮かべ、プレーチェを見た。

プレーチェはリボーンの視線を感じて身体を強張らせる。

「…このことは誰も知らないのか？」

“このこと、とは？”

「ボンゴレと日向井家の真の関係と、お前のことだ。」

“はい。日向井家に関係する者にもこの事実は打ち明けられません。なのでボンゴレボスと日向井家の歴代当主とそのパートナー…つまり夫にしか知られることはないのです。”

「…となると……」

ちら、とツナはリボーンを見遣る。
ツナの視線に気付いたリボーンもツナの顔を見た。

「…リボーンが知ってはまずいんじゃないか。」

“……あ。”

「……あ。」

ツナのごもっともな言葉に、プレーチェと結加はしまったというような表情をする。

ツナはボンゴレボス、結加は日向井家の当主なのでこの事実を知っても問題はない。

だが、リボーンはボンゴレボスでもないし日向井家の当主でもない。ましてや結加のパートナーでもない。

言ってしまえば、リボーンはただのヒットマン。何の関係もないのだ。

なので、このことを知ってしまうということは大変まずいのである。

「…どうしよう、プレーチェ！」

“どうしよう、と言われても…知られてしまったものは仕方がない

から……”

おろおろとプレーチェは結加（ゆいか）とツナの周囲を歩き回る。

力を有する精霊なのに抜けているところがあるのか、とツナは呑気なことを考えていた。

すると、ぴたりとプレーチェの足が止まる。

いい解決法でも考えついたのかと結加（ゆいか）がプレーチェの顔を覗き込む。

“…あ、頭に衝撃を与えれば忘れるかな”

「え、何言ってるのプレーチェ！！」

プレーチェのとんでもない言葉に結加（ゆいか）は慌てる。

何とも精霊らしくないやり方だ。

マフィアらしいと言えばマフィアらしいが。

そんな二人をなだめるように、ツナが間に入る。

「…リボーン。このことは内密にしてくれるだろ？」

「まあな。そんなにオレは悪い奴じゃねぇからな。」

十分悪い奴だろう、とツナは口に出してしまいそうになるがそこは耐えた。

しかし、読心術を得ているリボーンにはわかったらしく、ツナに蹴りを入れた。

だが流石は超死ぬ気化しているだけあって、リボーンの蹴りをツナはなんとかかわす。

（小さくリボーンの舌打ちが聞こえたが気にしないふりをした。）

「…リボーンさん、ほんとに内密にしてくれるの？」

「ああ、約束してやってもいいぞ。」

何気に上から目線の言葉であるが、結加（ゆいか）とプレーチェを安心させるには十分であったらしい。

二人は安堵の溜め息をついて顔をほころばせた。

…うっかりさんだわ、やっぱり。

“あんな子で大丈夫なのだろうか?”

やるときはやる子よ。結加(ゆいか)もプレーチェも。

“確かにそうだが…。やはり親であるわたしたちにとってはまだ心配だ。”

ふふ、そうね。でも信じているから…大丈夫よ、絶対。

我が子にあらん限りの幸福と勇気を。

一人と一匹の親は、そう祈りを捧げた。

空高く、美しい世界から。

標的１８０　当主とヒットマンの約束（後書き）

小説のストックがなくなっていく…！

今さっき標的１８５を書き終えたとこなんですが…やばい、焦る。

ほんとに小説を書くのが遅いので…時には一話に一週間かけるときもあります（笑）

ただうまく書けなくて延ばしてるだけなんですが…。

なんとか頑張ります、よ！

読んでいただきありがとうございました！

標的１８１　特訓（前書き）

毎日更新五日目！

標的１８１　特訓

「遅いぞ、そんなんじゃすぐに殺されちまうぞ。」

「はいっ！」

先程までの和やかな空気は何処へやら。

ただっ広い部屋の中は爆音や爆風が響き渡っている。

その原因は一人の赤ん坊と一人の少女。

リボーンと結加（ゆいか）だ。

リボーンはレオンを変化させた銃で、結加（ゆいか）は光玉（こうぎょく）で応戦している。

だがこれはただ単に戦っているわけではなく、リボーンが結加（ゆいか）に攻撃や防御の仕方、力加減のコントロール方法を指導しているのだ。

あまりの過激さに、はたから見れば抗争でも起きたのではないかと勘違いをしてしまいそうになる。

そんな二人を、ツナとプレーチェは安全な場所から見ていた。

「……すごいな。」

“リボーンさん、厳しいですね…”

落ち着いているように見えるが、これでも二人は驚いているのだ。

ツナはまだ超死ぬ気化しているから、プレーチェは驚きのあまり言葉が出ない状態だから落ち着いているように見えるのだ。

なぜ二人が蚊帳(かや)の外状態なのかと言うと…。

先程、リボーンがこう二人に言っていた。

「オレが今から結加の指導をする。その間おめぇらも特訓でもしてろ。」

何でも、まだ結加は光玉を使いこなせていないのでリボーンが直接指導を行うと言うのだ。

それを聞いた瞬間、ツナは結加を気の毒だと思った。

今までツナはリボーンの厳しい特訓を嫌と言うほど受けてきたので、辛さは十分にわかっている。

それを思っての同情をツナは抱いた。

だが結加は女の子、多少手加減はしてくれるだろうとツナは思っていた。

流石のリボーンでも、辛い指導はしないだろうと。

…しかし、それはとんだ間違いだったのだ。

指導を始めた瞬間、リボーンは結加に銃を連続でぶっ放した。

それに結加（ゆいか）もツナもプレーチェも驚いた。

まったく手加減の色が見えない。

まったく手加減する気もないだろうとツナはその時わかった。

たとえ結加（ゆいか）が女の子であっても、リボーンには関係ない。

相手が老若男女でも、リボーンは手加減などしないのだと。

だが、またもやリボーンがツナの心を読んだのか、指導をしながらもこう言った。

「戦いの場において、男女など関係なくなる。逆に、女は狙われやすい。男よりも体力が低いなどという理由でな。」

その間も、銃声は止まない。

引き金を引き続けながらも、リボーンは言葉を紡（つむ）ぐ。

「今のままでは、結加（ゆいか）は真っ先に適に狙われ殺される。だから今のうちに叩き込むんだ。攻撃、防御、コントロールの仕方をな。これを練習だと思うな。死ぬ気でいけ。」

淡々としたリボーンの言葉には説得力が十分にあった。

確かにそうだとツナは納得をしてしまった。

それから数十分、二人の攻撃と防御はおさまらない。

それどころか激しさを増している。

ツナとプレーチェは二人の特訓が気になり、自分たちの特訓をしようにも集中できないのだ。

「…心配か？」

“え？”

「結加（ゆいか）のことだ。」

突然問われ、プレーチェは首を傾げる。

「結加（ゆいか）はお前の主だろう。それにあいつとお前の命は連動している。あいつに何かあったらお前も危ないんだろ。」

“……確かにそうです。わたしとあの子の命は連動しています。結加（ゆいか）の命が消えるとき、わたしも消えますから。……でも、”

プレーチェはしっかりとツナの顔を見つめ、答える。

“わたしはあの子を信じています。信じることしか出来ません。あの子は出来る子ですから。大丈夫、どれだけくじけても、あの子は必ず立ち上がることが出来るのです。”

揺るぎないプレーチェの瞳と言葉、そして気持ちにツナは一瞬息を呑む。

時が止まってしまったかのような感覚に陥ってしまった。

まるで、爆音も爆風もなくなったかのような感覚に。

ツナは見た。

その青い瞳に潜む、確かな心を。

「…そうか。」

ツナは小さく笑み、そして立ち上がる。

一度リボーンたちの方を見遣り、再びプレーチェを見つめた。

「…特訓をはじめよう。主を守る、それがお前の役目だろう。そのためにも、強くなるんだ。…オレも、守りたいものがある。」

大切な仲間や家族を。

ただ守りたい。

プレーチェは一瞬目をぱちくりとさせたが、すぐに“はい。”としっかりとした返事を返した。

ツナはプレーチェと向き合い、ひとつ深呼吸をする。

手に力を込めれば、グローブに鮮やかなオレンジの炎が燈る。

「…オレたちも、死ぬ気でいくぞ。」

大切なものを守るために。

死ぬ気で、やり遂げる。

さあ、共に強くなろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8040r/

その先には。

2011年12月27日00時50分発行